

九州横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

VII

1990

長崎県教育委員会

序

私たちは、過去の歴史と文化にいろいろな形でかかわっておりますが、埋蔵文化財もその一つです。先人が残した文化遺産を損なうことなく、保存・活用していくことは文化の繁栄につながるものであり、これを後世に伝えていくことが、今日的課題であります。

県教育委員会は、これまででも各種開発事業について協議、調整を重ね文化財保護に努めてまいりました。

九州横断自動車道建設事業につきましても、道路計画当初から可能な限り保存に努めていただくよう関係機関と多くの協議をしてきましたが、18箇所の遺跡については計画変更ができないため、日本道路公団の要請を受けて昭和60年から3年間緊急発掘調査を実施しました。

この調査報告書は、通巻第Ⅷ分冊として大村市と東彼杵町に所在する葛城遺跡外5遺跡を収録したものです。

本書を文化財保護や地域の歴史を知るうえで、活用頂ければ幸いに存じます。

平成2年3月20日

長崎県教育委員会教育長

吉次邦夫

例　　言

1. 本書は、九州横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書の第Ⅷ分冊である。

調査は長崎県教育庁文化課が日本道路公団福岡建設局の依頼を受け昭和60年度から62年度までに実施した。

今回報告の遺跡と編集責任者は下記のとおりである。

| | | | |
|------------|------|------------|----|
| ① 葛城遺跡 | 大村市 | 昭和61年調査 | 藤田 |
| ② 野IIIA 遺跡 | 〃 | 昭和61・62年調査 | 藤田 |
| ③ 野田B 遺跡 | 〃 | 昭和61年調査 | 宮崎 |
| ④ 野田の久保遺跡 | 〃 | 昭和61・62年調査 | 高野 |
| ⑤ 長石遺跡 | 〃 | 昭和60年調査 | 宮崎 |
| ⑥ 外園遺跡 | 東彼杵町 | 昭和61年調査 | 安楽 |

2. 本書は、各遺跡ごとに分担執筆し、執筆者は各項文末に記した。
3. 本書の総編集を町田が担当した。
4. 出土遺物は、現在長崎県文化課が保管の任にあたっている。

総 目 次

| | | |
|--------------|-------|-----|
| 序 | | |
| 併記 | | |
| | | 頁 |
| I 発掘調査の端緒と経過 | | 5 |
| II 大村地区の調査 | | 15 |
| 地形と環境 | | 17 |
| 周辺の遺跡 | | 18 |
| 葛城遺跡 | | 27 |
| 野山A 遺跡 | | 161 |
| 野田B 遺跡 | | 295 |
| 野山の久保遺跡 | | 311 |
| 長石遺跡 | | 499 |
| III 東彼杵地区の調査 | | 515 |
| 地形と環境 | | 517 |
| 周辺の遺跡 | | 517 |
| 外園遺跡 | | 525 |

I 発掘調査の端緒と経過



九州横断自動車道ルート図



Fig. 1 調査地位置図 (▲今報告分 ■1989年報告)

I 発掘調査の端緒と経過

昭和15年内務省土木局において、全国自動車国道網を企画していた。昭和27年戦前の調査計画を検討し、東京・神戸間の測量調査を開始これが端緒となって全国を高速道路網により結び経済発展、地域間の格差是正を目的に道路建設が始まった。

本県では、昭和41年長崎と大分を結ぶ総延長250kmの九州横断自動車道路の計画策定がされた。

昭和44年大村市と大分県日田市を結ぶ区間の計画、昭和45年長崎と大村市の区間が策定され、昭和48年には路線発表があった。

このため、昭和45年建設予定路線の分布調査及び周辺調査を実施し、約250箇所の埋蔵文化財を確認し報告を行っている。このことについて、日本道路公団と埋蔵文化財保護の取り扱いの調整協議を始めるが、一期工事として長崎と大村間の道路建設に、不可避29遺跡は事前の発掘調査となり、昭和50年から昭和56年にかけて緊急発掘を実施した。その結果報告については、既刊報告書のとおりである。

この間、大村市と佐賀県嬉野町との間の二期工事が昭和53年建設計画が採択され、これを受けて、この結果、日本道路公団より文化庁長官へ事前協議があり、昭和58年埋蔵文化財の調査依頼が公団よりある。

昭和58年再度路線内の分布調査を実施し、最終回答をおこなった。その結果、路線内に在る18遺跡については、ルート変更が不可避であることから、昭和60年から昭和62年にかけ発掘調査の実施となった。

これまでに、7遺跡について報告書を作成し、今回6遺跡の報告をおこなっている。各遺跡の調査期間等は、一覧表を参照されたい。(Tab. 1 ~ Tab. 3) (町田)

註1

- 長崎県教育委員会 1981 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
報告書Ⅰ」 長崎県文化財調査報告書 第54集
長崎県教育委員会 1982 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
報告書Ⅱ」 長崎県文化財調査報告書 第56集
長崎県教育委員会 1983 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
報告書Ⅲ」 長崎県文化財調査報告書 第64集
長崎県教育委員会 1984 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
報告書Ⅳ」 長崎県文化財調査報告書 第69集
長崎県教育委員会 1985 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
報告書Ⅴ」 長崎県文化財調査報告書 第72集

註2

- 長崎県教育委員会 1989 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査
報告書Ⅵ」 長崎県文化財調査報告書 第93集

Tab. 1 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査一覧表

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 面積(m ²) | 調査期間 | 遺跡の概要 |
|-----|---------|--------------|------------------------------|---|---|
| 1 | 坂口館跡 | 大村市荒瀬町 | 分布面積 3,010m ² | ① 61.3.3～3.27 ② 61.4.7～5.31 ③ 62.2.9～3.28 ④ 62.4.6～6.2 ⑤ 62.8.18～9.30 | カリシタン大名大村純忠(1586没)の終焉の地。古水のみ現存する。中世と近世の様々な柱穴群が検出されたが、純忠との直接的資料となるかは今後検討を要する。 |
| | | | 調査面積 3,000m ² | | |
| 2 | 萬城遺跡 | 大村市東峰町・荒瀬町 | 分布面積 23,000m ² | 61.4.21～11.7 | 標高50mの丘陵上に位置し野田川沿岸と対峙する。鞍部には比較的良好な遺物包含層が現存しており、かなり広範囲に分布している。幼児の型葬塚5基は馬下でも豊富な例である。 |
| | | | 調査面積 2,850m ² | | |
| 3 | 野田A遺跡 | 大村市鬼檍町 | 分布面積 18,000m ² | ① 61.11.12～62.3.20 ② 62.4.6～6.5 | 江戸時代の墓を11基検出した。その中に宿泊の墓と推定される墓がある。 |
| | | | 調査面積 3,450m ² | | |
| 4 | 野田B遺跡 | 大村市野田町 | 分布面積 550m ² | 61.9.29～10.6 | 標高40mの丘陵上に位置する。遺物包含層は開墾時の削平で消失したものと考える。 |
| | | | 調査面積 212m ² | | |
| 5 | 野田古墳 | 大村市野田町 | 分布面積 2,340m ² | 61.6.16～9.19 | 墳頂によりかなりの損傷を受けている。封土はなく石室が天井石を欠いた状態で1基検出していた。7世紀の竹筒鏡中の1基と考えられ、台地上の深い谷の西側に2基追加確認した。 玄室(遺体を安置する部屋)は、底に板石を敷きつめていた。 副葬品の出土は少ない。 |
| | | | 調査面積 2,290m ² | | |
| 6 | 野田の久保古跡 | 大村市立福寺町・佐野田町 | 分布面積 5,270m ² | ① 61.10.7～62.3.20 ② 62.4.6～6.2 | 丘陵半頂部および南面するなどかながれ新地に遺物の散在が多く見られる。樹木時代から弥生時代にかけて営まれた遺跡である。 |
| | | | 調査面積 4,100m ² | | |

| 遺物・遺構等 | 時代 | 調査担当 | 整理担当 | 報告年 |
|---|-----------------------------|----------------------------------|----------------|------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・縄文式土器 ・石器（石核・石器・削片） ・輪入陶器類・環状陶器 【遺物記・輪式石器】 | 縄文時代 •弥生時代 ◎中世 •近世 | 調査：宮崎・立平・河田 監修：本田・浦川 整理：村川 | 調査：宮崎 整理：村川 | 1991 |
| 遺物総点数 4,460点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ナイフ形石器・縄文式土器 ・石器（石核・石器・削片） ・貝殻 | 縄文時代 •弥生時代 | 郡田・立平・加地 | 郡田 | 本多 |
| 遺物総点数 22,000点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・縄文式土器 ・石器（石核・石器・削片） 【貝石・灰火・柱穴】 | 縄文時代 •弥生時代 ◎近世 | 藤田・立平・浦川 | 藤田 | 本多 |
| 遺物総点数 11,700点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・縄文式土器 ・石器（石核・石核・削片） ・陶器器 | 縄文時代 •近世 | 宮崎・福川 | 宮崎 | 本多 |
| 遺物総点数 460点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・縄文式土器・石器 ・遺物記・海田器片 【門楕・横穴式石室】 | 縄文時代 ◎古墳時代 | 宮崎・福川・本田 | 宮崎・福川 本田 | 1989 |
| 遺物総点数 930点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・縄文式土器・弥生式土器 ・石器類・遺物器片 【不定形土器・柱穴器・貝殻】 | 約縄文時代 •弥生時代 •近世 | 高野・久原・村道 | 高野 | 本多 |
| 遺物総点数 110,000点 | | | | |

Tab. 2 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査一覧表

| No. | 道路名 | 所在地 | 面積(m ²) | 調査期間 | 道路の概要 |
|-----|---------------|------------------|---|---|---|
| 7 | 上八郷通路 | 大村市佐野寺町 | 分布面積 3,450m ² 調査面積 1,380m ² | 62.1.13～3.26 | 丘陵斜面上に位置し深い谷を挟んでA、B地区に区別される。A地区的状況は良くなかったが、B地区は良好な遺物包含層が残存しており、多くの遺物が出土した。また、柱穴跡の検出により生活址も確認した。 |
| 8 | 東光寺通路 | 大村市内原1丁目 | 分布面積 2,500m ² 調査面積 750m ² | 60.10.28～12.7 | 標高約125mの丘陵上に位置する。遺跡は開墾時の損壊を受けているが、台地の近傍部には绳文時代早期と中期の比較的良好的な遺物の包含状況が見られた。 |
| 9 | 長石通路 | 大村市松原3丁目 | 分布面積 450m ² 調査面積 212m ² | 60.11.25～12.6 | ゆるやかに傾斜する標高約140mの丘陵先端部に位置する。遺物包含層の大半は簡陋等により消滅している。遺跡の中心は獨立区の東側と推察される。 |
| 10 | 里郷通路 | 東彼杵郡東彼杵町 里郷 | 分布面積 12,730m ² 調査面積 6,065m ² | ①60.12.5～61.3.27 ②61.4.7～5.31 | 標高約117mの丘陵上に形成された绳文時代を主体とした遺跡。遺物としては、刃石器時代から近世までと細かい時代にわたって出土している。遺跡は広範囲に形成されているが、かなり削減を受けている。 |
| 11 | 大久保通路 | 東彼杵郡東彼杵町 平信田郷 | 分布面積 2,730m ² 調査面積 624m ² | 60.9.2～10.31 | 標高約65mの緩やかな尾根上に位置する。良好な绳文時代の遺物包含層が確認されたが、削平・石取り等後年の人為的削減によりかなりの損傷を受けている。 |
| 12 | 野中墓地・ 野中通路 | 東彼杵郡東彼杵町 瀬川郷 | 分布面積 5,190m ² 調査面積 2,710m ² | (野中墓地) 61.12.12 (野中通路) ①62.3.2～3.18 ②62.4.6～4.21 | 『野中墓地』 標高約55mの丘陵上に転されている。墓碑には、元和零間の紀年銘が刻まれているが、準なる詳み書で、遺物埋葬地は別地と考えられる。 『野中通路』 野中墓地と同じ立地である。墓地改修中に绳文時代の遺物が発見され、通路の存在が確認された。 绳文時代の包含層はごく一部の狭い範囲に堆積していたが、遺跡の主体は中～近世であり遺物財が検出された。 |

| 遺物・遺構等 | 時代 | 調査担当 | 整理担当 | 報告年 |
|--|--|------------------------------------|----------------|------|
| ・縄文式土器・弥生式土器 ・石器類 【柱穴群】 | ◎縄文時代 ・弥生時代 | 久居・津 | 伴 | 1991 |
| 遺物総点数 12,000点 | | | | - |
| ・縄文式土器 ・石器（石核・利片） ・骨董陶器 | ◎縄文時代 ・近世 | 安楽・町田 | 安楽・町田 | 1989 |
| 遺物総点数 9,000点 | | | | |
| ・石器類（石核・利片） ・須恵器片 ・陶器器片 ・土器 | ◎縄文時代 ・古墳時代 ・近世 | 宮崎・草野 | 宮崎 | 本書 |
| 遺物総点数 294点 | | | | |
| ・ナイフ形石器・縄文式土器 ・石器類（石核・利片・削器） ・陶器器片 【住居址・土被幕・集石遺構】 | ・旧石器時代 ◎縄文時代 ・近世 | 高野・久居・川辺 根田・川原・小野 | 高野・小野 | 1991 |
| 遺物総点数 36,000点 | | | | |
| ・ナイフ形石器 ・石器 ・縄文式土器 ・石器類（石核・利片等） | ・旧石器時代 ◎縄文時代 | 藤田・久原・川辺 | 藤田 | 1991 |
| 遺物総点数 15,300点 | | | | |
| ・古墳（窓永満室）・土被・縄文式土器 ・石器類（磨製石斧・利片等）・陶器器片 【柱穴群・土被】 | ・旧石器時代 ・縄文時代 ・弥生時代 ・中世 ・近世 | （野中墓）川原・宮崎 （野中遺跡）副島・町田・村川 小野 | 宮崎・町田 村川・小野 | 1989 |
| 遺物総点数 1,504点 | | | | |

【】内は遺跡 ◎主体となる時代

Tab. 3 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査一覧表

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 面積(m ²) | 調査期間 | 遺跡の概要 |
|-----|-------|--|--|---------------------------------|--|
| 13 | 小瀬城跡 | 東條町都東筑作町 瀬戸郷 | 分布面積 2,470m ² 調査面積 4,800m ² | 61.11.25～62.3.27 | 標高約90mの海岸段丘上に位置する。大村郷村記に「小瀬城」の記録がある。周辺の植生、地跡の遺構の他に、それ以降の近世の埋蔵物が存在したと考えられる。また、16世紀頃の墓4基（その内3基には人骨が埋葬されたまま）を検出した。 |
| 14 | 宮田A遺跡 | 東條町都東筑作町 千種郷 | 分布面積 1,960m ² 調査面積 1,720m ² | 61.6.16～9.26 | 下轟川の堆積作用で作出された沖積地と砂丘地上に編文時代後～後期から弥生時代中期にかけて形成された遺構・生活圏が付近に存在すると考えられる。特に、扁平打張石斧の出土量が多く（400本）、農耕と関連する生産用具が発見される。 |
| 15 | 外園遺跡 | 東條町都東筑作町 下轟川郷 | 分布面積 4,170m ² 調査面積 3,220m ² | 61.3.3～5.31 | 標高約60～80mの緩やかに傾斜する丘陵上に位置する。編文時代中期から後期の遺物の出土があったが、遺跡の上部は中後～近世に至る時期と考えられる。小便を基めた磨石土器や奉拝の石器遺構・石垣等の遺構の検出があるが、いずれも性別不明。 |
| 16 | 名切D遺跡 | 東條町都東筑作町 千種郷 | 分布面積 4,790m ² 調査面積 1,100m ² | 61.8.25～10.9 | 標高約60～70mの丘陵斜面上に位置する。遺跡の主な部分は町営グランドの下にあり、調査区域は堤防部と考えられる。遺物包含率は比較的高かった。 |
| 17 | 名切A遺跡 | 東條町都東筑作町 筑作郷 | 分布面積 640m ² 調査面積 335m ² | 61.4.21～5.10 | 標高約60mの丘陵上に位置しており、遺物の散布はわずかに見られるが、遺物包含率が流失してしまっており、地山までの深度が浅く状況は良くなかった。 |
| 18 | 橋山A遺跡 | 東條町都東筑作町 筑作郷 | 分布面積 8,110m ² 調査面積 5,125m ² | ①61.7.7～62.3.20 ②62.4.6～5.19 | 標高約70mの丘陵上に位置する。谷部に面した斜面上に形成されている。かなり広範囲に分布しており多くの遺物が出土している。特に、石器の出土量の多さには注目され、石器60点の出土は県下最多例である。 |
| 合計 | | ・分布面積101,350m ² ・調査面積44,098m ² | | | |

| 遺物・遺構等 | 時代 | 調査担当 | 監理担当 | 報告年 |
|---|--|----------------------|---------------|------|
| <ul style="list-style-type: none"> 縄文式土器・石器類 陶器器類（中後・近世） 【空器2点・石屋・土壁・集石・遺構・土器類】 | <ul style="list-style-type: none"> 縄文時代 弥生時代 ○中後 ○近世 | 町田・嵐山・村田 本郷・伴・小野 | 町田・村川 伴・小野 | 1991 |
| 遺物総点数 50,000点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 縄文式土器・弥生式土器 石器類 【集石土壁・不明土器】 | <ul style="list-style-type: none"> 縄文時代 ○弥生時代 | 高野・久原・川道 | 高野・川道 宮崎 | 1989 |
| 遺物総点数 28,500点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 縄文式土器・石器類 陶器器類 【住穴跡・集石土壁・石散遺構・石垣】 | <ul style="list-style-type: none"> 縄文時代 ○中後 ・近世 | 川田・安泰・藤田 町田・浦田・長崎 | 安泰・藤田 町田 | 未定 |
| 遺物総点数 12,000点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 縄文式土器 石器類（石鏡・鏡片等） 鐵器類 | <ul style="list-style-type: none"> ○縄文時代 ・近世 | 町田・伴 | 町田・伴 | 1989 |
| 遺物総点数 8,000点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 縄文式土器 石器類（剥片） | ○縄文時代 | 町田・浦田 | 町田 | 1989 |
| 遺物総点数 500点 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ナイフ形石器・縄文式土器 石器類（石鏡・鏡片・石斧） 石器片・陶器器類 【集石遺構・土壁】 | <ul style="list-style-type: none"> 旧石器時代 ○縄文時代 ・近世 | 安泰・浦田・長崎 | 安泰 | 1989 |
| 遺物総点数 65,000点 | | | | |
| 遺物総点数 386,673点 | | | | |

【】内は遺構 ○主体となる時代

本年度報告書の発掘ならびに整理作業担当者は下記の通りである。

田川 勝 長崎県教育長文化課主任文化財保護主事（現文化課調査係長）

| | | | |
|-------|---|---------|-------------------|
| 高野晋司 | ♦ | ♦ | |
| 安楽 勉 | ♦ | ♦ | |
| 藤田和裕 | ♦ | ♦ | |
| 立平 達 | ♦ | ♦ | |
| 宮崎貴夫 | ♦ | ♦ | |
| 町田利幸 | ♦ | 文化財保護主事 | |
| 久原巻 一 | ♦ | 指導主事 | (現長崎県立島原高等学校教諭) |
| 川道 寛 | ♦ | 指導主事 | (現長崎県立西陵高等学校教諭) |
| 川畑敏則 | ♦ | 指導主事 | (現佐世保市立山手小学校教諭) |
| 福田一志 | ♦ | 文化財研究員 | (現長崎県立長崎工業高等学校教諭) |
| 浦田和彦 | ♦ | ♦ | (現長崎県立壱岐高等学校教諭) |
| 長嶋 徹 | ♦ | ♦ | (現長崎県立長崎南高等学校教諭) |
| 草野誠司 | ♦ | 文化財調査員 | (現佐賀県三田川町教育委員会) |

II 大村地区の調査

葛城遺跡

野田A遺跡

野田B遺跡

野田の久保遺跡

長石遺跡

II 大村地区の調査

地形と環境 (Fig. 2 ~ 4)

大村市は現在、高速道路・空港・鉄道等によって県内交通網の拠点的地位を確保し、工業、農業の集散基地として経済発展が予想されるところである。

位置的には、県中央部にあり、多良山系で佐賀県と境を接する。地質では、第三紀堆積岩を基盤として、このうえに安山岩・玄武岩質の火山性岩石が複い複雑な地形を形成している。この地質のもとで、大村市背後の東側に経ヶ岳(1076m)^{注1}を最高峰として五家原岳、多良岳、郡岳等の山系がひかえている。

これらの山系には、また数百種の植物が自生し黒木渓谷を中心^{注2}に春を告げる花として、3月

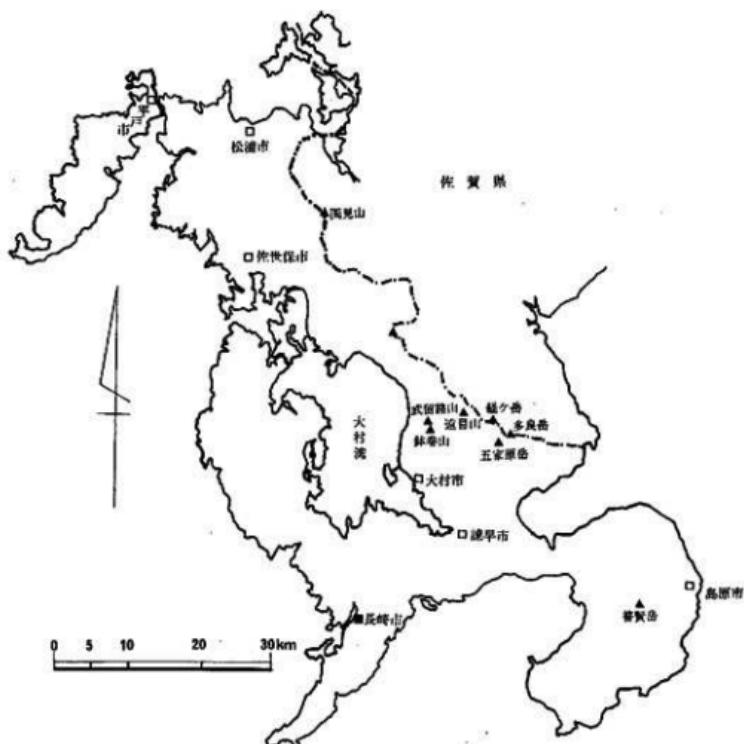


Fig. 2 長崎県内の主要山系

初旬マンサクの花が開き、4月中・下旬にはツクシシャクナゲがうすい赤色の花をさかせる。また、標高200～400mの間には、武留路山・飯盛山・鉢巻山等の寄生火山としての性格を持つ流麗な山々が連なる。

河川では、郡川・鉢田川がある。とくに市内最大の郡川は総延長14.6km流域面積54.7kmにおよび、河岸段丘を発達させながら支流の南川内川、佐奈川内川を合せ大村湾へそそぐ。

また、この郡川によって形成された海岸部の旧扇状地はクロボク土壌の畑地を利用して人參の特産地となっている。現在の郡川周辺の新扇状地は、水田として利用されている。

大村沿岸では、真珠・ハマチ・マダイの養殖をはじめ天然のナマコ・イワシ・エビ等の漁業がさかんである。

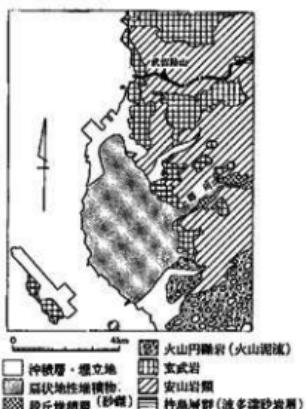


Fig. 3 大村地区地質図

周辺の遺跡

旧石器時代では、位牌塔形網石核の出土地として知られた^{注3} 4・野岳遺跡の他20箇所が現在周知されている。

縄文時代の遺跡については、早期～後期にかけての良好な包含層を確認していないが、各所で時期の推測できる遺物が表面採集されており、遺構・遺物の発見が期待される。^{注4} 晩期になると、86・黒丸遺跡が1980年調査を行っており、扁平打製石斧の出土と合わせて、カメ棺の出土が知られている。この遺跡は標高3～4m 大村扇状地端にあり、他に古墳～中世にかけての遺物が出土していて、生活の場としてこの時期に利用されていたことが確認されている。

弥生時代では、大村扇状地のほぼ中央標高3～8mに92^{注5} ・富の原遺跡が位置し、昭和55年から61年にかけ調査を実施し、カメ棺墓、住居跡等の遺構を検出し、遺物では中期～後期前半にかけての土器や県内でも初めて3本の鐵戈を出土する等貴重な発見があつた。本県の弥生時代のありかたに問題提起をなげかけている。

古墳時代では、8基の石榴を検出した119・小佐古石榴群(4～5世紀)^{注6} や59・稗田遺跡から

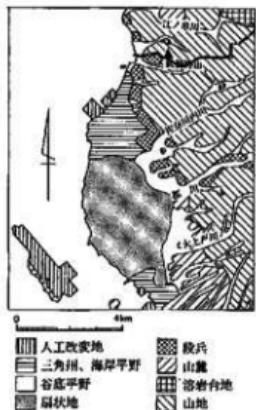


Fig. 4 大村地区地形分類図

は、4～5世紀代の住居跡が発見されている。また古墳では、
 63・^{註7}黄金山古墳(5世紀)^{註8}、鬼の穴古墳(6世紀)そして、
 7世紀代の玖島崎古墳群が知られている。古代から中世に
 かけては、条理造構として120・^{註9}大上戸川条理^{註10}、110・沖
 田巣丸条理がある。また、中世の寺院跡が多く知られてい
 るが、キリシタン陣盛のとりわけ大村純忠がキリシタン大
 名の頃、寺院・仏閣の破壊を受けており、字名が各所に残
 るものの、その実態は不明である。近世に入る頃慶長3年
 (1598) 大村家第19代喜前が玖島城を現在の大村市中心部
 に築城し、そのまま現在に至っている。

(町田)

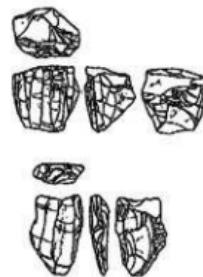


Fig. 5 野岳遺跡出土

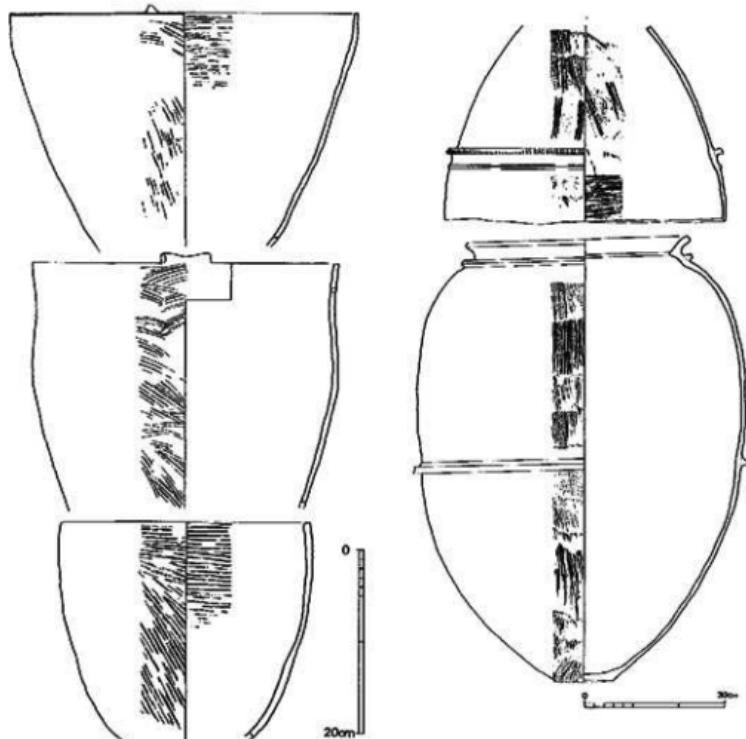


Fig. 6 黒丸遺跡(左)・宮の原遺跡出土(右)

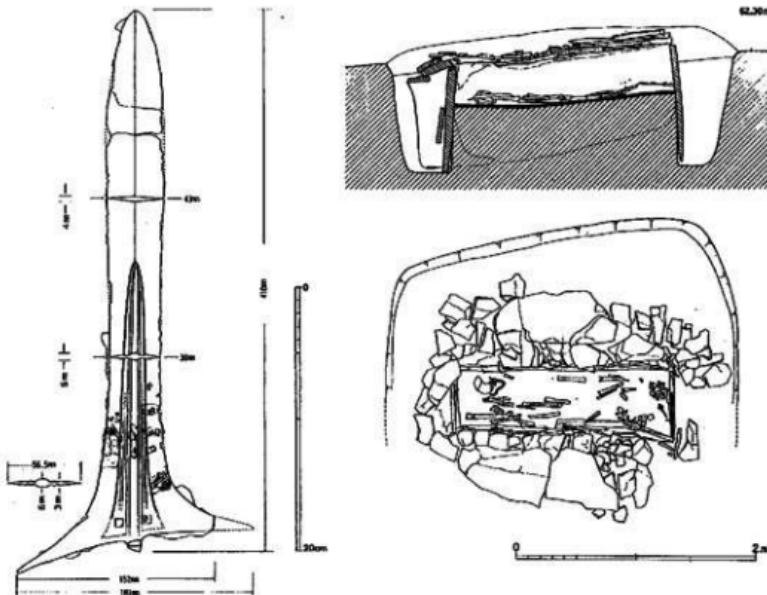


Fig. 7 富の原遺跡出土鉄戈・小佐古石棺1号

- 註1. 長崎県「土地分類基本調査大村」1973
2. 長崎県教育委員会「自然一「わたしたちの郷土」ふるさと学習資料〔3〕」1983
3. 鈴木忠司「野岳遺跡の細石刃と西日本における細石刃文化」「古代文化」23-8
1971
4. 大村市・黒丸遺跡調査会「黒丸遺跡」1980
5. 長崎県大村市教育委員会「富の原遺跡群確認調査概報」大村市文化財調査報告第3集
1982
長崎県大村市教育委員会「富の原遺跡群確認調査概報」大村市文化財調査報告第4集
1983
長崎県大村市教育委員会「富の原遺跡群確認調査概報IV」大村市文化財調査報告第9集
1985
長崎県大村市教育委員会「富の原遺跡群確認調査概報V」大村市文化財調査報告第11集
1986
長崎県大村市教育委員会「富の原」大村市文化財調査報告書第12集 1987



Fig. 8 周辺道路分布図（大村市）

Tab. 4 大村市遺跡地名表 ①

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 立地 | 出土遺物 | 時代 | 文献 | | | |
|----|------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------|---|-------------------|-------|------|
| 1 | 網代島空挺遺跡 | 大村市東対島町久津右323,921 | 台地 備高 280m ~ 300m | 石器、黒曜石剝片、サヌカイト剝片 | 縄文 | | | | |
| 2 | 後平道跡 | + | 後平道1025,1026 | + | 250m ~ | 先土器・縄文 | | | |
| 3 | 御伊勢宝遺跡 | + | + | 御伊勢宝849 | + | 220m ~ 290m | 黒曜石剝片 | | |
| 4 | 野岳遺跡 | + | 1897 - 1997 野岳公園内 | + | 250m ~ 280m | 都石器、都石器鉈、ナイフ型石器、管狀式土器 | * | * | 12 |
| 5 | 陳山遺跡 | + | 陳山 | + | 270m ~ | ブレイカーアイ、ブレイカーブラシ、サヌカイト、ブレイカーサヌカイトコア、高麗瓦コア | 先土器 | | |
| 6 | 野岳平道跡 | + | 野岳町野岳平 | + | 250m ~ 270m | 石器、スカラベー鉈、マガロブレイド、石器 | 先土器・縄文 | | |
| 7 | 丸尾遺跡 | + | 丸尾1640-1,1640-2 | + | 250m | ナイフ型石器、石器、スクレーパー、石刀、石器、陶 | * | | |
| 8 | 野中通路 | + | 武智路町野中 | 丘陵 | 80m ~ 90m | 黒曜石剝片 | 縄文 | | |
| 9 | 久津石船跡C 地点 | + | 経原二丁目石見317 | 台地 | 10m | | 古墳 | | |
| 10 | 久津石船跡D 地点 | + | + | 二丁目小川 | + | 0m ~ 10m | | | |
| 11 | 久津石船跡B 地点 | + | + | 小川251 | + | 10m ~ 20m | * | 13 | |
| 12 | 久津石船跡A 地点 | + | + | 久津316 | + | 10m | * | 13 | |
| 13 | 島の島古墳群1号墳 | + | + | 松原島の島 | 島 | 0m ~ 10m | * | | |
| 14 | 島の島古墳群2号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 15 | 島の島古墳群3号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 16 | 島の島古墳群4号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 17 | 島の島古墳群5号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 18 | 島の島古墳群6号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 19 | 島の島古墳群7号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 20 | 島の島古墳群8号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 21 | 島の島古墳群9号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 22 | 島の島古墳群10号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 23 | 島の島古墳群11号墳 | + | + | + | + | + | * | | |
| 24 | 久保田遺跡 | + | + | 久保田716 | 台地 | 40m ~ 50m | 黒曜石剝片 | 縄文 | |
| 25 | 長右遺跡 | + | + | 三丁目長右 | 丘陵 | 140m | * | * | 24 |
| 26 | 地伊石遺跡 | + | + | 地伊石 | 台地 | 145m ~ 150m | * | * | |
| 27 | 西の谷遺跡 | + | + | 西の谷 | 丘陵 | 40m | * | * | |
| 28 | 尾ノ上遺跡 | + | + | 二丁目尾ノ上 | + | 30m | * | * | |
| 29 | 今山・中野遺跡 | + | + | 三丁目今山・中野 | 台地 | 60m ~ 70m | * | * | |
| 30 | 延命寺跡 | + | + | 一丁目延命寺 | + | 70m ~ 80m | 瓦輪塔 | 奈良~中世 | 8,24 |
| 31 | 南浦器 | + | + | 一丁目南浦 | + | 90m ~ 100m | 黒曜石剝片 | 縄文 | |
| 32 | 大久平道跡 | + | + | 草場町大久667,673 | + | 20m ~ 30m | * | * | |
| 33 | 東光寺跡 | + | + | 松原二丁目東光寺 | + | 70m | 中世 | | |
| 34 | 東光寺遺跡 | + | + | + | 116m ~ 120m | 黒曜石剝片 | 縄文 | 23 | |
| 35 | 中谷遺跡 | + | + | 野町中谷 | + | 158m ~ 160m | * | * | |
| 36 | 下松尾遺跡 | + | + | 草場町下松尾362 | 丘陵 | 50m ~ 60m | * | * | |
| 37 | 上松尾遺跡 | + | + | 草場町上松尾153,154 | 台地 | 50m ~ 90m | * | * | |
| 38 | 八幡古墳 | + | + | 發荷町上八幡 | 丘陵 | 90m | | 古墳 | 2 |
| 39 | 上八幡日遺跡 | + | + | + | 100m ~ 110m | 黒曜石剝片 | 縄文 | | |
| 40 | 製造の谷遺跡 | + | + | 製造の谷 | + | 110m ~ 120m | 中世 | | |
| 41 | 中田平道跡 | + | + | 中田平 | + | 120m ~ 130m | 黒曜石剝片 | 縄文 | |
| 42 | 八ツ久保遺跡 | + | + | 立福寺町八ツ久保 | + | 100m ~ 110m | * | * | |
| 43 | 金石屋遺跡 | + | + | 発荷町金石屋 | + | + | * | | |
| 44 | 赤木遺跡 | + | + | 立福寺町赤木 | + | 90m ~ 100m | * | * | 24 |
| 45 | 赤木丘陵 | + | + | 松山間 | + | 70m ~ 80m | 中世 | | |
| 46 | 立福寺松山間 | + | + | 台地 | 70m | | 古墳 | | |
| 47 | 赤霧寺跡 | + | + | 光明寺町赤霧寺 | + | 30m ~ 40m | 中世 | 8 | |
| 48 | 赤霧寺鐵灰石群 | + | + | 赤霧寺 | + | + | 古墳から上の頭部のみ3件、底座6件 | * | |
| 49 | 渕山遺跡 | + | + | 矢上町渕山111-114 | 丘陵 | 60m ~ 70m | 黒曜石剝片 | 縄文 | |
| 50 | 山の上古墳 | + | + | 山の上 | 台地 | 30m ~ 40m | | 古墳 | |

Tab. 5 大村市遺跡地名表(2)

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 立地 | 出土遺物 | 時代 | 文献 | |
|-----|---------------|--------------------------|---------------|------------------------|----------|--------|---|
| 51 | 強力道路 | 大村市矢上町強力 | 平野 高さ 10m~20m | | 古墳 | | |
| 52 | 石走古墳群 1号墳 | ◆ ◆ 石走 | 台地 ◆ 10m | 滑石製軸頭片、青磁片 | ◆ - 中世 | | |
| 53 | 石走古墳群 2号墳 | ◆ ◆ | 低台地 ◆ * | | * | | |
| 54 | 好武城跡 | ◆ 好古町好武 | 台地 ◆ 10m | 黒曜石剣片、土器片 | 楢文・中世 | 1,7,15 | |
| 55 | 今富城跡 | ◆ 皆洞町今富 | ◆ ◆ 20m | * | 中世 | 1 | |
| 56 | 中牛田遺跡 | ◆ ◆ 中牛田 | 平野 ◆ 10m~20m | * | 楢文 | | |
| 57 | 冷泉遺跡 | ◆ 今森町冷泉 | 台地 ◆ * | * 土師器 | 古墳 | | |
| 58 | 皆洞跡古墳石棺 | 皆洞町古塚 | 平野 ◆ 10m | | * | | |
| 59 | 伴田遺跡 | ◆ 佐脇町伴田 | 台地 ◆ 10m~20m | 黒曜石剣片, tool, | 楢文・茶・古 | 21 | |
| 60 | 黒湯石棺墓跡 | ◆ ◆ 野中(22) | ◆ ◆ 20m~30m | * (流れ込み)、弥生後期前半の土器 | 古墳 | 16 | |
| 61 | 琴取遺跡 | ◆ 今嵩町琴取 | 平野 ◆ 30m~40m | * | 楢文 | | |
| 62 | 鳥越遺跡 | ◆ ◆ 鳥越 | 台地 ◆ 50m~60m | * | * | | |
| 63 | 貴金山古墳 | ◆ ◆ 喜久 | ◆ ◆ 40m | 鉄刀、鉄矛、刀子、土師器、須恵器 | 古墳 | 17 | |
| 64 | 地堂古墳 | ◆ ◆ 地堂614 | ◆ ◆ 30m~40m | | * | | |
| 65 | 大川中橋(みなかはし)遺跡 | ◆ ◆ * | ◆ ◆ * | | 中世 | 18 | |
| 66 | 中田遺跡 | ◆ ◆ 中田 | 平野 ◆ 20m~30m | 黒曜石剣片 | 弥生・古墳 | | |
| 67 | 野田B遺跡 | ◆ 野田町山内422-4, 422-5, 423 | 台地 ◆ 40m~50m | * ナイフ型石器 | 先土器 | 24 | |
| 68 | 野田古墳 | 大村市野田町大村44332 | 丘陵 ◆ 80m | 須恵器(杯蓋1, 手舟3) | 古墳 | 2,23 | |
| 69 | 大村田遺跡 | ◆ ◆ 大村田 | 台地 ◆ 70m~100m | 黒曜石剣片 | 楢文 | | |
| 70 | 平原B遺跡 | ◆ ◆ 平原 | 丘陵 ◆ 100m | * | * | | |
| 71 | 中高野遺跡 | ◆ ◆ 中高野1180-3 | ◆ ◆ 100m~110m | * | * | | |
| 72 | 四方白遺跡 | ◆ ◆ 四方白1226 | ◆ ◆ 150m~160m | 石核、ポイント、ナイフ型石器、黒曜石剣片 | 先土器 | | |
| 73 | 赤祖山発掘遺跡 | ◆ ◆ 石坂1435 | ◆ ◆ 120m | * | 先土器・楢文 | | |
| 74 | 宮代通跡 | ◆ 宮代町木山 | ◆ ◆ 170m~190m | ナイフ型石器、石鏡、スクレイパー、黒曜石剣片 | * | * | |
| 75 | 末ノ山通跡 | ◆ ◆ * | ◆ ◆ 140m~150m | 黒曜石コア・削片 | 楢文 | | |
| 76 | 大船田鍵道遺跡 | ◆ 荒瀬町大船田 | ◆ ◆ 80m~90m | 黒曜石削片、楢文土器片、マイクロブレンド | 先土器・楢文 | | |
| 77 | 山田遺跡 | ◆ ◆ 山田476-513 | ◆ ◆ 65m~75m | ナイフ型石器、黒曜石削片、波状時代土器片、他 | *・古墳・中世 | | |
| 78 | 喜名通跡 | ◆ 今富町喜名 | 平野 ◆ 20m~30m | 弥生土器片、黒曜石剣片 | 弥生 | | |
| 79 | 野口通跡 | ◆ 鬼無町野口340 | 台地 ◆ 50m~60m | 石核、細石核、スクレイパー、黒曜石削片 | 先土器 | 24 | |
| 80 | 再城古墳 | ◆ ◆ 房城 | ◆ ◆ 40m~50m | | 古墳 | 2 | |
| 81 | 鳥城坂通跡 | ◆ ◆ * | ◆ ◆ * | ポイント、黒曜石削片 | 先土器 | 24 | |
| 82 | 水頭通跡 | ◆ ◆ 水頭346 | 丘陵 ◆ 60m~70m | 石核、黒曜石削片、石鏡 | 楢文 | | |
| 83 | 山下通跡 | ◆ ◆ * | ◆ ◆ 40m~50m | 石核、黒曜石削片、弥生土器片 | 先土器・弥生 | | |
| 84 | 山下中里泰群 | ◆ 菊池町 | 台地 ◆ 40m~45m | 中後土器片、人骨、近世陶器片、黒曜石核 | 楢文・今世・近世 | | |
| 85 | 元麻通跡 | ◆ ◆ * | 崩落地 ◆ 50m | 黒曜石削片 | * | | |
| 86 | 黒丸通跡 | ◆ 黒丸町-沖田郡316-246 | ◆ ◆ 0m~10m | 楢文土器・石器、変形、弥生土器・石器、他 | 楢文-古墳-中世 | 5 | |
| 87 | 竹松通跡 | ◆ 竹松町 | ◆ ◆ 10m~20m | 石包丁 | * | | |
| 88 | 竹松小学校通跡 | ◆ 宮寺町1丁目竹松小学校内 | ◆ ◆ 10m~20m | 打制石斧、磨制石斧 | * | | |
| 89 | 平野通跡 | ◆ ◆ * | ◆ ◆ 20m~30m | 土器片、黒曜石削片古墳 | 古墳 | | |
| 90 | え小路通跡 | ◆ ◆ 立小路 | ◆ ◆ * | 石核、黒曜石削片古墳 | 楢文 | | |
| 91 | 黒木通跡 | ◆ 岩の屋2丁目黒木 | ◆ ◆ 0m~10m | | 弥生・古墳 | | |
| 92 | 岩の屋2丁目黒木通跡 | ◆ 岩の屋2丁目黒木 | ◆ ◆ * | 變形、土器、石核、鐵火 2本 | 弥生 | 6 | |
| 93 | 小路口通跡 | ◆ 小路口本町下小路口 | ◆ ◆ 30m~40m | | 楢文 | | |
| 94 | 鬼の穴古墳 | ◆ ◆ * | 195 | ◆ ◆ 30m | 須恵器片 | 古墳 | 2 |
| 95 | 上小路口古墳 | ◆ 小路口本町口 | ◆ ◆ 40m~50m | | * | 2 | |
| 96 | 今津通跡 | ◆ 今津町草木原 | ◆ ◆ 10m | 黒曜石削片 | 楢文・弥生 | | |
| 97 | 原口・山下通跡 | ◆ 原口町山下 | ◆ ◆ 15m | * | * | | |
| 98 | 原口・内野通跡 | ◆ 原口町内野高野 | ◆ ◆ 10m~40m | * | | | |
| 99 | 坂口越跡 | ◆ 荒瀬町大門 | ◆ ◆ 50m | | 中世 | 1,7 | |
| 100 | ササノ木通跡 | ◆ 油田2丁目ササノ木 | ◆ ◆ 30m~40m | 石鏡、黒曜石削片 | 楢文 | | |

Tab. 6 大村市遺跡地名表(③)

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 立地 | 出土遺物 | | 文献 |
|-----|----------|-----------------|-------------------|--------------------|--------|-----|
| 101 | 坂口・横通跡 | 大村市坂口町坂口・横道 | 田原地標高 30m ~ 40m | 黒曜石剣片 | 純文 | |
| 102 | タブノ木原遺跡 | + 池田新町タブノ木原 | * * 20m ~ 30m | * | * | |
| 103 | 柴田遺跡 | + 三城町柴田 | 台地 | 石器、石刀片、須恵器、土師器、五輪塔 | 古墳・中世 | |
| 104 | 乾馬場遺跡 | + 古野町2丁目裏馬場 | 平野 僕高 10m ~ 20m | 須恵器、土器片 | * | |
| 105 | 猿ノ尾遺跡 | + 猿ヶ原町猿ノ尾 | 谷間 * 210m ~ 220m | 有柄刃器 | 先土器 | 3 |
| 106 | 猿ヶ原遺跡 | * * | 標高 170m ~ 200m | 横型石器、尖頭器、腰長剣片、押型文 | 純文 | |
| 107 | 葛雷ケ谷遺跡 | * * | 台地上 * 230m ~ 240m | 黒曜石剣片 | * | |
| 108 | ホーメキ谷遺跡 | + 清野1丁目ホーメキ谷 | * * 150m | 根石核、石器、剣片 | 先土器、純文 | |
| 109 | 野口遺跡 | + 上津賀町野口 | 丘陵上 * 60m ~ 70m | 須恵器 | 純文 | |
| 110 | 沖田黒丸桑里遺跡 | + 黒丸町 ~ 沖田郷 | 原生地 * 8m ~ 10m | | 平安・中世 | |
| 111 | 田下キリラン墓群 | + 田下町下田下山355 | 台地 | | 中世 | |
| 112 | 隅の内遺跡 | + 清野1丁目隅の内 | | | 純文 | |
| 113 | 長久寺跡 | * * | 平野 | | 中世 | 8 |
| 114 | 桃山遺跡 | + 水門町水門 | * 標高 9m ~ 11m | 石器 | 純文 | |
| 115 | 琴平町古墳 | + 水門町大瀬き | 丘陵 * 50m ~ 54m | | 古墳 | 9 |
| 116 | 上水前遺跡 | * * | 上水前 | | 光土器・純文 | 10 |
| 117 | 三城跡 | + 三城町 | * 標高 30m | | 平安・中世 | 1.7 |
| 118 | 武都遺跡 | + 武都町竹吉 | * * 40m ~ 50m | 黒曜石 | 先土器・純文 | |
| 119 | 小佐古遺跡 | * * | 小佐古 * 32m ~ 35m | 石器 | 古墳 | 22 |
| 120 | 大上川桑里遺跡 | + 水門町2丁目 ~ 西三城町 | 丘陵地 * 4m ~ 6m | | 奈良・平安 | 11 |
| 121 | 八幡神社遺跡 | + 式部町 | * * 10m | | 古墳 | |
| 122 | 川内鄭原塚遺跡 | + 郑原町鬼塚 | 丘陵 | | * | |
| 123 | 鷺石遺跡 | + 鹭原町伊藤石 | | | 純文 | 10 |
| 124 | 桜A遺跡 | + 玄宮古町跡久保 | 台地 標高 76m ~ 84m | | 先土器・純文 | 10 |
| 125 | 桜B遺跡 | + 玄宮川内町桜 | 丘陵 * 60m ~ 76m | | 純文 | 10 |
| 126 | 足形遺跡 | - * * | 足形 * 94m ~ 102m | | 先土器・純文 | |
| 127 | 大室遺跡 | + 雪野町大室 | 原生地 * 3m | 土師器 | 古墳 | 16 |

註 6. 長崎県大村市教育委員会「小佐古石棺墓群」大村市文化財調査報告書第13集 1988

7. 小田富士男「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」九州考古学39・40 1970

8. 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ」長崎県文化財調査報告書第50集 1980

9. 昭和39年12月九州大学調査。7世紀代の群集墳で、10基が残る。報告書は、本刊である。

10. 土肥利男「多良山麓研究」1956

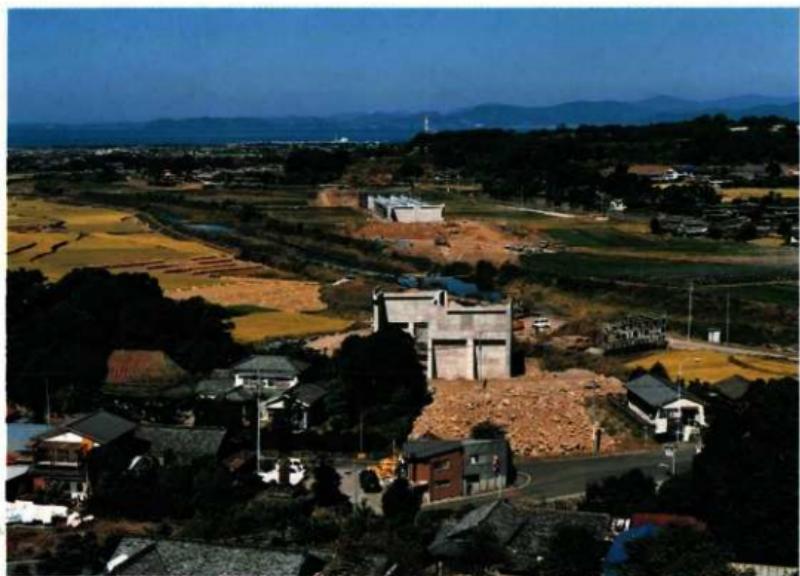
11. 沖田郷に現在「九坪」の字名が残り、当時約80の坪から成了ったと云われる。

12. 長崎県大村市教育委員会「大村城(玖島城)」大村市文化財調査報告第10集 1986

参考文献

- 1 新人物往来社「日本城郭体系」17」1980
- 2 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査集報 III」長崎県文化財調査報告書 第50集 1980
- 3 長崎県教育委員会「長崎県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書 第87集 1987
- 4 『大村家記』・『深江記』
- 5 註4と同じ
- 6 大村市教育委員会「富の原常磐遺跡発掘調査報告書」1981
- 7 『郷村記』
- 8 長崎県教育委員会「諫早・大村・北高来郡の文化財」長崎県文化財調査報告書 第53集 1980
- 9 長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 II」長崎県文化財調査報告書 第56集 1982
- 10 長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 I」長崎県文化財調査報告書 第54集 1981
- 11 註10と同じ
- 12 謙木 義昌他「九州地方の先土器文化」「日本の考古学 I」所収 河出書房 1975
- 13 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査集報 I」長崎県文化財調査報告書 第35集 1987
- 14 「紫山延命縁起」「大村史話」所収
- 15 『大村記』
- 16 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査週報 II」長崎県文化財調査報告書 第45集 1979
- 17 註7と同じ
- 18 長崎県教育委員会「長崎県の文化財 下」1970
- 19 長崎県東彼杵郡東彼杵町教育委員会「岡遺跡」東彼杵町文化財調査報告書 第2集 1988
- 20 大村史談会「大村史談上・中・下巻」1977
- 21 植田遺跡調査会「植田遺跡」1988
- 22 大村市教育委員会「佐佐古石棺群」大村市文化財調査報告書 第13集 1988
- 23 長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VI」長崎県文化財調査報告書 第93集 1989
- 24 本 告

葛城遺跡



本文目次

| | |
|-------------|----|
| I 調 査 | 35 |
| 1. 地理的位置 | 35 |
| 2. 周辺の遺跡 | 35 |
| 3. 調査の概要 | 38 |
| 4. 土層の状況 | 40 |
| II 遺 槽 | 44 |
| 1. 柱 穴 | 44 |
| 2. 銀 棺 | 44 |
| 3. 炭焼窯 | 50 |
| III 出 土 遺 物 | 51 |
| 1. 遺物の概要 | 51 |
| 2. 石 器 | 52 |
| 3. 土 器 | 82 |

挿図目次

| | | |
|---------|----------------------|----|
| Fig. 1 | 葛城遺跡位置図 | 35 |
| Fig. 2 | 葛城遺跡周辺地形図 (1/25,000) | 36 |
| Fig. 3 | 葛城遺跡周辺地形・調査区域図 | 39 |
| Fig. 4 | I列東壁土層図 | 41 |
| Fig. 5 | 土層図 (8列北壁) | 42 |
| Fig. 6 | 土層図 (E列・26列) | 43 |
| Fig. 7 | 柱穴出土状況図 | 45 |
| Fig. 8 | 第1号埋甕実測図 | 46 |
| Fig. 9 | 第2号埋甕実測図 | 47 |
| Fig. 10 | 第3号・第4号埋甕実測図 | 48 |
| Fig. 11 | 第5号埋甕実測図 | 49 |
| Fig. 12 | 炭焼窯実測図 | 50 |
| Fig. 13 | 出土石器実測図 (1) | 53 |
| Fig. 14 | 出土石器実測図 (2) | 54 |
| Fig. 15 | 出土石器実測図 (3) | 55 |
| Fig. 16 | 出土石器実測図 (4) | 57 |
| Fig. 17 | 出土石器実測図 (5) | 58 |
| Fig. 18 | 出土石器実測図 (6) | 59 |
| Fig. 19 | 出土石器実測図 (7) | 61 |
| Fig. 20 | 出土石器実測図 (8) | 62 |
| Fig. 21 | 出土石器実測図 (9) | 63 |
| Fig. 22 | 出土石器実測図 (10) | 65 |
| Fig. 23 | 出土石器実測図 (11) | 66 |
| Fig. 24 | 出土石器実測図 (12) | 67 |
| Fig. 25 | 出土石器実測図 (13) | 68 |
| Fig. 26 | 出土石器実測図 (14) | 69 |
| Fig. 27 | 出土石器実測図 (15) | 71 |
| Fig. 28 | 出土石器実測図 (16) | 72 |
| Fig. 29 | 出土石器実測図 (17) | 73 |
| Fig. 30 | 出土石器実測図 (18) | 74 |
| Fig. 31 | 出土石器実測図 (19) | 76 |
| Fig. 32 | 出土土器実測図 (1) | 82 |

| | | |
|--------|-------------------|----|
| Fig.33 | 出土土器実測図(2) | 83 |
| Fig.34 | 出土土器実測図(3) | 85 |
| Fig.35 | 出土土器実測図(4) | 86 |
| Fig.36 | 出土土器実測図(5) | 87 |
| Fig.37 | 出土土器実測図(6) | 88 |
| Fig.38 | 出土土器実測図(7) | 89 |
| Fig.39 | 出土土器実測図(8) | 91 |
| Fig.40 | 出土土器実測図(9) | 93 |
| Fig.41 | 出土土器実測図(10) | 96 |
| Fig.42 | 出土土器実測図(11) | 97 |
| Fig.43 | 埋甕実測図(12) | 99 |

表 目 次

| | |
|------------------------|----|
| Tab. 1 出土石器計測表 1 | 77 |
| Tab. 2 出土石器計測表 2 | 78 |
| Tab. 3 出土石器計測表 3 | 79 |
| Tab. 4 出土石器計測表 4 | 80 |
| Tab. 5 出土石器計測表 5 | 81 |

図版目次

| | |
|-------------------------------------|-----|
| PL. 1 葛城遺跡遠景 | 103 |
| PL. 2 葛城遺跡遠景・近景 | 104 |
| PL. 3 調査前の状況と調査風景 | 105 |
| PL. 4 調査風景 (A 地点の調査) | 106 |
| PL. 5 調査風景 (A 地点の調査) | 107 |
| PL. 6 遺跡近景と調査風景 (B 地点) | 108 |
| PL. 7 遺跡近景と調査の状況 (B 地点) | 109 |
| PL. 8 調査風景 (遺物の取り上げ作業) | 110 |
| PL. 9 調査風景 (遺構の実測状況) | 111 |
| PL. 10 土層の状況 1 (1 列の状況) | 112 |
| PL. 11 土層の状況 2 (8 列と 26 列の状況) | 113 |
| PL. 12 土層の状況 3 (E 列の状況) | 114 |
| PL. 13 検出した柱穴群 | 115 |
| PL. 14 第 1 号埋甕出土状況 | 116 |
| PL. 15 第 2 号埋甕出土状況 | 117 |
| PL. 16 第 3 号埋甕出土状況 | 118 |
| PL. 17 第 4 号埋甕出土状況 | 119 |
| PL. 18 第 5 号埋甕出土状況 | 120 |
| PL. 19 炭焼窯の状況 | 121 |
| PL. 20 遺物出土状況 1 (石器) | 122 |
| PL. 21 遺物出土状況 2 (石器) | 123 |
| PL. 22 遺物出土状況 3 (石器) | 124 |
| PL. 23 遺物出土状況 4 (石器) | 125 |
| PL. 24 出土の石器 1 (ナイフ形石器) | 126 |
| PL. 25 出土の石器 2 (ナイフ形石器) | 127 |

| | | |
|--------|-------------------------|-----|
| PL.26 | 出土の石器 3 (台形・台形様石器・尖頭器) | 128 |
| PL.27 | 出土の石器 4 (剝片・ラウンドスクレーパー) | 129 |
| PL.28 | 出土の石器 5 (剝片石器) | 130 |
| PL.29 | 出土の石器 6 (剝片) | 131 |
| PL.30 | 出土の石器 7 (剝片) | 132 |
| PL.31 | 出土の石器 8 (剝片) | 133 |
| PL.32 | 出土の石器 9 (剝片) | 134 |
| PL..33 | 出土の石器10 (剝片) | 135 |
| PL.34 | 出土の石器11 (スクレーパー) | 136 |
| PL.35 | 出土の石器12 (石匙) | 137 |
| PL.36 | 出土の石器13 (石斧・石錘・砥石) | 138 |
| PL.37 | 出土の石器14 (石鎌) | 139 |
| PL.38 | 出土の石器15 (石鎌) | 140 |
| PL.39 | 出土の石器16 (石鎌) | 141 |
| PL.40 | 出土の石器17 (石鎌) | 142 |
| PL.41 | 出土の石器18 (石鎌) | 143 |
| PL.42 | 出土の石器19 (石鎌) | 144 |
| PL.43 | 出土の石器20 (石鎌) | 145 |
| PL..44 | 出土の石器21 (石鎌) | 146 |
| PL.45 | 出土の石器22 (石鎌) | 147 |
| PL.46 | 出土の石器23 (石鎌・その他) | 148 |
| PL.47 | 出土の石器24 (石核・砥石) | 149 |
| PL.48 | 出土の石器25 (石錘・石錐) | 150 |
| PL.49 | 出土の土器 1 | 151 |
| PL.50 | 出土の土器 2 | 152 |
| PL.51 | 出土の土器 3 | 153 |
| PL..52 | 出土の土器 4 | 154 |
| PL.53 | 出土の土器 5 | 155 |
| PL.54 | 出土の土器 6 | 156 |
| PL.55 | 出土の土器 7 | 157 |
| PL.56 | 出土の土器 8 | 158 |
| PL.57 | 出土の土器 9 | 159 |

I 調 査

1. 地理的位置

葛城遺跡は大村市のほぼ中央に位置し、荒瀬・今富の両町にまたがっている。

この遺跡は有明海と大村湾の間に噴出した多良山系から、ほぼ西に向いて伸びた丘陵の先端部に位置している。多良山系に源を持つ郡川が、扇頂部の坂口付近で西に向きを変え、さらに数百m下流で西北西に向きを転ずる場所の北岸、標高50m前後ほどの位置で、扇状地面との比高は約15mの場所である。このため、眼下に広がる大村扇状地と大村湾、さらには海をこえて西彼杵半島の山々を望むことができる。

海岸線から3kmほどの場所で、JR大村線の「竹松」駅の北北東、約1kmのところである。

2. 周辺の遺跡

大村地区でのおおまかな遺跡のありかたについては、前の『周辺の歴史的環境』の項に述べられているので、ここでは葛城遺跡のごく近辺についてのみ紹介しておきたい。なお、ここで使用している番号はFig. 8の周辺遺跡分布図の番号に一致する。

遺跡の南側と西侧は郡川とそれによって作られた平地であり、背後はさほど急な山岳でもないという自然の条件も手伝ってか、周辺には多くの遺跡が知られている。

葛城遺跡の北部・北東部の丘陵上には、76の大似田堤遺跡や77の山田遺跡のように先土器時代から縄文時代の散在地が優位を占め、弥生時代や古墳時代の遺跡は低部平地に限られている。山田遺跡は当初中世の五輪塔などが知られていたが、大村市教育委員会の調査で、ナイフ型石器のほか先土器時代の遺物が出土した。しかし縄文時代の遺跡として85の荒瀬遺跡・90の立小

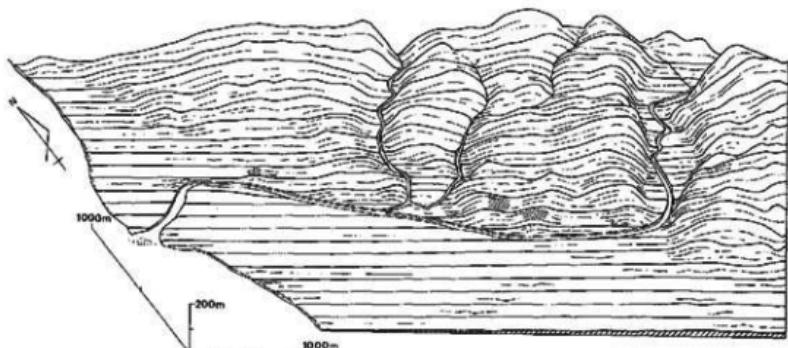


Fig. 1 葛城遺跡位置図

路遺跡・89の平野遺跡・93の小路口遺跡・98の坂口内高野遺跡などのように低地に散布地として知られているものもある。

弥生時代の主な遺跡としては以下のようなものがあるが、最近の発見によるものが多い。78の岩名遺跡は標高20m～25mの場所で、北側は佐奈川内川、南側は郡川に面した平地に立地する。弥生式土器片や黒曜石の剝片等の散布地として知られていたが、葛城遺跡を発掘調査中の昭和61年12月はじめ、「小屋の築造作業中にカメが出てきた」と、地主の方が調査現場に通報して来られた。現地で確認したところ、弥生時代後期の埋葬された斐棺であることがわかり、後日、大村市教育委員会によって調査された。付近一帯に墓域が拡がる可能性があり、また他にも生活址の存在が考えられるところである。

また葛城遺跡の調査中に新たに発見したものとして、川端遺跡がある。野田A遺跡をのせる丘陵の先端部と郡川を隔てて対峙する場所で、下方の段丘面より一段高い、標高20mから25mの間に多くの遺物が散布している。弥生式土器片が多く、斐棺墓群とともに生活址の存在が考えられるところである。また、郡川を隔てて対する岩名遺跡との関係についても、興味を持た



Fig. 2 葛城遺跡周辺地形図 (1/25,000)

れるところである。また、この場所から西方200mほどの場所にも、石棺の出土したことが伝えられており、ここも大きな遺跡である可能性が強い。さらに、この遺跡の南西部には縄文時代や古墳時代の遺物の散布する平野遺跡があり、南東部には立小路遺跡という縄文時代の散布地がある、この一帯が長期間にわたって生活の舞台となっていたことを窺わせる。

古墳時代の高塚式の古墳としては、前の『周辺の歴史的環境』の項に述べられている63の黄金山古墳が、葛城堤北岸から北西約1kmの丘陵上、標高40mほどの場所に位置し、北北西約1.5kmのところには野田古墳群がある。さらに近くでは、葛城遺跡から葛城堤を挟んだ対面、野田▲遺跡のすぐ西に接して80の葛城古墳がある。封土は失われ、石室の石材もかなり動いているが、現状から推測すると横穴式石室の古墳であったと思われる。葛城遺跡から南南西700mほどの場所に、94の鬼の穴古墳が古くから知られていて、江戸時代の記録にも残されている。この古墳の現状は直径20mほどで、高さは約3mある。表面はかなり不整形で、人頭大の礫が散乱している。しかしこれらの礫は墓石というより、周囲に無数にある石を寄せたような感じを受ける。現在8mほどの複室の横穴式石室が残り、南に向いて開口している。玄室は、奥壁・側壁・天井とも巨大な石材で構築されている。95の上小路口古墳は、封土・天井石とともに無く腰石のみであるが、横穴式石室で南に開口している。現在この周囲は畠になっているが、30年ほど以前は雑木林でありそのなかに古墳があった可能性も考えられている。

84の山下墓地は、葛城遺跡と同じ丘陵上に位置している。近年大村市教育委員会によって調査されたもので、そのなかには文安・文明など、15世紀の年号が刻まれた逆鐘碑を持ったものも確かめられている。この石碑の石材は、いわゆる青温泉と呼ばれる青緑色の滑石で、西彼杵半島に産するものといわれている。この種の、中世の年号を刻んだものとして、大村湾沿いの東彼杵町・多良見町・長与町などに出土例が知られていて、県北の小佐々町まで分布している。

註1 「大村市遺跡地図」長崎県教育委員会 1982

2 新しい場所での発見であり、註1の地図に記載はない。

3 大村市議会会長河野忠博氏の教示による。

4 「九州樹脂自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ」長崎県教育委員会 1989

5 「長崎県埋蔵文化財調査基報Ⅲ」長崎県教育委員会 1980

3. 調査の概要

葛城遺跡の存在は、昭和40年ころにはすでに知られていた。昭和30年代に遺跡のある丘陵が蜜柑畑として造成されたが、その畑の表面とか切り取られた断面の部分に、黒曜石の剝片や石礫などが散布しており、それらの遺物がかなり採集されていた。長崎県が遺跡周知事業の一環として、昭和56年度から実施した遺跡分布調査の際にもそれらの遺物が確認され、弦文式土器と見られる土器片も見つかっていた。この分布調査の結果は、大村市分のNo.83「山下遺跡」として記録された。市道の南側を主に遺跡の範囲としていた。また、葛城堤の北岸にも遺物の散布が知られ、この場所はNo.81「葛城堤遺跡」として取り扱うこととした。

高速道路の路線が大方決定し、中心杭が打たれたあとの昭和58年4月、東彼杵町の県境トンネル入口と大村池田インター・チュンジ間の詳細な遺跡分布調査を行った。その結果、先述した山下遺跡を拡げて「葛城遺跡」とし、野田遺跡と葛城堤遺跡を一連の遺跡ということで「野田A遺跡」とし、調査の必要な地点としておいた。また、高速道路はこの場所をかなり切り下げる設計であるため面積も広く、調査も長期にわたることが考えられていた。

昭和61年4月から調査にかかることとなり、調査についての方法等地権者や地元の方々に対して説明を行った。作業員の確保などを依頼し、4月21日から調査を開始することとした。

調査の対象地点は市道の両側の畑や蜜柑畑で、南側がやや高く標高49mから52mあり、北側は45mから48mである。調査地に、高速道路の基準杭を利用して5m方眼のグリッドを設定し、崖になって落ちる南端部から北側に向かって1・2・3・・・とし、東側から西のほうにA・B・C・・・の記号を付けた。調査は南端部から始めたが、遺物の出土数も少なく土層の状況もあまり良くなかったため、隣接する四個のグリッドのうちの一個を掘る方法で作業を進めた。

偶数列のC・E・G・I・K・M列などであるが、状況によってはそれ以外のグリッドも掘り下げた。梅雨の合間を縫って、12列・13列から14列の調査を進め、繩文式土器片やスクレーパーなどの石器、石鍋の破片等の遺物を出土する。しかし12列より南側では遺物の量も少なく土層もかなりの擾乱を受けていたので、調査を北側に進めた。13列からは北に緩い斜面となっていて、土器片や石底が見られた。市道より北のB地点には7月16日、28列までのグリッドを組んで部分的に掘り始めた。この年は、7月26日に梅雨が明けたとのことで、夏に向かい暑くなつて体調をこわす人も出始めた。I-22グリッドでは柱穴状のものが出現し、一部を拡張して調査を進めた。B地点の調査も進み、E-26グリッドからは繩文式土器片や黒曜石の剝片等が多量に出土し、ピットらしいものも検出され始めたため、この面で作業を一時中断し周辺の掘り下げにかかった。その結果24列から28列のD列からH列にかけて、多くの遺物の出土することが判明した。北側への広がりを確認するため、31列までグリッドを伸ばした。7月末までにJ-30グリッド・E-30グリッドの調査が終了し、それより北側の斜面には遺跡の広がる可能性はないものと判断された。24列から28列間での遺物の出土が続き、D-26グリッドからは組織痕文土器片が、またH-25・F-25グリッドからは磨製石斧等の遺物が出土し、これ

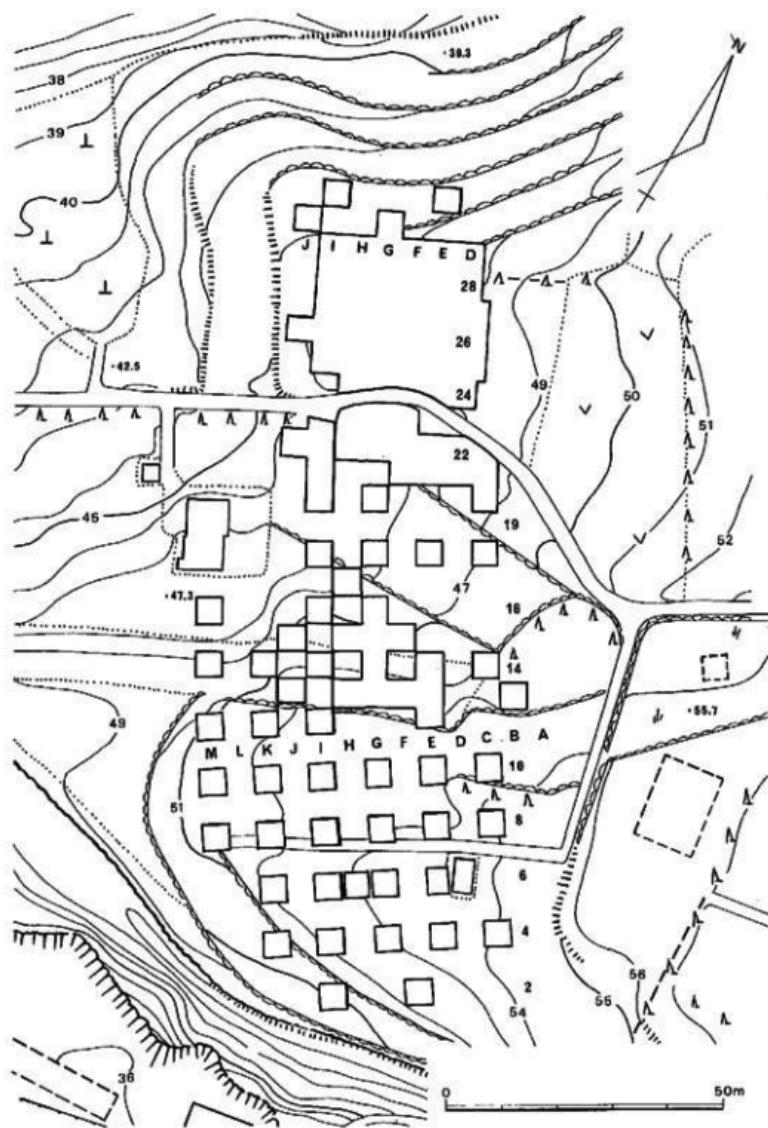


Fig. 3 基城遺跡周辺地形・調査区域図

ら遺物の取り上げ作業にもかなりの労力を振り向けるを得なかった。遺物の多量に出土する範囲がわかり、その部分にはほとんどの人員を入れて全面的な調査をすることとした。9月になって、D-27グリッドに甕が検出された。25列を中心にさらに多くの遺物が出土し、滑石製石鍋の破片、石ノミ、蛇紋岩製の石斧等のほか、さらに甕の出土も続いた。F-27グリッドなどからの出土遺物は、1,000点を越えるに至った。葛城遺跡のB地点での鑑定状態も先が見えだし、また機脚部分を急ぐという工事とのかねあいもあって、勢力の一部を野田A遺跡に投入した。10月になって27列周辺の調査を続け、それぞれのグリッド間のあぜの部分を取りはずす作業を行った。10月の後半になって、F-23グリッドから炭焼窯らしいものが出来始め、北側に2m×0.5m拡張して規模の確認にかかった。10月末とともに大分涼しくなり、朝から焚き火も見られるようになって、葛城遺跡の調査も最終段階にさしかかった。11月になって、掘れる部分の調査はほとんど終わり、危険防止のために道路に近い場所や深い部分の埋め戻し作業をした。11月7日午後、器材や道具等を野田A遺跡の現場棟に運び、4月21日以来の調査を無事に終了することができた。

4. 土層の状況

本遺跡での土層の状況については、A地区ではI列の東側の駆面と8列の北側の面を図示している。I列でこの丘陵の南北の状況を示し、8列で東西の傾き等の状況を示すものである。またB地区では、A地区からのI列の延長とそれ以外に遺物の出土が多く埋め甕などもあったため、E列の東壁の土層も図示した。さらに東西方向の状況を見るため、26列の北側の土層を示すこととした。

A地区的I-2グリッドから南は急に落ちる崖になっていて、I-4グリッドとは約1.5m高さの差がある。上層は、表土の下に2層として、地山の風化礫を全体に含んだ褐色土があり、3層には礫をほとんど含まない粘質の暗赤褐色の土がある。この状況は基本的にI-21グリッドまで変わらず、2層とした礫をほとんど含まない粘性の強い暗褐色の土層に入る場所もある。4層は地山で、玄武岩の風化礫層である。I-21グリッドからわずかに状況が変わり始め、2層の褐色土が上部の有機物を含んだ層と、下部の風化礫を多く含む層とに分かれれる。

I-22グリッド付近の2層はやや黄色味を帯び、やわらかい。I-22・I-23グリッドではこの層から弥生式土器片が出土している。ここから東のE-22グリッドでは4層として粘性のある淡灰褐色上層が認められ、その下部に5層として灰褐色で粘質の強い層がある。これは部分的なものと考えられ、ほかのグリッドでは認められていない。

さらに北側のB地点に移ると、2層の褐色土層が多くの遺物を含む層となり、下部に小さな礫を含んでいる。3層は黄褐色をした風化礫を多く含んだ褐色土層で、その上部にも遺物が含まれている。この層は粘質はあまりない。ここでの2層は褐色を呈しているが、部分的に黄色や赤味の混じるところもある。4層がA地点と同じく風化した玄武岩の地山として続いている

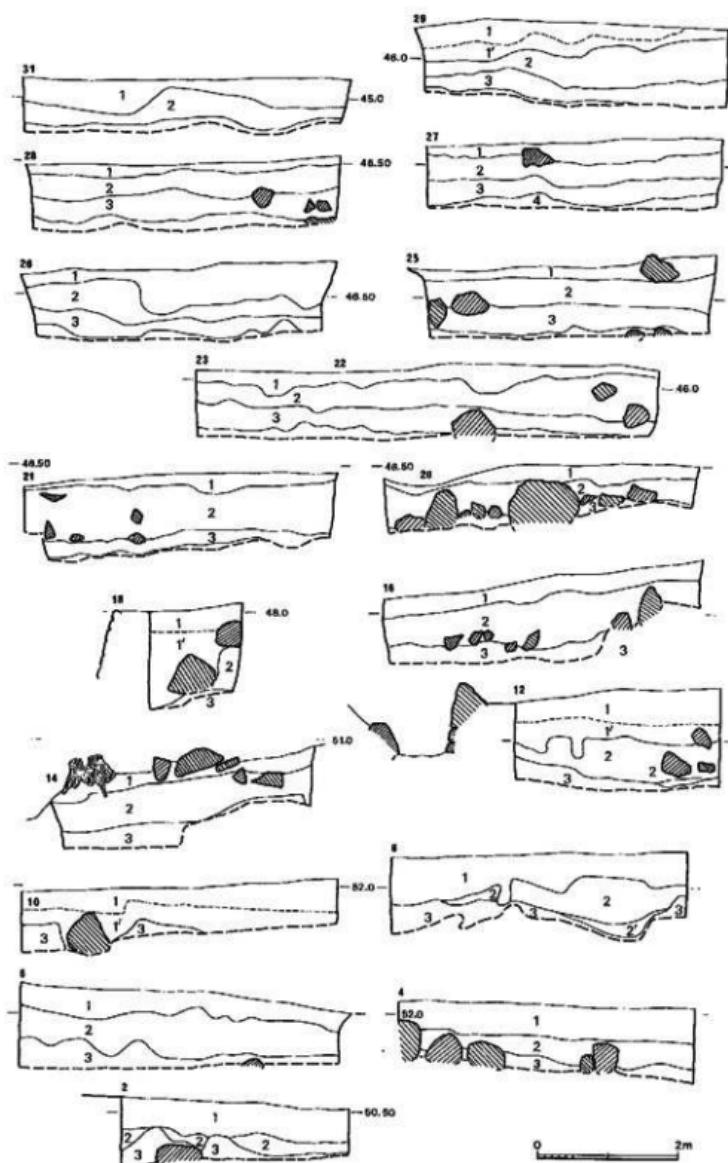


Fig. 4 I列東壁土層圖

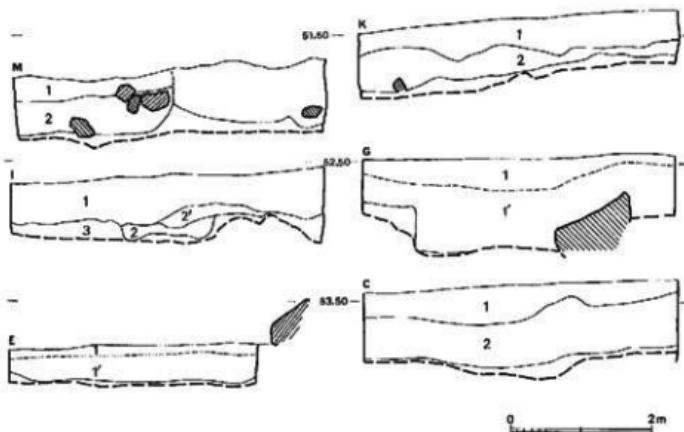


Fig. 5 土層図 (8列北壁)

が、大形の岩が多い。

上層の断面から見た丘陵の南北の状況は、I列で見た場合、南端の急な崖面に接するI-2グリッドからI-4グリッドに上がり、その後はやや平坦となって12列ほどまで続く。この部分での標高は52mを超える。I-13グリッド付近から北側への傾斜が始まり、I-20グリッドからI-23グリッドの、標高46m台の低地に至っている。I-23グリッドの北側の市道から一段高くなり、I-25グリッドで標高47mをわずかに超えるが、北側に徐々に低くなりB地点でのI列は46m~47mの間である。30列から北側は、蜜柑畑として造成された段々畑で、I-31グリッドでの標高45m付近から急激な斜面となって葛城堤に落ち込んでいる。

A地点での東西方向の状況を見ると、C-8グリッドが最高位であり、地表面の標高は53.8mほどである。順に西に移るにつれて低くなり、M-8グリッドでの標高は51mとなっている。この地点では西方に約1/20の傾斜を持つ状況である。

遺構や遺物の多く出土しているB地点では、I列の東20mのE列での南北方向の状況も図示している。全体的にはほぼ平らで、標高48m前後である。北側のE-29グリッドから傾斜が始まり、E-31グリッドから急な斜面となってI列と同様、葛城堤へと落ち込んでいる。

ここでの東西方向の状況を見るため、C~Jの26列の北壁面を図示している。C-26グリッドでの標高が48mを超え、J-26グリッドでは46mをさむ。ここでも西方に約1/14の傾斜となっていて、A地点の東西方向よりやや傾斜の度合いが大きい。

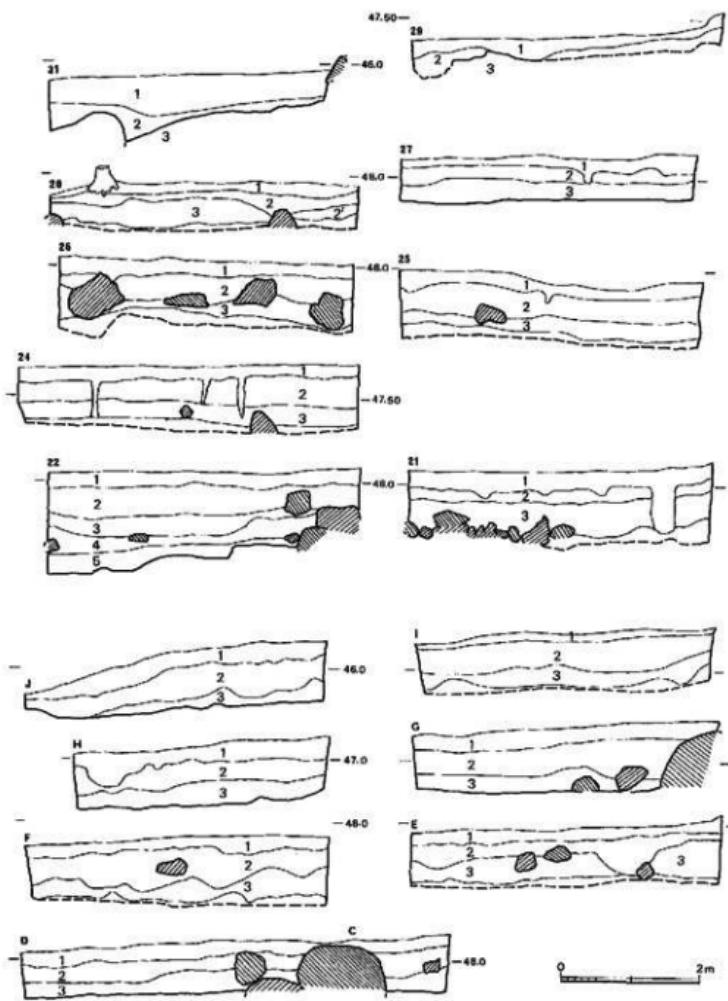


Fig. 6 土層図 (E列・26列)

II 遺構

葛城遺跡の調査を始めたころには、土層の状況や遺物の出土状況などから、遺構や遺物包含層の残り具合はあまり期待の持てるものではなかった。A地区の南半分は確かにそのとおりとなつたが、B地区と接するI-22、23グリッド付近の場所に於いては建物跡として復原できるには至らないものの、柱穴の存在を確認することができた。また全く予想もしていなかつた炭焼窯と考えられる跡も検出された。B地区に於いては、当初の遺物の散布状態からは想像できないほどの量の遺物の包蔵地が判明し、加えて本県ではこれまでにもあまり調査例のない埋甕の遺構が発見され、貴重な資料を提供することとなった。

1. 柱穴

A地区とB地区が接する、わずかに低まつた市道のすぐ南側で検出された。I・J列の22・23グリッドに40数個が見つかっている。玄岩の風化礫の混じる黄色を帯びた赤褐色の粘質土層に掘り込まれたもので、穴の形は一定していない。大きさは大小さまざま、大きなものは68cm×51cmあり、小さいものでは14cm×13cmほどしかない。平面での形にしても円形や橢円形、また隅丸の方形に近いものなどさまざまで、中に石の入ったものもあるが、柱の根縫めを意識したようなものではなく、柱の残っているものもなかった。深さについてもいろいろで、掘り込みからの深さでも浅いもので8cm、深いものでは50cmに達するものまである。最も深いものの底の部分で標高45.5m、深いもので標高44.9mとその差が60cmもあり、同一時期のものではないことを窺わせている。

また、これらの柱穴群のなかで並び方や方向性、それらの間の間隔などについての規則性が認められるものがない。

以上のような状況であり、この柱穴に伴う明確な遺物もなく、これら柱穴群の掘られた時期については明言しがたい。ただ、これら柱穴群の出たグリッドからは弥生式土器の破片が數点出土している。

以上の状況でこれら柱穴群から地上部分での建築物等の推測は難しい。ただ、大規模なものでなかったことは明らかで、畑の入口の角の平地であるので、農作業用の小屋があった可能性も考えられる。この部分とこれから南東側に谷状の窪みがあり、かつて土を取られたとのことで、旧状の地形からの推測ができない。

2. 埋甕

B地点の中央部からその北東側にかけて5基の縄文式土器を検出した。何れも小形のものである。当初、埋甕の出土については予想しておらず、単に土器が出土したものとして記録し、取り上げることとした。しかし土器を伴うものもあることや、口を上に向けて置かれ、支えの

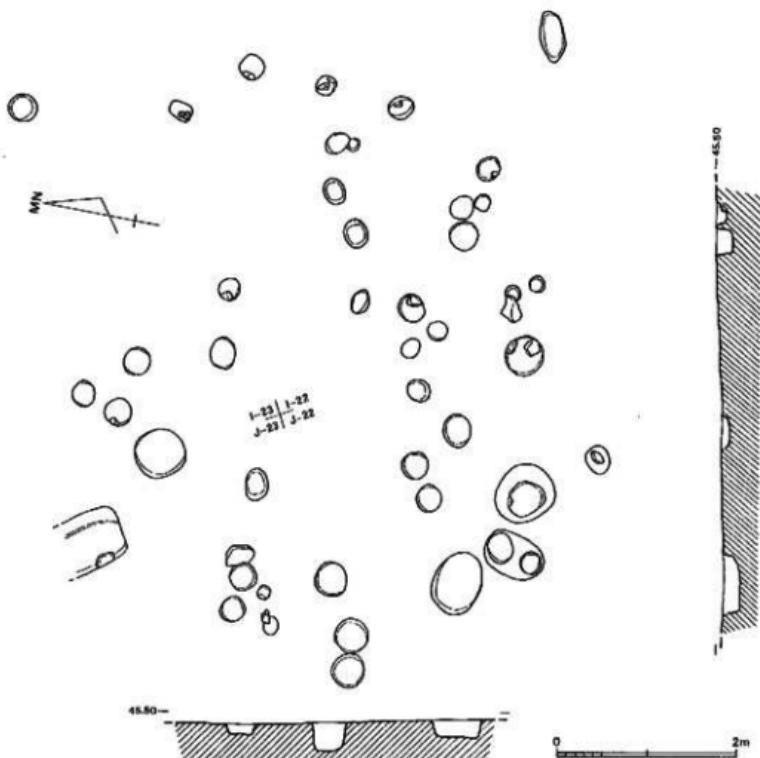


Fig. 7 柱穴出土状況図

石と思われるものもあることなどから埋甕と考えた。

第1号埋甕 (Fig. 8・PL.14)

D-27グリッドの北東部から検出された。わずかに南側に傾けて直立させている。かなりの数の小破片になっていて、原形については正確に復しえない。

直径45cm内外の円形に近い不整形な掘り込みがある。現在残っている部分での掘り込み面からの深さは25cmで、埋甕との間には暗褐色の土がつまっている。底部で標高47.5mほどである。底部に石があるが掘り方につまつた土のなかで、甕を据えた際に支えのために置かれた可能性もある。掘り方の断面を切る際に、その外の小砂礫混じりの土と異なる土の部分が確認された。

平面的には、南北90cm弱、東西93cmほどの不整形なものである。なかにつまっている土は色がやや黒く、埋甕のされる前の土壤であろうと考えられる。

出土の埋甕は器壁が薄く、小破片に割れていた状況で復原できなかった。そのためここでは出土時の計測をもとに述べることとする。

甕の肩の部分より上と、底部を欠いている。上部は後世の破壊であろうが、底部は埋置時から打ち欠かれていたものと考えられる。残存する胴部の上端部での直径38.5cm、想像される底部からの高さは28cmほどまでである。

胎土に小砂粒を含み、焼成も通有のものが風化してもろくなつたと考えられる。

単体で使用されたものと考えられるが、断言できない。骨片やその他の遺物は認められなかった。

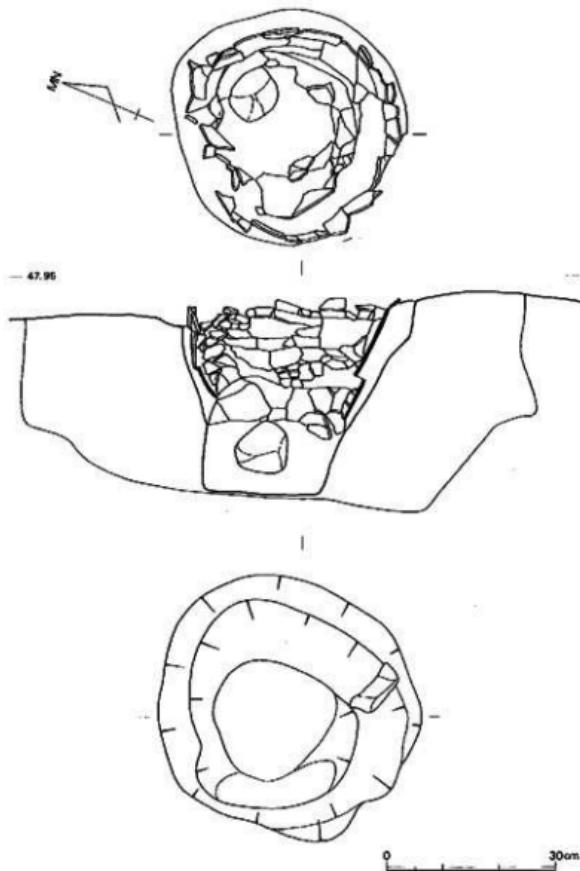


Fig. 8 第1号埋甕実測図

第2号埋甕 (Fig. 9・PL.15)

E-27グリッドの東壁と南壁の角の部分から出土した。現地表面から約20cmほどの深さしかなく、口縁部は欠失している。南西側に傾いて置かれている。2層の、粘性が少ない褐免土の上面から掘り込んでいるが、切り込み面の状況は不明である。長径67cm、短径57cmの楕円形の掘り方で、その底は隅丸の長方形に近い形をしている。その西端部はさらに一段深く地山に掘り込まれている。壁面の状態は北東側が急で、南東側に緩い。埋甕の傾斜を意識したものであろうか。

支えのためと考えられる石が三個、掘り方の東端部付近に集められたような状況で検出された。三個とも地山にはり付いたような形で、そのうち二個が埋甕を支えていたものと思われる。

掘り方と埋甕の間の土は2層と同じであるが、やや締まりがない。埋甕の中の土は2層と変わらない。

小破片となっているため正確な器形や寸法については断定しがたい。粗製の深鉢で、残存する部分での最大径は35cmほどである。底部を欠いているが深さ25cmくらいが残っている。蓋などについては不明であるが、単体であったものと思われる。骨片など、他に出土したものは無かった。

第3号埋甕 (Fig. 10・PL.16)

これもE-27グリッドからの出土であるが、西壁と南壁の角付近から第2号埋甕の南西約3.5mの場所に検出された。

現地表面から25cmほどの、2層のなか

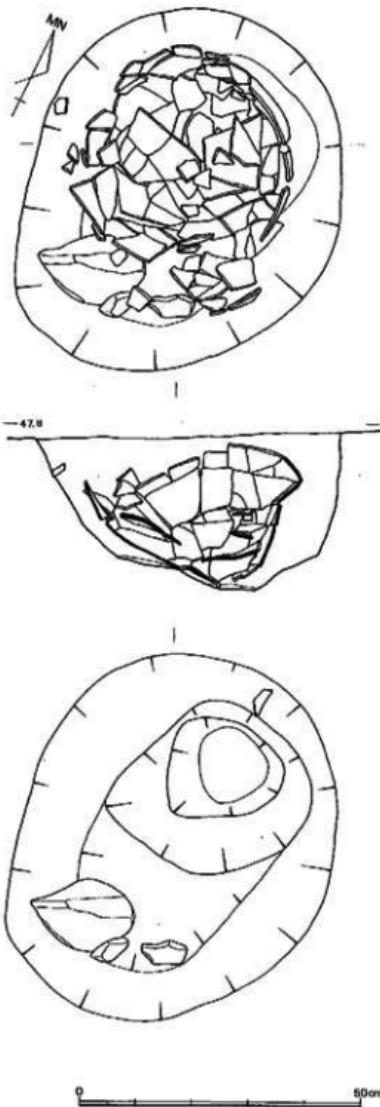


Fig. 9 第2号埋甕実測図

ほぼ直立させたように据えられている。周辺に石が多く、掘り方の確認は出来なかった。壺と思われるが胴部より上を欠失しているので断定しがたい。現存部での胴径は16cm、底部から9cmほど上までが残っている。丸底に近い底部で、その部分の標高は47.5mである。

近くに黒曜石と、熱を受けたと思われる小さな石が検出されたが、これらの他には認められなかった。

第4号埋壺 (Fig. 10・PL.17)

E-26グリッド中央よりやや北寄りから出土した。E-27グリッドの第2号埋壺と第3号埋壺を結ぶ線を底辺とする正三角形の頂点近くに位置することになる。第2号埋壺の南、約3mの場所である。

小形の壺で、埋壺としているがこの名称が適切かは疑問も残る。口縁部を斜め上に向け胴部を水平近く横転した状態で出土した。口縁部は北西方向に向いている。壺のまわりは2層の土でやや低くなった場所であるが、特別な掘り方は認められず、穴を掘って置かれたような感じも受けなかった。口縁部の直径約20cmで、底部とそこから上に約17cm分が残っている。これ以外にはまとまった土器片なども見受けられず、埋壺としたものならば単独で使用したものと考えられる。周辺には30cmから50cmに達する大きさの石が多数あって、これらの石の隙間に横たわったような感じで検出された。この場所が深んでいるので、移動した可能性も考えられる。骨片なども検出されていない。

今回の調査で最も残りの良い土器の部類に入るが、復原するまでに至らなかった。

第5号埋壺 (Fig.11・PL.18)

これもE-27グリッドからの出土であるが、東壁の付近で一部はD-27グリッドにかかる。第2号埋壺の北3mの場所にあり、表土を取り除き2層に達した時点で確認した。

蜜柑の根が入り込んで全体が小破片に割れ、欠落した部分もある。一部掘り方を切ってしまったが、残った部分から見ると直径約45cmの円形に近い。すり鉢状に掘り込まれ、裏面は北西側でやや急で南東側は比較的ゆっくりとした掘り込みである。底部は北西側が深くなっている。2層上面から底部までの深さは35cmくらいある。この掘り方には安定を計るため、支えの石などは認められなかった。

中に詰まった土は、上部は小礫をまばらに含む締まりの少ない褐色土で、下部は地山の風化礫を含まない褐色土となっ

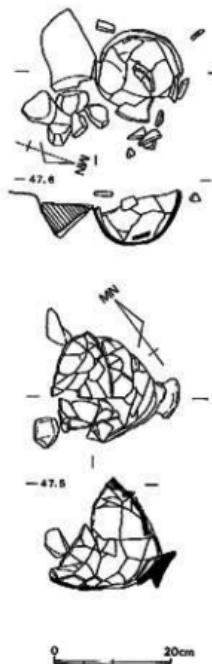


Fig.10 第3号・第4号埋壺実測図

ている。下部の土の中には、小さな炭化物が粒状にまばらに見られ、2cmほどの大きさのものもある。下にゆくほど土は縮まり、粘性が強くなる。

埋甕はほとんど直立して置かれているが、東側の下部は割れて外側にずれている。底部は最初からなかったものと思われるが、口縁部は後世の破壊によるものであろう。埋甕の現状は、上部で外側に傾き40cmほどとなっているが、復原すれば35cm内外であったろうと考えられる。現在の高さは31cmであるが、上下ともに欠失しているので原形や法量は知りえないし、単体で使用したかなどについても判断できない。

骨片その他の遺物は伴っていない。

以上のものその他にも埋甕との判断がむつかしい土器が出土したが、掘り方も認められず断定できなかつたために、単に土器として取り上げたものもある。

— 埋甕について —

長崎県下の縄文時代の甕棺墓の例はさほど多くはなく、島原半島などに数例が知られている。国見町の筏跡地で群集墓として確認され、島原市の礫石原遺跡や深江町の山の寺遺跡などである。長崎市の大村市で縄文晩期の甕棺墓が相次いで見つかった。大村市の黒丸

遺跡から検出された縄文晩期の粗製の甕棺が、県央地区での出土の初例となつたが、この遺跡は標高3mほどしかない扇状地の先端部に近い場所で、葛城遺跡とは遺跡のありようが異なっている。当然生活の様式とかについての考察も必要となろう。

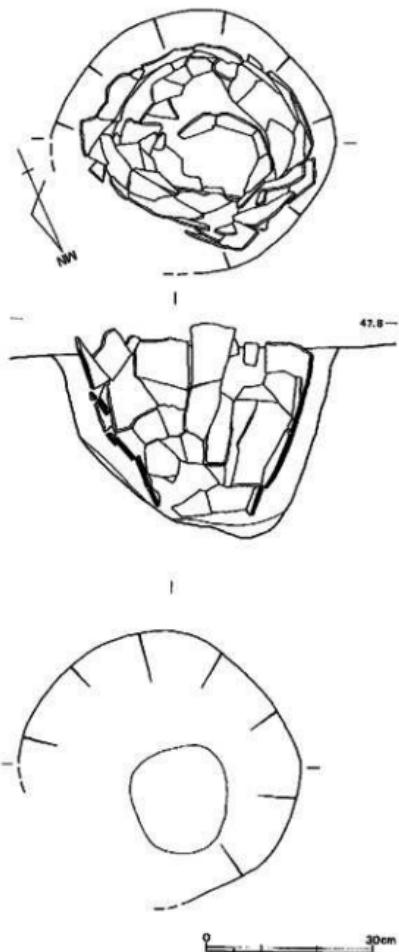


Fig. 11 第5号埋甕実測図

3. 炭焼窯 (Fig.12・PL.19)

炭焼窯の跡と考えられる遺構がF-23グリッドの北側で確認された。長軸を北西から南東に向いているが、北端部は農道によって切られている。隅丸の長方形で、全体的に底が平らに近い舟底形をしている。炭焼窯のほぼ角のところに間違いないという場所が判明したので、平面での規模の復原が可能となった。現在残っている面での掘り込みの規模は、上端部で長さ5.7m、底部で5.4mほどである。幅は中央部の上側で1.6m、底部で1.25m、広いところでは1.4mある。深さは掘り込み面から約0.2mである。

床面は北西部が12cmほど低くなってしまっており、約1/40の傾斜を持っている。また北側の壁面は南側に較べゆるやかになっている。上部の構造については、現状からは断言できない。

北西方向に向いて低くなっているのは、北西の季節風を受けやすいということや排水のことなどを考えて構築された結果だと思われる。

現在の作り方で、これらの窯は長与町では踏み付けと呼ばれているそうで、時代的には江戸時代後期より遡ることはないものと思われる。

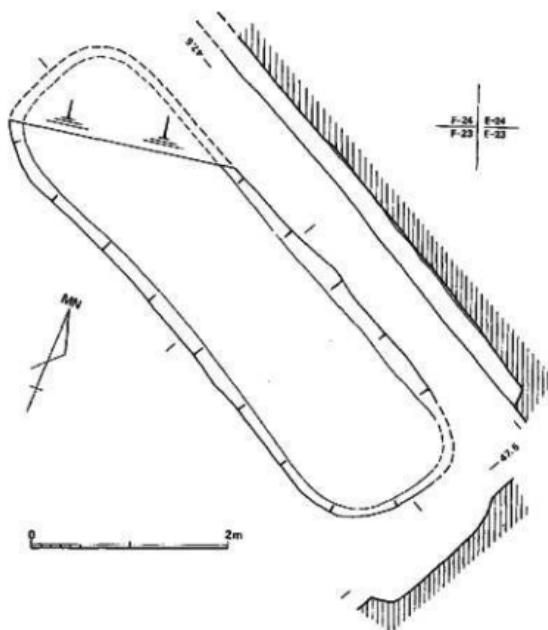


Fig. 12 炭焼窯実測図

III 出土遺物

葛城遺跡のA地点とB地点での遺物の出土の状況は、全くその趣を異にしている。

A地点では、2列から12列にかけて擾乱を受けた場所が多いこともあって、整層状態での遺物の出土状況はあまり確実なものではなかった。13列から18列の雜木林として残っていた場所からは、点数は少ないものの、石匙や黒曜石の剝片などの石器、組織痕文土器片などが出土している。低地となっている20列から23列にかけては、南東方向にD列付近に達する谷状に土が取られた場所であるが、弥生式土器片が検出されている。

B地点では、25列から29列にかけて調査を実施した。C列の一部から東側は高速道路の予定範囲外であり、J列から西は削られていたため、東西方向への遺跡の抜かりについては明言しがたい。この辺は造成されておらず、調査前から黒曜石の剝片や土器片などがかなり散布していた。遺物は表土層から認められ、II層の褐色土層からが特に多く出土した。III層上部まで遺物の出土が続き、埋甕の出土も確認された。B地点の遺物は1/20の大きさで平板図に点で記入し、高さの記録をして取り上げた。

1. 遺物の概要

葛城遺跡からは先土器時代から近世に至るまでの各時代、また各種の遺物が出土している。大きさは石器あるいは石を素材とした製品、土器や陶磁器類、その他の遺物に分けられる。

石器、あるいは石を素材とした製品としては、まず黒曜石を材料とした台形石器、台形様石器、ナイフ形石器、細石刃、石核や剝片などがある。また鋸齒鐵や剝片鐵などを含む石鐵も多く、スクレーパーのほか製品とする前の原石も出土している。サヌカイトを利用したものとしては、スクレーパーなどのほかポイントや石鐵、横長あるいは縦長の石匙がある。蛇紋岩や玄武岩の磨製石斧、石ノミがあり、時代が下っては滑石製石鍋の破片も出土している。また滑石製の鍤や砂岩製の鍤のほか、片岩を使った鍤と思われる遺物もあり、砥石も出土している。

土器や陶磁器類としては、埋甕として使用された繩文式土器のほか、中期・晚期の土器片、弥生式土器、土師器、須恵器、中世の青磁・白磁や染付などの輸入陶磁器、近世のものと考えられる唐津系の陶器や波佐見系の磁器など肥前系の陶磁器がある。

その他の遺物としては、土鍤や寛永通寶などが出土した。

以上のように数千年におよぶ長い時代範囲のなかで、各種の遺物が検出されたものの、その多くは表土あるいは擾乱層からのものである。葛城遺跡の代表的な遺構と遺物としてあげるならば、B地点の遺物の集中している包含層と、そこから検出された繩文時代晚期の埋甕であろうと考えられる。

以下、各遺物について述べる。

2. 石 器

ナイフ形石器 (Fig.13・PL.24・25)

各種のものが出土している。また大きさも大小さまざまである。1は不透明な灰黒色をした淀姫系の黒曜石製で、長さは4.9cm、幅1.6cmである。厚さは9.5mmを計る。

7・11・14も同じく淀姫系の黒曜石製で、8もその可能性が強い。6は最も小さく、長さは2.3cm、幅0.7cm、厚さ2.9mmである。全体にわたっていねいな調整が施されている。9は一部に自然面を残しているが、基部の両側にプランティングを施している。15は通有のものとは幅が広く形が異なるが、刃部が残りプランティングを施しているところから、ナイフ形石器の部類に入れた。不透明の灰色をした黒曜石製である。

A地点からは1・2・4・5・6・12・15が出土し、14以外のものがB地点からの出土で、数の上では7点と7点の同数となっている。また表土層や擾乱層からの出土が8点を数え、整層状況からの出土品はない。

台形石器・台形様石器 (Fig.14・1～4・PL.26)

4点が出土している。1はいわゆる百花台式の台形石器で、幅1.5cm、高さ1.1cm、厚さ3mmの小形のものである。底辺部に自然面を残している。2～4は大形の台形様石器で、いずれも古いバテナを持つ。黒曜石製で表面は割合ていねいに調整しているが、裏面には大きな剝離痕が残っている。2の長さ3.4cm、幅2.4cm、厚さ9mmを計る。3は先端部を欠失している。1はD-29グリッドから、2はG-26グリッドから、3はK-6グリッドからの出土で、4は表面採集品である。

刃器 (Fig.14・5～13・PL.26)

いずれも良質の黒曜石製であるが、12には部分的に小さな不純物が入っている。6は長さ1.9cm、幅1.1cm、一番厚いところで4mmほどある。12は細石刃で長さ1.6cm、幅0.6cm、厚さは約2mmである。

尖頭器 (Fig.14・14～19・PL.26)

6点とも安山岩製である。14は裏面に部分的に自然面を残している。大きく削ったあと側縁部から調整を加え、形を作り出しているが、ややいびつである。長さ6.8cm、幅3.2cm、厚さ1.7cmある。H-27グリッドからの出土である。15・16は先端部のみである。15はていねいで薄い作りであるが、16はやや剝離のしかたが荒い。17は裏側に大きな剝離の痕跡を残し、一部自然面も残っている。表面、裏面とともに側縁部からいねいに小さな剝離を加え形を整えていく。先端部を欠いているが、現在の長さ4.5cm、幅2.6cm、中央部での厚さ8.5mmを計る。断面の形は、やや片側が厚い柳葉形をしている。D-28グリッドからの出土である。18は先端部と基部を欠いている。17と同じくていねいな作りで、小さな剝離を加えて形を整えている。断面は厚さ8.2mmの柳葉形に仕上げている。H-6グリッドからの出土である。

19は細身で厚い作りであるが、これも先端部と基部を欠いている。側縁部から剝離を加えているが、剝離面が大きく17・18にくらべ雑な作りという感じを受ける。現存長3.5cmある。

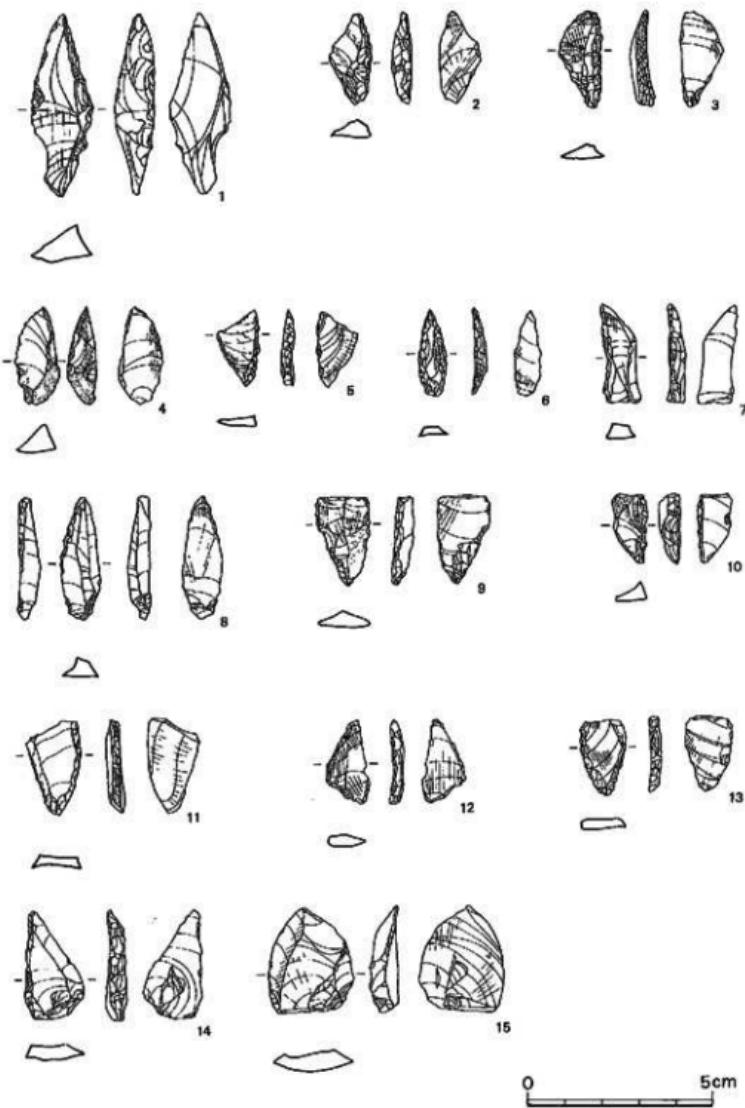


Fig. 13 出土石器実測図 (1)

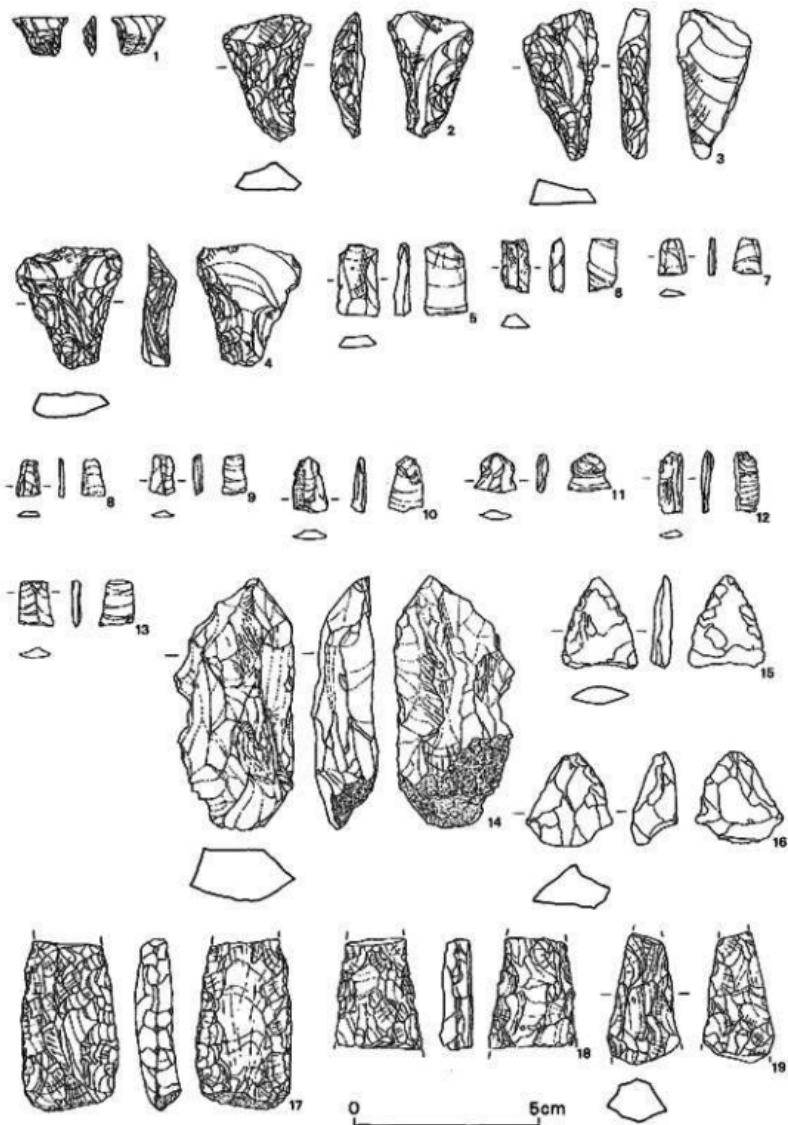


Fig. 14 出土石器实测图 (2)

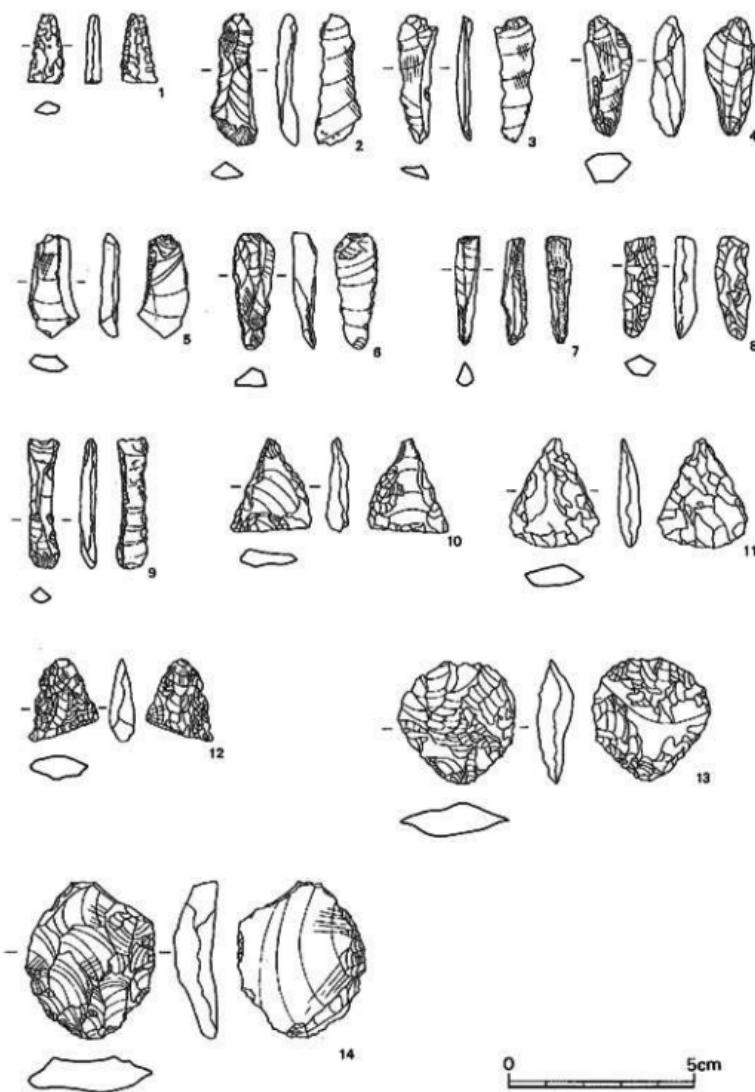


Fig. 15 出土石器実測図 (3)

その他の石器 (Fig.15・PL.27)

1～12の全てが黒曜石製である。1は長さ1.8cmほどある。両側から押圧剝離を加えた細身の製品である。2・3は細い剝片で、両側辺に加工がある。7は角張ったものの角に加工があって石錐の先端部とも考えられる。8も同じく石錐の先端部と思われるが、やや湾曲している。その点からは長脚の石錐の部分も考えられるが、長大な点から石錐の先端とした。9は厚さのある剝片で両側辺への加工の痕跡が著しい。10は剝片の三辺に加工を施していく、上方に伸びる突起の一部が残る。これは石錐のつまみの部分の可能性がある。11・12はラウンドスクリーパーである。11は大きな剝片を周辺から調整し、長径3.4cm、厚さ8mmほどに整形している。12も大きな剝片から作ったスクリーパーである。正面には大きな剝離痕を残している。長径4.2cmと短径3.4cmの不整形の橢円形に周辺から調整を施している。1は不透明の黒灰色の黒曜石で淀錠系のものと思われる。他は黒色の良質の黒曜石で、11には古いバテナが残っている。

剝片1 (Fig.16・PL.28)

いずれも黒曜石製の細長の剝片である。1は形が整っている。長さ3.0cm、幅1.5cmある。両側縁部に小さな刀こぼれが認められる。2も一側縁と下縁に裏面からの調整痕が残っている。全体的にバテナが古く、黒褐色を呈している。部分的に新しいキズも認められる。4は大きな剝片で、長さ5.3cm、幅2.2cmある。6は上下辺とともに自然面を残す。12は下部が折れている。両側縁部に入念な加工が施され、特に上端部付近で「つまみ」を意識したように作られている。15は上辺と表面に自然面を一部残しているが、両側辺には調整の痕跡が認められる。16の両側辺の調整もない。全てが黒色の良質な黒曜石製であるが、12・15・18・19のように不純物の入ったものも認められる。22・23は形が小さく薄い作りであるが、これも側縁部に加工の痕跡を残している。

剝片2 (Fig.17・PL.29)

瘦長の剝片が主であるが、一部変形のものもある。いずれのものにも調整痕があり、また使用による痕跡と考えられるものも認められる。1は厚い剝片で、表面に自然面を残すが、裏面には側縁からの加工の痕が残る。2はふ厚い剝片で、幅2.1cmに対して厚さ1.1cmほどある。一部に自然面を残している。裏面に押圧剝離を加え、厚さを減じている。3も両側縁部への調整がていねいである。11は上辺にわずかに自然面を残した剝片であるが、周辺から調整を加え円形に近く仕上げている。直径3.2cm、短径2.6cmで、厚さは7mmある。側縁部に加工があり、ラウンド・スクリーパー的なものと思われる。12は両側辺に凹ませた調整痕が残る。15は細く長い剝片で、長さ4.5cm、幅1.3cm、厚さは7mmある。19は大形のもので、長さ6.2cm、幅3.4cmある。上辺にわずかに自然面を残している。側縁部に調整の跡がある。全部が黒色を呈する良質の黒曜石である。



Fig. 16 出土石器實測圖 (4)

區域遺跡

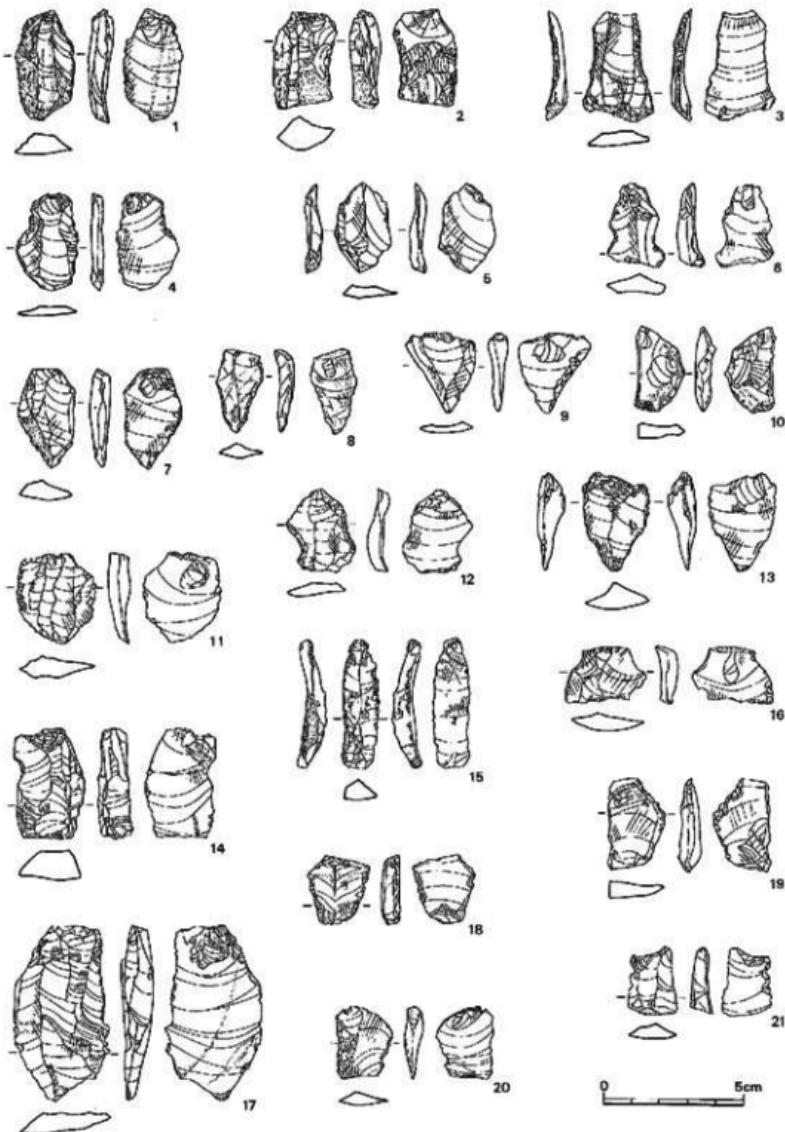


Fig. 17 出土石器實測圖 (5)



Fig. 18 出土石器実測図 (6)

不定形の剥片 (Fig.18・PL.30)

1は灰黒色をした良質の黒曜石を使用している。大形の剥片で、長さ7.2cm、幅3.6cm、厚さ1.4cmである。一部に自然面を残している。両側縁部と上辺に入念な調製痕がみられ、スクレーパーとして使用したものと考えられる。2は不整形な三角形をしているが、二辺にていねい

な調整を施している。9は黒灰色の墨蹠石であるが全面古いバテナが残っている。上辺以外は周辺から加工を施し調整している。ラウンドスクレーバーとして使用したものと考えられる。11の調整も9に似ていて、スクレーバーであろうと思われる。12も両側辺部にていねいな調整を施している。13は全面に古いバテナでおおわれた黒灰色の墨蹠石である。

不定形な剝片 (Fig.19・1~16・PL.31)

1・2・4・5は不純物の多く入った黒蹠石で、その他は比較的良質の黒蹠石の剝片である。11・12・16以外のものは、多少の差はあるが自然面が残っている。1~9とともに側縁部に調整が施されている。10は大形のもので、各辺が4cm内外の三角形に近い形である。厚さは1.2cmを計る。両側縁部と下辺に入念な調整痕が認められる。11~16とも側縁部に調整の痕が残っている。16は厚さが1.2cmと厚い作りである。

剝片 (Fig.20・PL.32)

不整形な剝片である。11以外はいずれも良質の黒蹠石で、11は黒灰色で縞が混じっている。どの剝片も一側辺部か他の辺にも調整の痕跡や、使用によって付いたと思われる痕跡が残っている。1・2には、使用による痕跡と思われるものが側縁部に残る。3は上辺部を中心に入念な調整が施されている。4~6も側縁部に調整痕がある。7は角礫であった原石の自然面を二面に残している。一側縁のみに調整の痕跡を残している。10は原石の表面部分を使用したものであるが、加工をした一側縁部に入念な調整を加えている。11は古いバテナを残しているが、調整はていねいである。

剝片 (Fig.21・PL.33)

いずれも不整形な剝片で、定形化したものはない。しかし最低一箇所以上、側縁部あるいは下辺部などに調整が施された痕跡が認められる。1には両側縁部に入念な調整の痕が残る。3はバテナが古く、部分的に新しいキズが付いている。7は角礫の原石を割ったもので、各辺が3cmほどの三角形を呈している。厚さが1.2cmあり、厚い。二辺に入念な調整のあとがある。10は横長の剝片で、一部に自然面を残している。下辺に入念な調整が加えられている。12は縦長の剝片を折って使用している。両側辺にプランティングが残され、その部分も含めてバテナが古い。何か他の石器の破損部分である可能性も考えられる。16は自然面を多く残した剝片で、一辺に調整を加えている。17は小円礫の石核である。古いバテナが残っている。18は黒色の緻密な安山岩で、下辺に調整を加えている。19は表面が黄灰色を呈しているが、黒色で緻密な安山岩で、一側辺のみを調整している。1から17までは良質の黒蹠石で、17は不透明な黒灰色で濃淡の縞が入っている。

スクレーバー (Fig.22・PL.34)

1は大形の剝片に刃部を付けたもので、上方と側縁部に自然面を残している。高さ2.7cm、幅5.4cm、最も厚いところで1.8cmを計る。黒色をした安山岩であるが、表面は風化して灰色を呈している。2 黒色の緻密な安山岩製であるが、表面は灰色がかっている。一側縁部を加



Fig. 19 出土石器実測図 (7)



Fig. 20 出土石器實測圖 (8)



Fig. 21 出土石器実測図 (9)

工し、刃部としている。高さ 5.2 cm、幅 3.5 cm、厚さ 8 mm である。3 黒色の安山岩であるが、表面は風化によって濃い灰色を呈している。大きな剝片に周辺から加工を施し刃部としている。4 三角形の鉈先状の形であるが、一側縁のみを刃部として加工している。5 形が小さく、長さ 3.9 cm、幅 2.9 cm、厚さ 9 mm である。安山岩の剝片の両側縁を刃部に加工している。6 青黒色をした安山岩の剝片に刃部を施している。特に下辺への入念な加工が認められる。7 黒色の黒曜石剝片であるが、バテナが古く、一見緻密な安山岩のようにも見える。一側縁と他の側縁の一部に加工を施している。長さ 3.8 cm、幅 2.4 cm、厚さ 8 mm である。8 長径 4.1 cm のやや円に近い形で、厚さは 1.3 cm を計る。上端の一辺を除き他は周辺部から加工を施して刃部としている。9 黒灰色の安山岩である。両側辺に加工を施している。10 黒色の安山岩であるが、風化のため表面は灰色を呈している。長さ 3.0 cm、幅 2.6 cm、厚さ 7 mm である。両側縁部に加工を施している。上部の辺は古い時期に折れたもののように、他の石器の破損品である可能性も残る。

石匙 (Fig.23・PL.35)

横型のもの、縱型のもの、大小のものなどが出土している。

横長のものとして 1～6、縱に長いものとして 7～10 があるが、8・9 はつまみの部分が大きく、通有のものとは異なる。また 10 も変形のものである。

1 高さ 3.9 cm、幅 8.9 cm、厚さは中央部で 4 mm とやや薄い。横長に割り取った安山岩の剝片に加工を施して鉈形している。2 黒灰色の黒曜石で、表面は風化のため灰色を呈している。片面に自然面を残した剝片を使用し、つまみと刃部を作っているがあまりていねいな作りではない。3 横長のものの変形で、一方の翼にあたる部分を欠いている。つまみは大きくて厚い。4 不透明な黒灰色の黒曜石製で、一面に自然面を残している。一部を欠いていて、現在の幅は 3.7 cm である。5 安山岩の剝片を使用しており、長楕円形の、一方の肩の部分に小さなつまみを付けている。6 これも安山岩製であるが、小さくてズングリとした感じを受ける。高さは 3.4 cm、厚さは 8 mm に近い。下辺ではなく横に伸びた先端部に加工を施して刃部を作り出している。7 高さ 7.0 cm、幅 4.2 cm の大きさで、下方の自然面に残る部分を刃部として加工している。8・9 はいわゆる石匙のつまみの形とは異なるが、大形の縱長のものにつまみの可能性も考えた。8 は安山岩、9 は黒灰色をした淀錦系の黒曜石製である。10 高さ 6.7 cm、幅は広い場所で 2.8 cm ある。黒色の緻密な安山岩であるが、表面は灰色を呈している。側辺と下辺に刃部を作り出している。

石斧 (Fig.24・1～7・PL.36)

1 は黄灰色に風化した蛇紋岩製の磨製石斧である。やや小形で、長さ 8.9 cm、幅 4.1 cm、厚さは 1.7 cm、重さは 76 g ある。丸味を持つ形に磨いてあるが、刃部の先端を欠いている。2 表面が黄灰色に風化しているが、これも蛇紋岩の石斧の部分と考えられる。丸く削いて仕上げているが、剝と刃部を欠いている。3 半分に割れ、一部を欠いているが、安山岩製の小形の

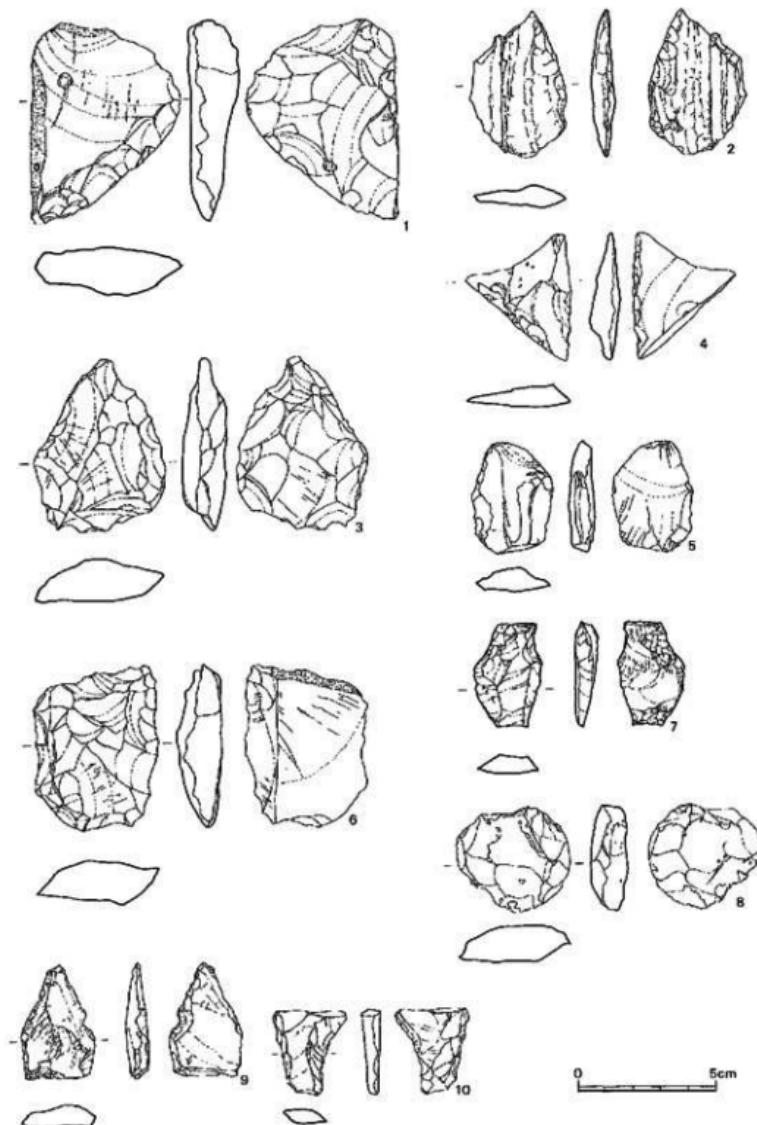


Fig. 22 出土石器実測図 (10)

磨製石斧である。片面は平らに近く、もう片方を盛り上げるように研いでいる。刀部は両面から研いでいるが、片面からが大きく、片刃と呼べる。大層ていねいに、前面にわたって研磨を加えている。長さ 6.4 cm、幅 2.7 cm、厚さは 9 mm ある。重さは現在部で 23 g ある。4 鈍刃石斧の刃部である。幅 6.1 cm のかなり鋭い刃を研ぎ出している。安山岩系の石材と思われる。5 も安山岩の石斧の刃部である。両刃であるが研磨の痕跡は両面と側邊に残されている。6 こ

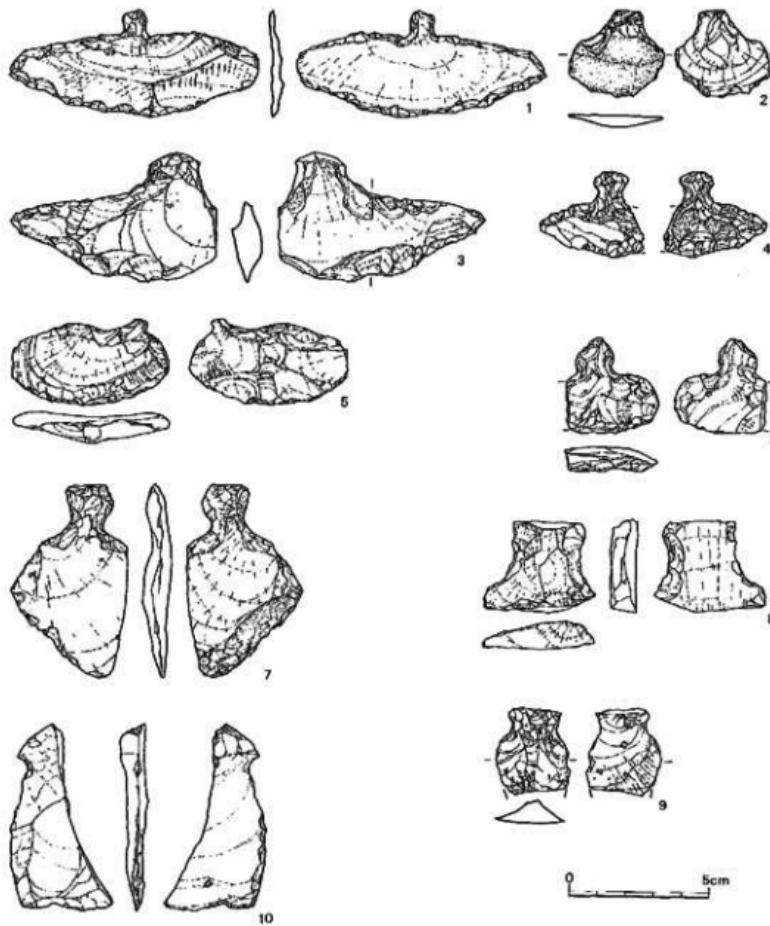


Fig. 23 出土石器実測図 (11)

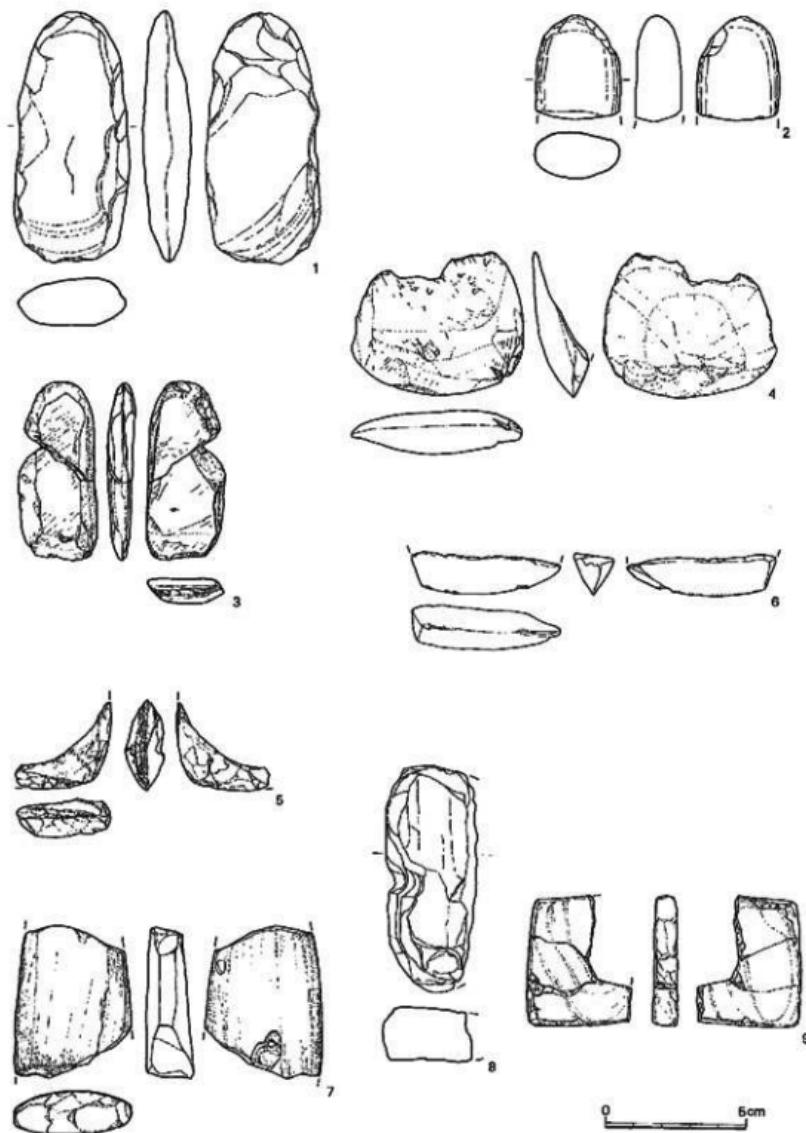


Fig. 24 出土石器実測図 (12)

れも石斧の刃先の部分である。刀部の両面と側刃部を研磨している。7 石斧の柄部で上端部と刃部を欠いている。砂岩質の石材で、風化のため研磨の痕跡は明瞭でない。側刃も研磨されている。平らな断面で厚さは1.4cmある。

石錐 (Fig.24・8・PL.36)

西彼杵半島産の結晶片岩製で作った石錐である。側刃に片側から加工して抉りをいれているがこれに対する部位を欠いている。長さ8.0cm、厚さは1.9cmあり、重さは68gある。

砾石 (Fig.24・9・PL.36)

砂岩製の砾石と思われる。三片に割れて出土した。幅は3.7cm、厚さ8mmある。

石鏃 (Fig.25~30・PL.37~46)

各種の石鏃が出土している。小破片になったもの、片足だけのものなど、図に示していないものもある。

Fig.25・1~13は、長脚のものと抉りが深いものを示した。1は長さ2.2cm、幅1.6cm、厚



Fig.25 出土石器実測図 (13)

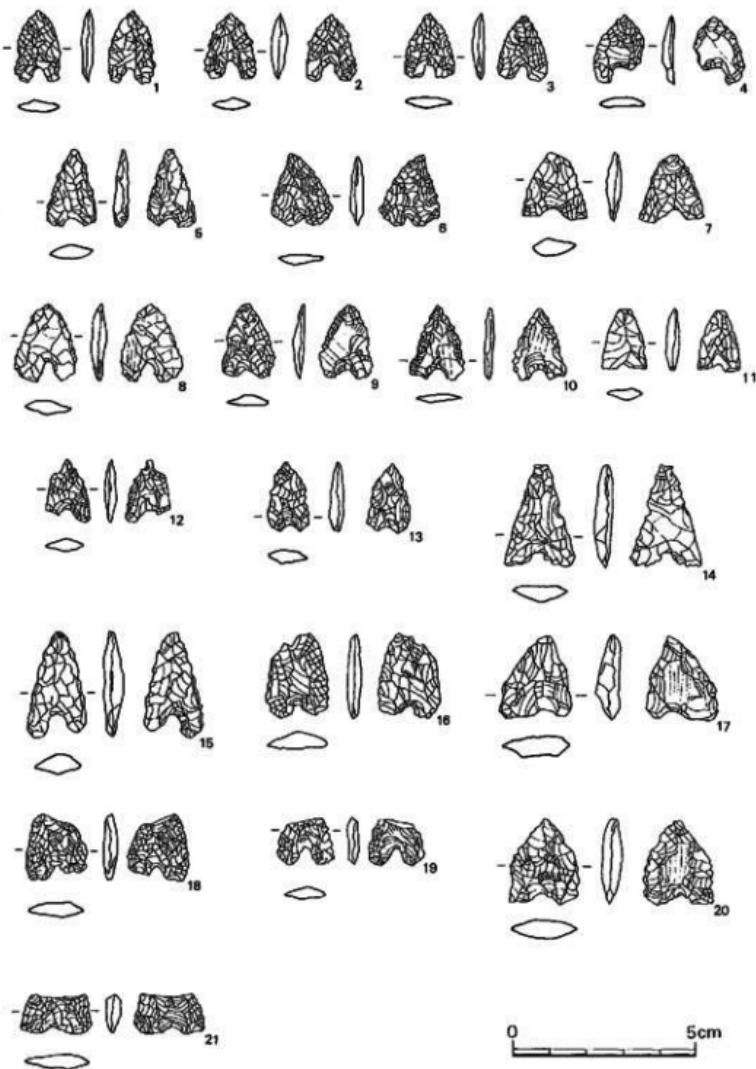


Fig. 26 出土石器実測図 (14)

さは約3.9mmほどある。2は小形で長さ1.5cm, 幅1.35cm, 厚さ2.9mmある。9は大きく、長さ3cm, 幅2.2cm, 厚さ5mmほどである。1~13ともにいねいに加工を施して形をきれいに仕上げている。全部黒曜石製であるが、5・6は不透明な灰色、9・12は透明な灰色を呈している。

石鎌 (Fig. 26・PL. 38~39)

いずれも基部に抉りを持つものである。全て黒曜石製であるが、5・7・8・14・15は淀姫系の灰黒色で不透明なものである。小さなものは2で、長さ1.8cm, 幅1.3cm, 厚さは4mmある。大きなものは15で、長さ2.8cm, 幅1.6cm, 厚さが5mmである。4・9・10・17・19は大きな剝離面を残している。20は局部磨製の石鎌である。

石鎌 (Fig. 27・PL. 40~41)

直線的な作りのものが多く、脚の先端部を鋭く作っている。抉りがやや深いものと、わずかに済入するものとがある。形も大小あって、大きな1の長さは3.0cm, 幅2.3cm, 厚さは4mmを計る。小さなものとしては13があり、長さは1.7cm, 幅1.4cm, 厚さは3mmである。1~12まで黒色の黒曜石であるが、3はやや灰色味をおびる。13~16はサスカイト製で、14は局部磨製の石鎌で表裏の面とも磨き痕が残っている。17は不透明な灰色の黒曜石製である。両側縁に小さな突起を作り出している。長さは2.55cm, 幅1.35cm, 厚さ4.5mmある。18はサスカイト製であるが、厚さが約2mmと薄い。19は小形の鋸齒状で、長さ・幅とともに1cmを少しこす程度である。厚さは4mmある。

石鎌 (Fig. 28・PL. 42~43)

三角形のもので、基部に明瞭な抉りを持たない。長さが幅にくらべ長いもの（4・5・10・20など）と、長さにくらべ幅の広いもの（12・15）がある。5は基部両側縁部を小さく突き出した形をしている。14は小形の局部磨製の石鎌である。不透明の灰色をした黒曜石で、表と裏の面に磨き痕が付いている。側縁部に、鋸齒状の突起の残る部分も認められる。長さ1.8cm, 幅は1cmをわずかにこす。厚さは2mmを計る。15は長さと幅がほぼ同じ1.5cmの大きさである。12・15はサスカイト、他は黒曜石である。7・9は灰色で透明、10・11・13・20・21は灰色で不透明の黒曜石で作っている。

石鎌 (Fig. 29・PL. 44~45)

抉りのあるものと直線的なものとがある。1は大形で長さ3.5cm, 幅2.6cm, 厚さ7mmある。調整のやや粗い製品である。3は形のととのったもので表、裏ともに大きな剝離面を残している。両側縁部と基部はいねいな調整を加えている。12・13も同じように裏面に大きな剝離の残るもので、周辺からいねいな加工を施している。14~18がいわゆる剝片鎌で、剝片の状態が全面的に残っている。15は大形のもので、片脚を欠いている。長さ3.7cm, 厚さ約4mmである。17は形のいびつな小形のものである。長さ1.7cm, 幅1.3cm, 厚さは3mmに満たない。2はサスカイトで、それ以外は全て黒曜石製である。1・5・8・11は不透明な灰色を呈している。他は良質の黒色の黒曜石である。

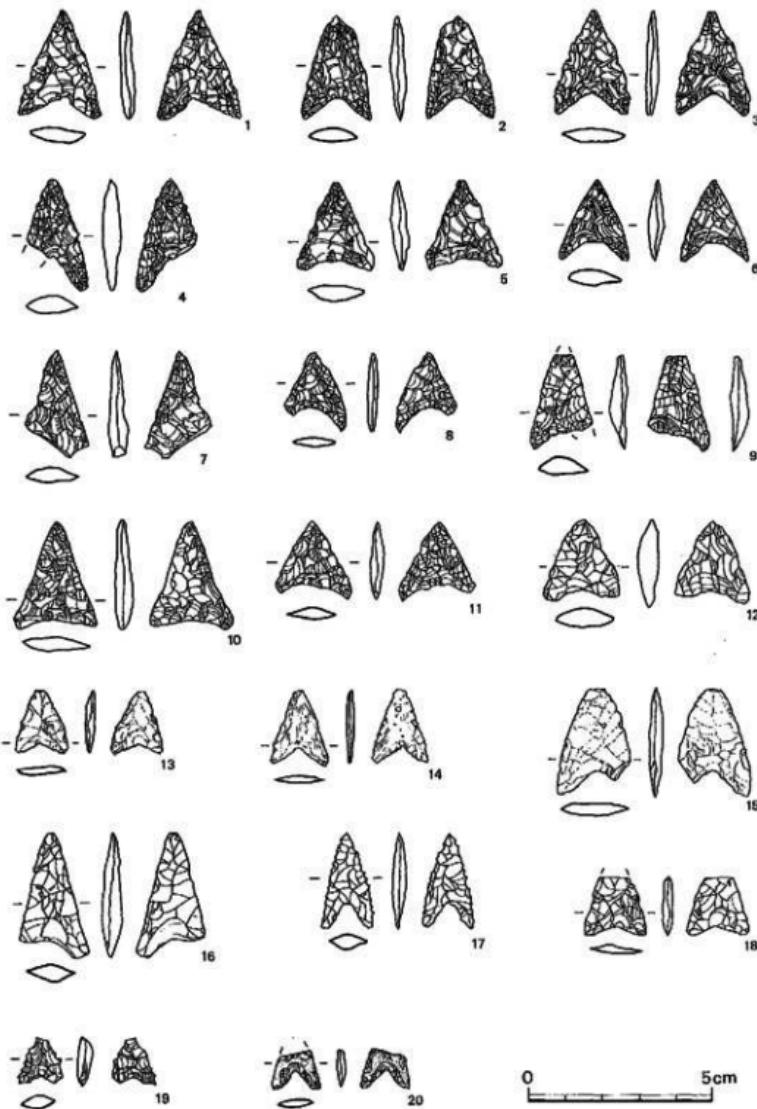


Fig. 27 出土石器実測図 (15)

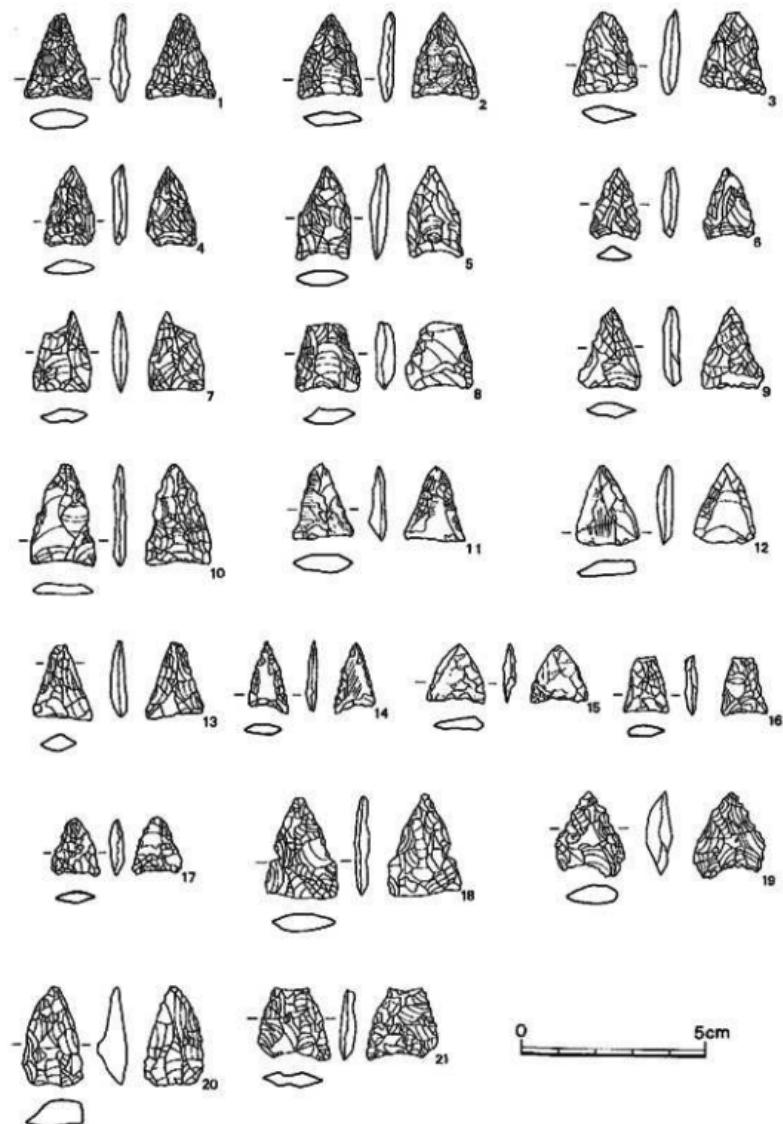


Fig. 28 出土石器實測圖 (16)

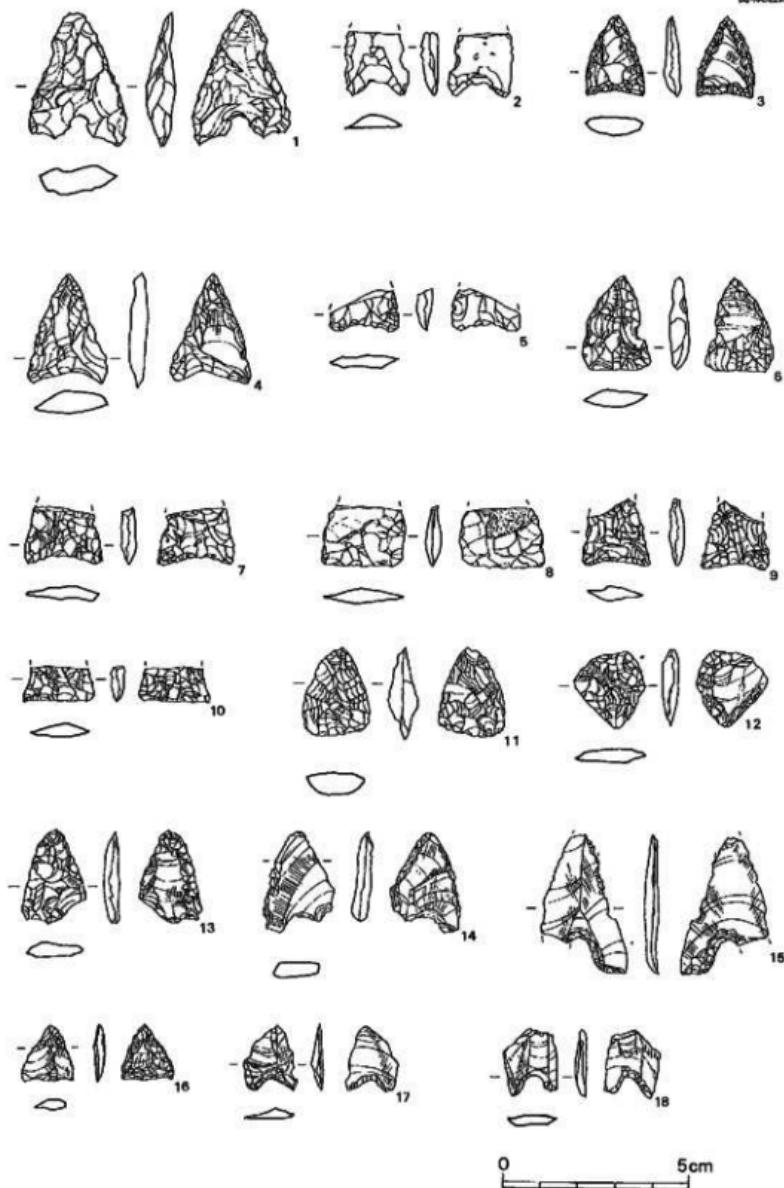


Fig. 29 出土石器実測図 (17)

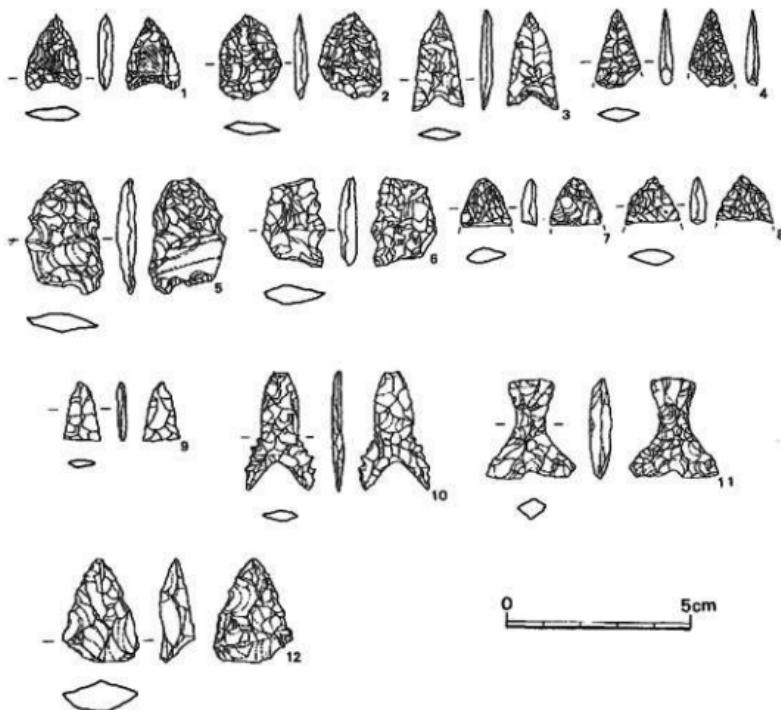


Fig. 30 出土石器実測図 (18)

石器 (Fig. 30・PL. 46)

1は小形の局部磨製石鎌で、長さ2cmと小さい。3は長方形に近い体部の先端を急に尖らせている。長さ2.7cm、幅1.3cm、厚さ3.5mm、灰色で不透明な黒曜石製である。10は長い胴体の下半分に、内側に湾曲しながら伸びる脚を持つ。脚の外側には歯齒鎌と同じような突起を作り出している。先端部を欠いているが、現存長3.2cm、胴の幅0.95cm、脚部の幅1.9cm、厚さは3mm程である。不透明な灰色の黒曜石製である。11は製作や使用の目的が不明な石器である。周辺から加工を施しているが、作り方は石鎌に通じるもののが認められる。撥形をしており、なかなかほどの一番厚い部分を狭く作り、片側は広く張り出させ、他方はわざかに広くしている。長さ2.7cm、幅は広い方で2.4cm、狭い方が1.2cmほどあり、厚さは約6mmである。墨灰色の半透明の黒曜石製である。12は厚さが9mmほどあり、尖頭器の可能性がある。不透明の濃い灰色をした黒曜石製である。

石核 (Fig. 31 · PL.47)

1・2ともに黒灰色の緻密な質の安山岩であるが、表面が風化して灰色を呈している。1は多方面からの敲打を加え剝片をねたものと思われる。ほとんど自然面を残していない。2も各方向から打撃を加えていて、一部に剝片を取った跡が残る。ほんの一部に自然面らしいものが認められる。

石鍋 (Fig. 31 · PL.48)

數十片の滑石製石鍋の破損品が出土している。いずれも小破片で、3・4より大きいものはほとんどない。また、形状の推測が可能なものもなく、図化に耐えられるものとして、3・4を挙げた。いずれも石鍋の鋸の部分であるが、3はその形状は不明である。胴部の厚さは1.3 cmあり、外側には黒い煤が付着している。G-27グリッドからの出土である。4は断面が三角形で胴部に接する部分での厚さ1.7 cmの鋸が付いている。胴体の厚さは1.9 cmある。煤の付着は認められない。破損後鋸に対して斜め方向に刃物で削られた痕跡が五回続けられている。加工して再使用の予定であったものが放棄されたものであろう。G-22グリッドから見つかった。

石錘 (Fig. 31 · PL.48)

5は砂岩製で黄褐色を呈している。長さ5.5 cmの両端を尖らせた卵形で幅3.05 cm、厚さ2.7 cmある。縱方向には、切り込み部の幅約5 mm、深さ3 mmほどの薬研掘りの溝を一周させている。ほぼ中央部で横方向にも溝をめぐらしているが、幅、深さともに縱方向にくらべて小さく浅い。途中で深さが1 mmに満たない部分もある。重さは49 gを計る。6は滑石製で、全面に削って加工した痕跡を残しているが、一部に自然の割れ面がある。青緑色を呈し、黄灰色の部分もある。石錘としたものが割れたものでないことは、割れ面から溝を切り込んでいることで明らかである。石鍋などの破損品を使用したものと思われる。長さ5.2 cm、幅3.0 cm、厚さは2 mmほどである。縱方向のみに薬研掘りに近い形の溝を切っているが、かなり粗雑な切り方をしている。上側に縦通しの穴を穿っているが直径は表側で6.5 mm、割れ面の残る方で5.6 mmある。いずれも葛城遺跡の北側部に近いI-28グリッドからの出土である。郡川に近く、川での漁に使用したものかも知れず、葛城堤ができたあとのものなら堤での使用も考えられる。

不明石製品 (Fig. 31 · PL.47)

上下ともに折れていて、元来の形状を知り得ない。灰白色をした泥岩あるいは微粒の砂岩という感じを受ける。上側の幅3.6 cm、厚さ1.65 cm、下側での幅4.3 cm、厚さ1.8 cmである。断面は板状をした長方形の、上側の両角を切り取った形をしている。上面が三面に分かれ全体で六面体となっている。各面ともに研いで仕上げられているが方向に統一性がない。鋸の歯のようなもので付いたと思われるきずも一部に残っている。重さは52.2 gを計る。砥石の可能性が強い。

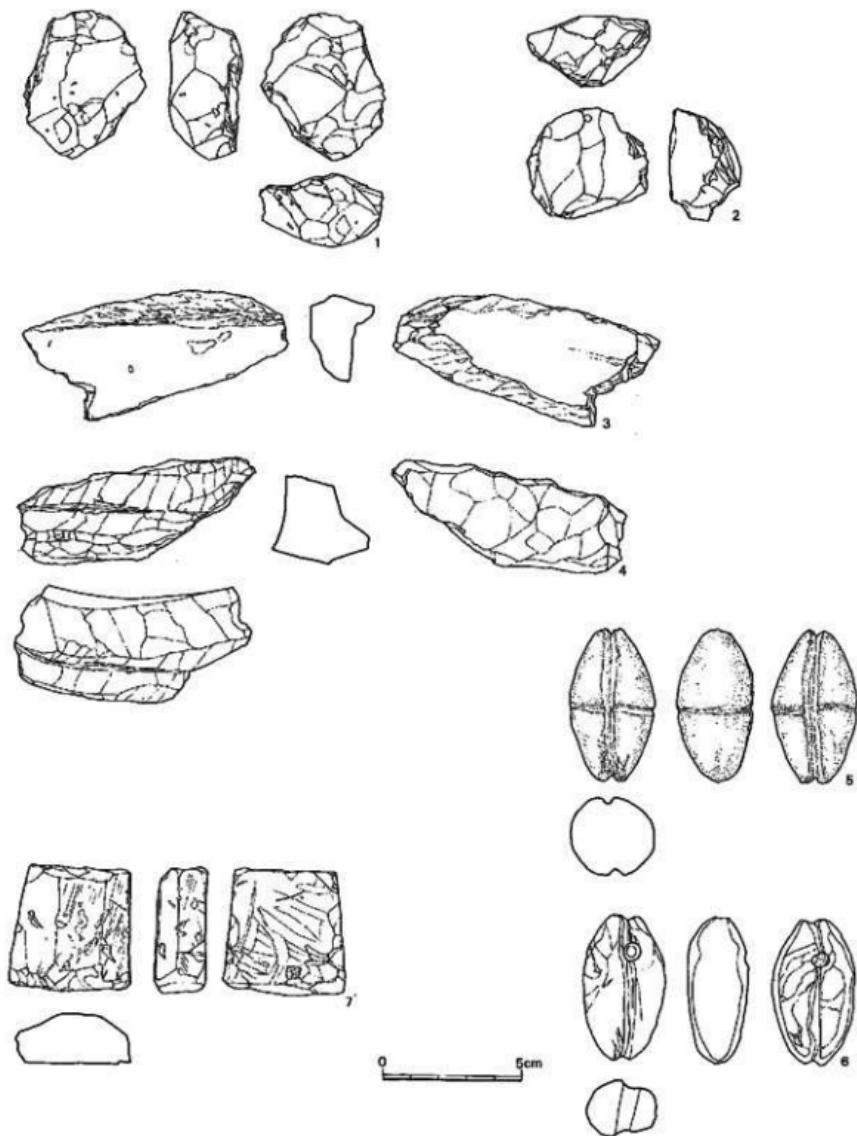


Fig. 31 出土石器實測圖 (19)

Tab. 1 出土石器計測表

| 図番号 | 遺物番号 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重さ (g) | 出土地区 | 石材 | 器種 | 備考 |
|---------|------|------------|-----------|-----------|------|-----|--------|-------|
| Fig. 13 | 1 | 4.9 | 1.7 | 5.2 | H-6 | 黒曜石 | ナイフ形石器 | |
| | 2 | 2.5 | 1.1 | 1.1 | H-6 | * | * | |
| | 3 | 2.6 | 1.2 | 1.3 | F-23 | * | * | |
| | 4 | 2.7 | 1.1 | 1.8 | I-8 | * | * | |
| | 5 | 2.1 | 1.1 | 0.6 | B-13 | * | * | |
| | 6 | 2.4 | 0.7 | 0.5 | I-10 | * | * | 小形 |
| | 7 | 2.7 | 1.0 | 1.2 | E-25 | * | * | |
| | 8 | 3.3 | 1.1 | 1.7 | E-25 | * | * | |
| | 9 | 2.4 | 1.4 | 1.4 | F-28 | * | * | |
| | 10 | 1.9 | 0.9 | 0.95 | I-25 | * | * | |
| | 11 | 2.5 | 1.5 | 1.2 | E-25 | * | * | 先端部欠け |
| | 12 | 2.3 | 1.2 | 0.7 | G-10 | * | * | |
| | 13 | 2.0 | 1.3 | 0.9 | I-29 | * | * | 先端部欠け |
| Fig. 14 | 14 | 2.9 | 1.6 | 2.2 | H | * | * | |
| | 15 | 2.9 | 2.3 | 4.3 | I-8 | * | * | |
| | 1 | 1.1 | 1.4 | 0.4 | D-29 | 黒曜石 | 台形石器 | |
| | 2 | 3.4 | 2.4 | 4.6 | G-25 | * | 台形様石器 | |
| | 3 | 4.1 | 2.0 | 6.1 | K-6 | * | * | |
| | 4 | 3.3 | 2.8 | 5.65 | H | * | * | |
| | 5 | 1.9 | 1.1 | 0.8 | D-21 | * | 刃器 | |
| | 6 | 1.4 | 0.7 | 0.4 | F-27 | * | * | |
| | 7 | 1.0 | 0.8 | 0.15 | G-29 | * | * | |
| | 8 | 1.0 | 0.6 | 0.1 | E-26 | * | * | |
| | 9 | 1.1 | 0.7 | 0.15 | H-6 | * | * | |
| | 10 | 1.5 | 0.9 | 0.3 | D-28 | * | * | |
| | 11 | 1.0 | 1.2 | 0.2 | D-28 | * | * | |
| | 12 | 1.7 | 0.6 | 0.15 | H | * | * | |
| | 13 | 1.2 | 1.0 | 0.2 | E-26 | * | * | |
| | 14 | 6.8 | 3.3 | 39.6 | H-27 | 安山岩 | 尖頭器 | |
| | 15 | 2.5 | 2.0 | 2.2 | G-25 | * | * | |
| | 16 | 2.5 | 2.4 | 4.7 | G-26 | * | * | |
| | 17 | 4.6 | 2.5 | 13.4 | D-28 | * | * | 先端部欠け |
| | 18 | 3.0 | 2.3 | 5.6 | H-6 | * | * | 中央部のみ |
| | 19 | 3.6 | 1.9 | 7.8 | G-28 | * | * | |

Tab. 2 出土石器計測表2

| 図番号 | 遺物番号 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重さ (g) | 出土地区 | 石材 | 器種 | 備考 |
|---------|------|------------|-----------|-----------|----------|-----|-----------------|----------|
| Fig. 15 | 1 | 1.8 | 0.9 | 0.7 | G-23 | 黒曜石 | | |
| | 2 | 3.5 | 1.1 | 1.5 | F-25 | タ | | |
| | 3 | 3.4 | 1.0 | 0.7 | O-27 | タ | | |
| | 4 | 3.2 | 1.3 | 3.2 | F-27 | タ | | |
| | 5 | 2.8 | 1.2 | 1.75 | F-25 | タ | | |
| | 6 | 3.1 | 1.1 | 1.7 | D-25 | タ | | |
| | 7 | 2.9 | 0.6 | 1.0 | H-28 | タ | 石錐 | |
| | 8 | 2.7 | 0.8 | 1.5 | D-27 | タ | * | |
| | 9 | 3.5 | 0.8 | 1.1 | I-25 | タ | * | |
| | 10 | 2.5 | 2.1 | 2.1 | D-27 | タ | 石錐 | |
| | 13 | 3.3 | 3.2 | 7.5 | G-26 | タ | グランジ・ スクレーパー | |
| | 14 | 4.2 | 3.5 | 13.9 | K-10 | タ | * | |
| | | | | | | | | |
| Fig. 25 | 1 | 2.7 | 1.7 | 0.9 | J-8 | 黒曜石 | 石錐 | |
| | 2 | 1.5 | 1.4 | 0.4 | F-27-H | タ | タ | |
| | 3 | 1.9 | 1.7 | 0.9 | D-21-619 | タ | タ | |
| | 4 | 2.1 | | 1.0 | G-8-H | タ | タ | 片脚を欠く |
| | 5 | 1.8 | | 0.4 | H-24-H | タ | タ | タ |
| | 6 | 2.2 | 1.9 | 1.4 | G-27 | タ | タ | |
| | 7 | 1.8 | | 0.7 | D-8 | タ | タ | 片脚・先端を欠く |
| | 8 | 1.4 | 1.4 | 0.5 | F-25 | タ | タ | 両端を欠く |
| | 9 | 3.0 | 2.2 | 2.6 | 全く不明 | タ | タ | |
| | 10 | 2.1 | 1.5 | 0.9 | F-13 | タ | タ | 先端を欠く |
| | 11 | 2.0 | 1.2 | 0.7 | D-21 | タ | タ | * |
| | 12 | 1.9 | 1.0 | 0.4 | G-26 | タ | タ | |
| | 13 | 3.1 | | 1.4 | H | タ | タ | |
| Fig. 26 | 1 | 2.0 | 1.2 | 0.7 | H | 黒曜石 | 石錐 | |
| | 2 | 1.9 | 1.4 | 0.7 | G-23 | タ | タ | |
| | 3 | 1.8 | 1.4 | 0.6 | E-25 | タ | タ | |
| | 4 | 1.8 | 1.3 | 0.55 | F-27 | タ | タ | 片脚を欠く |
| | 5 | 2.1 | 1.3 | 0.9 | E-25 | タ | タ | |
| | 6 | 1.9 | 1.7 | 0.8 | E-25 | タ | タ | |
| | 7 | 1.9 | 1.8 | 0.9 | H-26 | タ | タ | |
| | 8 | 2.3 | 1.7 | 1.0 | E-25 | タ | タ | |
| | 9 | 2.0 | 1.5 | 0.7 | I-29 | タ | タ | |
| | 10 | 2.0 | 1.5 | 0.5 | H-26 | タ | タ | |

Tab. 3 出土石器計測表3

| 図番号 | 遺物番号 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重さ (g) | 出土地区 | 石材 | 器種 | 備考 |
|---------|------|------------|-----------|-----------|------|-----|----|-------|
| Fig. 26 | 11 | 1.7 | 1.2 | 0.6 | D-21 | 黒曜石 | 石鏃 | |
| | 12 | 1.7 | 1.2 | 0.45 | D-26 | * | * | |
| | 13 | 1.9 | 1.1 | 0.7 | G-26 | * | * | |
| | 14 | 2.8 | 1.9 | 1.7 | G-26 | * | * | |
| | 15 | 2.9 | 1.6 | 1.9 | E-28 | * | * | |
| | 16 | 2.2 | 1.2 | 1.3 | I-25 | * | * | 先端を欠く |
| | 17 | 2.3 | 2.0 | 2.2 | E-26 | * | * | |
| | 18 | 1.8 | 1.7 | 1.0 | G-24 | * | * | 先端を欠く |
| | 19 | 1.2 | 1.5 | 0.55 | H-25 | * | * | |
| | 20 | 2.3 | 1.9 | 2.0 | H-27 | * | * | |
| | 21 | | 1.9 | 0.8 | D-25 | * | * | 先端を欠く |
| Fig. 27 | 1 | 3.0 | 2.3 | 1.6 | H | 黒曜石 | 石鏃 | |
| | 2 | 2.8 | 1.9 | 1.65 | I-26 | * | * | |
| | 3 | 2.8 | 2.1 | 1.3 | G-26 | * | * | |
| | 4 | 3.0 | | 1.4 | H-28 | * | * | |
| | 5 | 2.5 | 2.1 | 1.3 | G-13 | * | * | |
| | 6 | 2.2 | 1.9 | 0.95 | D-26 | * | * | |
| | 7 | 2.9 | 1.5 | 1.5 | I-12 | * | * | |
| | 8 | 2.1 | | 0.65 | F-24 | * | * | |
| | 9 | 2.6 | | 1.2 | D-26 | * | * | |
| | 10 | 3.0 | 2.3 | 1.4 | | * | * | |
| | 11 | 2.3 | | 0.95 | F-23 | * | * | |
| | 12 | 2.2 | 2.1 | 1.8 | M-8 | * | * | |
| | 13 | 1.7 | 1.4 | 0.7 | G-27 | 安山岩 | * | |
| | 14 | 2.0 | 1.6 | 0.6 | D-28 | * | * | |
| | 15 | 2.9 | | 2.05 | G-22 | * | * | |
| | 16 | 3.4 | | 2.2 | G-26 | * | * | |
| | 17 | 2.6 | 1.4 | 0.9 | H | 黒曜石 | * | |
| | 18 | | 1.7 | 0.6 | E-12 | 安山岩 | * | 先端を欠く |
| | 19 | 1.3 | 1.3 | 0.55 | D-29 | 黒曜石 | * | |
| | 20 | | 1.3 | 0.3 | E-22 | * | * | 先端を欠く |
| Fig. 29 | 1 | 3.5 | 2.6 | 4.75 | H | 黒曜石 | 石鏃 | |
| | 2 | 1.7 | 1.7 | 1.4 | H | 安山岩 | * | 先端を欠く |
| | 3 | 2.2 | 1.5 | 1.4 | D-28 | 黒曜石 | * | |
| | 4 | 3.0 | 2.2 | 3.45 | F-25 | * | * | |

Tab. 4 出土石器計測表4

| 図番号 | 遺物番号 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重さ (g) | 出土地区 | 石材 | 器種 | 備考 |
|---------|------|------------|-----------|-----------|------|-----|----|-------|
| Fig. 29 | 5 | 1.1 | 1.9 | 0.7 | G-26 | 黒曜石 | 石鏃 | 先端を欠く |
| | 6 | 2.5 | 1.8 | 2.2 | H-26 | * | * | |
| | 7 | 1.5 | 2.1 | 1.15 | H-25 | * | * | 先端を欠く |
| | 8 | 1.6 | 2.3 | 1.7 | F-28 | * | * | * |
| | 9 | 1.8 | 1.8 | 1.1 | G-27 | * | * | * |
| | 10 | 0.9 | 1.9 | 0.7 | D-6 | * | * | * |
| | 11 | 2.4 | 1.75 | 3.3 | I-6 | * | * | |
| | 12 | 2.1 | 1.9 | 1.5 | D-27 | * | * | |
| | 13 | 2.5 | 1.7 | 1.5 | F-25 | * | * | |
| | 14 | 2.7 | 1.9 | 1.9 | D-25 | * | * | |
| | 15 | 3.7 | | 2.1 | D-28 | * | * | |
| | 16 | 1.5 | 1.4 | 0.6 | D-26 | * | * | 先端を欠く |
| | 17 | 1.7 | 1.3 | 0.5 | F-22 | * | * | |
| | 18 | 1.8 | 1.4 | 0.6 | F-25 | * | * | |
| Fig. 28 | 1 | 2.3 | 1.9 | 1.1 | | 黒曜石 | 石鏃 | |
| | 2 | 2.3 | 1.7 | 1.3 | | * | * | |
| | 3 | 2.2 | 1.7 | 0.9 | C-26 | * | * | |
| | 4 | 2.1 | 1.3 | 0.9 | F-24 | * | * | |
| | 5 | 2.5 | 1.5 | 1.35 | D-26 | * | * | |
| | 6 | 1.9 | 1.3 | 0.85 | M-10 | * | * | |
| | 7 | 2.1 | 1.5 | 1.05 | I-21 | * | * | 先端を欠く |
| | 8 | 1.8 | 1.2 | 1.6 | H | * | * | * |
| | 9 | 2.2 | 1.2 | 1.4 | G-24 | * | * | |
| | 10 | 2.7 | 1.7 | 1.2 | D-24 | * | * | |
| | 11 | 2.0 | 1.1 | 1.0 | | * | * | |
| | 12 | 2.2 | 1.7 | 1.2 | B-27 | 安山岩 | * | |
| | 13 | 2.0 | 1.6 | 0.8 | G-25 | 黒曜石 | * | |
| | 14 | 1.9 | 1.1 | 0.45 | E-26 | * | * | |
| | 15 | 1.6 | 1.1 | 0.75 | D-24 | 安山岩 | * | |
| | 16 | 1.5 | 1.2 | 0.6 | H | 黒曜石 | * | |
| | 17 | 1.5 | 1.5 | 0.6 | K-8 | * | * | |
| | 18 | 2.8 | 1.9 | 1.7 | F-26 | * | * | |
| | 19 | 2.3 | 1.9 | 2.2 | G-8 | * | * | |
| | 20 | 2.7 | 1.6 | 2.0 | G-23 | * | * | |
| | 21 | | 1.9 | 1.3 | F-24 | * | * | |

Tab. 5 出土石器計測表5

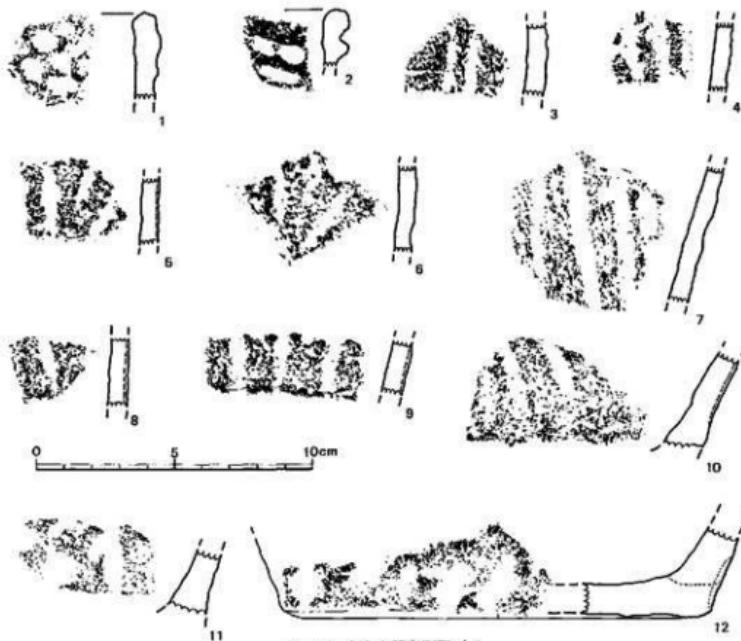


Fig. 32 出土土器実測図 (1)

3. 土 器 (Fig.32~42・PL.49~57)

縄文時代の中間の阿高式土器から、弥生式土器、土師器、須恵器などが出土している。このなかで大多数を占めるのは縄文時代晩期の土器である。しかし倉蔵の状況によるためか、残り具合がよくなく、表面が風化したり破損したものが多く、圓化できないものも多数あった。

縄文中期の土器 (Fig.32・PL.49)

太い凹線あるいは刺突文を施した阿高式土器である。1は口縁部で指先よりやや細い刺突文を施している。2も口縁部で口縁直下に横に深い凹線を走らせ、その中に刺突した穴が認められる。3~8は胴体の部分であるが、どの付近かは特定できない。いずれも縦方向に、比較的浅い凹線を施している。9~11は底部あるいは底部に近い場所のものである。9は底部のすぐ上、胴体の最下端のものである。10も底部に貼られた部分がはげたものと考えられる。11は縦原形15cmをこえる底部で、平底になるものである。刺突のもようが残っている。1~11とともに茶褐色から赤褐色を呈しているが、1・2はやや褐色味が強い。内面は黄褐色であるが、1・2は褐色味が強い。微細な滑石粉を混入していくとスベスベする。4mm大ほどの滑石片も認められる。焼成は良い。

雄崎式系統の土器 (Fig.33・Pl.50)

ミニチュア土器と考えられる、小形のものである。口縁径17.8cm、胴径15.1cm、高さ11.4cmを計る。口縁部を上から見ると変形の橢円形をしており、一箇所に渦巻き状の小さな突起が付けられている。口唇部の三箇所をわずかに張り出させ、浅い段を付けている。全体の平面での形状から、アワビを意識して作られたもののように見受けられる。弱く張り出した口縁直下の4箇所に複線のX字状の沈線での文様が施されている。胴部以下は無文で、底部はやや尖り気味の丸底となっている。内外とも風化が著しく、文様や成形の状況などはっきりしない点が多い。全体に茶褐色を呈し

ているが、内面は暗茶褐色となっている。黒く変色した部分も認められる。胎土に小砂粒を含むが良質である。焼成も良好である。

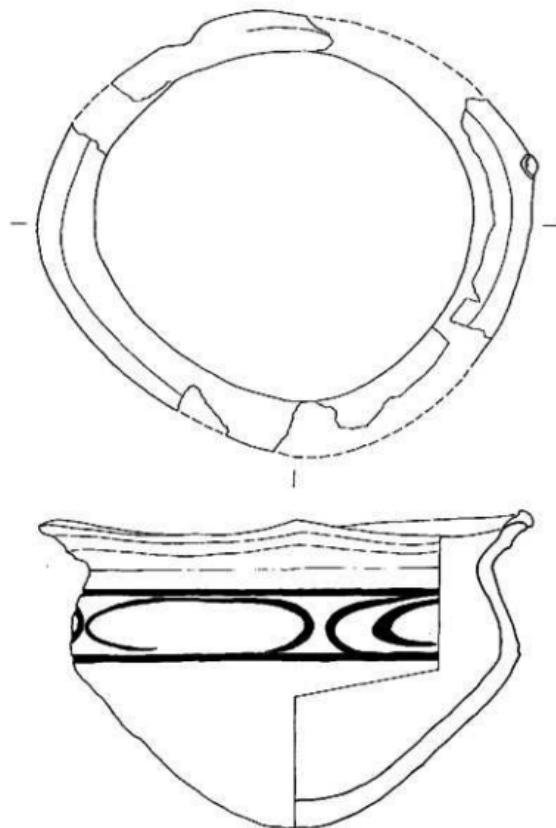


Fig. 33 出土土器実測図 (2)

晩期の土器① (Fig.34・PL.51)

いずれも縄文晩期の深鉢の口縁部と肩の部分である。4～6は横方向の条痕が明瞭に残っている。4は内面は磨いたような痕跡が残る。11～13、16～19もわずかに横方向への条痕と思われるものが残っている。14は先端部の尖る口縁を持ち、わずかに内側に湾曲している。5～8と17は暗茶褐色を呈し、他は茶褐色を呈している。1・3・11・12はやや赤味を混じる。胎土は小砂粒を含むが全体としては良い。焼成も普通である。

晩期の土器② (Fig.35・PL.52)

いずれも深鉢の部分で、口縁部とその近辺のものである。1はやや厚く、横方向に条痕が残る。胎土に片岩様のものが混入している。3も横方向への条痕があり、片岩様のものが認められる。4は先端部を外方向にわずかに折ったものである。5は器壁が薄く、シャープな感じを受ける。7は薄く、明瞭な条痕が横方向に残っている。9は左上から右下に、内面も同じ方向に条痕が付いている。10は横方向への、赤貝状のもので付けたと思われる条痕が明瞭に残っている。内面は横方向へナデあるいは磨いて仕上げたものと思われる。11は薄く作られ、条痕が横方向に残っている。12・頸部にあたり、やや厚い作りである。これも横方向への条痕を残している。内面は磨いて仕上げたものか。いずれも茶褐色を呈するが、9は外面が黒褐色をしている。胎土に小砂粒を含むが、いずれのものにも片岩様のものの微細な破片が混じっている。

組織痕紋土器 (Fig.36・PL.53)

数量的に多くはないが組織痕のある土器も出土している。ここでの出土遺物は全てが網目痕土器である。1・丸くおさめた口縁部が厚みを増しながら胴に続く。網目が施される場所から急に厚さを減じるのが組織土器の特徴で、この場合も例外ではない。外面は風化が進んでいる。胎土に小砂粒を含む。6は内面にスヌ状のものが付着している。1～7ともに黒褐色を呈している。胎土・焼成とともに良好であるが、風化が進み脆くなっている。

晩期の土器 (Fig.37・PL.53)

いずれも中鉢と考えられるものである。1・口縁部に中くぼみの長方形のつまみと、片切りの三角形状のつまみを持つ。復原口縁径15cm、肩部の直径も15cm、高さは10cm内外と推定される。器壁は薄く、研磨されていた可能性もあるが、表面の風化が進んで脆く、荒れていて断言できない。頸部から肩の部分までは丸味があり、肩より下は直線的な作りである。胎土は粗く石英の微細な粒が少量混じっている。色は黄褐色である。2・これも風化が進んでいて整形の状況などは不明である。黒褐色を呈するやや薄手の作りで、小さなりボン状のつまみを持つ。深鉢の口縁部であろう。胎土は良好であるが、焼成もよい。3・内側に折ったような口縁部で、厚くしてリボン状のつまみを付けている。器壁は薄く、研磨して仕上げた痕跡が認められる。胎土・焼成ともに良好である。4・粗製の深鉢の口縁部であろう。暗茶褐色を呈するが口縁端部に黒色のところがある。先端部を尖らせ気味に作り、内側は磨いたものようである。5・厚くて、先端を丸くおさめた口縁部である。外傾しつつ伸びた体部を内側に折り、ほぼ直立

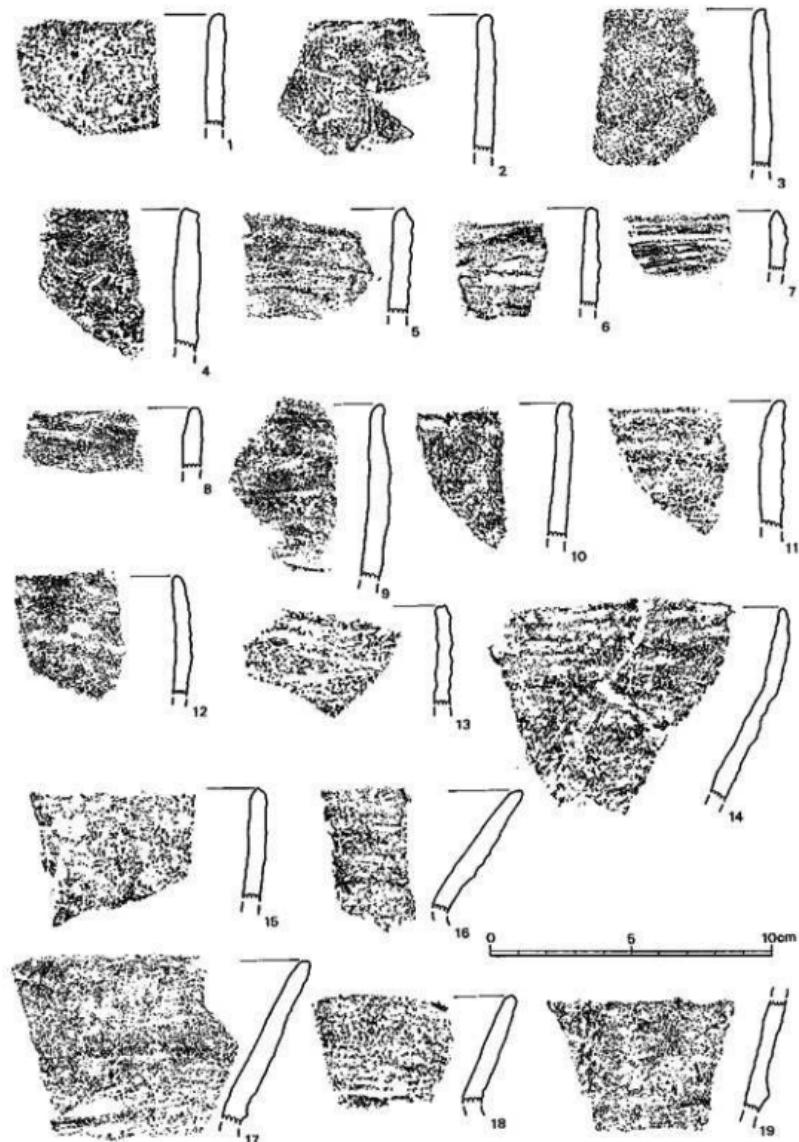


Fig. 34 出土土器實測圖 (3)

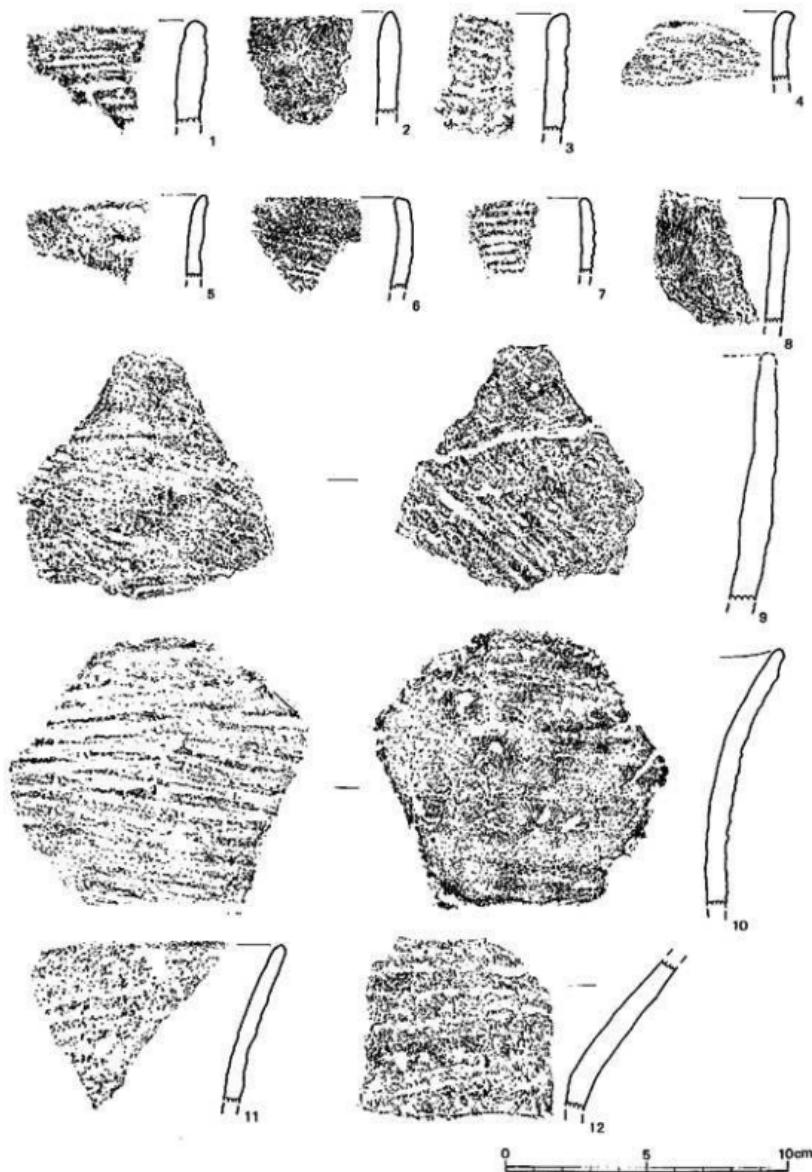


Fig. 35 出土土器實測圖 (4)

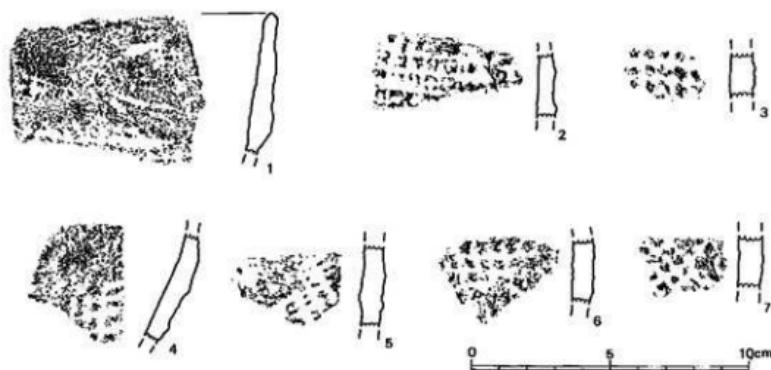


Fig. 36 出土土器実測図 (5)

させた形をしている。明るい茶褐色をしていて、胎土に小砂粒を含んでいる。焼成は良い。6も5と同じような形の口縁部である。色調・胎土も5に似ている。口縁部の外側に横方向に条痕がやや深く残されている。8・深鉢の胸部と思われる、薄手の作りで、草の芽状に両側に開く文様を貼り付けによって表している。淡い黄褐色を呈している。胎土・焼成とともに良い。9・粗製の深鉢の口縁部から頸部である。赤褐色を呈している。表面は風化が進み荒れているが、横方向に条痕様のものがわずかに認められる。内面には黒褐色の部分もある。復原口縁径は21cmほどである。胎土は良好で焼成も普通であったと思われる。10・深鉢の頸部であろう。表面は赤味がかった茶褐色、内面は淡い茶褐色を呈している。表面はナデて仕上げたもののように見える。胎土は小砂粒を含むが良好で、焼成も良い。表面はナデて仕上げたもののように見える。11・12も頸部である。11はやや薄く赤褐色を呈するが内側は黒褐色の部分もある。器表に横と斜め方向への条痕が残っている。胎土・焼成とともに良好である。12も色は11によく似るが内面は茶褐色を呈している。胎土・焼成ともに良い。

晩期の浅鉢 (Fig. 38・PL. 54)

1・ゆっくりと内湾しつつ伸びた体部を、一度内側に折ってから外反させ、先端部を上方につまみ出した形におきめている。薄くてシャープな感じを受ける。表面は風化を受けているが研磨の痕跡が認められる。口縁部の内側と外側にそれぞれ一条の沈線を巡らしている。11縫端部は4箇所でわずかに高まりを持たせ、その部分の外側に棒状のもので刺突した痕跡が残る。内外面ともに淡い茶褐色を呈している。胎土に微細な砂粒を含んでいる。焼成は良好である。復原口縁径は33cmほどになるものと思われる。2・精製の浅鉢土器で、肩から口縁部までが残

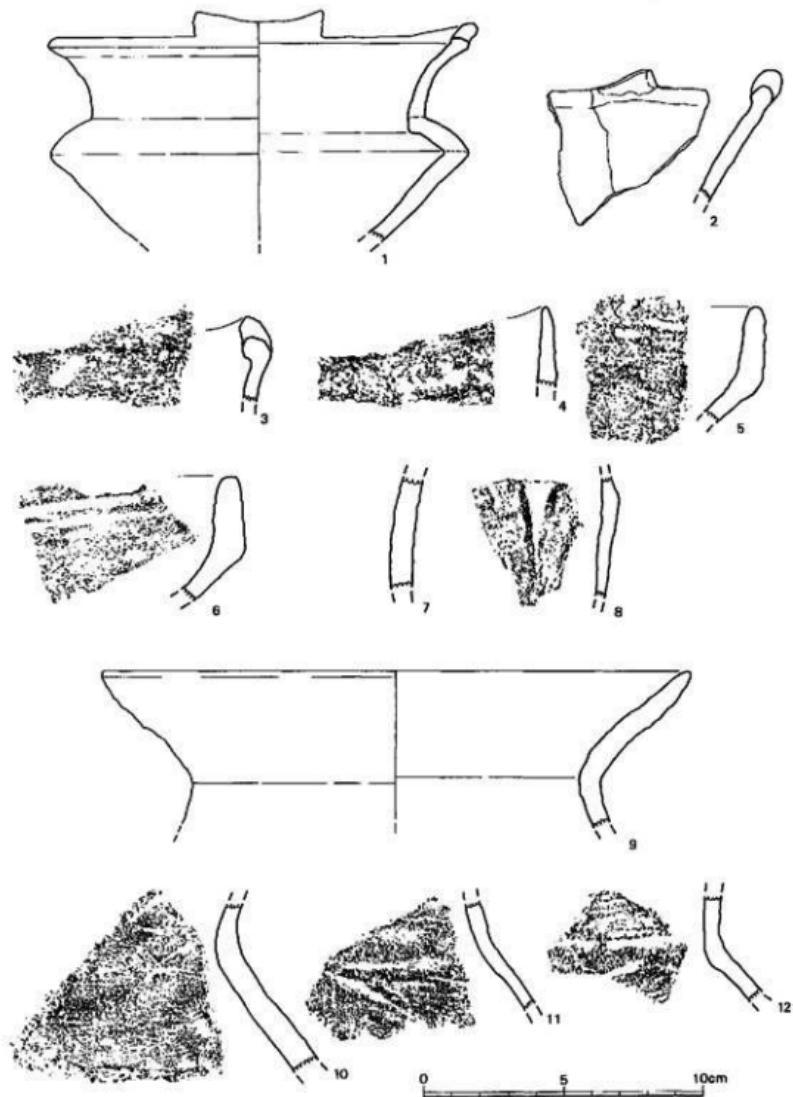


Fig. 37 出土土器実測図 (6)

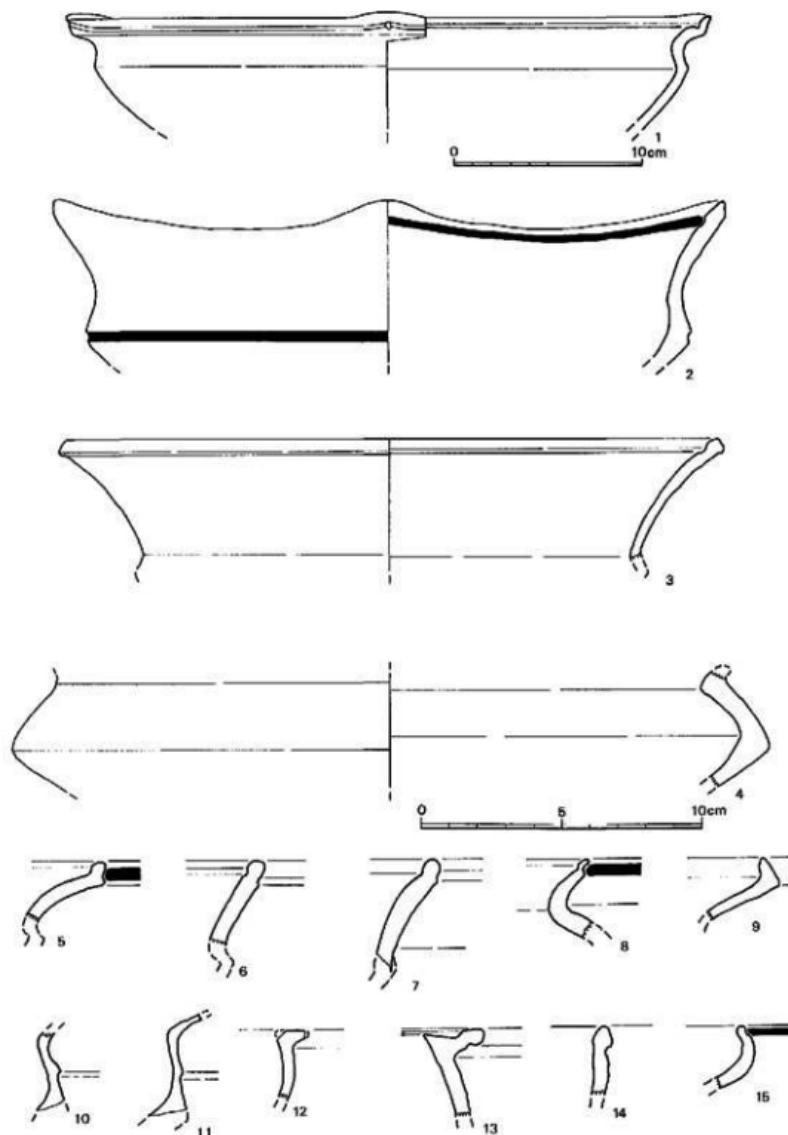


Fig. 38 出土土器実測図(7)

っている。口縁部の内面と肩の部分に沈線が施されている。内湾して伸びた体部を一度内側に折り、すぐ外側に向けて上方に伸ばした形である。「口縁先端部はやや尖らせている。また部分的に高まりを付け、波状口縁としている。推定口縁径は24cmほどである。淡い灰褐色を呈している。胎土にわずかに片岩と思われるものの混入が認められる。焼成は良好である。3・精製の浅鉢と思われるが器表が風化してやや荒れている。肩部より上部が出土したもので、全形には復し得ない。推定口縁径は24cm弱と思われる。薄手の作りで、外反しつつ伸びた口縁先端部を厚目に作り、その内側に浅くやや幅の広い沈線様のものを巡らしている。灰褐色を呈し、焼成は若干甘いように見受けられる。胎土は良好であるが、内外面とも摩耗が目立つ。4・かなり肩の張る半精製の浅鉢である。口縁部と体部以下を欠いていて全形は図示できない。やや厚い肩を持ち、直角以上に折り曲げている。復原した肩部での直径は27cmほどとなる。内外面とともにヘラ様のもので磨いて仕上げている。茶褐色を呈しているが、黒褐色の部分も認められる。胎土・焼成ともに良好である。5以下15まで、いずれも小破片となっていて大きさの図示は不可能であった。5・口縁部を上方に折った形のもので、内外面とも研磨を加えている。茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好で残りも良い。6・内外面ともわずかに風化したもので研磨のあとがよく残っている。口縁の先端部を丸くおさめ、口縁直下の内外面に細い沈線をそれぞれ一条ずつ巡らしている。茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良い。7・これも口縁先端部を丸くおさめたもので、残り具合も良好なものである。やや厚い口縁部の外側に沈線様のへこみが残り内側にも若干くぼみがある。淡い茶褐色を呈していて焼成は良好である。胎土は精良なものを使っており、砂粒がほとんど認められない。8・かなり急に外方に折られた口縁部で、先端部は薄く鋭く作られている。内側は沈線を意識したように段が付けられ、外側も沈線状のくぼみを巡らしている。内外面ともヘラ様のもので研磨している。淡い茶褐色を呈し、淡い灰褐色を呈した部分もある。胎土は良質のもので砂粒をほとんど含んでいない。焼成も良好である。9・外側に大きく開く形のもので、先端部をほぼ直角に折っている。薄い作りで、外側には研磨の痕跡が残るが、内側は風化のため明瞭ではない。淡い茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。10・肩部のうえに突帯状に段を持つ。半精製の浅鉢と考えられるが正確な器形を知り得ない。肩の部分はやや厚いが、口縁端部と体部は薄手の作りとなっている。茶褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成は良い。11・12によく似た器形になるものと思われるが、これも復原が不可能で、法量についても知り得ない。肩部から上に突帯状の厚みを持つことと折れ方などに似た部分があるが、胎土も頻の作り方で違いが認められる。これも薄い作りで胎土に小砂粒を含む。12・2cm×3cmほどの小破片となっていて、全体の器形、法量を知り得ない。ほぼ直立する体部に水平に外方に張り出す形の口縁部を持つ。全体的に薄手の作りで内外面ともに研磨された痕跡が残る。茶褐色を呈しているがやや灰色の混じる部分もある。良質の胎土で砂粒がほとんど認められない。焼成も良好である。13も12に似た形になるものと思われるが、12より大形のものとなる。口縁部の大きさも大きく、器壁も12の倍近くの厚さがある。口

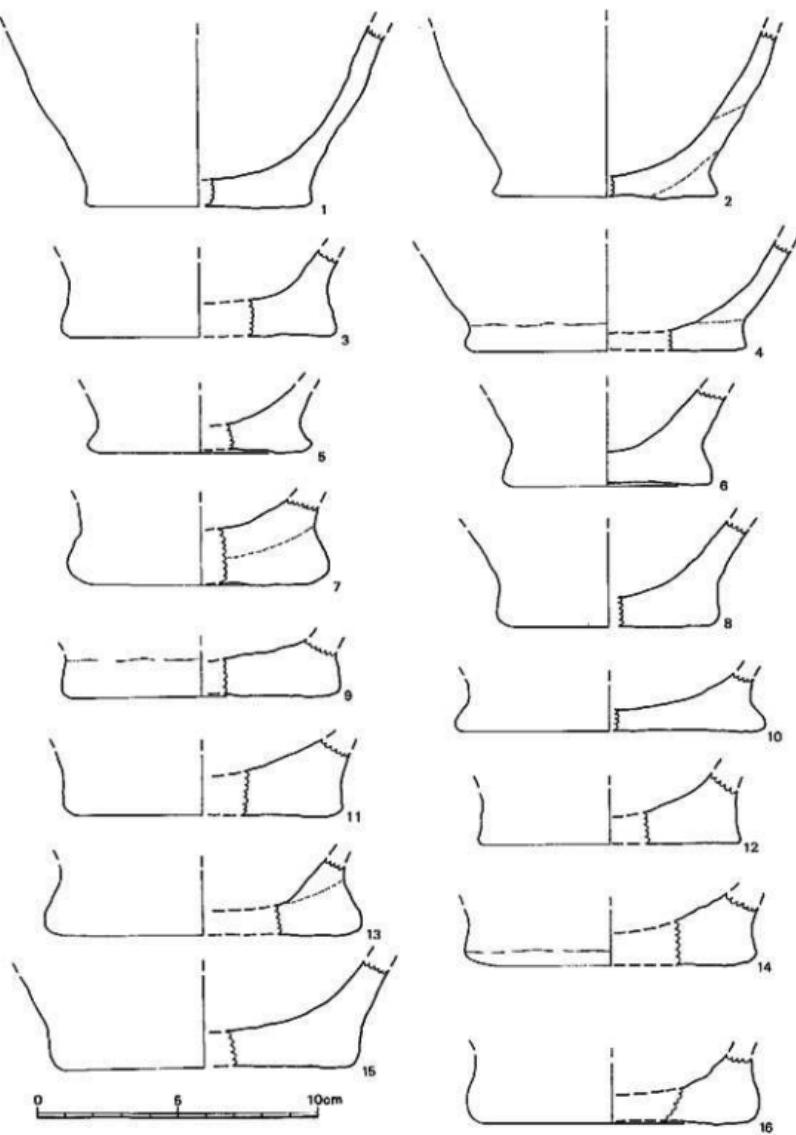


Fig. 39 出土土器实测图 (8)

縁部は、内側には鋭く尖らせておさめ、外側は四角に近くおさめている。上端の平坦面には沈線を意識したように一段高く仕上げている。淡い茶褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好である。14・これも小破片で内外面ともに風化が進んでいる。丸くおさめた口縁端部のすぐ下に、横方向への沈線を一条巡らせ、濃い茶褐色を呈している。胎土・焼成とともに良い。15・丸く内側に湾曲した形のもので、先端を丸く小さくおさめている。外側の口縁端部に浅い沈線を一条巡らしている。淡い茶褐色で、内側には灰褐色の部分もある。胎土・焼成とともに良好である。

晚期土器の底部 (Fig.39・1~16・PL.55)

いずれも縄文晚期の深鉢の底部である。胴より上部に続くものはない。1・底径 8.2 cm、現在 6 cm ほどの高さが残っている。風化が進んでいて脆く、調整の方法などについては明らかではない。外面は明るい赤褐色を呈している。胎土はかなり粗く、石英の微粒が混じる。焼成は普通である。2・底の外側が小さく外に張り出す形で、丸味を持つ胴体下半部に接続する。底径 8 cm ほどである。ヘラ状のものでナデで調整した痕跡が認められる。内面は赤褐色、外面は橙色を呈している。胎土に微細な砂粒を含んでいる。焼成はややあまいか。3・破片からの復原で、底径 10 cm ほどになるものと思われる。風化して器面が流れ、調整については不明である。赤味がかった茶褐色を呈する。胎土に小砂粒を含む。焼成は普通である。4・あまり厚くない底部で、復原底径は約 10 cm と思われる。ヘラ様のもので内外面ともにナデ付けたような痕跡を残している。内面は黒褐色、外面は赤味の混じった茶褐色を呈している。胎土・焼成とともに良好である。5・底径 8 cm ほどの小形のもので、これも薄く仕上げている。茶褐色を呈し、胎土に砂粒が多い。焼成は良好である。6・これも小形の底部で、きれいに平らになっている。赤褐色を呈している。胎土に砂粒を含むが焼成は良好である。7・厚い底部で、直径は 9 cm ほどに復原できる。胎土・焼成とともに良好である。8・直徑 8 cm ほどの底部で、やや薄手の胴体に統いている。淡い茶褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好である。9・小破片からの復原で、直徑についての確信はない。薄くて平らな底部で、赤味の混じる茶褐色をしている。胎土に小砂粒を含むが焼成は良好である。10・薄くて平らな底部で、一番底が外方に張り出す形である。内面にナデで仕上げたような痕跡を残している。濃い茶褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好である。11・厚い作りの、濃い赤褐色を呈したものである。胎土・焼成とともに良好である。12・小破片からの復原である。直徑 9.4 cm ほどになるものと思われる。外面は濃い茶褐色を呈している。胎土に小砂粒をかなり含んでいるが、焼成は良い。13・これも厚手の底部で、直徑 9.4 cm に復原したが確定的な値ではない。明るい茶褐色を呈しているが、赤味の強い部分もある。やや薄めの胴体に統くものと考えられる。胎土に小砂粒を含むが焼成は良好である。14・淡い茶褐色を呈した底部である。内面はナデで仕上げたもののように思われる。胎土・焼成とともに良好である。15・半分ほど残っている。底部 11 cm を計る。内面は風化が進んで調整痕跡がよく残っていない。外面は条痕のあとをナデで仕上げたものであろう。赤褐色を呈しているが、断面の部分に黒褐色を呈するところも認められる。胎土に石

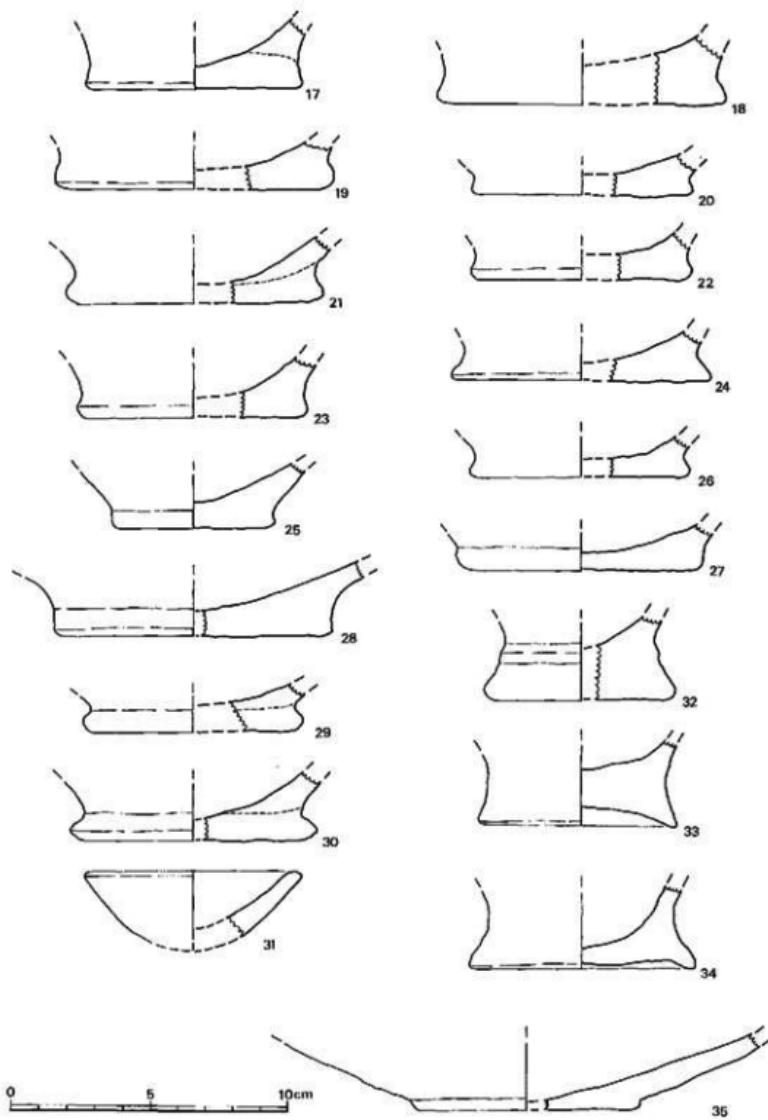


Fig. 40 出土土器実測図 (9)

英の小砂粒が混じるが、焼成は良好である。16・小破片から復原した。底径は10.4cm内外になるものと考えられる。赤味の強い茶褐色を呈している。内面なナデで仕上げたような痕跡が残る。胎土に片岩や石英の微細な粒が混じっている。焼成は良好である。

底部② (Fig.40・PL.55)

17・薄くて平らな底部であるが、これも破片からの復原である。底部の直徑は8cm弱になるものと考えられる。内面はナデで仕上げたような痕跡があるが、内外面ともに風化が進んで荒れているため断言はしがたい。外面は濃い茶褐色、内面は灰褐色を呈している。胎土に小砂粒を含むが焼成は良好である。18・厚い底部で、1.6cmほどの厚さを持つ。若干外側に張り出す形で、濃い茶褐色を呈している。外面下部と内面はナデで仕上げたものと思われる。胎土に雲母片岩や石英の微細な粒が混じっている。焼成は良い。19・やや薄手の底部で、直徑10.2cmに復原どきる。外面は横方向にナデで仕上げた痕跡を持つが、内面は風化が進んで調整については明らかではない。茶褐色を呈し、胎土に雲母片岩の微細粒をかなり多量に混じている。焼成は良好。20・底部の端が丸く外側に突き出た形をしている。これも中央部はかなり薄くなるものと思われる。直徑8cmほどに復原しているが、小破片からの復原であり多少の誤差は生じるものと思われる。外面に粘土をしばり付けたような痕跡がある。内面はナデで仕上げたように見受けられる。茶褐色を呈している。胎土に小砂粒や雲母片岩の微細な粒が混じっている。焼成は良好である。21・これも薄い作りで、かなり外方に傾いた削部へ続いている。別の最も下の部分に粘土を押さえ付けた痕が残り、内面はナデで仕上げている。外面は明るい茶褐色、内面は淡い茶褐色を呈している。胎土に2~3mmほどの砂粒を含んでいる。焼成は良好。22・直徑8cmに満たない底部で、薄い作り方をしている。胎土に石英粒が混じる。茶褐色を呈し、焼成は良い。23・8cm強に復原しているが、この直徑は確定的なものではない。器表が荒れているので調整については不明な点が多い。全体として淡い茶褐色をしており、胎土に小砂粒を含む。焼成は良い。24・半分近くが残っている。直徑9.5cmに復原し得た。外方にかなり急な張り出しがあり、中央部はやや薄くなっている。外面は明るい茶褐色で、内面は灰褐色を呈している。内面はナデで仕上げているが、外面は荒れて調整の痕跡が認められない。胎土に石英粒が混じる。焼成は良い。25・底部の全体が残っている。直徑は6cmと小形のもので、底の中央部は薄手である。体部もかなり薄くなるものと考えられる。淡い茶褐色を呈し、黒褐色の部分も認められる。胎土に片岩や石英粒などが混じっている。調整については良くわからぬが、焼成は良好である。26・小破片からの復原で、直徑8cmほどになるものである。やや外方に張り出し、端部を丸くおさめている。底部の中央はかなり薄くなる。茶褐色を呈し、やや粗い胎土に片岩の粒などが混じっている。焼成は良好である。27・これも薄い底部で、直徑は9cmに復原できた。内面にナデの痕跡が残るが、外面は風化して荒れていて判然としない。茶褐色を呈しているが、内面は灰褐色から黒色を呈している。胎土に石英粒を混じえている。

焼成は良い。28・半分ほどが出土した。かなり広がって胴体に続く形で、大きなものになりそうである。底の直径は10cmを計る。内面はナデて仕上げ、外面も条痕のあとにナデて調整したよう見える。赤味がかった茶褐色をしているが、黒変した部分もある。石英粒などの小砂粒を含んだ胎土で、焼成は良好である。29・小破片からの復原で、8cmほどの底部として復原している。外側に張り出しを持ち、先端部を丸くおさめた形である。茶褐色で胎土・焼成ともに良い。30・外方に張り出した底部で、復原した直径は9cmほどである。体部と底部の境の部分に、粘土の垂ぎ目と思われるヒビ割れが残っている。淡い茶褐色を呈し、内面はナデて仕上げた痕跡が残る。胎土に小砂粒を含み、焼成は普通である。31・丸底になるものと思われるが、中央部を欠失していくで定かではない。内外面ともナデて仕上げたものと考えられる。ミニチュア土器と考えられ、直径8cmの小形品で、茶褐色を呈している。比較的緻密な胎土で、焼成は良い。32・底部と体部の境付近がふくらみ、外方に開いた端部は丸くおさめている。直径は7cmくらいになるもので、厚い底部である。赤褐色を呈しているが、風化が進んで調整痕をとどめていない。胎土に石英粒を含む。焼成は良好である。33・底の全部が残っていた。直径6.9cmを計る。上げ底で、外方への張り出しあはやや鋭い。薄い体部に続くものと思われる。赤褐色を呈し、胎土に小砂粒を多く含む。焼成は良い。34・これも上げ底であるが33ほどではない。外下方へ張り出しを持ち、端部をやや鋭くしている。指でつまんで引き出したものと考えられる。底は薄く、体部も薄いものと思われる。外面は横方向へナデて仕上げ、内部には条痕のような文様が認められる。外面は茶褐色を呈し、内面は淡い茶褐色を呈している。胎土に小砂粒を含むが、焼成は良好である。35・中央部のかなり薄い底部で、直径8cmほどに復原できる。内外面とも風化して艶く、調整の痕跡は判然としない。暗茶褐色を呈するが黒褐色の部分も認められる。胎土に小砂粒をかなり含んでいる。焼成は普通である。

弥生式土器 (Fig.41・PL.56)

数量的には多くはない。またいずれも破片となって出土したため全体の形や法量が確実に知れるものもない。1は竈の口縁部で、外方に伸びる口縁端部を一度肥厚させ、先端部はやや細く丸くおさめている。くびれた頸部から大きく丸く、胴の張り出す形になるものであろう。復原口縁径約15cm、胴径は30cmに近い大きさになるものと思われる。全体に明るく淡い茶褐色を呈している。胎土に小砂粒を含む。焼成は普通。H-25グリッドからの出土である。2・口縁部であるが、頸部以下を欠失していく全形を知り得ない。1に似た形の壺になるものと考えられる。鈎状のもので上側が平坦となり、先端部は細く、やや鋭い感じに仕上げている。全体をナデて仕上げたような痕跡がわずかに残るが、表面の風化のせいで明確には断じ得ない。淡い茶褐色を呈し、胎土に小砂粒を含んでいる。焼成は普通である。D-24グリッドから出土した。3・外方に開く口縁部で、先端部を丸くおさめている。3cm×3cmほどの小破片で、全形や大きさを復原できない。外面は縱方向にハケ目が残り、内面はナデて仕上げている。外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈している。胎土・焼成とともに良好である。D-22グリッドからの出土

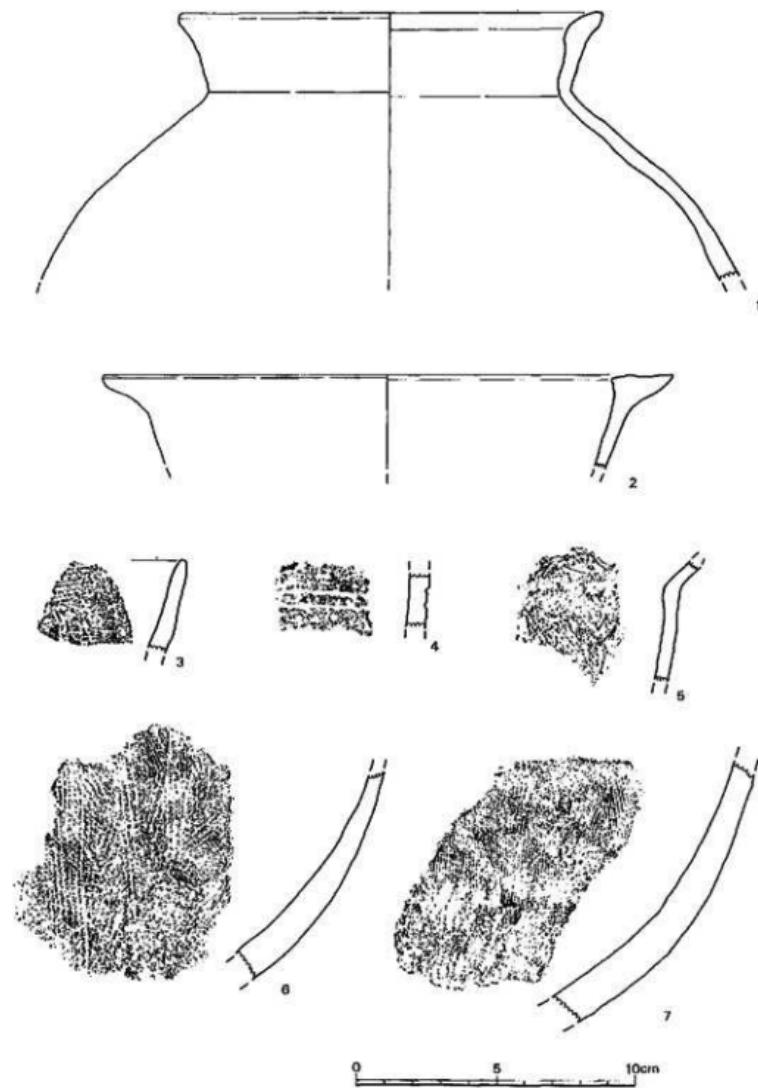


Fig. 41 出土土器实测图 (10)

である。4・器種や部位について判断できない。細い沈線を二条巡らしている。淡い茶褐色を呈し、胎土に小砂粒を含んでいる。焼成は良い。F-27グリッドから出土した。5・甕の頸部付近と考えられる。これも大きさについては不明である。頸部のすぐ下から右下方向へのけ目が残っている。内面はナデて仕上げた痕跡をわずかに残している。外面は茶褐色、内面は淡い茶褐色を呈している。6・甕か壺の底部に近い部分と考えられる。外面に縱方向へのハケ目が付き、内面にはヘラ様のもので削られた痕跡が付いている。外面は赤褐色、内面は茶褐色を呈している。胎土に小砂粒を含む。焼成は良好である。G-42グリッドから出土した。7・これも胴体の下半部で、底部に近くなるものと思われる。表面には細い短いハケ目が残る。内面はヘラ様のもので削ったあとをナデて調整したものと思われる。表面は灰褐色、内面は淡い茶褐色を呈している。胎土には小砂粒から2mmほどまでの大きさの砂が混じっている。焼成は良好。H-25グリッドからの出土である。

土師器 (Fig.42・PL.56)

土師器も数が少なく、固化に耐えうるものとして5点を図示した。全形と大きさを知り得るものは一点もない。1・小形の壺の口縁部である。やや外方に開きつつわずかに内湾しながら伸びた口縁の端部を丸くおさめている。表面は横方向にナデて仕上げ、内部もナデて仕上げて

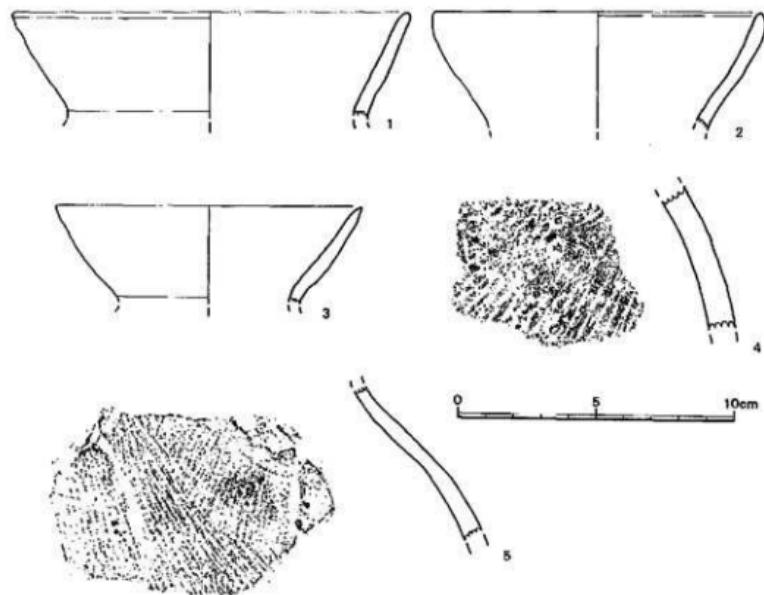


Fig. 42 出土土器実測図 (11)

いる。全体的に淡い茶褐色を呈している。胎土に小砂粒を含む。焼成は良い。D-21グリッドからの出土である。2・これも壺の口縁部である。かなり内湾しつつ伸びた口縁部の先端を丸くおさめている。内外面ともナデで仕上げたものと思われる。淡い茶褐色を呈しており、胎土・焼成とともに良い。G-24グリッドからの出土である。3・壺の口縁部と思われる。復原口縁径は11cmを計る。やや外方に傾いて伸びた口縁部の先端を、細く尖らせ氣味におさめている。内外面とも横方向にナデで仕上げたものと思われる。明るい茶褐色で、胎土に小砂粒を含む。焼成は良い。D-21グリッドからの出土である。4・全体の形を知り得ない。器表にヘラ様のものの沈線が残り、タタキ痕かとも考えられる文様も認められる。内面はヘラ様のもので削った痕跡が明瞭に残っている。明るい茶褐色をしていて、胎土・焼成とともに良好である。G-24グリッドから出土した。5・壺の体部と考えられる。一部、わずかに頸部に接する部分である。器表に粗い大きなハケ目が明瞭に残されていて、内面にも粗く短いハケ目が付いている。頸部付近では外面のハケ目の上から横方向へナデで調整を加えている。外面は濃い灰褐色を呈し、スヌ状の黒色の付着物がある。内面は灰褐色を呈している。胎土・焼成とともに良好である。D-21グリッドからの出土品である。

埋甕 (Fig. 43・PL. 57)

いずれも破片となっており、また風化が進んでいて旧状に復し得なかった。図上での復原であるが、全形を知り得ない。1は第1号埋甕で推定復原口縁径約32cmを計る。内湾しつつ伸びた体部内上端をゆるく内側に向け、先端部をやや親くおさめた形をしている。頸部外面に、大きめの粗い条痕が横方向に残っている。全体的に茶褐色をしているが、内側に黒褐色の部分も認められる。胎土に小砂粒を含むが良質で、焼成も良い。2・やや厚手の作りである。肩の部分が張る形のもので、II縁先端部は丸くおさめている。口縁部付近にわずかに条痕様のものが横方向に残っているのが見受けられる。作り方は整っておらず、器表に凹凸が目立つ。器表は茶褐色を呈するが、部分的に黒変したところもあり、内面は黒褐色を呈している。胎土に小砂粒を含んでいるが、良好なもので、焼成も良い。第2号埋甕である。3・第5号埋甕のもので、外上方に直線的に伸びた形である。先端はやや平らに作っていて、部分的には沈線状に凹んだ場所も認められる。整った作りではなく、やや凹凸が残る。茶褐色を呈しているが内面は黒褐色をしている。胎土に小砂粒を含んでいる。焼成は良好であるが、1・2・3ともに風化が進み、表面は荒れていて、調整痕等明らかにできない部分も多い。

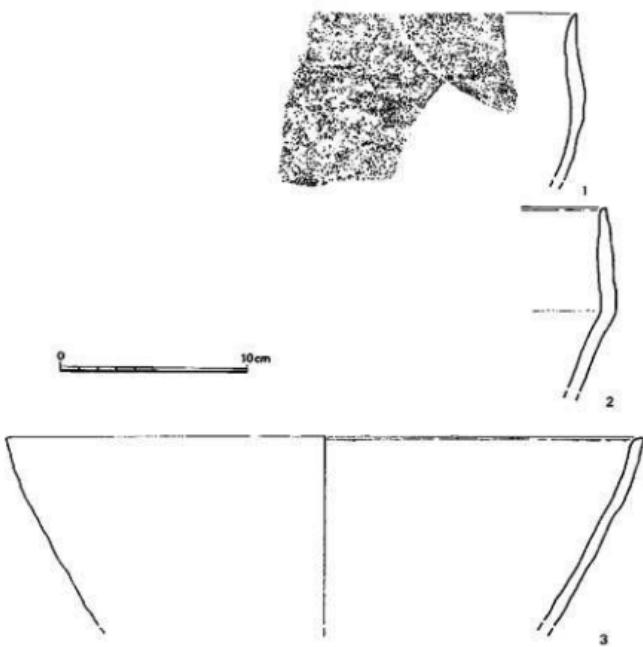


Fig. 43 墓塋実測図 (12)

P L A T E S

(葛城遺跡)



葛城遺跡遠景



葛城遺跡遠景・近景



調査前の状況と調査風景



調査風景（A地点の調査）



調査風景（A地点の調査）



遺跡近景と調査風景（B地点）



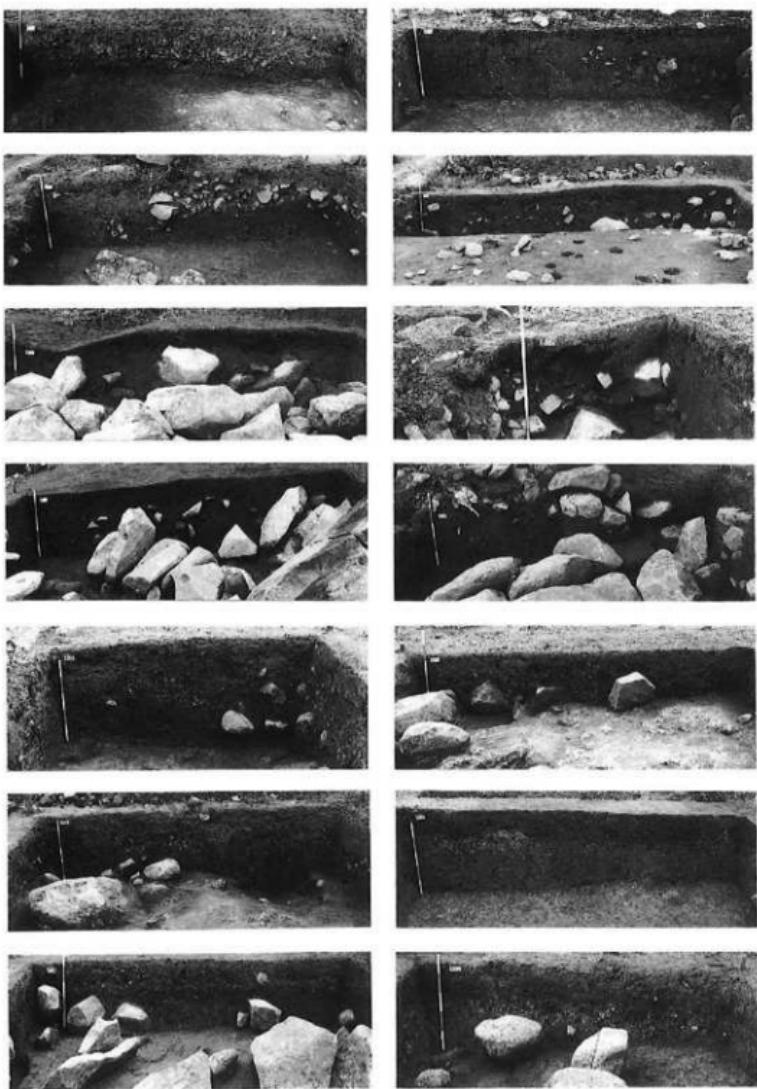
遺跡近景と調査の状況（B地点）



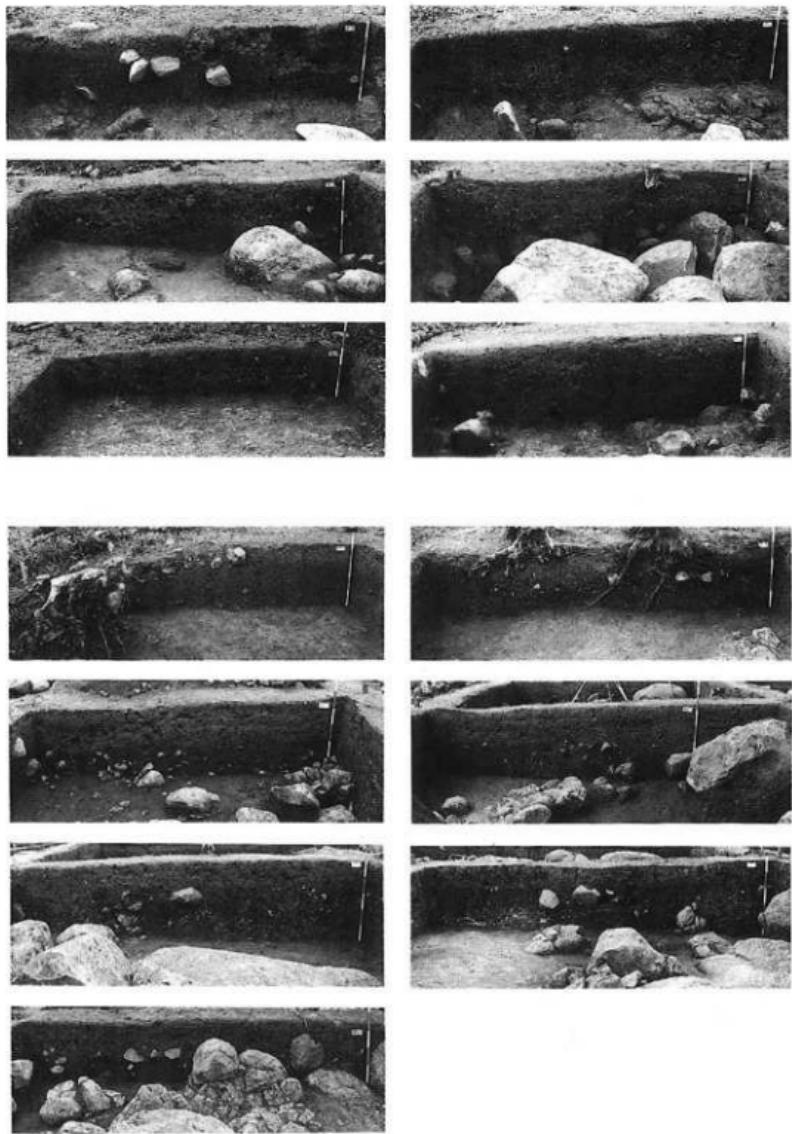
調査風景（遺物の取り上げ作業）



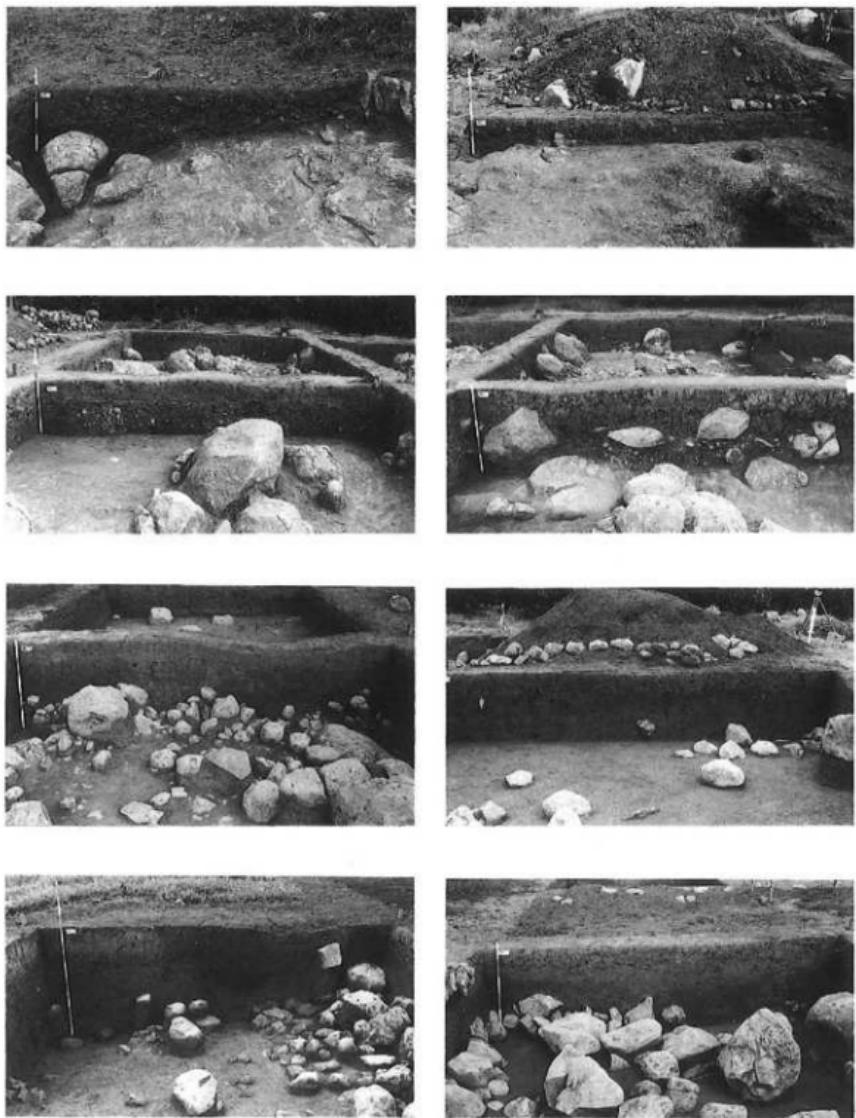
調査風景（造構の実測状況）



土層の状況 I (I列の状況)



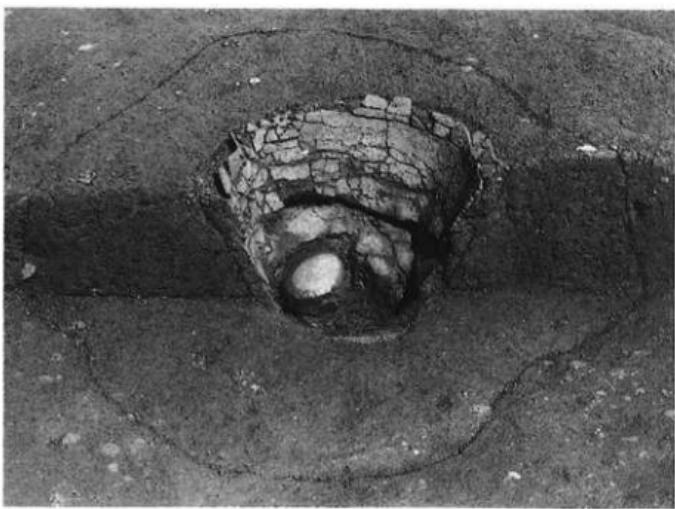
土層の状況 2 (8列と26列の状況)



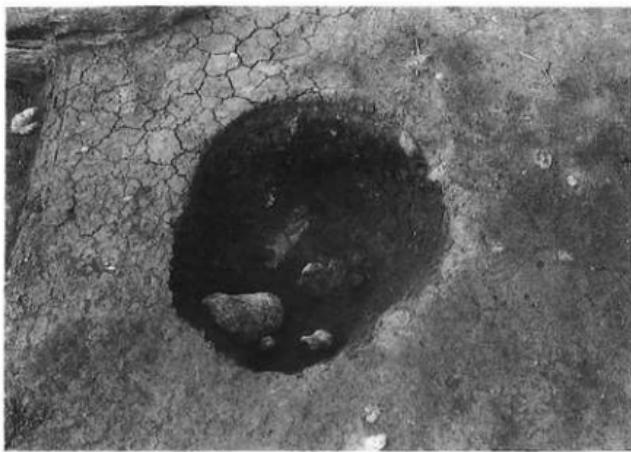
土層の状況 3 (E列の状況)



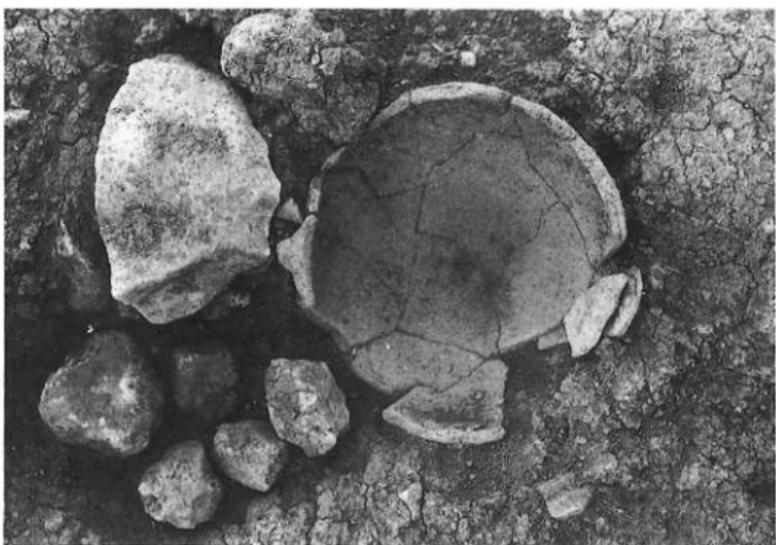
検出した柱穴群



第1号埋施出土状況



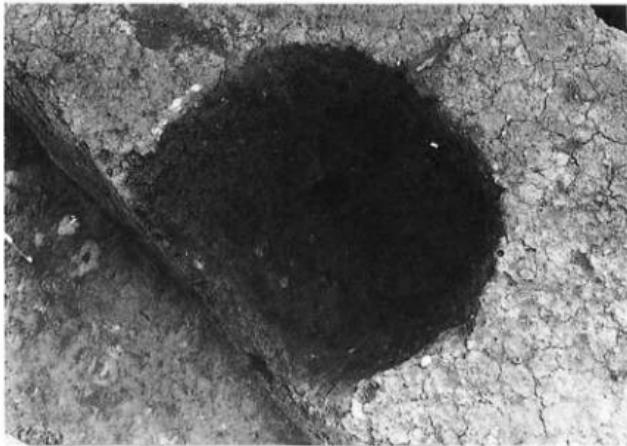
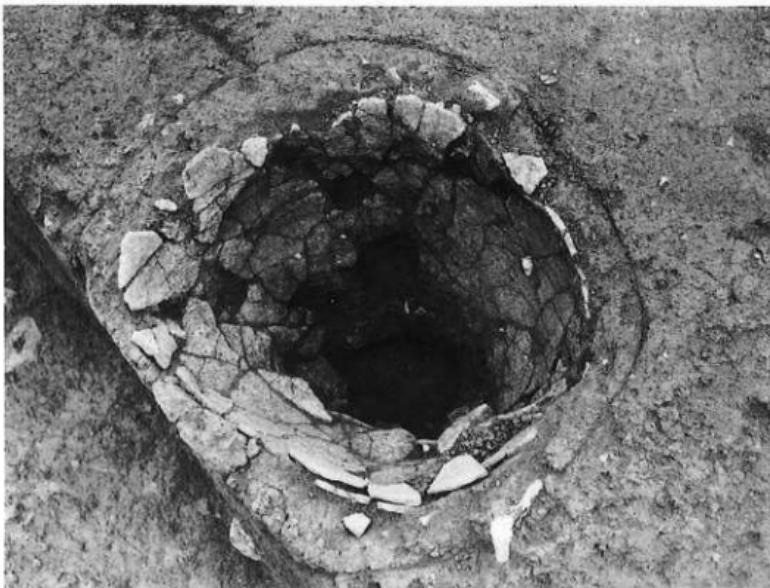
第2号埋甕出土状況



第3号埋甕出土状况



第4号埋壺出土状況



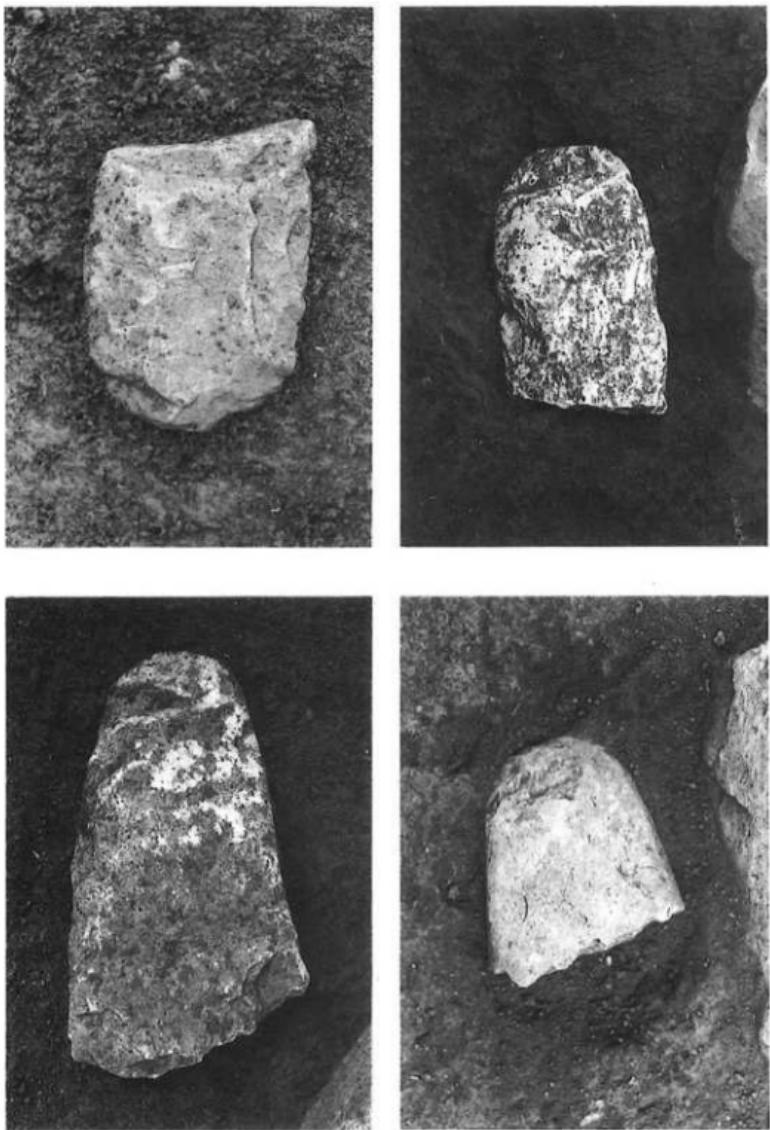
第5号埋壺出土状况



炭焼窯の状況



遺物出土狀況 1 (石器)



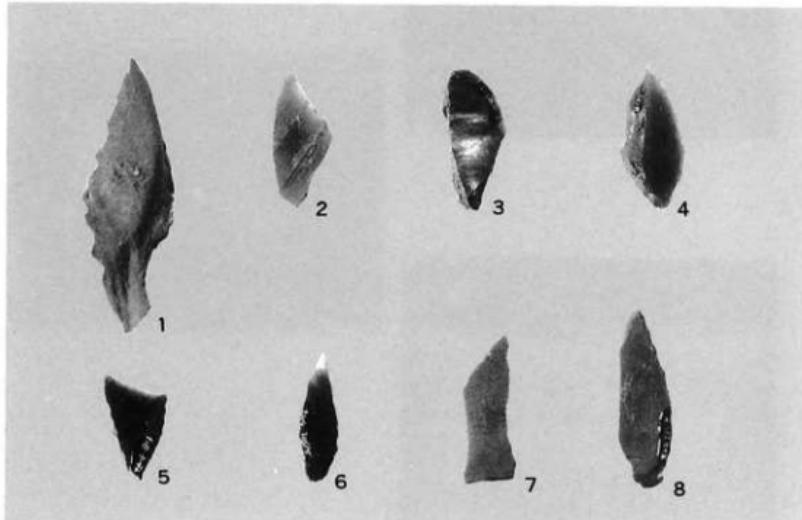
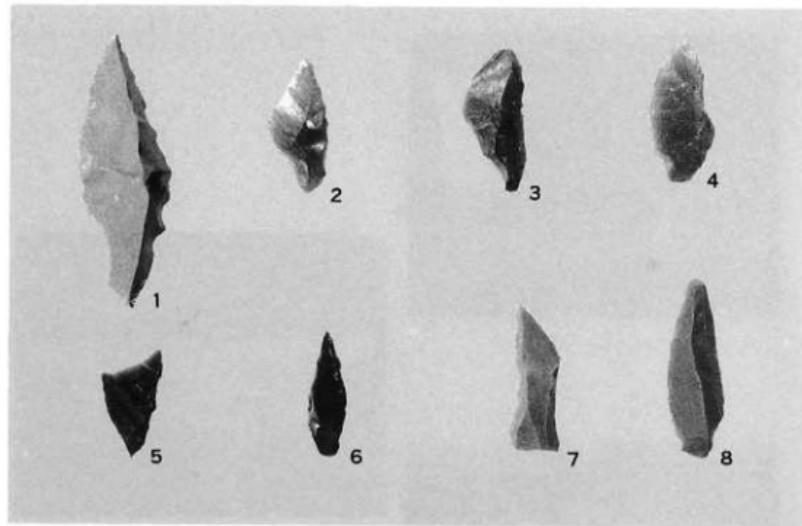
遺物出土狀況2(石器)



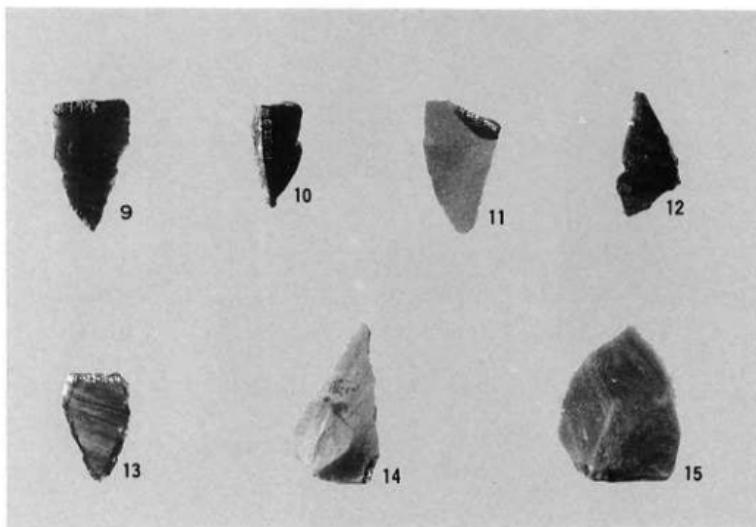
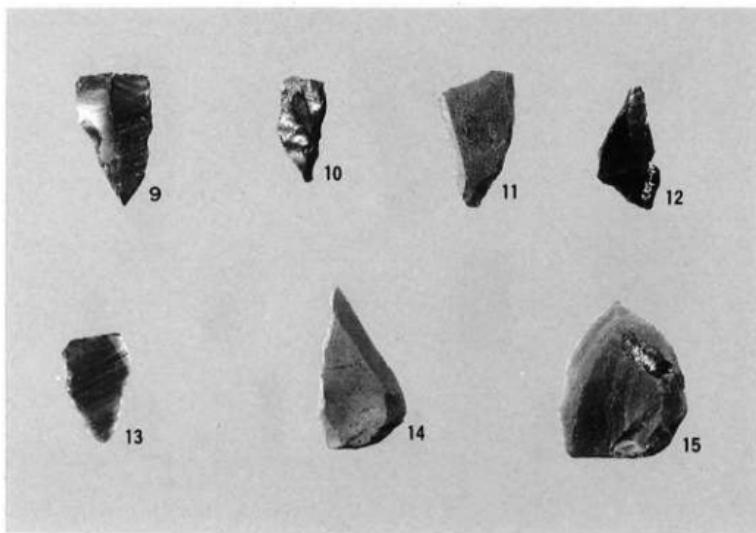
遺物出土狀況3(石器)



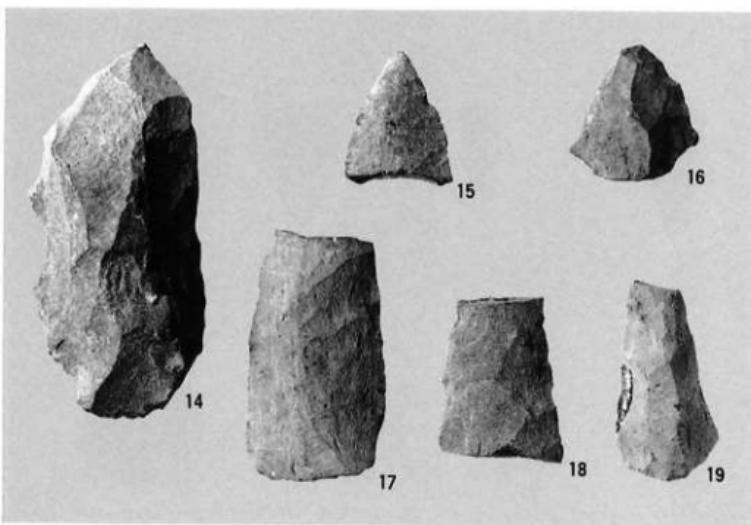
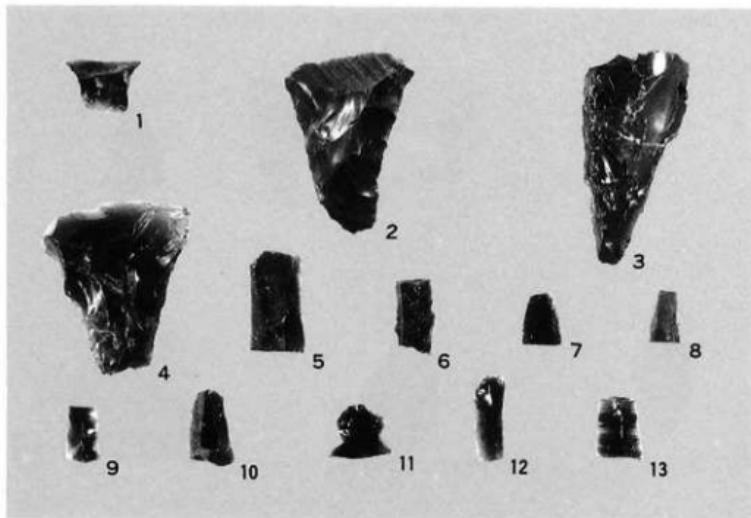
遺物出土状況4(土器)



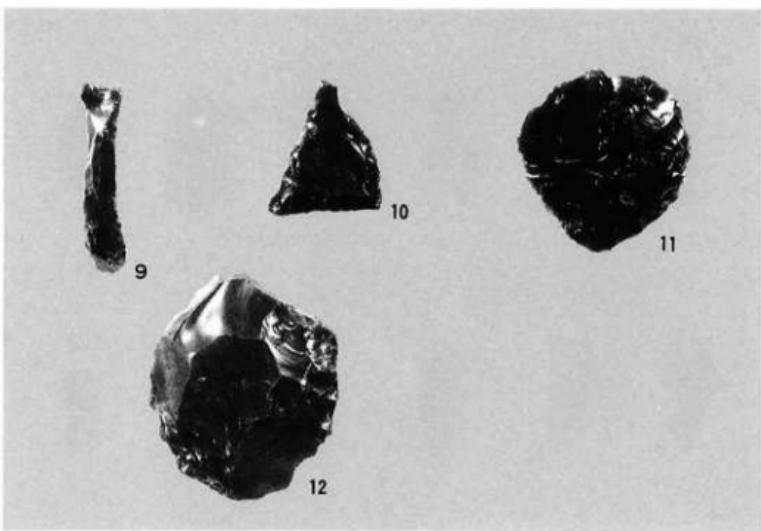
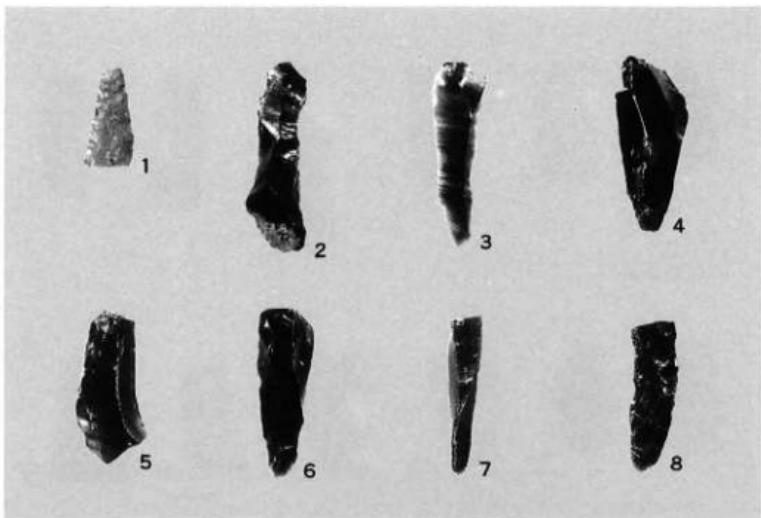
出土の石器 1 (ナイフ形石器)



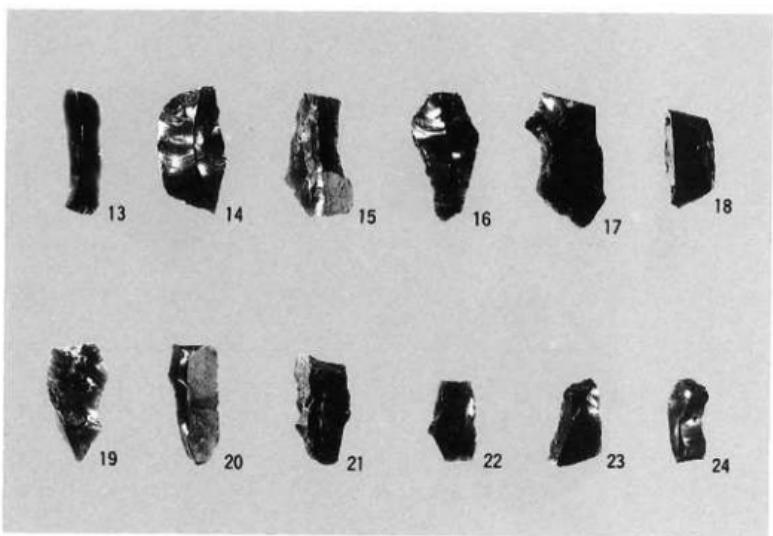
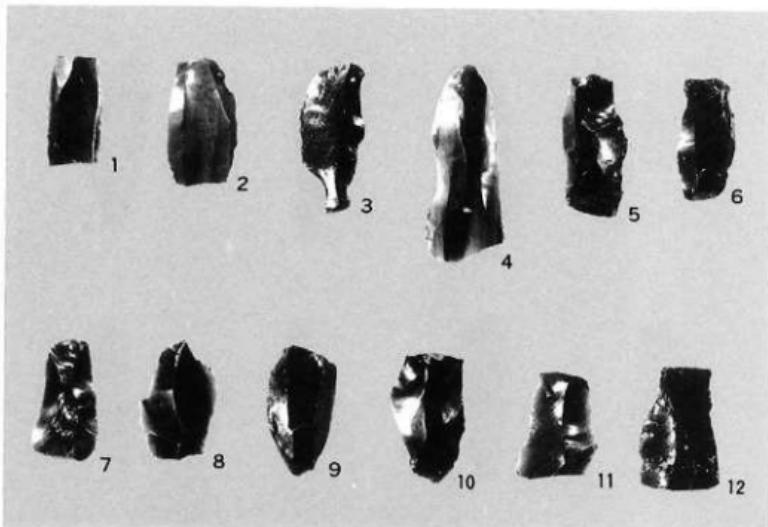
出土の石器 2(ナイフ形石器)



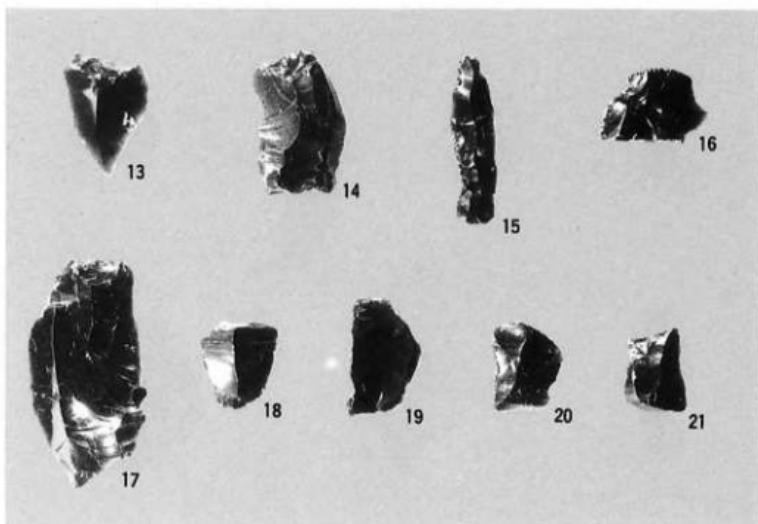
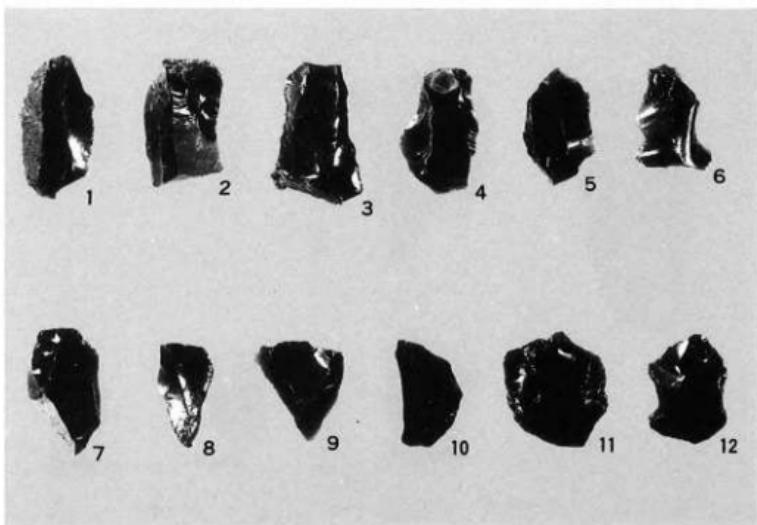
出土の石器 3(台形・台形様石器・尖頭器)



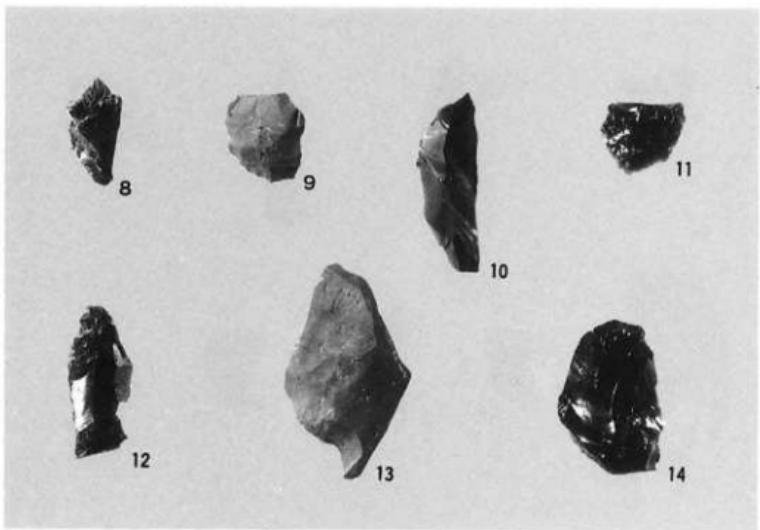
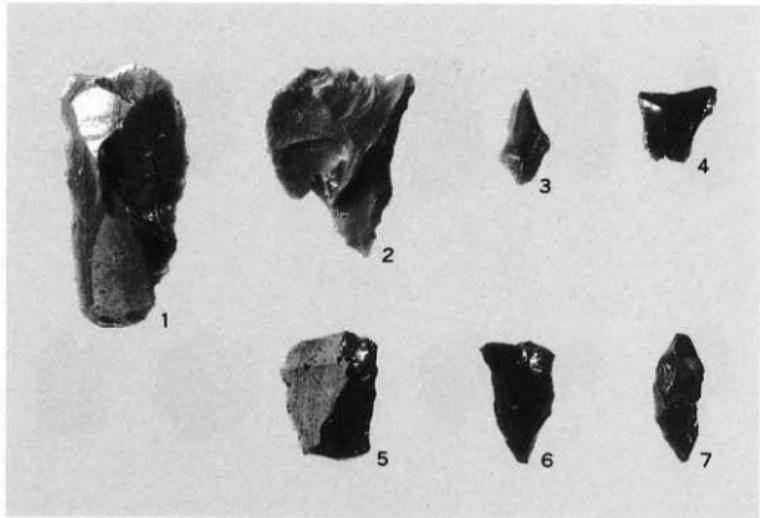
出土の石器 4(剝片・ラウンドスクレーバー)



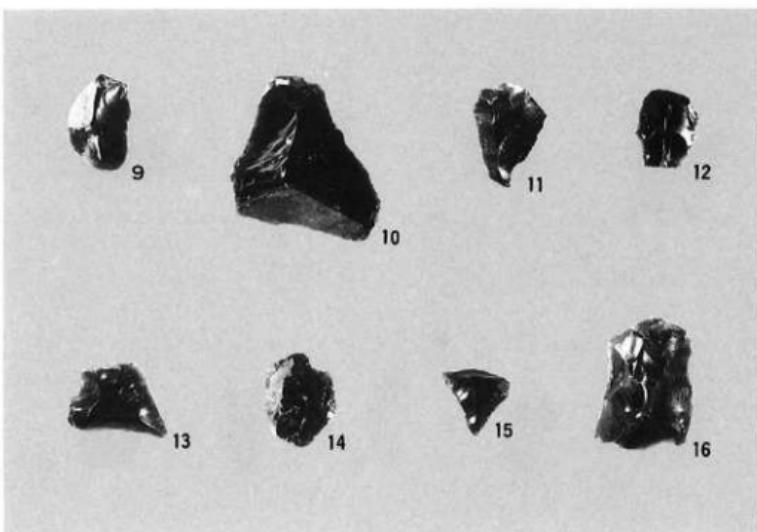
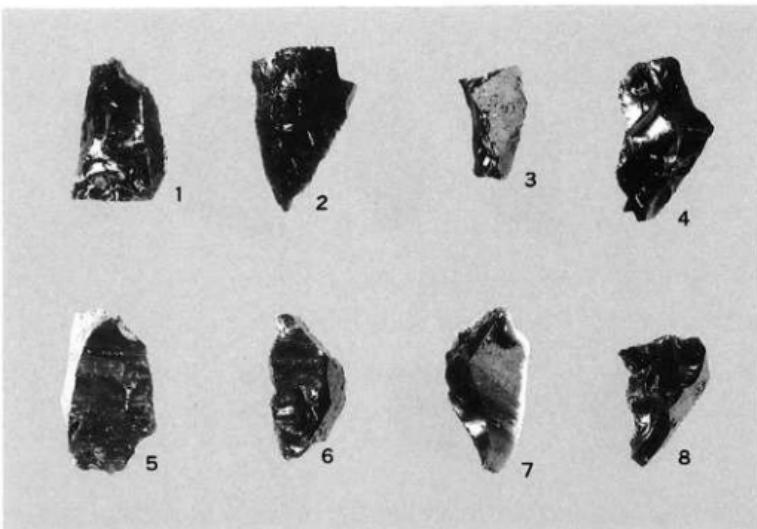
出土の石器 5(剥片石器)



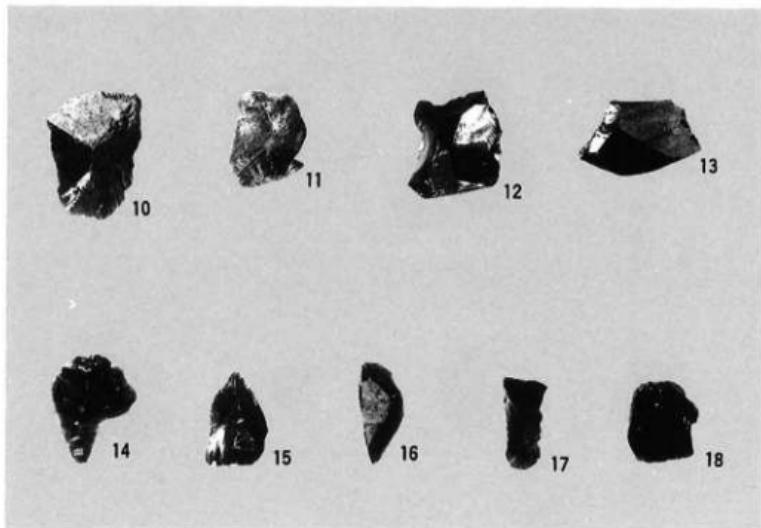
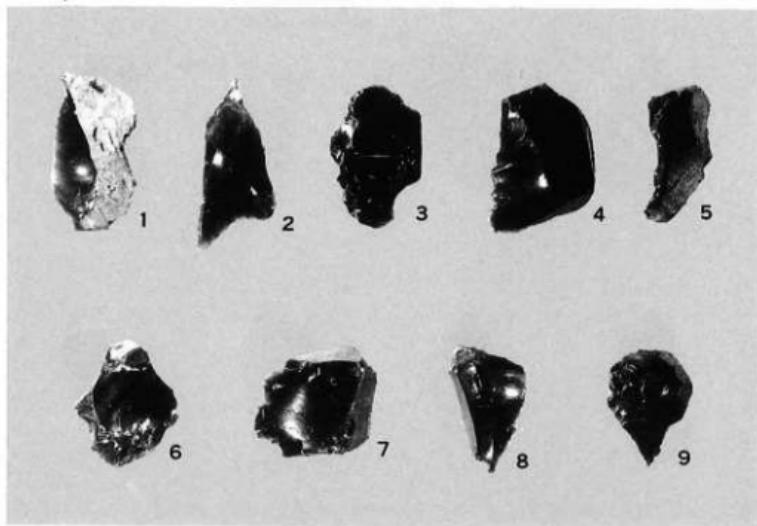
出土の石器 6(剝片)



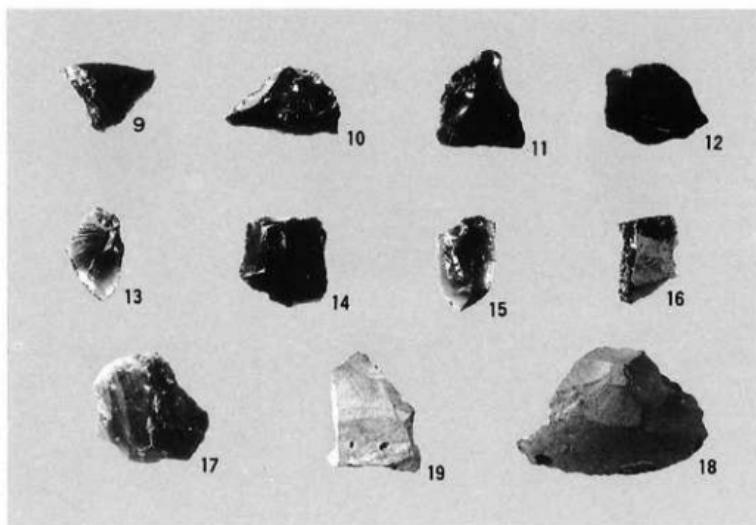
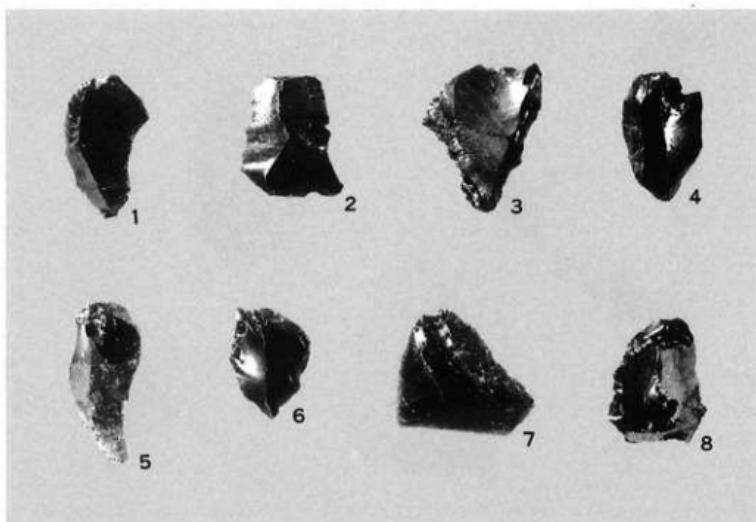
出土の石器 7(剥片)



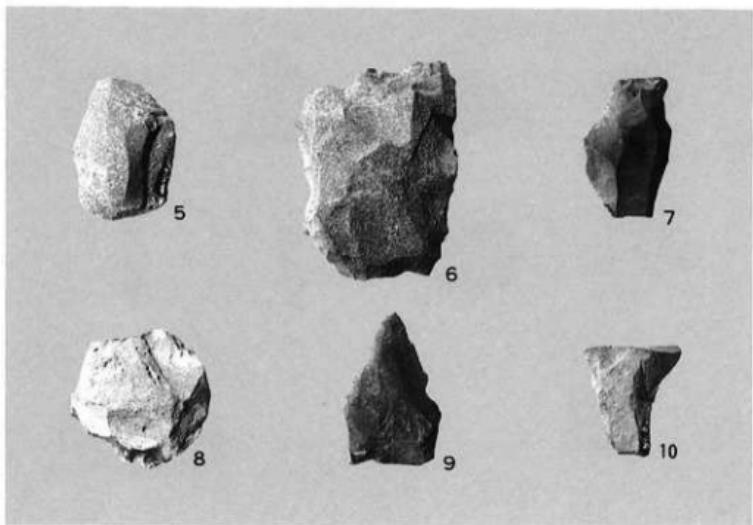
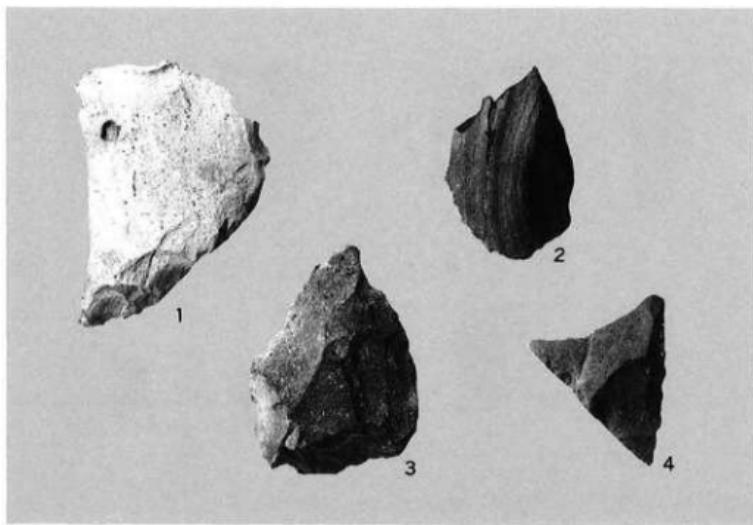
出土の石器 8(剝片)



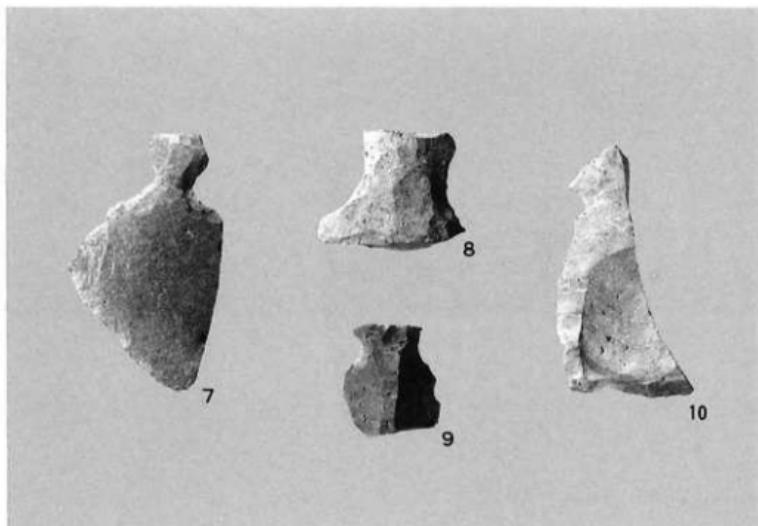
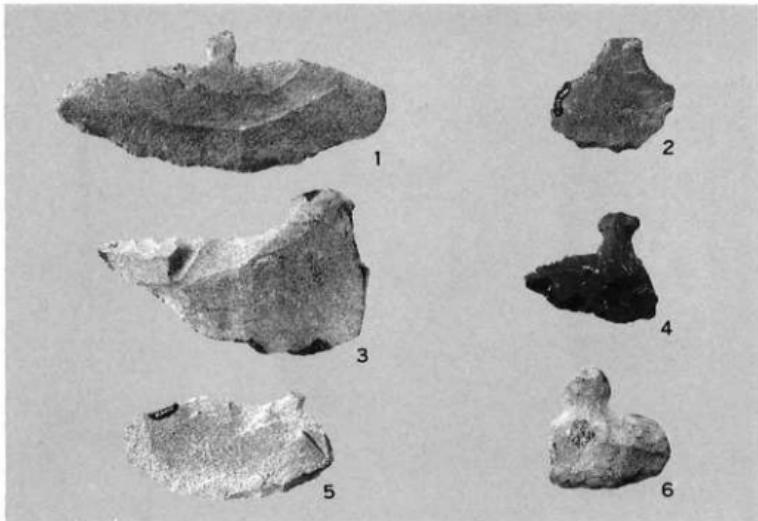
出土の石器 9 (剝片)



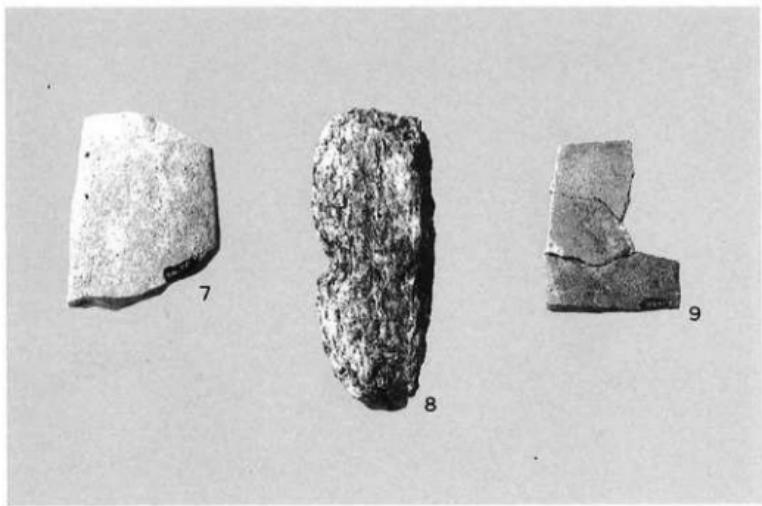
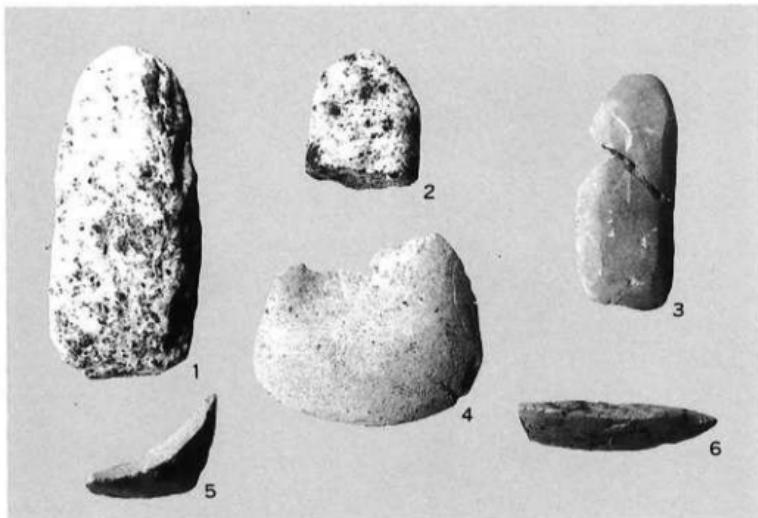
出土の石器 10(剝片)



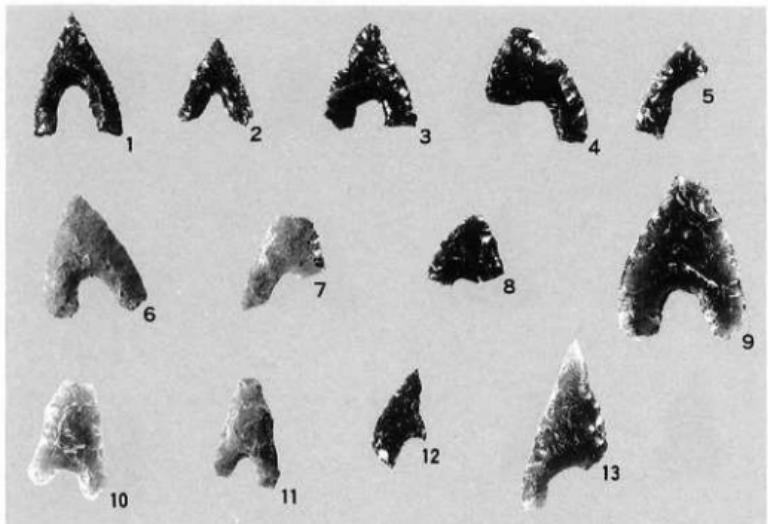
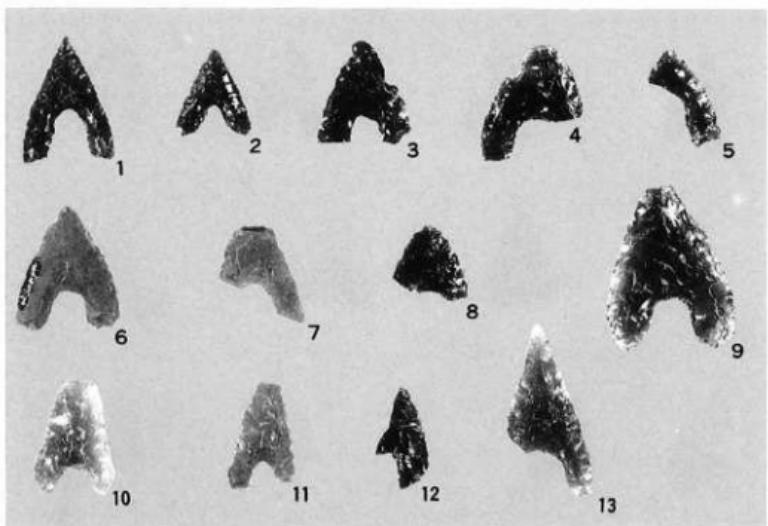
出土の石器 11(スクレーパー)



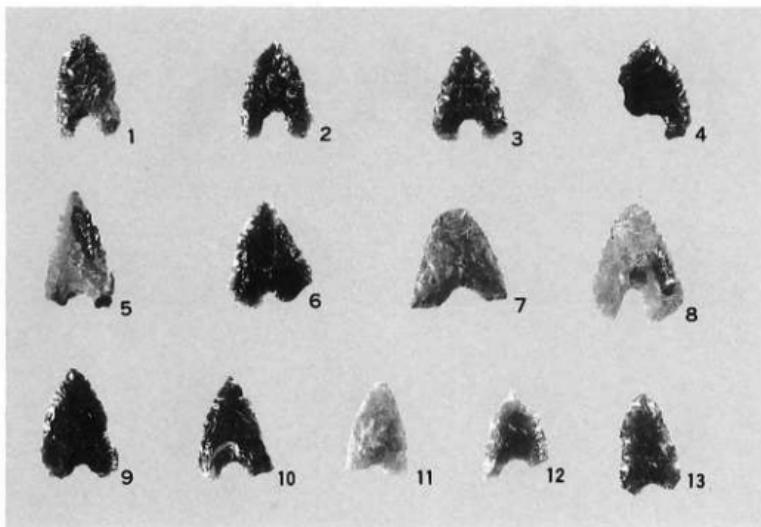
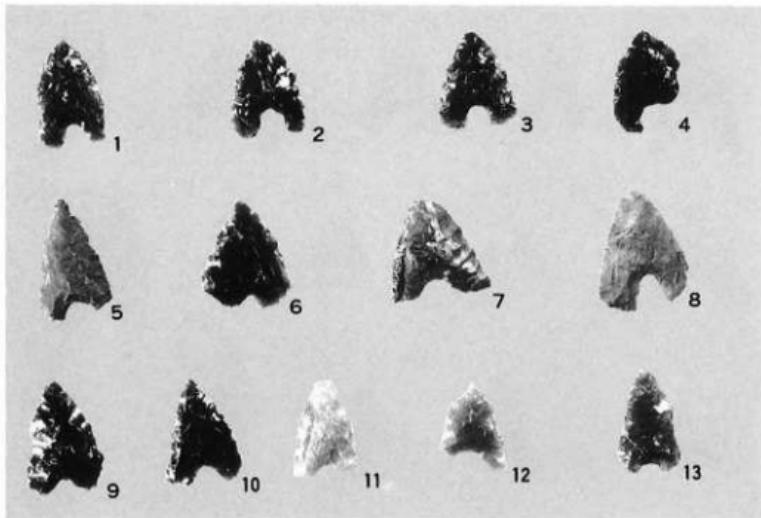
出土の石器 12(石匙)



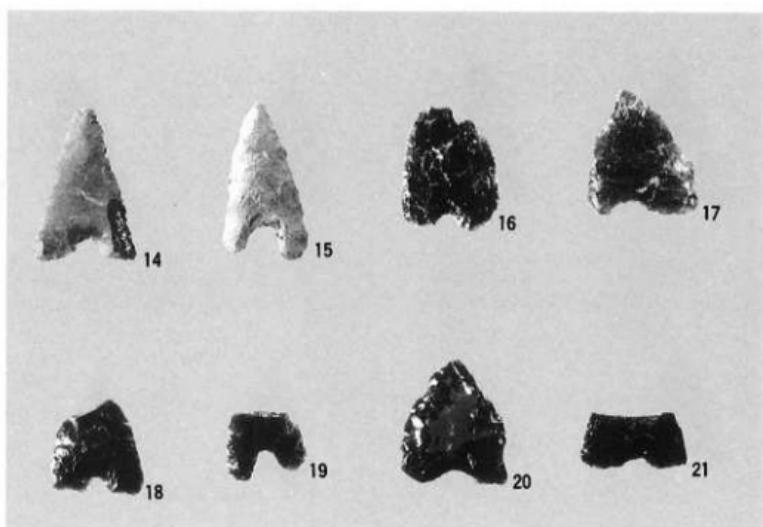
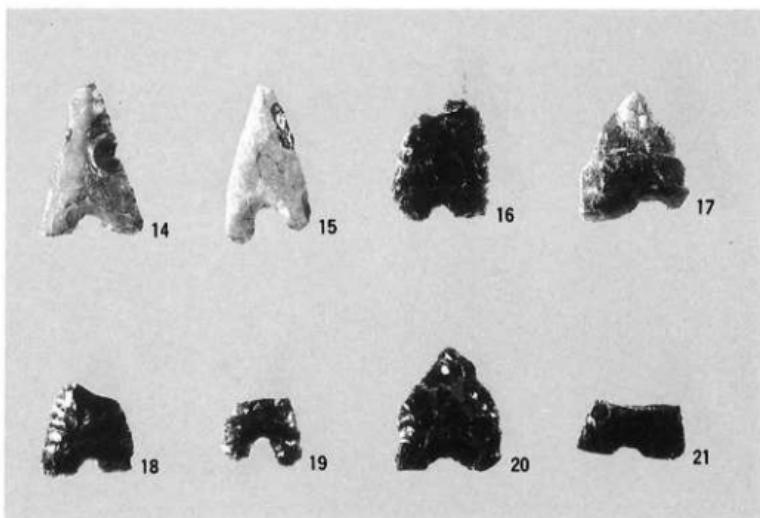
出土の石器13(石斧・石錐・砥石)



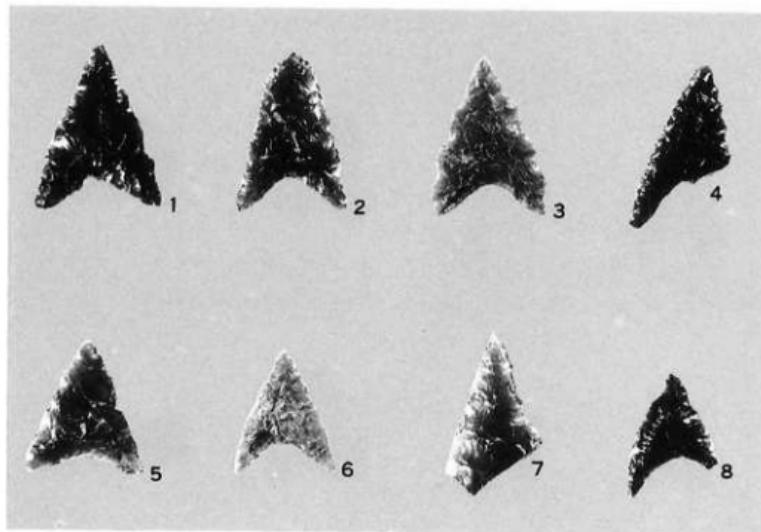
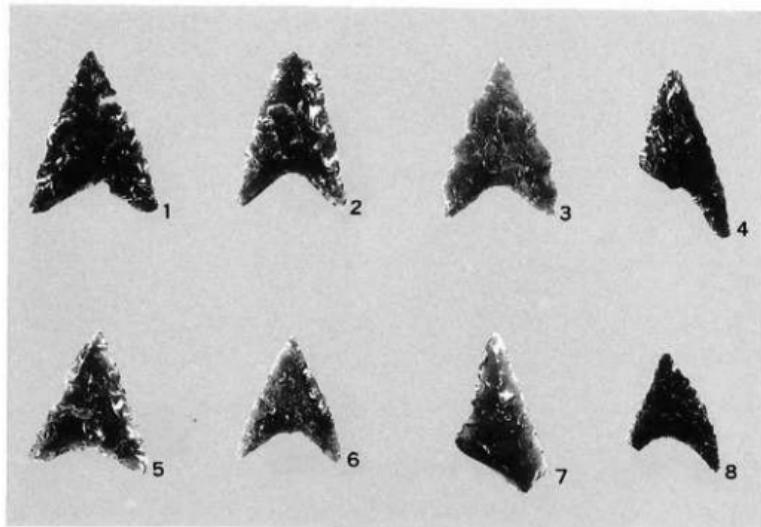
出土の石器 14(石鏃)



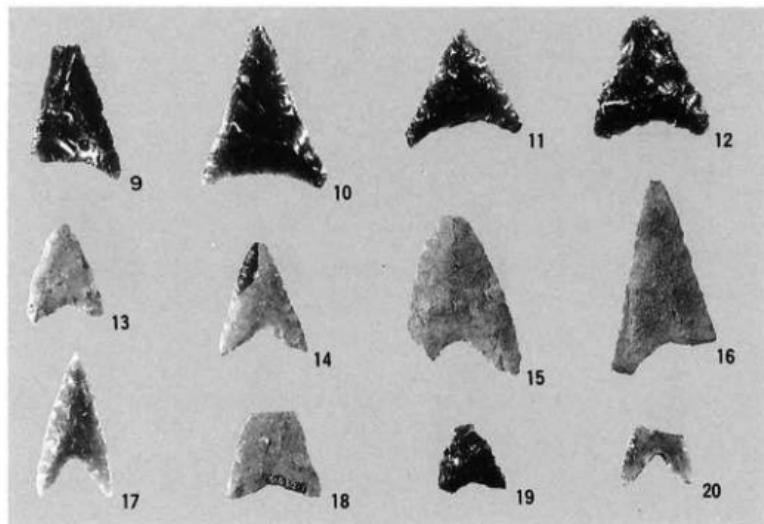
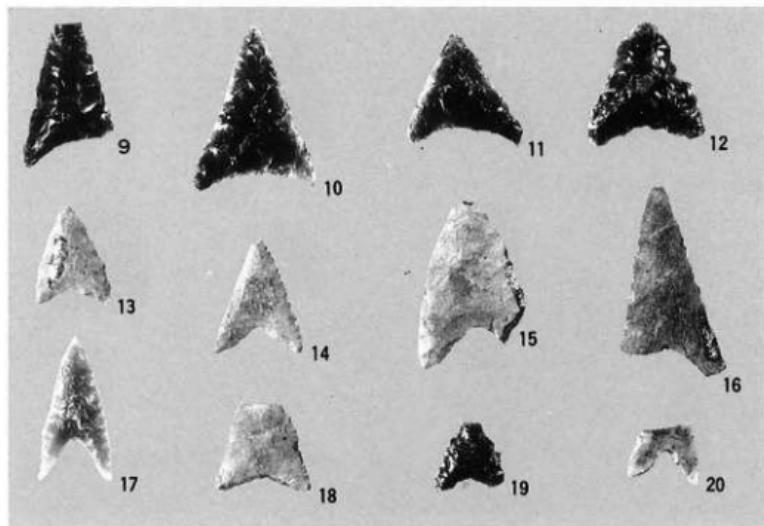
出土の石器 15(石鏃)



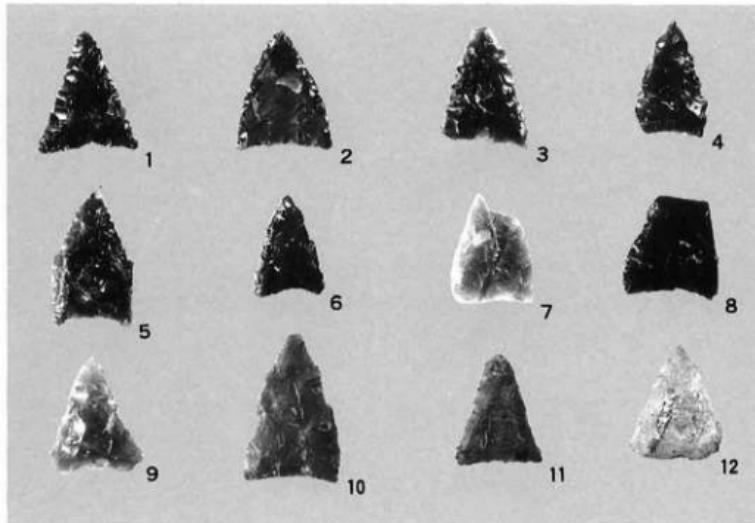
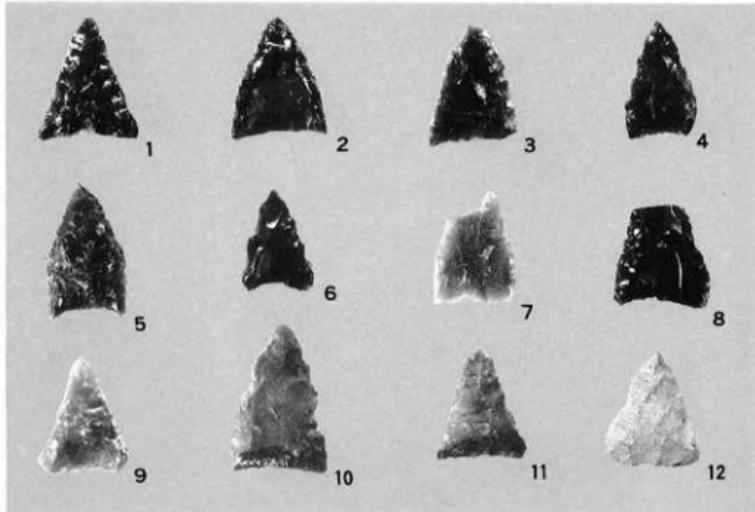
出土の石器 16(石錐)



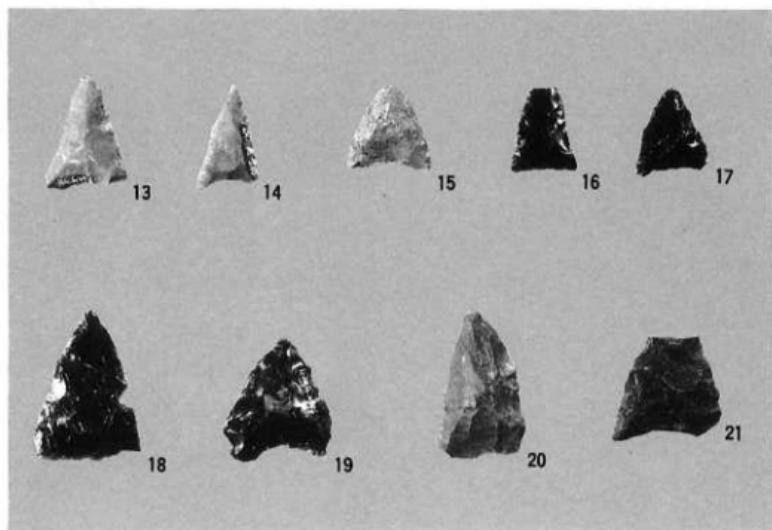
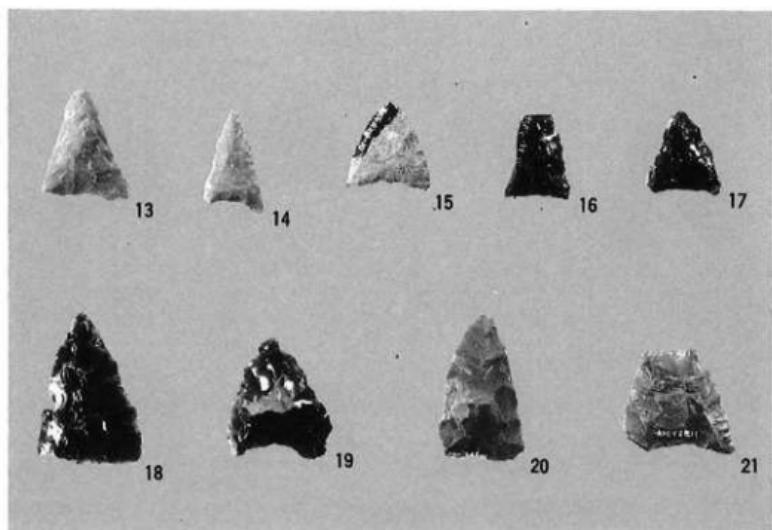
出土の石器17(石鏃)



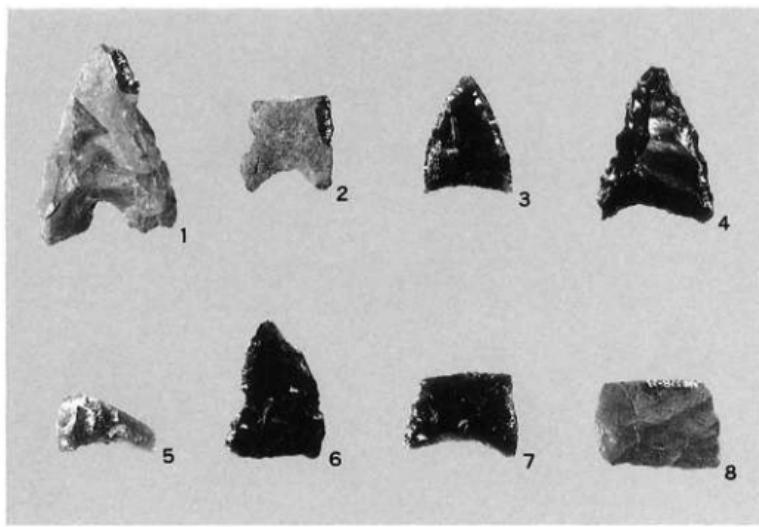
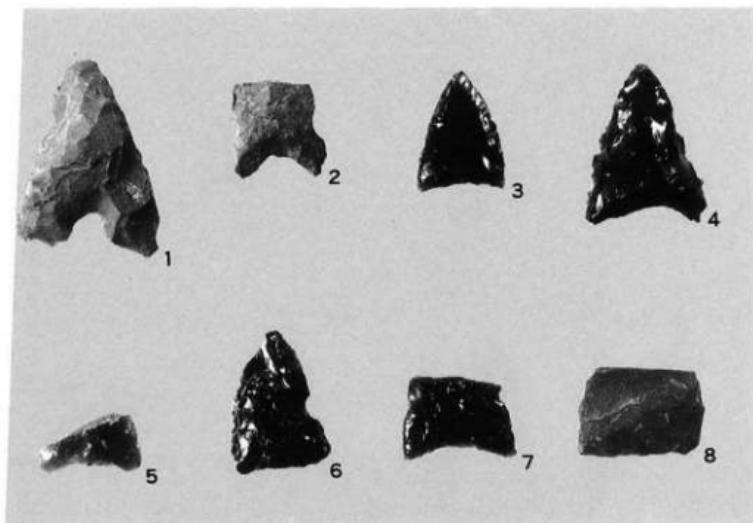
出土の石器18(石鏃)



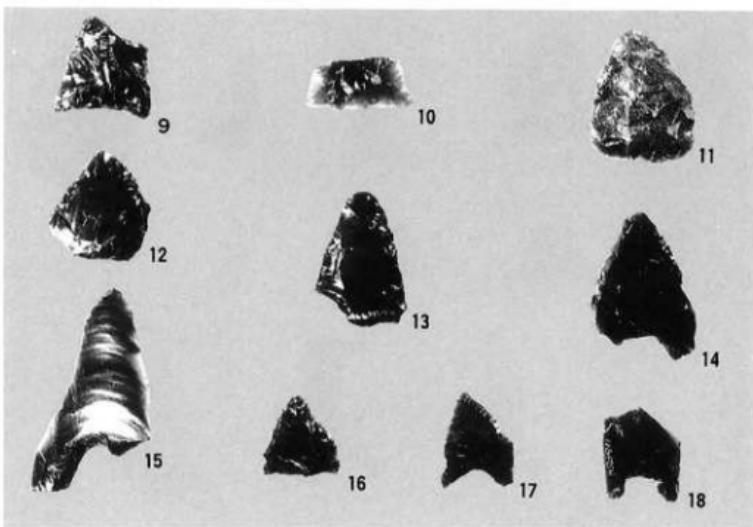
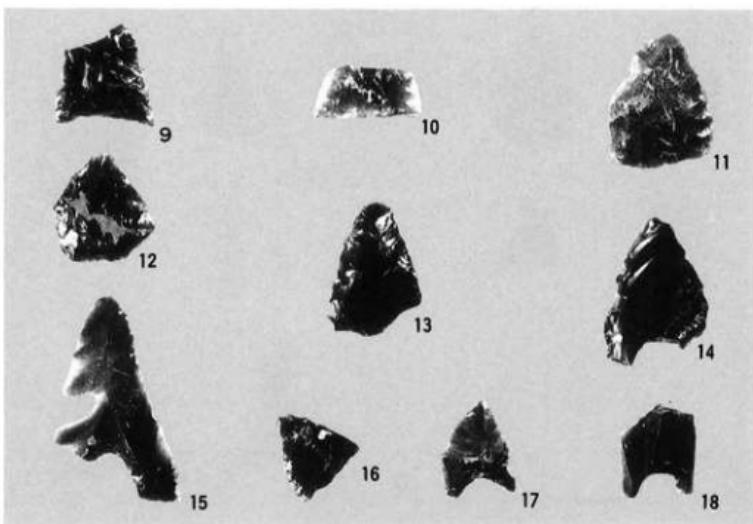
出土の石器 19(石鏃)



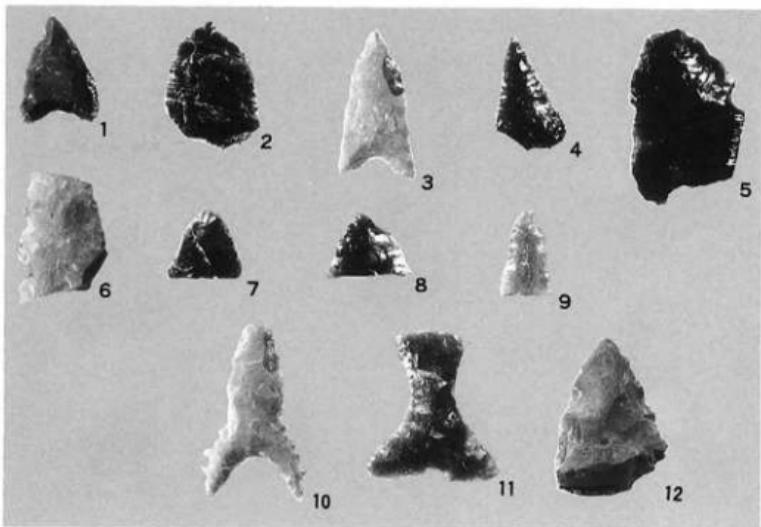
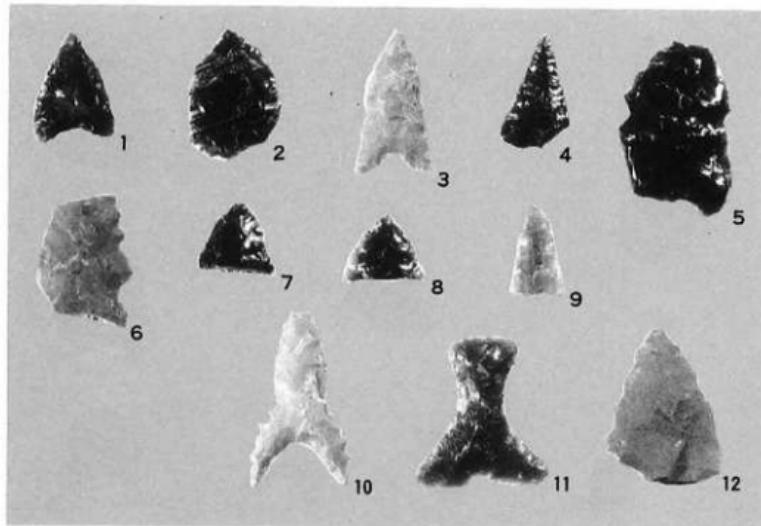
出土の石器 20(石簇)



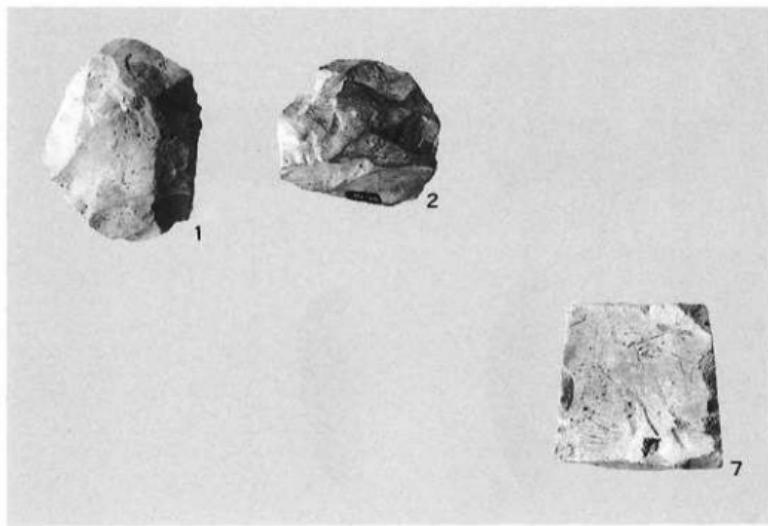
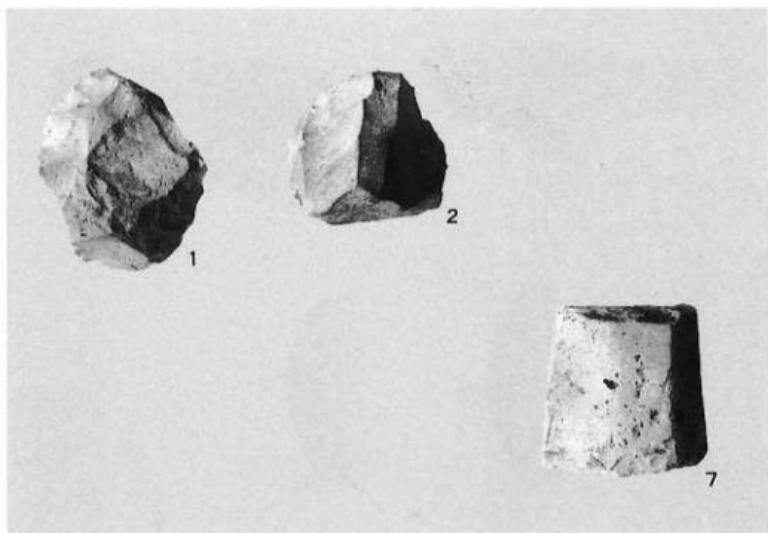
出土の石器 21 (石鉄)



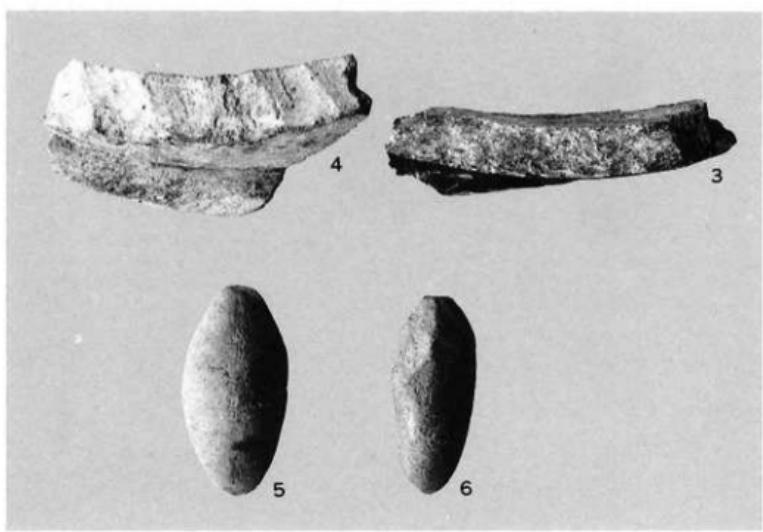
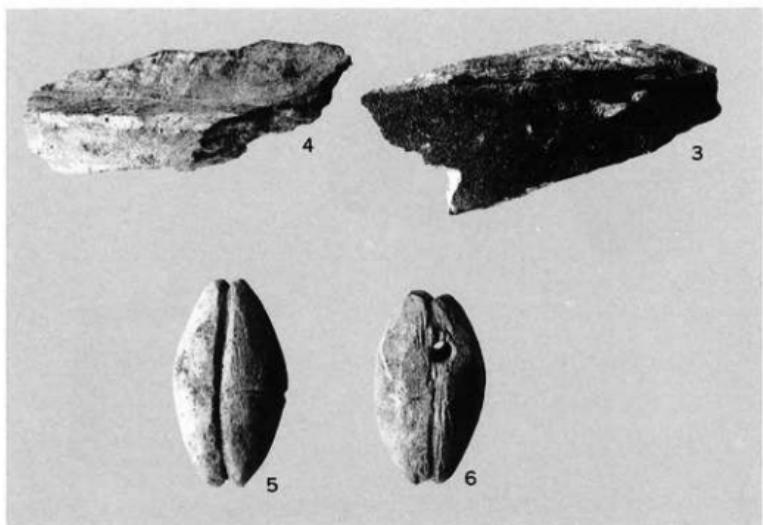
出土の石器 22(石錐)



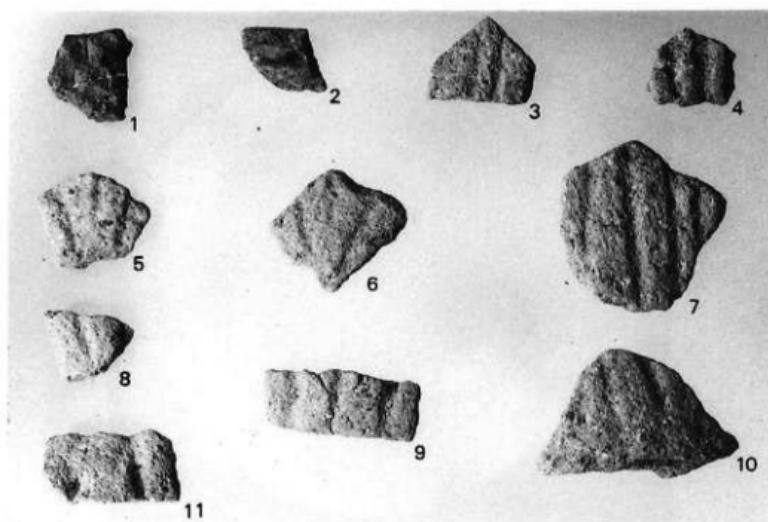
出土の石器 23(石鏃・その他)



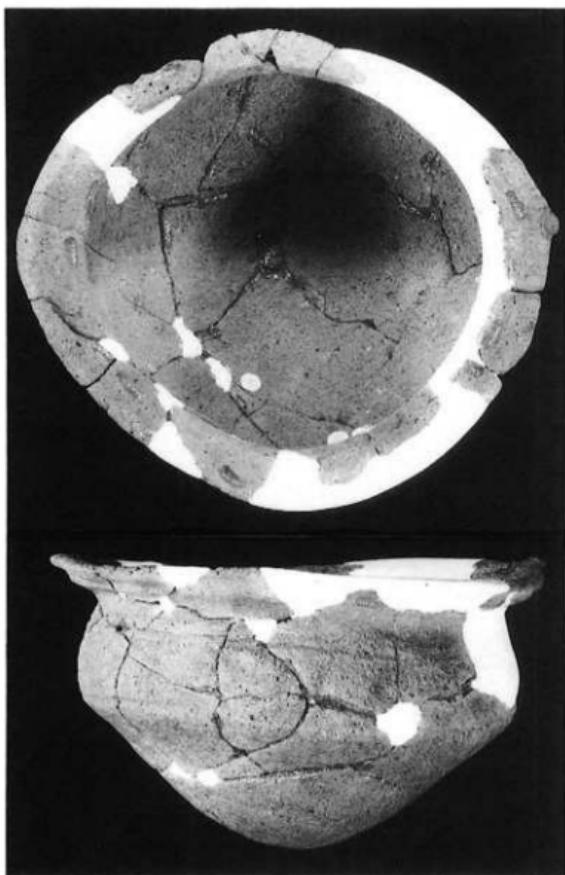
出土の石器 24(石核・砥石)



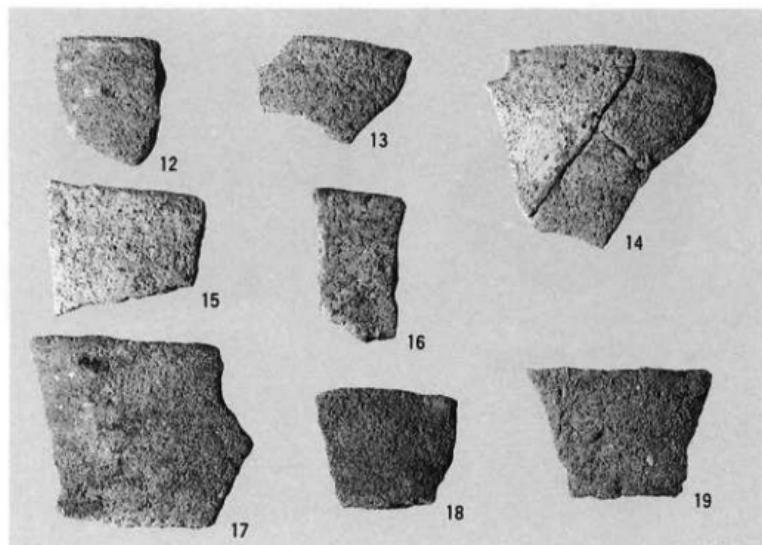
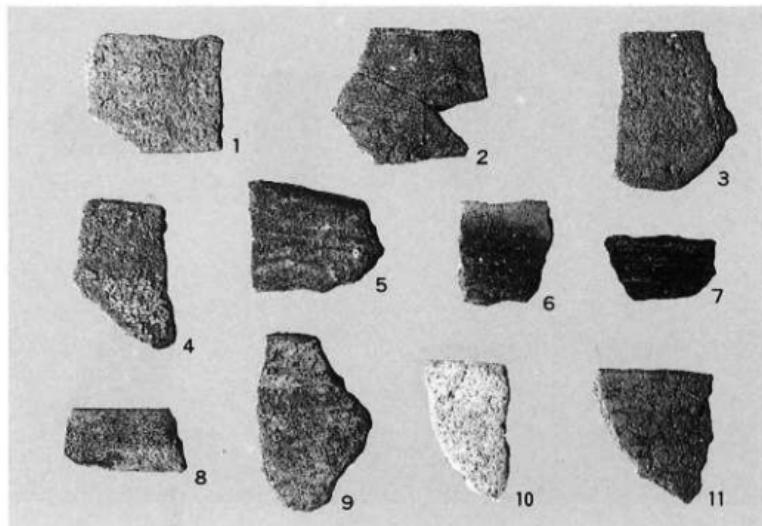
出土の石器 25 (石錐・石錐)



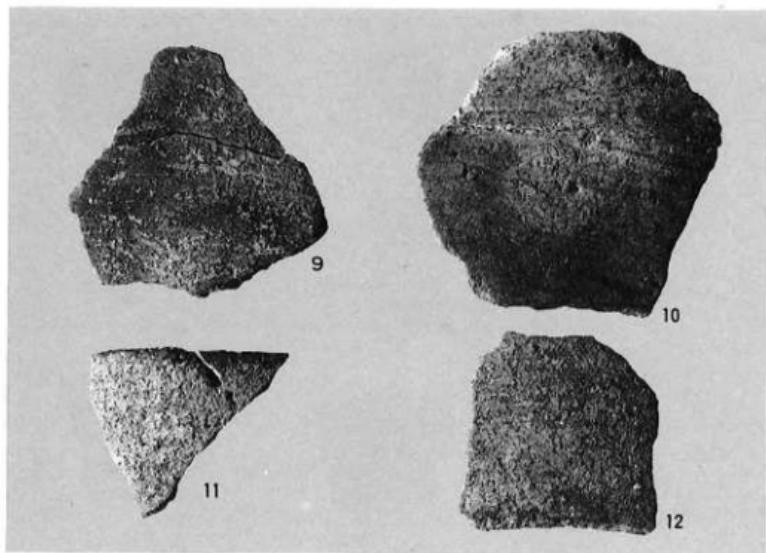
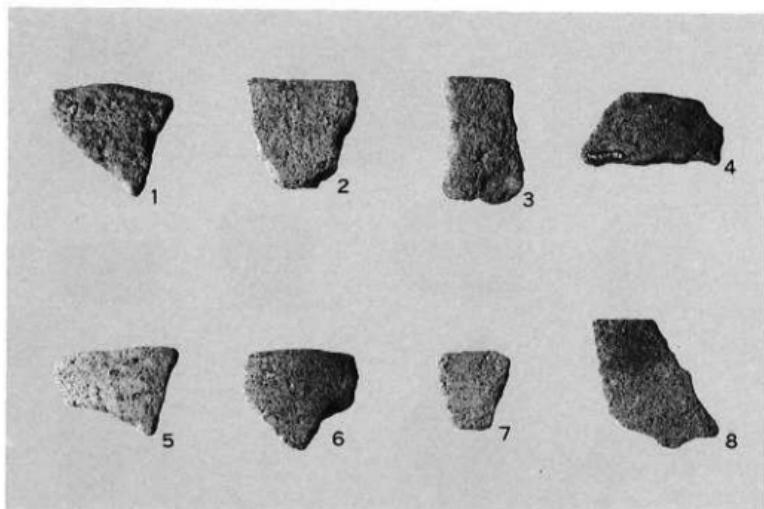
出土の土器 1



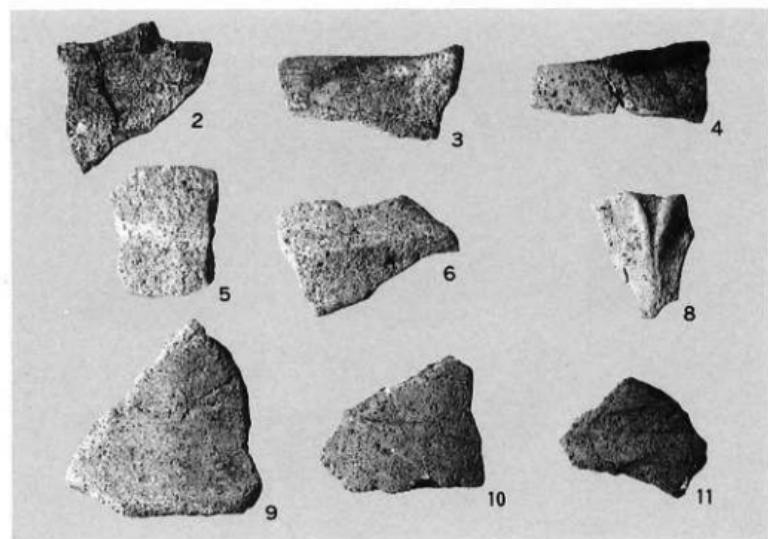
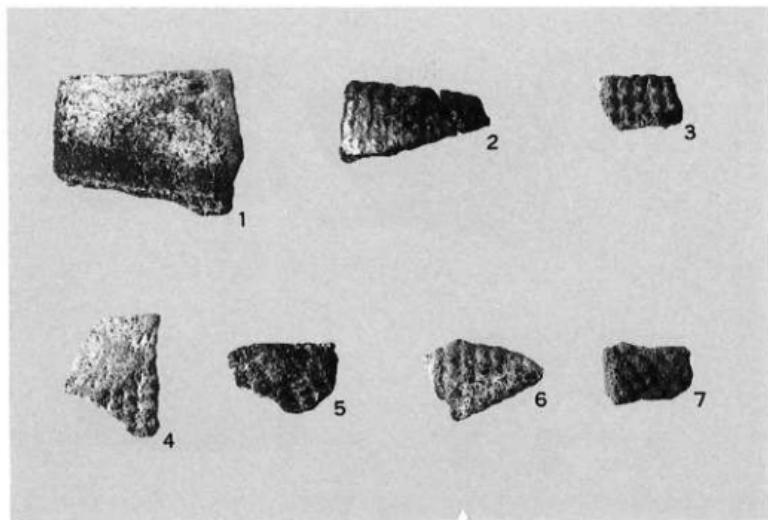
出土の土器 2



出土の土器 3

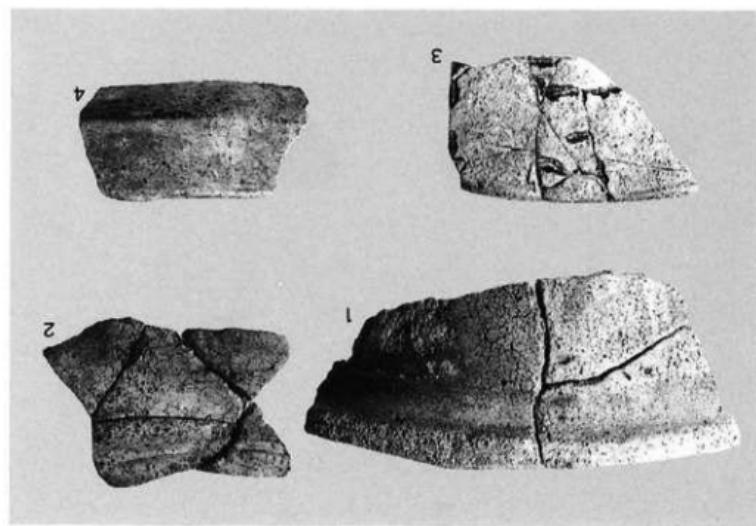
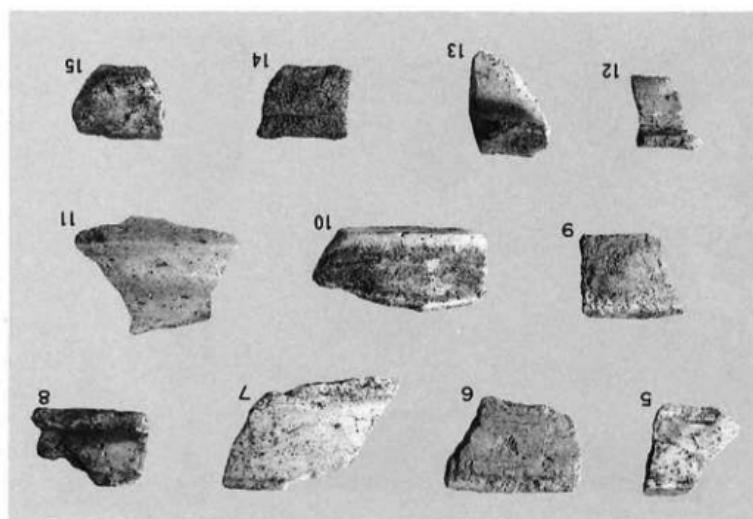


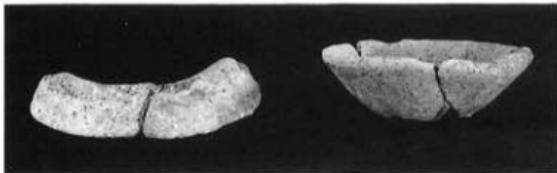
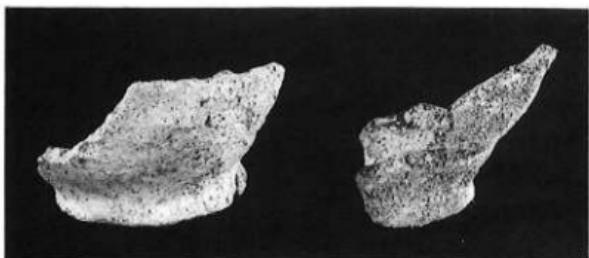
出土の土器 4



出土の土器 5

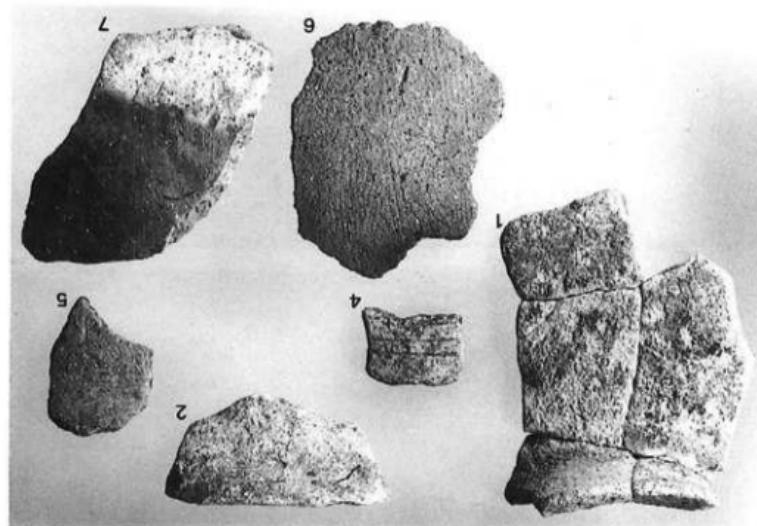
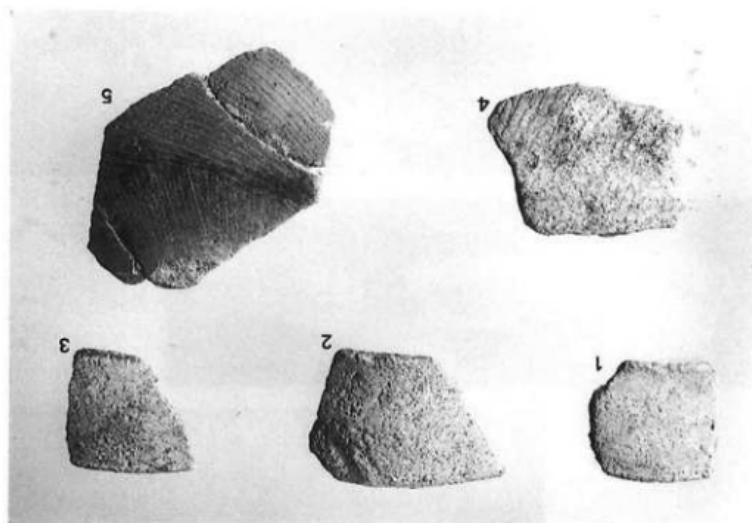
出土の土器 6

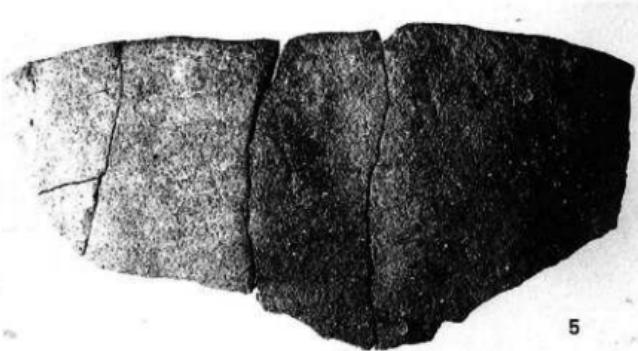
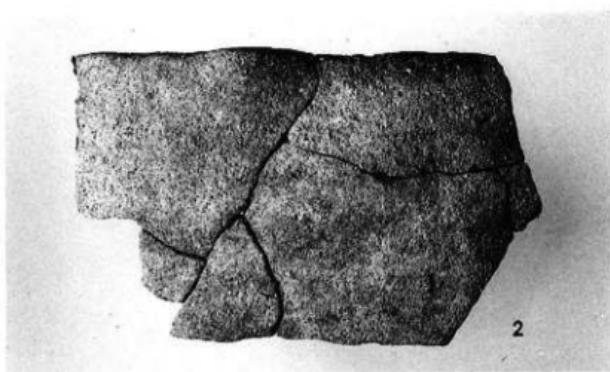
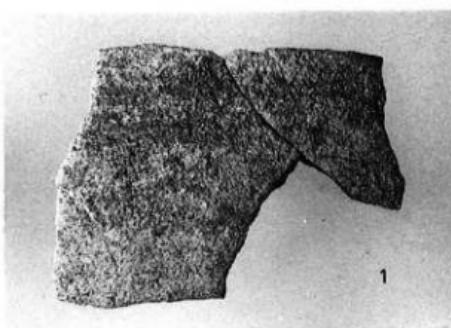




出土の土器 7

出土の土器 8

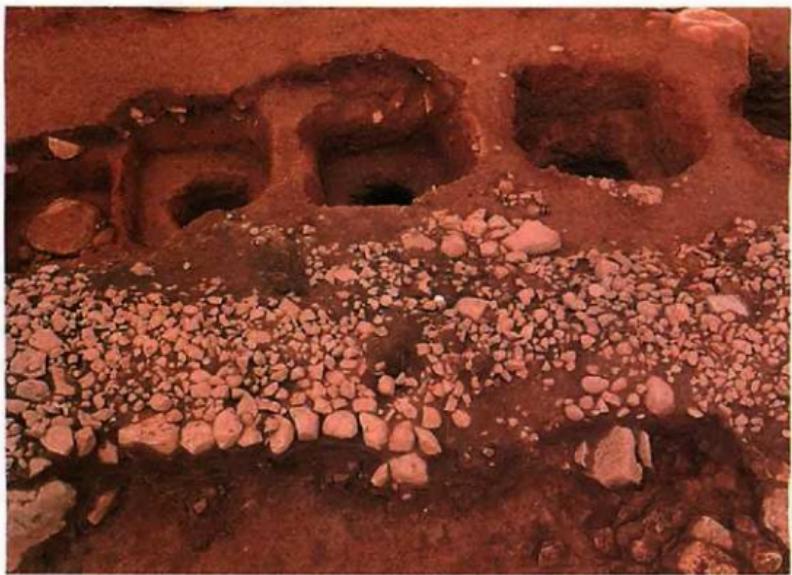




出土の土器 9

第5号埋處

野田A遺跡















本文目次

| | |
|---------------------|-----|
| I 調査 | 181 |
| II 土層の状況 | 184 |
| III 遺構の概要 | 188 |
| 1. 集石列 | 188 |
| 2. J-14・T-14グリッドの上層 | 191 |
| 3. 柱穴 | 191 |
| 4. 近世墓 | 193 |
| IV 遺物の概要 | 211 |
| 1. 石器 | 211 |
| 2. 石塔 | 230 |
| 3. 土器 | 232 |
| 4. 集石列出土の遺物 | 236 |
| 5. 近世墓出土の遺物 | 237 |
| 6. 挖礎 | 243 |

挿図目次

| | |
|--------------------------|-----|
| Fig. 1 野田A遺跡周辺地形および調査区域図 | 183 |
| Fig. 2 1列束壁土壙図 | 185 |
| Fig. 3 11列北壁土壙図 | 186 |
| Fig. 4 22列北壁土壙図 | 187 |
| Fig. 5 塚石列実測図 | 189 |
| Fig. 6 J-14 グリッド北壁土壙図 | 191 |
| Fig. 7 柱穴検出状況平面図 | 192 |
| Fig. 8 近世墓配置図 | 194 |
| Fig. 9 第2号墓実測図 | 195 |
| Fig. 10 第3号墓実測図 | 197 |
| Fig. 11 第4号墓実測図 | 199 |
| Fig. 12 第5号墓実測図 | 200 |
| Fig. 13 第6号墓実測図 | 201 |
| Fig. 14 第7号墓実測図 | 202 |
| Fig. 15 第8号墓実測図 | 203 |
| Fig. 16 第9号墓実測図 | 204 |
| Fig. 17 第10号墓実測図 | 205 |
| Fig. 18 第11号墓実測図 | 206 |
| Fig. 19 第12号墓実測図 | 207 |
| Fig. 20 出土石器実測図(1) | 213 |
| Fig. 21 出土石器実測図(2) | 215 |
| Fig. 22 出土石器実測図(3) | 217 |
| Fig. 23 出土石器実測図(4) | 218 |
| Fig. 24 出土石器実測図(5) | 219 |
| Fig. 25 出土石器実測図(6) | 221 |
| Fig. 26 出土石器実測図(7) | 222 |
| Fig. 27 出土石器実測図(8) | 224 |
| Fig. 28 出土石器実測図(9) | 225 |
| Fig. 29 出土石器実測図(10) | 226 |
| Fig. 30 出土石器実測図(11) | 229 |
| Fig. 31 出土石器実測図(12) | 231 |
| Fig. 32 出土石器実測図(13) | 233 |

| | |
|-------------------------------|-----|
| Fig. 33 出土土器実測図(2) | 235 |
| Fig. 34 集石列出土の遺物 | 236 |
| Fig. 35 第3号墓出土の遺物 | 237 |
| Fig. 36 第7号墓出土の遺物 | 237 |
| Fig. 37 第8号・第9号墓出土の遺物 | 238 |
| Fig. 38 第10号墓出土の遺物 | 239 |
| Fig. 39 第11号・第12号墓出土の遺物 | 240 |
| Fig. 40 出土銅鏡拓影(1) | 241 |
| Fig. 41 出土銅鏡拓影(2) | 242 |
| Fig. 42 出土銅鏡拓影(3) | 242 |
| Fig. 43 出土挽確實測図 | 243 |

表 目 次

| | |
|------------------------------|-----|
| Tab. 1 野田(A)遺跡近世墓諸元一覧表 | 209 |
| Tab. 2 近世墓床面標高一覧表 | 210 |

図版目次

| | | |
|--------|---------------------|-----|
| PL. 1 | 遺跡遠景 | 247 |
| PL. 2 | 調査にかかる前の状況 | 248 |
| PL. 3 | 遺跡近景 | 249 |
| PL. 4 | 調査風景 | 250 |
| PL. 5 | 調査風景 | 251 |
| PL. 6 | 調査風景 | 252 |
| PL. 7 | 近世墓地近景 | 253 |
| PL. 8 | 集石列と近世墓の調査状況 | 254 |
| PL. 9 | I列の土層の状況(1) | 255 |
| PL. 10 | I列の土層の状況(2) | 256 |
| PL. 11 | 11列の土層の状況 | 257 |
| PL. 12 | 22列(上)と38列(下)の土層の状況 | 258 |
| PL. 13 | 遺物出土状況 | 259 |
| PL. 14 | 集石列の状況 | 260 |
| PL. 15 | 集石列の状況 | 261 |
| PL. 16 | 岩盤とその間の柱穴 | 262 |
| PL. 17 | 第3号墓検出状況 | 263 |
| PL. 18 | 第3号墓検出状況 | 264 |
| PL. 19 | 第4号・第5号・第6号墓検出状況 | 265 |
| PL. 20 | 第4号墓検出状況 | 266 |
| PL. 21 | 第5号墓検出状況 | 267 |
| PL. 22 | 第6号墓検出状況 | 268 |
| PL. 23 | 第7号墓検出状況 | 269 |
| PL. 24 | 第8号墓検出状況 | 270 |
| PL. 25 | 第8号墓検出状況 | 271 |
| PL. 26 | 第9号墓検出状況 | 272 |
| PL. 27 | 第11号墓検出状況 | 273 |
| PL. 28 | 第12号墓検出状況 | 274 |
| PL. 29 | 出土石器(1) | 275 |
| PL. 30 | 出土石器(2) | 276 |
| PL. 31 | 出土石器(3) | 277 |
| PL. 32 | 出土石器(4) | 278 |

| | | |
|-------|--------------------|-----|
| PL.33 | 出土石器 (5) | 279 |
| PL.34 | 出土石器 (6) | 280 |
| PL.35 | 出土石器 (7) | 281 |
| PL.36 | 出土石器 (8) | 282 |
| PL.37 | 出土石器 (9) | 283 |
| PL.38 | 出土石器 (10) | 284 |
| PL.39 | 出土石器 (11) | 285 |
| PL.40 | 出土石器 (12) | 286 |
| PL.41 | 出土石器 (13) | 287 |
| PL.42 | 出土土器 (1) | 288 |
| PL.43 | 出土土器 (2) | 289 |
| PL.44 | 近世墓出土の遺物 (1) | 290 |
| PL.45 | 近世墓出土の遺物 (2) | 291 |
| PL.46 | 挽穀 | 292 |

I 調査

1. 地理的位置

葛城堤の北側一帯に広がる丘陵上と、従来は堤の東端を含む鬼橋町葛城の、標高40mほどまでが葛城堤遺跡といわれていた。さらにこの斜面の北側の、標高50m～60m付近、鬼橋町野田の遺跡が野田遺跡とされ、かって黒曜石の石核や剝片、スクレーパーなどが表面採集されていて、先土器時代の遺跡として記録されている。しかし今回の調査では、この両遺跡をあわせ、高速道路の建設予定地内にある野田B遺跡と区別するため、野田A遺跡と呼ぶこととした。葛城堤のすぐ北から、丘陵上の尾根近くまで200mほどの範囲である。この同一丘陵の斜面上ですぐ西側に接して葛城古墳があるが、これについては葛城遺跡の項に述べた。

多良山系から西方に伸びた丘陵の先端部に、葛城遺跡とともに占地しているが、この丘陵は先端部で小さく分かれ、葛城遺跡とは今は堤となっている低い谷を挟んで相対する場所に位置している。野田A遺跡の乗る丘陵は、南側は緩い傾斜になっているが、北側は急な斜面となって佐奈川内川が形成した冲積平地に接している。葛城遺跡に較べて高さがあり、遺跡北側の尾根上からは、眼下に大村扇状地が一望のもとに望まれ、大村湧の彼方には西彼杵半島の山々が展開する。また北側には佐奈川内川とその支流によって形成された平地と、そこに立地する、岩名遺跡が見下ろせる。さらに北側の丘陵上には先に述べられた黄金山古墳の墳丘の木立が、こんもりと茂ってその所在を示している。

2. 調査の概要

高速道路は葛城堤を跨いで橋を通す設計で、堤の中に橋脚を立てるために北側から進入路を作る必要があり、その工事を急ぐため、早い時期の調査をという要請があった。8月ころのことと、葛城遺跡ではB地点での遺物の取り上げ等の作業があつたが、一部の班を割いてその部分の調査にかかった。

先土器時代から繩文時代にかけての遺物散布地、ということで調査を実施することとなったが、葛城遺跡の調査中に、「野田A遺跡の範囲内に江戸時代の墓がある。」ということを近くの方々から教えられた。現在は埋もれて宅地の庭先の部分になつており、付近の石垣のなかに墓石の一部が見られるとのことであった。しかし、その部分は買収が遅れており、結局は一番最後の調査にまわさねばならなかった。

野田A遺跡の調査は、長崎県果樹試験場に登る道路の北側で、一段低い水田になっている部分とその上段の畠から開始した。葛城遺跡と同じく5m×5mのグリッドを組み、各グリッドには東からA・B・C・・・、南側から北に1・2・3・・・の番号を付けた。この調査では、旧水田の境であったと思われる石垣の跡が検出されたくらいではかの遺構はなく、遺物もほと

んど認められなかった。このため10月末までに、橋脚工事に関係する場所での調査が終了した。

次いで橋脚工事に関係する場所の上段、近世の墓地のあるといわれている場所のすぐ下のみかん畑に移った。ここでは数10cmの深さで岩盤が出てきたが、墓地の存在を思わせる滑石製の五輪塔の部分などが出土した。また多くの陶磁器や滑石製石鍋の破片等も検出され、中世から近世にかけての遺跡である可能性が考えられたが、ここでも時期など、正確に確認されるような遺構は検出されなかった。ただ柱穴と思われるものが確認された。

寒さも強まる12月になって、丘陵斜面上部の水路北側の畠や果樹園の部分に、25列までのグリッドを設定した。年が明けて昭和61年となり、調査区域は順次北側へ伸びていった。遺跡のおおまかな広がりを知るため、西側と北端部付近の調査を先行させたが、柱穴やレンズ状の堆積をした灰層以外には明瞭な遺構は確認されなかった。北側のC-39グリッドなど、一部で遺物の多く出土した場所ではその周辺での出土を確かめるための調査を進めた。2月になって東側の状況を知るために掘り下げをはじめ、また調査可能な北限のB-43グリッドまでの調査を終了した。しかし、それまでの調査で、36列より北側には遺物も少なく、明瞭な遺構も確認されなかっただため、これ以外に存在する可能性もほとんどないと判断し、以北の調査は打ち切った。3月の後半には26列から28列にかけての柱穴群の確認と、31列から34列にかけての東側での範囲の確認作業を続けた。

桜も散った4月中旬、最後まで残っていた10列から19列にかけての調査を開始した。北側の班を順次この地点に向け、墓壙とそれに伴う集石が検出されはじめ、集石に混じって滑石製の塔の部分などが見つかりだした。5月になると享保19(1734)年銘入りの墓石を検出した。いよいよ墓地の状況が明確になりはじめ、各墓壙中の遺物の検出作業と取り上げ作業を続けた。そのなかで第二号墓、第七号墓、第八号墓などからは銅錢が、第四号墓からは錫杖などの出土があった。また第八号墓からは人骨もわずかながら見つかった。

6月になり調査はいよいよ最後となり、第11号墓・第12号墓の実測も終えた。4日には危険防止のため深く掘った場所の埋め戻しをし、道具や器材の水洗を行った。午後、荷物の半分を長崎に向けて送り出し、事務所の片付けを終えた。6月5日、関係方面へ無事に調査が終わつた旨の挨拶を終え、荷物とともに長崎に帰着した。

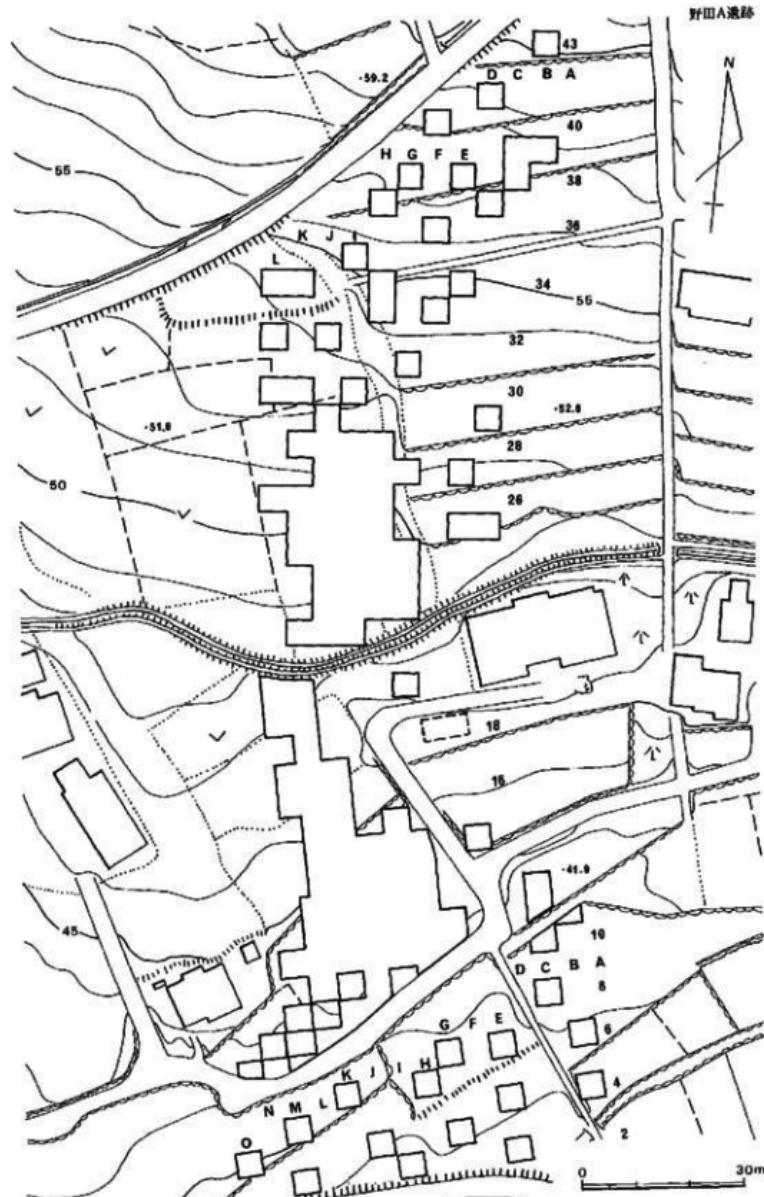


Fig. 1 野田A遺跡周辺地形および調査区域図

II 土層の状況

野田A遺跡の土層の状況について1列で北から南へ、また東西の状況については11列・22列丘陵尾根に近い38列で見ることとした。

まず1列での土層をもとに、野田A遺跡の南北方向での状況について述べる。基本的には表土の下に2層として茶褐色土がある。この層は粘性が大きくしまりがある有機物を含み炭化物も混じっていて乾燥すると多くのひびがはいる。3層は褐色土層で、これもしまりは強い。2層より赤味が強く、場所によっては赤褐色を呈する。この層には有機物が少なく、ひび割れの度合いは2層にくらべ少なくなっている。4層は黄褐色上層で、これも粘性がありしまりが強い。風化した玄武岩の小礫がまじる。また4層としたものは、4層と粘度やしまり具合はほぼ同じであるが黄色味がさらに強いものである。5層が風化した玄武岩の地山となっている。

基本的な土層を最も良く残しているI-22グリッドでの状況について述べると、1層が表土で、現在の耕作土になっている。1層としたものはI列の21グリッドの他にはない。上部は粘度が小さく、ここもかっては耕作土であったものと考えられる。下部は、しまりの度合いや粘性は、上部に似ているが、ここには2cmほどまでの風化した玄武岩の小礫を含んでいる。1'層は2層より濃い褐色を呈している。I-21グリッドからI-35グリッドまでの間75mで約7.5mの高低差があり、北から南に約1/10の傾斜を持つ斜面である。このため底部にあたる21列付近に上からの土砂の流れ込みがあったものであろうと思われる。それとまた21列から23列付近を東から西に流れる用水路があり、この用水路の堤防で土砂がとめられ堆積したものと考えられる。9列から19列にかけてはこの層は認められない。これは宅地等に造成されたり、土砂の堆積する場所がなかったためであろう。

東西の状況について11・22・38列で見てみる。まず11列であるが、ここは野田A遺跡の南側で、南東に向てゆるく傾斜した場所となっている。

土層図からみると11列でのF-11グリッドの東側とK-11グリッドの西側の傾きは、3/100ほどで西側に高くなっている。ここはみかん畠で、埋土があり、擾乱された場所もある。大きな玄武岩の岩が今でも残っている。かつて郡川の護岸工事の際、ここで岩を割り石垣用の石材として使用したとの話もある。この周辺には4層の黄褐色土層は認められない。

調査区域のほぼ中央にあたる22列周辺には、先述したように上部からの土砂の堆積があつてもとの土層の状況が比較的良く残されていた。この付近は東西方向での傾きは、わずかに西側で高くなる程度で、南北方向でもゆるやかになっている。ここはいわゆる「たまり」の部分で地山まで現地表面から1~1.3mある。遺物を出土しているが、上側の層での出土については疑問も残るところである。他の場所では見られないが、4層の下に黄色味の強い褐色の粘質土層がある。しかしこの層は北側ではなく、東の壁面に認められるのみである。

最後に北端部に近い38列での状況を見てみる。G-38グリッドは近年表土の上に埋土がされ

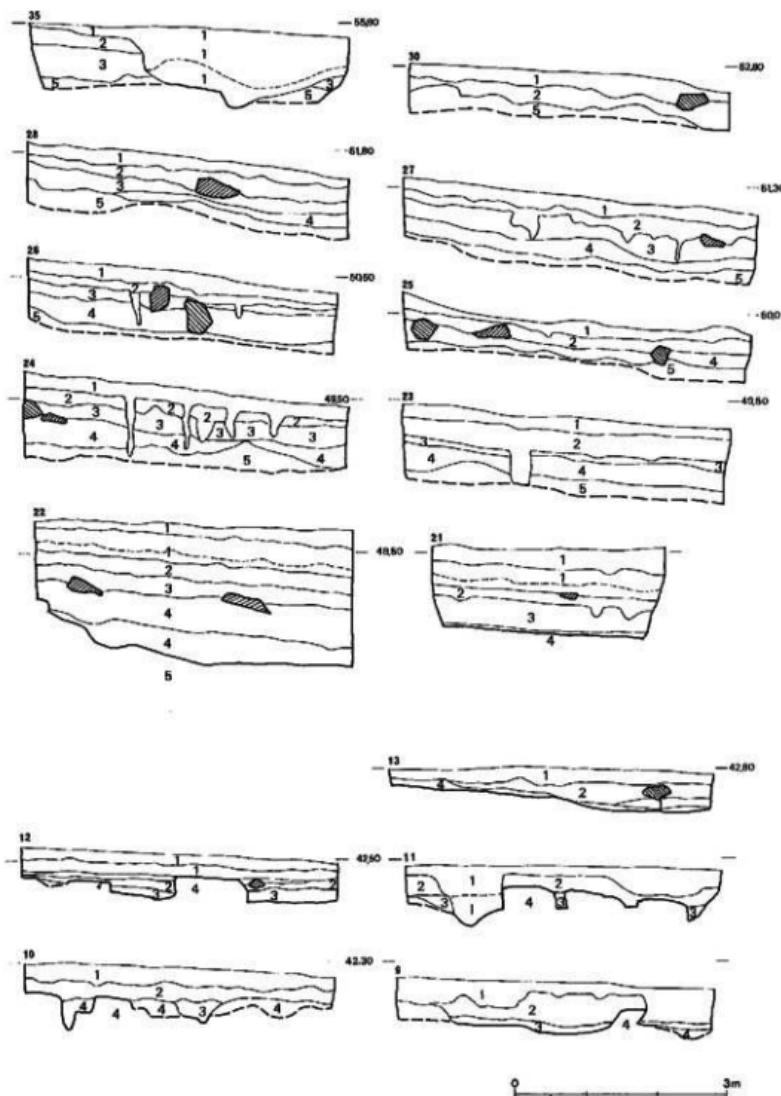


Fig. 2 I列東盤土層図

ている。表土の下に3層があり2層がない。C-38グリッドの東側は擾乱を受けたものらしく軟らかである。この中に弥生式土器片と思われる土器の小片が混じっている。2層としているが、この層も上部はやや黒っぽく、下部はさらに黒い。

10列から14列にかけてのJ列からH列のみかん畑と、その北側上の、現在宅地とその庭になっている場所とは、高さの差が4mほどある。ゆるい斜面の土を削って南側に埋めたためであるが、結果としてはそこにあった近世の墓地と、東西に伸びる集積の遺構を現在まで残してきたこととなった。

22列より北側の、高速道の中心線より西側は自然の傾斜を持つ畑であるが、東側は階段状に造成され、石垣を築かれた果樹園になっている。

2~4列は野田A遺跡で一番低い場所となっていて、現在は水田として使用されている。若干の遺物は検出されたが、もとの水田境の石垣の跡以外には明確な遺構は確認されていない。K、L列は耕作土の下は真っ赤な色をした粘度の強い地山の層となっている。

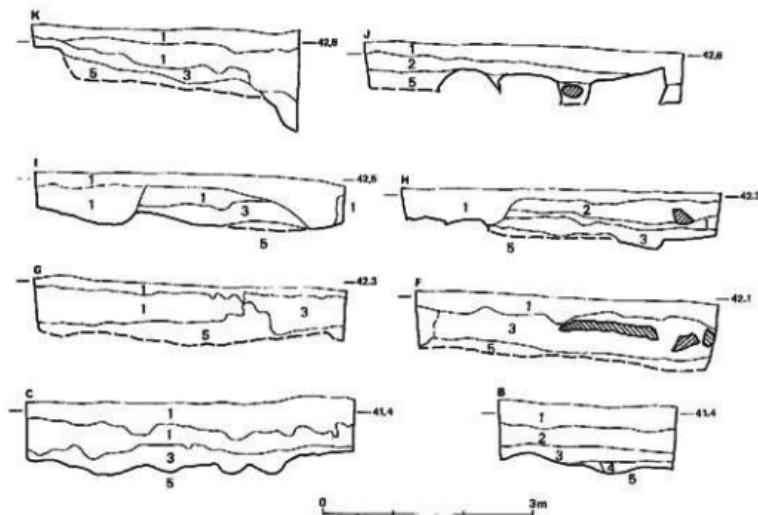


Fig. 3 11列北壁土層図

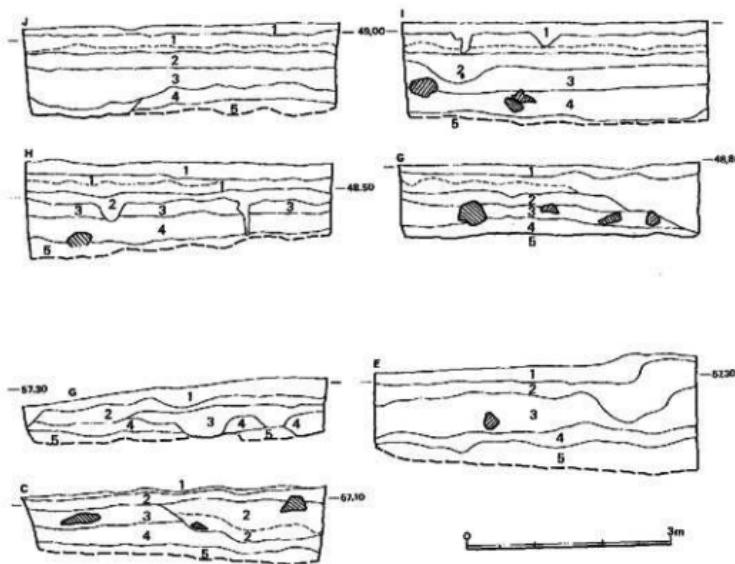


Fig. 4 22列北壁土層図

遺構

遺構の概要

野田A遺跡では当初、遺物の分布地ということで調査にかかった。低部の水田には遺構がなく、徐々に北側に移るにつれ柱穴や土壙がで始めた。柱穴は、都としてとらえられるほど多かったのは10~13列のみかん畠と、21~24列にかけてのG~K列の間や26列の周辺であった。

また、調査の後半になってからは、かつて墓地があったと伝えられていた場所で、長さ10mほどに達する集石の連なりが確認された。これら集石の石や埋土の間に混じって、滑石の塔の部分や陶磁器が検出され、近世の遺構として間違いないものと考えられるようになった。

さらに調査の最終段階で、近世の墓地が表れ、副葬された陶磁器類や銅錢などから、江戸時代なかばころの遺構であることが判明した。墓自体を含め副葬品など、当初の予想よりかなりしっかりした状況で残っていたため、後述するように当時の墓の築造についての詳しい資料を得ることができた。

集石

12列から14列の、I列からK列にかけての埋土の下から集石が検出された。北東から南西方向での現在の長さは約10mある。しかし南西側は防空壕のために切られており、本来の長さは不明である。近世墓列のすぐ北西側に接し、方向も墓のならび方に近い。幅は広いところで約2.5m、狭いところでは1.5mに満たない。大小の礫をむだうさに連ねたもののように見えるが、部分的には大きな石を据えた内側に小形の礫を入れこんでいる場所も認められる。集石は石だけではなく、それらの間には黒色の土がつまっており、礫のつまっている土の厚さは深いところで35cmほどである。この黒色の土は炭化物などを含む層で、もとの地表面であったものと考えられる。これらの土や集石に混じって陶磁器類が出土しており、それらから考えるとこの黒色の土や集石は江戸時代には地表に表れていたものと思われる。またこの集石の中に滑石の塔の一部や破片が検出されたが、なかには「開山和尚」と銘の刻まれたものもあった。

集石の性格については、現在途中で切られているが、もともとそう長く続くものではなかったものと考えられ、墓地の周辺の小石や礫の寄せ場であったものようである。そしてこの中に破損した陶磁器類や塔の破損品などを投棄したものと思われる。近世の墓地と直接的には結び付くものではないが、墓地の営まれた時の遺構には間違いないものと考えられる。

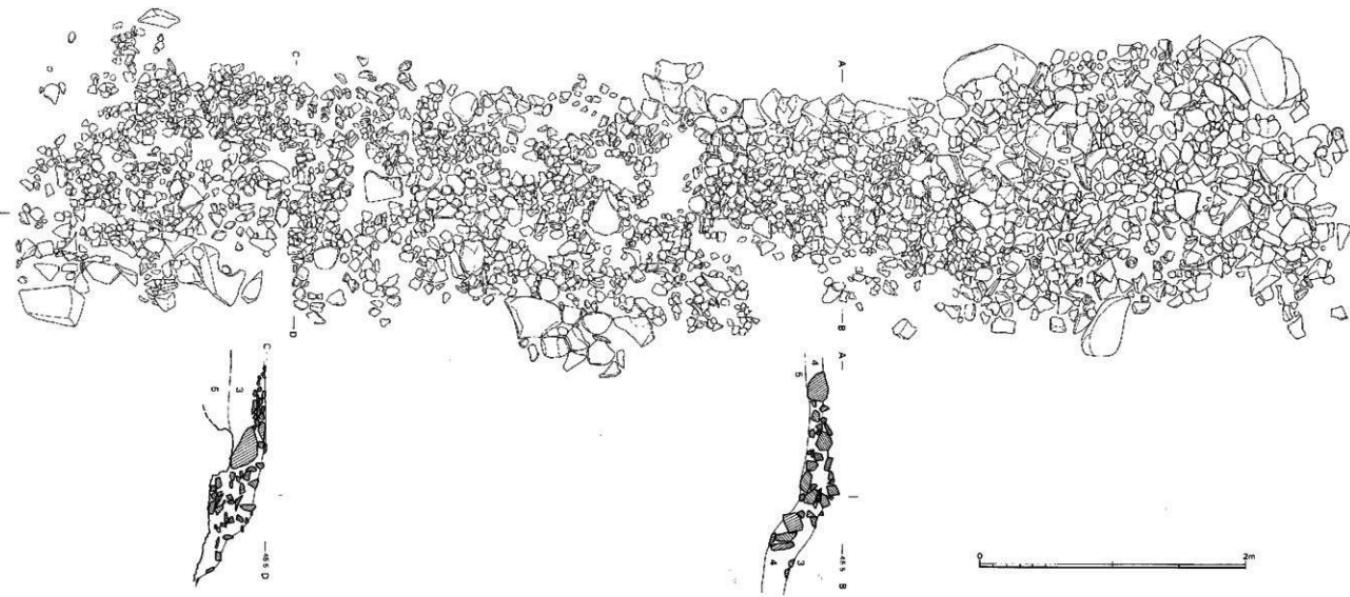


Fig. 5 集石列実測図

J-14・I-14グリッドの土層

集石の列の北東部と、近世墓の列の延長にあたるJ-14・I-14グリッドの北壁の土層について述べる。集石部分での断面図の土層についても、ここでの土層に呼応している。

1層は表土で、2層は埋め土である。3層は旧表土と考えられる褐色土となっている。上面に炭化物や腐植土などが、厚さ5cmほどつまっている。混入している陶磁器片などから、江戸時代には地表となっていた層と考えられる。この層は東傾に1/10ほどの緩い傾斜を持っており、I-14グリッドの東側で消えている。4層は、褐色土で粘性が小さくしまりも少ない。有機物を含む層で、3層と同じく江戸時代の包含層と考えられる。また一部に中世の遺物も認められる。この層は、野田A遺跡で全体にあるものではない。5層は茶褐色土で、一部黄褐色を呈する場所もある。粘質が強くしまりも大きい。風化した玄武岩の礫を含んでいる。この層で縄文式土器や黒曜石の剝片が確認されている。この層はJと1列の境付近で消滅する。この下に傾斜を持った6層の茶褐色土層がレンズ状に入っている。7層の粘性の強い黄褐色土層は、下部に地山の風化礫が混じっている。この層もI-22グリッドなどのように深い場所にしか見られない。この層も6層の終わる付近でなくなっている。ここでは8層が地山となっている。

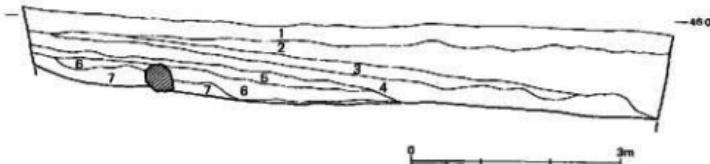


Fig. 6 J-14 グリッド北壁土層図

柱穴

低部の2列崩れの水田では旧水田の畦畔になっていた石垣以外に明確な造構は検出されなかった。9列から13列にかけてのみかん畑では地山の玄武岩の隙間に柱穴と思われる穴は認められた。これらは同一時期のものではなく、低部の深さの差などからくりかえし建物が建てられていたことが窺えた。また、岩に直接柱がのるものもあったことを考えると、その規模についても断言しかねる。この柱穴群はまだ北側にもありH・I・J列の22・23列付近に集中している。ここでのあり方も一様ではなく、掘り込まれた面が傾斜していることもあって、相互の関連性については断定できなかった。形状・法量がかなり異なっており、底部の高さも標高46mから高いもので48.5mあり、大きく違っていた。短期間のものではなく、間をおいて穿された可能性が考えられる。

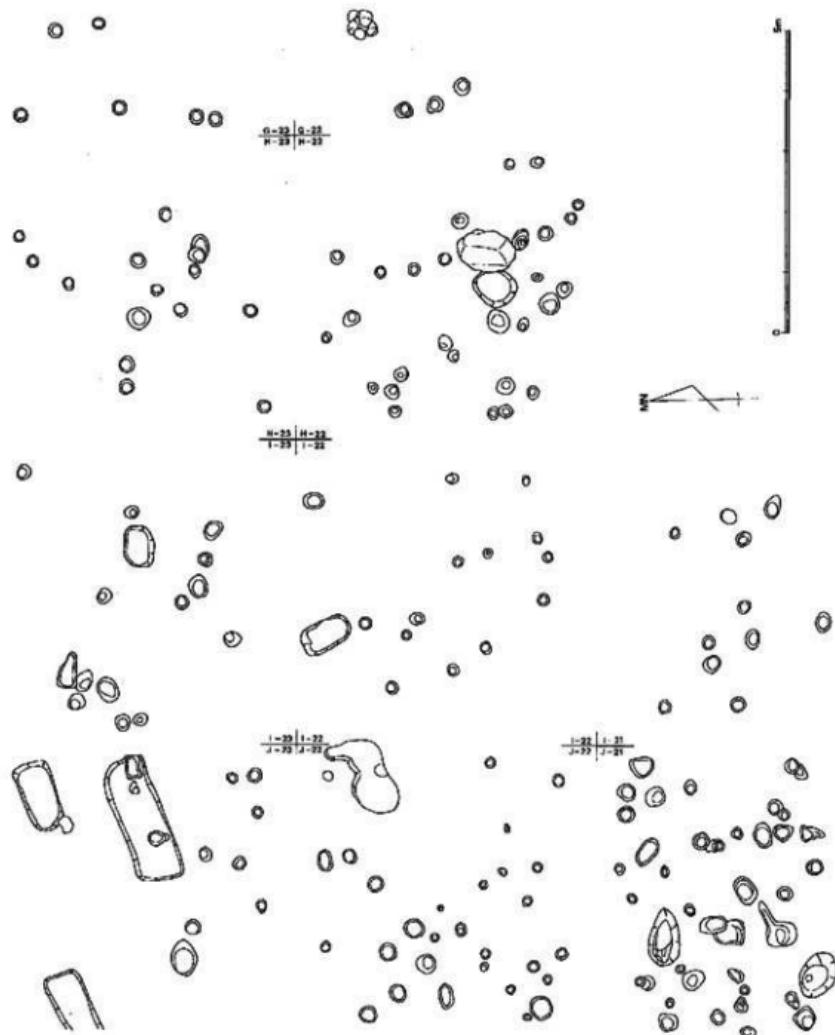


Fig. 7 柱穴検出状況平面図

近世墓

近世墓のあることが調査にかかった地点で、地元の方々から指摘されていた。滑石の五輪塔の部分なども出土しており、中世の逆襲碑を持った山下墓地も近くにあることから、かなり古い時期の墓地である可能性も考えられた。当初、墓と考えて第1号墓の番号を付けたものは確實性がなく、番号は生かしたままにしているが圖等はない。第2号墓から第12号墓までの11墓を検出した。一列になっていて、南西から北東へと伸びている。第4・5・6号墓は形態が同じで南西側に位置しており、第2・3号墓と第7～第10号墓が北東部に位置している。第3号墓と第7・8号墓の北西側に接して第11号墓と第12号墓が列を作っている。また第6号墓と第2号墓の間には第2次大戦時に掘られたという防空壕がある。これら一連の墓のうちいくらくを壊した可能性も考えられる。2・3号は深い掘り込みをしているものである。7号以下と同じ形態の掘り込みと葬り方をしている。第4・5・6号は11墓のうちで他の7墓と形を異なしたもので、地面に長方形のを掘り、ここに棺を埋置している。棺の形が他のものと違っていたと考えられる。10号は墓跡の上部が削られ、底部のみが残っていたので、掘り込み面の形状、大きさ等知り得ない。第7～9号墓と同じような底部をしているが、底面の標高は高く、深い掘り込みがあった可能性は少ない。第11号墓と第12号墓は、第7号墓、第8号墓の北西に接して検出された。いずれも集石の列の下部にあって、集石と墓の掘られた時代との欠後関係を知る上で貴重な存在となった。以下、各墓ごとに記述する。

第2号墓 (Fig. 9)

列をなした墓群のほぼ中央に位置している。北西、南東方向に辺をそろえた四角の掘り込みを持つ。北東部に大きな石があり、これによって掘り形が若干いびつになっている。掘り込み面での大きさは、北西～南東間で1.25m、北東～南西間では1mほどあるが、上部を削られているので築造時の大きさは不明である。ほぼ長方形で、床面まで斜めに直線的に掘り込んでいる。床面の大きさは北西～南東間で0.88m、北東～南西間で0.82mとなっている。現地表面の最高所から深さは1.21mある。床面わずかに南東方向に深くなっている、床面の標高は43.35mである。また南側の隅と東側の部分に掘り込みがある。蓋石は残っていなかった。墓壙上面の大きさは1.25m×1mほどの大きさで、第3号墓、第7～第9号墓、第11号墓、第12号墓など、一度平坦にして墓石を置く場所を確保し、そのあと棺の入るだけの墓壙を掘る形のものとは明らかに違っている。

墓壙は風化した岩盤に掘り込まれていて、掘り具の痕跡が明瞭に残っていた。柄の短い鍬状のものか、山芋掘りに使う鉄棒の先端を鍔状にした道具などを使用して空つたことが推測される。

床面に近い場所に副葬品と釘などが残っていた。副葬品としては寛永通宝6枚、漆の皿など

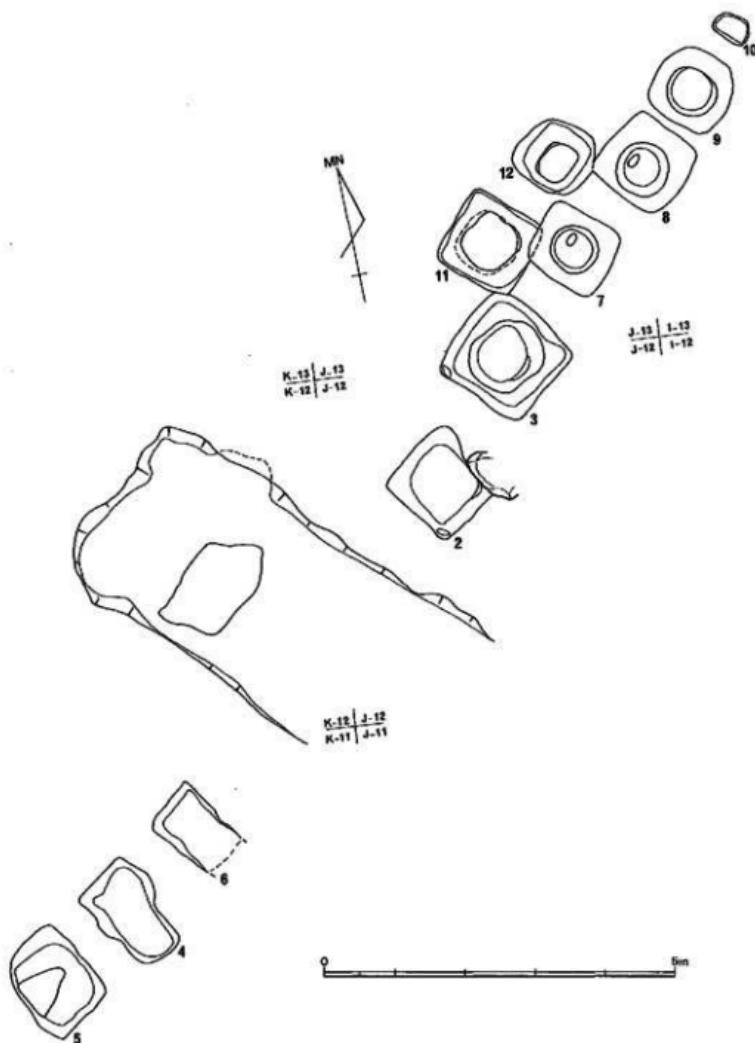


Fig. 8 近世墓配置図

がある。漆の皿は南側の隅に出土し、寛永通宝は南西の壁付近に4枚がまとまり他の2枚はやはりなれての出土であった。中央部付近から南側にかけて釘の出土があり、縦形の木製の棺がおけを埋置していたことが推測される。釘鉄製品の破片まで合わせて68点を確認している。

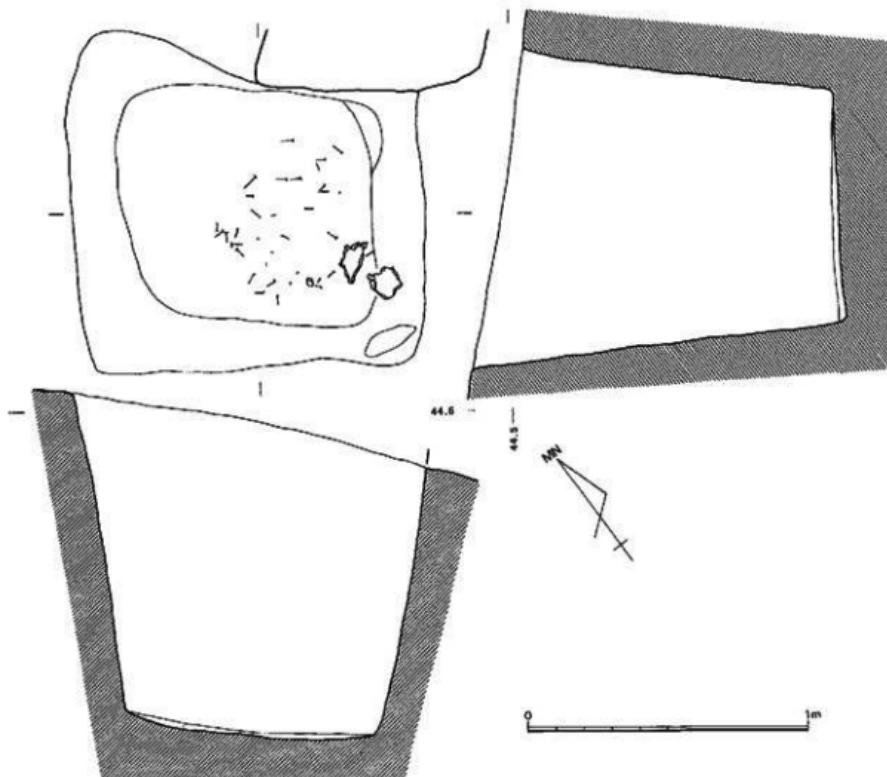


Fig. 9 第2号墓実測図

第3号墓 (Fig. 10)

これも墓群の中央部に近く、第2号墓北東に接して掘られている。これも方形の掘り込みを持つが、第2号墓とは若干向きが異っている。中央部で $1.45m \times 1.45m$ の大きさであるが、北東側と北西側の辺が大きく、ややいびつな方形となっている。地表面から $0.7m$ 掘り下げ、 $1.15m \times 1.2m$ の方形で平坦な面を作り、その面から直径 $1m$ ほどの円形に近い穴を掘り下げている。途中に、蓋石を置く作業の際に使うためのものか、足を掛けるためと考えられる穴を西側隅の壁面に掘り込んでいる。

墓壇は途中の平坦面から深さ $0.95m$ あり、底部は直径 $0.7m$ ほどの円形を呈している。底はほぼ平らで、標高 $42.9m$ ある。途中の手摺面に蓋石を置いているが大き目の石で塞いだあと、小さな石で隙間をうめている。まず長方形の大き目の石を南北方向に二枚ならべ、それらの石の隙間を墓壇の面の隙間に小さな石をかねせ封じている。

墓壇は風化した岩盤に掘り込まれていて、掘り具の痕跡が明瞭に残っていた。柄の短い鉄状のものか、山芋掘りに使う鉄棒の先端を鍔状にした道具などを使用して穿ったことが推測される。

床面にほぼ接する深さに、副葬品と釘が散乱した状況で出土した。埋葬品として磁器と銅鏡がある。北側の壁に近い場所に皿が一枚、北壁の部分に茶碗が一個中央より東寄りに銅鏡一枚が出土している。このほか棺材に使用したと思われる釘とその破損品など、鉄製品54点を見い出した。これらの釘は $60cm$ ほどの円形の範囲の中にあり、それも円形に近い状況で検出されていることから、棺桶に使用されたものと推測される。

第4号墓 (Fig. 11)

墓列の南西側に三基塚まつもののうち一基である。これら三基は防空壕より北東側のものと作りが異なり、時代的な違いか被葬者の違いを示すものかも知れない。

第4号は墓はこれら三基のうちの中央に位置している。南東から北西方向に長い方形で上面の長さは $1.5m$ ある。幅は北西側が広く約 $1m$ あり、南東側では $0.7m$ ほどの不整形な平面形をしている。地表から $0.7m$ ほどを掘り下げて床としているが、床面はほぼ水平で、長さ $1.25m$ 、幅は $0.57m$ ほどの長方形をしている。床面の標高は $43.8m$ になる。

第4号墓の副葬品は錫杖が一本で、棺に使用したと考えられる鉄釘が両小口の部分に多く出土している。いずれも床面に接しており埋葬されたあとの早い時期に崩れ落ちたものと推測される。

錫杖は床のほぼ中央の部分に、先端を北側に向けて、輪を東側に寄せた状態で出土した。本体部は $16cm$ ほどの長さで、柄の本質部分はなくなっていた。出土状況から柄の長さは $80cm$ 以上のものは考えられず、杖のようにして使う長いものではなく、手持ちの短い形のものであったと推測される。

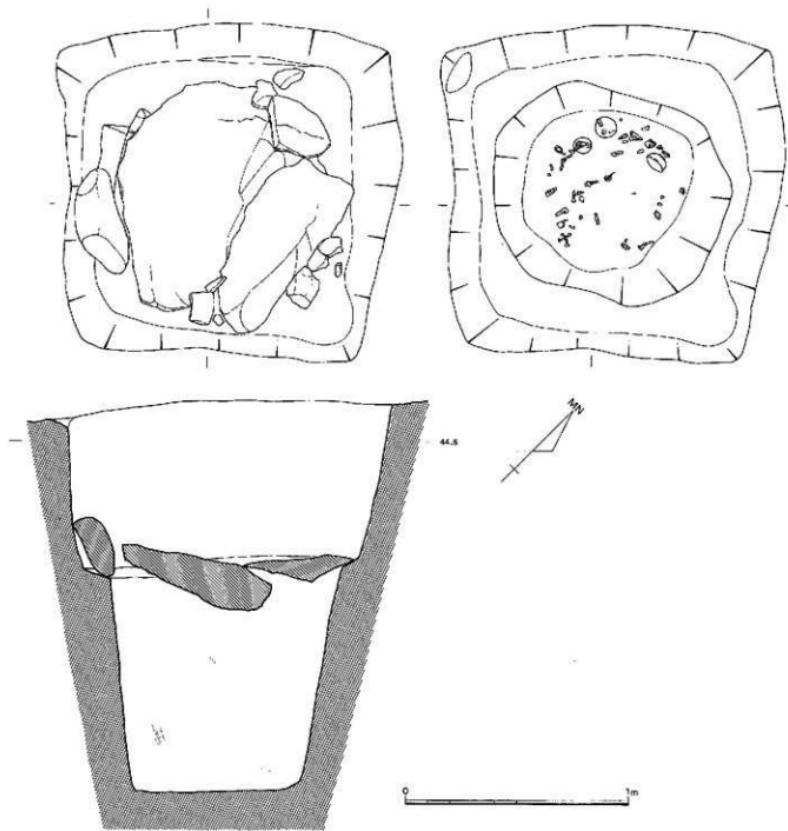


Fig.10 第3号基壇測図

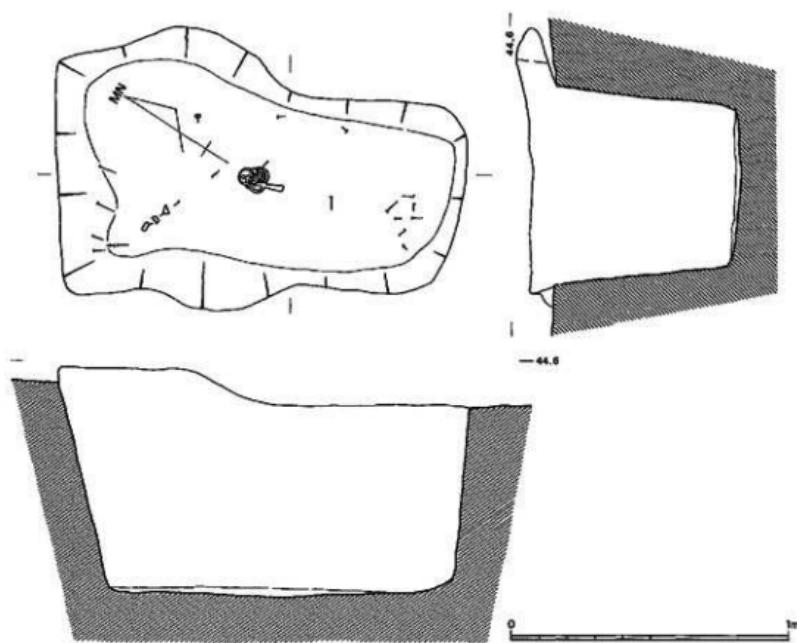


Fig. 11 第4号墓実測図

第5号墓 (Fig. 12)

墓列の最も南西端部に位置していて、第4号墓と隣接するものである。北東から南西方向に長めの方向をしていて、平面の大きさは $1.36\text{m} \times 1.1\text{m}$ ある。地面上 0.7m の墓壙を掘り床面は $1.05\text{m} \times 0.9\text{m}$ ほどの不規形な方形としている。東側で深くなり西側との深さの差は 0.2m ほどになっている。一番深い場所の標高は 43.65m である。

埋葬品としては茶碗を1個入れてあった。墓壙の南側の隅に、口を上にした状態で出土した。また床面の中央部から東側に多かったが鉄釘が認められた。

第6号墓 (Fig. 13)

第4号墓の北東側に位置している。これも第4・第5号墓と長軸を同じ向きに向けている。すなわち北西から南東に向く形であるが、南東部分は床面に達するまでの後世の切り込みを受けている。 1.15m 以上の長さを持ち、広いところで 0.8m の幅があったものと考えられる。現

在北西の部分で 0.5 m の深さがある。床面は南東側が低くなっている、南東端部の床面の標高は 44 m である。

床面の北側寄りの場所に鉄釘の少數が見つかっている。その他には副葬品などは見受けられなかった。

第7号墓 (Fig. 14)

墓列の北東側のもので、南西側に第3号墓、北東側に第8号墓がある。方形の掘り込みを持つ形態のもので、かなりしっかりした状態で残っていた。掘り込みの上面は 1.2 m × 1.1 m ほどあり、かなり整っているが寸のつまつた長方形をしている。南東部で約 1 m、北西部で 0.8 m ほどほぼまっすぐに掘り下げ平坦面を作り、そこに円形に近い墓壙を掘っている。墓壙は、掘り込み面で 0.6 m × 0.7 m ほどの椭円形をしており、底部は 0.5 m × 0.55 m の凸形に近い。平坦面からの深さは 1 m 弱である。底は平らで、床面の標高は 42.93 m ある。墓壙の上には

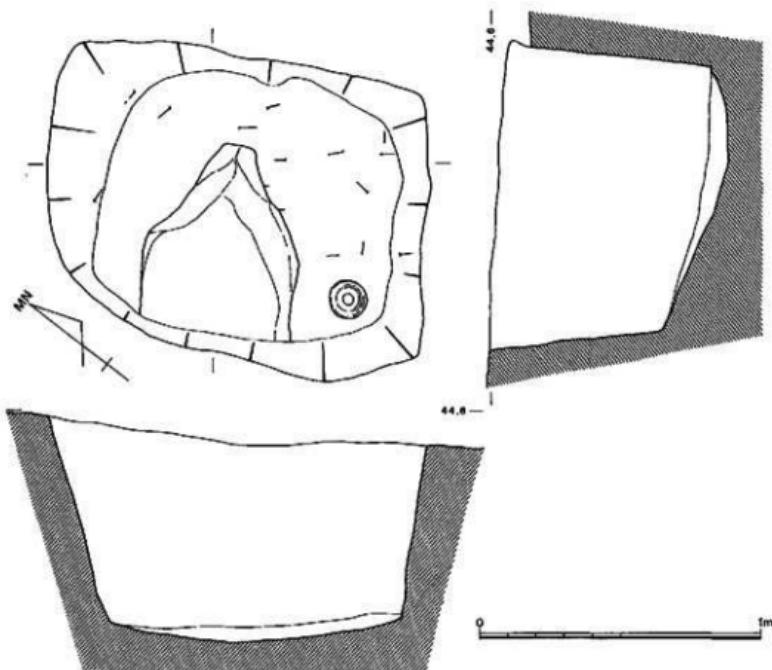


Fig. 12 第5号墓実測図

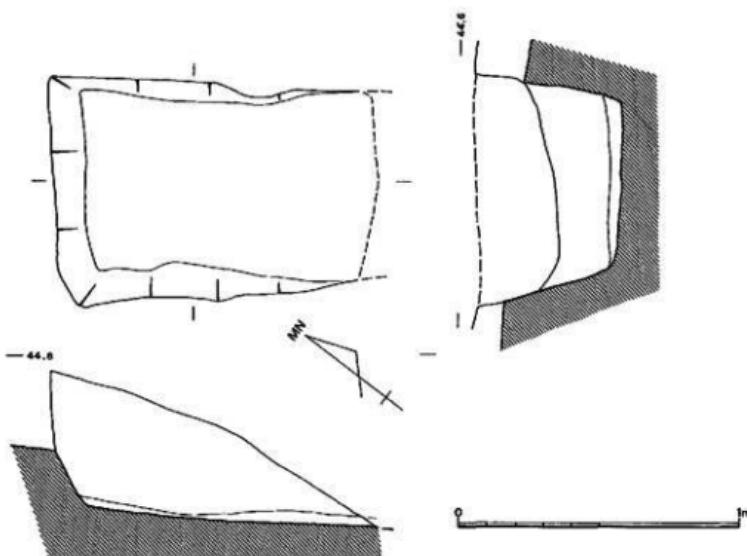


Fig. 13 第6号墓実測図

$0.8\text{ m} \times 0.6\text{ m}$ の大きさで、厚さ10cm弱の板石を一枚置いて蓋にしている。この石で蓋石の全ての機能を果たしており、他に補足するような石は置かれていなかった。

墓壇は風化した岩盤に掘り込まれていて、掘り具の痕跡が明瞭に残っていた。柄の短い歯状のものか、山芋掘りなどに使う、鉄棒の先端を歯状にした道具類を使用して穿ったことが推測される。

床面に接して茶碗と鉄釘が出土した。釘は床面に散乱していて時定の場所に集まる状況ではない。また茶碗は南側の壁に接して横にたおれた状態で出土した。

第8号墓 (Fig. 15) 墓列の北東部に位置するもので、南西側に第7号墓、北東側に第9号墓がある。 $1.35\text{ m} \times 1.5\text{ m}$ ほどの方形に近い掘り込みを持っている。 0.5 m ほど掘り込んで平坦面を作り、そこに小形で深い墓を掘っている。墓壇の上面は円形で、直径 0.8 m 弱の大きさである。約 1 m 掘り下げ、床面は直径 0.5 m ほどに作り、残りは平らに仕上げている。床面の標高は $43:15\text{ m}$ ほどある。

墓壇は風化した岩盤に掘り込まれていて、これも第7号墓と同じように掘り具の痕跡が明瞭に残っていた。柄の短い歯状のものか、山芋掘りに使う鉄棒の先端を歯状にした道具などを使用して穿ったことが推測される。

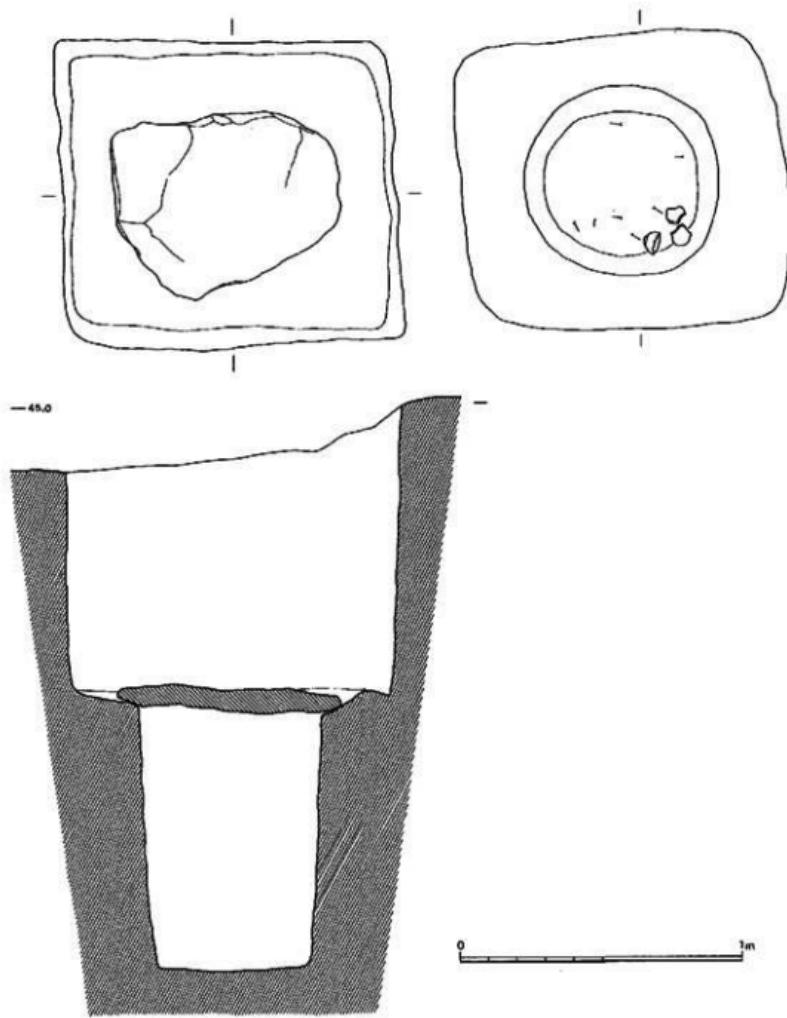


Fig. 14 第7号墓実測図

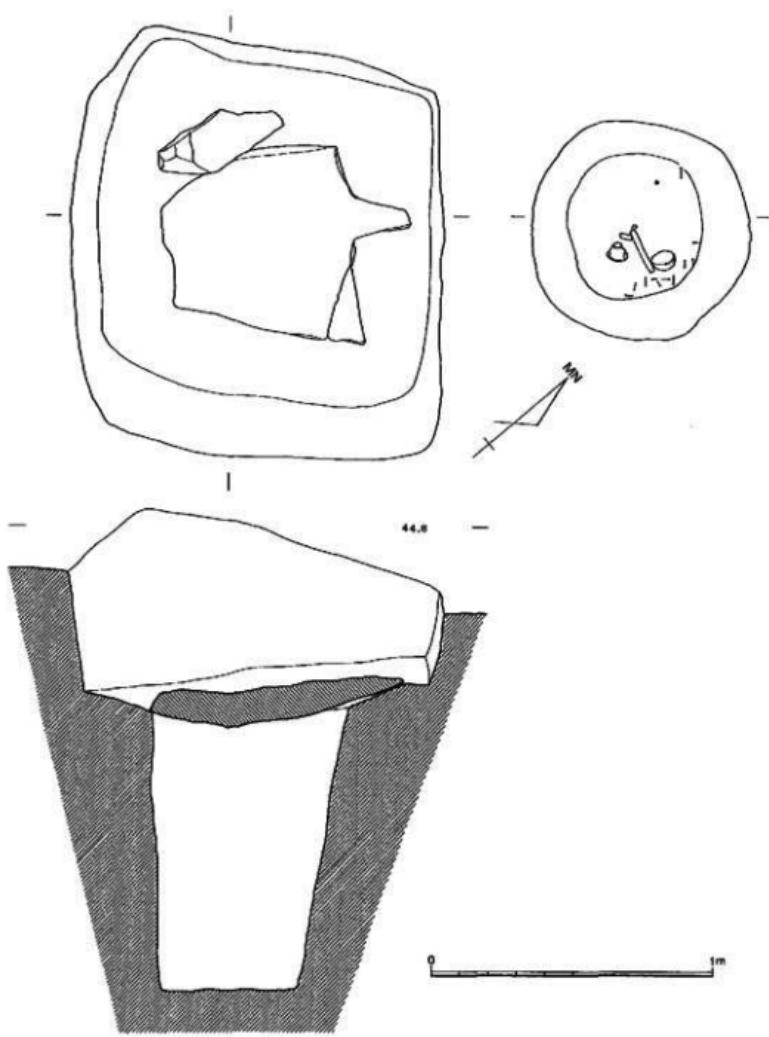


Fig. 15 第8号墓実測図

蓋石として0.7m四方ほどで、厚いところで12cmほどある板石をかぶせている。この蓋石には角状に0.2mほどの突起が出ている。また、この石だけでは不足と考えたものか、縁の部分にも板石を継ぎ足して置いている。

東壁に接して茶碗を副葬してあり、鉄釘が残っていた。また人骨の部分が8片、かなり風化して、もろくなつた状態で検出された。

第9号墓 (Fig. 16)

墓列の北東部に位置し、南西側に第8号墓、北東側に第10号墓が接している。北東部が丸味を持つ方形の掘り込みを持ち、その部分での大きさは1.3m×1.1mある。掘り込み面から深

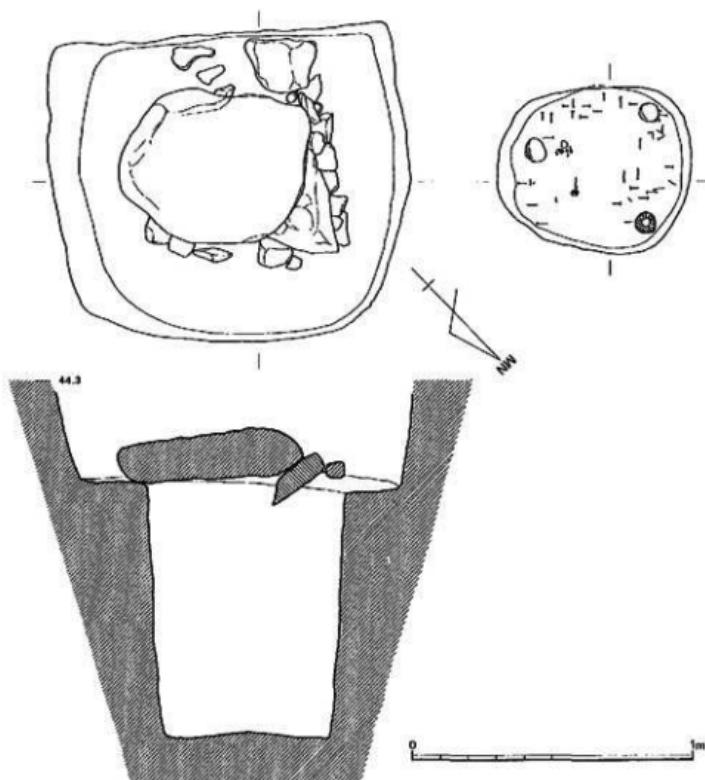


Fig. 16 第9号墓実測図

き0.4mほどのところに1.1m×1.05mほどの平坦面を作り、掘り込み面で0.7m×0.6mほどの楕円形の墓壙を穿っている。墓壙はかなり急に掘り込まれ、床面での大きさは0.6mほどの円形に近い形をしている。わずかに中央部で盛り上がり、周辺部が低い。この部分での標高は43mをわずかに出る程度である。

0.7m×0.55mほどで、最も厚い部分で0.18mほどの石を蓋としてかぶせているが、これで足りない北側の部分に数個の石を置いている。

墓壙の床面に近い周辺部分に鉄釘が出土し、三箇所に分かれて茶碗や皿などが副葬されていた。

第10号墓 (Fig. 17)

墓列の最も北東の隅に位置している。当初は明瞭な墓壙もなく、掘り下げを進める段階で副葬品と考えられる茶碗や盃が出土して墓であることが判明した。すぐそばの墓の蓋石までも達していない高さでの遺物出土状況で、若干時期的な相違があるものであろうか。

残存した墓壙は底部付近のみで、北西から南東に向いたいびつな形の長方形をしている。最も長い部分で0.5m強、幅0.4mほどある。深さは、墓壙と確認した面から0.1mに満たない。南東側にやや傾斜した床面は最も深いところで標高44.25mほどである。

蓋石があったものか、またそれをのせる平坦面を作っていたか、などという点については不明である。

副葬品として銅錢と磁器が出土した。すなわち寛永通宝6枚と茶碗1点、盃3点である。寛永通宝は南西側の壁面に近い場所から、茶碗や盃は北東側の壁面に近い場所からの出土である。茶碗は口を上にして、盃は二個が重なり一個は逆に向いた状態で検出された。また鉄釘が出土していることから棺桶を使用して埋葬したことが窺われる。

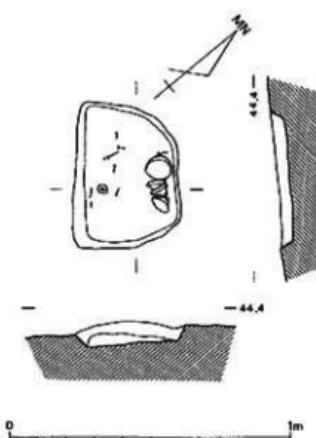


Fig. 17 第10号墓実測図

第11号墓 (Fig. 18)

集石列の下から見つかったもので、第3号墓と第7号墓の北西部に位置している。隣の第12号墓と同様で墓の掘り込み面が第7号墓と一部重複している。約1.15mの正方形に近い掘り込みを行っているが深さは0.5mほどある。一度平坦な面を作り、その中央部付近に0.7mほどの直径で、円形に近い墓壙を掘り下げている。

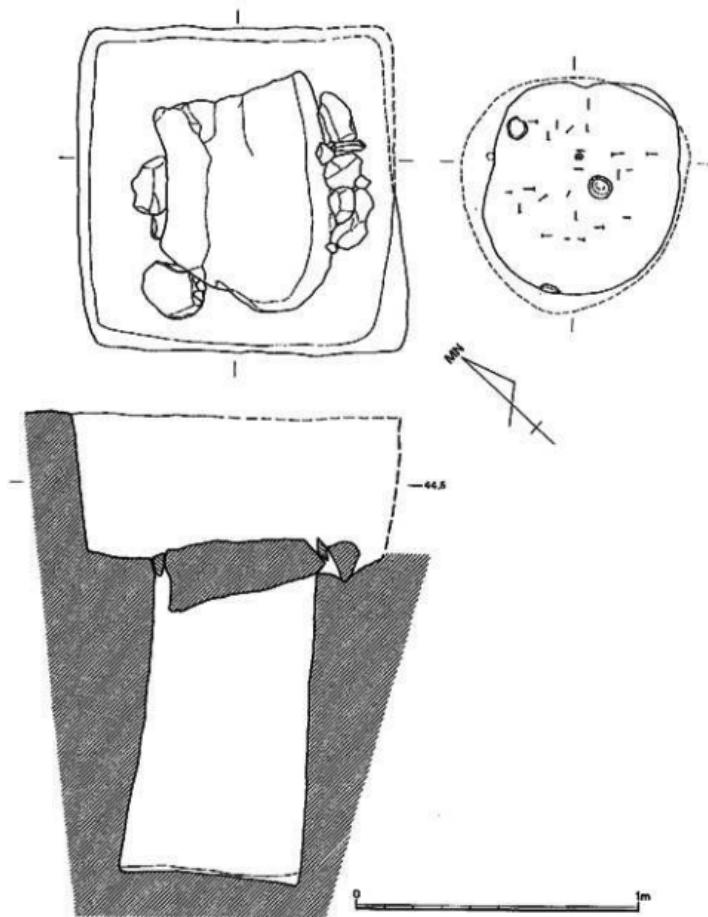


Fig. 18 第11号墓実測図

墓墳はほぼ直立した状況で掘られ、下部に至っても直径を減じない。逆にやや床面が広くなる形である。平坦に仕上げているが東側にやや深く、その点での標高は43.1mほどである。

墓墳は風化した岩盤に掘り込まれていて、掘り具の痕跡が明瞭に残っていた。柄の短い鍬状のものか、山芋掘りに使う鉄棒の先端を鍔状にした道具などを使用して穿ったことが推測される。0.85m × 0.6m の、20cmほどの厚さの石を蓋石としてさし渡し、南東側と北西側にやや小さ目の人頭大のい石を補足している。

床面の中央部近くに銅鏡が出上し、北側の壁面近くと、南西部銅鏡の近くからそれぞれ磁器の皿などが出土した。また鉄釘が散乱していて木製の円形の棺桶が置かれていたことが考えら

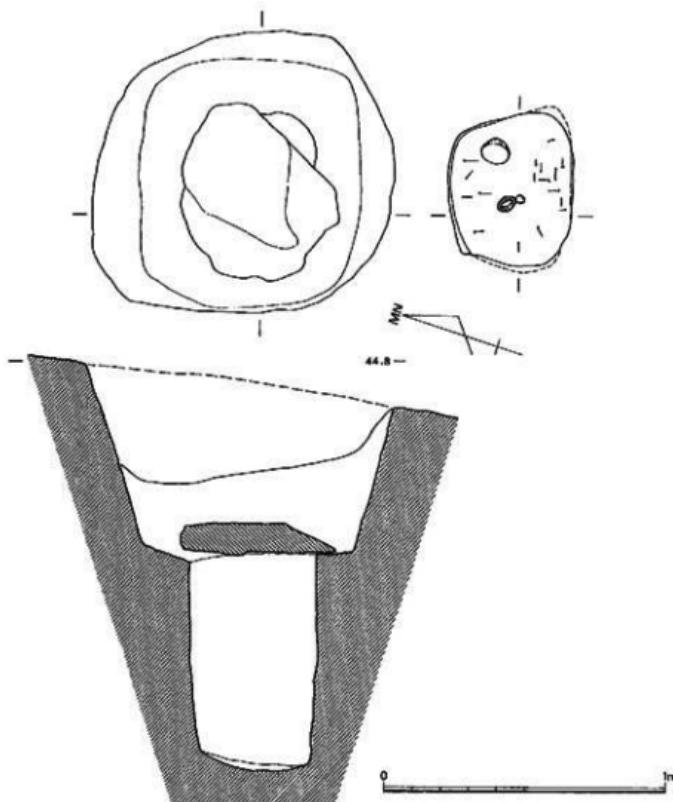


Fig. 19 第12号墓実測図

れる。

第12号墓 (Fig. 19)

第11号墓と同列で、第11号墓の北東側に接して確認されたものである。第11号墓と同じく、集石列の石を取り上げた時点では存在が判明した。掘り込み面はいびつな円形をしており $1.1\text{m} \times 1.0\text{m}$ ほどの大きさがある。また一部第8号墓と重複している。

北側で 0.65m 、南側で 0.5m の深さに掘り、 $0.9\text{m} \times 0.8\text{m}$ ほどの隅丸の方形に平坦面を作っている。この面から墓壇を掘り下げているが、大きさは $0.55\text{m} \times 0.45\text{m}$ の隅の丸い長方形になっている。深さは約 0.8m あり、中央部の一一番深い場所での標高は 43.3m ほどである。この墓壇にも明らかな掘り具の痕跡が残っている。

蓋石は $0.6\text{m} \times 0.5\text{m}$ で厚さ 10cm ほどのものを使用している。

副葬品は磁器2点と銅鏡である。このほかに鉄釘が散乱していたため、棺桶の使用されていたことが推測される。これらの遺物はほとんど床面に散っていた。

以上に述べてきたいろいろな墓について、その床面の高さと平面の形を示したものが Tab.2 である。これからのみでもいくつかの知見が得られるので、他の点から知られることも合わせて述べ、同一墓列にあるものでも違いが存在する点を指摘しておきたい。Tab.2によると第10号墓の床面が極端に高く、第6、4、5号がそれに続いている。その他のものの床面は 42.9cm から 43.3cm の間にあり、これも一連のものと思われる。以上の点から床面の高さの一番低いものは、蓋石を持つものが多いこと、蓋石を置く方形の面を一担平らにし、円形に近い墓壇のみを掘り下げる点が多く共通し、一群のものとしてとらえることが可能と考えられる。第一の群としては標高 $43.6\sim44.0\text{m}$ の間に床面を取る第4～6号墓を上げることができよう。掘り下げ面や床面の形が長方形であること、そしてその向きが共通していることもその理由となる。第10号墓の床面が 44.25m と高く、またかなり高い標高 44.0m の6号墓とは 14m ほど隔たっていて、第二の群との違いは明白であろう。第一の群や第二の群とは明らかに別の系統と考えられる。

- ・10号部分の地表面が極端に高いものでなかったことは、すぐ北側にある集石列の高さがさほど変わらずに伸びていることからも窺い知ることができる。
- ・底面の形が他のものにくらべ規則性にのっとっていない。
- ・蓋が3個と多い。
- ・ $1.2\sim1.35\text{m}$ の差は、他のもののように蓋石面まで掘ってさらに墓壇を掘るものと違って、地表から直接墓壇を掘り、地表部分に何か施設を持っていた可能性も考えられる。

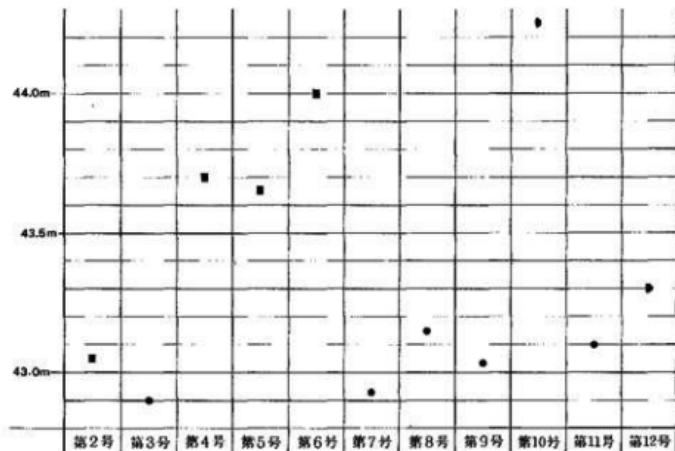
Tab. 1 野田(A)遺跡近世墓諸元一覧表

| 番 号 | 規 模 | | | | | | 出 土 遺 物 | 備 考 |
|-------|-----------------|-------------------|-----------------------|--------------|--------------|-------|---------------------------------------|----------|
| | 掘り込みの大きさ (m) | 墓石ののる部分の広さ (m) | 墓壙の大きさ (m) | 墓壙の深さ (m) | 床面の標高 (m) | 蓋石の有無 | | |
| 第2号墓 | 1.25×1 | | 1.25×1 | 1.21 | 43.35 | 無 | 寛永通宝 6枚 漆の皿 鉄釘 68点 | 足を掛けた穴あり |
| 第3号墓 | 1.45×1.45 | 1.25×1.2 | 0.75×0.7 ほどの円形 | 1.0 | 42.9 | 有 | 磁器 盆2枚、小碗1個 銅鏡 1枚 釘と鉄製品 54個 | * |
| 第4号墓 | 1.5×1~1.0 | | 床面の大きさ 1.25×0.65 | 0.8 | 43.8 | 無 | 錫杖 1本 鉄釘 多数 | 長方形の墓壙 |
| 第5号墓 | 1.35×1.1 | | 床面の大きさ 1.05×0.9 | 0.8 | 43.65 | 無 | 小碗 1個 鉄釘 多数 | * |
| 第6号墓 | (1.15)×0.8 | | 床面の大きさ (1.05)×0.65 | 0.5 | 44.0 | 無 | 鉄釘 3点 | * |
| 第7号墓 | 1.2×1.1 | 1.1×1.0 | 0.7×0.68 | 0.95 | 42.93 | 有 | 鉄釘 14点 | 完全な形で残る |
| 第8号墓 | 1.5×1.35 | 1.25×1.2 | 直径0.78の円形 | 1.05 | 43.15 | 有 | 小碗 1点 盖 1点 鉄釘 | 人骨わずかに残存 |
| 第9号墓 | 1.3×1.1 | 1.1×1.05 | 0.7×0.6 の横凸形 | 0.9 | 43.05 | 有 | 小碗 1点 鉄釘 | 比較的良好に残る |
| 第10号墓 | (0.5×0.4) | | (0.55×0.4) | (0.1) | 44.25 | | 銅鏡(寛永通宝 6枚) 磁器(茶碗1点 盖3点) 鉄釘 十数点 | 底部のみ残る |
| 第11号墓 | 1.15×1.15 | 1.08×1.08 | 直径0.7×0.75 の円形 | 1.1 | 43.1 | 有 | 小碗 土師質皿 2点 鉄釘 | 比較的良好に残る |
| 第12号墓 | 1.1×1.0 の円形 | 0.88×0.80 | 0.55×0.45 | 0.8 | 43.3 | 有 | 磁器 2点 銅鏡 鉄釘 | * |

・郷村記に寺院があったことが記録されていて、庵的なものがあったことが考えられる。これらの墓地群はこの庵に関係するものであろうか。

磁器は波佐見の系統の18世紀初期から前期くらいの時期が考えられ、集石中から出た墓碑の1734年とも一致する。おそらく18世紀のころ前後に篆かれていたものと思われる。

Tab. 2 近世墓床面標高一覧表



遺物の概要

・野田A遺跡では、先土器時代から縄文時代の遺物が出土している。また弥生時代、古墳時代の遺物も若干出土した。しかし、これらの多くは整った状況での層からの出土ではなく、また明確な遺構に伴っての出土でもない。しかし、調査の終末ころになって検出された集石列や江戸時代の墓地からは、埋葬品が検出された。

先土器時代の遺物では、ナイフ形石器、台形石器があり、マイクロ・コアも出土している。縄文時代の石器が多く、土器は後期のものと晩期のものに限られる。弥生時代・古墳時代は遺物が極端に少なく、いずれも上器片が若干出土しているにすぎない。滑石製の石鍋や五輪塔の部品は、いずれも中世のものと考えられる。江戸時代の墓や、それ以降の集石列からは波佐見系統の磁器や素焼きの小皿が出土し、三途の川の渡し貨とされる銅錢も検出された。

以下、時代の種類ごとの遺物について述べる。

ナイフ形石器 (Fig. 20)

10点が出土している。1は黒灰色をした安山岩の製品で、長さ2.8cm、幅1.2cm、厚さ5mmの完成品である。2は先端部をわずかに欠いたもので、バテナを持つ。一边に自然面を残している。調整は入念に施されている。3は大形になるもので、推測によれば6cm近くになるものであろう。幅は1.7cm、最も厚いところで7mmほどある。古いバテナが全体を覆っている。裏面は数回の剥離を加えたあとでプランティングを施している。裏面は一度の剥離であるが打痕痕に調整を加えて取り外している。4も先端部分をわずかに欠いている。刃部は使用によって小さな欠けがかなり付いている。3・4は黒色の良質の黒曜石製である。5は黒灰色の透明な黒曜石製である。短くて幅の広い形であるが、これも先端部を欠いている。6はきれいに剥ぎ取った剣片に、入念なプランティングを施したものである。7は細長い形のもので、基部をなくしている。現存する長さ3cmで、幅1.1cm、厚さ4mmを計る。黒灰色と黒色が縞になった黒曜石製である。8は基部のみでなかば以上を欠失している。古いバテナが残る。9も基部のみでなかばから先を欠いている。10は幅広の形のものの基部で、入念な調整が施されている。8~10ともに黒色の黒曜石で作られている。

台形様石器 (Fig. 20)

2点が出土している。11は灰黒色の黒曜石製で、大きな剝離のあと、両側縁部に入念な調整を施したものである。刃部はやや斜めに付けられている。長さ3.3cm、幅2.1cm、最も厚い部分で8mmほどである。12は黒色の良質な黒曜石製であるが、古いバテナに全体が覆われ、一見安山岩風に見える。長さ3cmに対して幅1.6cmと、やや縱長の形をしており、これも刃部は斜めに作り出している。両側縁と下端部にはていねいな調整痕が認められる。

細石刃 (Fig. 20)

微細な破片を入れるとまだ多くなるが、図化したものは9点である。13は長さ2.6cm、幅1cmに満たない。整った形のもので、古いバテナを持つ。縞の入った黒曜石製である。14は途中で折れている。幅が1cmをわずかに超える。黒色で良質の黒曜石である。15・一側縁部が調整を受けたものかつぶれしている。これも下端部が折れたものと考えられる。16・長さ2.3cmに対して幅は7mm以下となっている。側縁部の片側が使用によるものかつぶれしている。打撃面に自然面を残したままのものである。17も途中で折れたものである。15・16・17とともに良質の黒曜石を使用している。18・長さ1.7cm、幅5mmの小形のものである透明な灰黒色の黒曜石製。19・整った形のものであったろうと考えられるが、途中で折れている。幅は7mmほどある。古いバテナが付いている。20・透明な黒曜石製。細長く整った形のものが途中で折れたと考えられる製品である。21・やや幅の広い不調整な整品である。良質の黒い黒曜石で作られている。これも途中で折れたものと思われる。

細石核 (Fig. 21)

二側面に調整を施した細石核で、石刃を剥ぎ取った痕跡を残している。上部からの敲打によって大きく割れている。やや古いバテナがわずかに残っている。高さ3.8cmある。黒色の黒曜石である。

石核 (Fig. 21)

これも良質の黒色を呈する黒曜石である。上方下方から打撃を加えて剥片を取ったものである。わずかに自然面の残る部分がある。高さは4.7cmである。

尖頭器 (Fig. 21)

3・4・5は尖頭器で、3・4は三棱尖頭器といわれるものである。3は現在6.8cmが残って先端を欠いているが、8cmくらいの大きさが推測される。幅は2.4cm、厚さは1.5cmある。は1.5cmある。古いバテナが全面を覆っているが、欠けた部分での観察によれば、黒色に濃い灰色の縞の入った良質の黒曜石製である。裏面を大きく剥ぎ、中央に縦に縫線をはさんだ二面で比較的細かな調整を行っている。4は小形のもので長さ3.2cmが残っている。裏面には横方向からの打撃によって剥離した跡を残し、縫線を挟む両面に入念な調整を加えている。基部の先端部分には自然面を残している。黒色で良質な黒曜石製である。薄いバテナが観察される。5・灰黒色をした安山岩製の完形品である。長さ3.9cm、最大幅2.2cm、厚さ0.9cmで、やや形が小さい。荒く剥離を加えたあと、両側縁部分、基部ともに調整を加えている。

石匙 (Fig. 21)

6は継長の石匙で、長さ7.0cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmの完形品である。黒色な緻密な安山岩製であるが、表面は灰黒色に風化している。大きな剥片に荒い剥離を加え、さらに周縁部にこまかに調整を施している。また上端部には簡単な加工を施してつまみを作り出している。

剥片 (Fig. 22)

大きさや形が異なるものもあるが、いずれも剥片と、スクレーバー的に使用した刀器、使用



Fig. 20 出土石器実測図 (1)

痕を持つ剝片類で、27点を図示している。1は形の整った剝片で、長さ2.9cmが残っていた。途中で折れているので、本来の長さではない。幅は1.6cmあり、厚さは4mmである。全面に古いバテナが残っている。2も古いバテナが残り、途中で折れたものである。幅は1.4cmある。3・4・5ともに縦長の剝片の折れて残った部分である。古いバテナを有する。1～5ともに縞の入った黒曜石製である。6は片側の側縁部のみに調整痕を残していて、他の側縁部にはわずかに自然面がある。7は長さが6cmを超す長さのもので細長い。両側縁に使用によるものと思われる痕跡が残っている。6と同じく良質の黒色を呈した黒曜石製である。8も縦長の剝片であるが、厚さが6mm以上ある。古いバテナがあり、片側のみに調整痕がある。9・古いバテナを持つもので、濃い黒灰色の良質な黒曜石製であるが、一見安山岩のように見える。湾曲の大きな剝片で、使用によると思われる痕跡がある。11・長さ5cmの不整形で湾曲の多い剝片である。縞の入った不透明の黒曜石で周辺部に調整が施されている。13・14ともに両側縁部に調整と使用の痕跡が残っている。15・淀姫系と考えられる黒曜石製で、上と下の辺部に調整を施している。また側縁部の片側には使用によると思われる痕跡が残っている。16～19はいずれも黒色の良質な黒曜石で、側縁部に使用によって付いたと思われる痕跡が残っている。20は2.9cmで細長い形のもので、古いバテナに覆われている。同一側面の表と裏の二辺に調整痕が認められる。21は透明で灰色の、22は黒色で良質の、23は淀姫系の黒曜石であり、いずれも両側縁部に使用痕と思われるものが残っている。24は古いバテナを持つ剝片である。25・26・27は黒色の良質な黒曜石を使用している。25は側縁部に使用のためと考えられる痕跡を残し、26は最下端部に入念な調整を加えている。27は縦長の剝片を折ったもので、折口の面に調整を加えており、片側の側縁部には使用痕と思われるものが残っている。

スクレーパー (Fig. 23)

刃部の類はかなりの数があったが、黒曜石製のスクレーパーとしては13点を図に示した。ここに示したものうち、1と9は縞模様が入るが良質な黒曜石で古いバテナを持つ。3は淀姫系の灰黒色の不透明な黒曜石製、4は灰黒色の黒曜石製である。その他のものはいずれも黒色で良質な黒曜石を使用して作られている。

1は一部に自然面を残した大きな形の湾曲の多い剝片である。一方の側縁部に調整を施している。2・上端部に自然面を残している。側縁部の片側に調整を加えた痕跡を持つ。3・幅広の不整形の剝片の側縁部に調整を加えたものである。4・一部に自然面を残した剝片に、入念な調整を加えた製品である。5・縦長の剝片から作られている。6・7・8とともに幅の広い剝片から作られている。側縁部には使用によるものか小さなきずの付いたものも認められる。9・縦5cm、幅3.5cmの幅の広い不整形な剝片を作り、その上辺部と側縁部の片側を調整したものである。10は下端部に一部自然面を残し、片側の側縁部を使用している。11・12は縦長の剝片を周囲から調整したもので、ラウンド・スクレーパーと考えられる。ほぼ周圍にわたって加工の痕跡を残している。13・11、12より大形のもので、3.1cm×2.7cmほどの大きさを持つ。一辺

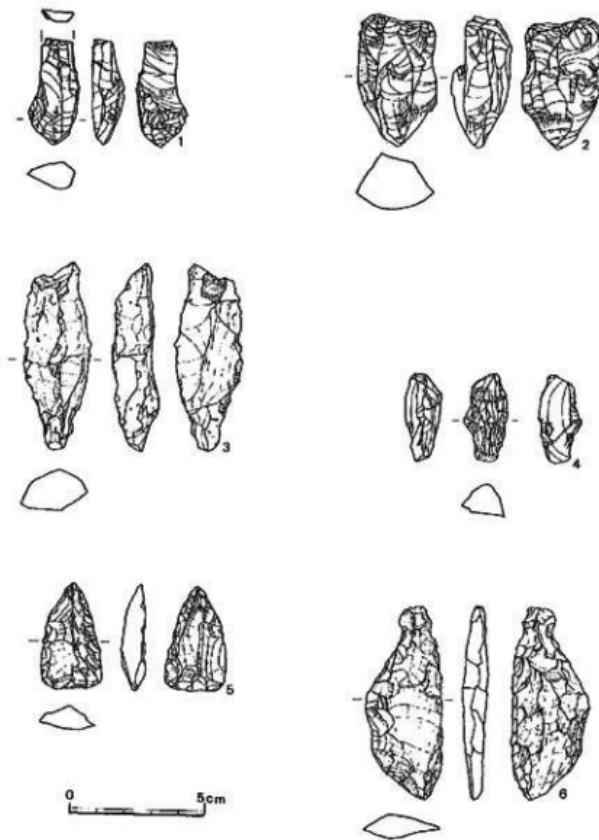


Fig. 21 出土石器実測図 (2)

部に自然面を残すが、その他の部分に調整を加えている。これもラウンド・スクレーバーであろう。

スクレーバー (Fig. 24)

1~7ともに安山岩のスクレーバーである。1は黒灰色の緻密な質の石材で作っている。一見槍先と思わせる形のものであるが、片側の側縁部と下辺部に自然面を残している。横割ぎの大きな剥片の一側縁部に調整を施している。長さ9.4cm、幅4.6cmある。2・表面が風化して灰褐色を呈している。横に剝いだ剥片を利用したもので、厚さは比較的薄い。両側縁部に調整を施している。瀬戸内技法の影響を受けたナイフ形の石器である。3・不定形な形をしている。表面の風化はきほど進んでおらず、灰黒色を呈している。厚さが1.8cmとかなり厚い。周縁部に調整を加え、刃部として作り出している。4・断面が三角形になるように削られているが、原石は円錐であったことを窺わせる自然面を一個縁部に残している。直線に近い一側縁部に調整を加えた痕跡が残っている。これも緻密な石材で、黒灰色を呈している。表面は風化が進み灰褐色を呈している。5・表面は風化して灰色を呈しているが、削れ口から見ると黒色で緻密な安山岩である。断面が薄い三角形になるような剥片とし、刃部を調整している。背部に自然面を残している。6・これも緻密な黒色の石を使っているが、表面は風化によって灰色となっている。薄い剥片の一側縁部に入念な調整を施して刃部を形整している。長さ6.2cm、幅5.1cmで、厚さ9mmを計る。7・表面が黒灰色に風化しているが、これも黒色で緻密な石材を使用している。断面が薄い三角形状な剥片を作り、最も長い側縁部に調整を施して刃部としている。8・下辺部を調整して刃部としている。長方形で、高さ8.1cm、幅5.1cm、厚さ2.4cmの斧形をしている。黒色の良質な石材であるが、風化のため灰黒色を呈している。片側の側縁部に自然面を残している。

砥石 (Fig. 30)

6・変形の砥石で緻密な粘板岩質の石材を使用している。青灰色を呈し、長さ10.4cmある。かなり湾曲した研ぎ面を残している。9・砂岩製で、厚さは1.2cmと薄い製品である。茶褐色を呈し、二片に折れて出土した。両面に研ぎ面を残し、両側縁は削ったままの痕跡を残している。

円盤状石製品 (Fig. 30)

青灰色の片岩で作られた、直径5.4cmほどの円盤状石製品である。厚さは1.2cmほどあり、周辺部は薄く作っている。研いだような痕跡は認められず、また穴も穿たれてはいない。幼児の玩具用のものででもあろうか。正確な使用目的については知り得ない。



Fig.22 出土石器実測図 (3)

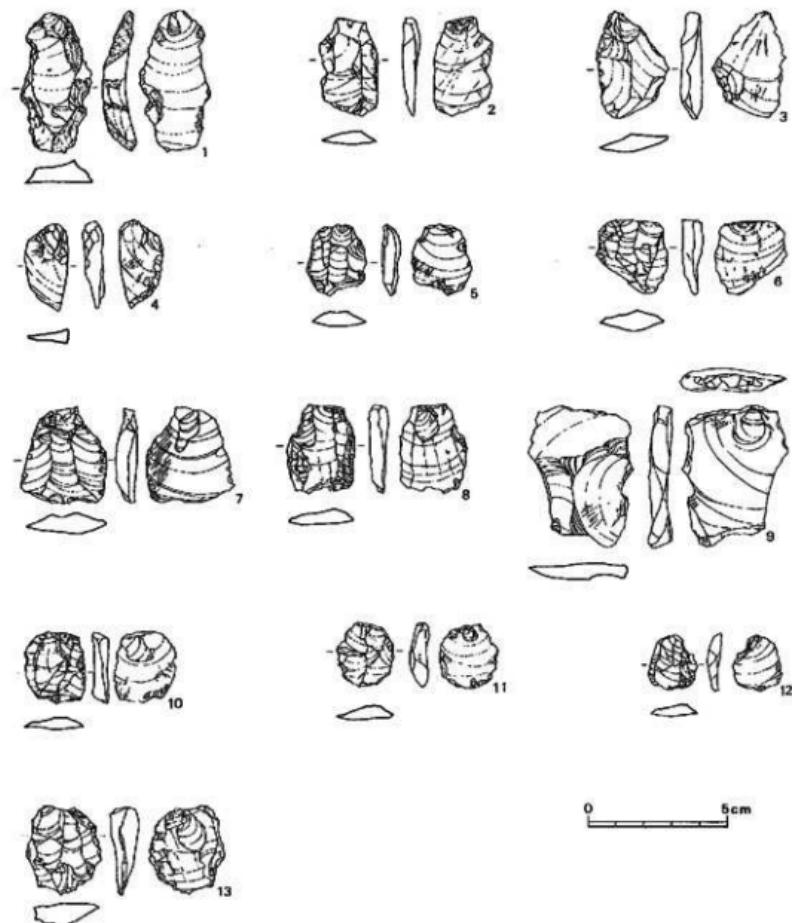


Fig. 23 出土石器実測図 (4)

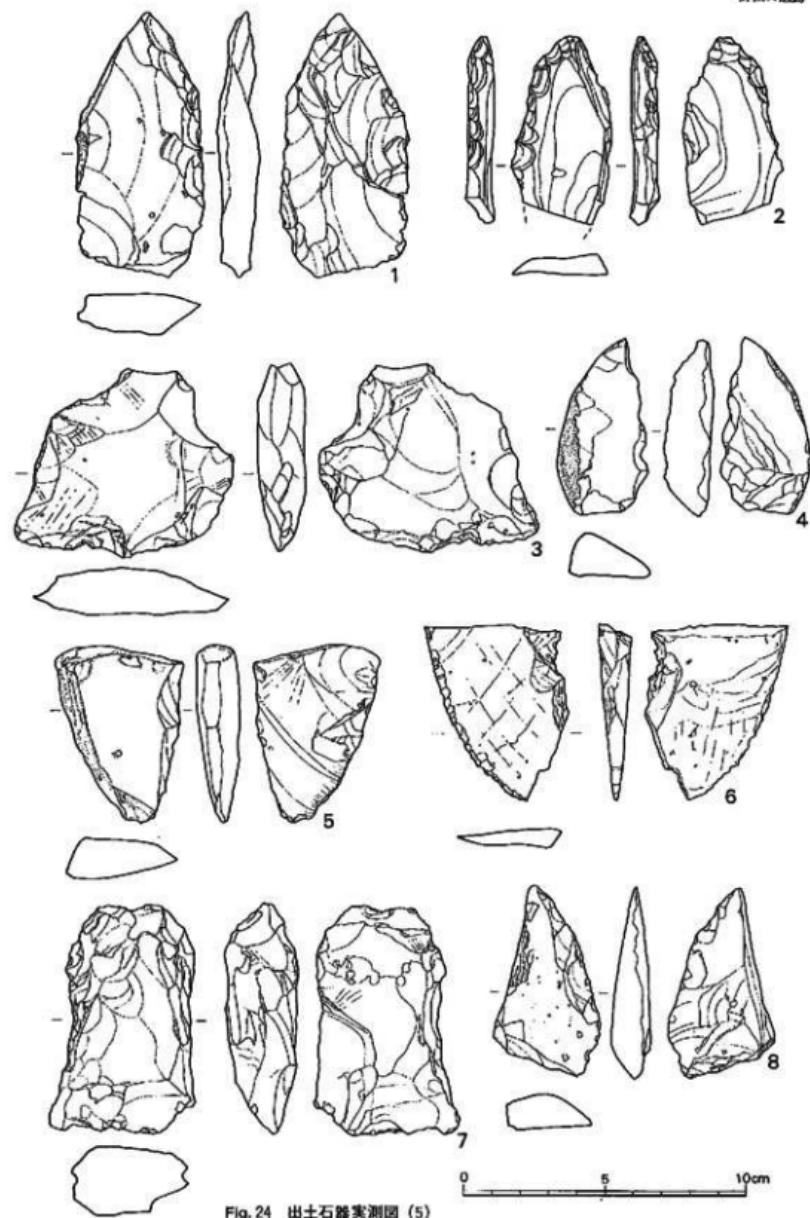


Fig. 24 出土石器実測図 (5)

磨石 (Fig. 31)

3点を図に示した。1は小形の丸いもので、やや扁平であるが厚目のものである。周辺部も使用したと思われ、きれいな形になっている。重さは33.7gを計る。2・隅丸の長方形をしたもので、長さ10.7cm、幅8.2cm、厚さは3.6cmある。全面を研磨に使用したような痕跡が残る。重さは585gある。3・長径11.7cm、短径で10.6cmの寸のつまつた卵形をしている。厚さにかたよりがあり、厚い所で2.3cm、薄い部分は1.5cmを計る。両平面と周縁部のすべてを研磨に使ったように見受けられる。重さは413gを計る。1~3のいずれも小さな孔の残った灰白色の安山岩のように観察される。

石斧 (Fig. 25)

打製のものと磨製のものが出土している。16点図化したが、13点は打製のもので、残りが磨製石斧である。1~5はほぼ完全な形で出土した。1は長さ10.2cm、幅7.1cm、厚さ1.3cmある。幅広の形に丸い刃部が付く形である。灰色で小さな孔が点々と付く。重さは125gを計る。2・自然の石を利用したものと思われ、両側縁部の厚さが異なる。刃部は体にやや斜めに付く。茶褐色を呈し、小さな孔が付く石材である。長さ10.7cm、幅は5.8cmを計る。重さは145gである。3・上端部をわずかに欠いている。これも斜めに刃部を付けている。最大幅は6.8cmある。淡い灰褐色を呈している。重さは159gである。4・刃の一端が欠けた形のもので、体部が広がって刃部に続いている。最大幅は7.0cm、厚さは1.5cmでやや薄く作られている。重さは120gを計る。5・洋梨形をしており、上端部は尖らせている。刃部も中央から左右に斜めに付けている。長さ11.2cm、幅6.2cm、厚さ1.5cmある。重さは110gである。3は小さな孔が点々とあるが、4・5は緻密な感じの石を使っている。

6は、途中で折れている。図は刃部としているが、やや厚さが残るところから逆転する可能性も考えられる。淡い灰褐色で小さな孔の点在する裏面である。7・薄手のもので、厚さは、1.1cmある。幅は5.3cmで、丸い刃を作り出している。8・これも薄手のものであるが、厚さに幅があり、最も厚いところは1.3cmある。淡い灰褐色をしている。9・最大幅7.3cmの大形のものであるが、両端部を欠失している。厚さは2cmほどある。濃い灰褐色を呈している。10・最大幅4.2cmの小形のものである。両端部を欠いていて大きさを知り得ない。

厚さは1.1cmである。灰白色をした比較的緻密な質の石材を使用している。11は、以上の10点とは異なる、いわゆる分割形をしており、両側縁部から抉りを加えている。最大幅5.6cm、抉られた部分での幅は4.1cmとなっている。厚さは1.4cmを計る。淡い茶褐色を呈し、緻密な石材を使用している。12・青灰色の粘板岩のもので縞模様を残している。刃部を欠いている。

厚さは、1.6cmを計る。13は大形で、他のものと使用の目的を異にするものとも考えられる。長さ14.6cm、最大幅9.7cm、厚さ2.6cmで重さは460gを計る。黄灰色をした安山岩製である。原礫を荒し剥離したあとを調査している。

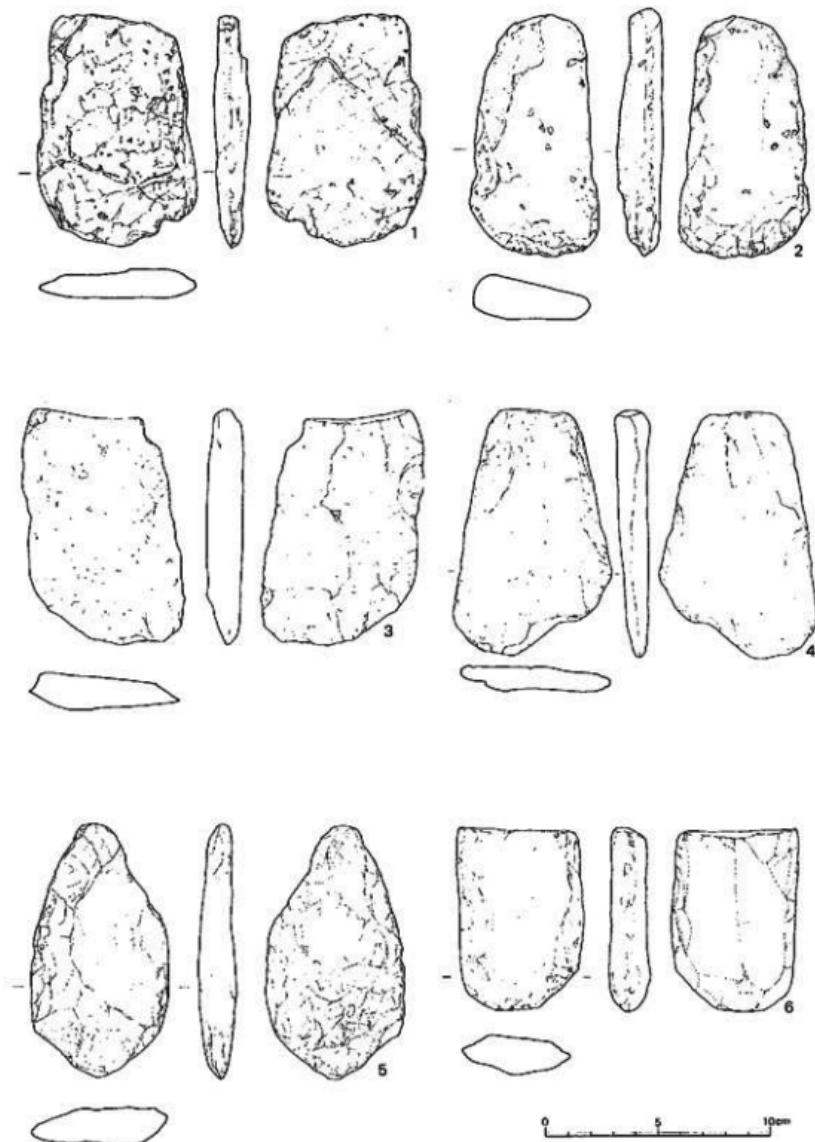


Fig. 25 出土石器実測図 (6)

野田A遺跡

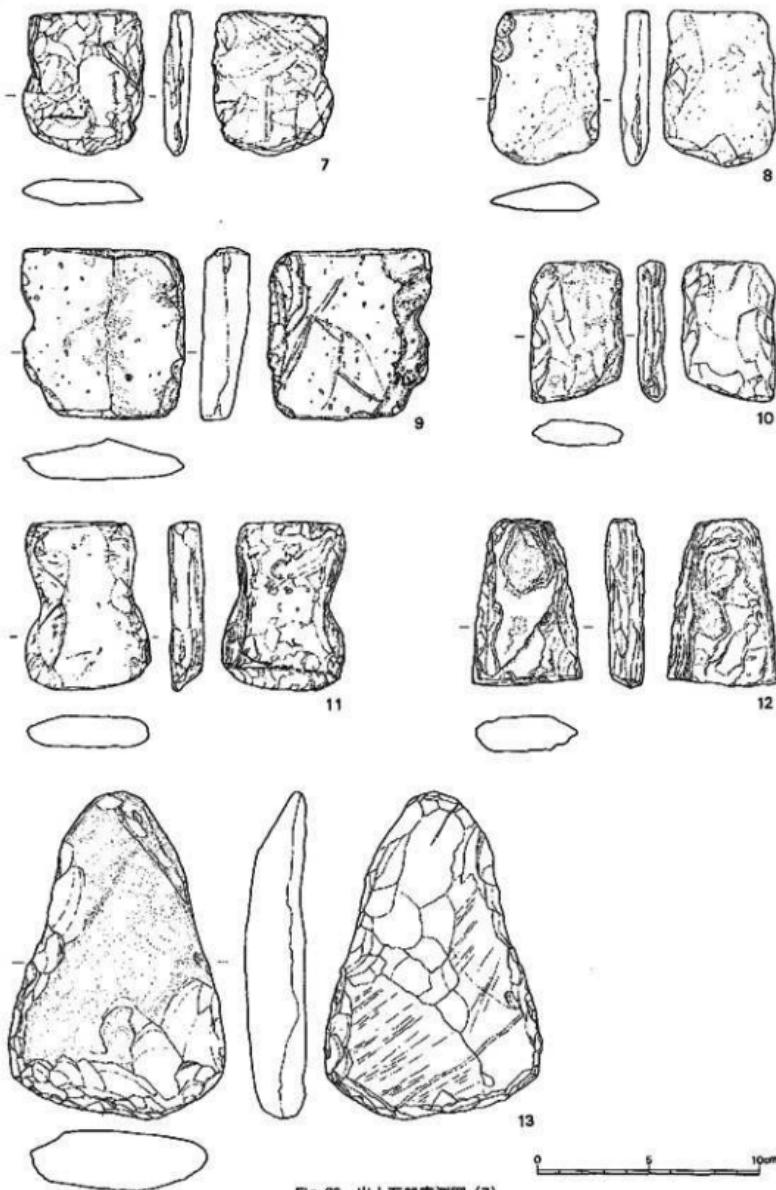


Fig. 26 出土石器実測図 (7)

石 鐵

野田A遺跡でも各種の石鐵が出土している。Fig. 27には脚が長い、基部の抉りの大きなものを、Fig. 28には抉りの小さくなるもの、Fig. 29には基部の抉りの小さいものや直線的になるものなどを示している。

石鐵 1. (Fig. 27)

1は片足を欠失している。野田A遺跡出土の石鐵のうちでは抉りが最も大きい形になる。2～5は完形品で、5は剝片鐵である。裏面に大きな剝離の痕跡を残している。9は大形のもので長さ3.8cm、幅2.0cmある不透明な灰色の黒曜石製である。12は黒色の黒曜石製であるが、縫に割れ、半分ほどを無くしている。13は古いバテナを持つもので、不透明な黒灰色を呈する黒曜石である。15安山岩の石鐵で片足を欠失しているが、長さ4.2cmの大形の品である。17は灰色の不透明な黒曜石で、20は灰色の透明な黒曜石である。21・22・23とともに不透明な灰色の黒曜石であり、23は片足を欠いているが、全長2cmと小形のものである。

石鐵 2. (Fig. 28)

1は不透明な灰色をした石鐵で、整った形をしている。欠端部をわずかに欠いている。2～4は灰色で透明な黒曜石製である。4は先端をわずかに欠いているが、長さ2cmを少し出る。幅は1.6cmであるが、6mmをこえる厚さを持つ。5・7・8は側縁部を鋸歯状に作り出している。10は長さ1.7cmほどの小形品である。12は五角形に肩の張る形の剝片鐵で、両面に大きな剝離の痕跡を残している。13も肩の部分に小さな突起を付けた形で、片面には剝離の痕跡を残し、他の面には研磨を加えて整形している。14は細長い体部に短い脚が付く形のものと考えられるが、両脚とも欠失している。縞模様の入った黒曜石製である。16は小形の品で長さ1.6cmしかない。17は透明な灰色の黒曜石製で、幅の広い形のものである。18は剝離の痕跡を残した黒色の黒曜石製の剝片鐵、19も剝片鐵であるが、不透明な灰色の黒曜石を使っている。20は灰色の安山岩製であるが、両脚を無くしている。21は剝片鐵であるがついに調整を加えている。黒色の黒曜石製であるがバテナは古い。22と同様、肩の部分の張った形をしている。22・23は安山岩製で、22は剝片にわずかに調整を加えただけの、粗雑な作りと感じられる製品である。

石鐵 3. (Fig. 29)

1は古いバテナを持つ黒曜石製のもので、人念な調整を加えている。2は黒色の黒曜石製で、細長い身に小さく短い脚を作っている、先端と片脚を欠いている。3・4とともに表面が風化した安山岩製の製品で、いずれも形が整っている。5～7はいずれも先端部の折れたもので、

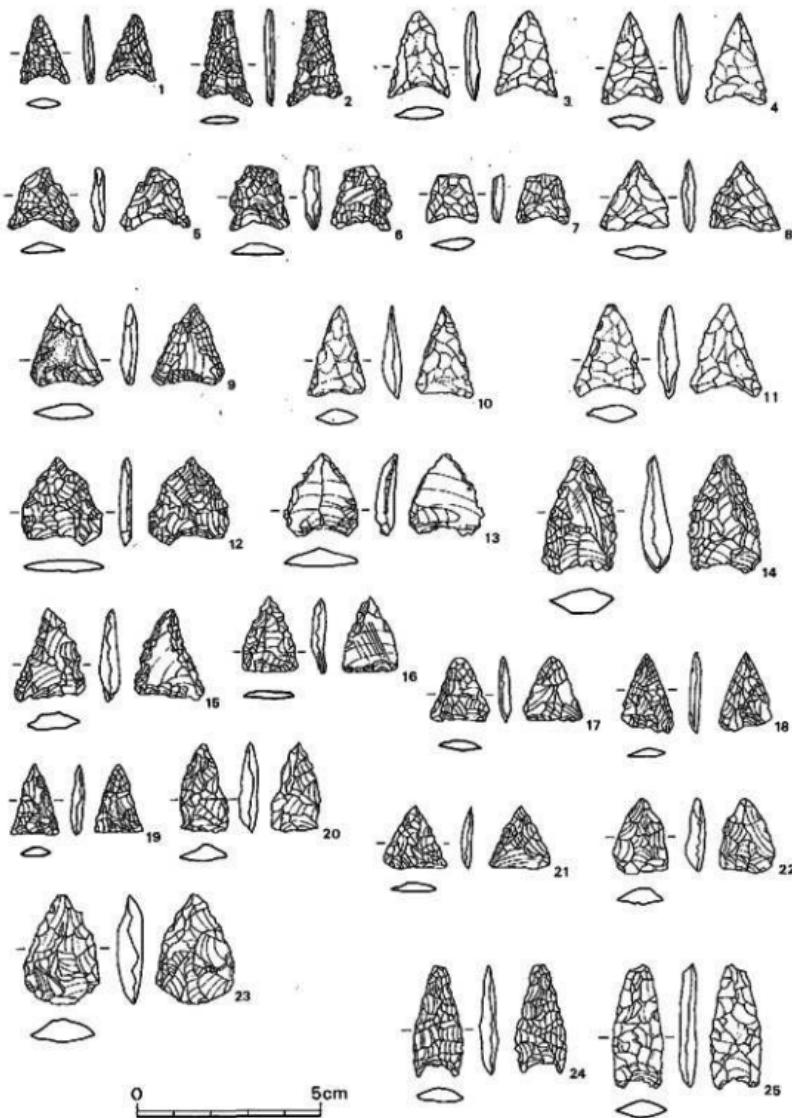


Fig. 29. 出土石器実測図 (10)

5・7は透明な灰色の黒曜石、6は黒色の黒曜石製である。8は灰青色の不透明な黒曜石製で、三角形に近い形に作っている。9も8に似た作りであるが、片面に一部自然面を残した黒色の黒曜石製である。10・11はいずれも安山岩製で、基部の抉りは小さい。12は形のやや大きい三角形で、小さく抉りが入っている。13も12に似た形であるが剥片鐵で、調整は片面と基部のみに接している。12とともに黒色の黒曜石製を使用している。14は古いバテナを持つ黒色の黒曜石製のもので、8mm近くの厚さを持つ。15・16は黒色の黒曜石を使った剥片鐵である。17は不透明な灰色の黒曜石製で、15・16と同じように基部の抉りが殆んどない。18は長さ1.9cm、幅1.3cmの小形品で、わずかに自然面を残している。20は不透明の黒曜石製で細長い形に作られている。21は透明な灰色の黒曜石製で三角形をしている。23は縞模様の入った灰色の黒曜石製で、基部が逆に出る形のものである。24・25は長さに比べ幅の狭い、細長い作りである。基部を広めに抉り、脚はわずかな突起となって付いている。24は透明な灰色の黒曜石、25は安山岩で作っている。25の安山岩は黒色で緻密なものであるが、表面の風化が進み灰褐色を呈している。

滑石製品 (Fig. 30)

緻密で良質の滑石を使用した石鍋で、口縁の部分である。先端部は平らに仕上げられている。鉗の付かない形のものであるが、耳状のものが付く形の可能性も考えられる。内面には荒い削り痕を、表面には小さく人念な削りの痕跡を残している。厚い部分は2cm以上を計る。2・石鍋の口縁部と考えられるが、全形は不明である。多孔質のやや粗い滑石を使っており、削り方については表面、内面とも明瞭ではない。口縁部は平らに仕上げ、表面の口縁直下には意識的に段を付けている。内面にも口縁下方に折り目が残ることから、その下方で内側に湾曲しつつ底部に至るものと考えられる。3・口縁部であるが、6cm×3cmほどの小砂片となって出土したため、全形や大きさを知り得ない。口縁端部は平らに仕上げ、内面には荒い削り痕が残っている。表面にはわりと入念に削って仕上げをしている。青灰色の滑石である。4・口縁部で、かなり外方に開く形のものようで、この種類のものは珍しい部類に入る。口縁部を平らに仕上げ、小さな鉗を付けた浅鉢形のものであろう。内外ともに削りの痕跡を残している。5・方形の耳形の把手の付く形のもので鉗は付かない。やや湾曲しつつ外上方に伸びた口縁先端部と耳の上部を同一平面に平らに仕上げている。把手とその周辺部は入念に加工を施しているが、内面の削りはやや荒い。青味の混じった銀灰色の緻密な滑石を使用している。6・肉厚の石鍋の未完成と思われる。口縁部の調整もまだなされておらず、仕上げ前の段階のものである。削りは上平部と下平部で二方向に分かれている。青味の混じった銀灰色で、良質の滑石を使用している。

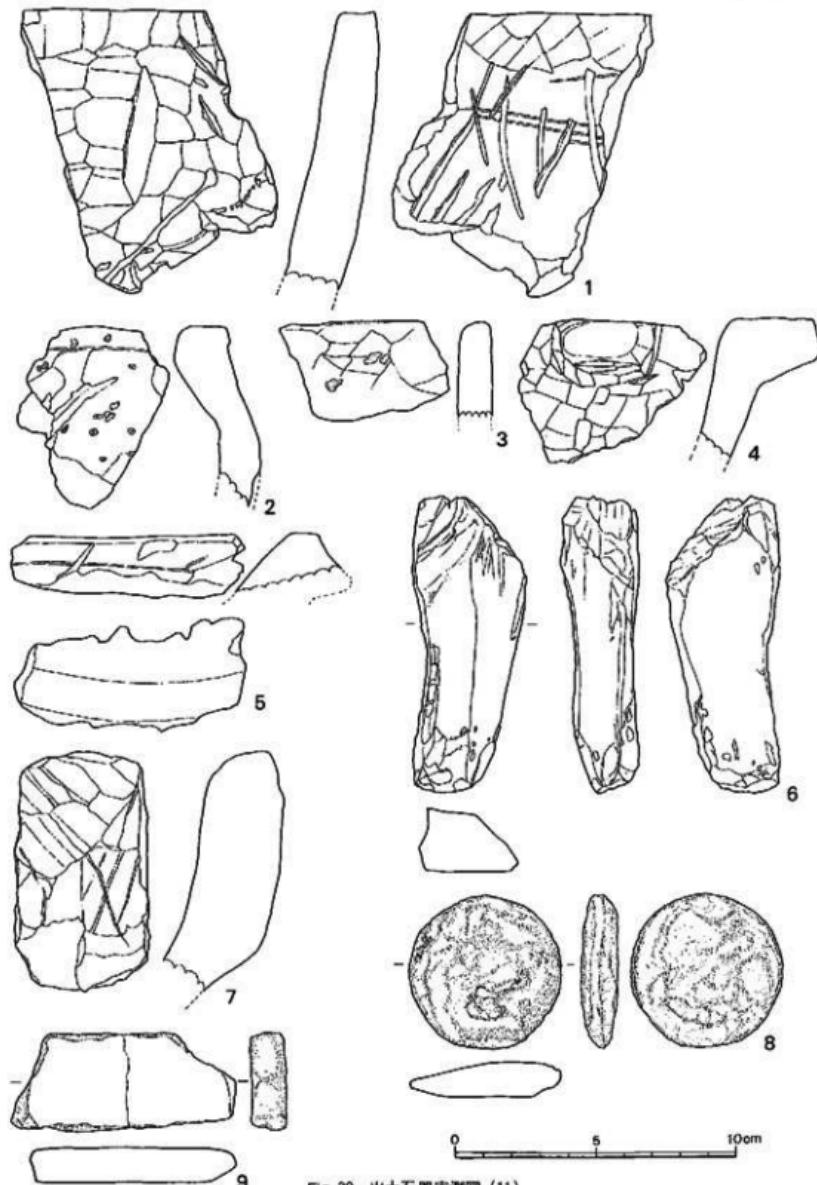


Fig. 30 出土石器実測図 (11)

滑石製石塔 (Fig. 31)

滑石製の五輪塔の部分と宝篋印塔の基礎部分などが出土している。いずれも墓石列の南側の畝からの出土である。1・青灰褐色を呈している完形のものである。平面は橢円形で、長径は21.7cm、短径18.8cm、高さは14.2cmある。底部は平らに削っており、張りを持たせた胴部も削りの痕跡を残さないほど人念に仕上げている。上面は中央部に向いて傾斜を持たせるように削り、その後小さな敲打を加えて中央部に直径8cm内外で、深さ2cmほどの穴を掘り込んでいる。上部の^ノを受けるための穴と考えられ、五輪塔の水輪と考えられる。2・これも五輪塔の水輪の部分と思われる。濃い青灰色の滑石を削って作っている。削りの痕跡が部分的に残っている。直径は15cm内外になるものと考えられる。高さなどについては不明である。3・多孔質であり良質でない石材を使用したもので、五輪塔の水輪部分である。1/3ほどが残っている。胴部での直径は18cm、高さは9cm以上になるものと思われる。人念に加工していてその痕跡がほとんど残っていない。青味の混じった銀灰色を呈している。4・宝篋印塔の基礎の部分と考えられる。方形で薄手の台座になるものであろう。青味の強い灰色の滑石を方形に作り、四方の胴体中央部に棱線がくるように面を削っている。削りの痕跡はほとんど残っていない。大きさについても不明である。

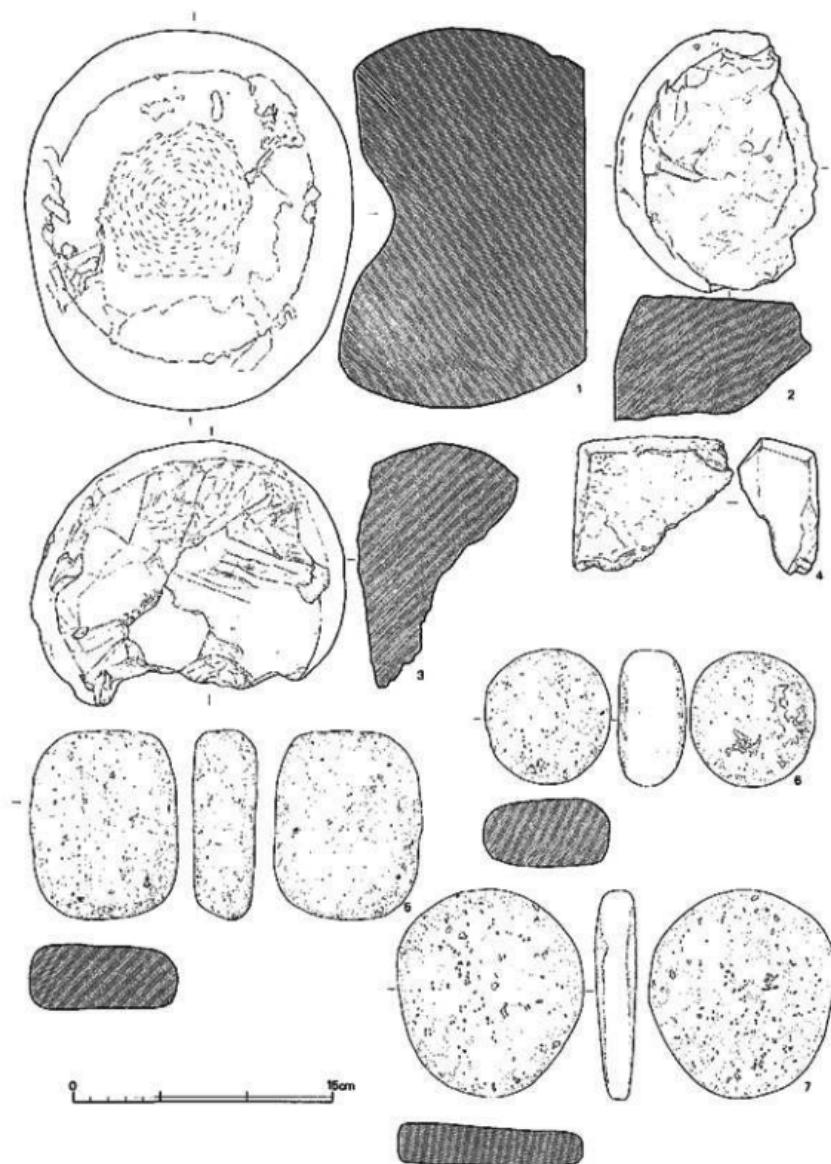


Fig. 31 出土石器実測図 (12)

土 器 (Fig. 32)

1～3はいずれも口縁部で、肥厚させた先端部に文様を持つ形のものである。1は丸くおさめた先端部のやや下の方に円い列点文のようなものが二条めぐらされている。そのほかの調整は器表の風化が進んでいて不明である。赤褐色を呈し、胎土に小砂粒を含んでいる。2は口縁部にゆるい斜めの沈線を二本単位で描き、その間に三本を単位とした沈線を横方向に施している。胎土に片岩の細粒などを含む。焼成は良好である。3・肥厚させた口縁部の先端をやや平らに仕上げ、そこに刻目が施されている。この下に羽状文として細く短い沈線を入れている。焼成は良い。以上の三点は繩文後期の北久根山式土器の系統のものと考えられる。

晩期の土器としてFig. 32の4～13について述べる。4は大形の粗製の深鉢である。内湾しつつのびた体部がほぼ直立する口縁部へと続き、その先端は尖らせ気味におさめている。横方向へを主体とする条痕が、器表と内面にも残っている。表面は茶褐色、内面は黒褐色を呈している。胎土に小砂粒を含む。焼成は良い器形が大きく、埋甕として使用した可能性も考えられる。5・これも粗製の深鉢と思われるものの口縁部である。先端部を丸くおさめ、表側に条痕を残している。内面はナデて仕上げたもののように、見受けられるが、風化のため断言できない。胎土に小砂粒を含むが焼成は良い。6・口縁部にリボン状の飾りを持つ形の土器である。鉢形の土器と考えられ、やや外側に側いて伸びた口縁端部は丸くおさめている。器表には横方向への条痕が残っている。内外面ともに黒褐色を呈している。小砂粒を含むが焼成は良い。7・直立する形の口縁部でやや薄めの作りである。先端の部分を内側に尖らせ気味におさめている。研磨したものの可能性も考えられるが、風化が進んでいて断言しがたい。胎土はやや粗く石英粒や砂粒を含んでいる。淡い茶褐色を呈し、焼成は良い。8・直立した口縁先端部を丸くおさめている。器表には条痕が残っている。結晶片岩などの小片を混じえた胎土を使用しており、焼成は良好である。濃い茶褐色を呈している。9・組織痕文土器の部分と考えられる。無文の胴体から組織文を施す底部に移行する部分と考えられる。内外面ともに風化が進んでいてその他の調整については不明である。茶褐色を呈しているが黒変した部分も残っている。片岩などや小砂粒を含む胎土を使用しているが焼成は良い。10・厚手のもので茶褐色を呈している。これも組織痕文土器の胴体下部付近と考えられる。器表の風化が著しく、肉眼でも判別できないほどの組織痕がわざかに認められる。雑多な石の小細粒が混じっている。焼成は普通であったようである。11・内湾しつつのびた口縁を外方に折り曲げ先端部を丸くおさめたものである。折れ曲げた内側に稜線が付く。器表の荒れが著しく、調整にしいては言及できない。淡い茶褐色を呈し、胎土には精良なものを使用している。焼成も良い。12・精製土器の口縁部と考えられる。内側しつつのびた口縁部を直角に近く折り曲げ、すぐに内側を上方に盛り上がらせた形をしている。折り曲げた部分の内側をつまんで引き出した形で、そのぶぶんに稜線が付く。調整については明言できないが、たぶん研磨を加えていたものと考えられる。全体に灰褐色で、焼成は良い。胎土も良好なものを使っている。13・これも小破片で2cm×2.5cmほどの大

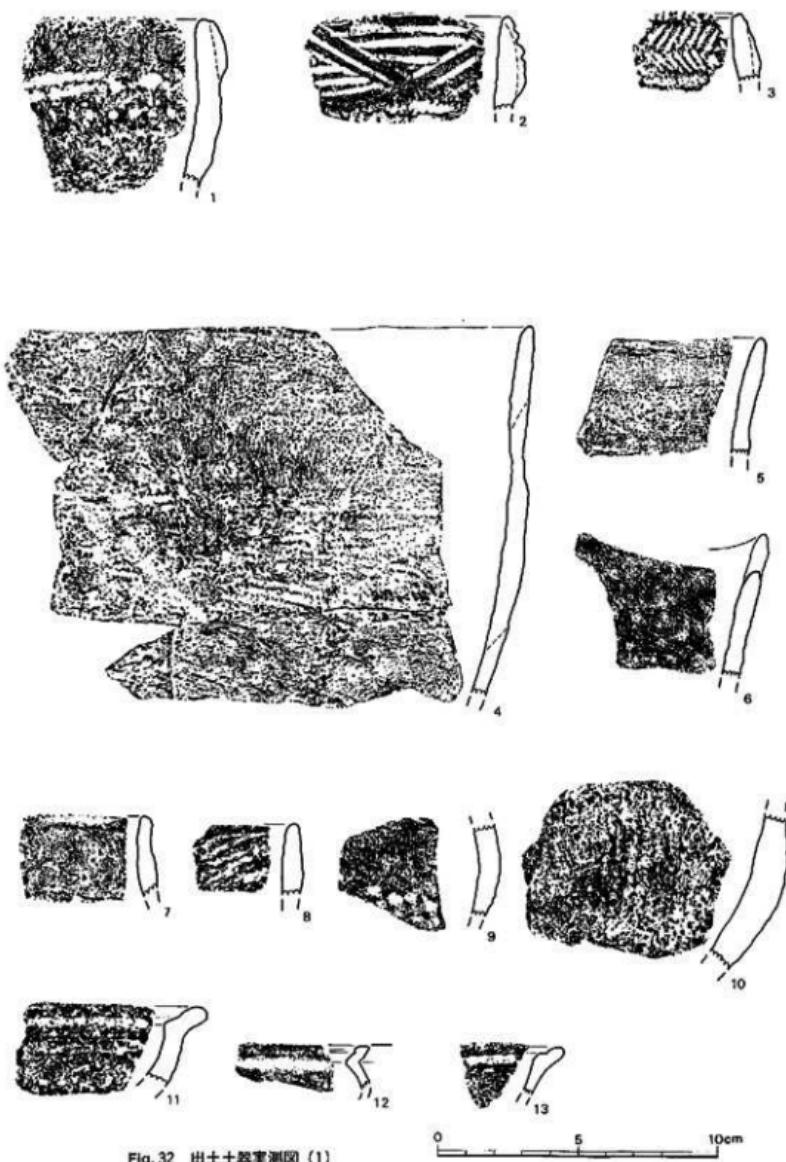


Fig. 32 出土土器実測図 (1)

きさが残っている。内湾しつつ伸びた体部の先端を外側に折り、すぐに丸くおさめている。折折り曲げた部分は、わずかに厚く上げている。調整の痕跡については断言できないが、これも研磨していたものと思われる。胎土に小砂粒を含むが精良で、焼成も良い。

底 部 (Fig. 33)

1～5が縄文時代のものと考えられる。このうち1は縄文時代後期に属する可能性が強く、2～4は晩期のものと考えられる。1は厚手の作りで上部底に作っている。半分ほどが残っており、底の直径は10.4cmある。荒れがひどく、調整については不明である。やや粗い胎土で、石英粒などを含んでいる。茶褐色を呈し、焼成は普通のものである。2・平底の底部から斜め方向に統いて胴体となっている。半分ほどのものから後原した底部の直径は、7cmほどである。厚さは1.8cmある。器表は茶褐色、内側は灰褐色を呈している。かなり緻密な胎土で、片岩や石英の微細な粒が混じる。焼成は良い。3・平底の底部で、中央部の厚さは0.8cmほどとなっている。胴体もあまり厚い作りではなさそうに観察される。外面は横方向へナデて仕上げられたもののように見える。全体的に茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い。4・底部の全体が残っている。直径9.5cm、中央部の厚さ1.2cmを計る。器表がやや荒れているが、内外面とも褐色を呈し胎土は比較的緻密なものである。ナデて仕上げたものか茶結晶片岩の細片など、小さな粒にして混入させている。焼成は良い。5・浅鉢の底部で薄い作りである。直径6.4cmの底から外反しながら体部が伸びる。底に近い場所に、幅1mmほどの沈線を三本巡らしている。内外面ともに研磨して仕上げている。淡い茶褐色で、胎土、焼成ともに良い。6・胎土に石英粒を含み、淡い赤褐色に焼けている。外下方に高台状に張り出した形のもので、その先端はやや尖らせ氣味に丸く仕上げている。内外面ともに荒れていて調整については判然としない。焼成の見合いや胎土から、弥生式土器の要の底部と考えられる。その場合大村地方のものではなく、肥後系統の土器ではないかと推測される。7は高杯あるいは笠状の蓋かと思われる弥生式土器である。外面にはハケ目が残り内側はハケ目のあとをナデて仕上げた痕跡が認められる。赤褐色を呈し、焼成も良い。胎土に小砂粒を含んでいる。8・9ともに正確な器形は知り得ない。8は糸切りの底部を持ち土師質のものである。茶褐色をしていて、胎土はあるいは水窯したものと思われる。焼成も良い。9・淡い灰褐色を呈した薄く作ったものである。高台状に貼り付けられたように観察される。器表は荒れていて調整については不明である。胎土は良いが焼成は若干あまいように見受けられる。10・土師器の口縁部である。上方を外側に折り、先端部を丸くおさめている。外面はナデて仕上げ、内面の頸部以下はヘラ削りを施している。茶褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成は良い。11・土師器の短脛壺の口縁部である。ほぼ直線的なものの先端部をわずかに尖らせ氣味におさめている。外面は横方向にナデて仕上げた痕跡が残る。内面もナデて仕上げているように見受けられる。淡い茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い。

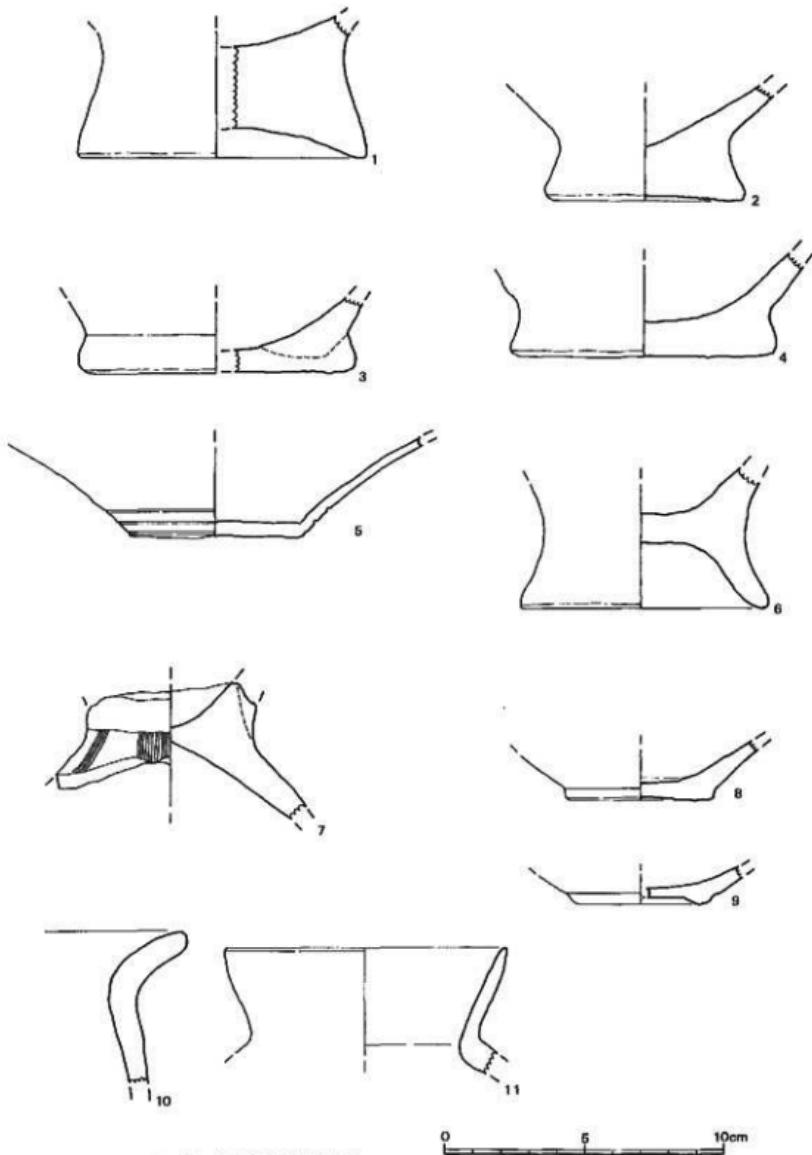
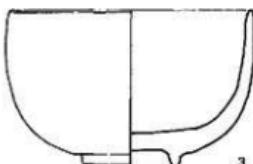
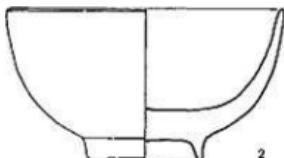
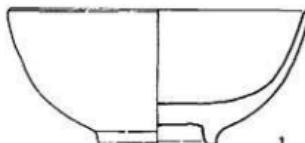


Fig. 33 出土土器実測図(2)

集石内出土の磁器 (Fig. 34)

集石列の東北端の部分で見つかった。口径10.5cm、高台径4.3cm、高さ4.8cmの大きさである。胴体下部から底部にかけてはかなり厚い作りである。見込みの部分に長さ4.5cmほどの亀裂が入り、液体は注げない。梅文を配し、高台脇に二本、胴体最下部に一本共須で線を巡らしている。ロクロの水引きのあとも釉薬の下に残っている。高台下端部には砂の痕跡が残っている。また見込みを蛇の目に斜いでいる。2・胴体下部から底部にかけてかなり厚く作られている。口縁径10.0cm、高台径4.2cm、器高5.4cmを計る。高台は底部の厚さに比べて薄い。草花文の染め付けられた模で、裏文様に永尾の文様に似た文様が記されている。また高台に二本の線が巡っている。高台の下部のみ釉がなく、砂目であったものと思われる。体部にはロクロの水引き痕が残っている。集石列の北東部に付いた場所の、集石の南縁の部分に出土した。3・口縁径8.9cm、胴径9.0cmとわずかに胴部の脛形のものである。高台は直径3.5cmで、比較的低くて小さい作りとなっている。器高は5.6cmある。器表には竹、笹文を全面に描いていて、この下部に線を巡らしている。高台にもわずかな間隔で二本の横線を巡らしている。内面の口縁部すぐ下に二本、見込部分にも二本の横線を巡らしている。見込み中央部に福音文字と思われる文様が付けられている。以上三点が図化できたが、三点とも波佐見の中挽で、3は小形の部類に入る。これらのものは18世紀初頭から後半にかけてのものと考えられ、この集石列のあった時期、またその下に検出された第11号墓、第12号墓の時期を考える上で参考になる。



0 5cm

Fig. 34 集石列出土の遺物

近世墓出土の遺物

第3号墓出土の遺物 (Fig. 35)

3点が埋葬されていた。小瓶1点と小皿2枚である。1・かなり薄手の作りで、高台部分も薄く削っている。焼成時に焼けひずみが生じていびつな形になっている。口縁径10.3cm、高台径3.8cm、器高は5.5cmを計る。白磁で文様は描かれていらないが、口銚が施されている。

2・口縁径8.8cmの小皿で、高台の直径は4.1cm、高さ1.9cmである。内面はやや青味を帯びる。全体的に細い貫入が残っている。高台部下に砂目の痕跡が残っているのが認められる。

3・2と同じような形の小皿であるが、わずかに大きさが小さい。口縁部の直徑8.6cm、高台の直徑3.8cm、高さは1.9cmである。白磁で、内面はわずかに青味を帯びている。内外面にひびが数本入っている。これも高台内側に砂が付着した部分がある。

第7号墓出土の遺物 (Fig. 36)

小形の碗が1点のみ出土した。底部が厚い作りで重い。ゆるやかに内湾しつつ伸びた口縁の先端部は九くおさめている。口縁径8.2cm、高台の直徑3.3cm、高さ4.8cmを計る。器表に三箇所コンニャク判で菊の文様を施し、胴体下部に一条、高台に二条の線を巡らしているが、入念な書き方ではない。全体的に灰色で、外面には水引きの痕跡が残っている。高台には砂目が付着している。

土師質の小皿が3点出土している。2は段が残るように糸で切っている。口縁径6.6cm、高さ1.2cmである。3は口縁径6.2cm、高さ1.5cmあり、3は口縁径6.6cm、高さ1.2cmで2と同じ大きさである。2～3ともに糸切りの痕跡を残し、体部には水引き痕が認められる。茶褐色を呈している。砂粒などを

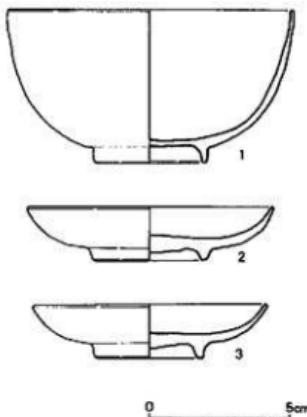


Fig. 35 第3号墓出土の遺物

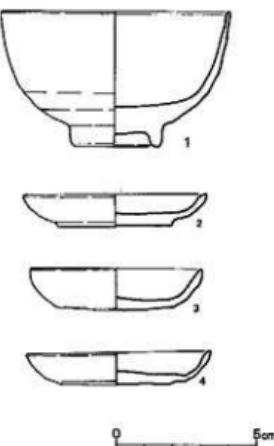


Fig. 36 第7号墓出土の遺物

ほとんど含まない良質の胎土を使用している。

第8号墓出土の遺物 (Fig. 37)

小形の碗と盃が出土している。2・口縁径 7.8 cm, 高台の直径 3.1 cm, 高さ 4.4 cm で全体は灰色を呈している。器表に二箇所コンニャク判の菊文を付け、胴体下部に一本、高台に二本の横線を巡らしている。胴体と高台との境の釉薬がはじけた部分が認められる。3・口縁の直径 7.5 cm の盃である。高台径 2.9 cm, 高さ 4.3 cm を計る。外反しつつ伸びる薄手の口縁部の先端はやや尖らせ気味におきめている。胴体上部に水引きの痕跡が明瞭に残っている。淡い青灰色を呈し、草文を配している。見込みは平らでやや厚い。高台の下まで釉薬がかかっていて、端部に砂目の痕跡が認められる。

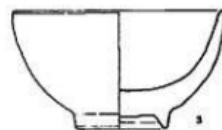
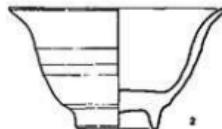
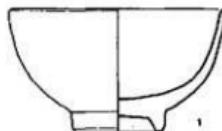


Fig. 37 第8号・第9号墓出土の遺物

第9号墓出土の遺物 (Fig. 37)

4・小形の碗で、口縁径 7.7 cm ある。高台の直径 3.2 cm, 高さ 4.3 cm を計る。口縁部は丸くおさめ胴体に草文を配している。やや厚い底部を持ち、少し重い。高台端部に砂目の痕跡を残している。口縁端部に、焼成時に他の器と接し、その部分が付着したままとなっている。

第10号墓出土の遺物 (Fig. 38)

小形の碗が1個と盃3個が出土した。4個ともほぼ一箇所にまとめられた状態であった。1の碗は口縁先端部にわずかな割れがあるが完品で、3個の盃も完全な形で検出された。

1・口縁径 9.4 cm, 高台の直径 3.7 cm, 器高 5.4 cm を計る。大きさに比べ底部が厚くて重い。口縁先端部は丸くおさめ。胴体下部から口縁部にかけてロクロでの水引き痕跡が残っている。雪輪草花文が描かれ、高台には二本の線が描かれている。また高台内側には「く」と「ノ」の字をあわせた模様が記されている。砂が高台下端部に付着している。集石内からでた碗 (第 (Fig. 2)) とはほぼ同様の作りで大きさも近い胴部の文様や裏の文様もほとんど同じである。

2・やや外反しながら伸びた形の口縁部を持つ盃である。口縁径 7.2 cm, 高台の直径は 2.8 cm, 器高は 4 cm ある。高台には、釉薬が溶けて付着したもののはずす際に付いたと思われる割れ傷が少しある。胴体の二箇所に横方向に二本の線が「二」の字状に描かれている。ごく簡略された山水文であろうか。見込み中央部には直径 0.7 cm ほどの凹みを持つ。

3・口縁先端部を外方に反らせた形の盃で、口縁部の直径7.1cm、高台の直径2.6cm、高さ3.7cmある。胴体に、わずかに水引きの痕跡を残している。口縁先端部の釉薬は溶けて流れ胎上の面が出ている。見込み部分は平らである。高台内側に砂が釉と溶けあって付着している。文様は付けられていない。

4・これも無文の盃で、2・3と同じように口縁の先端部を外反させた形に仕上げている。やや薄手の作りで胴体の中央部付近までに水引き後の削りの痕跡が明瞭に残っている。口縁部の直径6.9cm、高台径2.6cm、高さ3.9cmを計る。内面に一部釉がかからず胎土が出た部分がある。高台端部に砂目の痕が付いている。

第11号墓出土の遺物 (Fig. 39)

土師質の小皿が2点出土した。1は口縁の直径6.5cm、高さ1.5cmある。底は厚く、特に中央部は厚くて7cmほどある。やや内溝しつつ伸びた口縁端部は丸くおさめている。胴体部には水引きの痕跡を、底部には糸切りの痕跡を明瞭に残している。2・1に比べて薄い作りである。口縁の直径6.6cm、高さは1.2cmを計る。胴体に水引きの痕跡があり、底部には糸切りの痕跡が残っている。1・2ともに茶褐色の、全体に均一の色調を呈している。胎上には砂粒等を含まない良質のものを使用している。

第12号墓出土の遺物 (Fig. 39)

白磁が一点出土している。やや薄手の、高台の高い形である。ほぼ直立する口縁端部は丸くおさめている。口縁の直径9.0cm、高台

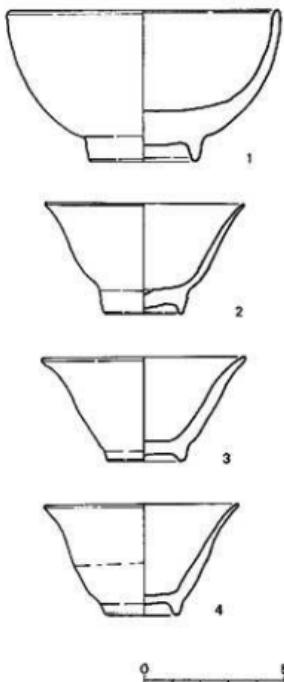


Fig. 38 第10号墓出土の遺物

の直径4.5cm、器高は5.7cmである。胴体部分に水引きの痕跡が残る。高台端部に紗目の痕が残っている。

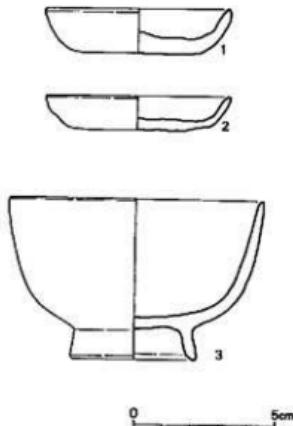


Fig. 39 第11号・第12号墓出土の遺物

近世墓出土の銅錢 (Fig. 40)

墓に副葬されたものは、付着していて断言できないものを除くと全て「寛永通寶」である。第2号墓から6枚、出土しているが、2枚は付着し、他は単独で第7号墓から3枚出土しているが2枚は付着している。付着したものの1枚以外は残りは良い。第8号墓からは6枚出土した。そのうち4枚が鏽びて付着しており、表面が寛永通寶であること以外は明言できない。第9号墓からは2枚が出土しているが、保存の状態はあまり良くない。第10号墓から3枚が出土している。そのうち2枚は直径が小さく2.3cmで、1枚は2.5cmほどで大きい。小さな2枚は残りがあり良くないが、大きな方は字も明瞭な形で残っている。第11号墓から2枚が出土したが、2枚とも残り具合は悪く周囲が欠けた状態である。

Fig. 40の下はI-20グリッドでの表抜品である。残り具合は良く、字も明瞭な形をしている。

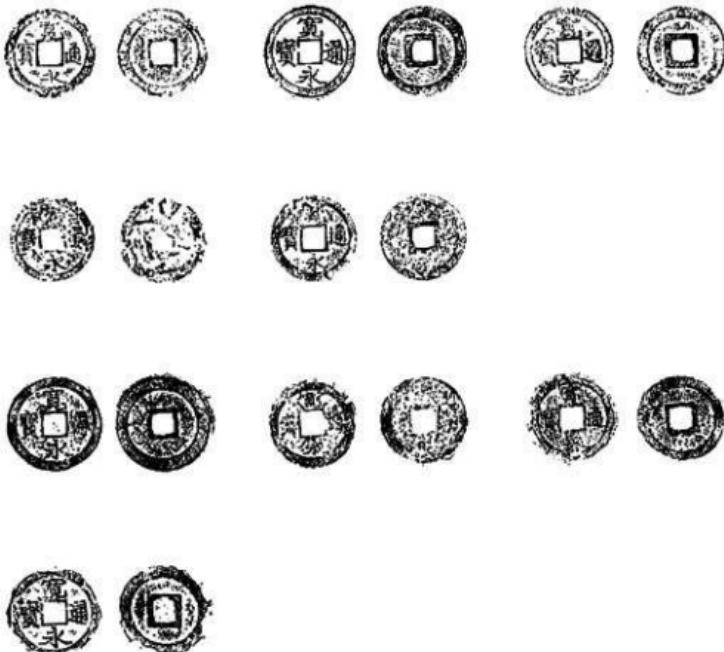


Fig. 40 出土銅錢拓影 (1)

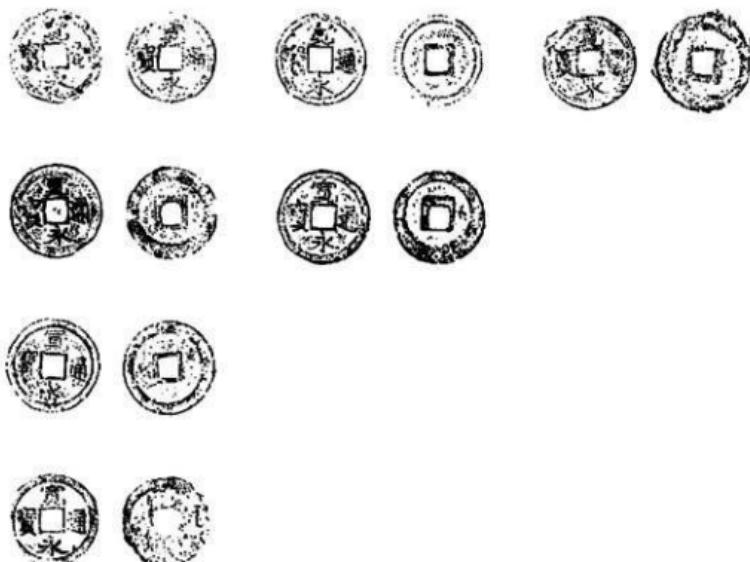


Fig. 41 出土銅錢拓影 (2)



Fig. 42 出土銅錢拓影 (3)

挽 磨

灰褐色をした安山岩製で上部の回転する方の部分である。挽磨の破損品が、B-11グリッドの擾乱層から出土した。上端部は直径25cmほどあり、この平坦面に荒い削りを斜め方向に加えて穀物の入れ口としている。この穴は途中で段を持つが、特別な意味はなく、製作の都合によるものと考えられる。図上の復原であるが、この穴はその最下部の挽き合わせ面で直径1.2cmくらいの大きさになるものと考えられる。挽き面での直径は16cmあり、そこからほぼ直立して上に伸び、高さ5cmのところで外に張り出して下部の研を受ける場所としている。錐状になると考えられる、この受け場所は先端を欠失していて、

旧形状と大きさについては不明である。しかしこれほど大きくなる可能性は小さい。厚さ2.4cmの錐状の張り出し上端部から6cmほど、やや外反させつつ伸びし、先程の最上端の平坦面へと続いている。挽き合わせ面には、1~2cmの細い線が斜交する形に切り込まれている。

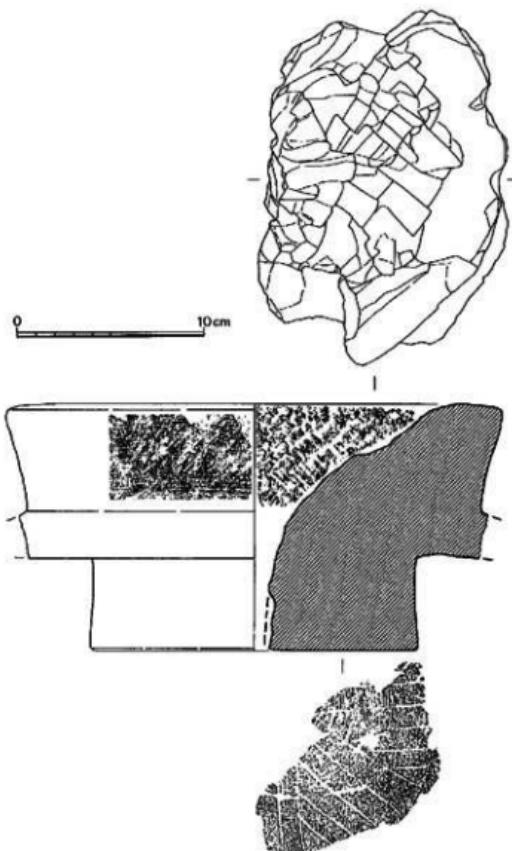


Fig. 43 出土挽磨実測図

P L A T E S

(野田A遺跡)



遺跡遠景



調査にかかる前の状況



遺跡近景



調査風景



調査風景



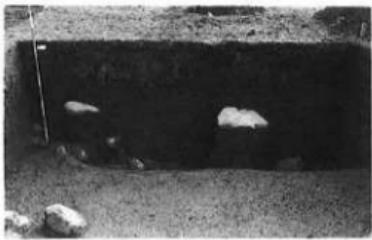
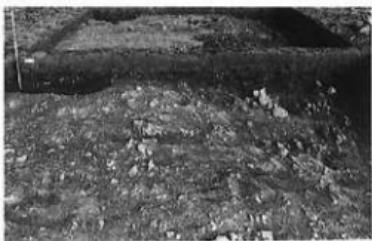
調査風景



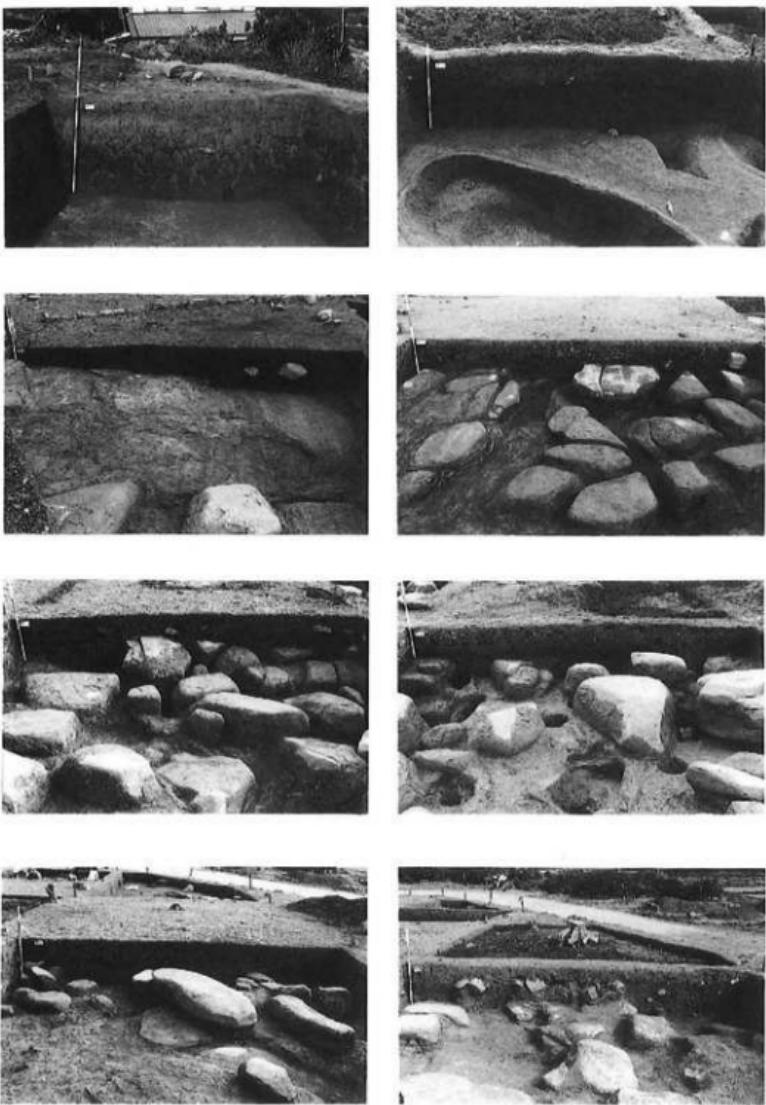
近世墓地近景



集石列と近世墓の調査状況



I列の土層の状況 (1)



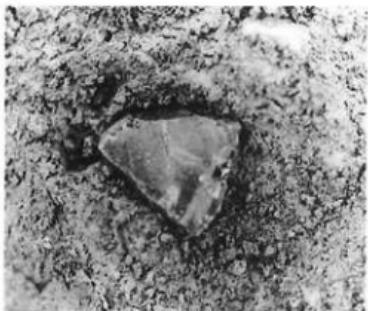
I列の土層の状況 (2)



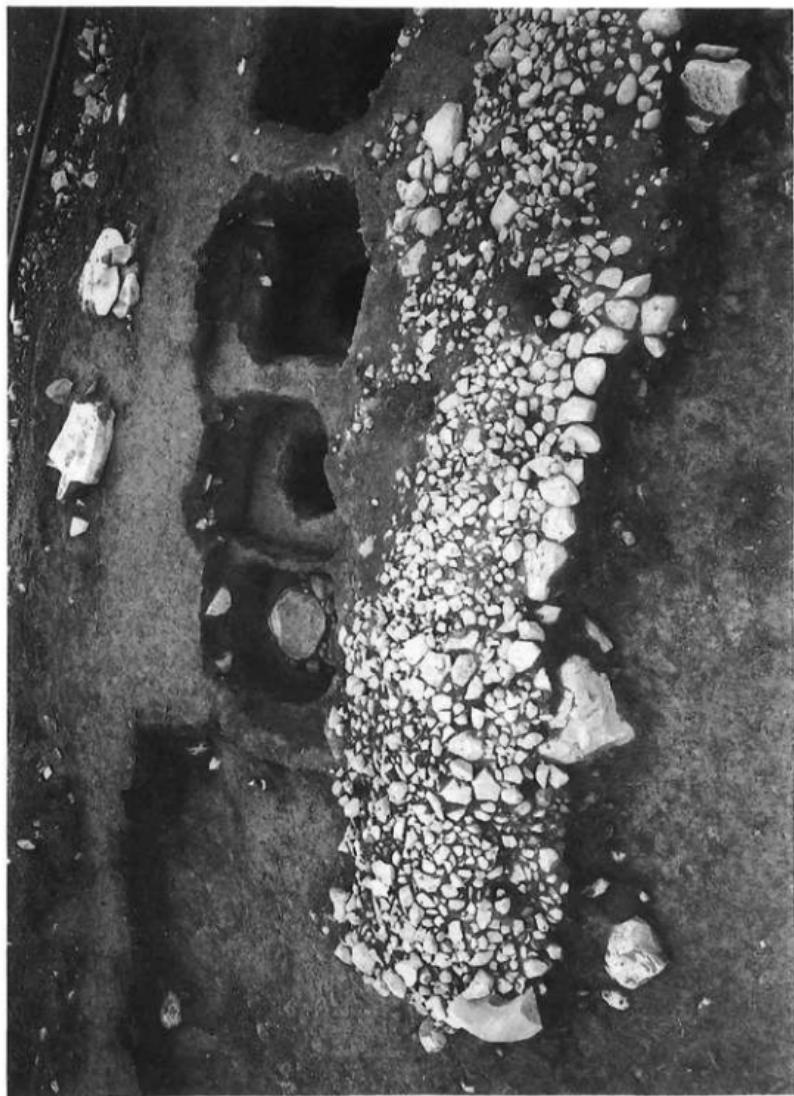
11列の土層の状況



22列(上)と38列(下)の土層の状況



遺物出土状況



集石列と近世墓（北京部分）



集石列と近世墓（南西部分）



岩盤とその間の柱穴



第3号墓棟出状況



第3号墓（遺物出土状況、墓壙の堀り貝痕）



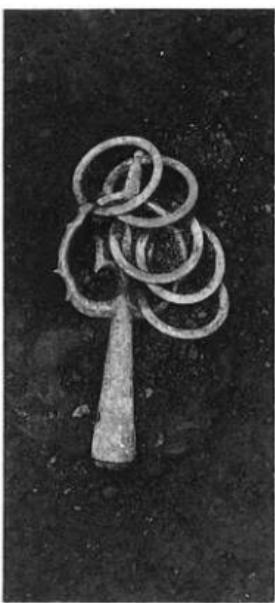
第5号墓

第4号墓

第6号墓



第4号・第5号・第6号墓棟出状況



第4号墓検出状況



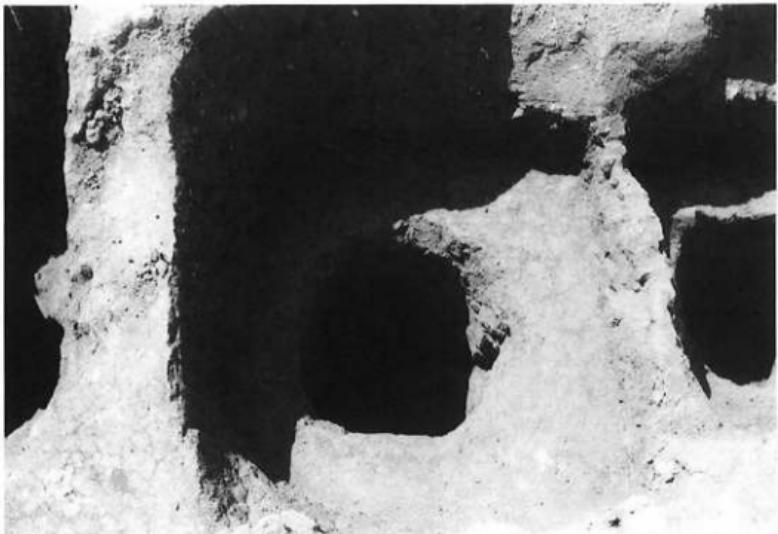
第5号墓検出状況



第6号墓発出状況



第7号墓検出状況

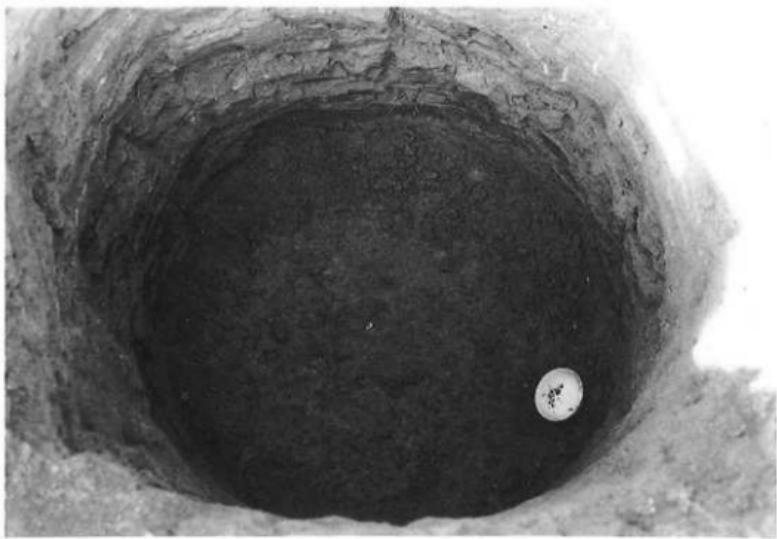


第8号墓検出状況

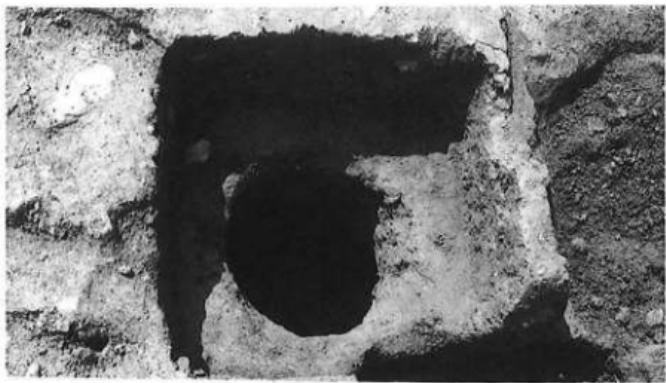
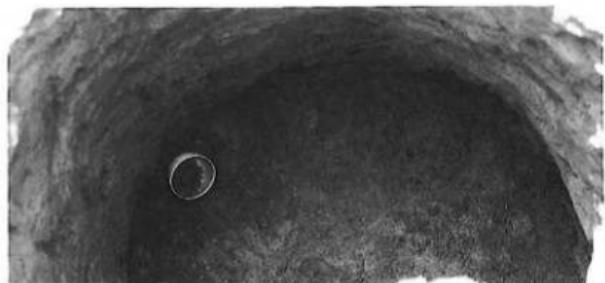


第8号墓造物の出土状況と埋り貝痕

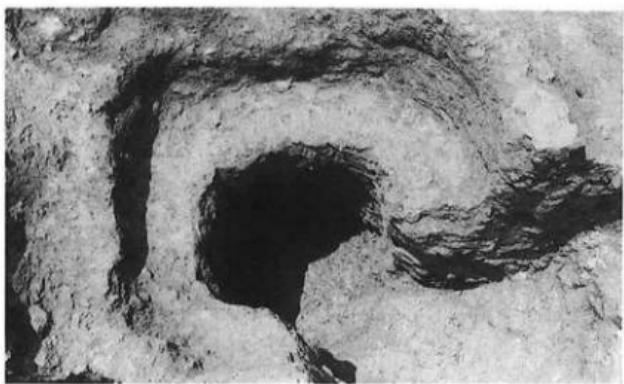
埋り貝の痕跡



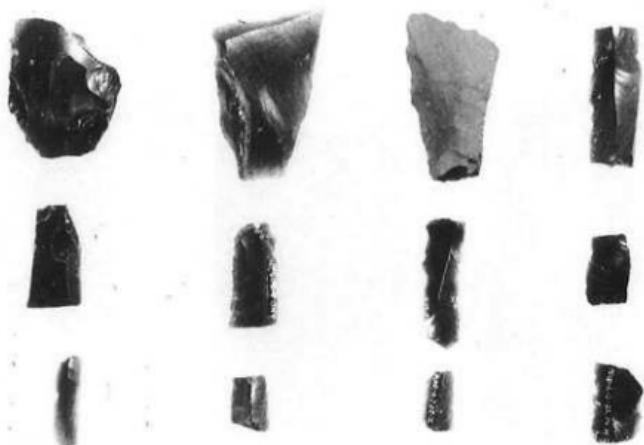
第9号墓検出状況

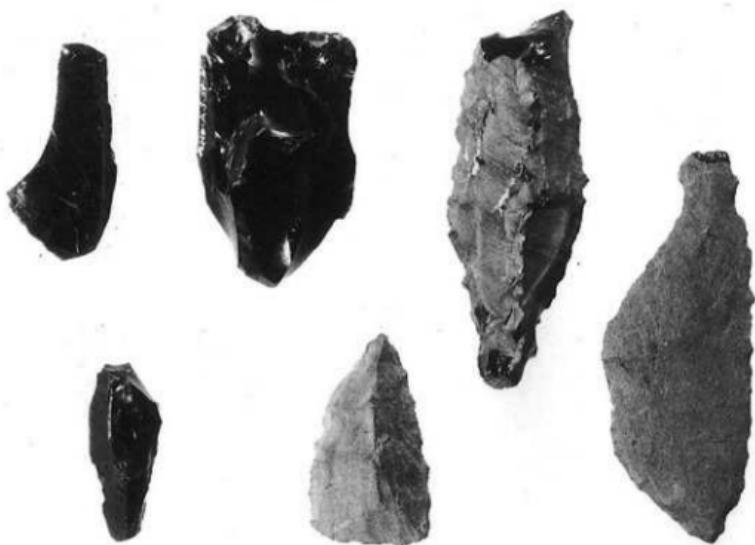


第11号墓検出状況



第12号墓棟出状況





出土石器 (2)



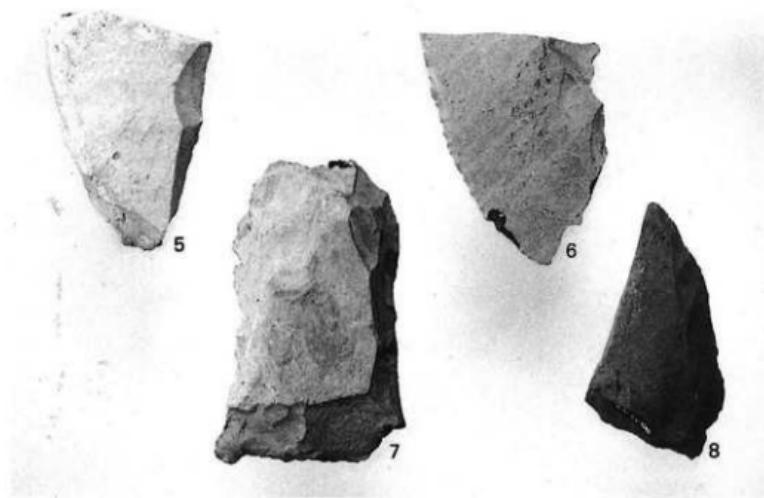
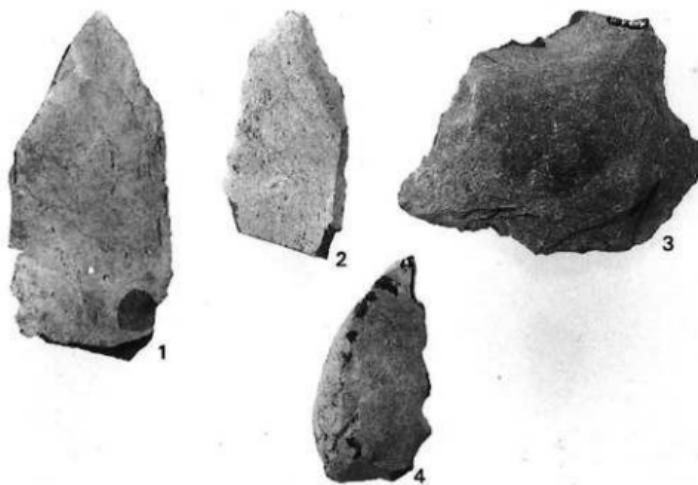
出土石器 (3)



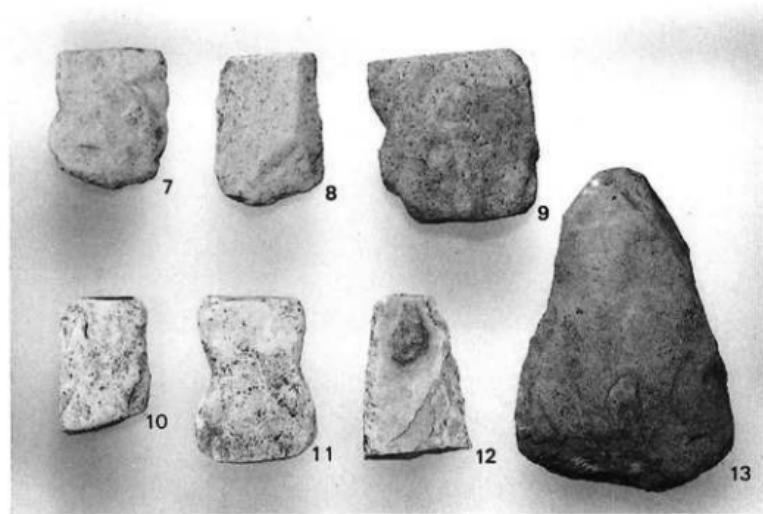
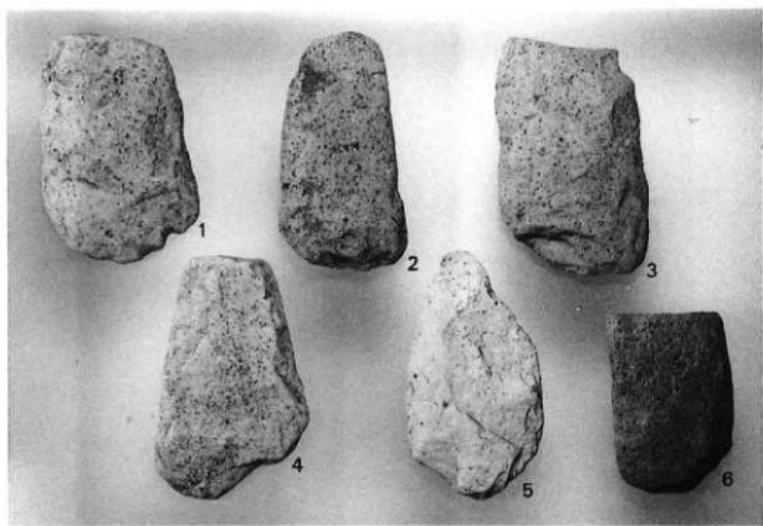
出土石器 (4)



出土石器 (5)



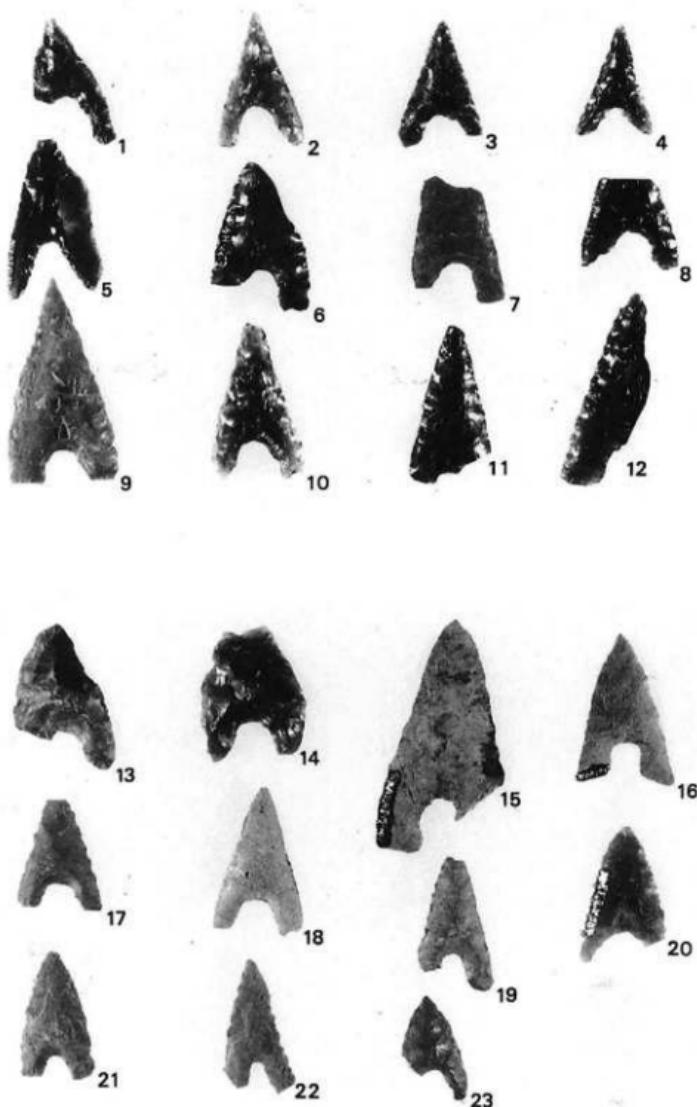
出土石器 (6)



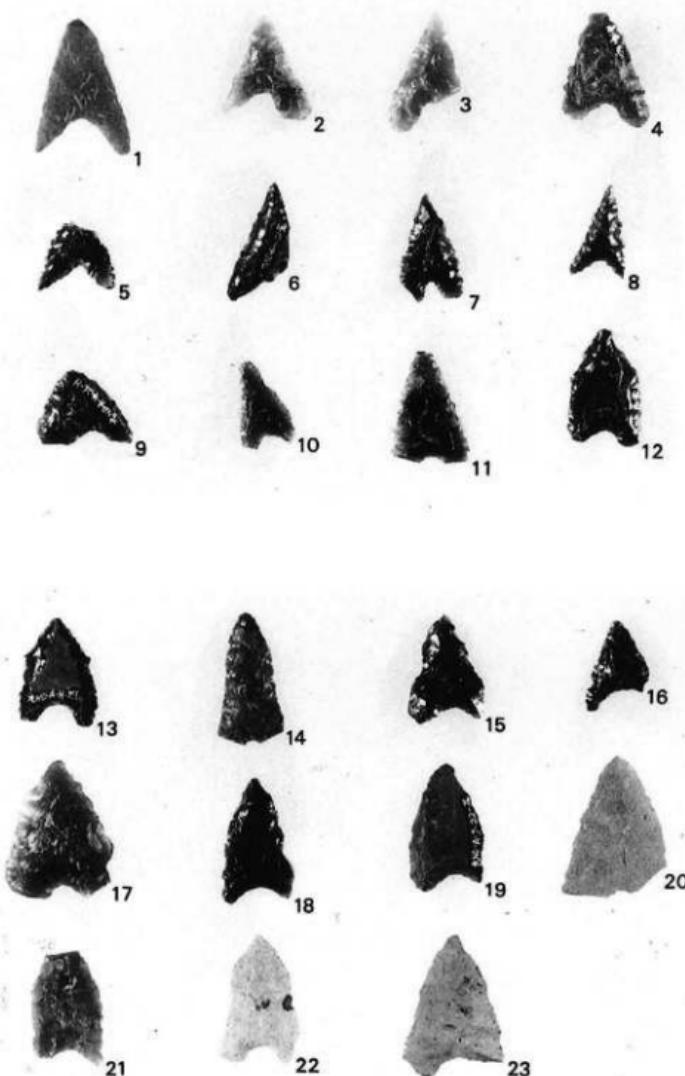
出土石器 (7)



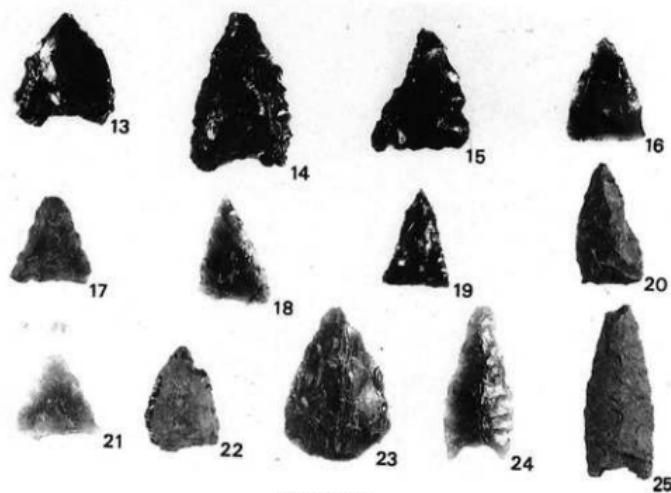
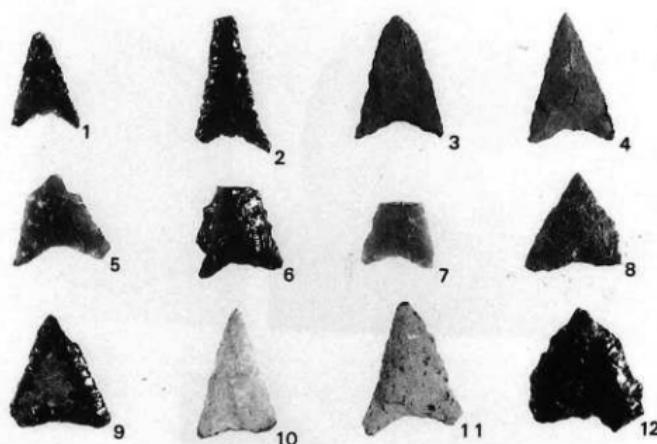
出土石器 (8)



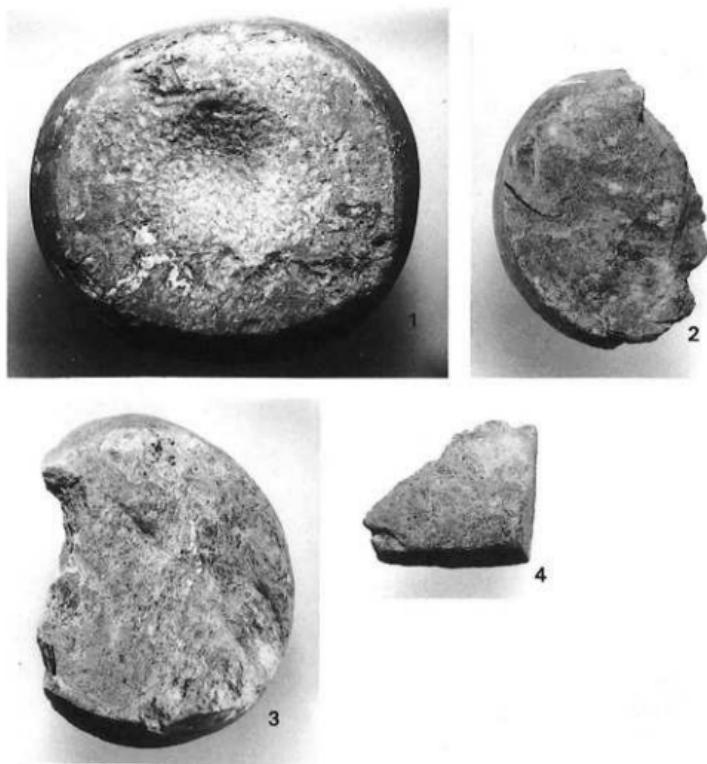
出土石器 (9)



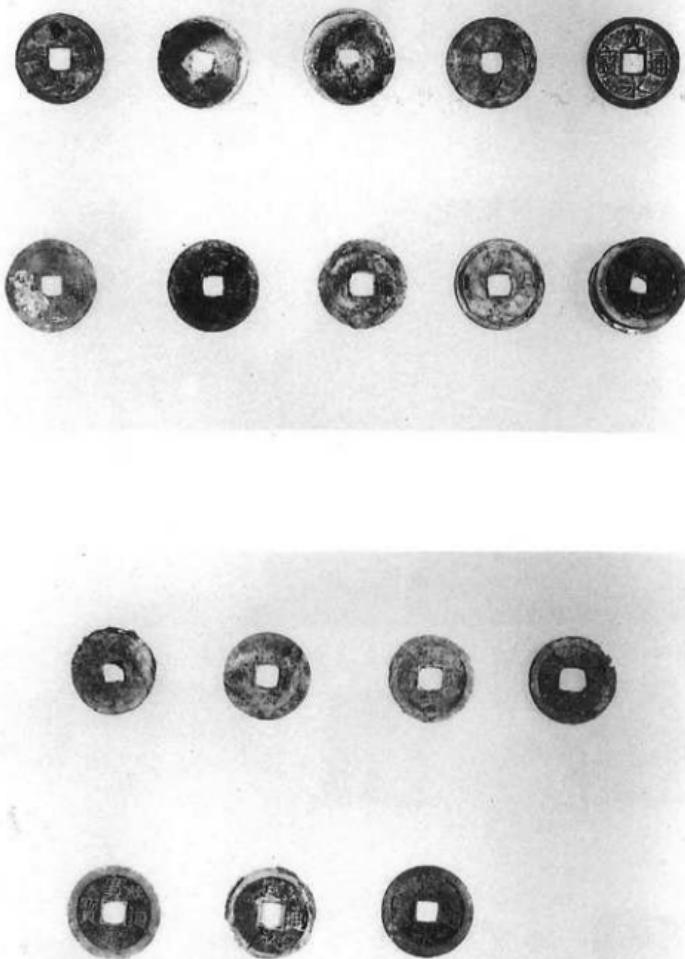
出土石器 (10)



出土石器 (11)



出土石器 (12)



出土の銅錢



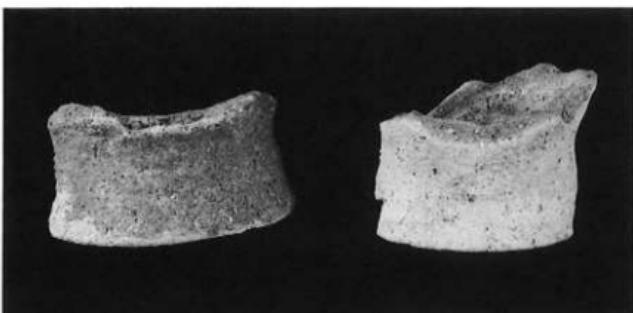
出土土器 (1)



9



10



1, 6



4



7

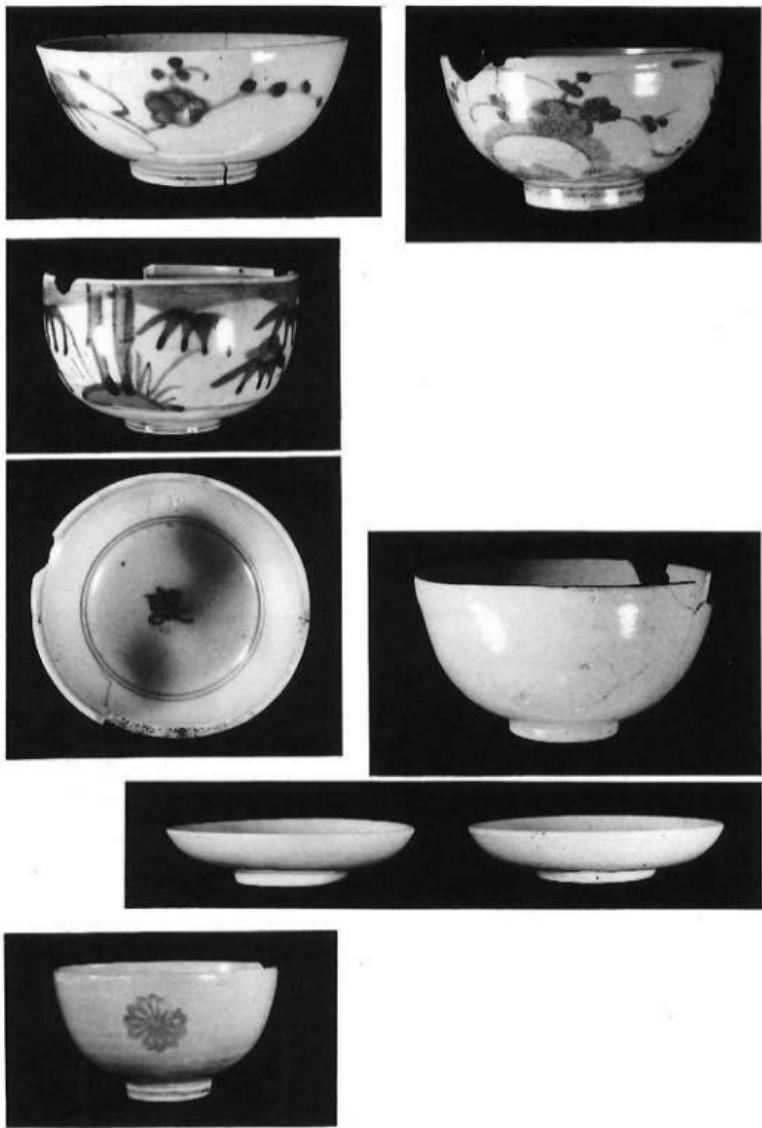


10

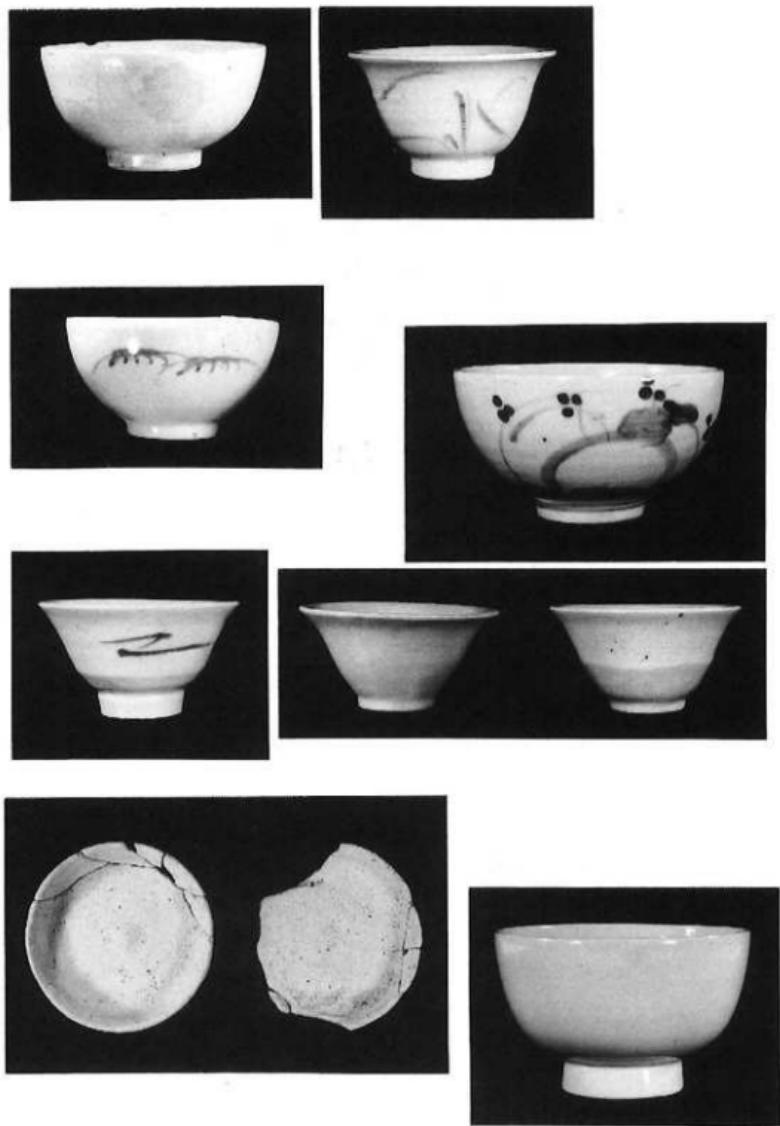


11

出土土器 (2)



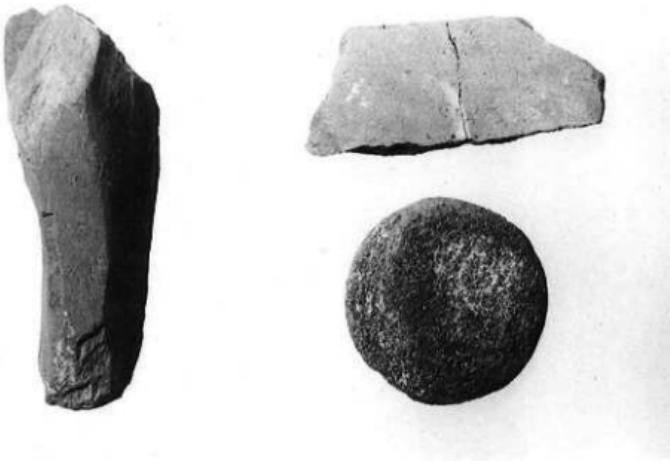
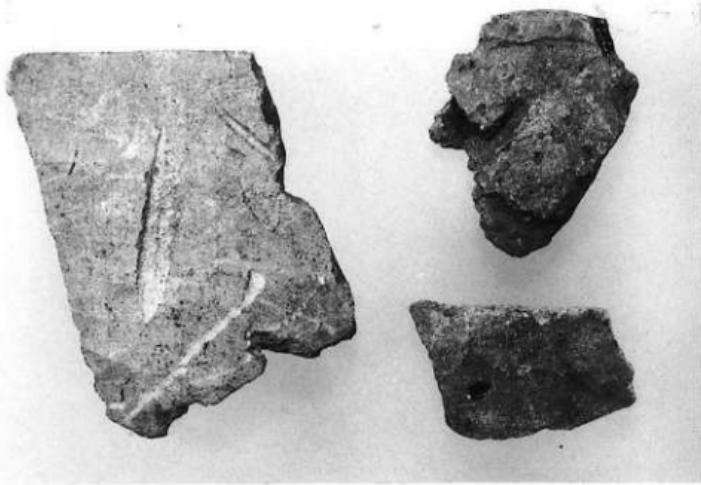
近世墓出土の遺物 (1)



近世墓出土の遺物（2）



出土の挽穀



出土石器 (13)

野田B遺跡



本文目次

| | |
|----------------|-----|
| I 調査 | 299 |
| 1. 地理的位置 | 299 |
| 2. 調査の概要 | 299 |
| 3. 土層 | 330 |
| II 遺物 | 300 |
| 1. 石器 | 300 |
| III まとめ | 303 |

挿図目次

| | |
|---------------------------------|-----|
| Fig. 1 調査区周辺地形図 (1/2,000) | 298 |
| Fig. 2 調査区図 (1/1,000) | 299 |
| Fig. 3 出土遺物 ① (2/3) | 301 |
| Fig. 4 出土遺物 ② (2/3) | 302 |

図版目次

| | |
|--------------------------------------|-----|
| PL. 1 遺跡遠景 (南西から), 調査風景 (K区) | 307 |
| PL. 2 A区全景 (南東から), H区全景 (北西から) | 308 |
| PL. 3 F区全景 (北西から), J区全景 (南西から) | 309 |
| PL. 4 出土遺物 (1/1) | 310 |

野田川流域



Fig. 1 調査区周辺地形図 (1/2,000)

I 調査

1. 地理的位置

本遺跡は、大村市北部、大村市野田町に所在する。多良山系から西北に派生した丘陵は両側を都川の支流によって挟まれ、深く開折されている。丘陵端部はさらに小さく西南に突出し、遺跡は標高40~50mの鞍部に立地しており、付近は、水田及び畠地として利用されている。

本遺跡が存在する丘陵には、北方300mに野田古墳、大村田遺跡、北東700mに平原B遺跡、同900mに中高野遺跡、同1300mに四方白遺跡など、先土器~縄文時代の小規模な遺跡が散在している。

本遺跡は、昭和48年度の分布調査においてナイフ形石器と黒縞石剣片が採集され、100m四方ほどの拡がりをもつ先土器時代の遺跡として捉えられていた。今回の調査は、遺跡の北西部が路線内に係るために、昭和61年9月29日~10月6日の7日間実施したものである。

2. 調査の概要 (Fig. 1・2)

調査は、水田及び畠地の長軸にそって任意にA~K区の11ヶ所のトレンチを設定し、22m²を発掘した。トレンチの規模は、A~K区が4×10m (40m²)、G・J区が2×10m (20m²)、B~

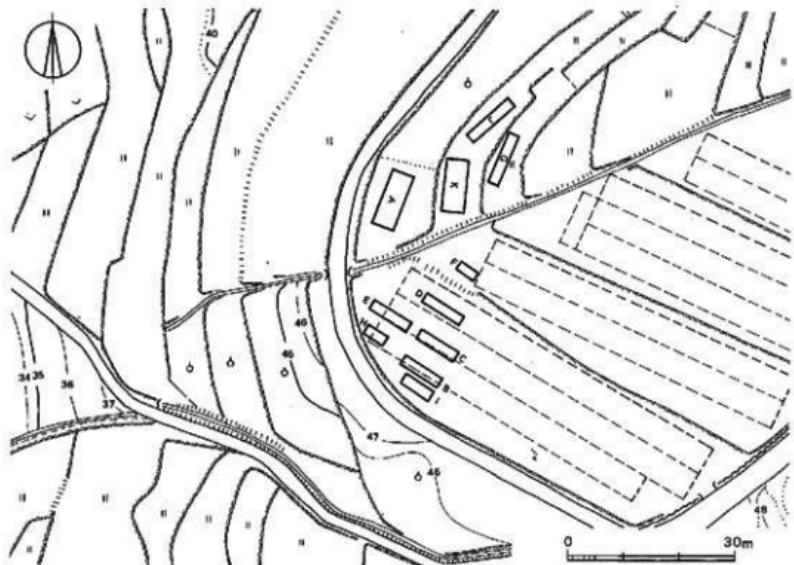


Fig. 2 調査区図 (1/1,000)

E区が $2 \times 8\text{ m}$ (16m²)、I区が $2 \times 6\text{ m}$ (12m²)、F・Hが $2 \times 4\text{ m}$ (8m²) である。

3. 土層

土層は、表土・客土・岩盤からなっており、地表から20cm～110cmほどで地山になる。したがって、全て擾乱層である。現在の遺跡周辺の土地利用から考えると、階段状の水田とするためにかなりの削平工事を行い、客土を置いたものと思われる。その際、遺物包含層は削平されてしまったのであろう。擾乱層であるため、調査壇のレベルだけをおさえ、土層は固化しなかつた。

II 遺物 (Fig. 3)

遺物包含層は検出できなかったものの、86点の遺物が出土した。その内訳は、細石刃1点、石鏃2点、石核4点、剥片49点、縄文土器小片10点、近世陶磁器20点である。細石刃、石鏃、石核の7点の石器を図化した。

1. 石器 (Fig. 3)

細石刃 (1)

折断面をもつ細石刃で、下部に小さな破損と側面に細かい刃こぼれがみられる。長さ1.9cm、幅0.9cm、重さ0.3gを測る。漆黒色黒曜石を使用している。A区出土。

石鏃 (2・3)

2は長三角形状をなし、V字状の抉りをもつ凹基式である。側辺は、やや粗いが、細かい鋸歯状を呈する。先端と片脚端部を欠損している。現在長1.9cm、重さ0.8gを測る。灰白色黒曜石を使用している。K区出土。3は先端から片脚までを欠失する局部磨製鏃で、旧状は三角形状で丸く浅く抉りをもつ凹基式であろう。打面を残さないまで研磨が行きわたるが、片面には自然面を残している。灰青色黒曜石を使用する。F区出土。

石核 (4～8)

4は、幅広の縱長剥片剥離を目的とした石核で、全体的にバテナが著しい。上部の平坦な自然面を打面とし、側面と背面に自然面を残している。灰青色黒曜石を使用する。表探資料である。5は、比較的小形の縱長剥片剥離を目的としたもので、角礫状の漆黒色黒曜石を使用している。平坦な自然面を打面とし、自然面を多く残す。J区出土。6は、不規則に多方向から小形の側片を剥離した石核で、角礫状の漆黒色黒曜石を使用している。背面と底面に自然面を残す。I区出土。7は、6と同様に多方向から剥片を剥離したもので残核である。漆黒色黒曜石を使用し、自然面は残っていない。F区出土。8は、6・7と同様に多方向から剥離を行った小形の石核である。質の良いおそらく腰舟産と思われる漆黒色黒曜石を使用している。前面、

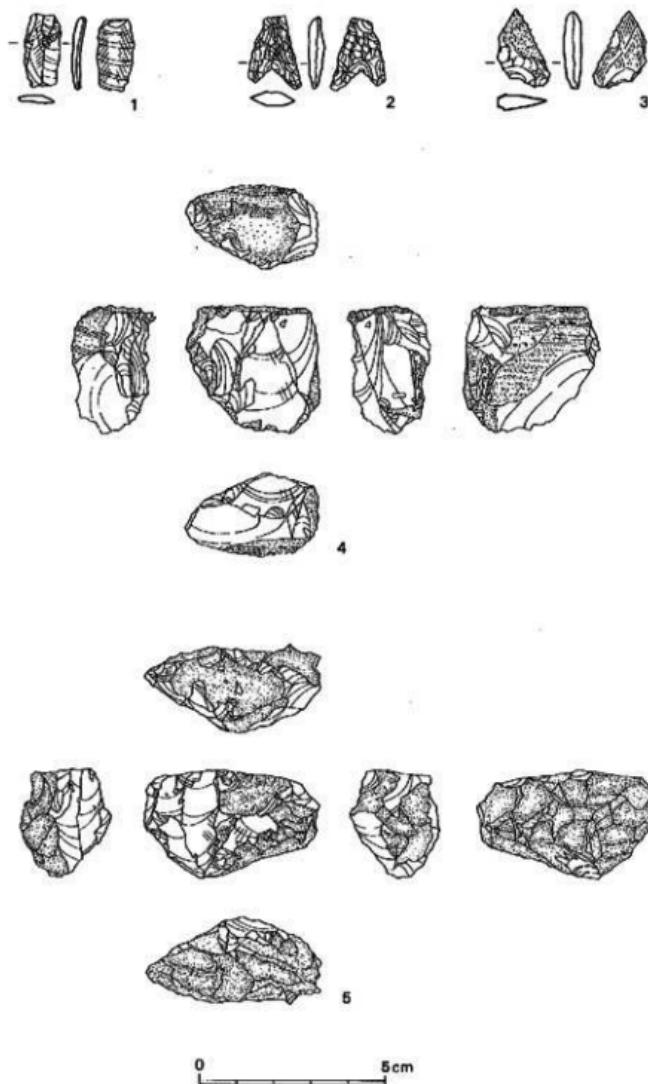


Fig. 3 出土遺物① (2/3)

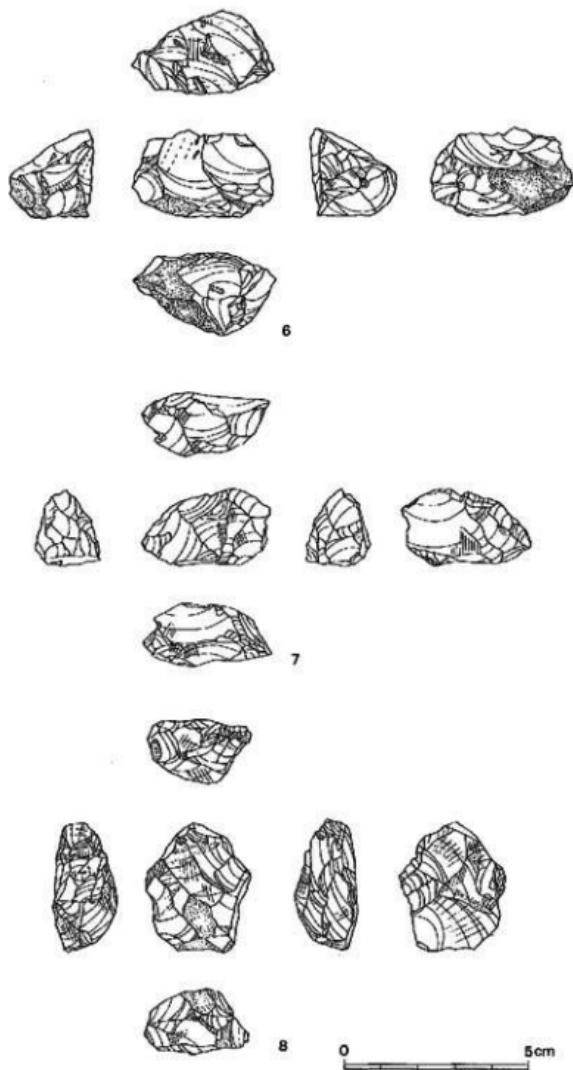


Fig. 4 出土遺物② (2/3)

底面に自然面が部分的に残る。C区出土。

III　まとめ

調査の結果、路線内の遺跡部分については、先土器～繩文時代にかけての遺物が若干出土したが、遺物包含層及び遺構は確認できず、良好な状況ではないことが判明した。後世の削平によって消滅したことが考えられるが、まだ路線外に包含層等が残っている可能性をもっている。野田古墳付近で同様の遺跡が発見されており、小規模な狩獵・採集のための野営地としての性格が考えられよう。

P L A T E S

(野田B遺跡)



遺跡遠景(南西から)



調査風景(K区)



A区全景(南東から)



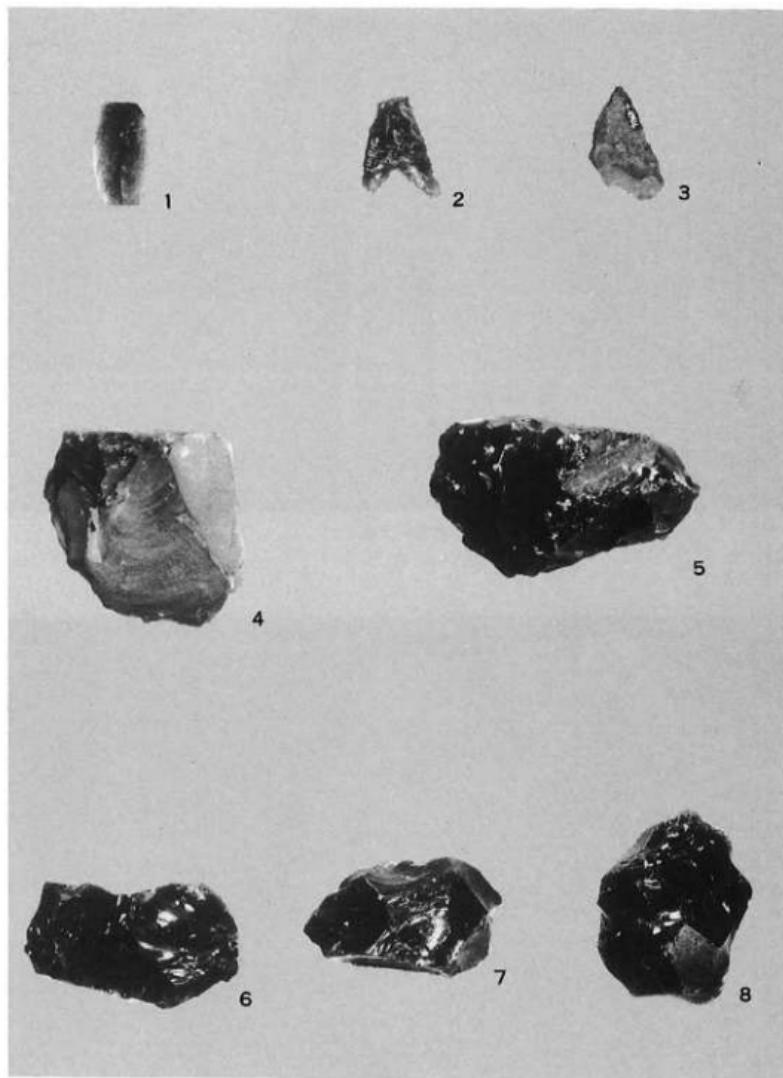
H区全景(北西から)



F区全景(北西から)



J区全景(南西から)



出土遺物 (1/1)

野田の久保遺跡



| | |
|------------------------------|-----|
| Fig.12 縄文土器 (表採) ① | 332 |
| Fig.13 縄文土器 ② | 333 |
| Fig.14 縄文土器 ③ | 334 |
| Fig.15 縄文土器 ④ | 336 |
| Fig.16 縄文土器 ⑤ | 337 |
| Fig.17 縄文土器 ⑥ | 338 |
| Fig.18 縄文土器底部 ⑦ | 339 |
| Fig.19 縄文土器底部 ⑧ | 340 |
| Fig.20 弥生土器(表採) ① | 342 |
| Fig.21 弥生土器 ② | 343 |
| Fig.22 弥生土器 ③ | 345 |
| Fig.23 弥生土器 ④ | 346 |
| Fig.24 弥生土器 ⑤ | 347 |
| Fig.25 弥生土器 ⑥ | 348 |
| Fig.26 弥生土器 ⑦ | 349 |
| Fig.27 弥生土器 ⑧ | 349 |
| Fig.28 石器出土数量図 | 351 |
| Fig.29 先土器時代石器 ① | 353 |
| Fig.30 先土器時代石器 ② | 354 |
| Fig.31 ポイント実測図 (表採・表土) | 355 |
| Fig.32 ポイント実測図 | 356 |
| Fig.33 石礫出土図 | 357 |
| Fig.34 石礫分類図 | 357 |
| Fig.35 石礫折損図 | 358 |
| Fig.36 石礫実測図 (表採・表土) ① | 359 |
| Fig.37 石礫実測図 (表採・表土) ② | 360 |
| Fig.38 石礫実測図 (表採・表土) ③ | 361 |
| Fig.39 石礫実測図 (表採・表土) ④ | 362 |
| Fig.40 石礫実測図 (表採・表土) ⑤ | 363 |
| Fig.41 石礫実測図 (表採・表土) ⑥ | 364 |
| Fig.42 石礫実測図 ⑦ | 369 |
| Fig.43 石礫実測図 ⑧ | 370 |
| Fig.44 石礫実測図 ⑨ | 371 |
| Fig.45 石礫実測図 ⑩ | 372 |

| | |
|-----------------------------|-----|
| Fig.46 石鏃実測図 ⑪ | 373 |
| Fig.47 石鏃実測図 ⑫ | 374 |
| Fig.48 石鏃実測図 ⑬ | 375 |
| Fig.49 石鏃実測図 ⑭ | 376 |
| Fig.50 石鏃実測図 ⑮ | 377 |
| Fig.51 石鏃実測図 ⑯ | 378 |
| Fig.52 石鏃実測図 ⑰ | 379 |
| Fig.53 石鏃実測図 ⑱ | 380 |
| Fig.54 石鏃実測図 ⑲ | 381 |
| Fig.55 石鏃実測図 ⑳ | 382 |
| Fig.56 石鏃実測図 ㉑ | 383 |
| Fig.57 石鏃実測図 ㉒ | 384 |
| Fig.58 石鏃実測図 ㉓ | 385 |
| Fig.59 石鏃実測図 ㉔ | 386 |
| Fig.60 石鏃実測図 ㉕ | 387 |
| Fig.61 スクレイパー実測図 | 400 |
| Fig.62 スクレイパー・サイドブレイド実測図 | 401 |
| Fig.63 不定形剝片・石核・彫器実測図 | 402 |
| Fig.64 石匙実測図 | 403 |
| Fig.65 石錐・サイドブレイド・スクレイパー実測図 | 404 |
| Fig.66 スクレイパー実測図 ① | 405 |
| Fig.67 スクレイパー実測図 ② | 406 |
| Fig.68 不定形剝片実測図 ① | 407 |
| Fig.69 不定形剝片実測図 ② | 408 |
| Fig.70 不定形剝片実測図 ③ | 409 |
| Fig.71 不定形剝片実測図 ④ | 410 |
| Fig.72 石核実測図 | 411 |
| Fig.73 石斧・スクレイパー実測図 | 413 |
| Fig.74 スクレイパー実測図 | 414 |
| Fig.75 石斧・砥石・敲石・石錐実測図 | 416 |
| Fig.76 磨製石斧実測図 | 417 |
| Fig.77 扁平打製石斧実測図 | 418 |
| Fig.78 石斧実測図 | 419 |
| Fig.79 スクレイパー実測図 | 420 |

| | |
|-----------------------------|-----|
| Fig.80 磨石・敲石実測図 | 421 |
| Fig.81 石皿・石錐・砥石・石鍋実測図 | 422 |

表 目 次

| | |
|-----------------------|-----|
| Tab. 1 石燃計測図 ① | 365 |
| Tab. 2 石燃計測図 ② | 366 |
| Tab. 3 石燃計測図 ③ | 367 |
| Tab. 4 石燃計測図 ④ | 389 |
| Tab. 5 石燃計測図 ⑤ | 390 |
| Tab. 6 石燃計測図 ⑥ | 391 |
| Tab. 7 石燃計測図 ⑦ | 392 |
| Tab. 8 石燃計測図 ⑧ | 393 |
| Tab. 9 石燃計測図 ⑨ | 394 |
| Tab. 10 石燃計測図 ⑩ | 395 |
| Tab. 11 石燃計測図 ⑪ | 396 |
| Tab. 12 石燃計測図 ⑫ | 397 |
| Tab. 13 石燃計測図 ⑬ | 398 |
| Tab. 14 石燃計測図 ⑭ | 399 |

図版目次

| | |
|----------------------------------|-----|
| PL. 1 遺跡遠景(南より), 遺跡近景(北より) | 427 |
| PL. 2 調査区近景 | 428 |
| PL. 3 K-2西壁・J-4西壁 | 429 |
| PL. 4 N-7東壁・J-10東壁 | 430 |
| PL. 5 E-17北壁・G-23西壁 | 431 |
| PL. 6 K-5西壁・H-6南壁 | 432 |
| PL. 7 焼夷弾処理状況, 調査風景 | 433 |
| PL. 8 M-10区不定形土壌 | 434 |
| PL. 9 K-3区埋立状遺構 | 435 |
| PL. 10 E-17区集石遺構 | 436 |
| PL. 11 N-25区掘立柱建物跡 | 437 |
| PL. 12 土器出土状況 | 438 |
| PL. 13 土器出土状況 | 439 |

| | |
|--------------------------|-----|
| PL.14 Fig.12, 13土器 | 440 |
| PL.15 Fig.14土器 | 441 |
| PL.16 Fig.15, 16土器 | 442 |
| PL.17 Fig.17土器 | 443 |
| PL.18 Fig.18土器 | 444 |
| PL.19 Fig.19土器 | 445 |
| PL.20 Fig.20土器 | 446 |
| PL.21 Fig.21土器 | 447 |
| PL.22 Fig.22土器 | 448 |
| PL.23 Fig.23, 24土器 | 449 |
| PL.24 Fig.25土器 | 450 |
| PL.25 Fig.26, 27土器 | 451 |
| PL.26 Fig.29石器 | 452 |
| PL.27 Fig.30石器 | 453 |
| PL.28 Fig.31, 32石器 | 454 |
| PL.29 Fig.36石鎌 | 455 |
| PL.30 Fig.37石鎌 | 456 |
| PL.31 Fig.38石鎌 | 457 |
| PL.32 Fig.39石鎌 | 458 |
| PL.33 Fig.40石鎌 | 459 |
| PL.34 Fig.41石鎌 | 460 |
| PL.35 Fig.42石鎌 | 461 |
| PL.36 Fig.43石鎌 | 462 |
| PL.37 Fig.44石鎌 | 463 |
| PL.38 Fig.45石鎌 | 464 |
| PL.39 Fig.46石鎌 | 465 |
| PL.40 Fig.47石鎌 | 466 |
| PL.41 Fig.48石鎌 | 467 |
| PL.42 Fig.49石鎌 | 468 |
| PL.43 Fig.50石鎌 | 469 |
| PL.44 Fig.51石鎌 | 470 |
| PL.45 Fig.52石鎌 | 471 |
| PL.46 Fig.53石鎌 | 472 |
| PL.47 Fig.54石鎌 | 473 |

| | | |
|-------|--------------|-----|
| PL.48 | Fig.55石鎌 | 474 |
| PL.49 | Fig.56石鎌 | 475 |
| PL.50 | Fig.57石鎌 | 476 |
| PL.51 | Fig.58石鎌 | 477 |
| PL.52 | Fig.59石鎌 | 478 |
| PL.53 | Fig.60石鎌 | 479 |
| PL.54 | Fig.61スクレイバー | 480 |
| PL.55 | Fig.62石器 | 481 |
| PL.56 | Fig.63石器 | 482 |
| PL.57 | Fig.64石匙 | 483 |
| PL.58 | Fig.65石器 | 484 |
| PL.59 | Fig.66スクレイバー | 485 |
| PL.60 | Fig.67スクレイバー | 486 |
| PL.61 | Fig.68不定形剝片 | 487 |
| PL.62 | Fig.69の石器 | 488 |
| PL.63 | Fig.70不定形剝片 | 489 |
| PL.64 | Fig.71の石器 | 490 |
| PL.65 | Fig.72石核 | 491 |
| PL.66 | Fig.73, 74石器 | 492 |
| PL.67 | Fig.75石器 | 493 |
| PL.68 | Fig.76, 79石器 | 494 |
| PL.69 | Fig.77石器 | 495 |
| PL.70 | Fig.78石器 | 496 |
| PL.71 | Fig.80石器 | 497 |
| PL.72 | Fig.81石器 | 498 |

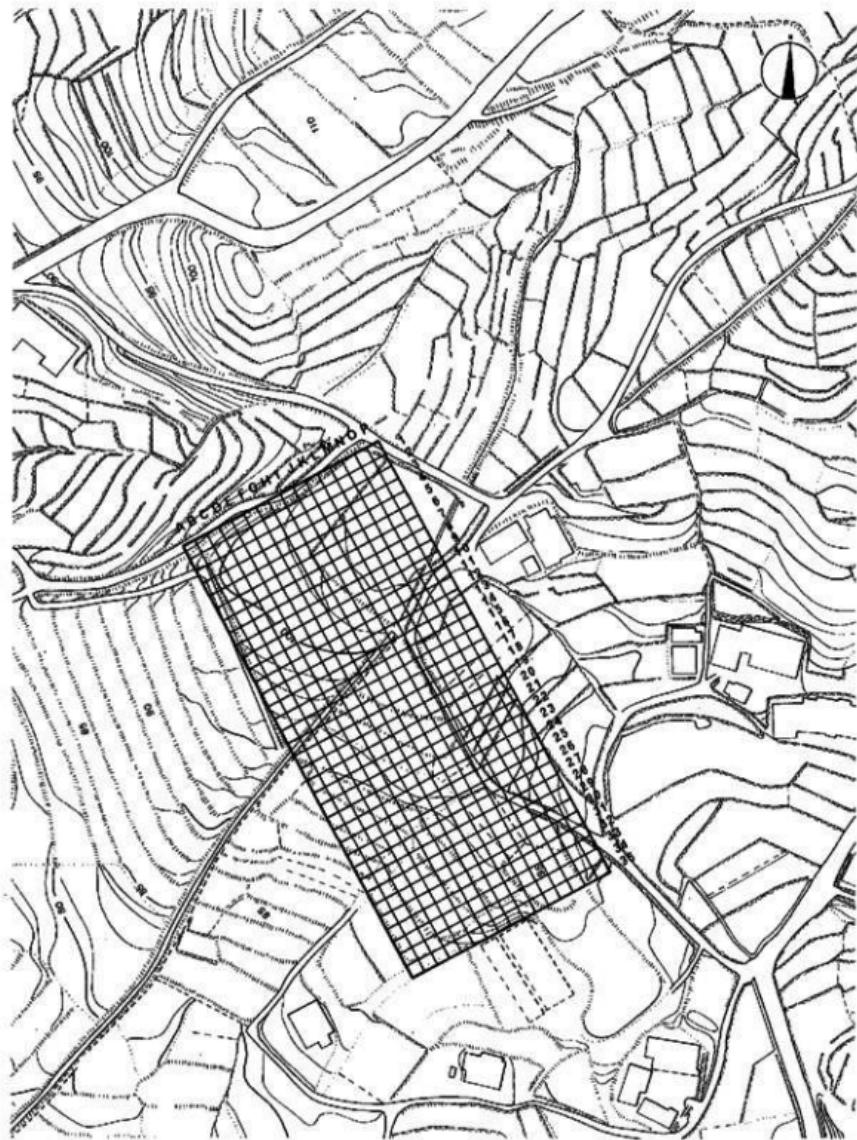


Fig. 1 周辺地形図 (1/2,000)

I 調査

1 地理的歴史的位置 (Fig. 1)

多良山系を構成する諸峯の一つ、郡岳（826m）から派生する幾つかの尾根は、西、南、北に放射状に拡散しながら展開するが、概して北西方向には緩慢な傾斜を保つ一方、南側斜面は郡川によって深く侵食開析されることにより、その上流は急峻な地形を擁する渓谷美を形成している。渓流釣りの名所としても著名である。

野田の久保遺跡は、北西方向に伸びる南面した比較的緩やかな尾根上に位置する。標高は94mから102mを計る。

遺跡は、全体としては南北200m、東西50m程がその範囲と推定されるが、自然地形の傾斜角の強弱と遺跡上半部を東西に横断する小さい溝状の流路（O-10区～A-17区ライン）によつて上下に分断される形になっている。上半部は比較的傾斜が緩やかで果樹園として利用され、傾斜のきつい下半部は起伏修正が計られ、段々畑の水田となっている。

遺跡周辺の歴史環境を概観すると、古くより佐賀県武雄、嬉野方面から山越えしながら野岳に至り、大村湧を眼下に見ながら大村平野に下るルート上にあたるとされる。^{註1}

また、近年調査された「稗田遺跡」の成果では弥生時代から中世にかけての住居跡や遺物が多く出土しており、周辺に散在する「郡七山十坊」と呼ばれる中世寺院群や大村氏の居城に比定される「今富城」の存在と合わせて、この区域が古代から中世に至る重要な場所であったことを示している。

2 調査の概要 (Fig. 2, 3)

昭和56年に実施した県内遺跡分布調査の結果では、当該地付近は「赤木遺跡」として周知されることになった。数点の黒曜石製の石器が採集されたことにより、遺跡調査カードには绳文時代の散布地として登載されている。

その後、九州横断道路建設に伴う再分布調査では、この「赤木遺跡」は更に広範囲に渡ること、そしてその大半が立福寺町野田の久保という小字に入ることが確認されたことから、遺跡名を「野田の久保遺跡」として改めることとした。

調査区の設定にあたっては、道路中心杭を基軸とすることとし、各5mの方眼を組むこととした。調査区の呼称は東西方向をアルファベットとし、南北方向を数字で表わした。

調査は昭和61年10月7日から開始し、年度末の休みをはさんで翌62年6月2日まで続けられた。調査面積は、4,100m²である。

註1 植宮裕和ほか「稗田遺跡」長崎県大村市稗田遺跡調査会 1988

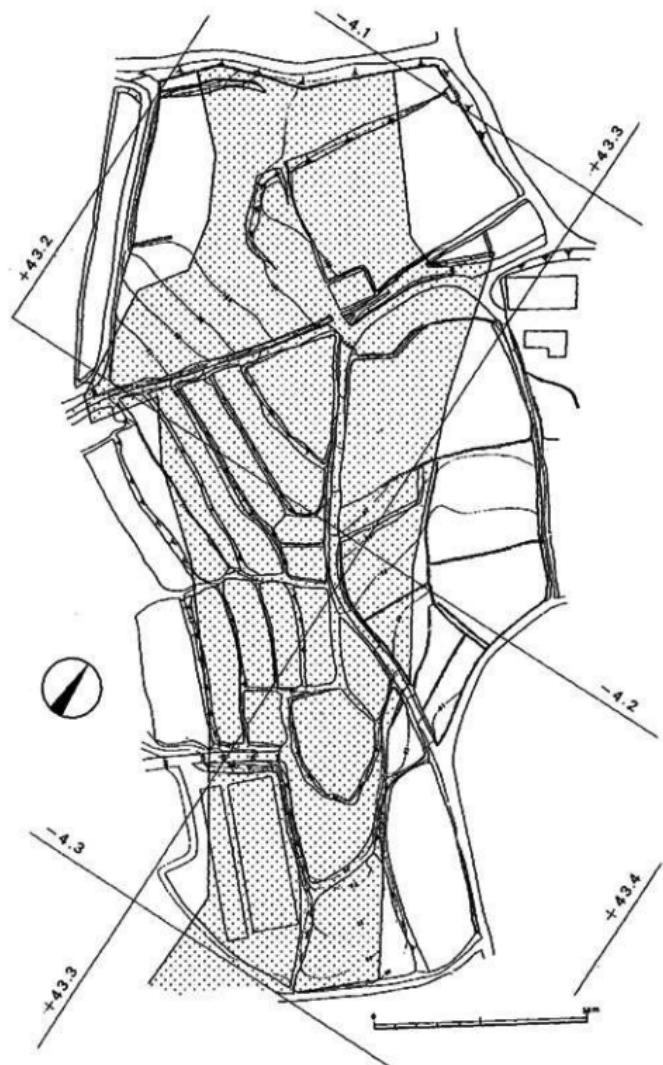


Fig. 2 滲跡範囲図 (座標系第1系)

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S

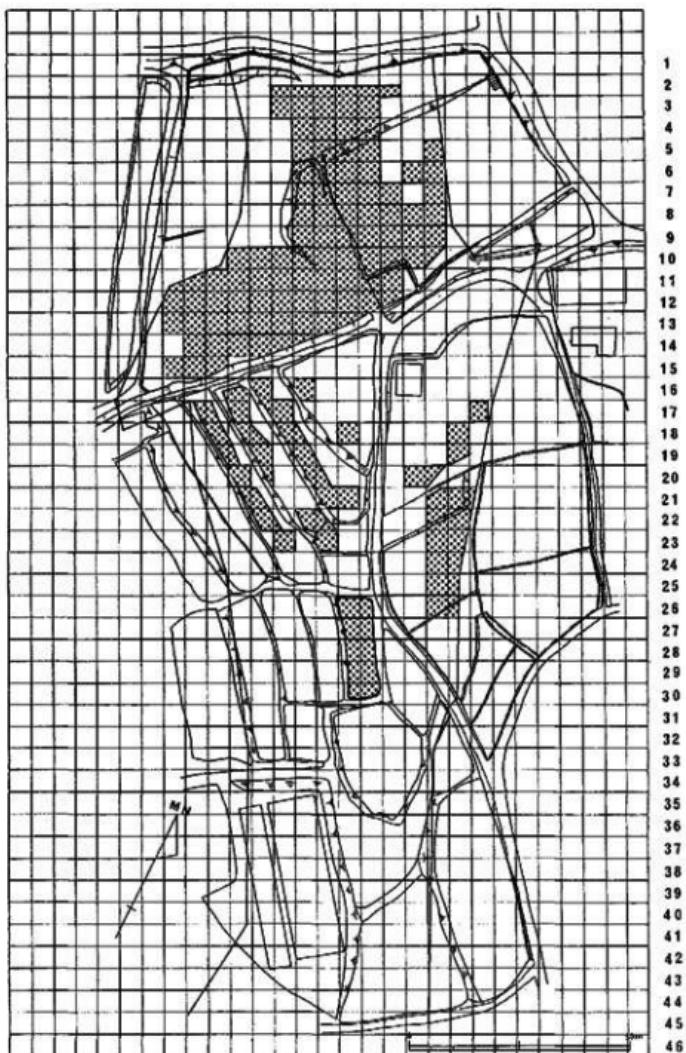


Fig. 3 調査区配置図

3 土層 (Fig. 4)

調査区が、地形の傾斜の状況によって自然地形を残す北側区域と、大幅な起伏修正を施した南側区域に分かれる事は先述したとおりである。

ここで説明する土層図は、この内比較的自然地形の残る北側区域に限定し、溝状の流路（O-10区～A-17区ライン）以南の区域については割愛する。

Fig. 4 の A 列は M-6 ～ H-6 区の南壁の土層図である。遺跡の中央を東西に区切るラインにあたる。標高は東側 M-6 区の方がやや高く 102.5m 程で西側に向かって緩傾斜するが、ほぼ平坦と言つてよい。

土の堆積状況は全体的に薄く、1 層が表土耕作土で 20cm 程の厚みである。2 層は黄褐色の土層で本道路の遺物包含層にあたる。粘性が少なくさらさらした感じである。L-6 区を除く各区内に堆積が認められるが、その厚みは 20cm から 50cm ほどである。3 層はいわゆる地山で、安山岩が風化した黄灰色の岩盤となる。無遺物層である。

B 列は C-13 ～ J-13 区の北壁にあたる。東側 J-13 区表面で標高 101m、西側 C-13 区表面が 97.5m であるから、40m について 3.5m の落差となり、傾斜角は 10 度となる。遺物包含層は標高の高い II, T, J 区のほうに比較的よく残り、地点によっては 90cm 程が堆積している。

C 列は J-2 区～ J-12 区の東壁の土層図である。調査区のほぼ中央部を南北に区切るラインにあたる。K-4 区で段がついているが、調査の結果 J-2, 3 区には分厚い客土が確認され、当核地点の本来の地形は、K-5 区あたりを頂点とし、北側には急速に、そして南側には緩傾斜していることがわかった。

遺物包含層は、J-6, 7 区などの平坦部で残りが悪い。多少の起伏修正があったものと思われる。その他の地区では平均して 30cm 程が堆積しているが、地盤が凹凸である為一様な堆積とは言えない。全体的に辛うじて残っている状態と言えるだろう。

出土遺物は、後述するように先土器時代から中世までの資料がこの薄い包含層の中に混在するため、各時代毎の層位を抽出する事は困難である。特に縄文時代と弥生時代の遺構が同じ層の中に見られる事も、このことを示している。

但し、出土遺物の 99% は縄文、弥生両時代の遺物であり、本遺跡の主な生活舞台はこの両時代であったことは推定できよう。

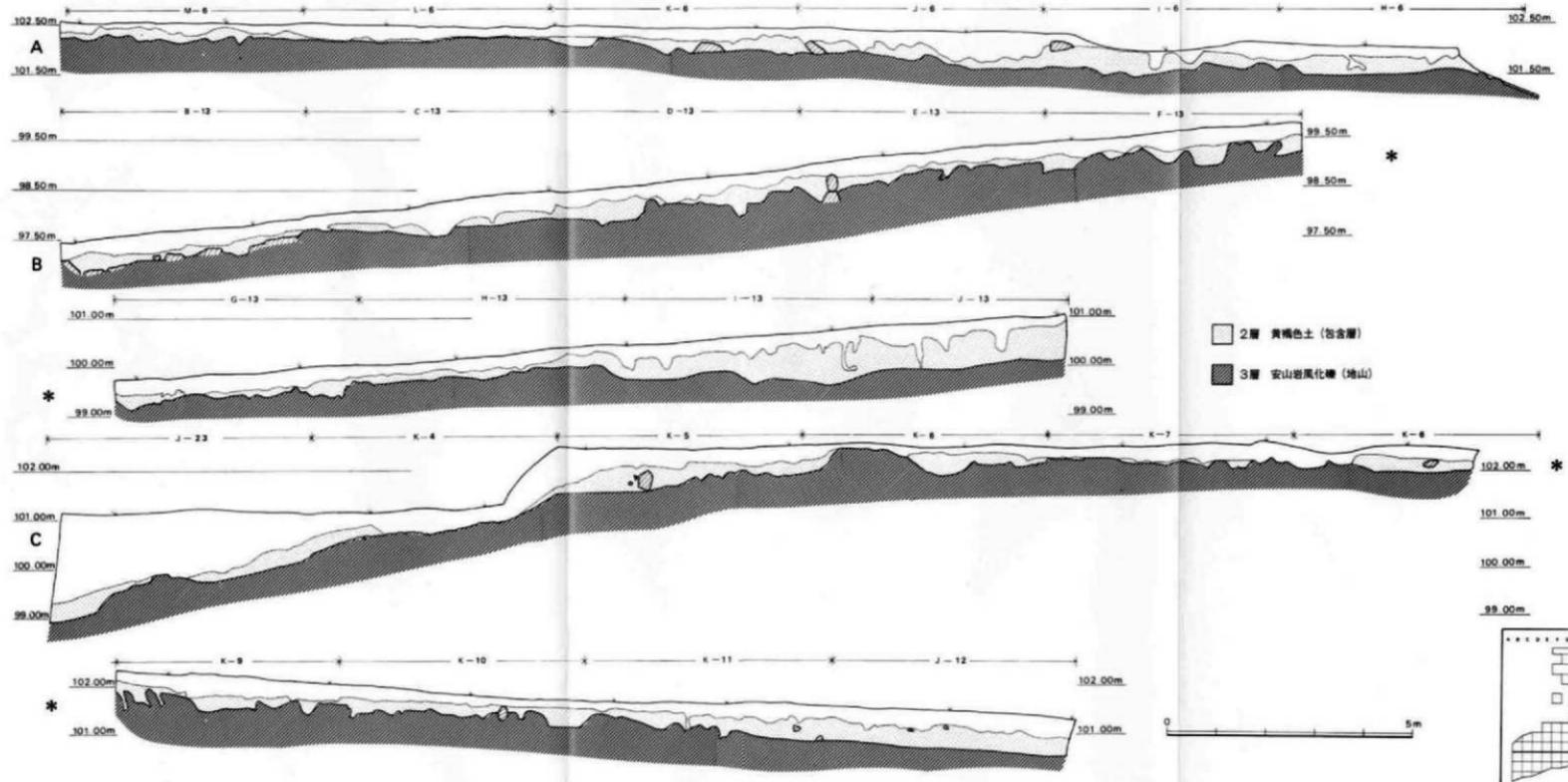


Fig. 4 土壠図 (1/80)

II 遺構

土層の堆積状況が薄いことと起伏修正が行われているため、各種遺構の残存状況は良好とは言えない。ここでは比較的保存状態の良い遺構について簡単な説明を加えておきたい。

埋甕状遺構 (Fig. 5)

K-2区斜面の中から出土した。この区は1m程の客土の下に4層の堆積土が認められる。この内3層目を遺物包含層として把握したが、その上面に直径30cm、残った深さで20cm程の不定形なピットを掘り、胴部から底部にかけての縄文晩期の甕を斜めに埋置している。表面が多少削られているためピット本来の形状は不明であるが、甕はピットの底からやや浮いた状態で置かれている。なお、甕の残り状況から見るとその上半は当初から意識的に欠けていたものと思われる。

このような遺構について明確な説明はできないが、ピットの中に埋置されていることと、甕に意識的な口縁打ち欠きがなされていることから、ここでは一応埋葬に関係した埋甕的な用途を考えておきたい。

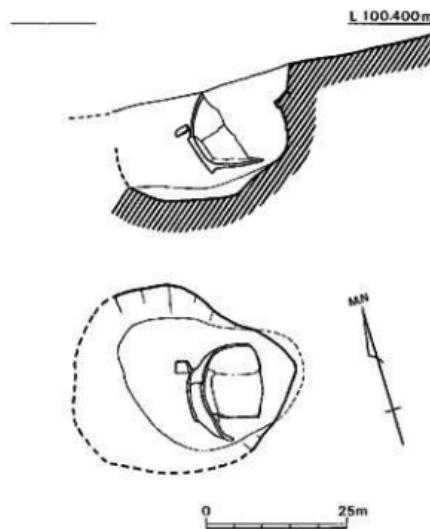


Fig. 5 埋甕状遺構

不定形土壙 (Fig. 6)

M-10区の2層上面から切り込まれた土壙である。ピットの形状はいびつな楕円形を呈し、長径60cm、短径50cmを計る。ピット上部からほぼ垂直に掘り込まれているが、30cmのところで一旦段がつき二段掘り込みの形をとる。調査時には土の色からも判断できなかったが、ピット内にあった土器片の位置関係からみると、深い方のピットは後から掘り込まれた可能性が高い。そうであれば、当初のピットは深さ30cmほどであったことになる。

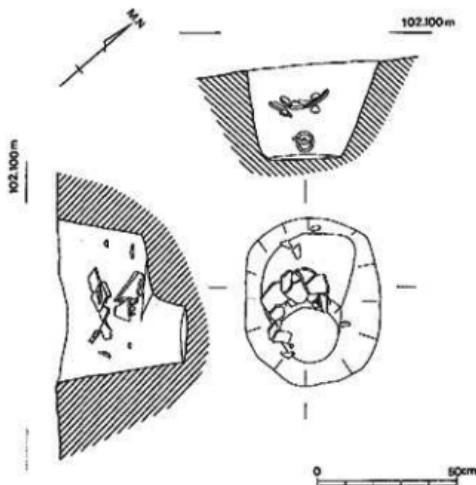


Fig. 6 不定期土壙

ピットの中に入っていた弥生土器片は、上方に弥生前期末の甌口縁部片が浮いた状況で見られ、少し隙間があって、下方に高杯脚部が置かれている。

この土壤周辺には大小の浅いピットが幾つか見られるが、大きさ、深度、並びに規則性が無く、柱穴の可能性は薄い。従って、不明土壙と言わざるをえないが、埋葬に關係する遺構とは思われない。

集石土壙 (Fig. 7)

E-17区北側に略東西方向に位置する。長さ2.7m、幅0.8m、深さ0.3m程の隅丸方形をなす。表上下0.7m、3層上面から掘り込み、そのライン上に大小の安山岩礫を配置する。礫は何れも付近に産する塊石を利用するが、土壙中央部あたりに厚く配している。礫の下には土が充填しており床面までは20cm程の間隙がある。

出土遺物は礫上面から弥生土器と石斧が出土地してあるが、集石下には見当たらない。

遺構の性格としては、人骨の出土はないが、一応集石土壙として理解しておきたい。時期は不明であるが、礫上出土土器を遺構の時期として捉えられるならば、その特徴から弥生時代前期に属するものと考えられる。

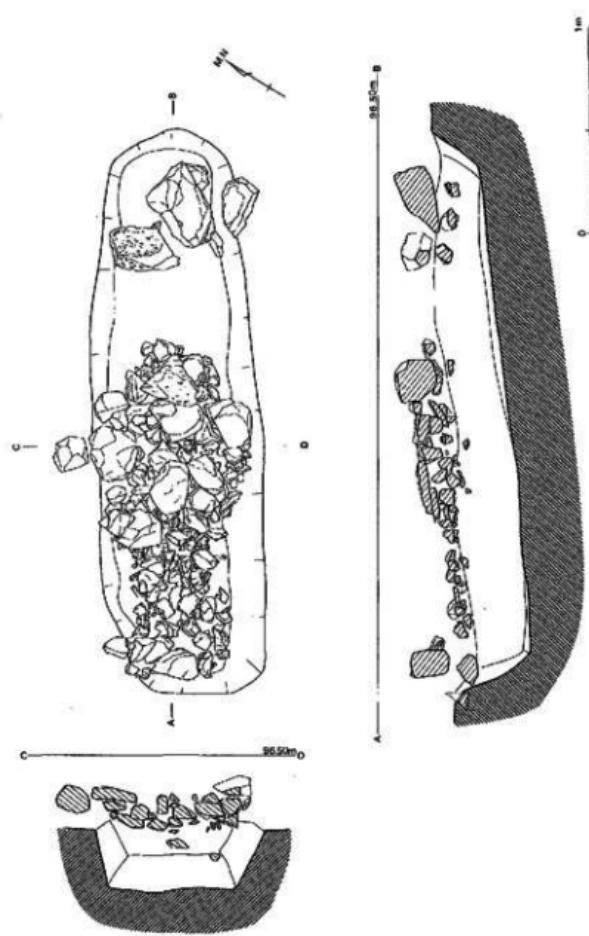


Fig. 7 集石土壤

近世柱立柱跡 (Fig. 9)

O-21区に残る2間×3間の小さな建物址である。

造構は表土下60cmの4層面から掘り込まれているが、3層までは、近世の埋土である。

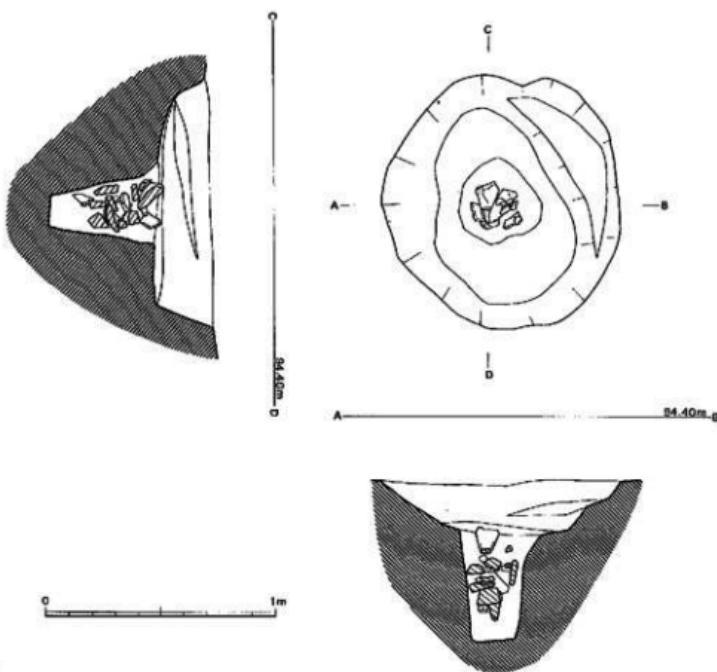


Fig. 8 円形土墳

長軸をほぼ南北にとり、柱と柱の間隔は南側から3番目までは約2mと同間隔であるが、3番目と4番目が2.5mとやや広くなっている。

柱穴は直徑が40cm～70cm程度の掘立柱穴で、P-1からP-4までの断面からみると、深さは平均して70cmほどである。各柱穴には不定形の礫が入り込んでいるが、何れも浮いた状況であり、破棄にあたって投げ込まれた可能性が高い。

建物内にあるP-5の土壙は、長径120cm、短径90cm程の梢円形で深さは30cm程度である。やはり破棄にあたっては、大小の不定形の礫が投げ込まれている。イモ穴とするには少し浅すぎるような感がある。

柱穴の位置と規模からすると、小さな小屋の跡と思われるが、出土遺物が乏しいために時期を断定できない。恐らく近世の建物であろう。

なお、建物北側に数個の小さなピットが見られるが、何れも深さが20cm程度の深いものであ

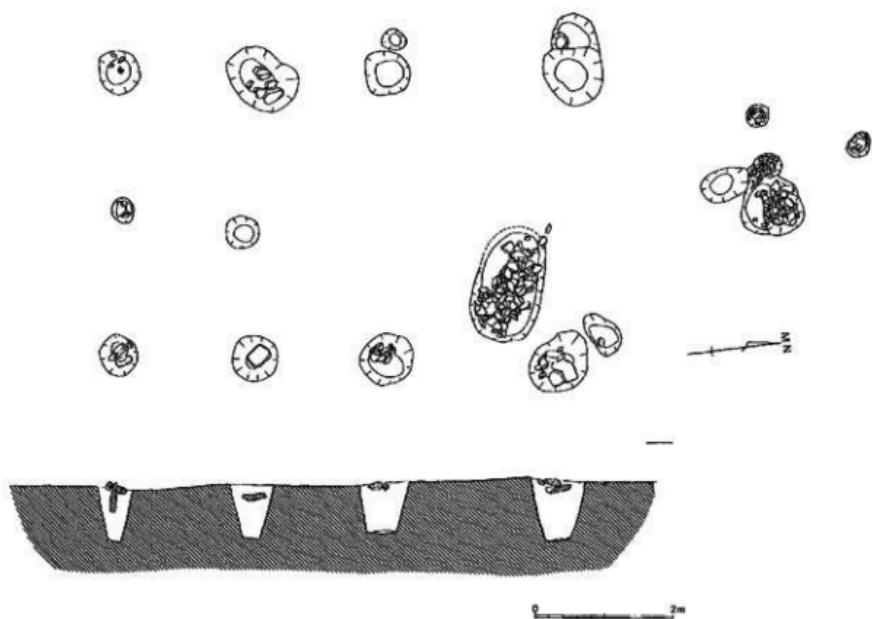


Fig. 9 近世掘立柱跡

り、この造構に伴う柱穴とは考えられない。やはり、破壊にあたって、小さな砾を充填している。

III 出土遺物

野田の久保遺跡からは、表探資料、発掘資料を合わせると、約4万点程の遺物が出土している。この内発掘資料は約3万点である。Fig. 10は表探遺物を除く調査区毎の遺物出土数量図である。

遺跡の現地形は、H, I, J, K-7, 8区周辺に平坦地があり、その区域の標高102mを最高所として、南、北、西側へと傾斜している。遺物の集中区域を仮にA, B, Cの3か所に分けてみる。

A区は遺跡の一番北側に位置しており、かなりまとまった数の遺物が出土している。

土層の堆積状況から旧地形を見ると、K-5区あたりから北側に向かって急傾斜しており、上部からの土砂の流れ込みが相当量あったと推定される。

この区域の遺物の多さの原因かと思われる。

B区からは最も多くの遺物が出土している。

現地形はほぼ平坦であるが、出土遺物が希薄であるK-N-5~7区あたりは表面が掘削された可能性があり、そうであれば、この集中区はさらに北側まで広がる。

南側は、O-10区からB-17区にかけて流れる溝状の水路によって一部分断される形になっているが、E, F-17区あたりまで広がってる模様である。

C区は遺跡の最も南側に位置する。比較的傾斜が急であるため、現在は掘削造成による段々

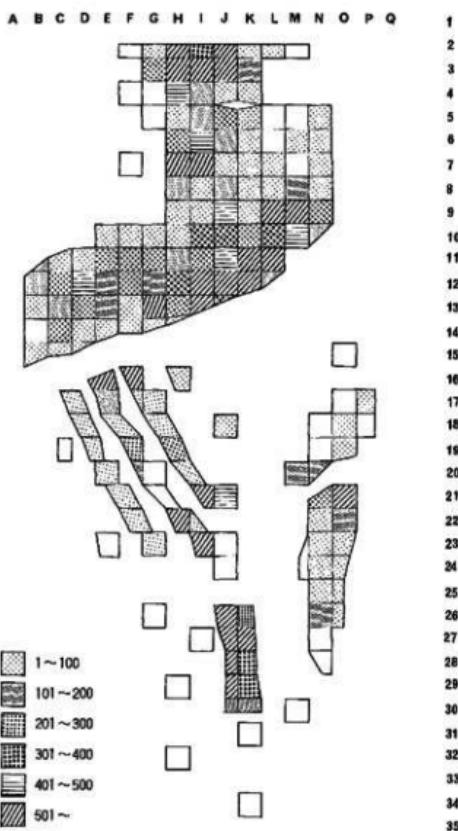


Fig. 10 遺物出土数量図

烟として利用されている。しかし、そのなかでも遺物が集中するJ, K-26~29区あたりは尾根上にあたり、比較的傾斜が緩慢な場所ということができる。出土遺物の中には、土師器が含まれ、縄文、弥生の遺物が中心であるA, B区とは状況が若干異なる。

出土遺物の内、土器の出土状況はFig.11のとおりである。

出土土器は細片が多く、しかも風化と剥落が多いため、縄文土器と弥生土器を明確に区別出来ないケースがあり、時期別の出土状況図を作成できなかった。

従って、ここで図示したのは両方の資料を合わせた図である。先のA, B, C区の遺物集中範囲とほぼ一致するが、集中箇所はより明確になっている。石器よりも、移動しにくいという土器の性格を考えると、この集中箇所が生活址の中心であったことが分かる。

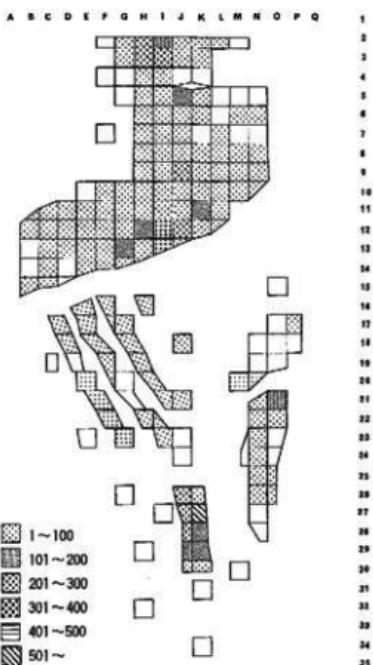


Fig. 11 土器出土数量図



1. 土 器

① 繩文土器 (Fig. 12~Fig. 19)

前に述べたように、土器片は全部で 5,200 点程出土しているが、その大半は細片であり、図化ができる程の資料は少ない。しかも、風化が進んでいることと器面の剥落が顕著であるため、調整痕の観察が十分に出来ない。

以下、実測可能な資料については出来るだけ掲載することにした。

Fig. 12 は、表採並びに表土中から出土した縄文土器である。一応発掘資料とは区別して図示しておきたい。

1~11 は深鉢で、12~14 は深鉢底部、9 は縁口縁部、15 は縁の底部と思われる。

1, 2 は深鉢口縁部で同一資料と思われる。何れも黒褐色で胎土に石英、雲母を含む。11 番上と弱い屈曲部の低い突带上に浅い刻目を施す。全体的にローリングが見られシャープさはないが、器壁は 9 mm 程あり、資料の中では比較的残存状況は良い方である。

3~8 は深鉢口縁部で、何れも小さな貼りつけ突帶を持ち、その上に浅い刻目を施すが、4 を除くと刻目は浅く、痕跡的ですらある。風化のため、器表面の剥落が目立ち、本来の器壁

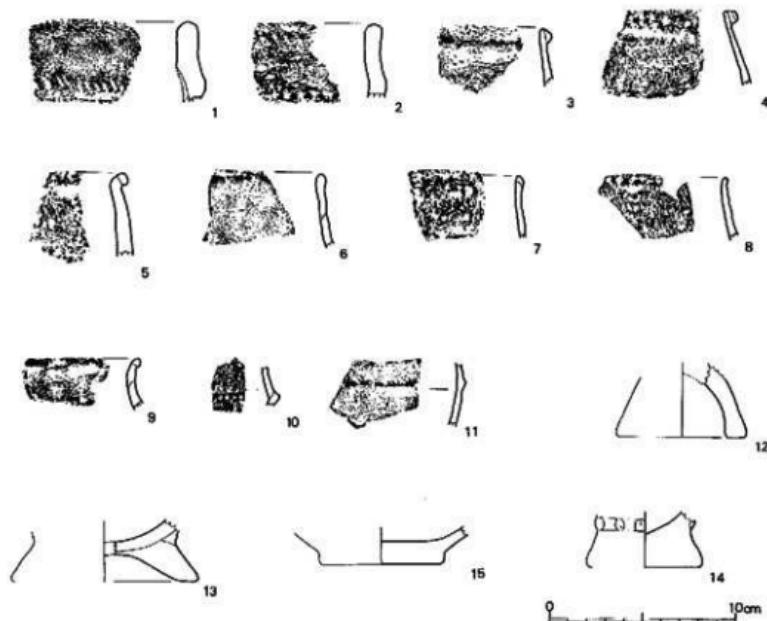


Fig. 12 縄文土器（表採）①

の厚さと、調整痕が良く分からぬ。概して胎土には砂が多く、焼成は甘い。

9は壺の口縁部である。にぶい橙色を呈し、胎土に石英、雲母を含む。口縁先端部をやや外側に張り出し、外反するやや長めの頸部に移行する。風化のため全体が丸っこい。

10、11は深鉢の肩の屈曲部である。共に剥落が目立ち、器壁の厚さ、調整痕が観察出来ない。また突帯上には浅い刻目が施されるがはっきりしない。

12~14は深鉢底部にある。共に暗赤褐色を呈し、胎土には雲母、石英を含むが、砂粒が多く、ざらついている。13、14は底部の屈曲部に刻目突帯を施す資料である。なお、12、13はあげ底で、14は断面台形状の平底である。

15は壺の底部になる資料であろう。直径6.5cmの薄い円盤張り付けで、明褐色を呈する。胎土には雲母、石英を含むが、砂質でざらつく。

Fig.13-1は押型文土器である。1点だけ出土している。深鉢口辺部にあたり、褐色で胎土に雲母、石英を含む。器壁は7mmと薄い。多少の風化のため明瞭さに欠けるが、表側には横円文を、裏側には間延びした山形文を施す。早期から前期にかけての資料である。

2は深鉢胴部である。橙色で、胎土に角閃石、雲母、石英を含む。15mmの厚さを持つ無文の資料である。このほか、同じような特徴を持つ土器片が数点出土しているが、細片でありしかも數は少ない。1と同じく早期から前期の資料であろう。

3は深鉢口縁上に付く突起状の飾り把手である。明褐色で胎土に多量の滑石を含む。4個の粘土紐を接合し、四方から孔を穿っているが、貫通していない部分もある。胎土に滑石を含む資料は、この一点だけである。後期に属するものと思われる。類似資料は本県殿崎遺跡、有喜貝塚、佐賀県坂の下遺跡、韓国釜山東三洞貝塚等に見られる。

4は所謂組織文土器である。鉢の胴下半部と思われる。外側明褐色、内側黒褐色で多めの砂と雲母、石英を含む。焼成は良い。晩期後半の資料であろう。

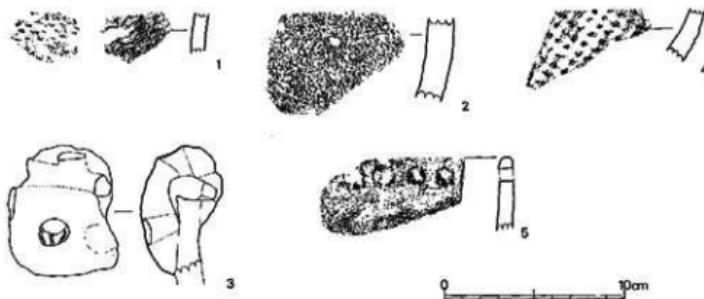


Fig. 13 繩文土器②

5は無文の深鉢口縁部である。赤褐色で胎土に石英、雲母を含む。器形は口縁から直行し、口唇部は丸みを持つ。口縁下には外側から穿孔した径7mmの孔を8mm間隔に配している。

この種の孔列文土器は類例に乏しいが、所謂朝鮮系無紋孔列文土器と共通する特徴を持つ。韓国国立中央博物館の韓永熙氏の教示によると、韓国全土の無紋土器の中では普通に見られるもので、時期も無紋土器前期から後期まで及ぶらしい。日本に於ける類似資料の出土例としては、^{註5}福岡県長行遺跡、山口県吉母浜遺跡、福岡県小竹町の例が朝鮮無紋土器の渡米要素として紹介されている。本遺跡では縄文晩期と弥生前期末の土器が、出土資料の大部分であるが、この土器は、色調、胎土からすると前者のものに似ている。

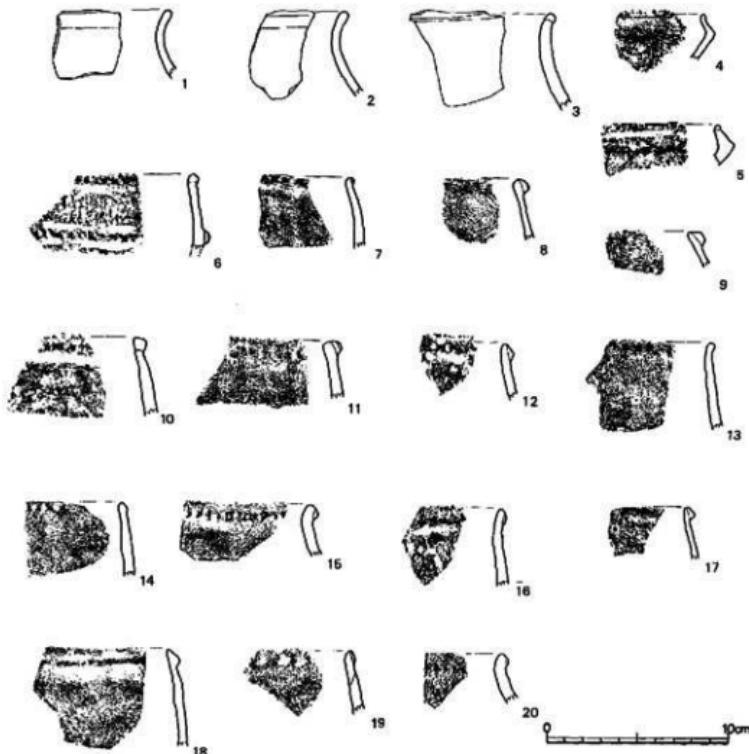


Fig. 14 縄文土器③

Fig.14-1～3は壺口縁部である。

1はにぶい黄橙色で胎土に石英、金雲母を含む。丸みを持つ口唇から内湾しながら頸部にいたる。焼成は良好であるが、全体が風化しているため調整痕は明瞭でない。2も1とおなじような器形を持つ。胎土は比較的精選され、なめらかな感じを持つ。やはり風化を受けているために調整痕は不明瞭である。3は頸の長い壺口縁部である。赤褐色で石英、雲母を含む。口唇部は丸く外へ張り出す。焼成はあまり。

4、5は浅鉢口縁である。表面が風化しているため調整痕を観察できず、精製品かどうか不明である。4は器壁が5mm程度の薄手の資料で、口唇がやや外反し、短い頸部と鋭く屈曲する肩部からなる。色調は黒褐色、胎土に雲母と多めの砂を含む。5は明褐色で少量の雲母を含む。ゆるやかに外反する口縁と鋭く屈曲する肩部からなるが、全体的にローリングをうけているためかシャープさに欠ける。

6～20は深鉢口縁である。何れも突帯を持つ資料であるが、刻目を持つものと、不明瞭のものがある。

6は口縁と胴屈曲部に2条の刻目突帯を施す資料である。にぶい黄橙色を呈し、胎土に石英を含む。2条の突帯下はヘラによるヨコナデ調整を行なう。刻目は幅が広く、先の鋭いヘラ先によって施文されているが、その一部が頸部まで及んでいる。器壁は一部剥落しているが、僅かに裏面に研磨痕がみられる。10は明褐色で胎土に雲母と多めの石英を含む。口縁部への突帯の貼付にあたっては、先の丸い棒状施文具で接合部を強く押捺しているため、一見くびれたよう見える。口縁部と殆ど立たない胴屈曲部に浅い刻目が観察される。13はにぶい褐色で少し雲母を含む。口縁を肥厚外反させ、浅い刻目を巡らせる。器壁は一部剥落しているが、頸部に薄い条痕が見られる。焼成はあまり。14、15は共に明赤褐色で、胎土に砂が多くざらざらしている。14の刻目突帯は非常に小さく痕跡的である。器壁も5mmと薄く、全体的にローリングを受けているためであろう。15の突帯は高くはないが、刻目は深く規則的である。裏側に指頭による押圧痕が見られる。16は断面三角形の突帯を貼付するが刻目は良く分からぬ。当初からつけなかった可能性もある。にぶい橙色を呈し、胎土に角閃石を含む。18は口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する例であるが、刻目は観察されない。にぶい橙色で、石英と雲母を含む。20も口縁部突帯に刻目を施さない例である。器壁は剥落のため薄くなっている。調整痕は良く分からぬ。

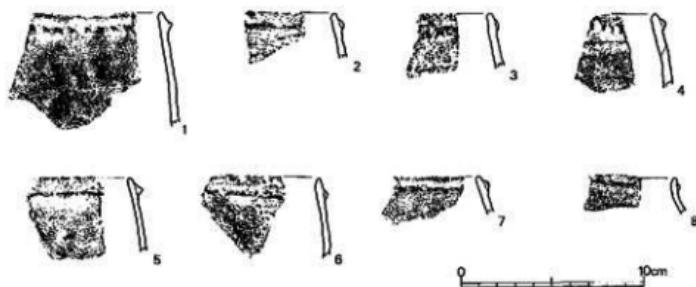


Fig. 15 縄文土器④

Fig.15-1～8も小型の鉢もしくは深鉢口縁であるが、突帯を口縁より少し下がった位置に貼付する。

1はにぶい赤褐色を呈し、胎土に多めの石英、雲母を含むが砂も多く、表面はざらざらしている。口縁下に細い断面三角形の突帯を貼付し、深い刻目を規則的に巡らす。焼成は良好である。器歛は4mmと薄い。調整痕は不明瞭である。2はにぶい橙色で、雲母、石英を含む。低い突帯には刻目は見られない。3の突帯も低いが、浅い線の刻目が残る。2、3共に器壁の剥落が見られ、調整痕が不明瞭である。4は明赤褐色で、多めの砂と雲母を含む。突帯上の刻目は深い。口縁下2cmのところに内傾した胎土の巻き目痕が明瞭である。5はにぶい橙色を呈し、胎土に金雲母と大粒の石英粒を含む。突帯は断面シャープな三角形で、刻目は見られない。器歛の一部が剥落したためか3mm程の厚みしかない。焼成は普通であるが、調整痕は不明瞭。6も3mm程の器壁しかない。にぶい橙色で胎土に大粒の石英粒を含む。低い断面三角形の突帯にははっきりした刻目は見られない。7は赤褐色で多めの雲母を含む。口縁下の突帯は断面三角形であるが、ローリングをうけているためかシャープさが無い。刻目は浅いが規則的である。器壁は4mm程しかなく、口唇部は先端がやや尖った感じになる。8はにぶい褐色の色調で、胎土に雲母を含む。細片のため本来の大きさが復元できないが、3mmという器壁の厚さと、小さく細い突帯から見ても、せいぜい最大径が20cm程度の鉢になるものと思われる。

縄文土器を全体的にみると、概して大きな土器が見られないようである。器歛の剥落も多く観察され、また復元徑を出せる程の大きな破片が無いために不明な点が多いが、小型の資料が多いのは事実である。これらの資料の内、特に器壁が薄い土器片は先に述べたC地点、換言すれば、溝状の水路以南の傾斜がややきつい区域から多く出土している。上部からの流れ込みの過程で、器壁が剥落したことが伺えよう。

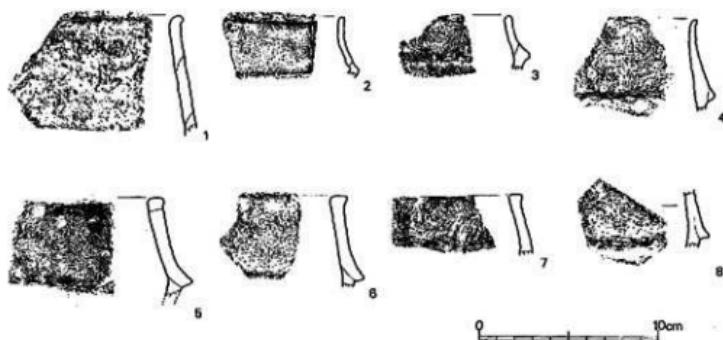


Fig. 16 織文土器 ⑤

Fig.16-1は口縁が僅かに外反する。黄褐色で胎土に金雲母を含む。器表面の剥落が顯著なため、調整痕は不明である。焼成はあまく軟質な感じを受ける。2～4は口縁が僅かに外反するが、明瞭な突帯は胴屈曲部にのみ付けられる資料である。2は口縁を若干肥厚させて外反する。胴部の屈曲は大きいが、刻目は認められない。器壁は薄く3mm程しか残っていないが、剥落を考える必要があろう。にぶい橙色で多めの雲母を含む。3は口縁も殆ど肥厚させない。頸部は短く、大きく屈曲する胎部に浅い刻目突帯を配する。全体がローリングをうけているため調整痕は不明である。橙色で胎土に雲母、角閃石を含む。4は明るい橙色の色調で、胎土に金雲母と、大粒の石英粒を含む。器壁に剥落がみられ、調整痕が定かでないが、裏面に指頭による押圧痕が見られる。口縁をやや外反させ、胴部の張り付け突帯上には浅い刻目を施す。

5～8は接合しないが同一個体と思われる。いづれも1～3区出土である。にぶい黄橙色を呈し、胎土に金雲母、角閃石、石英を含む。器壁は8mmほどあって、顯著な剥落は認められないが、調整痕は後述する指頭押圧以外は観察出来ない。口縁は粘土接合部を指頭押圧によるつまみあげ調節によって肥厚させ、口唇部を平坦とする。胴部の張り付け突帯は大きく、断面は高い三角形をなすが、刻目の痕跡は認められない。

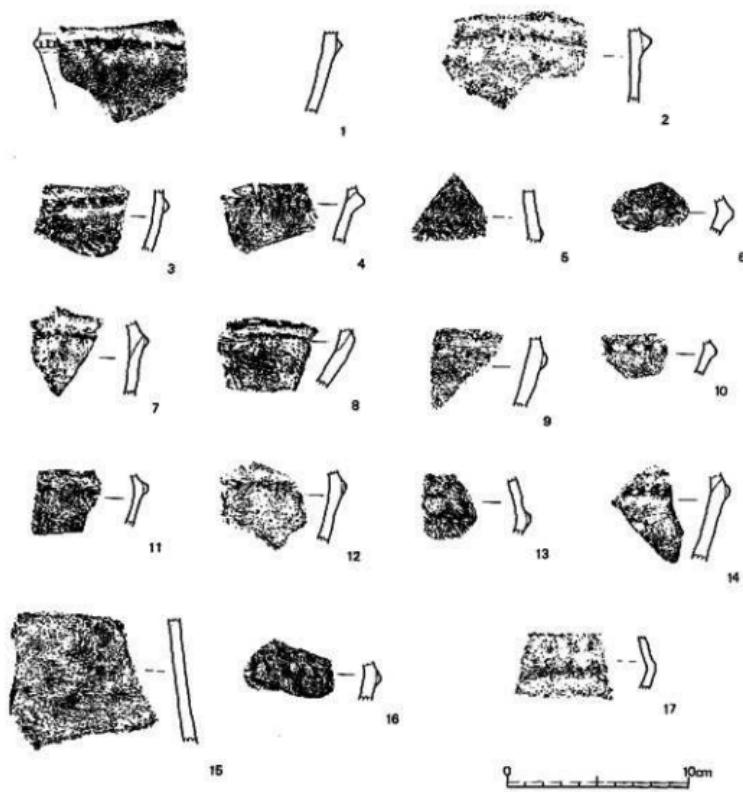


Fig. 17 繩文土器 ⑥

Fig. 17は深鉢もしくは鉢脚部片である。

1は復元径がかろうじて推定出来る資料である。深鉢の胴部最大径で17cmを計る。にぶい橙色で、雲母を含むが、砂が多くざらついている。脚部の張り付け突带上には浅い刻目を巡らす。内側には指頭押圧による調整痕が見られる。2はにぶい橙色を呈し、胎土に金雲母と大粒な石英を含む。断面三角形の張り付け突带上には浅く不規則な刻目を施す。3、4共に小型の深鉢資料である。胎土に金雲母を含み、張り付け突带上には浅い刻目を巡らす。ローリングを受けているせいで細かな調整痕は不明であるが、5の突帶の上下には貼付に当たっての指頭押圧とナデが認められる。8は細片であるが、突带上には棒状施文具によって幅広の大きな刻目を

施す。11は赤褐色で胎土に雲母を含む。断面三角形の突带上に浅い刻目を施す。全体にローリングを受けているために丸みを帯び、調整痕が不明瞭となっている。12、13共に器壁が薄く、特に12は剥落が顕著である。12の刻目は幅広で規則的で、13は突帶はシャープであるが刻目は浅く痕跡的である。14はにぼい褐色を呈し、胎土に雲母、石英、角閃石を含む。裏面に剥落が認められるが、器表面の断面三角形の突帶はシャープである。明瞭な刻目は観察されないが、貼り付け部分には指頭押圧による調整痕が見られる。15は粗製の深鉢胴部である。黒褐色を呈し、雲母と石英を含む。焼成は良好で、裏面はナデによる研磨を行い、器表面には浅い条痕が痕跡的に残る。16は胴屈曲部である。剥落のためか、突帶も刻目も見られない。明赤褐色で胎土に石英と雲母を含む。

Fig.18は底部片であるが、いずれも表採資料である。

1は復元径10cmの深鉢である。明赤褐色を呈し、胎土に雲母、石英粒を含むが砂が多くざらついている。深いあげ底で内底部との接合部に断面三角形の突帶を貼付する。焼成は良好である。2もほぼ同じようなあげ底底部である。復元径8cmで茶褐色、胎土に砂粒と雲母を多く含む。内底部との接合部には刻目突帶を貼付している。3は復元径9cmの深鉢底部である。茶褐色で胎土に雲母と小石英粒を含む。焼成は良い。4は直径が10.4cmの大型の底部である。ややあげ底氣味の厚めの底部で、接合部は指頭押圧のあとナデ調整を行う。明赤褐色で雲母と石英粒を含む。5は壺の底部であろう。復元径8cmで黒褐色、胎土には砂粒が多くざらついている。薄い円盤張り付けを行う。6は復元径8cmで、赤褐色。胎土に大粒の石英と、砂粒を含む。器表面に剥落があるため調整痕は不明である。底に一次焼成時のススが見られる。

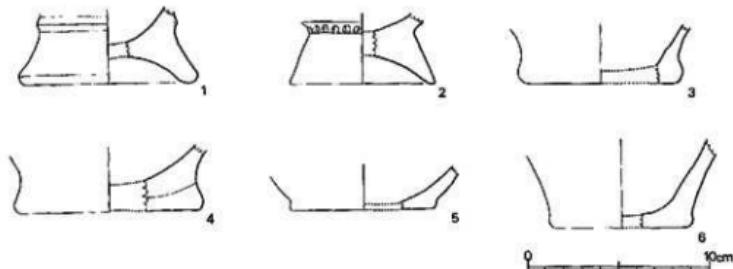


Fig. 18 繩文土器底部⑦

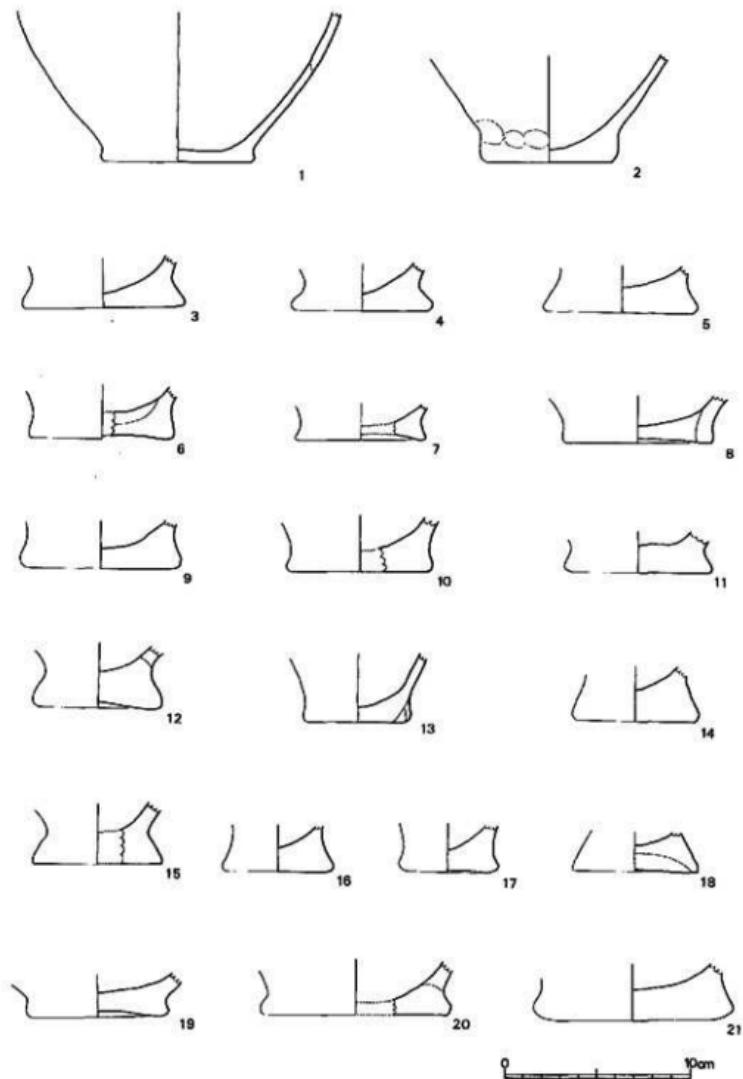


Fig. 19 繩文土器底部 ③

Fig.19は包含層出土の縄文晩期深鉢底部資料である。

1はK-2区出土の埋甕（Fig. 5）である。口縁部を含む上半部を意識的に欠損している。直徑8.2cmの薄手の円盤張り付け底部である。暗赤色で胎土に砂粒、雲母、角閃石を含む。器面に剥落が見られるため、調整痕が不明瞭であるが、内側には指頭押圧痕が残っている。2は径7.5cm、褐灰色を呈し、石英、雲母を含む。立ち上がり部分に指頭押圧痕が残る。焼成は良好である。内側にススが付着する。3は橙色で胎土に雲母、石英、角閃石を含む。復元径8.8cmの円盤張り付け底部である。焼成は良好で剥落は見られない。5は直徑8.8cm、断面が台形を成す円盤張り付け底部である。完形品で、色調は橙色、胎土に雲母と石英粒を含む。ローリングを受けているため調整痕は不明瞭である。9も底部のみほぼ完形である。褐色で雲母、石英を含む。直徑は8.6cmである。11は復元径8cm。赤褐色で石英粒を多く含む。内底部との接合部に突帯を貼付した資料と思われるが、剥落のため判然としない。12は直徑7cm、分厚く断面台形でややあげ底をなす。明赤褐色で雲母と大粒の石英粒を含む。13は復元径5.8cmの小型の深鉢であるが、いびつな円形をなす。明赤褐色で、胎土に砂粒が多くざらついている。底と側面の一部にススが付着している。15は復元径7cm、分厚い平底をなす。接合部外側と内底に指頭押圧痕が見られる。胎土に雲母を含み、焼成は良い。16、17は復元径が6cm程で小型の部類に入る。18は直徑7cmで正円に近い。断面台形状の平底である。明赤褐色で胎土に金雲母と大粒の石英粒を含む。19は直徑7.6cmの正円に近い円盤張り付け底部である。橙色で少量の雲母を含む。接合部のくびれ部分には横方向のナデが観察される。ややあげ底の資料である。20は復元径10cm程の平底である。茶褐色を呈する。焼成は良好で、胎土に雲母と石英粒を含むが、砂が多くざらついている。内底部に指頭押圧痕が残る。21は直徑11cmと最も大きい部類の底部である。明黄褐色で胎土に石英、雲母、角閃石を含む。全体的にローリングをうけているためか、シャープさに欠ける。内底部は指頭押圧によって調整し、平坦部分を作っている。断面台形で平底をなす。

註1 長崎県教育委員会「殿崎遺跡」長崎県文化財調査報告書 第83集 1986

2 謙早市教育委員会「有喜貝塚」謙早市文化財調査報告書 第5集 1984

3 佐賀県立博物館「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書 第2集 1975

4 金 元龍著・西谷 正訳「韓國考古学概論」 勉六興出版 1972

5 田中良之ほか「縄文土器と弥生土器」「弥生文化の研究3」弥生土器 I 雄山閣 1985

(2) 弥生土器・その他の土器

Fig.20は弥生時代ならびにそれ以降の時期の表探資料である。一括して図示しておく。

1, 2は如意形口縁をなす甕である。1は明赤褐色で胎土に金雲母と石英を含む。網片のため様が不明。内側に指頭押圧調整痕が見られる。2も径不明。橙色で胎土に金雲母と大粒の石英を含む。焼成は普通である。3は如意形と突帯の中間形をなす甕である。にぶい橙色で石英と少量の雲母を含む。口縁直下にハケ目痕が見られる。4は口縁に刻目突帯を持つ。所謂鬼ノ印タイプの土器である。全体的に剥落が見られる。胎土には金雲母と石英が含まれる。

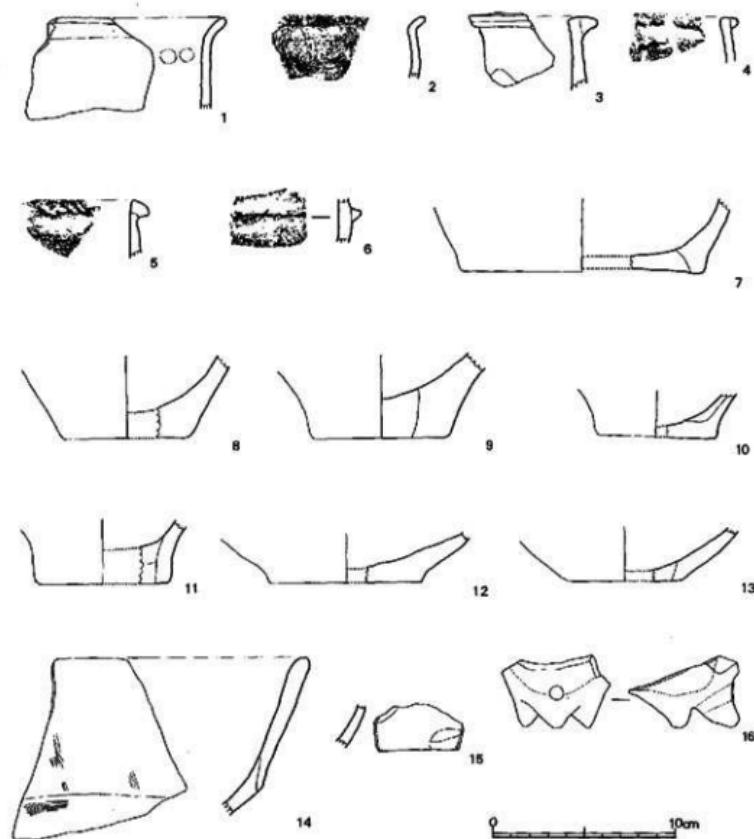


Fig. 20 弥生土器 (表探) ①

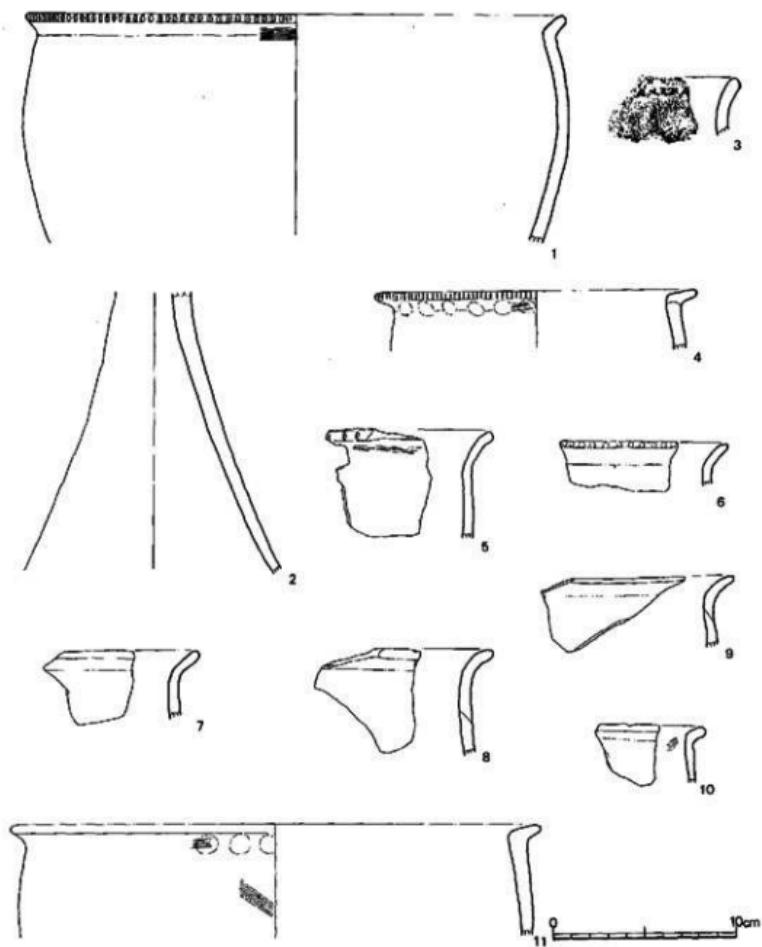


Fig. 21 新生土器 ②

5も同じく亀ノ甲タイプの口縁部である。突帯の刻目は右方向に斜めに施文する。にぶい橙色で胎土に大粒の石英と雲母を含む。焼成は良好である。6は同じタイプの胴部にあたる。突帯は断面二角形で高いが刻目は観察されない。にぶい橙色で少量の雲母と石英を含む。

7は復元径13.5cmになる大型の壺底部である。ややあげ底気味で、内底部との接合部はつまみあげたような丸みを持つ。明赤褐色で胎土に金雲母、角閃石、そして多めの石英粒を混入する。焼成は良好である。8は復元径7cm程度の甕である。赤橙色で少量の雲母を含む。全体がローリングを受けていたため丸みを帯びる。9は厚めの平底をなす。復元径7.6cmと小型であるが、器壁は厚い。内底部に指頭による押圧痕が見られる。橙色で石英、雲母、角閃石を含む。

10は復元径6.5cmの小型の甕である。器表面に剝落があり、調整痕は不明瞭である。11はやや厚めの底部である。くびれ部に押圧痕が見られる。焼成は良い。胎土に雲母と石英を含む。12、13は壺底部である。12は復元径8.4cmで、底部から外側に直線的に立ち上がる。黄褐色を呈し、石英と少量の雲母を含む。13は薄い平底で復元径は6.4cmである。茶褐色で金雲母と石英を含む。焼成は良好である。

14は瓦器である。鉢の口縁部と思われる。全体がローリングをうけているが、色調はにぶい黄褐色である。調整痕は明瞭ではないが、外側上半は縱方向のタタキの上をナデ消し、屈曲した下半部は横方向のタタキをナデ消している。中世に属する資料である。

15はオリーブ色の色調を持つ、龍泉窯の青磁碗の破片である。1-6区表土中から一片だけ出土している。

16は不明土製品である。胎土は精選され、金雲母を含む。三足で一足だけ長く、その長い足面に孔を穿つ。整形にあたっては型枠を使用した可能性が高い。胎土、色調から見て近世の遺物かと思われる。

Fig.21~Fig.27は包含層出土の資料であるので、表採、表土中資料とは一応区別して紹介しておく。

Fig.21-1、2はM-10区出土の不定形土壙内資料 (Fig. 6) である。1はピット内上部に浮いていた甕で、1/4個体程が残っている。復元口径が30cm程の資料である。口縁はゆるく外反し、胴部がやや張り出す。口唇には全体に規則的に刻目を巡らす。器表面に剝落が見られるが、一部ハケ目痕が観察される。橙色で、胎土には石英粒は見られるが、雲母は含まれない。2は高杯脚部である。1の下部に少し覆土があり、その下に横たわるように置いてあった。下部がラババ状に広がる鬱形であるが、底部下端部と杯との接合部を欠損しているため、全容が不明である。器表面剝落のため調整痕は不明。明黄褐色で雲母、石英、角閃石を含む。3は如意形の甕口縁部で口唇下端に浅い刻目を施す。胎土に金雲母と石英を含む。4は復元口径18cmの甕口縁部である。口縁がやや強く外反し、口唇全面に浅い刻目が施される。外反部には連續した指頭押圧痕の上にハケ目を施す。5は如意形の甕口縁部である。口唇部に刻目がめぐる。

部にハケ目調整痕が残る。赤褐色で、金雲母と石英を含むが、砂質でざらつく。8, 9は同じような器形を持つ。共に如意形の斐口縁部で、11唇部に刻目は認められない。8は橙色、9は明褐色で、胎土に金雲母と大粒の石英を含む。器壁に剥落があり、調整痕は共に不明瞭である。11は復元口径39cmの大型の甕である。口縁は外反し、やや胴部が膨らむ。口縁下に指頭押圧による丸く浅い窪みと、ハケ目痕が残る。浅黄橙色で胎土に少量の雲母を含む。

Fig.22-1~8は口縁と胴部に突帶を持つ龜ノ甲タイプの資料である。1は口縁と胴部に大きく断面台形の刻目突帶を持つ。口唇部は平坦で口縁からほぼ直線的に胴部に移行する。突帶貼付部分は横方向にヘラナデを行う。橙色を呈し、胎土に金雲母と石英を含む。2も1と同じ器形の斐口縁である。11縁と胴部に刻目突帶を持つ。器表面では横方向、裏面には口縁直下

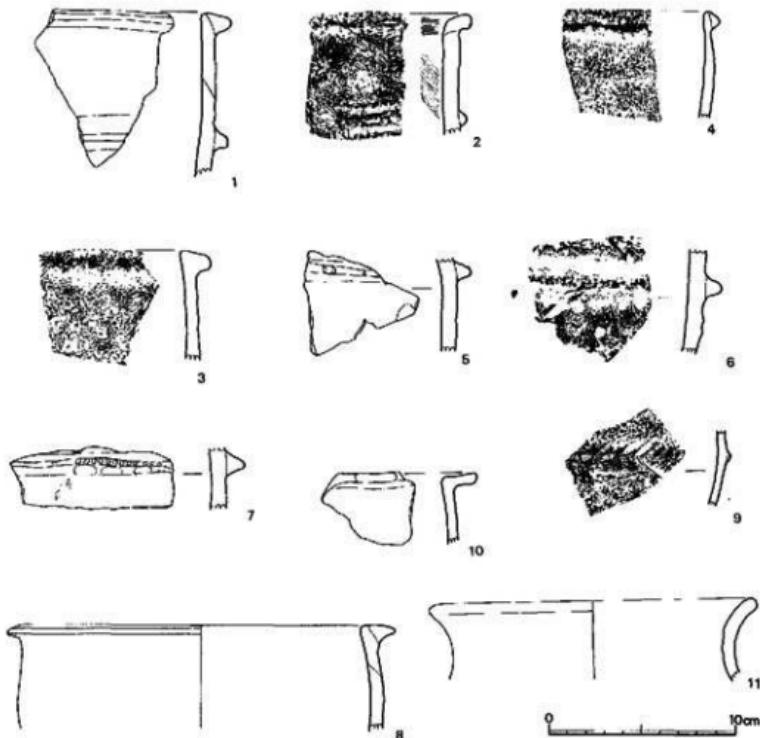


Fig. 22 弥生土器③

で横方向、その下部には斜め方向のハケ目調整を行う。3は1、2と同じく口縁から胴部に直行する器形であろう。口縁上端はやや外傾し、その先端に浅い刻目を施している。浅黄橙色で胎土に金雲母、大粒の石英を含む。4は薄手の甕で口縁が断面三角形をなし、その先端に浅い刻目を施文する。剥落のため調整痕は不明瞭である。胎土に金雲母と大粒の石英を含む。

5～7は亀ノ甲タイプの甕胴部破片である。わずかに内湾する胴部に、5、6は断面台形、7は三角形の突帯を貼付し、いずれも刻目を巡らしている。6は胎土に金雲母を含み、突帯上下にハケ目調整が見られる。7はにぶい橙色で、胎土に雲母と大粒の石英粒を含む。突帯は大きく、浅い刻目を巡らす。器壁には指頭押圧痕と、ハケ目がわずかに残る。焼成は良いが、剥落が見られる。以上の資料は弥生前期末に比定される土器である。

8は復元口径21cmの甕である。外反する口縁からやや膨らみながら胴部に移行する。口唇部は平坦で先端がやや下がる。明褐色で胎土に石英を含む。9は口縁が逆L字状を呈する甕である。褐灰色で胎土には砂粒を含むが、他の土器に普通に含まれる雲母と石英が見られない。10、11は壺の胴部と口縁部である。10は胴部中央部に低い三角形の突帯を貼付し、斜めの刻目をつける。剥落が著しく調整痕は不明。胎土に雲母と角閃石を含む。

Fig.23は胴部復元形32cmの甕である。赤褐色で胎土に石英と雲母を含む。胴頸曲部には、内側に指頭押圧痕が残り、器表面には、貝殻腹縁による浅い刻目を施す。胴上半部には一部ハケ目調整痕が認められる。類似資料として、福岡県今川遺跡V字溝中出土の甕があり、時期的には、新しい要素を持つ板付1式併行期とされている。本県では、福江市白浜貝塚から類似資料が発掘されている。



Fig. 23 弥生土器④

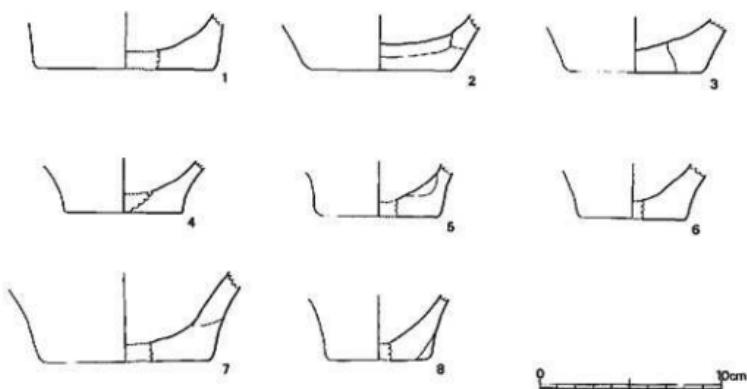


Fig. 24 弥生土器 ⑤

Fig. 24-1は復元径 9.6 cm の平底の壺底部である。剥落のため調整痕は不明。にぶい橙色を呈し、砂質でざらつく。少量の雲母と石英を含む。2は復元径 8.5 cm。平底で粘土の織ぎ目痕が明瞭である。橙色で雲母と多めの石英を含む。3は復元径 7.6 cm の底部である。平底で、底部の整形過程が良く観察される。胎土に金雲母と大粒の石英粒を含む。1/4個体程が残る。4は復元径 7.4 cm の小型の壺底部である。茶褐色で、大粒の石英と雲母を含む。焼成は良好である。剥落があって調整痕は不明である。5は赤褐色で胎土に金雲母と石英を含む。復元径 7 cm で平底である。ローリングを受けているため全体的に丸みを持つ。6は復元径 6 cm、平底の小型壺底部である。7は1/4個体程が残る平底の底部である。橙色を呈し、胎土に雲母と多めの石英を含む。ローリングを受けているためシャープさに欠ける。8は復元径 6 cm の小型壺底部である。橙色で金雲母と石英を含む。器壁外側に粘土の織ぎ目が明瞭であり、その部分に指頭による押圧を行っている。

Fig. 25-1は復元径 9 cm。赤橙色を呈し、胎土に少量の雲母を含む。内部粘土織ぎ目部分に指頭押圧痕が残る。2は復元径 8.4 cm で剥落が目立つ。胎土に雲母と大粒の石英を含む。調整痕不明。4はややあげ底気味の壺底部で、復元径 8.3 cm である。ローリングを受け全体的に丸みを帯びる。明赤褐色を呈し、胎土には雲母を含む。6は1/4個体程残る。若干あげ底気味の壺である。復元径 9.4 cm で、色調は橙色、胎土には雲母と石英を含む。焼成は良好であるが、ローリングを受けている。9は底径 7.6 cm で1/2個体程残っている。厚めの平底である。にぶい橙色で雲母と石英を含む。調整痕は不明瞭である。

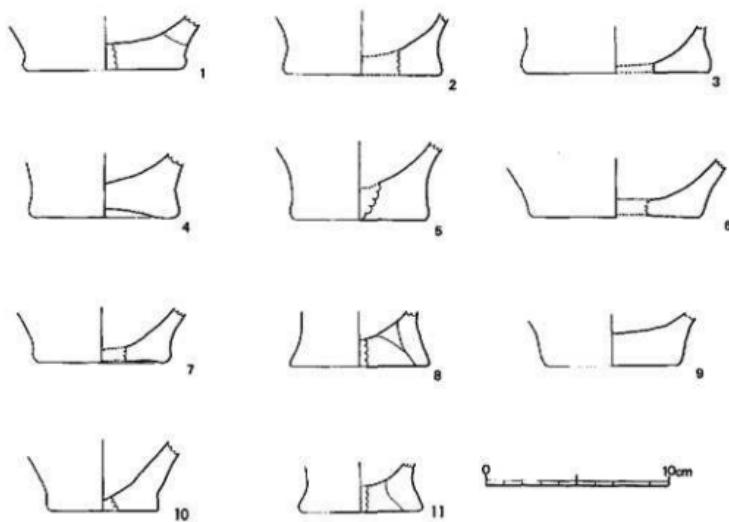


Fig. 25 弥生土器 ⑤

Fig.26—1～5は壺底部である。1は復元径9.2cmの円盤貼り付け状の平底をなす。黄灰色で胎土は精選されており、角閃石、雲母、石英を少量含む。剥落が見られるため不明瞭であるが、繩文晩期の壺の可能性もある。G-3区II層から出土している。2は復元径9.2cmの薄手の土器である。底部から大きく外側へ広がる。底には整形時の指頭押圧による僅かな窪みが見られる。焼成は普通。明茶褐色で胎土には雲母と石英を含むがどちらついている。3は復元径10.5cmの平底底部である。底から大きく外側へ広がるが、器形としては変型土器になる可能性もある。茶褐色を呈し、石英と少量の金雲母を含む。4は底径6cmで円錐状のややあげ底の底部である。黄灰色で、雲母と石英を含んでいる。焼成は良好であるが、ローリングを受けていたため調整痕が不明瞭である。5は底径が小さく、底部から胴部にむかって大きく張り出すタイプの壺である。やはりローリングのため調整痕が不明瞭である。黄褐色で胎土には砂粒を多く含んでいる。

以上の資料は大旨弥生前期末から中期中頃までの資料である。

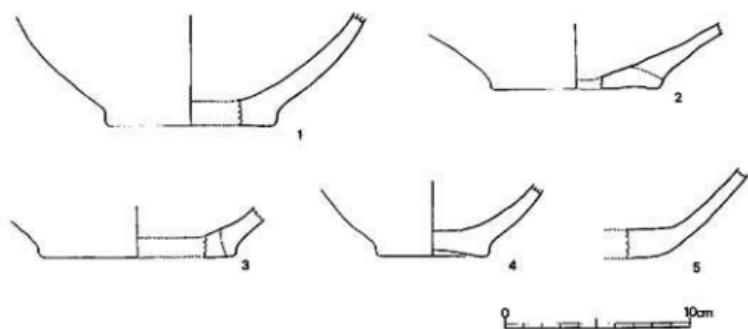


Fig. 26 弥生土器⑦

Fig. 27-1 は壺口縁である。口縁は「く」の字状にゆるく外反する。口唇部は丸みを持つ。剥落のため良く観察できないが、内側に接線は認められない。橙色で胎土に石英、雲母、角閃石を含む。2 は復元口径 13 cm の壺の資料である。口縁は「く」の字状にゆるく外反する。器壁は剥落があったためか、4 mm 程の厚さである。橙色で胎土に少量の金雲母を含んでいる。3 は復元口径 16.2 cm の壺型土器で、口縁は「く」の字状にゆるく外反する。内部のくびれ部

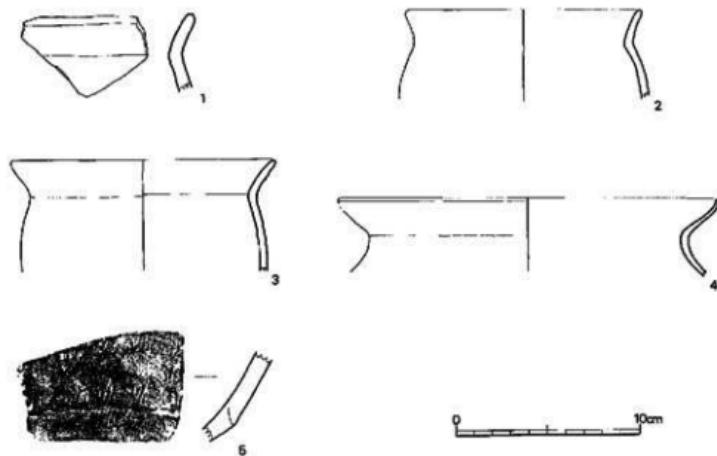


Fig. 27 弥生土器⑧

には接縫が入る。橙色で胎土に少量の黄母が含まれる。やはり4mm程の厚さしかない。焼成は良好である。4は復元口径20.6cmの壺型資料である。口縁は一旦「く」の字状にゆるく外反するが、上端で今度は内側に内湾する。倒落があるせいか、器模は極めて薄く3mm程度でしかない。にぶい橙色を呈し、胎土に金雲母と石英を含む。焼成は良い。5は瓦器である。J-5区のⅡ層から出土したため、一応包含層出土資料として掲載しておく。鉢の胴部と思われる。黒褐色を呈し、胎土に少量の黄母を含む。内外面共縦方向のタタキのあと、ナデ消している。

以上の資料の内、1~4は弥生後期末から古墳時代初めにかけての土器で、5は中世に属する。

註1 津屋崎町教育委員会「今川遺跡」津屋崎町文化財調査報告書 第4集 1981

2 安楽 勉氏の教示による。

3 土器の色調については以下の資料によった。

4 日本色彩研究所「標準上色帖」1967

2 石 器

石器は発掘資料と表探資料を合わせて、約30,000点程が出土している。Fig.28はその出土状況である。ただ、石器の時代、種類、含まれる土層等は無視している。

出土地点は、その集中密度から見ると、A, B, Cの3地点に分かれ、その傾向は土器の集中範囲と一致する。

出土する石器は、その大部分が剣片か破片であるが、少量ながら先土器時代の資料ではナイフ型石器、剣片尖頭器、台形・台形様石器、細石核、細石刀等を含む。

縄文時代の資料としては、大多数を占める石鏃、石斧などがあるが、種類はあまり多くない。

弥生時代の石器は、その明確な資料としては石斧などが見られるが、やはり器種が豊富とは言えない。

石器の使用石材は、圧倒的に黒曜石で安山岩がこれに繼ぐ。黒曜石の種類については後述する。

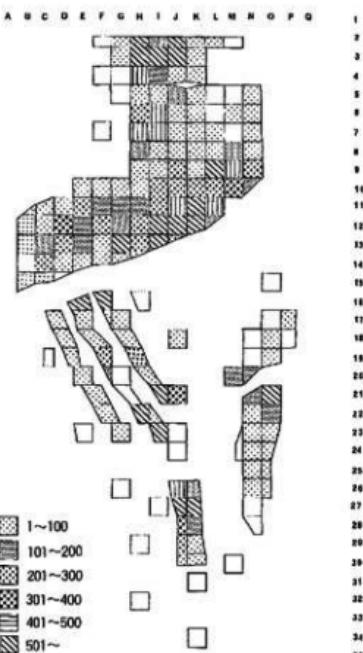


Fig. 28 石器出土数図



①先土器時代の石器 (Fig.29・30)

石器の説明については、土器の項と同じく基本的に表探資料と発掘資料は区別して図示しているが、先土器時代の遺物については例外とする。堆積土層の厚みと単純さからみて、区別することにあまり重要な意味を持つとも思われない為である。

当遺跡では、ナイフ形石器文化期に属すると思われる遺物8点、細石器文化期に属するもの5点を図示した。ナイフ形石器文化期の所産としては1、2の剝片尖頭器、5、6、8の台形石器、3、4、7のナイフ形石器などが挙げられる。1の剝片尖頭器は大型の安山岩製フレイクを使用したもので、基部の加工と左側辺の調整以外は、素材をそのまま利用したもので、先端部を欠損しているものかなり大型の尖頭器である。2も剝片尖頭器としたが、その加工部位は右側辺の裏面からの加工と、正面の棱上からの加工によって変形の台形状を呈する。加工そのものは、三棱尖頭器に近い状態を示す。2点とも安山岩を使用しているが、2のほうは風化が著しく材質も悪い。台形石器5、6、8は共に原ノ辻型と呼ばれるもので、両側辺の錯交する調整、正面中央部の平坦調整とも同様な技術をもっている。これらの台形石器から、素材剝片は左側辺の抉り部をすでに用意していたものと思われ、それに対し右側辺の抉りは素材剝片となった時点で折断をして、その折断面に対してプランディング加工を施したものと考えられる。台形石器の製作技法については、いまだ論議される部分が多いが素材剝片そのものは原ノ辻型についていえば製品との間にほとんど差はないものと思われる。ナイフ形石器については3、4の小型のナイフ形石器と7の横長剝片を使用したものとの3点の出土にとどまる。7の横長剝片使用のナイフ形石器は、刃部を残す全周に二次加工を施している。左側辺の加工は粗いプランディング加工、右側辺下部は平坦剝離による剝離を行い、上部は鋸歯状に加工されている。刃部付近に残された剝離から、この剝片を剥離するための一定の技法が存在することが考えられるが、この遺物に関連するようなものが出土していないことから、他からの搬入品であろう。この他に13の石核、15の剝片などがこの時期に位置するものであろう。細石器文化期の所産としては、16の細石核と9～12の細石刃がある。16の細石核については打面が自然打面であり、16自体が再生剝片であることから、細石核として認め難い面もあるが、細石刃については図示したもの以外に10点ほど出土しているため、細石器文化期に当遺跡が使用されたことは間違いない。14については、ナイフ形石器文化期、細石器文化期のどちらに所属するかについては不明だが、灰青色黒曜石を素材とした彫器である。大型の縦長剝片の周囲を加工し、左側辺に彫刀面を作出しているが、さらに彫刀面を再生するための打面を設けるための作業を行った痕跡が認められる。

大村湊周辺の旧石器時代の遺跡の中で核となりうる地域としては松山遺跡、野岳湖周辺、諫早の西輪久道遺跡を中心とする地域があげられるが、このような遺跡の周辺には、横断道の調査でも理解できるように、数点の旧石器を出土する遺跡が散在する。この野田の久保遺跡もその中の一つであり、核となる遺跡周辺のキャンプサイトとして捉えられるであろう。

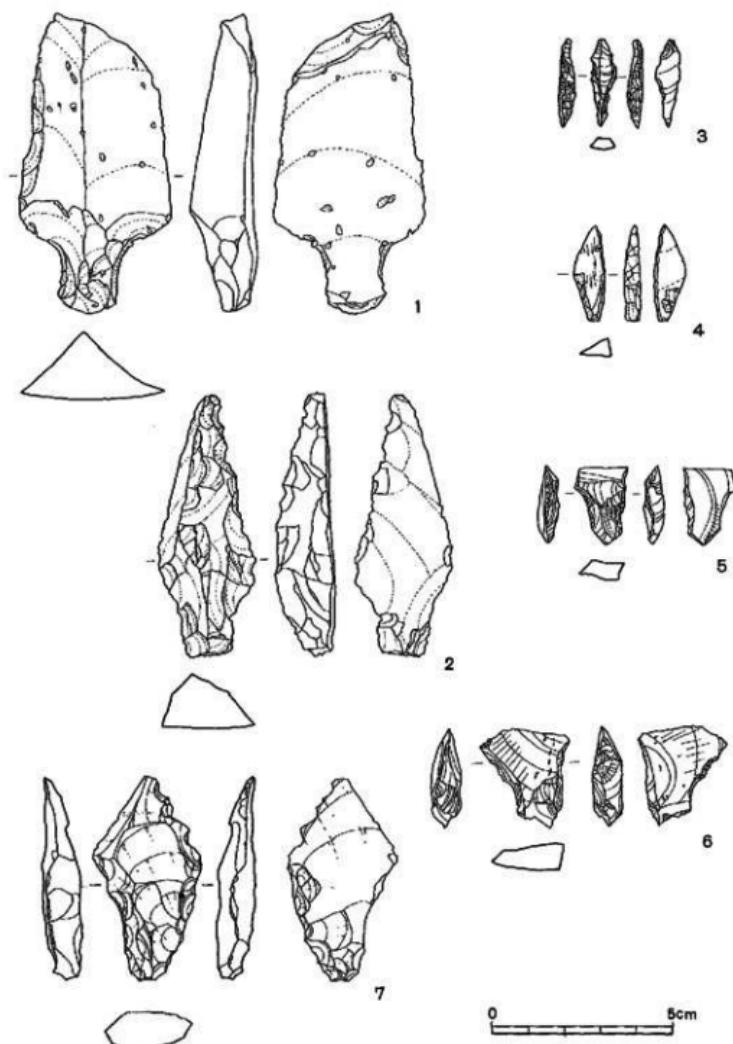


Fig. 29 先土器時代石器 ①

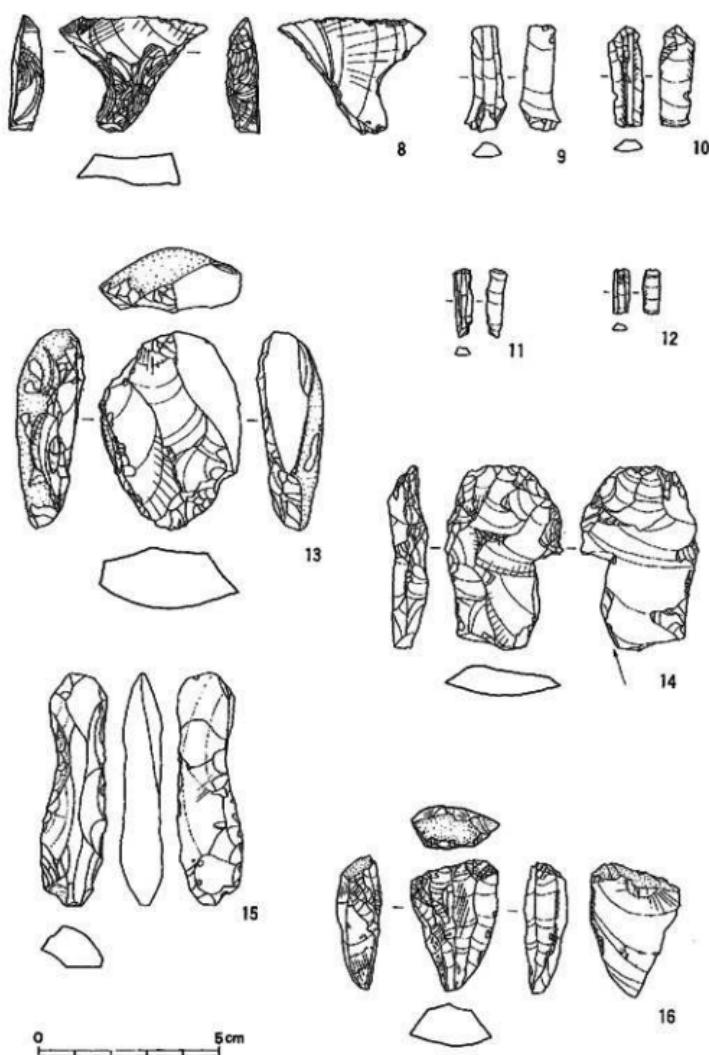


Fig. 30 先土器時代石器 ②

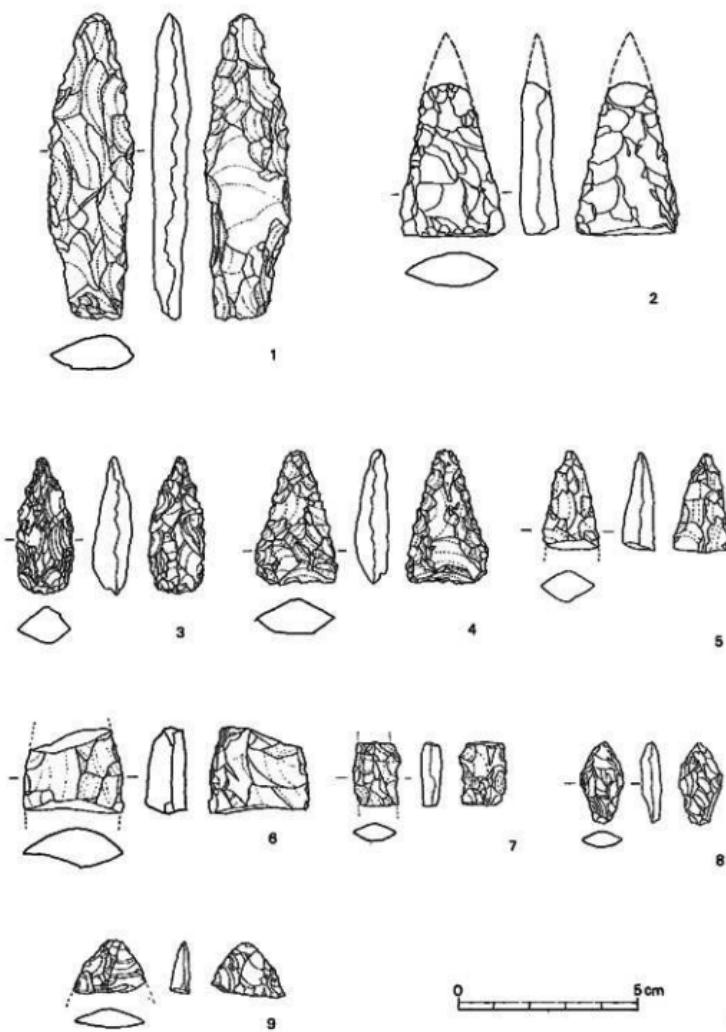


Fig. 31 ポイント実測図（表様・表土）

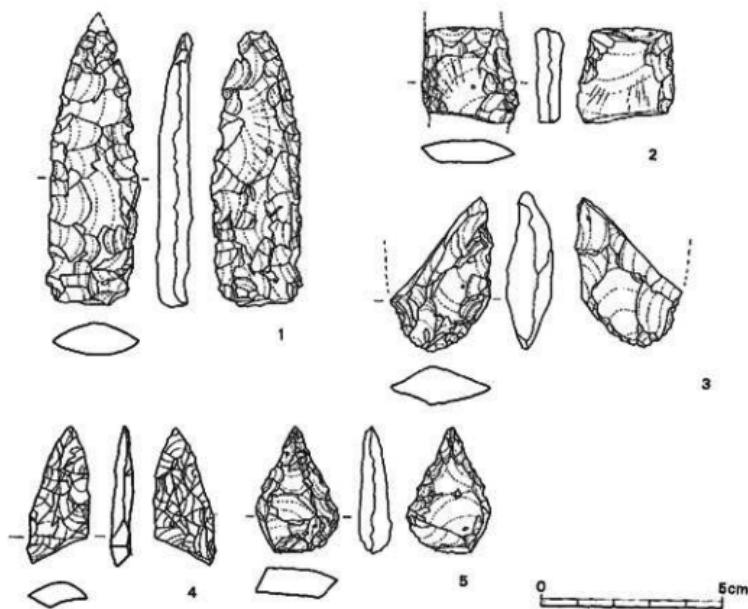


Fig. 32 ポイント実測図

② 繩文・弥生時代石器

Fig. 31, 32はポイントである。何れも安山岩製で、31は表様で32は包含層資料である。一応区別して掲載しておく。Fig. 31-1は柳葉形の完形品で基部を平坦にしている。両面調整を行う。8.6 cmの長さを持つ。2は基部と先端部を毀損するが、木の葉形になるものであろう。

3, 4は小型の資料であるが完形品である。両面調整で形状を整える。3は3.8 cm, 4は3.7 cmを計る。5は先端部のみ残り、6は上下両端部を欠損する。いずれも木の葉形の資料である。8は凸基式鎌に似た形状の小型ポイントである。両面調整で側面を一部欠損する。長さ2.4 cmである。9は先端部だけしか残存しないが、薄手の木の葉形になる資料であろう。

Fig. 32-1は完形品で、両面調整で柳葉形に形状を整える。基部は平坦で長さ7.5 cmを計る。2は上下両端を欠損する。やはり両面調整を施す。3は基部と側縁の一部が残るが、その形状から木の葉形になる資料であろう。4は先端部のみが残る資料である。細かな両面調整で鋭い先端部を作り出す。

石 錐

石錐は全部で731点出土した。その出土状態はFig.33のとおりである。各調査区から万遍なく出土するが、特に集中する箇所はJ-12区を中心とした区域である。

石錐は487点について図示したが、主に形状からここではFig.34に図示した基準によって分類した。なお、出土資料には有茎のものは含まれないため、全て無茎錐である。

I類 平基式で、側縁が直線をなすものをa、側縁がカーブをえがくものをbとする。

II類 凹基式で、4タイプに細分される。

a：側縁が直線をなし、基部の抉りが丸く深いもの。

b：側縁がカーブを描き、基部の抉りが丸く深いもの。

c：側縁が直線をなし、基部の抉りの特長がa以外のもの。

d：側縁がカーブを描き、基部の特長がb以外のもの。以上の内、a・bタイプは所謂銀型錐と呼ばれるものである。

III類 凸基式で基部が丸みをもつものと、尖るタイプがある。

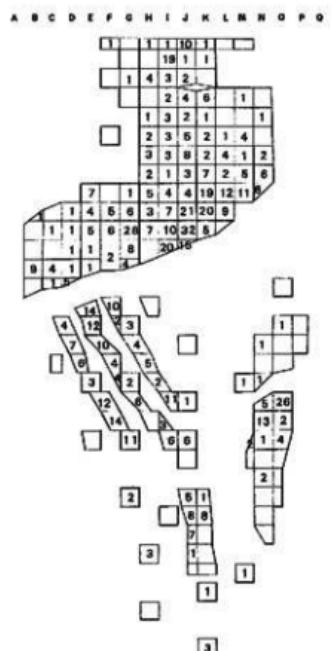


Fig. 33 石錐出土図

| | | |
|---------------|---|-----|
| I類 (平基式) | a | △ |
| | b | △ △ |
| II類 (凹基式) | a | △ |
| | b | △ △ |
| III類 (凸基式) | c | △ △ |
| | d | △ △ |
| IV類 (異形) | | △ ○ |
| V類 (高部磨耗) | | △ |
| VI類 (大型) | | △ △ |

Fig. 34 石錐分類図

IV類 上記3類と形状が異なるタイプのもの。

V類 局部磨製石鎌で形状的には数種認められるが、研磨という属性を生かして別に一類設けておく。

VI類 形状的には数種認められるが、形がより大型のもので、使用石材も主に安山岩である。

石鎌の詳細については計測表を参照されたいが、表中、特に黒曜石の種類については次の観察基準による。

黒曜石 A：漆黒色

黒曜石 B：黒色

黒曜石 C：黒色中に粒状の不純物を含む

黒曜石 D：灰緑色または灰青色

黒曜石 E：乳白色

黒曜石 F：透明

黒曜石 G：白濁色

| 記号 | 破損部位 |
|----|-------------|
| A | 尖形品 |
| B | 先端部破損 |
| C | 両脚破損 |
| D | 片脚破損 |
| E | 先端部破損 両脚 |
| F | 脚部のみ |

Fig. 35 石鎌折損図

表中、残存部位については、Fig. 35の分類による。

掲載資料は、表採・表土中のものと包含層中のものに分かれるので、区別して図示する。

Fig. 36~41は表採・表土中資料である。

I a類 Fig. 36-1~5 何れも黒曜石。

II a類 Fig. 36-6~14

II b類 Fig. 36-15~18

II c類 Fig. 37-5~26, Fig. 38-1~28

Fig. 38-20~23は、小型で入念な剝離で側縁に細かな鋸歯を持つ。類似資料は諫早市柿崎遺跡でまとまった状態で出土しているが、時期は特定されていない。

II d類 Fig. 36-19~21, Fig. 37-1~4, Fig. 38~Fig. 40-18

Fig. 40-18は薄手の剥片で、基部の抉りだけ調整した剥片鎌と呼ばれる資料。

III類 Fig. 40-19

基部が丸みを持つ。先端が一見錐状に尖るが、後世の自然剝離である。

IV類 Fig. 40-20, 21

V類 Fig. 41

大抵 2cm を越す三角形の形状をなす石器で、先の I 類~V 類に比して重い。形状は平基式と凸基式のものに限られる。5, 7, 10 の側縁は急斜度調査のスクリイバーに似るが、ここでは形状から石鎌として分類しておく。

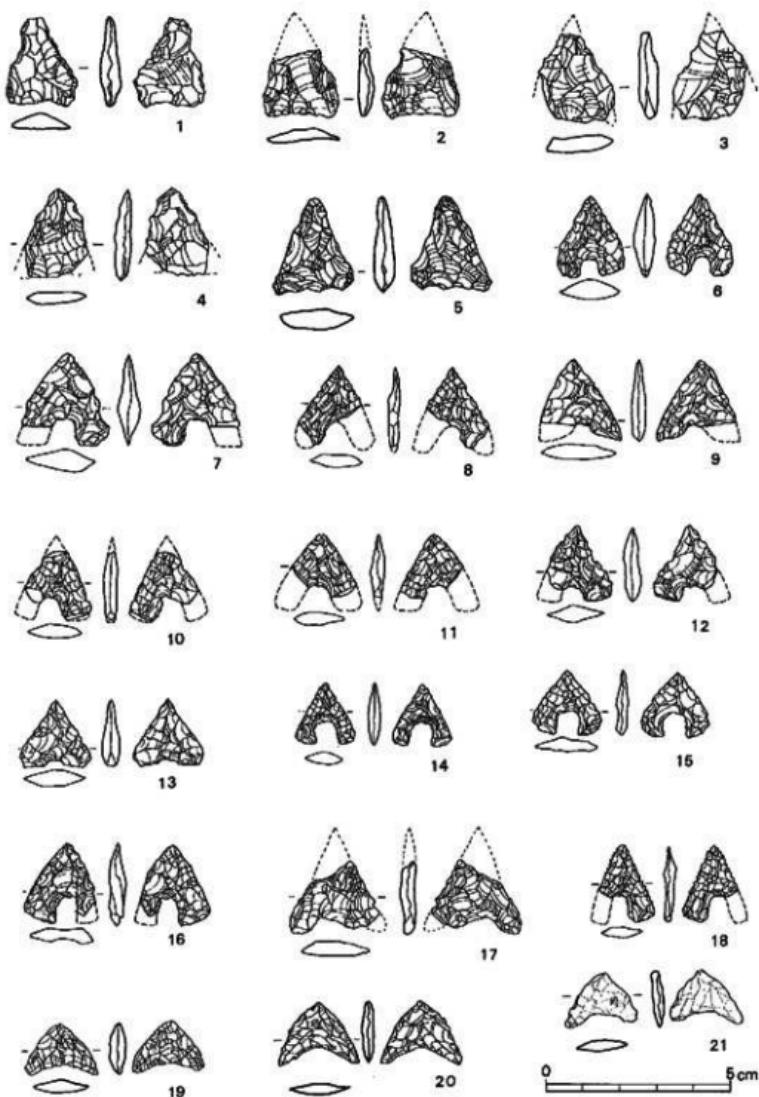


Fig. 36 石器実測図（表様・表土）①

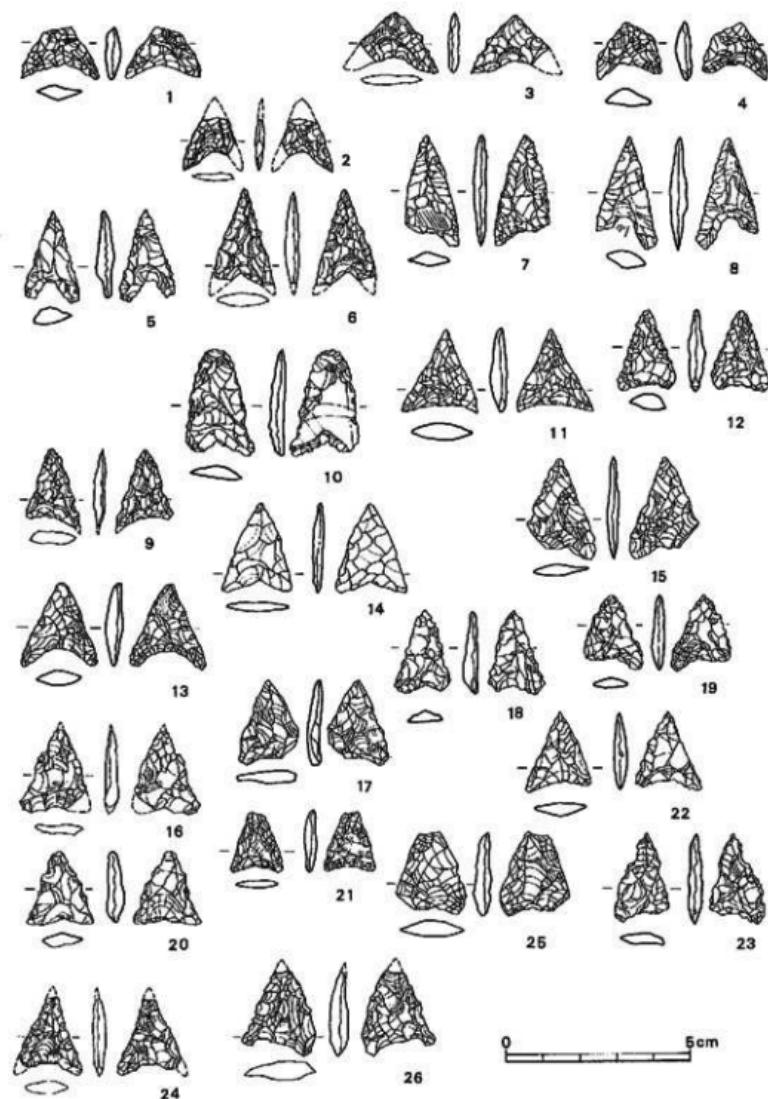


Fig. 37 石器実測図(表様・土)②

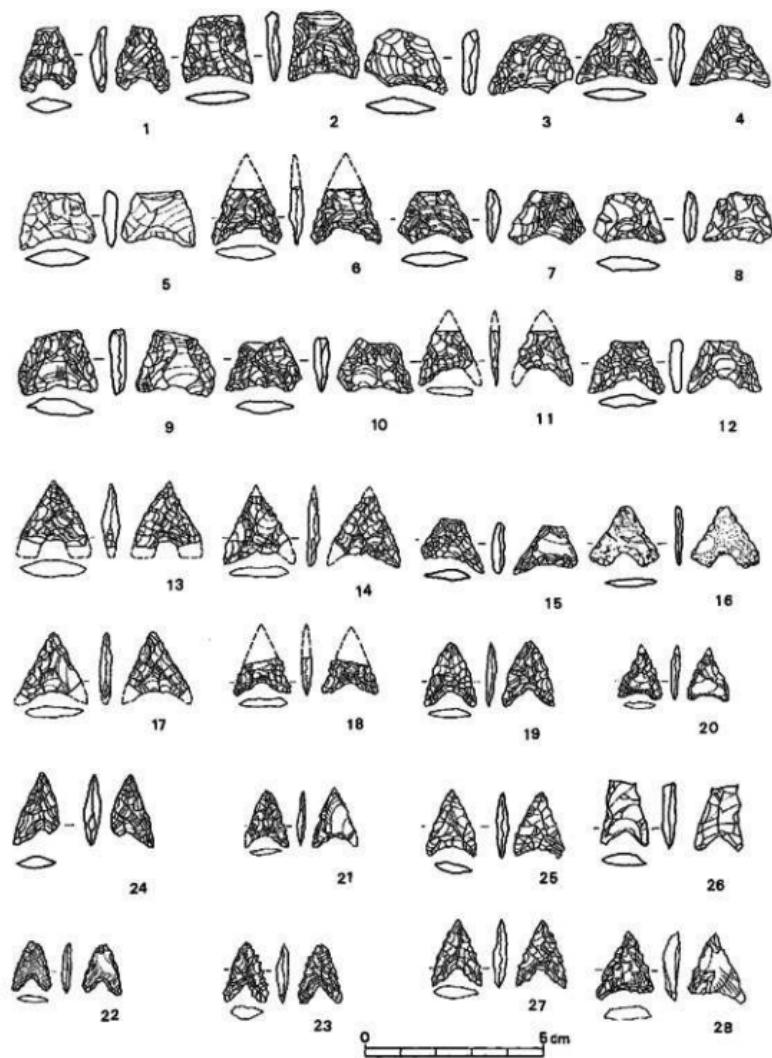


Fig. 38 石器実測図（表様・表土）③

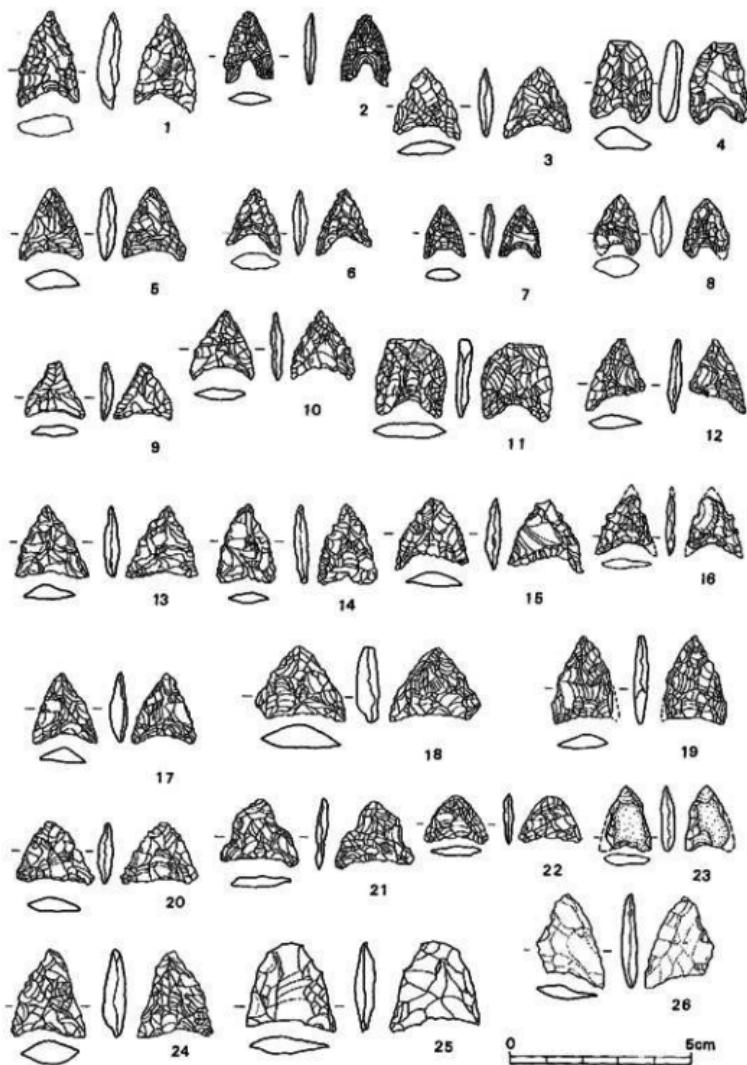
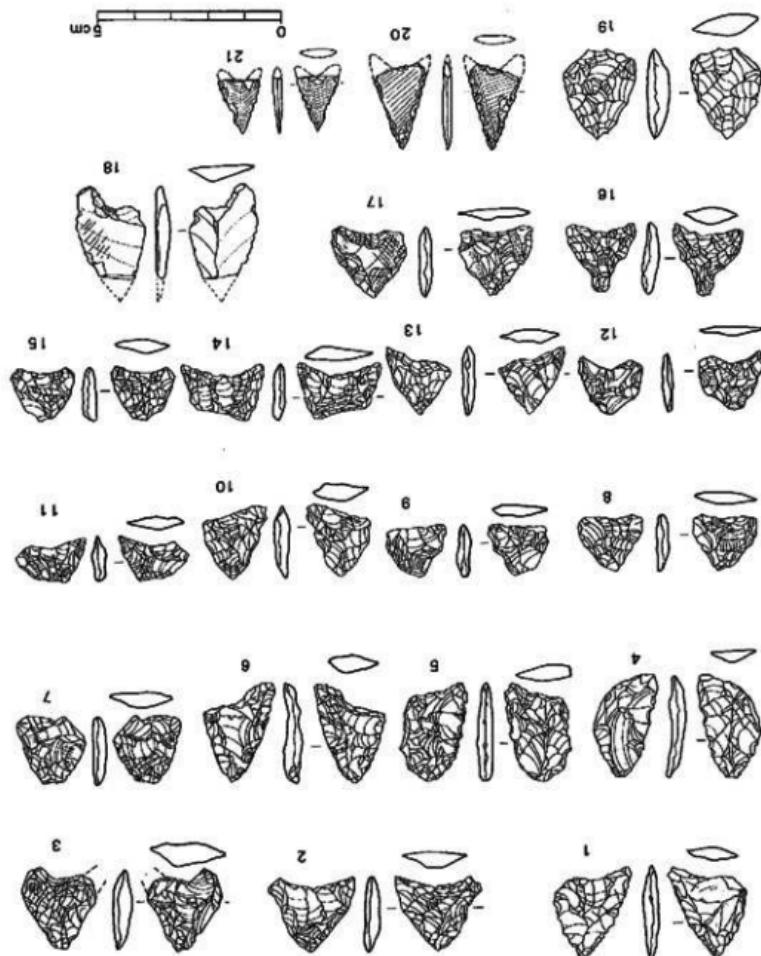


Fig. 39 石器実測図(表様・表土)④

Fig. 40 古城実測圖 (麥鋸・鋸子) ⑤



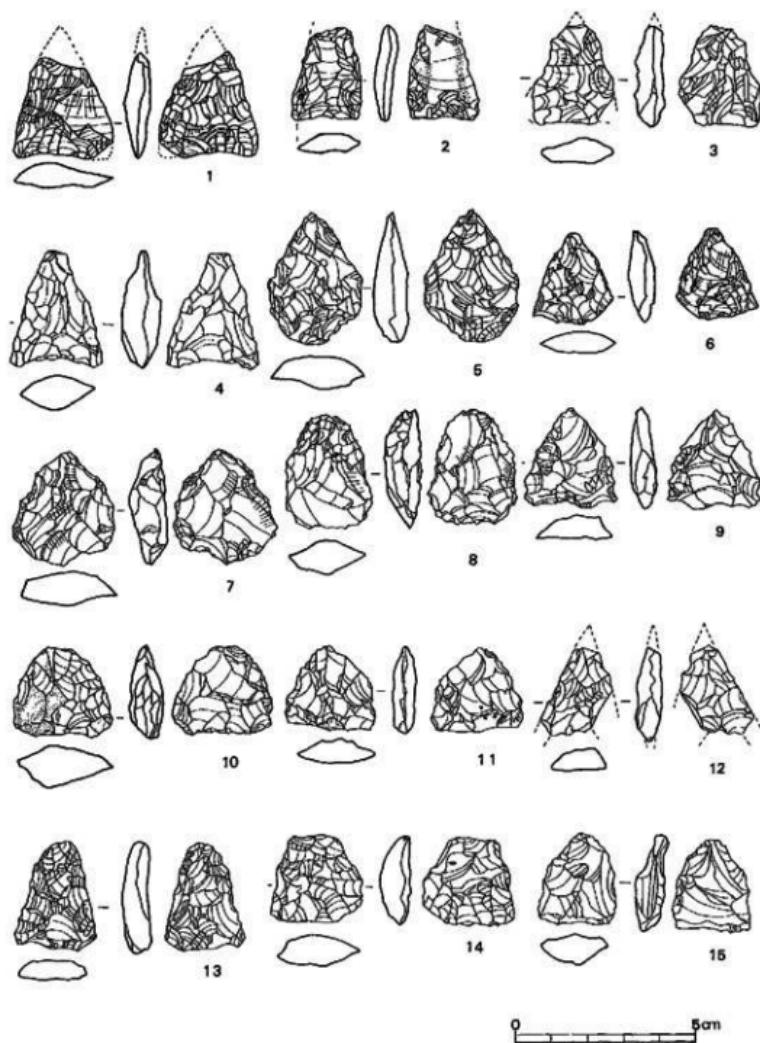


Fig. 41 石鏃実測図（表採・表土）⑥

Tab. 1 石錐計測表①

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重 量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|------|------|------------|---------|-----|-----|------|----------|-----------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 31 - 1 | J-7 | 安山岩 | 20.2 | 9.6 | 2.4 | 1 | | 80° | |
| | 2 | E-13 | ♦ | 12.7 | 4.3 | 2.9 | 1 | | |
| | 3 | O-21 | ♦ | 5.15 | 3.9 | 1.5 | 1.1 | | 70° |
| | 4 | O-21 | ♦ | 6.5 | 3.8 | 2.2 | 1 | | |
| | 5 | O-21 | ♦ | 2.85 | 2.7 | 1.5 | 0.9 | | |
| | 6 | I-3 | ♦ | 7.5 | 2.4 | 2.8 | 1.1 | | |
| | 7 | I-7 | ♦ | 1.4 | 1.8 | 1.3 | 0.5 | | |
| | 8 | G-20 | ♦ | 1.15 | 2.2 | 1.2 | 0.5 | | 75° |
| | 9 | I-3 | ♦ | 0.95 | 1.4 | 2 | 0.5 | | 80° |
| Fig. 36 - 1 | S-10 | 黒曜石B | 1.55 | 2.4 | 1.9 | 0.4 | A | | I a |
| | 2 | G-12 | ♦ A | 1.35 | 2.8 | 2 | 0.4 | A | I a |
| | 3 | N-22 | ♦ B | 1.95 | 2.3 | 2 | 0.5 | A | I a |
| | 4 | M-5 | ♦ A | 1.4 | 2.4 | 1.7 | 0.4 | C | 100° I a |
| | 5 | I-10 | ♦ A | 2.15 | 2.5 | 2.2 | 0.5 | 完 | 50° I a |
| | 6 | K-10 | ♦ C | 1.25 | 1.7 | 1.7 | 0.5 | 完 | 65° I a |
| | 7 | I-4 | ♦ D | 1.6 | 2.4 | 2.4 | 0.6 | C | 80° I a |
| | 8 | J-7 | ♦ C | 0.7 | 2 | 1.7 | 0.4 | B | 70° I a |
| | 9 | K-10 | ♦ D | 1.15 | 2.1 | 2.2 | 0.4 | C | 80° I a |
| | 10 | I-12 | ♦ B | 0.85 | 1.8 | 1.8 | 0.4 | D | I a |
| | 11 | K-23 | ♦ F | 0.7 | 1.7 | 1.7 | 0.4 | B | I a |
| | 12 | I-8 | ♦ B | 0.9 | 2 | 1.8 | 0.5 | C | I a |
| | 13 | G-23 | ♦ D | 1 | 1.8 | 1.8 | 0.5 | 完 | 70° I b |
| | 14 | N-8 | ♦ C | 0.4 | 1.7 | 1.6 | 0.3 | 完 | 60° I b |
| | 15 | N-8 | ♦ F | 0.65 | 1.7 | 1.8 | 0.4 | 完 | 80° I b |
| | 16 | C-9 | ♦ F | 1 | 2.2 | 1.9 | 0.4 | C | 70° I b |
| | 17 | O-21 | ♦ C | 1.45 | 2 | 2.4 | 0.4 | D | I b |
| | 18 | I-3 | ♦ F | 0.5 | 2 | 1.5 | 0.3 | C | 45° I b |
| | 19 | G-12 | ♦ E | 0.6 | 1.4 | 1.4 | 0.4 | 完 | 85° I b |
| | 20 | K-12 | ♦ C | 0.7 | 1.6 | 2.2 | 0.3 | 完 | 100° I b |
| | 21 | G-23 | ♦ D | 0.6 | 1.5 | 1.9 | 0.3 | 完 | 100° I b |
| Fig. 37 - 1 | G-12 | ♦ A | 0.55 | 1.4 | 2 | 0.4 | 完 | 60° II b | |
| | 2 | I-12 | ♦ A | 0.35 | 1.3 | 1.4 | 0.2 | A | II b |
| | 3 | G-11 | ♦ D | 0.6 | 1.6 | 2.1 | 0.3 | C | 90° II b |
| | 4 | L-10 | ♦ A | 0.7 | 1.5 | 1.7 | 0.5 | 完 | 100° II b |
| | 5 | H-7 | 安山岩 | 0.85 | 2.3 | 1.4 | 0.5 | C | 45° II c |
| | 6 | K-10 | 黒曜石D | 1.05 | 2.5 | 1.6 | 0.4 | B | 40° II c |
| | 7 | E-10 | ♦ A | 1.15 | 3 | 2 | 0.3 | C | 55° II c |
| | 8 | I-3 | 安山岩 | 1.15 | 3 | 1.6 | 0.5 | C | 40° II c |

Tab. 2 石器計測表②

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重 量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|-------|------|------------|---------|------|------|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 37 - 9 | G-12 | 黒曜石A | 0.5 | 2.15 | 1.5 | 0.35 | B | 50° | II e |
| 10 | CD-15 | ♦ A | 1.6 | 2.4 | 1.8 | 0.35 | D | | II e |
| 11 | G-14 | ♦ A | 1.15 | 2.3 | 2 | 0.45 | 完 | 55° | II e |
| 12 | G-12 | ♦ A | 1.15 | 2.2 | 1.6 | 0.45 | B | 50° | II e |
| 13 | K-11 | ♦ B | 0.9 | 2.2 | 2 | 0.4 | D | | II e |
| 14 | H-7 | 安山岩 | 0.8 | 2.4 | 1.9 | 0.2 | 完 | 59° | II e |
| 15 | C-14 | 黒曜石B | 0.9 | 2.75 | 1.9 | 0.3 | C | 59° | II e |
| 16 | K-10 | ♦ B | 0.85 | 2.2 | 1.8 | 0.3 | D | | II e |
| 17 | I-13 | ♦ B | 0.95 | 2.3 | 1.7 | 0.35 | B | 57° | II e |
| 18 | B-14 | ♦ C | 0.8 | 2.2 | 1.5 | 0.3 | B | 60° | II e |
| 19 | D-15 | ♦ B | 0.75 | 2 | 1.55 | 0.3 | C | 67° | II e |
| 20 | B-14 | ♦ E | 1.1 | 1.95 | 1.8 | 0.4 | A | | II e |
| 21 | J-13 | ♦ B | 0.5 | 1.6 | 1.4 | 0.2 | A | | II e |
| 22 | G-13 | ♦ D | 0.8 | 2.2 | 1.8 | 0.3 | 完 | 57° | II e |
| 23 | K-13 | ♦ C | 0.8 | 2.4 | 1.5 | 0.3 | B | 52° | II e |
| 24 | M-20 | ♦ A | 0.75 | 2.1 | 1.7 | 0.4 | D | | II e |
| 25 | D-21 | ♦ C | 1.4 | 2.3 | 1.9 | 0.45 | E | | II e |
| 26 | F-16 | ♦ C | 1.55 | 2.3 | 1.95 | 0.5 | E | | II e |
| Fig. 38 - 1 | G-18 | ♦ A | 0.9 | 1.8 | 1.9 | 0.4 | E | | II e |
| 2 | - | ♦ A | 1.2 | 1.9 | 2.1 | 0.3 | A | | II e |
| 3 | I-12 | ♦ A | 1.4 | 1.75 | 2.2 | 0.45 | D | | II e |
| 4 | E-10 | ♦ D | 0.85 | 1.7 | 2.3 | 0.3 | A | | II e |
| 5 | M-10 | ♦ D | 1.15 | 1.6 | 2 | 0.4 | D | | II e |
| 6 | J-17 | ♦ A | 0.9 | 1.5 | 1.9 | 0.45 | A | | II e |
| 7 | G-12 | ♦ B | 0.9 | 1.5 | 2.1 | 0.35 | E | | II e |
| 8 | O-21 | ♦ D | 0.85 | 1.4 | 1.9 | 0.35 | E | | II e |
| 9 | G-10 | ♦ F | 1.3 | 1.8 | 2.15 | 0.45 | D | | II e |
| 10 | G-21 | ♦ A | 1.15 | 1.5 | 2.1 | 0.35 | D | | II e |
| 11 | H-10 | ♦ C | 0.45 | 1.5 | 1.5 | 0.25 | D | | II e |
| 12 | N-22 | ♦ A | 0.7 | 1.45 | 2 | 0.3 | A | | II e |
| 13 | K-9 | ♦ C | 1 | 1.7 | 1.8 | 0.5 | E | | II e |
| 14 | O-21 | ♦ E | 0.65 | 1.9 | 1.8 | 0.3 | D | | II e |
| 15 | I-5 | ♦ C | 0.45 | 1.4 | 1.75 | 0.3 | D | | II e |
| 16 | K-7 | 安山岩 | 0.55 | 1.65 | 1.9 | 0.25 | E | | II e |
| 17 | -12 | 黒曜石C | 0.5 | 1.8 | 1.7 | 0.3 | B | 60° | II e |
| 18 | K-8 | ♦ A | 0.3 | 1 | 1.55 | 0.25 | A | | II e |
| 19 | H-8 | ♦ F | 0.45 | 1.75 | 1.4 | 0.25 | A | | II e |
| 20 | G-12 | ♦ F | 0.25 | 1.3 | 1.1 | 0.2 | D | | II e |

Tab. 3 石器計測表③

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 | |
|---------|-------|------|-----------|---------|-----|-----|------|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| Fig. 38 | -21 | N-20 | 黒曜石B | 0.65 | 2 | 1.2 | 0.4 | C | 55° | II c |
| | 22 | F-12 | ♦ F | 0.15 | 1.5 | 1.2 | 0.2 | C | 55° | II c |
| | 23 | J-11 | ♦ B | 0.55 | 1.8 | 1.4 | 0.3 | 完 | 50° | II c |
| | 24 | K-5 | ♦ E | 0.6 | 1.8 | 1.3 | 0.3 | A | | II c |
| | 25 | H-9 | 安山岩 | 0.15 | 1.4 | 1.1 | 0.2 | A | | II c |
| | 26 | E-2 | 黒曜石D | 0.35 | 1.6 | 1.2 | 0.4 | 完 | 65° | II c |
| | 27 | J-6 | ♦ C | 0.5 | 1.9 | 1.4 | 0.4 | 完 | 60° | II c |
| | 28 | G-12 | ♦ A | 0.8 | 1.9 | 1.6 | 0.4 | 完 | 70° | II c |
| Fig. 39 | -1 | IB | ♦ A | 1.95 | 2.6 | 1.7 | 0.6 | 完 | 60° | II c |
| | 2 | M-7 | ♦ B | 0.65 | 2 | 1.4 | 0.3 | C | | II c |
| | 3 | N-21 | ♦ C | 0.8 | 1.9 | 1.8 | 0.3 | C | 85° | II c |
| | 4 | I-9 | ♦ C | 1.85 | 2.3 | 1.7 | 0.5 | A | | II c |
| | 5 | J-13 | ♦ A | 1.2 | 2 | 1.7 | 0.5 | 完 | 60° | II c |
| | 6 | J-11 | ♦ E | 0.75 | 1.8 | 2 | 0.5 | C | 85° | II c |
| | 7 | E-10 | ♦ B | 0.4 | 1.5 | 1.1 | 0.3 | 完 | 80° | II c |
| | 8 | K-5 | ♦ A | 0.8 | 1.7 | 1.3 | 0.6 | C | 85° | II c |
| | 9 | G-12 | ♦ G | 0.5 | 1.6 | 1.6 | 0.3 | A | | II c |
| | 10 | E-10 | ♦ D | 0.7 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | 完 | 90° | II c |
| | 11 | M-9 | ♦ A | 1.65 | 2.2 | 1.9 | 0.4 | A | | II c |
| | 12 | J-12 | ♦ A | 0.6 | 2 | 1.6 | 0.4 | C | | II c |
| | 13 | G-21 | ♦ D | 1.15 | 2 | 2 | 0.4 | 完 | 90° | II c |
| | 14 | G-11 | ♦ A | 0.85 | 2.1 | 1.6 | 0.3 | 完 | 65° | II c |
| | 15 | B-14 | ♦ A | 1.05 | 2 | 2 | 0.4 | A | 110° | II c |
| Fig. 40 | EF-21 | ♦ C | 0.45 | 1.6 | 1.5 | 0.3 | D | | | II c |
| | J-11 | ♦ A | 1.0 | 1.9 | 1.7 | 0.4 | 完 | 90° | | II c |
| | O-23 | ♦ A | 2.2 | 2.1 | 2.5 | 0.5 | C | 100° | | II c |
| | K-2 | ♦ B | 1.15 | 2.5 | 1.7 | 0.3 | C | 90° | | II c |
| | K-10 | ♦ B | 1.0 | 1.7 | 2.1 | 0.4 | 完 | | | II c |
| | G-4 | ♦ A | 0.75 | 1.9 | 2.2 | 0.3 | 完 | | | II c |
| | I-12 | ♦ B | 0.4 | 1.3 | 1.8 | 0.3 | A | | | II c |
| | J-10 | 安山岩 | 0.75 | 1.8 | 1.2 | 0.3 | C | 70° | | II c |
| | L-10 | 黒曜石A | 1.95 | 2.4 | 2 | 0.6 | 完 | | | II c |
| | N-21 | ♦ D | 2.55 | 2.4 | 2.5 | 0.5 | A | | | II c |
| | N-22 | 安山岩 | 1.35 | 2 | 1.9 | 0.4 | C | | | II c |
| | O-21 | 安山岩 | 1.85 | 2.5 | 2.2 | 0.4 | C | 80° | | II d |
| | N-10 | 黒曜石C | 1.25 | 2 | 2.3 | 0.4 | C | | | II d |
| | O-21 | ♦ C | 1.95 | 2.2 | 2 | 0.6 | C | | | II d |
| | G-12 | ♦ B | 1.65 | 2.7 | 1.8 | 0.4 | C | | | II d |

Fig. 42～60は包含層出土の石鏃である。表採・表土資料と同じ分類を行う。

I a 類 Fig.42, Fig.43

Fig.42は全て黒曜石製。11は分厚い資料で、9は正三角形に近い形状をなす。18は裏面が平坦で表面のみ調整を行う。21は打面がそのまま基部になる資料で、打瘤がそのまま残る。調整は主に表面からのもので、裏面には刃部のみ行う。

Fig.43の5以下は少し大型になるタイプである。7, 11は安山岩で他は黒曜石製。殆どの資料は丁寧な両面調整であるが、5には一部自然面が残る。8は裏面に平坦剥離を行う。両面調整で、側縁部は鋸歯状に仕上げる。

I b 類 Fig.44, Fig. 45

Fig.44-2, 3は安山岩製。9は木の葉形をなす。薄手の剝片を利用し調整は側縁部のみで全面に及ばない。13はいびつな剝片を石鏃の形状に整えたもので、調整剝離は片面のみに行う。14は横長の剝片を利用する。打瘤に二次調整を加えて形状を整えている。Fig.45-1は厚めの不定形剝片を利用する。打瘤部分に集中的に調整を行い形状を整える。2は木の葉形を呈する。両面から調整を行うが、一部に自然面が残っている。3は、裏面が平坦な薄手の剝片に、専ら表面からのみ調整を行っている。6は剝片鏃であろう。打瘤に二次調整を施し、扁平に仕上げている。8も裏面が平坦な資料である。調整は主に表面に行うが、かなり分厚く仕上げている。9は安山岩製で複雑な両面調整を行う。裏面は平坦で、表面は山形をなす。

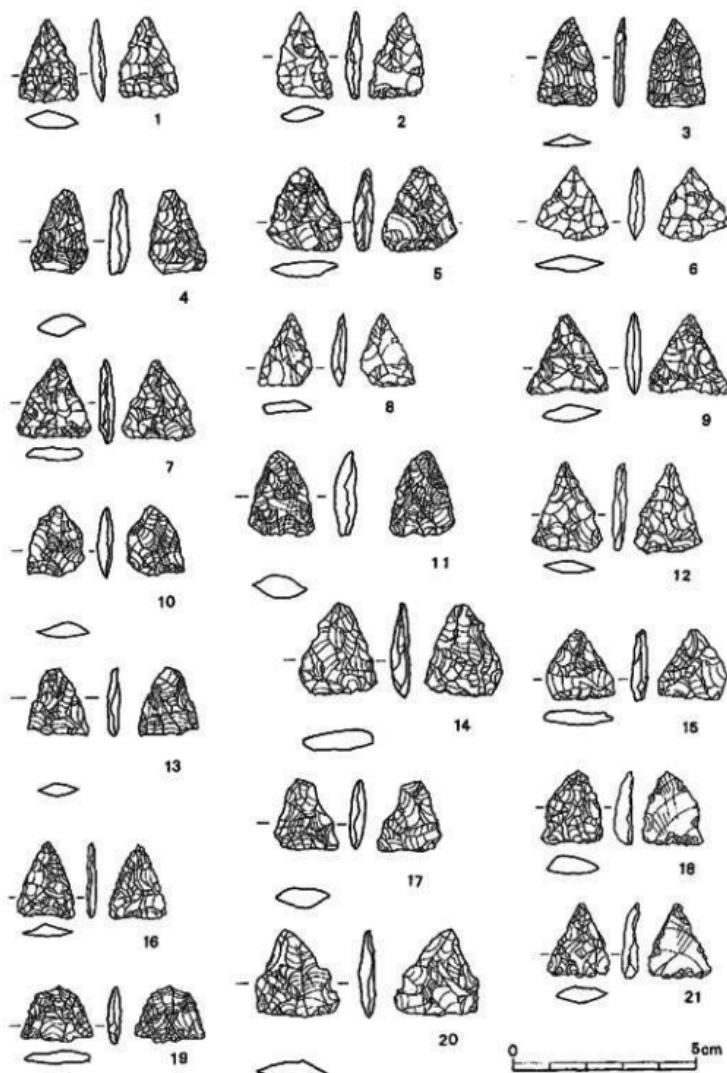


Fig. 42 石器実測図 ②

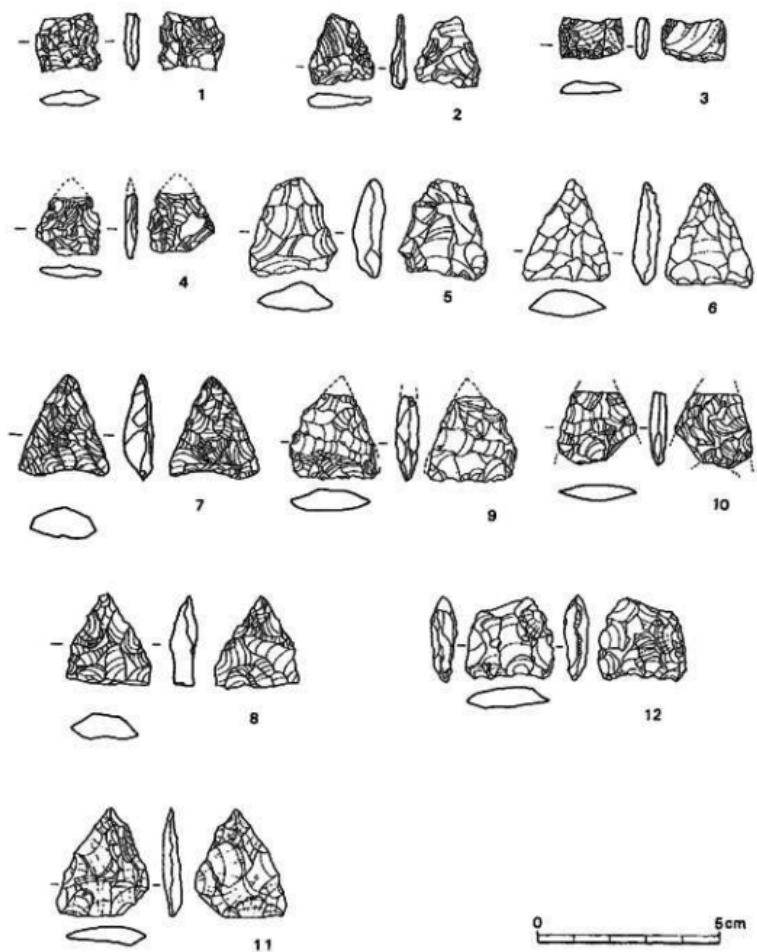


Fig. 43 石器実測図 ⑧

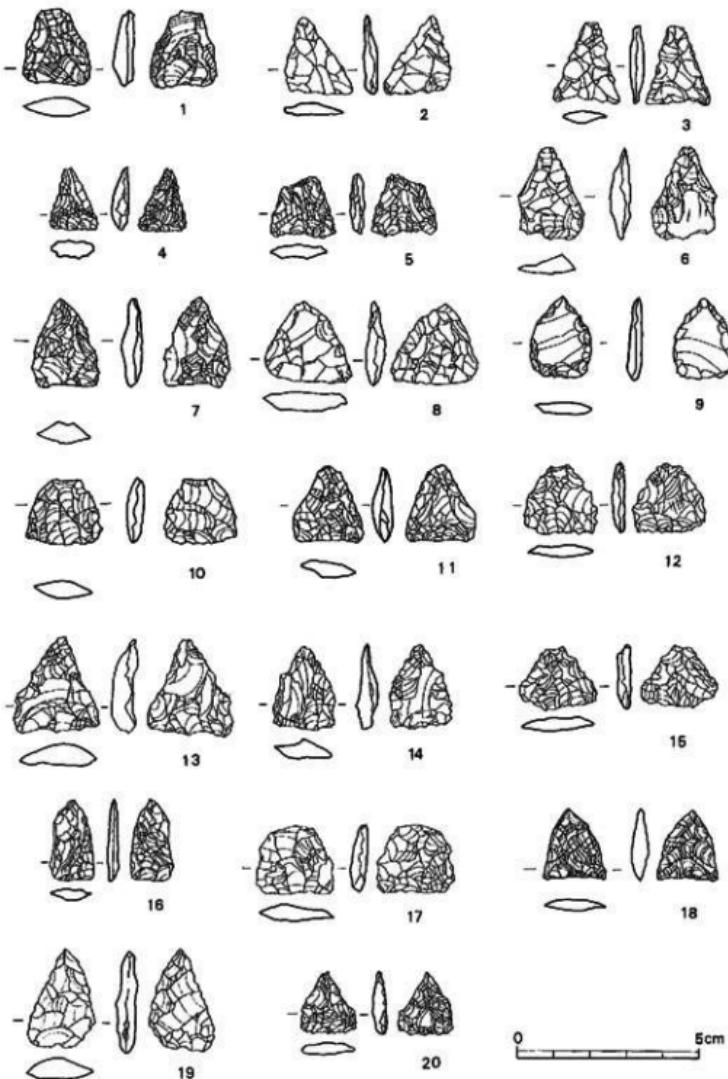


Fig. 44 石器実測図 ③

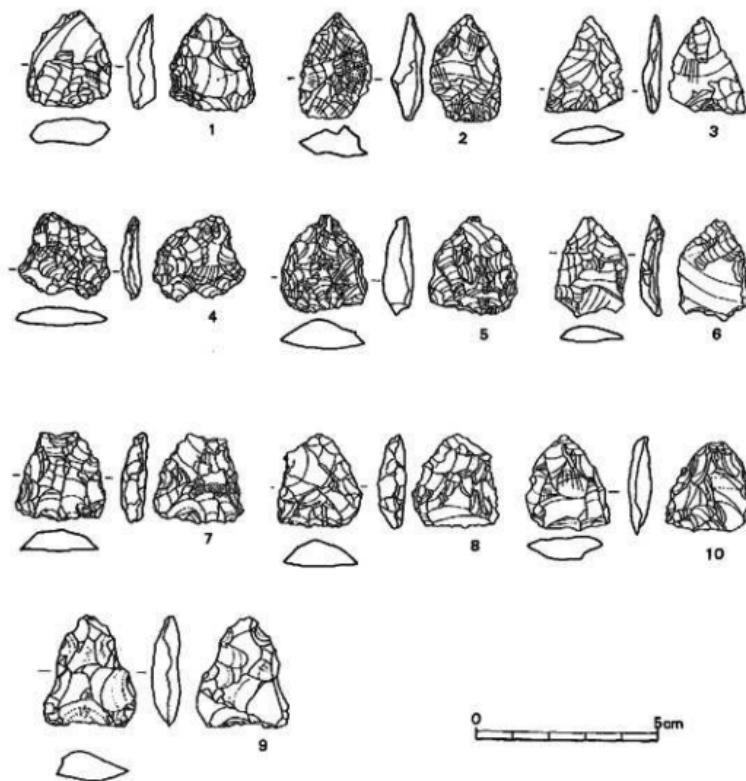


Fig. 45 石器実測図 ⑩

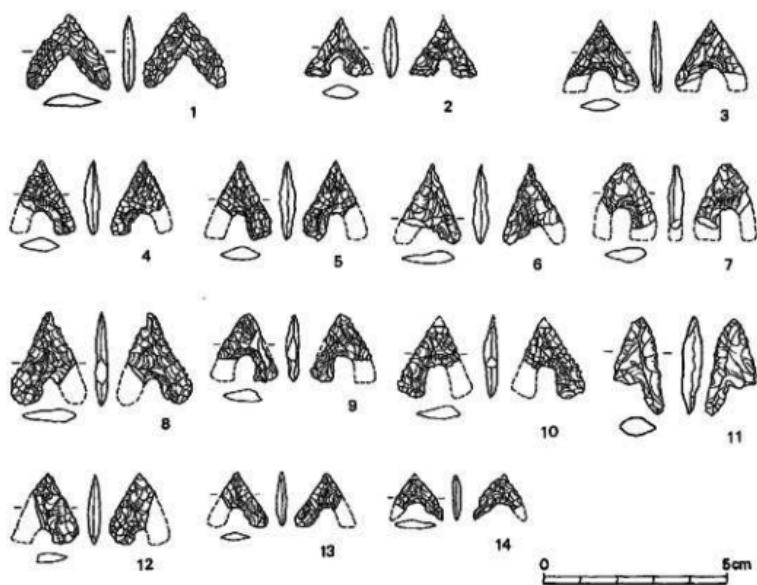


Fig. 46 石鉄実測図①

II a 類 Fig.46

基部が丸く抉られ、抉りが全長の1/3以上あるものをこのタイプとした。1は抉りが1/2もあるタイプで、丁寧な両面調整によって、鋸歯状側縁をつくりだす。完形品。11は安山岩製で片脚を欠損する。断面が凸レンズ状でやや分厚い。

II b 類 Fig.47

先端角度が鈍角のものと、鋭角になるものがある。全て黒曜石製である。16は薄手の剣片の周縁部のみ両面調整を行う。17はやや大型に属するもので、鋸歯状側縁を作り出す。18は薄い素材の剣片に表面からのみ簡単な調整を行う。22は細かな鋸歯状側縁を持つ。大型で分厚い資料である。23～25は抉りの角度が大きく、脚先端部が尖るタイプである。何れも丁寧な両面調整によって形状を整える。

II c 類 Fig.48～Fig.51

タイプとしてはこの IIc 類と IId 類が石鉄の大半を占める。Fig.48～50は基部の抉りが深いもの、Fig.51は抉りが浅いものである。

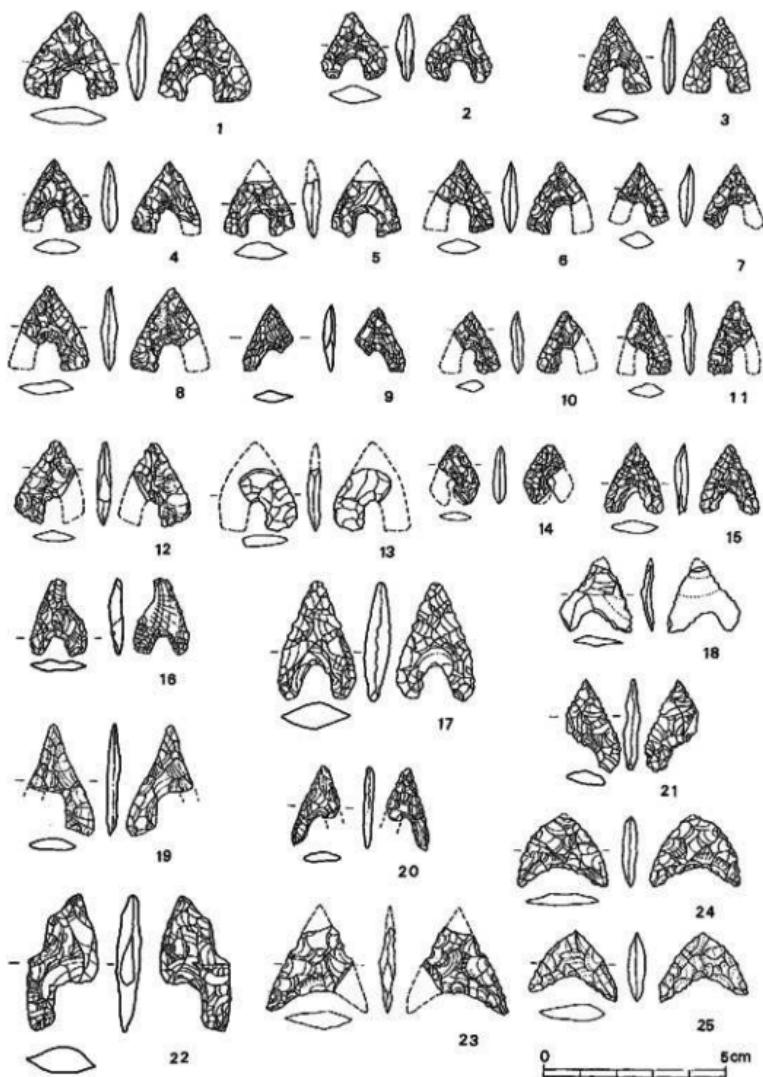


Fig. 47 石器実測図②

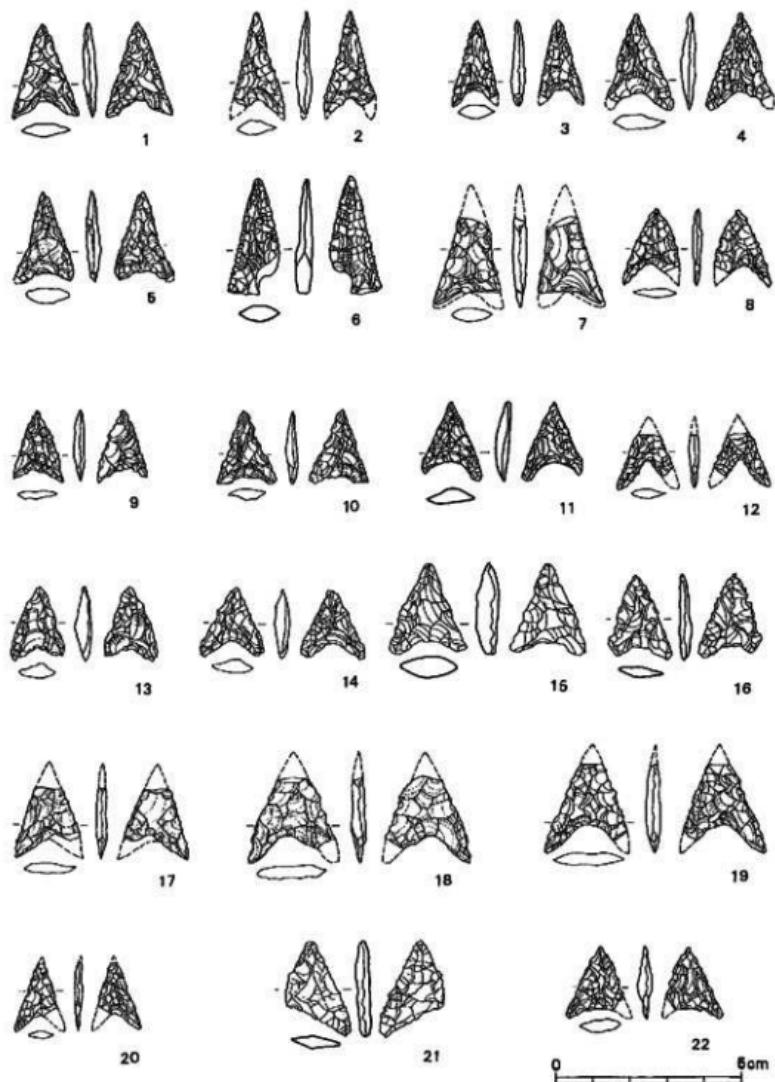


Fig. 48 石器実測図 ③

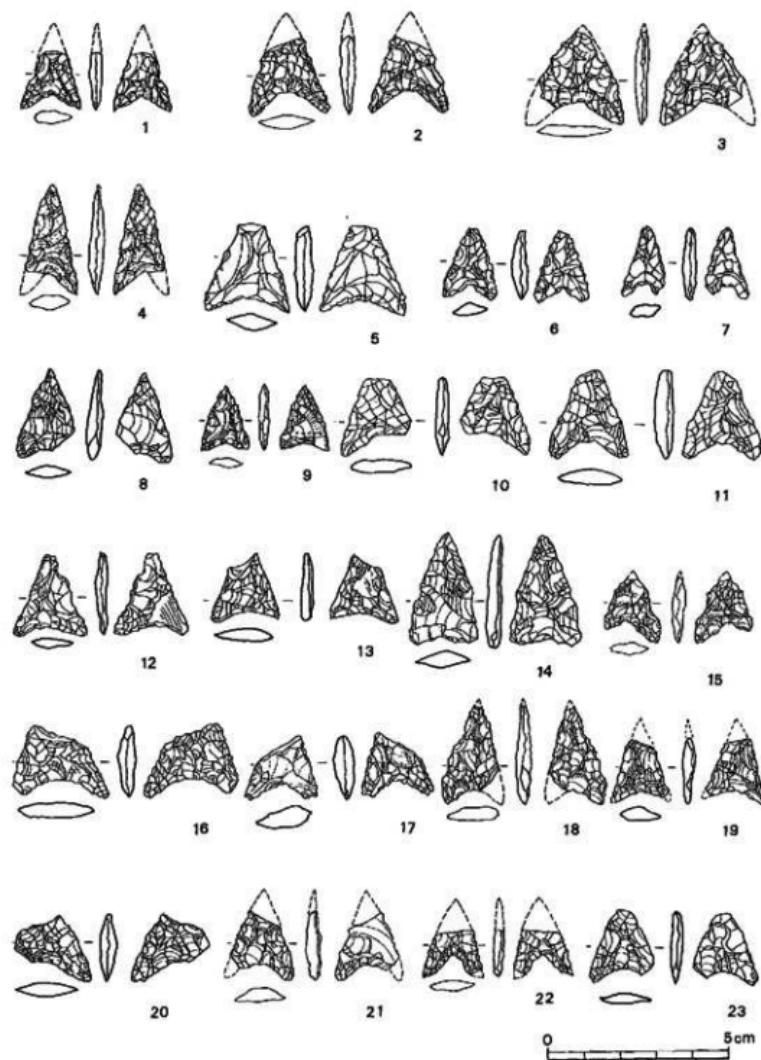


Fig. 49 石鏃実測図 ⑩

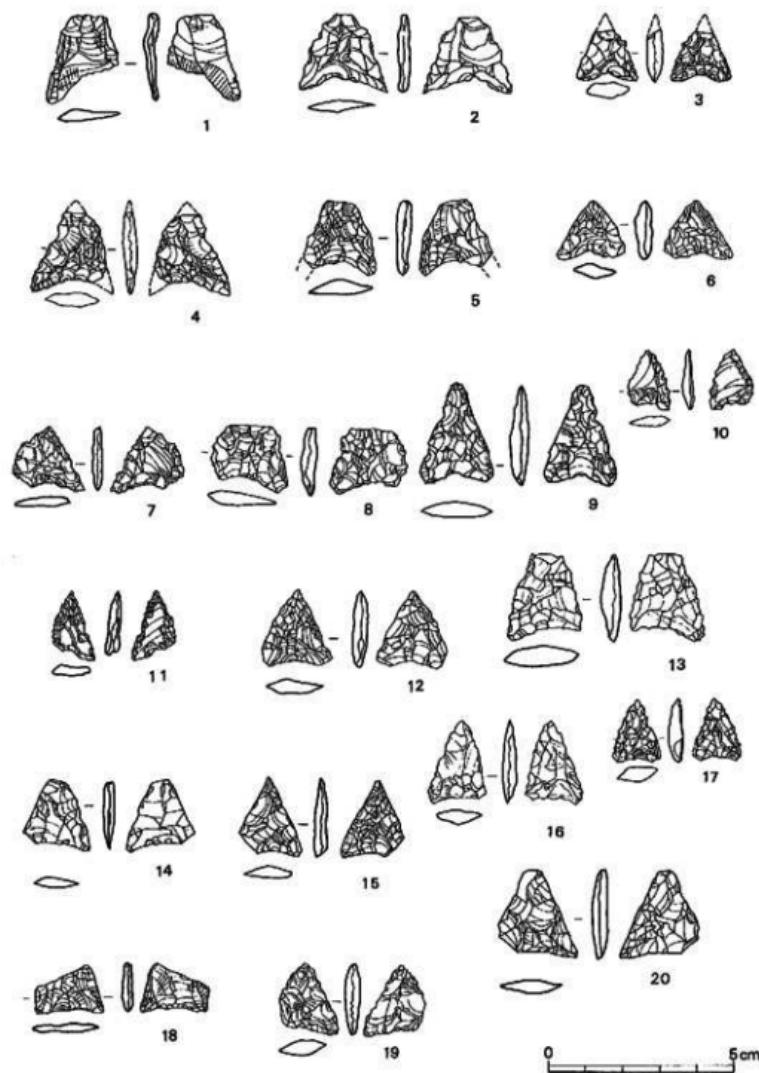


Fig. 50 石器実測図 ⑤

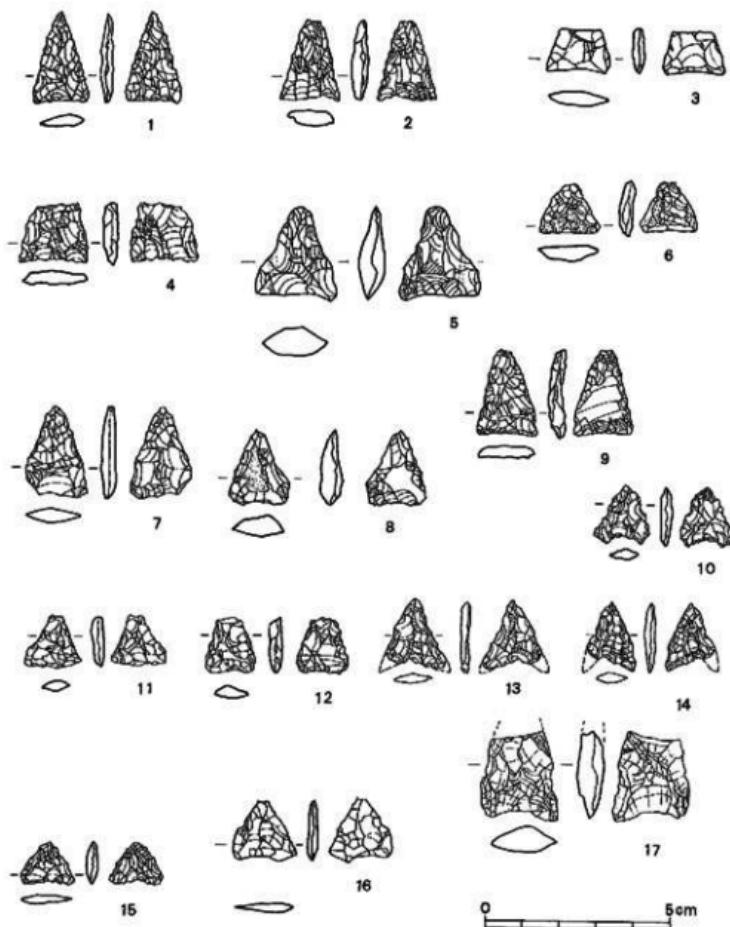


Fig. 51 石錐実測図 ①

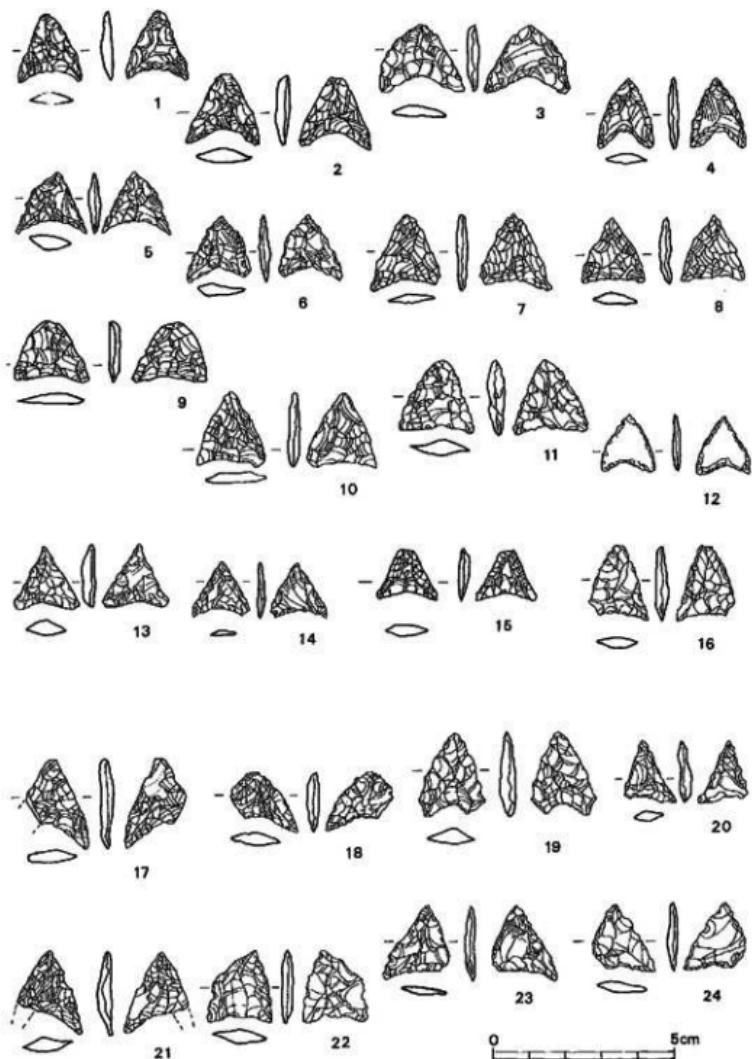


Fig. 52 石錐実測図 ①

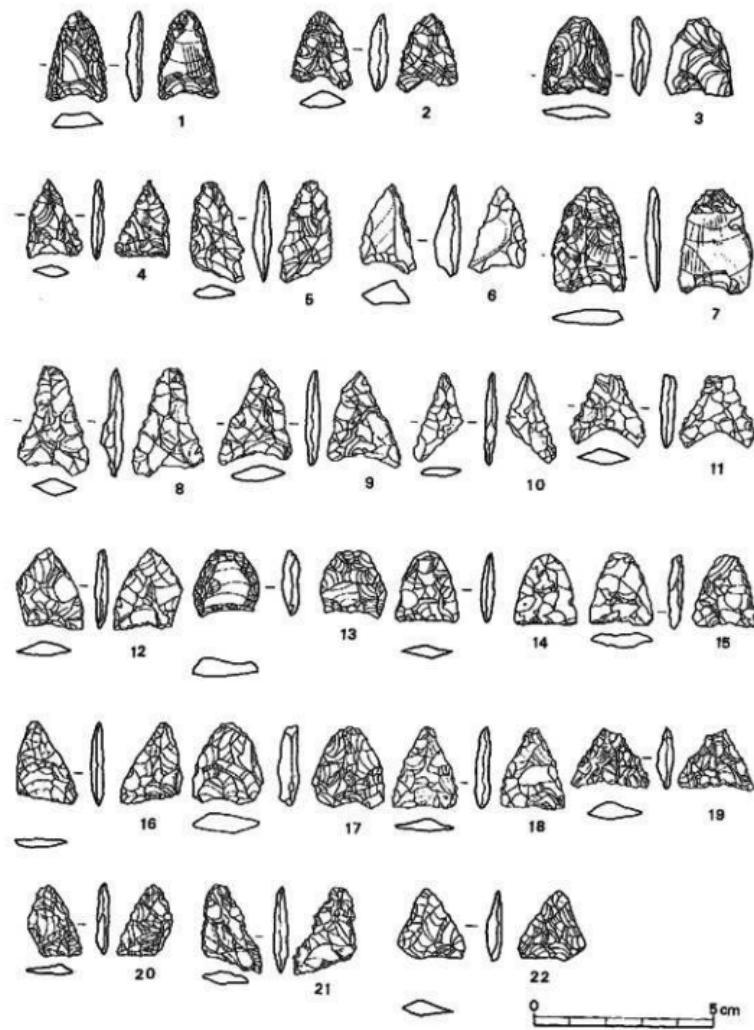


Fig. 53 石器実測図 ⑧



Fig. 54 石器実測図 ⑬

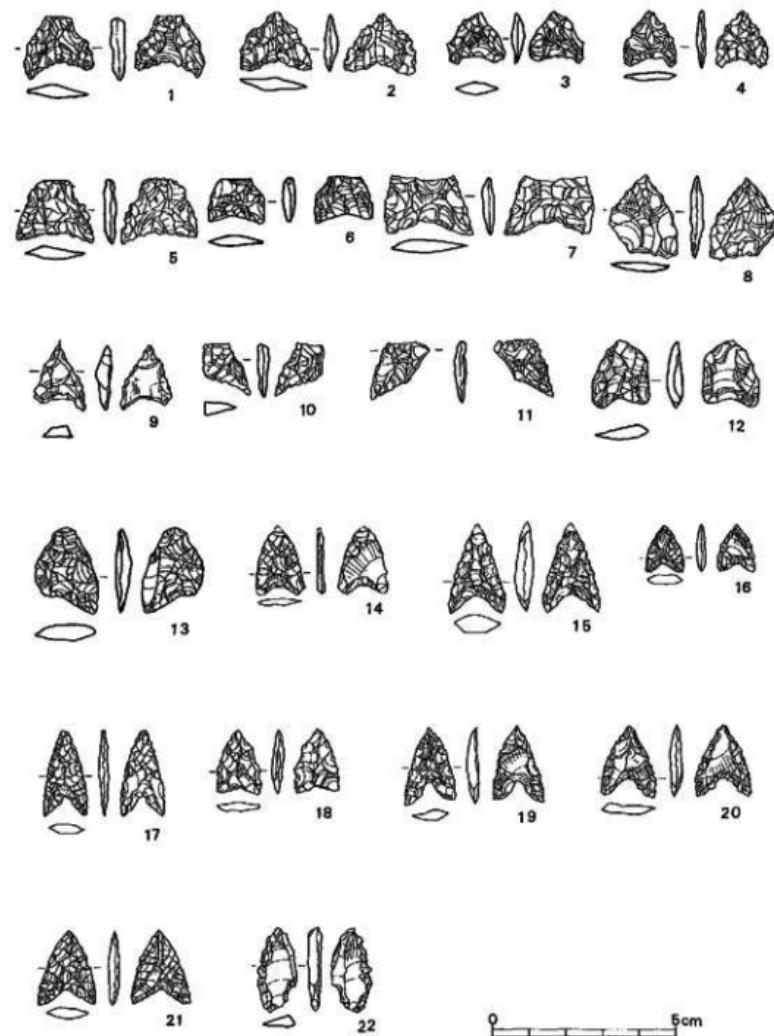


Fig. 55 石器実測図 ②

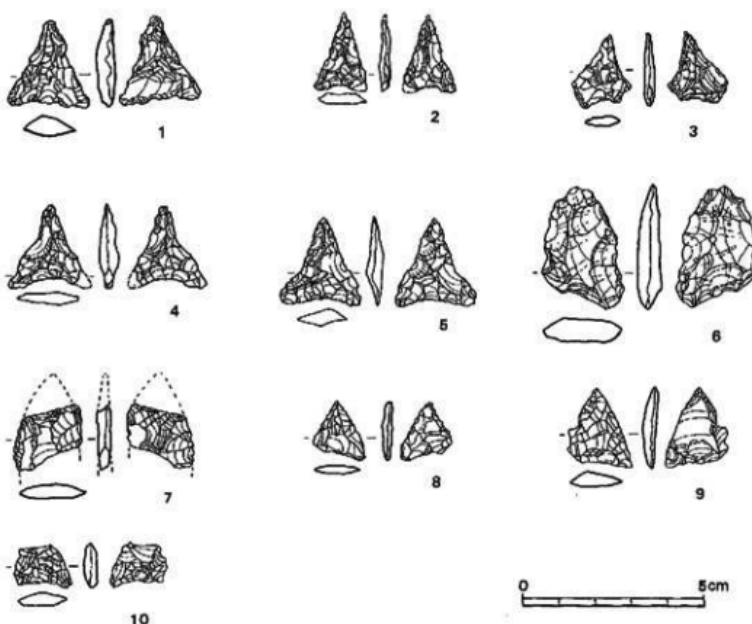


Fig. 56 石器実測図 ②

II d 類 Fig.52~Fig.56

Fig. 53は比較的基部の抉りが深いものである。1は薄手の剝片を利用し、裏面調整は無縁部にのみ行う。6は安山岩の剝片利用の資料で、調整は最小限に留めている。断面は分厚い三角形である。7は薄手の黒曜石剝片を素材とする。裏面先端部に打瘤が残る。10, 11は側縁が鋸歯状をなす。

Fig. 54-1 は比較的分厚い素材の表面から急斜角度の剝離調整を行い、平坦な裏面には基部に簡単な調整を行うだけである。表面に自然面が一部残る。21は薄手の剝片であるが、平坦な裏面の塔部に簡単な剝離を施すのみである。

Fig. 55-9 は表面は急斜角度の調整を行なうが、裏面には全く調整を施さない。17, 19は各先端部が鋭利に整形された資料で、丁寧な両面調整で、精緻な形に仕上げる。

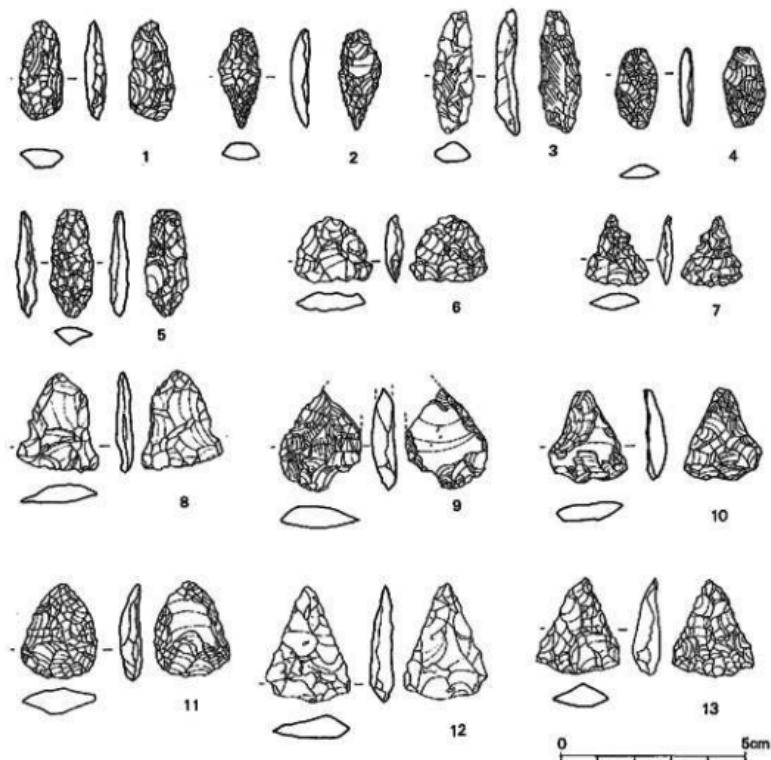


Fig. 57 石器実測図 ②

Ⅲ類 Fig. 57

凸基式で両端が尖るものと、基部が丸みを持つものとに分かれる。1～5は細身で両端部が尖る。何れも両面調整で形状を整えるが、2、3、4は裏面は平坦である。2は、特に先端部を鋭利に調整している。6～13は基部が丸い資料である。12、13は両面調整が全周に及ぶが、他の資料は、表面調整が側縁部と基部に限定される。12は安山岩で、他は黒曜石である。

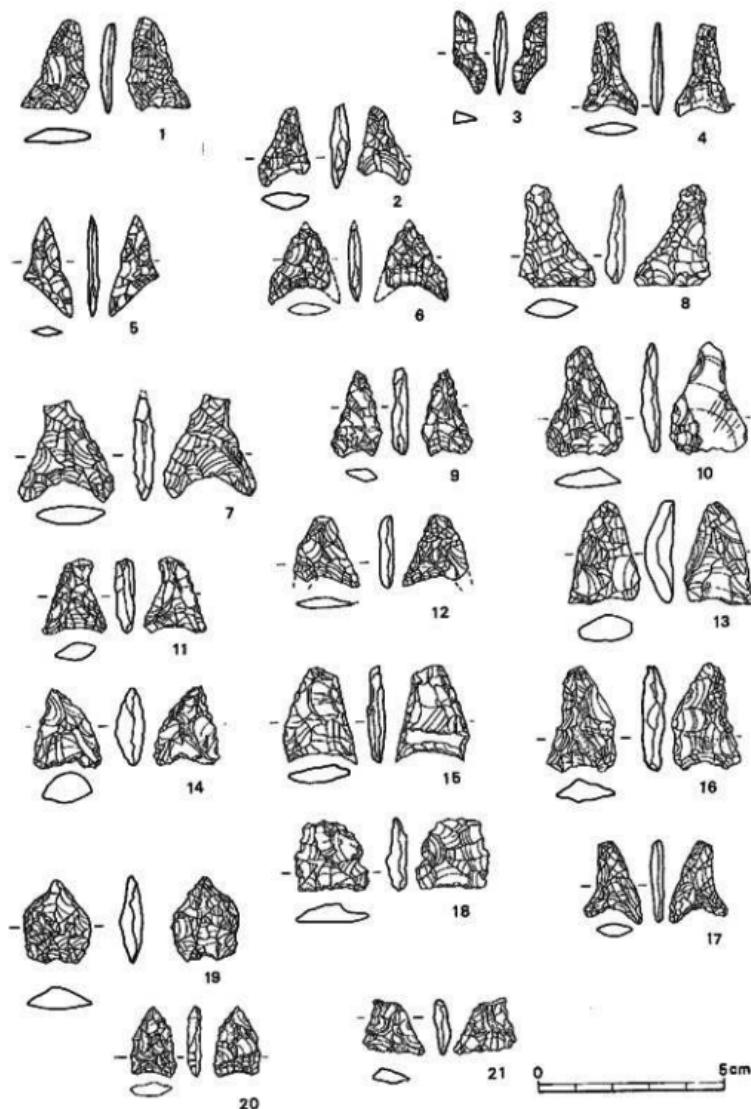


Fig. 58 石鏃実測図 ②

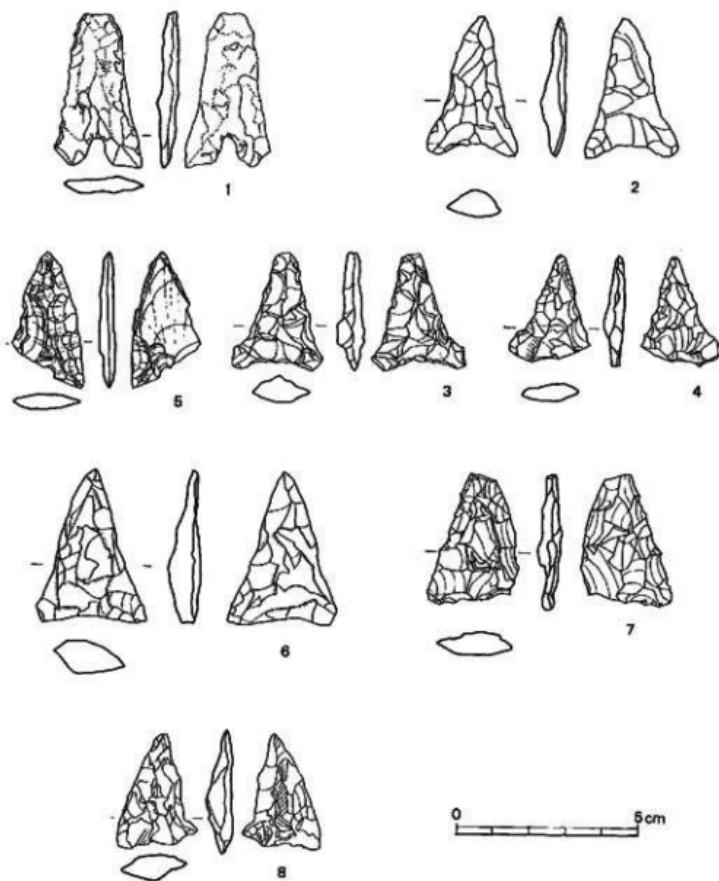


Fig. 59 石器実測図 ④

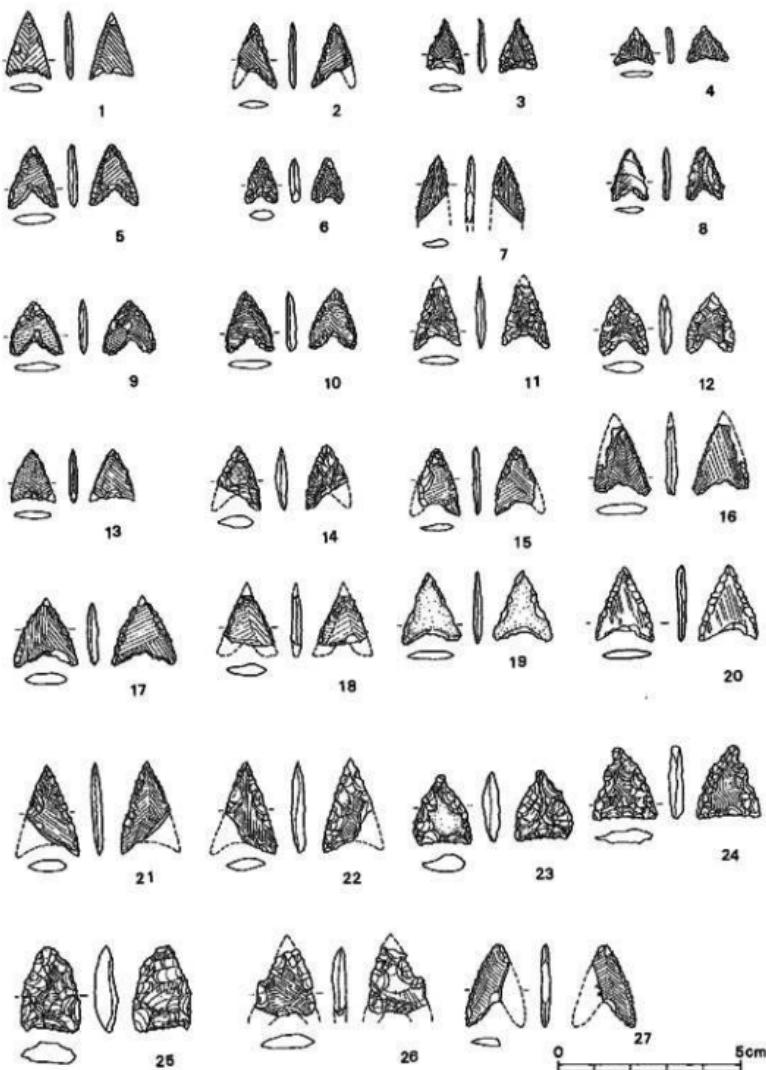


Fig. 60 石器実測図 ④

IV類 Fig.58

異形鏃である。1～6はロケット形になるタイプである。完形品はない。8は鋸歯状側縁を持つ。4は安山岩製である。何れも丁寧な両面調整を行う。7～17は側縁がカーブするタイプで、全体的にいびつな形状となる。10は不定形剝片の表面のみに主な調整を行い、裏面は打瘤のみ調整剝離する。15は安山岩で側縁部のみ両面調整する。

20は五角形の形狀をなす。

V類 Fig.59

全て安山岩製の大型鏃である。抉りが深いもの（1）、ロケット形のもの（2, 3, 4）三角形をなすもの（5～8）に分かれる。5は扁平な剝片の表面のみに調整を行う。

1, 2, 8は4cmを越す大型の資料である。

VI類 Fig.60

所謂局部磨製石鏃である。包含層から27個出土している。分類としてはⅡc, Ⅱdタイプに限定され、定型的である。



Tab. 4 石器計測表(4)

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|--------|------|-----------|---------|-----|------|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 40 - 5 | N-22 | 黒曜石A | 1.85 | 2.6 | 1.8 | 0.5 | D | | II d |
| 6 | G-21 | ♦ A | 1.8 | 2.6 | 1.9 | 0.5 | C | 90° | II d |
| 7 | K-12 | ♦ B | 1.1 | 1.8 | 1.8 | 0.4 | D | | II d |
| 8 | ?-12 | ♦ G | 0.7 | 1.5 | 1.7 | 0.3 | E | | II d |
| 9 | O-21 | ♦ E | 0.65 | 1.4 | 1.6 | 0.3 | D | | II d |
| 10 | H-11 | ♦ B | 1.1 | 2.0 | 1.7 | 0.5 | C | 110° | II d |
| 11 | E-12 | ♦ B | 0.5 | 1.2 | 1.8 | 0.3 | D | | II d |
| 12 | O-15 | ♦ A | 0.6 | 1.6 | 1.7 | 0.25 | D | | II d |
| 13 | J-12 | ♦ A | 0.7 | 1.9 | 1.8 | 0.4 | C | 84° | II d |
| 14 | HI-20 | ♦ A | 0.95 | 1.5 | 2.2 | 0.35 | A | | II d |
| 15 | G-12 | ♦ A | 0.75 | 1.4 | 1.7 | 0.3 | E | | II d |
| 16 | L-13 | ♦ C | 0.8 | 1.9 | 1.9 | 0.4 | D | | II d |
| 17 | M-10 | ♦ C | 0.85 | 1.9 | 2.0 | 0.3 | C | 90° | II d |
| 18 | E-10 | ♦ D | 1.45 | 2.5 | 1.9 | 0.4 | D | | II d |
| 19 | O-21 | ♦ A | 2.1 | 2.4 | 1.9 | 0.5 | B | 90° | III |
| 20 | H-4 | ♦ D | 0.6 | 2.4 | 1.4 | 0.2 | B | 54° | V |
| 21 | CDE-18 | ♦ D | 0.3 | 1.5 | 1.1 | 0.3 | B | 48° | V |
| Fig. 41 - 1 | N-6 | ♦ A | 4.15 | 2.9 | 2.8 | 0.7 | D | | II d |
| 2 | K-11 | ♦ C | 2.9 | 2.5 | 2.4 | 0.5 | A | | II d |
| 3 | R-14 | ♦ D | 3.95 | 2.8 | 2.2 | 0.7 | E | | II d |
| 4 | N-22 | ♦ D | 6.35 | 3.3 | 2.5 | 1.0 | A | | II d |
| 5 | D-21 | ♦ D | 7.05 | 3.6 | 2.6 | 0.9 | B | 94° | III |
| 6 | N-21 | ♦ A | 2.6 | 2.5 | 2.2 | 0.6 | E | | II d |
| 7 | O-23 | ♦ A | 7.35 | 3.2 | 2.9 | 0.9 | B | 106° | III |
| 8 | H-18 | ♦ A | 7.3 | 3.2 | 2.4 | 0.9 | E | | I b |
| 9 | G-12 | ♦ A | 3.45 | 2.8 | 2.6 | 0.65 | A | | I b |
| 10 | J-11 | ♦ D | 6 | 2.5 | 2.7 | 1.2 | E | | I b |
| 11 | N-22 | ♦ C | 3.2 | 2.3 | 2.5 | 0.65 | E | | I b |
| 12 | H-10 | ♦ D | 2.8 | 2.4 | 2.0 | 0.6 | E | | II c |
| 13 | I-12 | ♦ A | 3.65 | 3.0 | 2.2 | 0.5 | E | | III |
| 14 | E-10 | ♦ C | 4.55 | 2.4 | 2.5 | 0.9 | E | | III |
| 15 | G-12 | ♦ D | 3.9 | 2.5 | 2.1 | 0.9 | E | | III |

Tab. 5 石器計測表⑤

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|-------------|------|-----------|---------|-----|-----|------|------|-----|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 42 - 1 | N-10-69 | 黒曜石D | 1.05 | 2.2 | 1.6 | 0.5 | 完 | 58° | I a |
| 2 | J-29-195 | ※ E | 1.1 | 2.4 | 1.5 | 0.4 | C | 62° | I a |
| 3 | M-23-24 | ※ B | 0.85 | 2.4 | 1.6 | 0.3 | B | 70° | I a |
| 4 | G-20 | ※ C | 1.75 | 2.3 | 1.6 | 0.6 | E | | I a |
| 5 | EF-18-3 | ※ B | 1.6 | 2.2 | 2.0 | 0.5 | B | 90° | I a |
| 6 | K-10-204 | 安山岩 | 1.15 | 2.0 | 2.0 | 0.4 | B | 70° | I a |
| 7 | F-20-38 | 黒曜石A | 0.95 | 2.2 | 2.0 | 0.4 | B | 74° | I a |
| 8 | J-5-23 | 安山岩 | 0.7 | 2.0 | 1.5 | 0.3 | C | 62° | I a |
| 9 | C-12-52 | 黒曜石A | 1.25 | 2.2 | 2.2 | 0.4 | D | | I a |
| 10 | I-21-157 | ※ E | 1 | 1.9 | 1.6 | 0.4 | C | 86° | I a |
| 11 | J-13-23 | ※ C | 2.1 | 2.3 | 1.8 | 0.6 | B | 76° | I a |
| 12 | EF-18-3 | ※ C | 1.05 | 2.5 | 1.9 | 0.4 | B | 52° | I a |
| 13 | K-27-827 | ※ A | 0.8 | 1.9 | 1.6 | 0.3 | E | | I a |
| 14 | J-10-II | ※ D | 2.3 | 2.5 | 2.1 | 0.6 | E | | I a |
| 15 | J-13-392 | ※ C | 1 | 1.4 | 1.8 | 0.4 | B | 63° | I a |
| 16 | J-12-315 | ※ A | 0.65 | 2.1 | 1.5 | 0.3 | C | 66° | I a |
| 17 | EF-21-2 | ※ C | 1.05 | 1.9 | 1.8 | 0.4 | D | | I a |
| 18 | E-22-2 | ※ A | 1.55 | 2.0 | 1.7 | 0.5 | B | 78° | I a |
| 19 | H-19-II | ※ A | 0.7 | 1.5 | 1.9 | 0.3 | A | | I a |
| 20 | J-13-230 | ※ C | 1.8 | 2.4 | 2.4 | 0.5 | B | 105° | I a |
| 21 | J-12 | ※ A | 1.2 | 2.0 | 1.7 | 0.4 | E | | I a |
| Fig. 43 - 1 | | ※ A | 1.25 | 1.6 | 1.8 | 0.4 | E | | I a |
| 2 | 九NM-23-24-H | ※ A | 1.05 | 2.0 | 1.8 | 0.4 | E | | I a |
| 3 | K-27-437 | ※ C | 0.75 | 1.2 | 1.7 | 0.3 | E | | I a |
| 4 | O-21-H | ※ A | 1 | 1.6 | 1.7 | 0.3 | E | | I a |
| 5 | K-26-142 | ※ D | 4.5 | 2.8 | 2.5 | 0.8 | D | | I a |
| 6 | EF-18-III | 安山岩 | 3.45 | 2.9 | 2.4 | 0.7 | C | 72° | I a |
| 7 | J-11-H | 黒曜石C | 3.5 | 2.8 | 2.5 | 0.9 | C | 81° | I a |
| 8 | H-4-II | ※ E | 3.2 | 2.5 | 2.4 | 0.7 | C | 71° | I a |
| 9 | CD-17-II | ※ A | 3.2 | 2.3 | 2.4 | 0.6 | D | | I a |
| 10 | E-22-III | ※ E | 1.7 | 2.0 | 2.2 | 0.4 | E | | I a |
| 11 | J-21-231 | 安山岩 | 2.8 | 3.0 | 2.5 | 0.4 | C | 78° | I a |
| 12 | CD-17-III | 黒曜石B | 2.8 | 2.3 | 2.4 | 0.6 | A | | I a |
| Fig. 44 - 1 | F-19-20 | ※ A | 1.85 | 2.1 | 1.9 | 0.5 | D | | I a |
| 2 | I-11-II | 安山岩 | 1 | 2.2 | 1.8 | 0.4 | D | | I a |
| 3 | J-23-2 | 安山岩 | 1 | 2.1 | 1.8 | 0.3 | A | | I a |
| 4 | J-9-23 | 黒曜石A | 0.7 | 1.7 | 1.3 | 0.5 | D | | I b |
| 5 | J-11-14 | ※ C | 0.8 | 1.7 | 1.7 | 0.4 | E | | I b |

Tab. 6 石錐計測表 ⑥

| 団番号 | 出土区 | 石質 | 重量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|----------|------|-----------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 44 - 6 | K-27-352 | 黒曜石D | 1.95 | 2.6 | 1.8 | 0.6 | E | | I b |
| 7 | G-23-II | * C | 1.95 | 2.5 | 1.9 | 0.6 | C | 85° | I b |
| 8 | D-14-II | 安山岩 | 2.05 | 2.2 | 2.4 | 0.5 | B | 88° | I b |
| 9 | CD-17-II | 安山岩 | 1.45 | 2.3 | 1.7 | 0.4 | B | 82° | I b |
| 10 | H-8-11 | 黒曜石C | 1.65 | 1.8 | 2.1 | 0.5 | D | | I b |
| 11 | F-12-H | * C | 1.8 | 2.1 | 1.9 | 0.5 | C | 84° | I b |
| 12 | F-20-516 | * B | 1.2 | 1.9 | 2.0 | 0.3 | E | | I b |
| 13 | J-12-205 | * D | 2.85 | 2.7 | 2.4 | 0.7 | D | | I b |
| 14 | J-17-52 | * A | 1.55 | 2.3 | 1.7 | 0.6 | B | 73° | I b |
| 15 | E-17-V | * E | 1.1 | 1.7 | 2.1 | 0.4 | E | | I b |
| 16 | N-10-II | * F | 0.75 | 2.2 | 1.2 | 0.3 | C | 72° | I b |
| 17 | I-11-66 | * D | 1.4 | 1.8 | 2.1 | 0.5 | E | | I b |
| 18 | J-26-39 | * A | 0.95 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | 完 | 76° | I b |
| 19 | I-23-107 | * E | 2 | 2.8 | 1.8 | 0.5 | B | 73° | I b |
| 20 | G-13-II | * B | 0.5 | 1.7 | 1.5 | 0.4 | B | 70° | I b |
| Fig. 45 - 1 | G-11-42 | * A | 4.6 | 2.6 | 2.3 | 0.7 | E | | I b |
| 2 | G-11-20 | * A | 3.55 | 2.9 | 1.9 | 0.8 | B | 84° | I b |
| 3 | I-21-488 | * D | 1.9 | 2.7 | 2.1 | 0.5 | E | | I b |
| 4 | E-F-18-3 | * A | 2.1 | 2.3 | 2.6 | 0.5 | E | | I b |
| 5 | E-17-V | * A | 3.95 | 2.7 | 2.4 | 0.8 | E | | I b |
| 6 | H-29-II | * A | 2.15 | 2.7 | 1.9 | 0.5 | E | | I b |
| 7 | J-12-128 | * C | 3.4 | 2.5 | 2.5 | 0.6 | A | | I b |
| 8 | H-12-214 | * D | 4.25 | 2.6 | 2.3 | 0.8 | D | | I b |
| 9 | CDE-18 | 安山岩 | 4.95 | 3.0 | 2.5 | 0.8 | E | | I b |
| 10 | N-22-H | 黒曜石A | 3.05 | 2.5 | 2.3 | 0.6 | E | | I b |
| Fig. 46 - 1 | ? | * C | 0.75 | 2.0 | 2.3 | 0.3 | 完 | 77° | II a |
| 2 | H-11-27 | * C | 0.45 | 1.6 | 1.9 | 0.4 | 完 | 61° | II a |
| 3 | K-9-37 | * G | 0.55 | 1.8 | 2.0 | 0.3 | B | 64° | II a |
| 4 | M-9-277 | * C | 0.6 | 2.0 | 1.4 | 0.4 | C | 56° | II a |
| 5 | F-11-185 | * D | 0.6 | 2.1 | 1.5 | 0.4 | C | 54° | II a |
| 6 | I-11-198 | * D | 0.6 | 2.2 | 1.6 | 0.3 | C | 48° | II a |
| 7 | F-16-544 | * B | 0.65 | 1.8 | 1.5 | 0.4 | E | | II a |
| 8 | J-7-H | * C | 0.95 | 2.5 | 1.8 | 0.3 | C | 51° | II a |
| 9 | D-11-22 | * B | 0.5 | 1.9 | 1.6 | 0.3 | C | 60° | II a |
| 10 | K-11-320 | * C | 0.6 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | D | | II a |
| 11 | J-23-532 | 安山岩 | 1.2 | 2.8 | 1.3 | 0.5 | C | 65° | II a |
| 12 | I-7-229 | 黒曜石F | 0.55 | 1.9 | 1.2 | 0.3 | C | 71° | II a |
| 13 | L-8-40 | * F | 0.25 | 1.5 | 1.3 | 0.2 | C | 66° | II a |

Tab. 7 石器計測表⑦

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量 | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|------------|------------|------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 46 | 14 | F-13-14-19 | 黒曜石B | 0.15 | 1.1 | 1.3 | 0.2 | D | II a |
| Fig. 47 - 1 | H-40-139 | ♦ F | 1.5 | 2.4 | 2.6 | 0.5 | C | 78° | II b |
| 2 | J-13-10 | ♦ C | 0.8 | 1.8 | 1.8 | 0.5 | E | | II b |
| 3 | B-11-12-20 | ♦ F | 0.65 | 2.1 | 1.8 | 0.3 | 完 | 61° | II b |
| 4 | I-3-179 | 安山岩 | 0.75 | 2.0 | 1.9 | 0.4 | C | 70° | II b |
| 5 | E-14-46 | 黒曜石B | 0.8 | 1.5 | 1.9 | 0.4 | A | | II b |
| 6 | I-3-452 | 安山岩 | 0.6 | 2.0 | 1.6 | 0.4 | C | 68° | II b |
| 7 | N-10-54 | 黒曜石F | 0.4 | 1.7 | 1.4 | 0.4 | C | 64° | II b |
| 8 | F-17-II | ♦ B | 0.9 | 2.3 | 1.9 | 0.4 | C | 67° | II b |
| 9 | 15-22 | ♦ C | 0.45 | 1.8 | 1.4 | 0.3 | C | 61° | II b |
| 10 | H-11-111 | ♦ B | 0.35 | 1.7 | 1.2 | 0.3 | C | 66° | II b |
| 11 | DE-16-299 | ♦ B | 0.45 | 2.0 | 1.2 | 0.4 | C | 53° | II b |
| 12 | L-9-501 | ♦ C | 0.8 | 2.3 | 1.6 | 0.3 | B | 61° | II b |
| 13 | EF-4-IV-14 | 安山岩 | 0.65 | 1.7 | 1.6 | 0.3 | D | | II b |
| 14 | I-3-113 | 黒曜石A | 0.35 | 1.6 | 1.1 | 0.2 | B | 62° | II b |
| 15 | M-4-329 | ♦ E | 0.7 | 1.9 | 1.6 | 0.3 | 完 | 61° | II b |
| 16 | N-22-H | ♦ F | 0.75 | 2.1 | 1.5 | 0.3 | D | | II b |
| 17 | J-6-3 | ♦ E | 2.75 | 3.2 | 2.1 | 0.5 | 完 | 49° | II b |
| 18 | I-3-1775 | ♦ D | 0.55 | 1.8 | 2.0 | 0.3 | D | | II b |
| 19 | E-17-V | ♦ D | 0.95 | 3.1 | 1.8 | 0.3 | C | 40° | II b |
| 20 | K-34-II | ♦ A | 0.45 | 2.2 | 1.2 | 0.2 | C | 43° | II b |
| 21 | J-12-350 | ♦ B | 0.95 | 2.5 | 1.4 | 0.4 | C | 57° | II b |
| 22 | J-11-249 | ♦ C | 3.5 | 3.7 | 2.0 | 0.7 | D | | II b |
| 23 | J-13-78 | ♦ D | 1.35 | 2.4 | 2.4 | 0.5 | D | | II b |
| 24 | G-14-140 | ♦ D | 1.05 | 1.9 | 2.4 | 0.4 | A | | II b |
| 25 | F-16-612 | 安山岩 | 1 | 1.9 | 2.4 | 0.5 | 完 | 98° | II b |
| Fig. 48 - 1 | J-13-494 | 黒曜石D | 1.05 | 2.5 | 1.8 | 0.4 | 完 | 46° | II c |
| 2 | J-11-272 | ♦ E | 0.85 | 2.9 | 1.4 | 0.4 | B | 31° | II c |
| 3 | H-29-II | ♦ B | 0.6 | 2.3 | 1.2 | 0.4 | B | 35° | II c |
| 4 | N-25-20 | ♦ F | 0.95 | 2.6 | 1.8 | 0.4 | C | 42° | II c |
| 5 | J-8-10 | ♦ G | 0.95 | 2.4 | 1.6 | 0.4 | C | 35° | II c |
| 6 | I-13-393 | ♦ F | 1.1 | 3.2 | 1.4 | 0.5 | C | 33° | II c |
| 7 | K-12-530 | ♦ D | 1.3 | 2.3 | 1.8 | 0.4 | E | | II c |
| 8 | E-12-162 | ♦ E | 0.4 | 2.1 | 1.5 | 0.2 | C | 61° | II c |
| 9 | J-2-3-62 | ♦ B | 0.4 | 1.9 | 1.3 | 0.2 | C | 50° | II c |
| 10 | D-13-589 | ♦ C | 0.55 | 2.0 | 1.6 | 0.3 | 完 | 51° | II c |
| 11 | | ♦ A | 0.6 | 2.2 | 1.6 | 0.4 | C | 48° | II c |
| 12 | G-26-II | ♦ C | 0.35 | 1.5 | 1.5 | 0.3 | D | | II c |

Tab. 8 石器計測表⑥

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重 量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|-------------|------|---------------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 48 -13 | EF-18-3 | 黒曜石C | 0.75 | 2.0 | 1.5 | 0.4 | C | 58° | II e |
| 14 | F-19-12-III | * C | 0.65 | 1.9 | 1.7 | 0.4 | D | | II e |
| 15 | J-2-3-833 | * E | 2.05 | 2.5 | 2.1 | 0.6 | A | | II e |
| 16 | N-9-209 | * E | 0.75 | 2.3 | 1.7 | 0.4 | C | 50° | II e |
| 17 | J-11-363 | * D | 0.75 | 1.9 | 1.8 | 0.3 | D | | II e |
| 18 | K-2-I | * D | 1.4 | 2.3 | 2.4 | 0.4 | D | | II e |
| 19 | DE-165-406 | * D | 1.25 | 2.4 | 2.3 | 0.4 | D | | II e |
| 20 | I-13-301 | * C | 0.25 | 1.8 | 1.2 | 0.2 | D | | II e |
| 21 | F-2 | * D | 1.1 | 2.6 | 1.8 | 0.4 | B | 49° | II e |
| 22 | I-11-II | * C | 0.6 | 1.9 | 1.6 | 0.4 | C | 60° | II e |
| Fig. 49 -1 | J-23-1209 | * D | 0.75 | 1.6 | 1.7 | 0.4 | A | | II e |
| 2 | I-13 | * B | 1.25 | 2.1 | 2.2 | 0.4 | A | | II e |
| 3 | F-16-268 | * B | 1.65 | 2.6 | 2.4 | 0.3 | D | | II e |
| 4 | K-105 | 安山岩 | 1.35 | 2.9 | 1.4 | 0.4 | D | | II e |
| 5 | G-23-II | 安山岩 | 2.25 | 2.4 | 2.4 | 0.5 | A | | II e |
| 6 | I-3-1737 | 黒曜石E | 0.85 | 1.9 | 1.5 | 0.4 | A | | II e |
| 7 | F-12-35 | * D | 0.6 | 2.0 | 1.3 | 0.4 | C | 34° | II e |
| 8 | G-22-2 | * B | 0.95 | 2.5 | 1.6 | 0.4 | C | 54° | II e |
| 9 | I-22-12 | * C | 0.5 | 1.8 | 1.4 | 0.3 | 完 | 54° | II e |
| 10 | H-18-II | * D | 1 | 2.1 | 1.4 | 0.4 | D | | II e |
| 11 | M-10-135 | * C | 1.6 | 2.4 | 2.1 | 0.5 | E | | II e |
| 12 | F-12-43 | * C | 0.9 | 2.2 | 2.1 | 0.3 | D | | II e |
| 13 | J-12-261 | * C | 0.8 | 1.9 | 1.9 | 0.4 | A | | II e |
| 14 | F-16-120 | * B | 1.85 | 3.1 | 1.9 | 0.4 | B | 49° | II e |
| 15 | G-23-III | * B | 0.65 | 1.8 | 1.6 | 0.3 | D | | II e |
| 16 | CD-17-I | * B | 1.5 | 2.0 | 2.7 | 0.4 | D | | II e |
| 17 | K-11-929 | * D | 1.6 | 1.8 | 2.0 | 0.6 | E | | II e |
| 18 | J-13-75 | * C | 1.1 | 2.7 | 1.7 | 0.4 | D | | II e |
| 19 | CD-17-II | * C | 0.75 | 1.8 | 1.7 | 0.4 | D | | II e |
| 20 | DE-19-11 | * B | 1.05 | 1.8 | 2.2 | 0.4 | D | | II e |
| 21 | J-16-180 | * A | 0.85 | 1.9 | 1.8 | 0.4 | D | | II e |
| 22 | I-3-652 | * E | 0.45 | 1.3 | 1.6 | 0.3 | D | | II e |
| 23 | L-13-547 | * C | 0.9 | 2.0 | 1.8 | 0.3 | D | | II e |
| Fig. 50 -1 | K-27-298 | * F | 0.9 | 2.3 | 2.0 | 0.3 | D | | II e |
| 2 | G-12-112 | 安山岩 | 1.15 | 2.0 | 2.3 | 0.3 | A | | II e |
| 3 | K-11-852 | 黒曜石C | 0.75 | 1.4 | 1.6 | 0.5 | D | | II e |
| 4 | EF-18-IV | * E | 1.25 | 2.2 | 2.0 | 0.4 | D | | II e |
| 5 | DE-164 | * A | 1.1 | 2.0 | 2.0 | 0.4 | D | | II e |

Tab. 9 石錐計測表⑨

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量(g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|----------|------|-------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 50 - 6 | EF-21 | 黒曜石C | 0.8 | 1.6 | 1.8 | 0.4 | C | 80° | II c |
| 7 | J-12-343 | ♦ F | 0.75 | 1.7 | 2.0 | 0.3 | E | | II c |
| 8 | I-13 | ♦ A | 1.3 | 1.8 | 2.1 | 0.4 | E | | II c |
| 9 | I-12-391 | ♦ A | 1.55 | 2.7 | 1.9 | 0.4 | D | | II c |
| 10 | I-3-1710 | ♦ E | 0.35 | 1.6 | 1.1 | 0.3 | D | | II c |
| 11 | K-34-III | ♦ E | 0.3 | 1.9 | 1.2 | 0.3 | C | 49° | II c |
| 12 | I-22-24 | ♦ A | 1.35 | 2.1 | 1.9 | 0.4 | B | 69° | II c |
| 13 | J-9-143 | ♦ D | 1.85 | 2.3 | 2.0 | 0.5 | E | | II c |
| 14 | D-21-H | ♦ D | 0.75 | 1.9 | 1.8 | 0.3 | E | | II c |
| 15 | I-13 | ♦ A | 0.95 | 2.0 | 1.7 | 0.3 | C | 54° | II c |
| 16 | I-3-1457 | 安山岩 | 1 | 2.2 | 1.5 | 0.4 | B | 63° | II c |
| 17 | K-5 | 黒曜石A | 0.65 | 1.8 | 1.2 | 0.4 | B | 57° | II c |
| 18 | N-22-H | ♦ B | 0.5 | 1.3 | 1.8 | 0.2 | A | | II c |
| 19 | D-E-19 | ♦ C | 0.95 | 1.9 | 1.6 | 0.4 | D | | II c |
| 20 | K-31-III | ♦ A | 1.45 | 2.9 | 2.1 | 0.4 | D | | II c |
| Fig. 51 - 1 | J-12 | ♦ C | 1 | 2.5 | 1.5 | 0.3 | 完 | 52° | II c |
| 2 | M-9-376 | ♦ E | 0.95 | 2.2 | 1.6 | 0.4 | D | | II c |
| 3 | T-27-512 | ♦ E | 0.55 | 1.2 | 1.7 | 0.4 | A | | II c |
| 4 | I-4-H | ♦ C | 0.9 | 1.6 | 1.9 | 0.4 | A | | II c |
| 5 | I-13 | ♦ C | 2.65 | 3.0 | 2.2 | 0.7 | D | | II c |
| 6 | FG-22-2 | ♦ C | 0.7 | 1.3 | 1.6 | 0.4 | D | | II c |
| 7 | J-27-455 | ♦ C | 1.2 | 2.5 | 1.6 | 0.4 | B | 68° | II c |
| 8 | E-17-VI | ♦ E | 1.45 | 2.0 | 1.6 | 0.6 | E | | II c |
| 9 | E-22-2 | ♦ B | 0.75 | 2.2 | 1.6 | 0.3 | A | | II c |
| 10 | I-11-17 | ♦ C | 0.5 | 1.6 | 1.5 | 0.3 | B | 87° | II c |
| 11 | J-27-572 | 安山岩 | 0.6 | 1.4 | 1.5 | 0.3 | D | | II c |
| 12 | B-19-III | 黒曜石A | 0.65 | 1.5 | 1.3 | 0.4 | E | | II c |
| 13 | F-16-339 | ♦ A | 0.65 | 1.9 | 1.6 | 0.3 | B | 70° | II c |
| 14 | D-29 | ♦ C | 0.4 | 1.9 | 1.3 | 0.3 | C | 69° | II c |
| 15 | CD-17-II | ♦ C | 0.35 | 1.1 | 1.4 | 0.2 | 完 | 105° | II c |
| 16 | FG-20-I | ♦ D | 0.55 | 1.6 | 1.7 | 0.3 | E | | II c |
| 17 | E-17-V | ♦ D | 4.2 | 2.4 | 2.1 | 0.7 | D | | II c |
| Fig. 52 - 1 | L-9-199 | ♦ C | 0.65 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | A | | II d |
| 2 | I-13 | ♦ E | 0.85 | 1.9 | 2.0 | 0.4 | A | | II d |
| 3 | EN-204 | ♦ B | 1 | 2.0 | 2.3 | 0.3 | D | | II d |
| 4 | CDE-18 | ♦ B | 0.55 | 1.9 | 1.5 | 0.3 | 完 | 70° | II d |
| 5 | H-12-153 | ♦ B | 0.75 | 1.7 | 1.9 | 0.4 | 完 | 81° | II d |
| 6 | N-9-6 | ♦ C | 0.6 | 1.8 | 1.8 | 0.4 | C | 83° | II d |

Tab. 10 石器計測表 ⑨

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|--------------|------|-----------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 52 - 7 | I-12-249 | 黒曜石A | 0.75 | 2.1 | 1.9 | 0.2 | C | 69° | II d |
| 8 | E-17-III | ◆ C | 0.65 | 1.8 | 1.7 | 0.3 | 完 | 73° | II d |
| 9 | DE-16-112 | ◆ B | 0.9 | 1.6 | 2.1 | 0.3 | D | | II d |
| 10 | E-19-D | ◆ D | 1 | 2.1 | 1.9 | 0.3 | C | 60° | II d |
| 11 | CDE-18 | ◆ A | 1.5 | 2.0 | 2.0 | 0.5 | C | 77° | II d |
| 12 | E-125-54 | 安山岩 | 0.4 | 1.6 | 1.5 | 0.2 | 完 | 70° | II d |
| 13 | F-11-S-28 | 黒曜石A | 0.9 | 1.7 | 1.8 | 0.4 | B | | II d |
| 14 | L-11-18 | ◆ A | 0.3 | 1.5 | 1.6 | 0.1 | 完 | 55° | II d |
| 15 | I-13 | ◆ C | 0.45 | 1.4 | 1.6 | 0.3 | A | | II d |
| 16 | K-27-695 | ◆ D | 0.9 | 2 | 1.6 | 0.3 | D | | II d |
| 17 | J-13-250 | ◆ A | 0.95 | 2.4 | 1.7 | 0.4 | C | | II d |
| 18 | DE-19 | ◆ A | 0.7 | 1.6 | 1.8 | 0.4 | C | | II d |
| 19 | K-12-199 | ◆ D | 1.1 | 2.3 | 1.8 | 0.4 | C | 65° | II d |
| 20 | DE16-III-285 | ◆ D | 0.4 | 1.6 | 1.3 | 0.3 | C | 60° | II c |
| 21 | L10-136 | ◆ C | 0.9 | 2.3 | 1.8 | 0.4 | C | | II d |
| 22 | J-28-234 | ◆ A | 1.15 | 2 | 1.7 | 0.4 | 完 | 85° | II d |
| 23 | I-13-6-474 | ◆ C | 0.7 | 2.1 | 1.8 | 0.3 | C | 70° | II d |
| 24 | K-11-520 | 安山岩 | 0.7 | 1.8 | 1.7 | 0.3 | C | 60° | II d |
| Fig. 53 - 1 | J-28-63 | 黒曜石A | 1.45 | 2.5 | 1.6 | 0.4 | 完 | | II d |
| 2 | J-28-1228 | ◆ B | 1.5 | 2.1 | 1.6 | 0.5 | B | | II d |
| 3 | M-30-III | ◆ C | 1.7 | 2.2 | 1.9 | 0.4 | A | | II d |
| 4 | H-12-187 | ◆ B | 0.9 | 2.1 | 1.5 | 0.3 | 完 | 55° | II d |
| 5 | J-10-134 | ◆ E | 1.45 | 2.8 | 1.5 | 0.4 | C | | II d |
| 6 | J-12-279 | 安山岩 | 1.5 | 2.5 | 1.6 | 0.7 | C | | II d |
| 7 | CDE-18 | 黒曜石A | 2.1 | 2.9 | 2 | 0.4 | 完 | 70° | II d |
| 8 | F-16-513 | ◆ D | 2 | 2 | 2 | 0.5 | B | | II d |
| 9 | J-5-II | 安山岩 | 1.55 | 2.5 | 2 | 0.4 | 完 | 80° | II d |
| 10 | N-9-68 | 黒曜石D | 0.5 | 2.5 | 1.4 | 0.2 | C | 45° | II d |
| 11 | J-11-263 | ◆ D | 1.1 | 2 | 2.1 | 0.4 | A | | II d |
| 12 | O-21-374 | ◆ D | 1.3 | 2.1 | 1.9 | 0.4 | C | 80° | II d |
| 13 | K-12-120 | ◆ E | 1.75 | 1.8 | 1.8 | 0.6 | A | | II d |
| 14 | J-27-159 | ◆ D | 1.05 | 2 | 1.7 | 0.4 | 完 | | II d |
| 15 | J-11-125 | ◆ D | 1 | 2.1 | 1.8 | 0.4 | A | | II d |
| 16 | G-145-37 | ◆ D | 0.75 | 2.3 | 1.7 | 0.3 | C | 50° | II d |
| 17 | J-28-188 | ◆ C | 2.25 | 2.2 | 2 | 0.5 | 完 | | II d |
| 18 | H-?-81 | ◆ D | 1.1 | 2.2 | 1.8 | 0.3 | 完 | | II d |
| 19 | J-12-77 | ◆ B | 1.15 | 1.6 | 2.1 | 0.5 | A | | II d |
| 20 | G-23-3 | ◆ A | 0.8 | 1.9 | 1.5 | 0.3 | C | | II d |

Tab.11 石器計測表①

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量 (g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|--------------|-------------|------|-----------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 53 - 21 | E-17-I | 黒曜石D | 1.3 | 2.4 | 1.7 | 0.4 | C | | II d |
| 22 | J-13-11 | | 1.05 | 1.9 | 1.9 | 0.4 | C | 80° | II d |
| Fig. 54 - 1 | J-28-182 | ♦ F | 0.8 | 2 | 1.9 | 0.4 | A | | II d |
| 2 | L-10-42 | ♦ B | 1.5 | 1.7 | 1.6 | 0.6 | A | | II d |
| 3 | I-21-338 | ♦ D | 0.6 | 1.5 | 1.6 | 0.4 | A | | II e |
| 4 | EF-21-N30 | ♦ A | 1.5 | 1.9 | 1.6 | 0.6 | C | 50° | II d |
| 5 | 6-23-II | ♦ E | 0.85 | 1.3 | 1.9 | 0.4 | A | | II d |
| 6 | J-265 | ♦ B | 1.05 | 1.7 | 1.8 | 0.4 | D | | II d |
| 7 | I-21-315 | ♦ C | 1.8 | 2 | 2.3 | 0.5 | C | | II d |
| 8 | G-22-II | ♦ A | 1 | 2 | 1.6 | 0.4 | D | | II d |
| 9 | EF-21-2 | ♦ C | 1.85 | 2.1 | 1.8 | 0.5 | A | | II d |
| 10 | E-17-V | ♦ C | 1.5 | 2 | 1.8 | 0.4 | A | | II d |
| 11 | I-5-I | ♦ C | 0.8 | 2 | 1.7 | 0.3 | D | | II d |
| 12 | E-22-III | ♦ B | 0.65 | 1.3 | 1.8 | 0.3 | A | | II d |
| 13 | C-23-I | ♦ C | 0.95 | 2 | 2.2 | 0.3 | B | | II d |
| 14 | T-12-231 | ♦ A | 0.95 | 1.6 | 2.2 | 0.3 | D | | II d |
| 15 | O-22-II-18 | ♦ D | 0.85 | 1.4 | 2.2 | 0.3 | A | | II d |
| 16 | C-P-17-II | ♦ A | 1.1 | 2.3 | 1.5 | 0.4 | 完 | | II d |
| 17 | 6-20-3 | ♦ D | 0.85 | 1.7 | 2.1 | 0.4 | D | | II c |
| 18 | I-12-15 | ♦ C | 0.7 | 1.3 | 2 | 0.4 | A | | II e |
| 19 | I | ♦ B | 0.45 | 1 | 1.7 | 0.4 | A | | II d |
| 20 | J-12-289 | ♦ F | 0.65 | 1.8 | 1.7 | 0.3 | D | | II d |
| 21 | I-13-406 | ♦ B | 1.15 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | D | | II d |
| 22 | I-23-64 | 安山岩 | 1.8 | 2.1 | 2.5 | 0.5 | A | | II d |
| 23 | L-10-103 | 黒曜石C | 1.45 | 2 | 2 | 0.4 | A | | II d |
| Fig. 55 - 1 | J-13-107 | ♦ C | 0.95 | 1.7 | 1.8 | 0.4 | A | | II d |
| 2 | I-10-108 | ♦ C | 0.8 | 1.5 | 1.9 | 0.4 | 完 | | II d |
| 3 | CDE-18 | ♦ C | 0.6 | 1.3 | 1.5 | 0.4 | 完 | 95° | II d |
| 4 | M-10-158 | ♦ C | 0.4 | 1.5 | 1.4 | 0.2 | 完 | 90° | II d |
| 5 | G-22-II | ♦ C | 1 | 1.7 | 2 | 0.4 | A | | II d |
| 6 | K-27-309 | ♦ A | 0.55 | 1.2 | 2 | 0.3 | A | | II d |
| 7 | G-2L-II | ♦ D | 1.25 | 1.5 | 2.4 | 0.4 | A | | II d |
| 8 | DE-16-S-399 | ♦ B | 0.95 | 2.3 | 1.9 | 0.3 | C | 80° | II d |
| 9 | J-27-83 | ♦ D | 0.55 | 1.7 | 1.4 | 0.3 | C | 60° | II d |
| 10 | B-17-II | ♦ A | 0.45 | 1.4 | 1.3 | 0.3 | D | | II d |
| 11 | I-13-45 | ♦ C | 0.45 | 1.6 | 1.6 | | D | | II d |
| 12 | H-8 | ♦ B | 1 | 1.8 | 1.6 | 0.4 | 完 | | II d |
| 13 | EF11-2 | ♦ C | 1.2 | 2.3 | 1.7 | 0.4 | C | | II d |

Tab. 12 石器計測表(2)

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量(g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|--------------|------|-------|---------|-----|-----|------|------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 55 -14 | I-3-1151 | 黒曜石E | 0.45 | 1.7 | 1.4 | 0.2 | A | 90° | II d |
| 15 | J-13-274 | * E | 1.3 | 2.5 | 1.5 | 0.5 | A | | II d |
| 16 | K-10-192 | * C | 0.25 | 1.3 | 1 | 0.3 | 完 | | II d |
| 17 | I-3-1510 | * G | 0.55 | 2.3 | 1.2 | 0.2 | 完 | 70° | II c |
| 18 | I-11-3 | * E | 0.45 | 1.6 | 1.2 | 0.3 | 完 | 70° | II d |
| 19 | I-3-139 | * F | 0.5 | 2 | 1.4 | 0.3 | 完 | 60° | II c |
| 20 | H-2-3-516 | * E | 0.7 | 2 | 1.5 | 0.3 | 完 | 60° | II d |
| 21 | F-10-11 | * C | 0.65 | 2 | 1.5 | 0.3 | 完 | 60° | II d |
| 22 | M-7 | * A | 0.75 | 2.3 | 1.1 | 0.3 | C | | II d |
| Fig. 56 -1 | G-23-III | * C | 1.9 | 2.4 | 2.2 | 0.6 | 完 | | II c |
| 2 | J-11 | * B | 0.6 | 2.1 | 1.4 | 0.4 | C | 45° | II c |
| 3 | I-28-243 | * A | 0.65 | 2 | 1.6 | 0.3 | B | 55° | II b |
| 4 | K-21-2 | * C | 1.3 | 2.3 | 2 | 0.4 | C | | II b |
| 5 | H-12-182 | * B | 1.1 | 2.5 | 2.3 | 0.4 | 完 | 65° | II b |
| 6 | I-E-18-2 | 安山岩 | 4.2 | 3.4 | 2.3 | 0.7 | C | | II d |
| 7 | L-8-17 | 黒曜石C | 1.1 | 1.7 | 2 | 0.4 | D | | II d |
| 8 | O-22石塙内 | * D | 0.45 | 1.6 | 1.5 | 0.3 | C | 70° | II d |
| 9 | I-21-328 | * B | 0.9 | 2.3 | 1.8 | 0.4 | C | 65° | II d |
| 10 | G-11-65 | * C | 0.45 | 1.2 | 1.6 | 0.4 | A | | II d |
| Fig. 57 -1 | I-13 | * D | 1.7 | 2.7 | 1.2 | 0.5 | | | III |
| 2 | H-10 | * A | 1.25 | 2.6 | 1.1 | 0.5 | | | III |
| 3 | G-12 | * B | 2 | 3.3 | 1.1 | 0.6 | | | III |
| 4 | J-12 | * A | 0.8 | 2.1 | 1.1 | 0.4 | | | III |
| 5 | J-11 | * C | 1.3 | 2.9 | 1.1 | 0.5 | E | | III |
| 6 | ? | * D | 1.3 | 1.8 | 2.1 | 0.5 | 完 | | III |
| 7 | I-13-127 III | * D | 0.8 | 1.8 | 1.7 | 0.4 | 完 | 40° | III |
| 8 | FG-22-II | * D | 2.1 | 2.7 | 2.2 | 0.5 | C | 110° | III |
| 9 | E-22-II | * C | 2.9 | 2.7 | 2.2 | 0.6 | | | III |
| 10 | G-23 | * A | 2.2 | 2.5 | 2.1 | 0.5 | B | | III |
| 11 | N-10-C | * A | 2.25 | 2.6 | 2 | 0.7 | 完 | 115° | III |
| 12 | J-9-178 | * D | 3.2 | 3.1 | 2.3 | 0.6 | 完 | 60° | III |
| 13 | H-12-99 | * A | 3.2 | 2.6 | 2.2 | 0.6 | 完 | 85° | III |
| Fig. 58 -1 | H-14-H | * A | 1.2 | 2.5 | 1.8 | 0.4 | C | 35° | IV |
| 2 | J-11-31 | * C | 0.9 | 2.1 | 1.4 | 0.5 | C | 37° | IV |
| 3 | K-1 | * A | 0.4 | 2.2 | 0.9 | 0.4 | C | 58° | IV |
| 4 | EF-21 | 安山岩 | 0.7 | 2.5 | 1.5 | 0.3 | A | | IV |
| 5 | J-12-H | 黒曜石B | 0.55 | 2.7 | 1.3 | 0.3 | C | 43° | IV |
| 6 | J-26-295 | * A | 0.85 | 2.0 | 1.7 | 0.3 | D | | IV |

Tab. 13 石器計測表①

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量(g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|-------------|------------|------|-------|---------|-----|-----|------|------|-----|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 58 - 7 | E-22-Ⅲ | 黒曜石B | 1.65 | 2.8 | 2.5 | 0.6 | A | | IV |
| 8 | K-51 | * A | 2.3 | 2.7 | 2.1 | 0.5 | C | 38° | IV |
| 9 | G-17-534 | * C | 1.05 | 2.3 | 1.3 | 0.4 | C | 42° | IV |
| 10 | CDE-15-V-2 | * A | 2.25 | 3.0 | 2.1 | 0.5 | 完 | 40° | IV |
| 11 | G-23-3 | * A | 1.35 | 2.0 | 1.7 | 0.5 | A | | IV |
| 12 | FF-18-Ⅲ | * D | 0.8 | 1.9 | 1.7 | 0.3 | D | | IV |
| 13 | I-13 | * A | 3.1 | 2.8 | 1.9 | 0.7 | C | 45° | IV |
| 14 | L-10 | * E | 2.3 | 2.1 | 1.8 | 0.8 | 完 | 75° | IV |
| 15 | L-411 | 安山岩 | 2.25 | 2.6 | 1.9 | 0.5 | E | | IV |
| 16 | M-10 | 黒曜石A | 2.85 | 2.9 | 1.8 | 0.6 | C | | IV |
| 17 | ?-374 | * A | 1.95 | 2.3 | 1.9 | 0.6 | 完 | 55° | IV |
| 18 | J-11 | * E | 1.8 | 2 | 2 | 0.4 | A | | IV |
| 19 | R-13 | * A | 0.75 | 2.2 | 1.6 | 0.4 | A | | IV |
| 20 | DE-16 | * A | 0.8 | 1.9 | 1.3 | 0.4 | 完 | 70° | IV |
| 21 | L.K-19 | * B | 0.65 | 1.5 | 1.7 | 0.4 | D | | IV |
| Fig. 59 - 1 | K-3-16 | 安山岩 | 3.85 | 4.2 | 2.4 | 0.4 | D | | VII |
| 2 | G-18-H | * | 3.5 | 3.8 | 2.5 | 0.8 | 完 | 55° | VII |
| 3 | N-10-15 | 黒曜石D | 2.1 | 3.7 | 1.9 | 0.5 | C | 65° | VII |
| 4 | CD-17-Ⅲ | 安山岩 | 3.05 | 3.2 | 2.5 | 0.7 | D | | VII |
| 5 | M-10-H | * | 1.45 | 3 | 2.3 | 0.5 | C | 45° | VII |
| 6 | G-13-382 | * | 6.6 | 4.2 | 3 | 0.9 | C | 65° | VII |
| 7 | D-12-283 | 黒曜石D | 3.9 | 3.6 | 2.5 | 0.7 | D | | VII |
| 8 | J-13-8 | 安山岩 | 2.8 | 3.3 | 2.2 | 0.7 | C | 65° | VII |
| Fig. 60 - 1 | J-2-3-775 | 黒曜石G | 0.35 | 1.8 | 1.2 | 0.2 | 完 | 40° | V |
| 2 | E-11-82 | * E | 0.2 | 1.8 | 1.2 | 0.2 | C | 50° | V |
| 3 | J-2-3 | * E | 0.15 | 1.5 | 1 | 0.2 | 完 | 45° | V |
| 4 | DE-16-558 | * E | 0.1 | 1 | 1.1 | 0.2 | 完 | 60° | V |
| 5 | M-9-229 | * E | 0.35 | 1.7 | 1.3 | 0.3 | 完 | 70° | V |
| 6 | H-4-104 | * A | 0.2 | 1.1 | 0.8 | 0.3 | 完 | 55° | V |
| 7 | I-10-92 | * A | 0.2 | 1.8 | 0.8 | 0.2 | C | 60° | V |
| 8 | J-23-1495 | * A | 0.2 | 1.4 | 1 | 0.2 | 完 | 55° | V |
| 9 | L-11-396 | * A | 0.3 | 1.4 | 0.9 | 0.2 | 完 | 80° | V |
| 10 | K-11-797 | * E | 0.4 | 1.6 | 1.3 | 0.3 | 完 | 70° | V |
| 11 | F-115-23 | * E | 0.3 | 1.7 | 1.2 | 0.2 | A | | V |
| 12 | J-23-177 | * E | 0.45 | 1.6 | 1.2 | 0.3 | 完 | 70° | V |
| 13 | K-10-193 | * A | 0.25 | 1.4 | 1.1 | 0.2 | C | 60° | V |
| 14 | K-11-150 | * F | 0.25 | 1.7 | 1.2 | 0.3 | C | 70° | V |
| 15 | K-11-9 | * E | 0.3 | 1.8 | 1.1 | 0.2 | C | 60° | V |

Tab. 14 石器計測表(2)

| 図番号 | 出土区 | 石質 | 重量(g) | 大きさ(cm) | | | 残存部位 | 先端角度 | 分類 |
|--------------|-----------|------|-------|---------|-----|-----|------|------|----|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| Fig. 61 - 16 | I 6-298 | 黒曜石A | 0.5 | 1.9 | 1.5 | 0.3 | A | | V |
| 17 | CDE-18-21 | 〃 D | 0.55 | 1.7 | 1.8 | 0.4 | 完 | | V |
| 18 | J23-196 | 〃 E | 0.4 | 1.3 | 1.4 | 0.3 | E | | V |
| 19 | K27-III | 安山岩 | 0.5 | 1.9 | 1.6 | 0.2 | 完 | 55° | V |
| 20 | I-2-113 | 黒曜石E | 0.55 | 2 | 1.5 | 0.2 | 完 | 55° | V |
| 21 | L-11-447 | 〃 G | 0.7 | 2.5 | 1.3 | 0.3 | C | 50° | V |
| 22 | J28-25 | 〃 E | 0.75 | 2.4 | 1.4 | 0.4 | C | 60° | V |
| 23 | H10-3 | 〃 A | 0.9 | 1.9 | 2 | 0.5 | B | | V |
| 24 | CD22-2 | 〃 B | 0.9 | 2 | 1.7 | 0.4 | B | | V |
| 25 | J27-443 | 〃 A | 1.8 | 2.3 | 1.6 | 0.6 | B | | V |
| 26 | CD-17-II | 〃 A | 1 | 1.8 | 1.7 | 0.3 | E | | V |
| 27 | H12-89 | 〃 D | 0.4 | 2.2 | 1.2 | 0.2 | C | 60° | V |

Fig.61～Fig.64は表様・表土出土のスクレイパー資料である。

Fig.61-1～3はラウンドスクレイパーと呼ばれる資料である。全周に急斜度調整を行って形狀を整える。4～9は不定形の剣片に全周に調整を行って刃部を作り出している。11は木の葉形の形狀を持つスクレイパーである。両面調整で形狀を整える。

Fig.62もスクレイパーである。1は片側縁部に両面から二次調整を行う。4は小型の縦長剣片を利用し、表面に急斜度削離を行う。14は長軸の一端を欠損するが、ほぼ長方形をなす資料

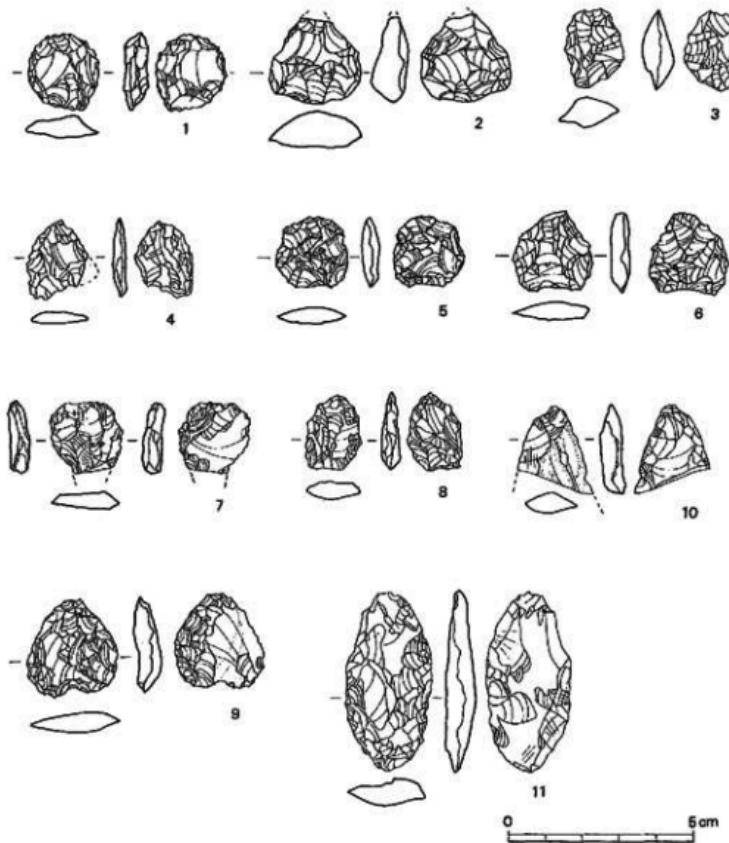


Fig.61 スクレイパー実測図

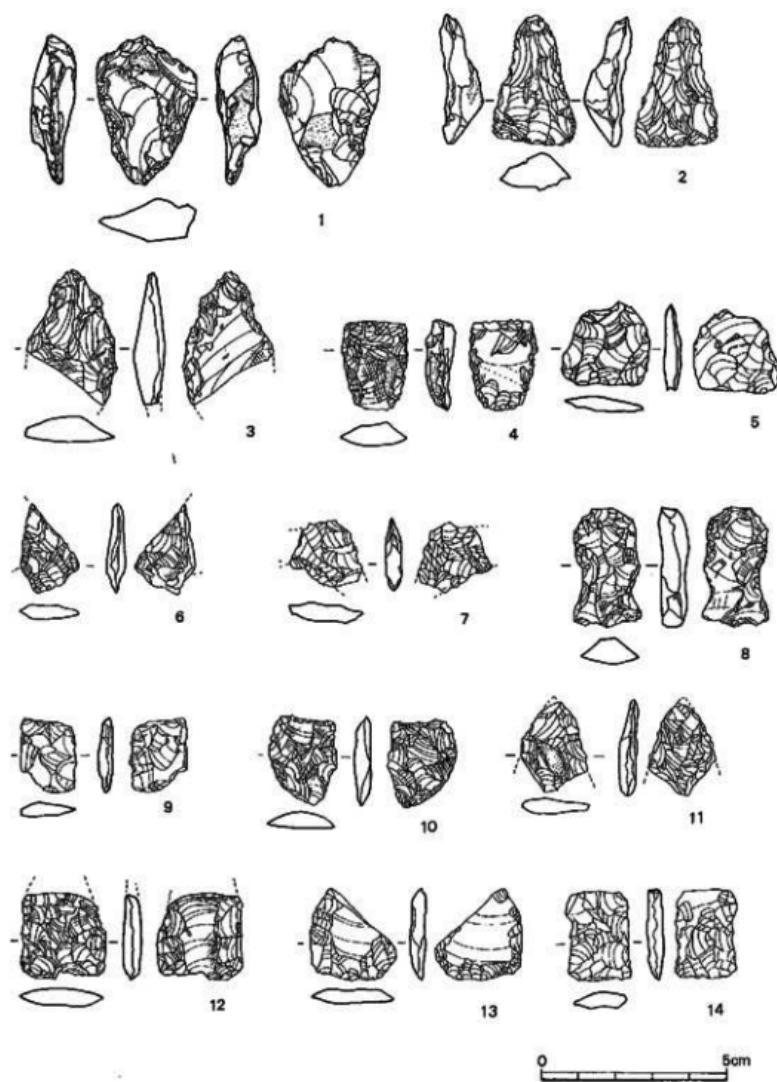


Fig. 62 スクレイパー・サイドブレイド実測図



Fig. 63 不定期剥片・石核・形器実測図

である。全面にわたって両面剥離を行い形状を整える。サイドブレイドであろう。

Fig. 63-1～7は使用痕のある不規則剥片である。それぞれ鋭利な側縁の一部に使用痕が見られる。8は縱長不整剥片石核である。正面と右側面に剥離面が見られる。漆黒色の黒曜石製である。9はグレイバーである。上端に自然面を持つ縱長剥片を利用し、左側面に刃部をもつ。縞模様のある黒曜石製である。

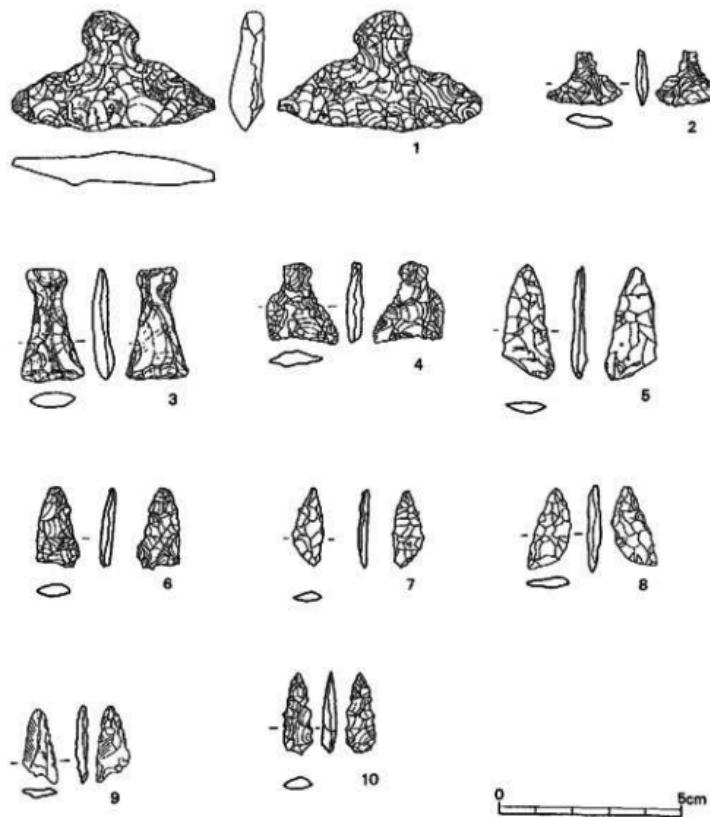


Fig. 64 石匙実測図

Fig. 64-1～4は石匙である。1～3は縱形、4は横型となる。4は安山岩で、他は良質の黒曜石である。1は透明な黒曜石を用い、丁寧な両面削離で形状を整えるが、つまり頭部に一部自然面が残る。2は小型の石匙である。異形石鎌に似るが、類似資料が本県北松浦郡山平田町つぐめの鼻遺跡から出土しているため、石匙として扱っておく。5以下は先端部を尖らせ、側縁にも両面調整を行って刃部を作る資料である。毀損した石鎌の一部に二次調整を施したものかと思われる。何れも黒曜石である。

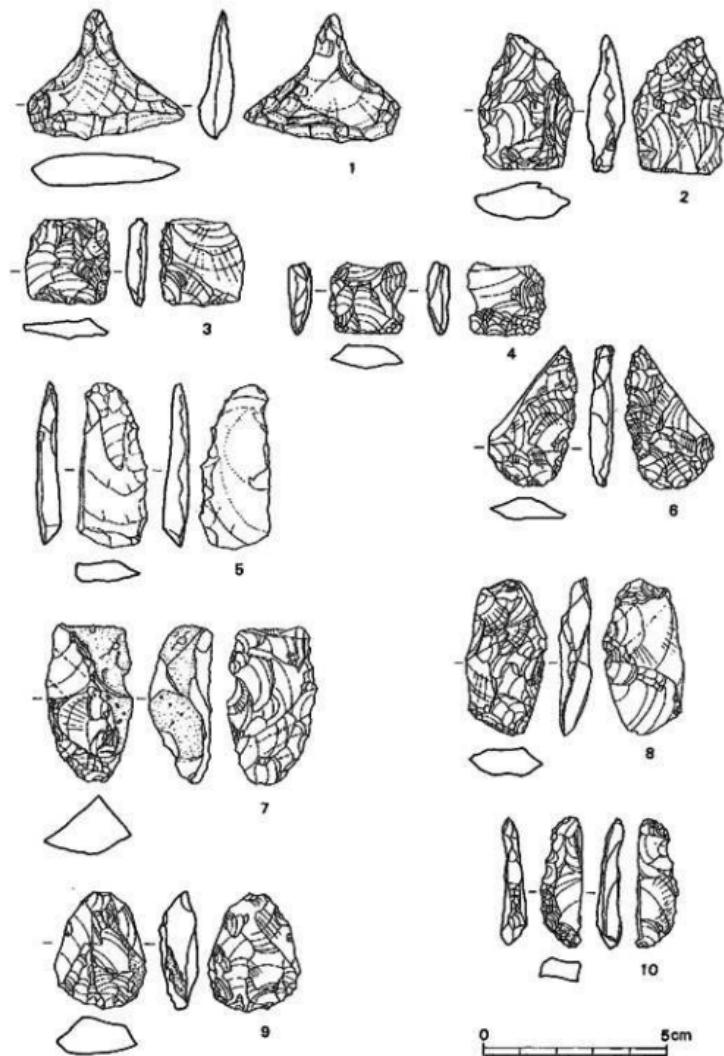


Fig. 65 石錐・サイドブレード・スクレイバー実測図

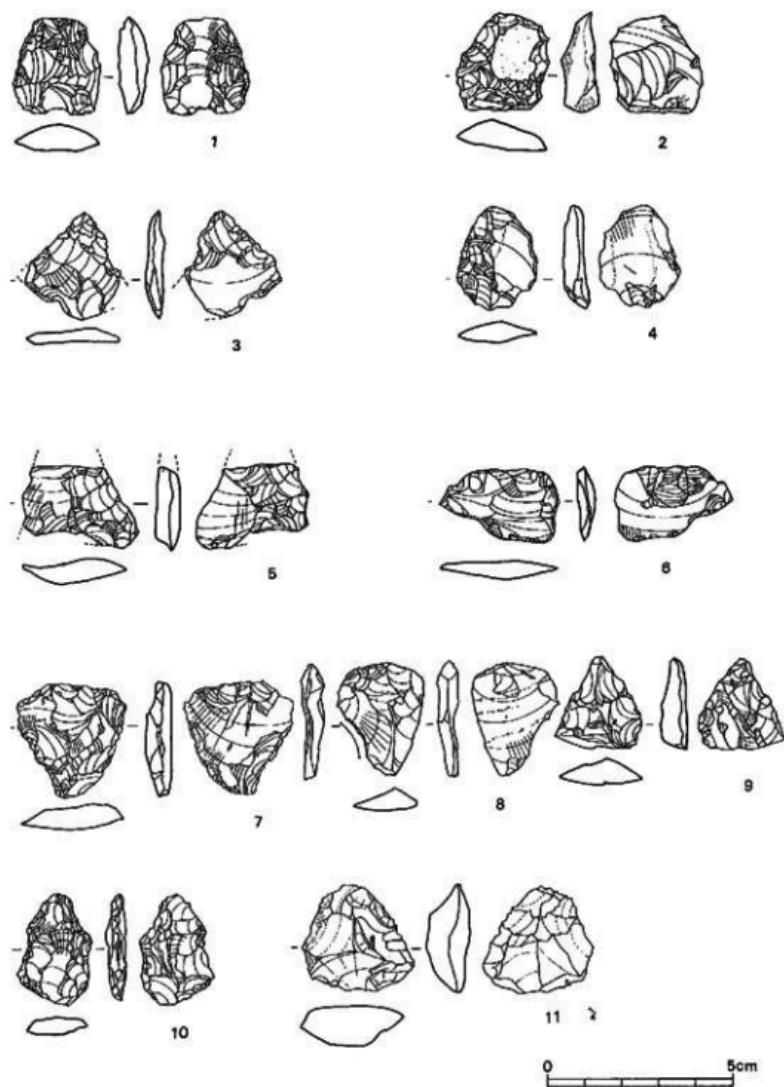


Fig. 66 スクレイバー実測図①

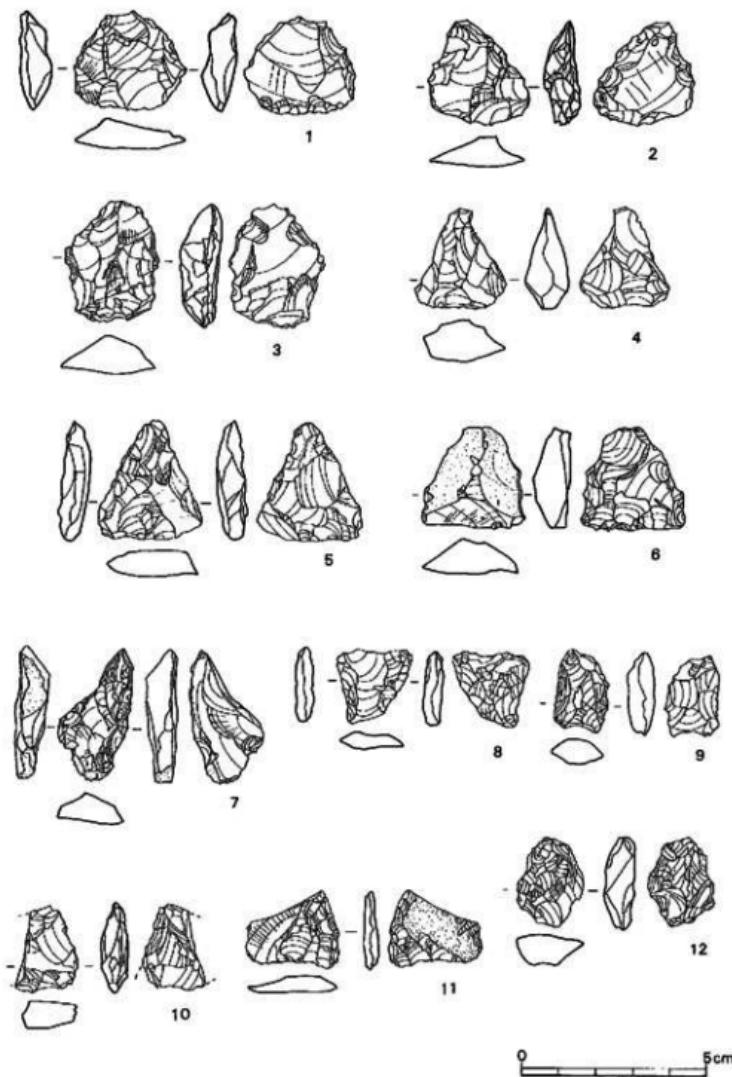


Fig. 67 スクレイパー実測図 ②

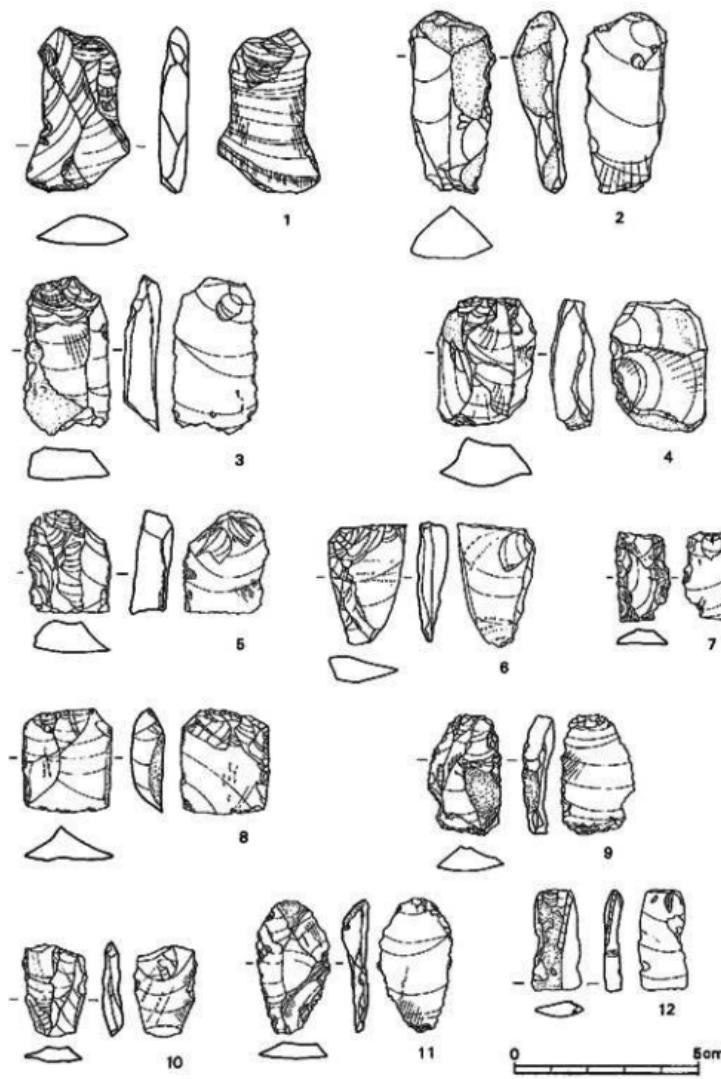


Fig. 68 不定期削片実測図(1)

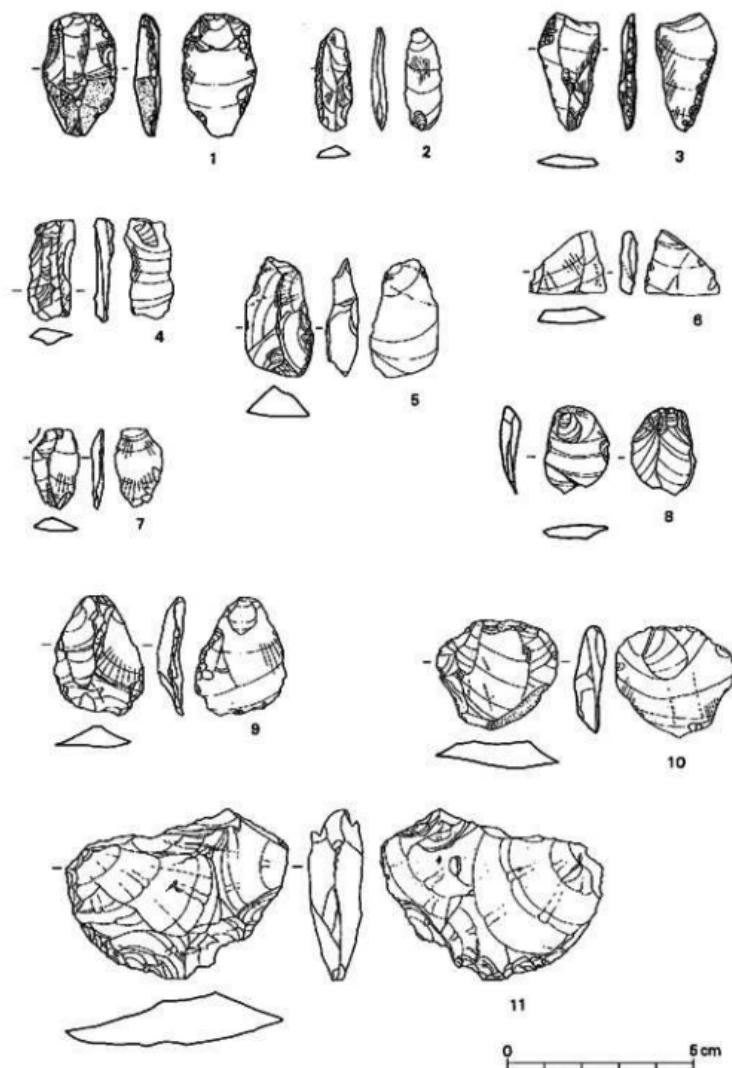


Fig. 69 不定形剝片実測図 ②

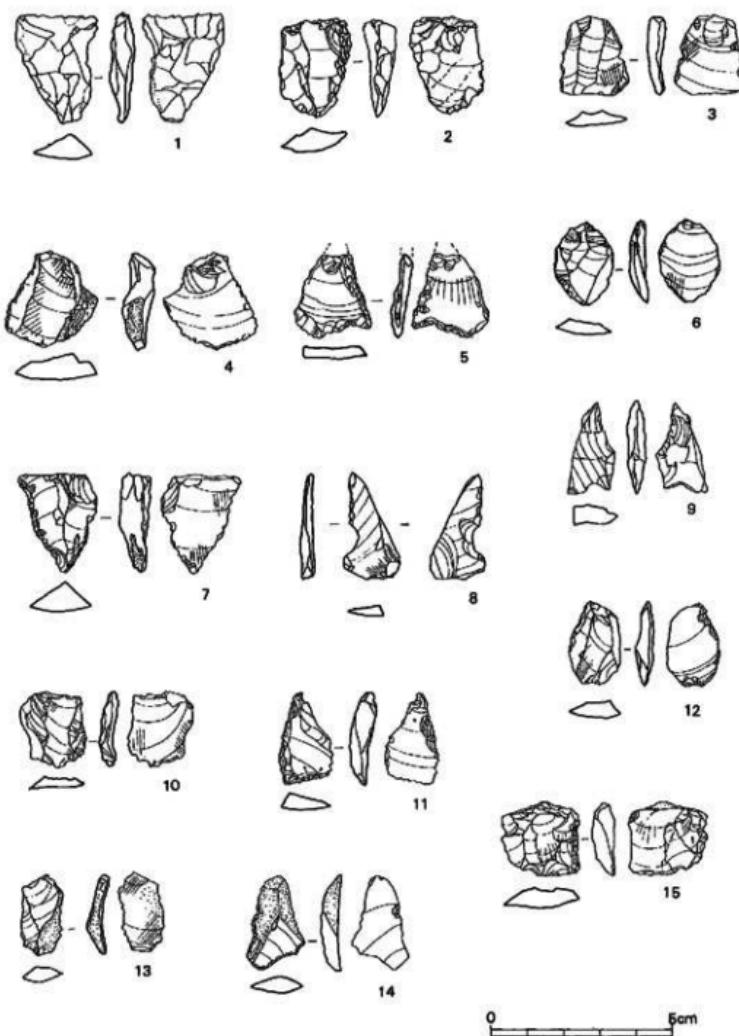


Fig. 70 不定形剣片実測図 ③

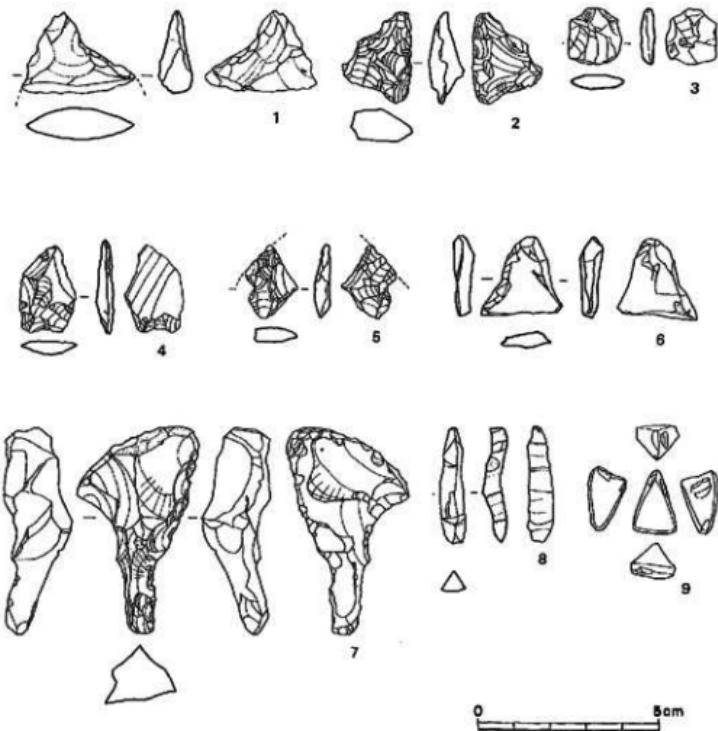


Fig. 71 不定形剝片実測図④

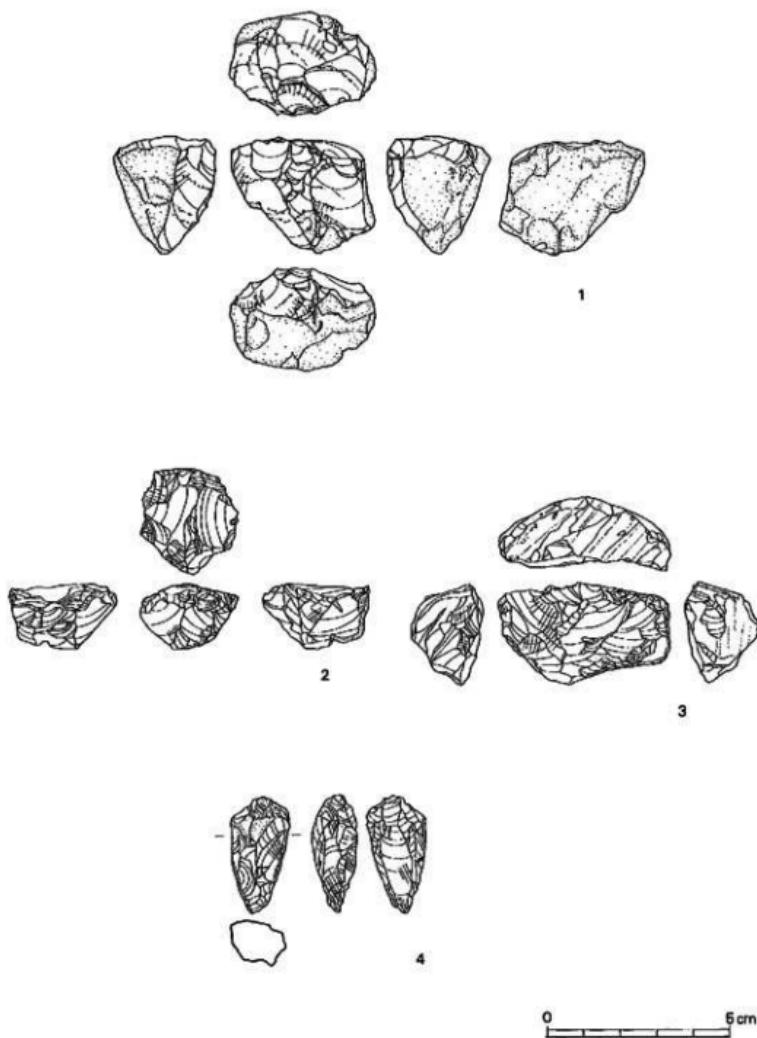


Fig. 72 石核実測図

Fig.65-1, 2は石錐である。1は使用部位を2箇所に持つ。安山岩製。3~10はスクリイバーであろう。3は上面を欠損するが、全周に両面調整を行い、方形に形状を整える。サイドブレードか。6は木の葉形の扁平なスクリイバーで、丁寧な両面調整を行う。7, 9は分厚い素材に両面から急斜角調整を行う。

Fig.66は何れもスクリイバーである。2, 4, 8は片面、他は両面調整を行う。7, 10は形状が三角形になる。9は急斜角調整により先端部を尖らせている。欠損しているため旧状が不明であるが、石錐の可能性もある。

Fig.67もスクリイバーであろう。片面、あるいは両面から調整を行う。6は断面三角形の厚い素材の主要剥離面にのみ調整を行い、表面は自然面を残す。9, 10, 12は両面からの急斜角調整で形状を整える。

Fig.68は縦長剥片の側縁部に使用痕が見られる資料である。自然面を残したものが多く、特に刃部を整える調整は見られない。使用部位は片側側縁部だけ顕著である。黒曜石剥片を主に利用している。

Fig.69も側縁部に使用痕が見られる資料である。1~9は比較的縦長の剥片を使用する。殆んどの剥片は片側側縁を利用しているが、3は両側縁を使用している。3, 7, 8は透明感が強い良質の黒曜石である。11は安山岩の不定形剥片で、カーブした下面に使用痕が見られる。

Fig.70は不定形剥片の一部に使用痕が見られる資料である。形状調整の為の剥離は行われず、鋭いエッジ部分のみに齒こぼれが観察される。

Fig.71~9はヒスイ製の乘飾未製品であろう。変形三角錐ともさうべき形状で、四面とも丁寧な研磨を施す。一部に穿孔痕が見られる。

Fig.72-1~3は石核である。何れも縦長不整剥片を取った資料である。1は正面と上端以外は自然面を残す。2は半截した原石面打面に、上端からのみ打面転位を行なながら剥離を行っている。3は半截した小型の円錐のほぼ全周にわたって打面転位を行う。正面は円錐形、上面觀は龟甲形をなす。以上の資料は何れも漆黒色の良質の黒曜石を使用する。

4は楔型石器である。良質の黒曜石製で、両極剥離面が見られる。截断面を持つ。

註1 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」

長崎県文化財調査報告書 第54集 1981

註2 長崎県教育委員会 「つぐめの森遺跡」 長崎県埋蔵文化財調査集報IX

長崎県文化財調査報告書 第82集 1986

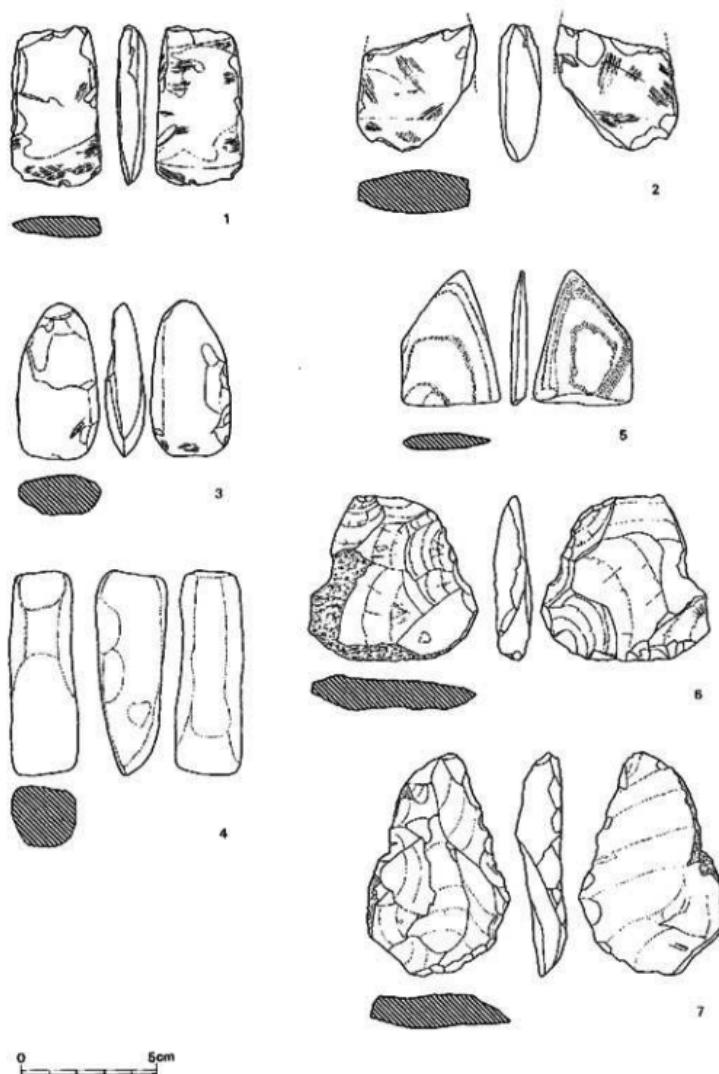


Fig. 73 石斧・スクレイパー実測図

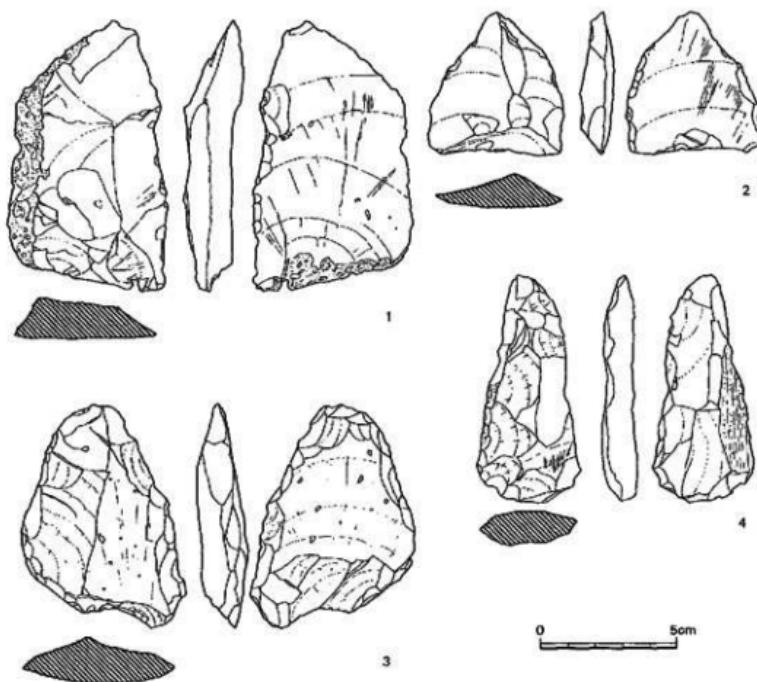


Fig. 74 スクレイバー実測図

Fig.73は表探及び表土中資料である。1～3は磨製石斧である。1は安山岩製の片刃石斧。上端部を欠損する。現存長は5.7cm、幅3.1cm、厚み1.1cm、重量30gである。2も安山岩製の石斧である。刃部と側面を欠損しているため凹状が不明であるが、両刃の小型磨製石斧になるものと思われる。3は蛇紋岩製の小型両刃石斧である。風化が進み、研磨痕が良く分からぬ。片面に一部剥落が見られる。長さ5.6cm、幅3cm、厚み1.4cmである。4は抉入石斧である。摩耗が進み、シャープさがない。長さ7.5cm、幅2.4cm、厚み2.6cm、重量74gである。5は黄土色硬質砂岩製の刃器である。下端部を毀損しているが、締目が特長の石材と、刃部の特長からすると磨製石剣の一部を転用したものと思われる。6, 7は安山岩製のスクレイバーである。以上の資料のうち、3, 4, 5は弥生時代に属し、他は縄文時代のものであろう。

Fig.74-1は使用痕のある大型の安山岩製の剥片である。側縁部に使用痕が見られる。2は両側縁を刃部として利用する。安山岩製である。3は安山岩製のスクレイバーである。両側縁に

微細な二次加工を施す。4も安山岩製のスクレイバーである。片側に自然面を若干残すが、両面に粗い剝離を施す。いずれも縄文時代の遺物と思われる。

Fig.75も表抜・表土中資料である。

1は結晶片岩製の磨製石斧である。完形品で長さ12.4cm、幅6cm、厚み2.6cm、重量は300gを計る。2は玄武岩製の扁平打製石斧である。ローリングを受け、剝離痕がはっきりしない。長さ12.6cm、幅4.7cm、厚み2cm、重量は150gである。3は結晶片岩製で棒状をなす。下端部に摩耗痕が見られる。磨石の一類であろう。4、5は砥石である。4は両面、5は片面を使用している。6は結晶片岩製の扁平礫である。全縁に丁寧に整形されている。長軸両端に僅かな抉りがある。石鍤であろう。重量は600gである。7~9はいずれも安山岩製の磨石である。7は比較的扁平で、8は形がややいびつである。9は半分欠損している。これらの資料はどの時期に属するかは不明である。

Fig.76は磨製石斧と砥石の資料である。何れも包含層からの発掘資料である。

1は硬質砂岩製で、全面に研磨を施している。両刃で刃部には使用痕と思われる細かい剝離が認められる。ほぼ完形で、長さ7cm、幅3.7cm、厚み1.4cm、重量は58gである。2は片面の一部を残して、大部分欠損している。残された面には研磨痕が顕著である。硬質砂岩製である。3は同じく大部分が欠損する磨製石斧である。安山岩製。4は黄土色の硬質砂岩製の砥石片である。扁平で、片側面と、岡下面を欠損する。使用面はなめらかで、微細な使用痕が観察される。

以上の資料は4は弥生時代、その他は縄文時代のものと思われる。

Fig.77は打製石斧である。

1は断面が三角形をなすや肉厚の打製石斧である。安山岩製で、長さ16cm、幅7.5cm、厚み2.8cm、重量400gである。完形であるが、ローリングを受けているため、剝離痕がシャープでない。J-28区出土。2は多孔質の玄武岩製の扁平打製石斧である。粗大な剝離によって、整形する。刃部の一端に使用時の欠損が見られる。長さ13.3cm、幅8.7cm、厚み1.5cm、重量は186gである。3は黄灰色の安山岩製の扁平打製石斧である。二次加工は側縁と刃部のみで自然面が多く残る。ローリングが顕著で丸みを帯びる。長さ12.4cm、幅7.6cm、厚み1.7cm、重量は184gである。4は玄武岩製の扁平打製石斧で、上半部を毀損している。ローリングを受けていたため剝離痕にシャープさがないが、全周に剝離調整を行い、刃部を丸く整形する。現存長は7cm、幅7.4cm、厚み1.4cm、重量は100gである。5は方形の扁平打製石斧である。玄武岩製で、風化が進んでいる。両端部が欠損しているため、旧状が不明であるが、現存長は8.6cm、幅6.1cm、厚み0.9cm、重量100gである。6は玄武岩製の扁平打製石斧である。全周に剝離を施して整形しているが、刃部を毀損している。

以上の資料の内、特に2~6の扁平打製石斧は各地の縄文晚期の遺跡でごく普通に見られるもので、東彼杵郡宮田A遺跡では、260点程が出土している。

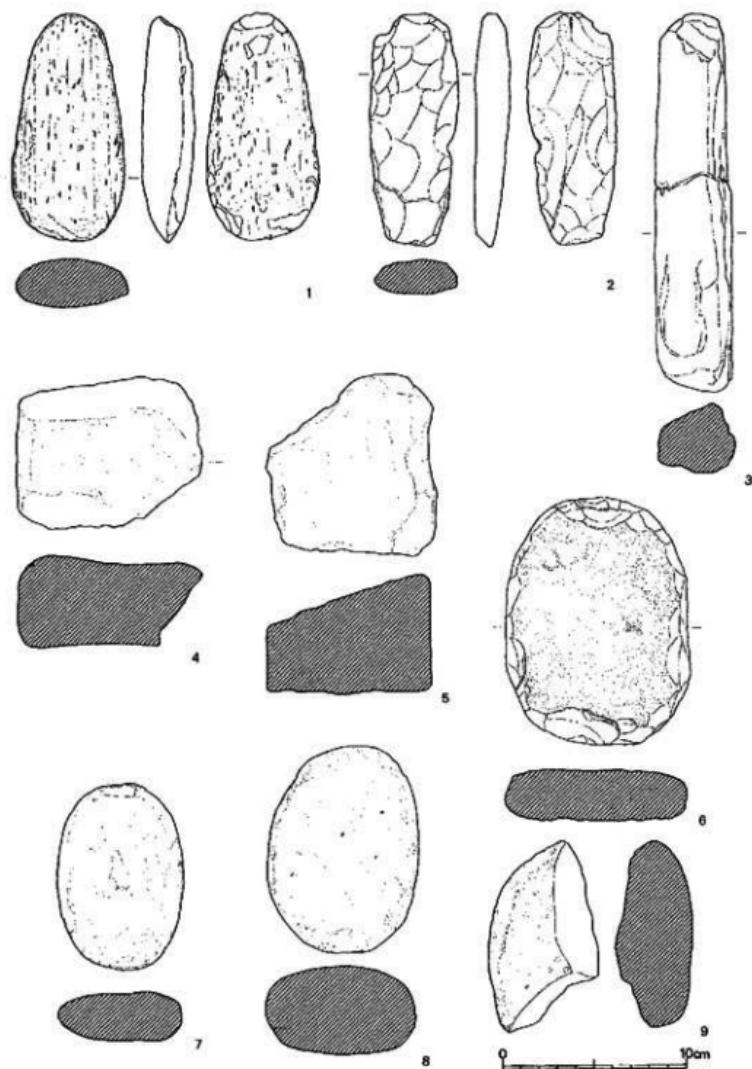


Fig. 75 石斧・砥石・敲石・石錐実測図

Fig.78は磨製と打製の石斧である。やや分厚い資料である。

1は完形の安山岩製の磨製石斧である。蛤刃で斜刃である。長さ11.9cm、幅6.9cm、厚み4.1cm、重量は476gを計る。E-17区集石土礫上部から出土している。2は硬質砂岩製の蛤刃磨製石斧である。上半部を欠損する。刃部に使用痕が見られる。幅6.4cm、厚み3.4cm、重量250gである。3は硬質砂岩製の磨製石斧である。全体に良く研磨を施し、特に刃部はエッジが鋭い。上半部を欠損する。幅7.8cm、厚みは最大部で2.4cmを計る。4は方形の片刃磨製石斧である。灰白色の頁岩製で、研ぎ出しによって縞目が見られる。対馬産の石材の可能性が強い。片面に使用時の剥落が認められる。長さ9.9cm、幅4.3cm、厚み4.3cm、重量は150gである。

5はやや厚めの打製石斧である。玄武岩製で、刃部を欠損する。粗大な剝離で整形する。ローリングのため、丸みを持つ。6は撥形を呈する分厚い打製石斧である。玄武岩製で剝離調整は全周におよんである。完形品で長さ16.9cm、最大幅8.5cm、厚み3.5cm、重量は582gである。ローリングのため、やはり剝離痕にシャープさがない。

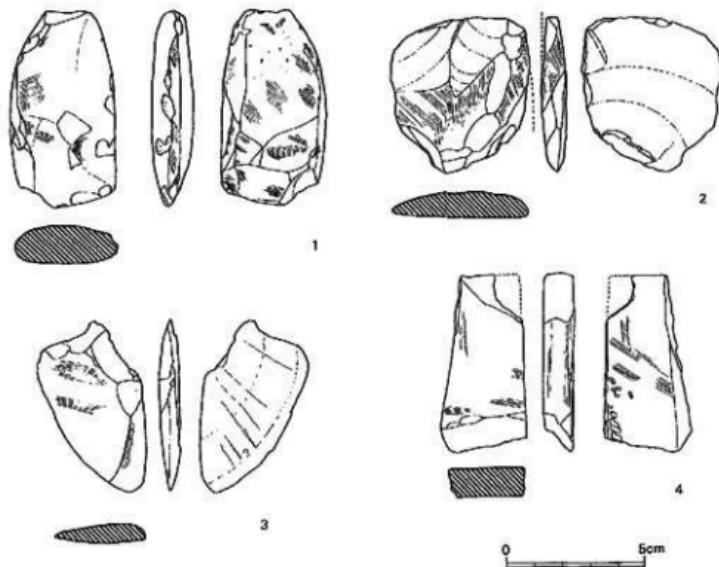


Fig. 78 磨製石斧実測図

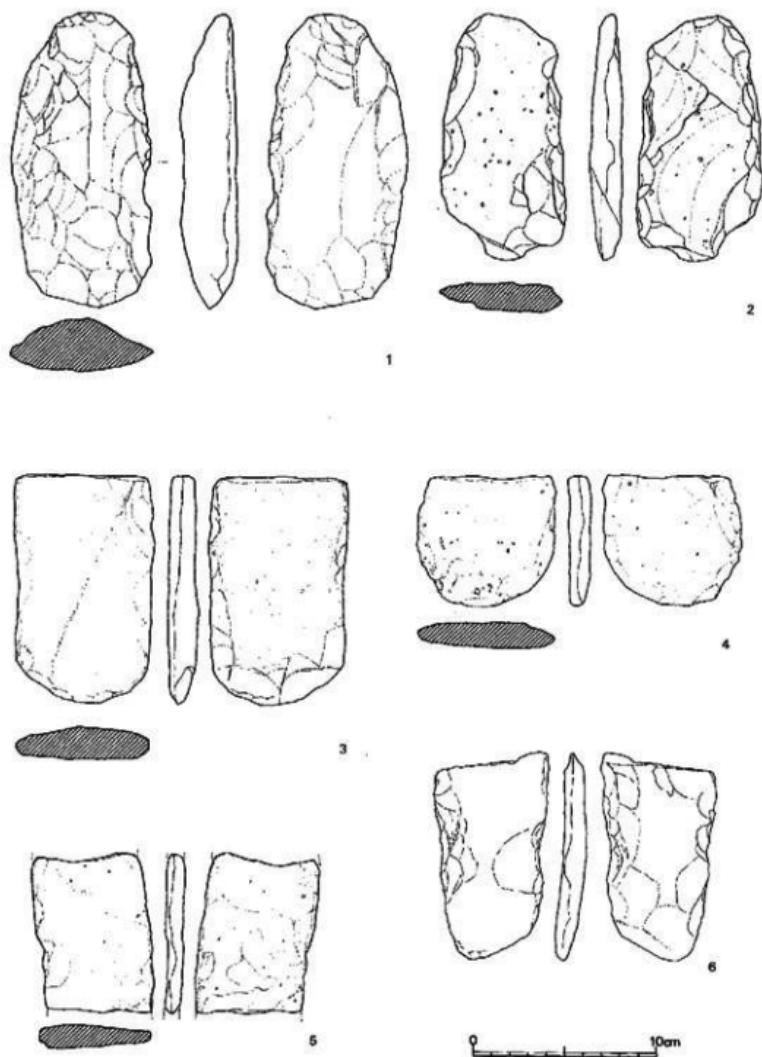


Fig. 77 畠平打製石斧実測図

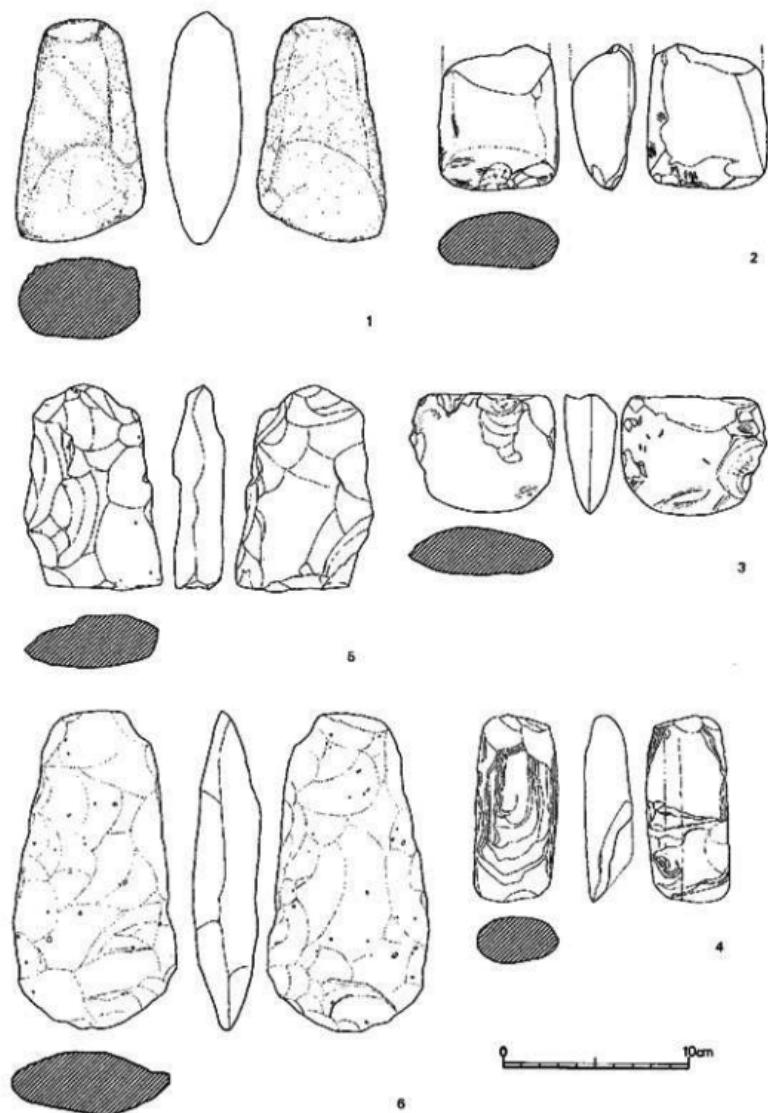


Fig. 78 石斧実測図

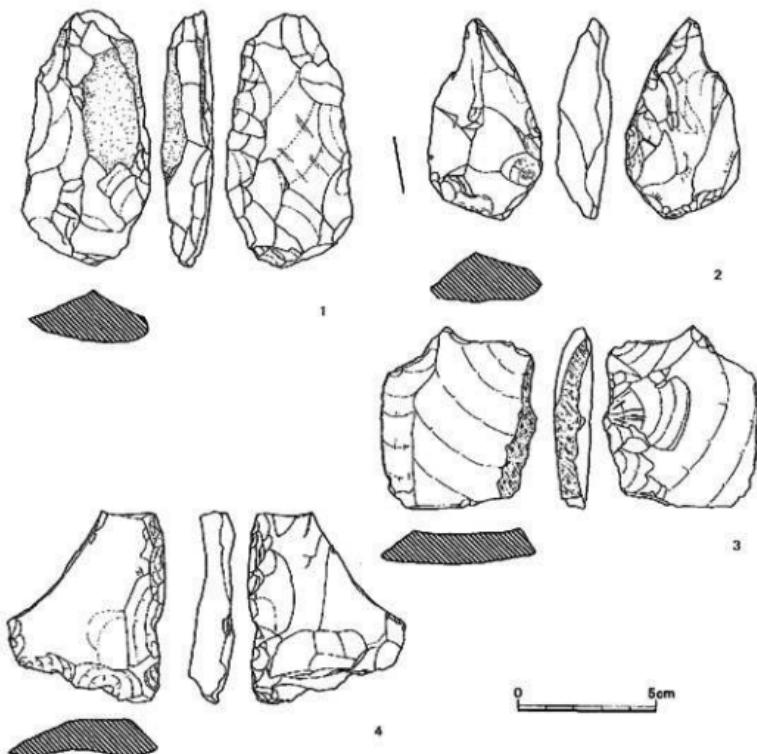


Fig. 79 スクレイバー実測図

Fig.79-1は安山岩製のスクレイバーである。一部に自然面を残すが、ほぼ全周にわたって剥離を施す。2は半裁した安山岩製のスクレイバーである。旧状は木の葉形をなすものか、長軸の一端が尖っている。側縁全周にわたって二次加工を施す。3は薄手の安山岩製剥片を利用したスクレイバーである。自然面が残る部分に二次加工を行い、その反対側に微細な使用痕が見られる。4も薄手の安山岩製の剥片を利用したスクレイバーである。一辺に欠損が見られるが、周縁には全面にわたり両面から二次加工を施す。

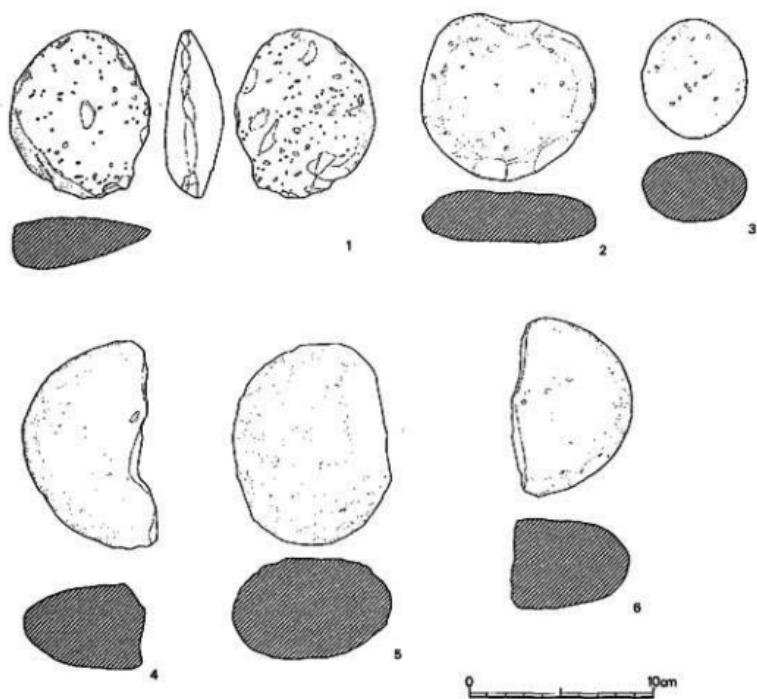


Fig. 80 磨石・破片実測図

Fig. 80-1は多孔質の安山岩製の石器で一部に自然面をのこす。両面からの研ぎ減りにより、断面は一見蛤刃状を呈する。刃部と思われる部分には敲打痕が見られ、磨石と敲石の機能を合わせ持った石器と思われる。2は扁平な軟質の安山岩製の敲石である。風化が進み、敲打痕が明瞭でない。径が9.4cm程の円盤で厚みは2.6cm、重量は250gを計る。3は小型の安山岩円盤を利用した敲石である。長軸両端部に敲打痕が見られる。4は扁平な円盤を利用している。材が軟質であることと、風化が進んでいるため、使用痕が不明である。敲石か。5は硬質砂岩製の敲石である。一部欠損する。現重量は800gである。6は安山岩製の敲石である。資料では、端部明瞭な敲打痕が見られる。

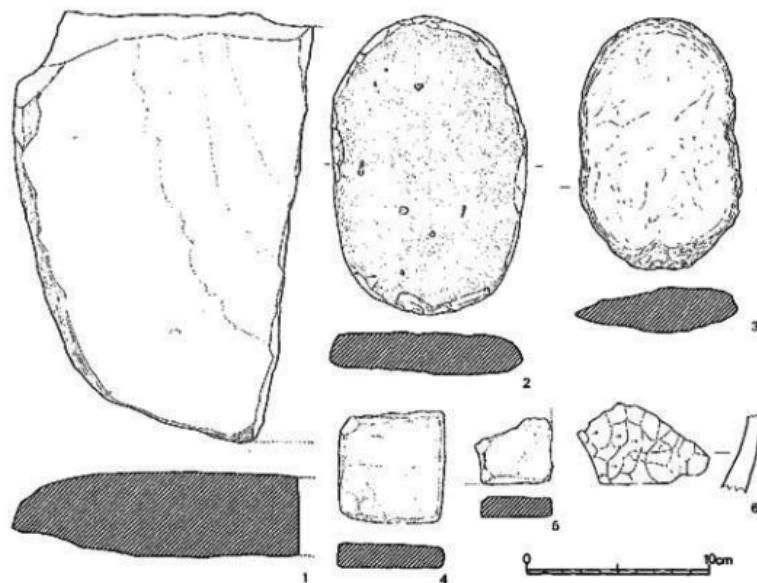


Fig. 81 石皿・石錐・砥石・石鍋実測図

Fig. 81-1は石皿であろう。結晶片岩製。1が程度に割れており、厚みは4.5 cm、残存長は24 cm、重量は3.1kgを計る。2、3は石錐である。共に結晶片岩製である。全縁丁寧に整形を行う。共に短軸部分に縛縛の為の抉りが見られる。重量は2は550g、3は370gである。4、5は砥石である。4は小型の方形砥石で長軸の一辺を欠損する。きめの細かい砂岩で、すべての面を使用している。現存長は幅6cm、厚みは1.5cmである。5は更に小型の砥石である。やはり、きめの細かい砂岩を利用している。全面を使用していたものと思われる。厚さは1cmである。6は石鍋片である。中世の資料で、他の石器とは時期的に全く異なるが、合わせて紹介しておく。滑石製で、横方向、反時計回りに削られて整形されたものと思われる。K-28区出土。

IV 総 括

調査面積は 4,100 m² に上ったが、全体的に堆積土が薄く、遺物包含層も一層しか確認できなかった。従って、出土遺物を層位で区別することが出来ない。

遺物は、先土器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世、そして近世の遺物等幅広く出土したが、主体は縄文時代と弥生時代である。

縄文時代の遺物では、石鏃が 731 点出土した。その全てが同一時期に属する訳では無いが、一遺跡からの出土量としてはやはり多い方に属する。石鏃が多い遺跡としては、東彼杵郡松山 A 遺跡で縄文早期を中心として 2,500 点を越す石鏃の出土が知られている。谷を含む標高 65 m 前後に位置する遺跡で、周辺遺跡への供給基地的な性格が考えられている。野田の久保遺跡の場合、時期的には早期の土器は少ないが、石槍が 14 点程出土しており、更に局部磨製石鏃や鉛型鏃なども多いことは、松山 A 遺跡と時期的にも共通する面がある。なお、縄文早期の土器が少ない理由としては、いずれの遺跡の場合も土器の胎土が砂質でもろく、ローリングでたやすく摩滅し易いことに加え、遺跡が傾斜地に立地していることがその最大要因であったと考えられる。

採集狩猟民である縄文人の場合、とりあえず半径 10 km 位がそのテリトリーと假定されているが、野田の久保遺跡と松山 A 遺跡は直線で約 9 km 離れた位置にあり、ある程度まとまった出土遺物をだす遺跡間隔としては妥当なのかも知れない。

野田の久保遺跡の出土遺物の中で、その数が 6 本と極めて少ないと異質なのが扁平打製石斧の問題である。言うまでもなく、九州各地の晩期の遺跡にそれが多量に伴う事実と、それが土掘り具であることはすでに認められている。

本県に於いても、島原半島の標高 200 m を越す高燥台地に点在する大遺跡、すなわち、疊石原遺跡、山ノ寺遺跡、原山遺跡などばかりでなく、標高 40~50 m 程に位置する朝日山遺跡、ケイマンゴウー遺跡、標高 10 m 程の海岸段丘上に位置する水の溜遺跡、標高 4~6 m で後背湿地を持つ古砂丘上に位置する宮の本遺跡、そして、同じ標高で沖積地に立地する黒丸遺跡、宮田 A 遺跡など縄文晩期に属する遺跡では、殆ど例外なく出土するなどかなり普遍性の高い石器であるといえる。特に、宮田 A 遺跡においては 259 本もの石斧が出土しており、その 80% は毀損しているなど極めて消耗度の高い石器であることを示している。近く報告書刊行予定の白井川遺跡でも同様であるらしい。この種の石器は弥生時代遺跡からは殆ど出土しないことから、その時期には使命を終えたものとして消え去ったものであろう。

野田の久保遺跡の出土土器は縄文晩期と弥生時代前期末の資料が大半であり、その間の弥生前期初めの頃の資料が消失している。これらの資料の中で、注意を要するのが突帯文土器の関係である。突帯文土器は縄文晩期後半のものと、弥生前期末の龜ノ甲タイプのものがあり、僅かながらその中間に埋めるタイプとして Fig. 23 の號洞部がある。土器の中には縄文土器と弥

生土器の区別が困難な資料もあり、あるいは縄文晩期末として掲載した資料の中には、縄文土器の特長を持ちながらも、先進地域である北部九州では既に弥生時代に属している可能性が考えられる。つまり地域的な後進性を感じられるのであり、土器の連続から考えると、晩期尖端文から龜ノ甲(タガメノカニ)タイプへはそのままつながる可能性も考えられよう。

多量の扁平打製石斧が出土した宮出八遺跡は晩期後半墳の遺跡であり、その一時期あとの遺跡である野田の久保遺跡に既に石斧が激減する事実は、この時期に実質的な時間的変換点があるのかも知れない。

晩期遺跡に通有な扁平打製石斧が本遺跡で少なかった事実から、思いつくままに可能性をのべたが、もとより深く検討したわけではない。今後の検討課題である。

註1 長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ」

長崎県文化財調査報告書 第93集 1989

2 赤澤 威 「採集狩猟民の考古学」 海鳴社 1983

3 古田正隆 「礫石原遺跡」 百人委員会埋蔵文化財報告 第7集 1977

4 古川正隆 「山の寺梶木遺跡」 百人委員会埋蔵文化財報告 第1集 1973

5 註4 文獻

6 長崎県小浜町教育委員会 「朝日山遺跡」 小浜町文化財調査報告書 第1集 1981

7 長崎県教育委員会 「ケイマンゴー遺跡」 長崎県文化財調査報告書 第52集 1980

8 福江市教育委員会 「水の塚遺跡」 福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集 1976

9 佐世保市教育委員会 「宮の本遺跡」 佐世保市埋蔵文化財調査報告書 1970

10 黒丸遺跡調査会 「黒丸遺跡」 1980

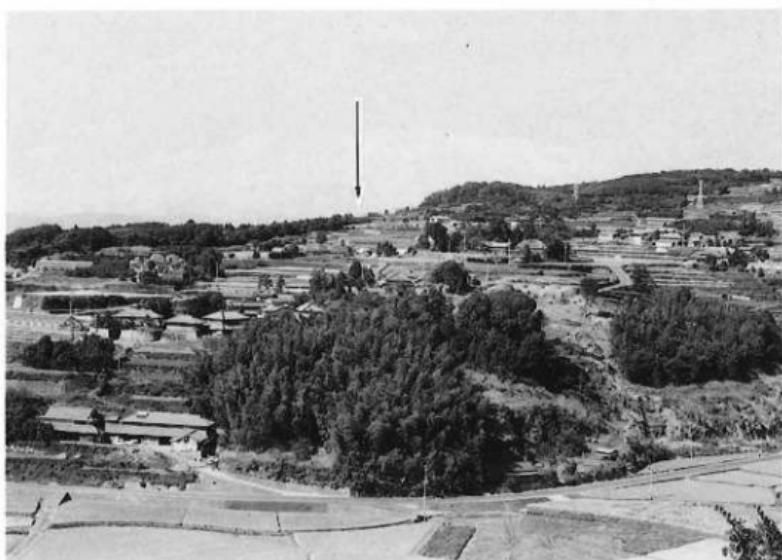
11 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ」

長崎県文化財調査報告書 第93集 1989

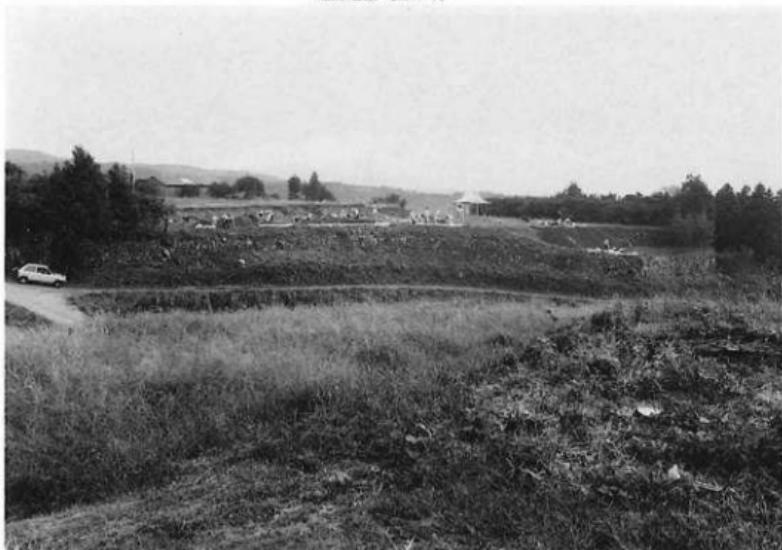
12 安楽 勉氏教示

P L A T E S

(野田の久保遺跡)



遺跡遠景（南より）



遺跡近景（北より）



調査区近景



調査区近景



K-2 西壁



J-4 西壁

野田の久保遺跡 PL. 4



N-7 東壁



J-10 東壁



E-17 北壁



G-23 西壁



K-5 西壁



H-6 南壁



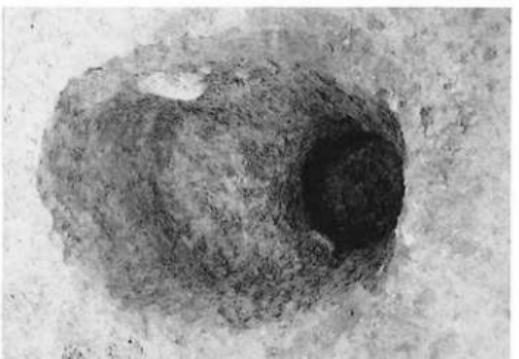
焼夷弾処理状況



調査風景



M-10区 不定形土壙





K-3区 埋甕状遺構





E-17区 集石遺構



N-25区 堀立柱建物跡



土器出土状況



土器出土状況

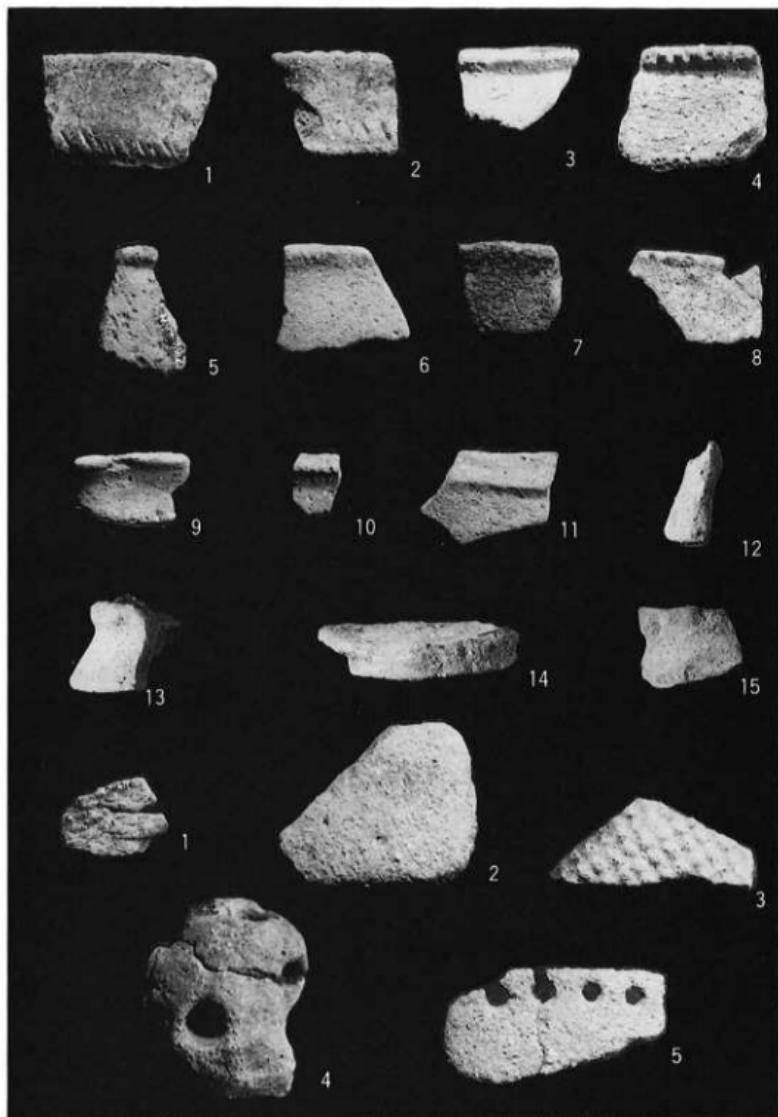
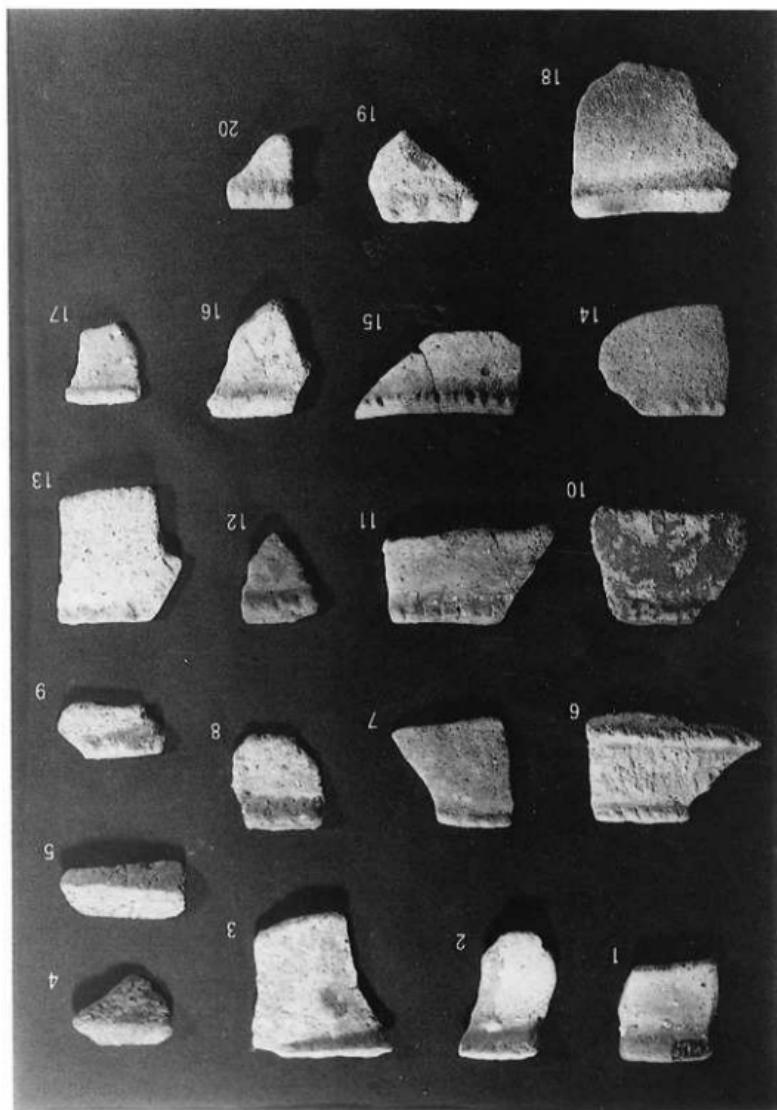


Fig. 12-13土器

Fig. 14 土器



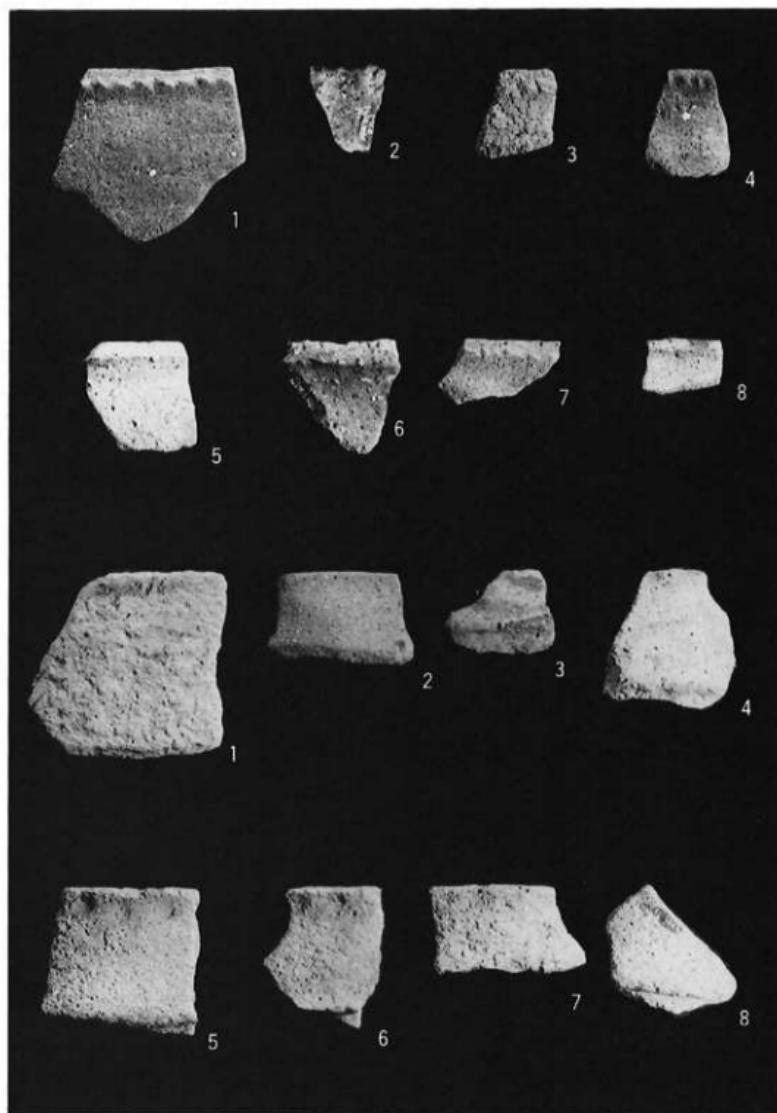


Fig. 15-16土器

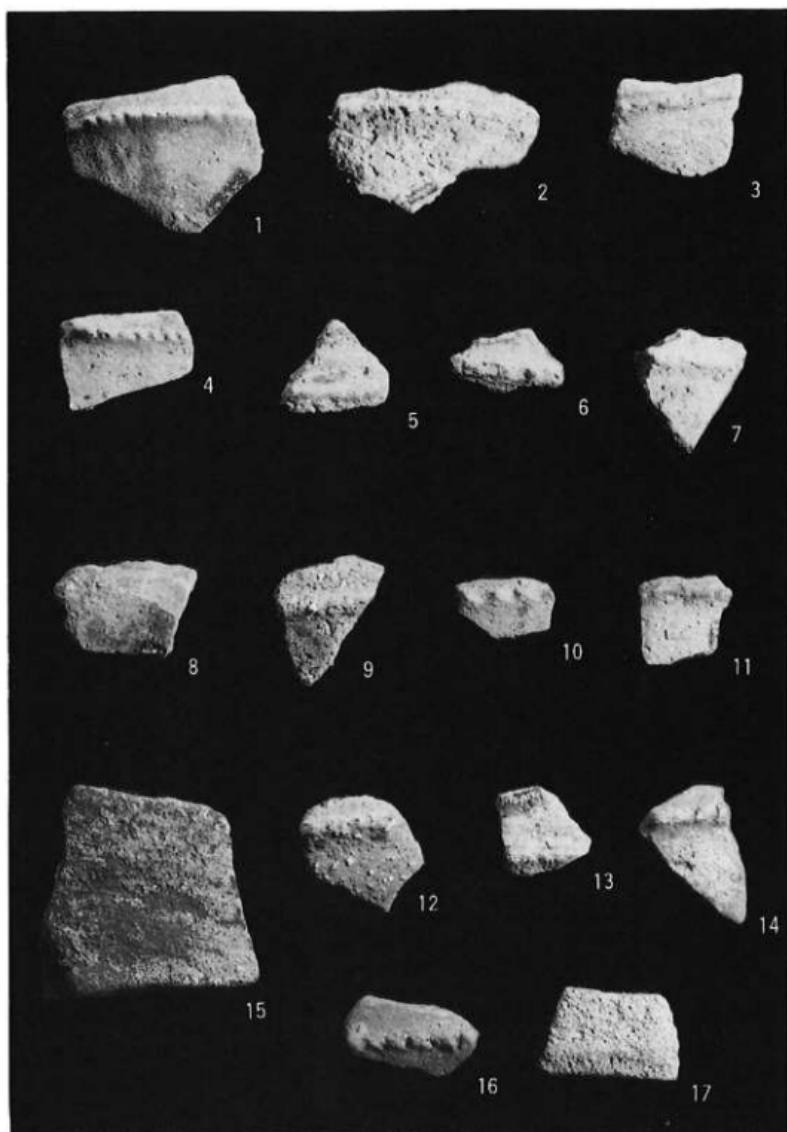


Fig. 17土器

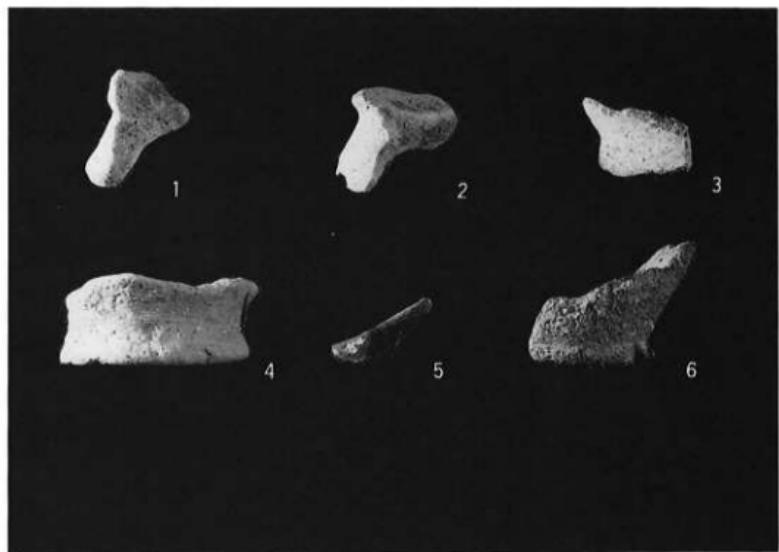


Fig. 18土器

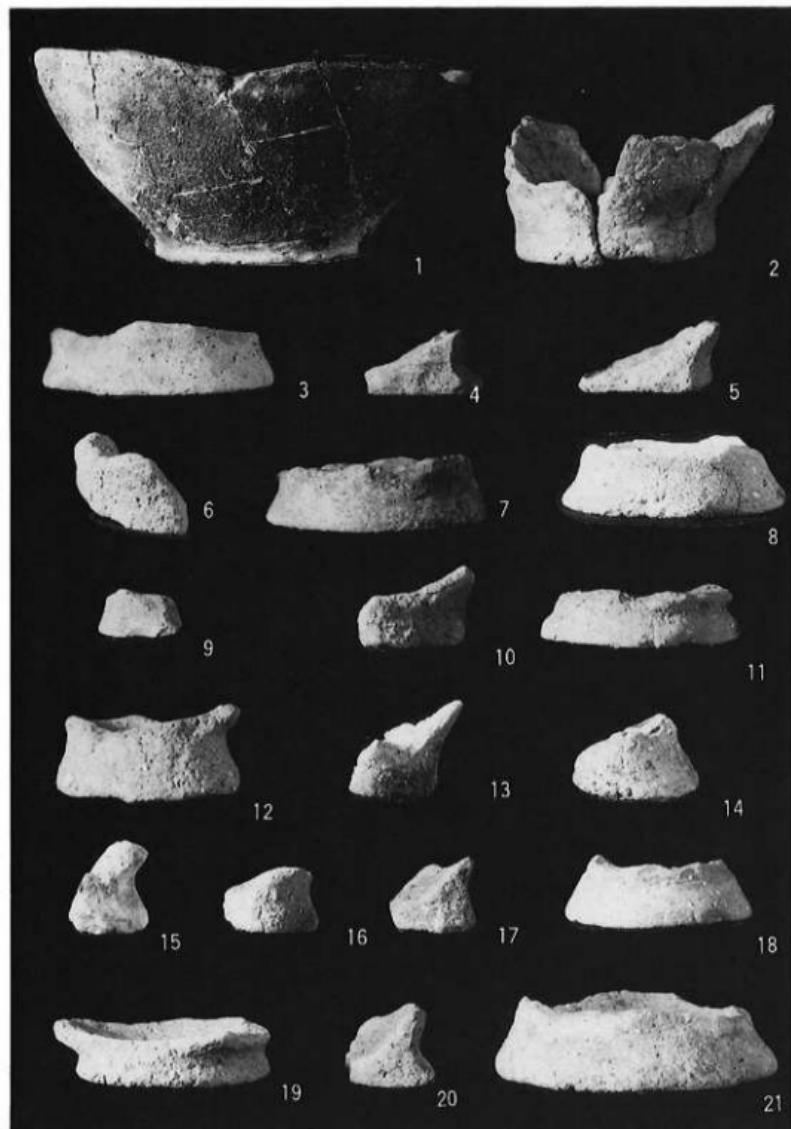


Fig. 19土器

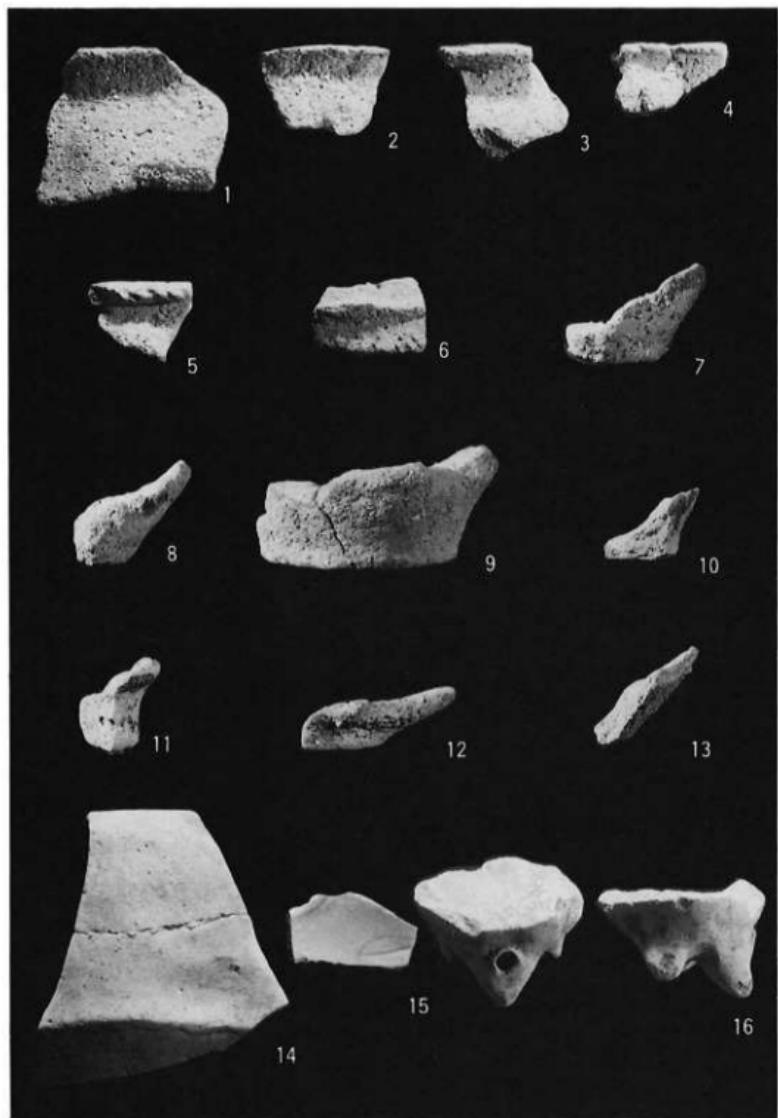


Fig. 20土器



Fig. 21 土器

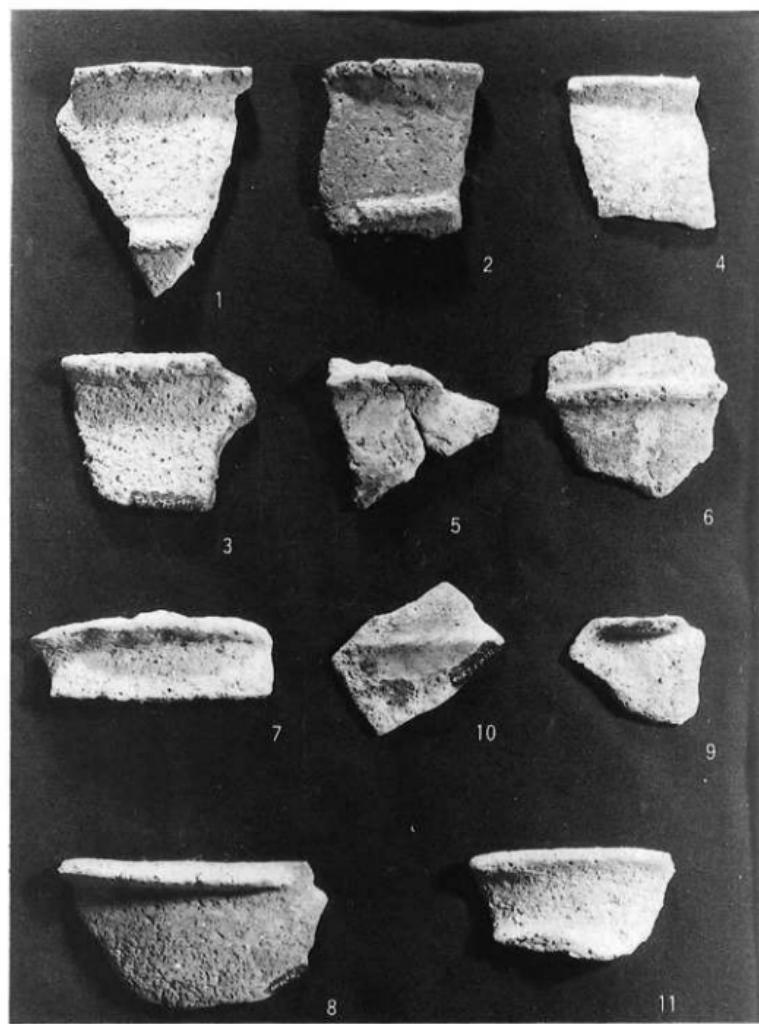


Fig. 22土器

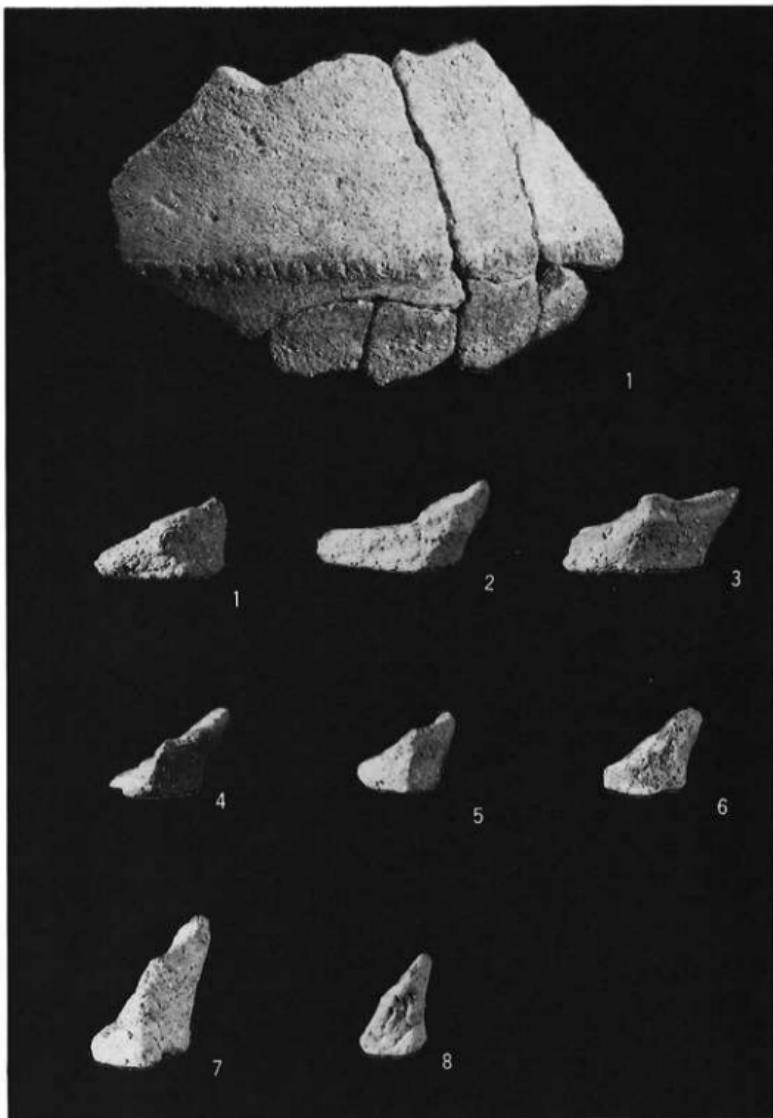


Fig. 23-24土器

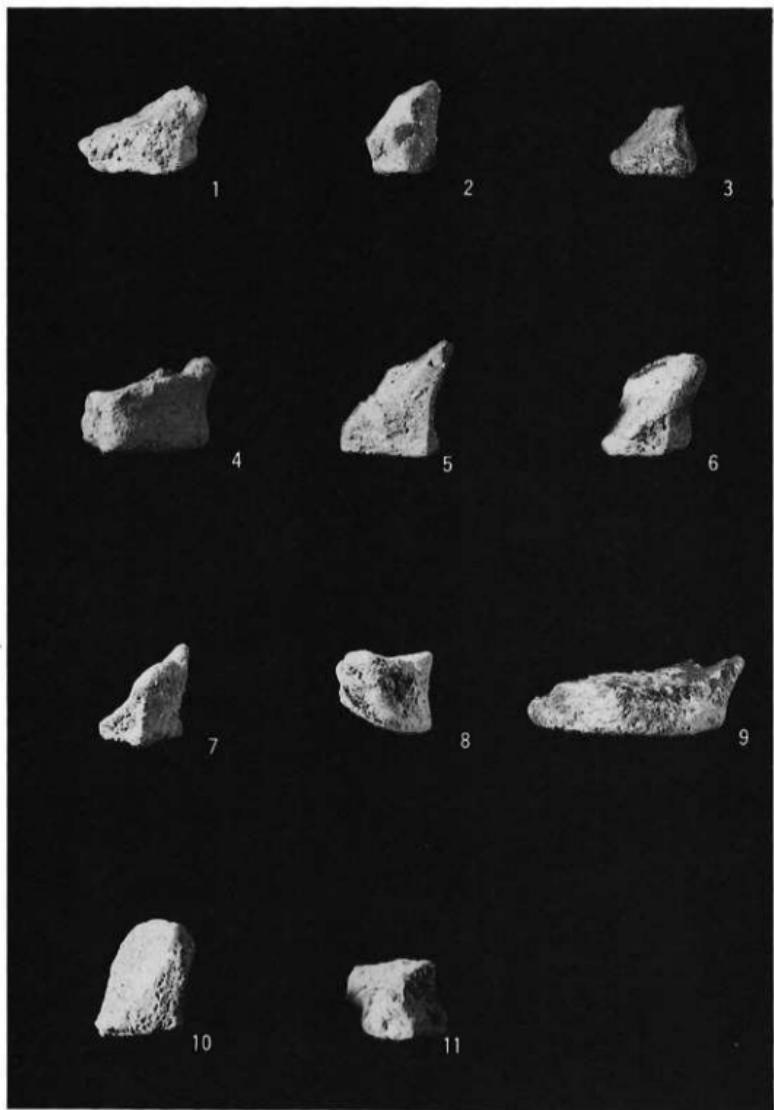


Fig. 25土器

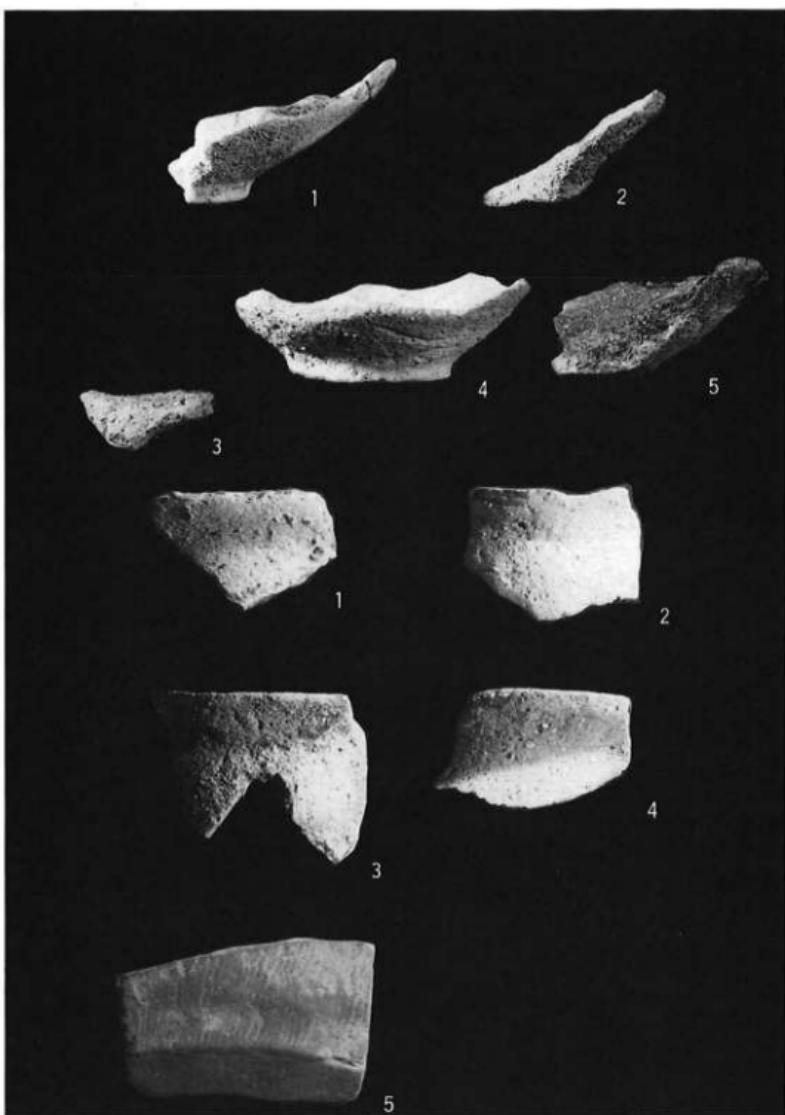


Fig. 26-27 土器

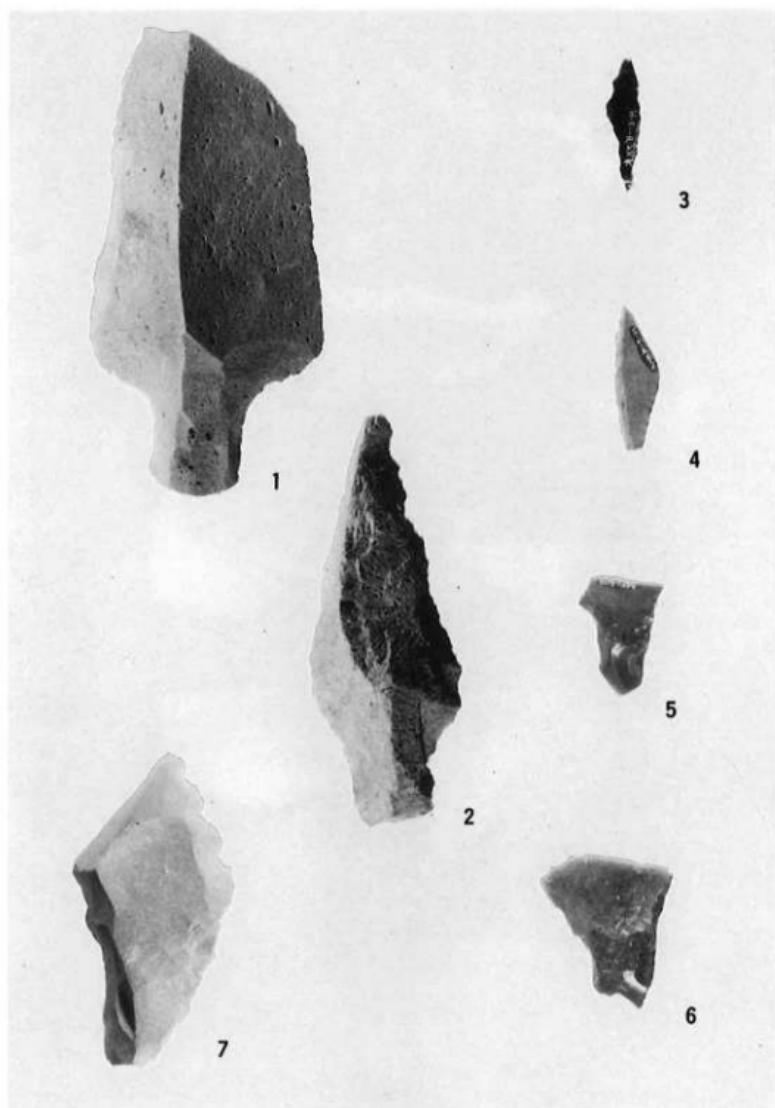


Fig. 29 石器



8



9



10



13



11

12



14



15



16

Fig. 30 石器

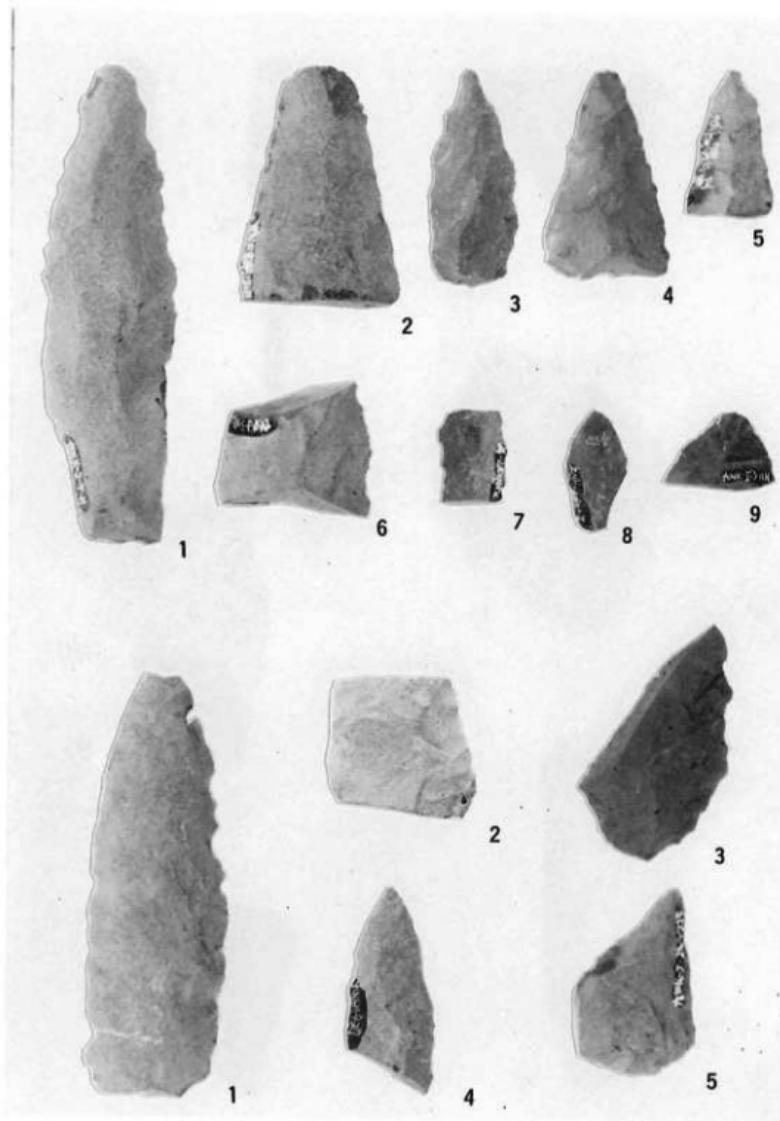


Fig. 31-32 石器

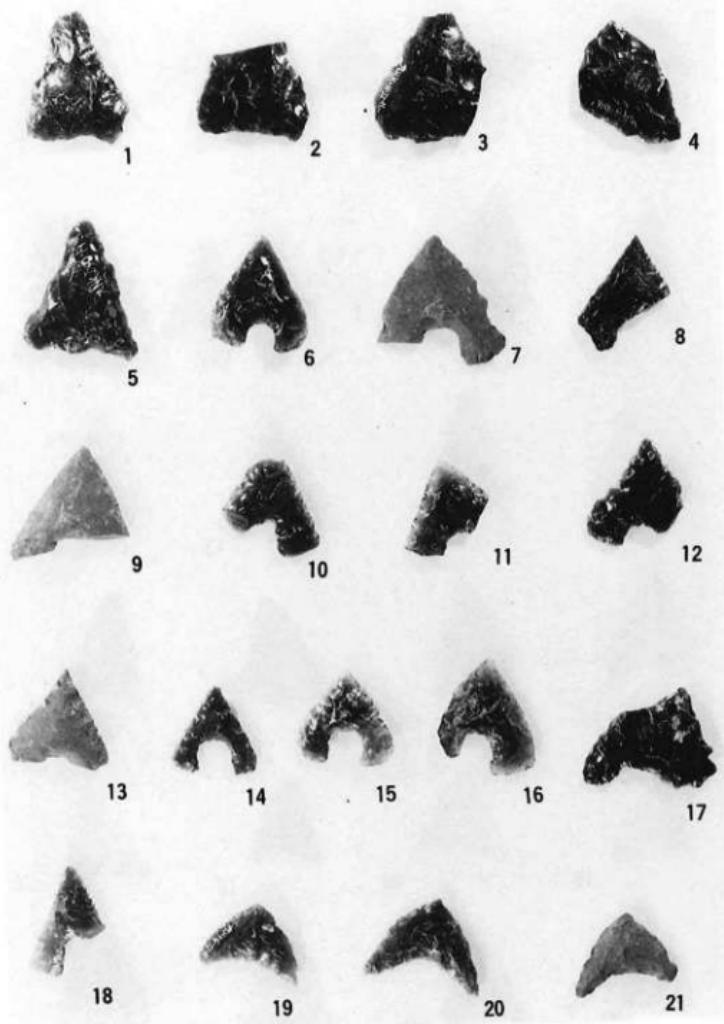


Fig. 36 石鏃

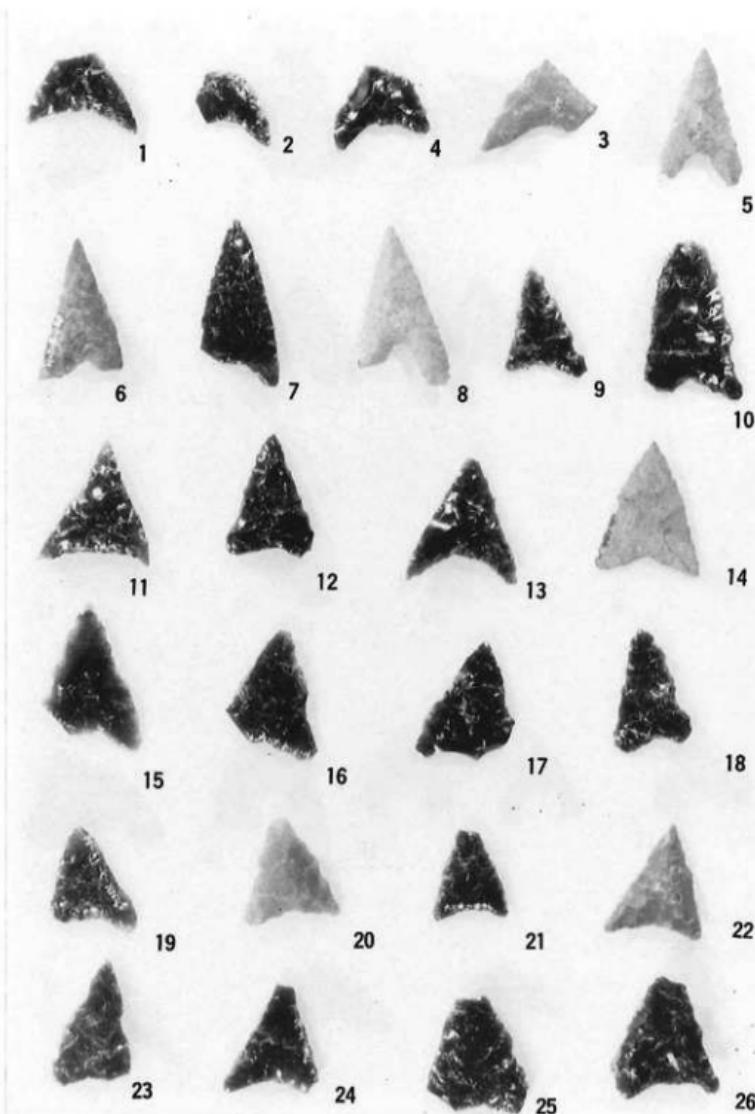


Fig. 37 石鏃

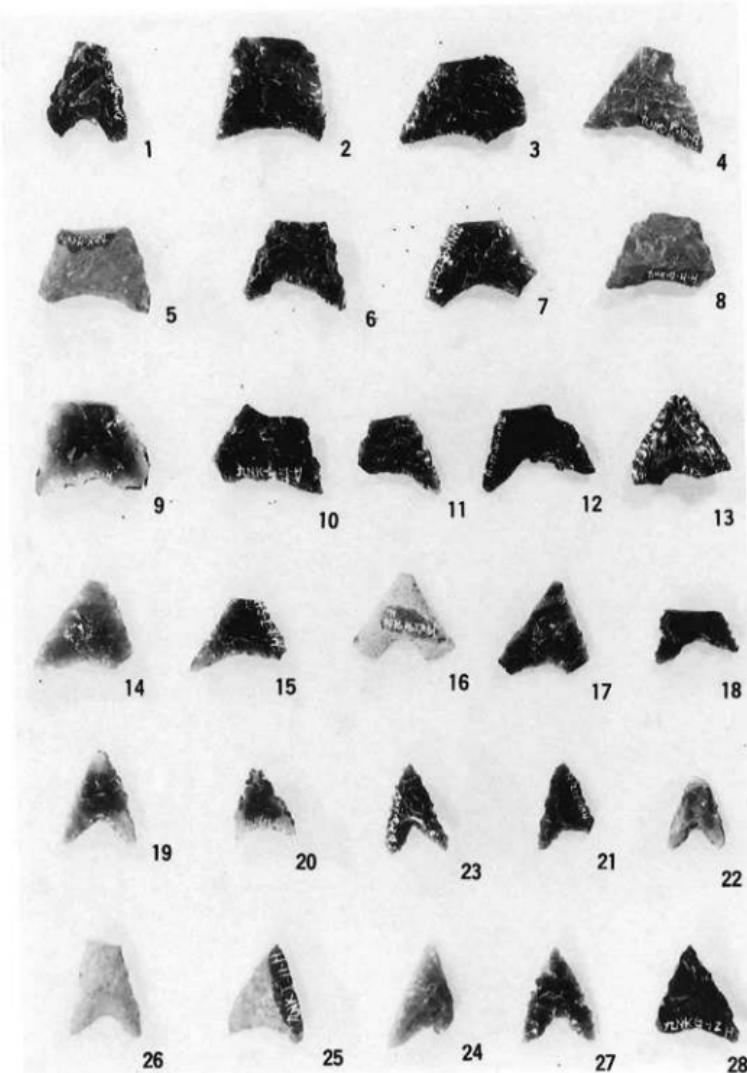


Fig. 38 石鏃

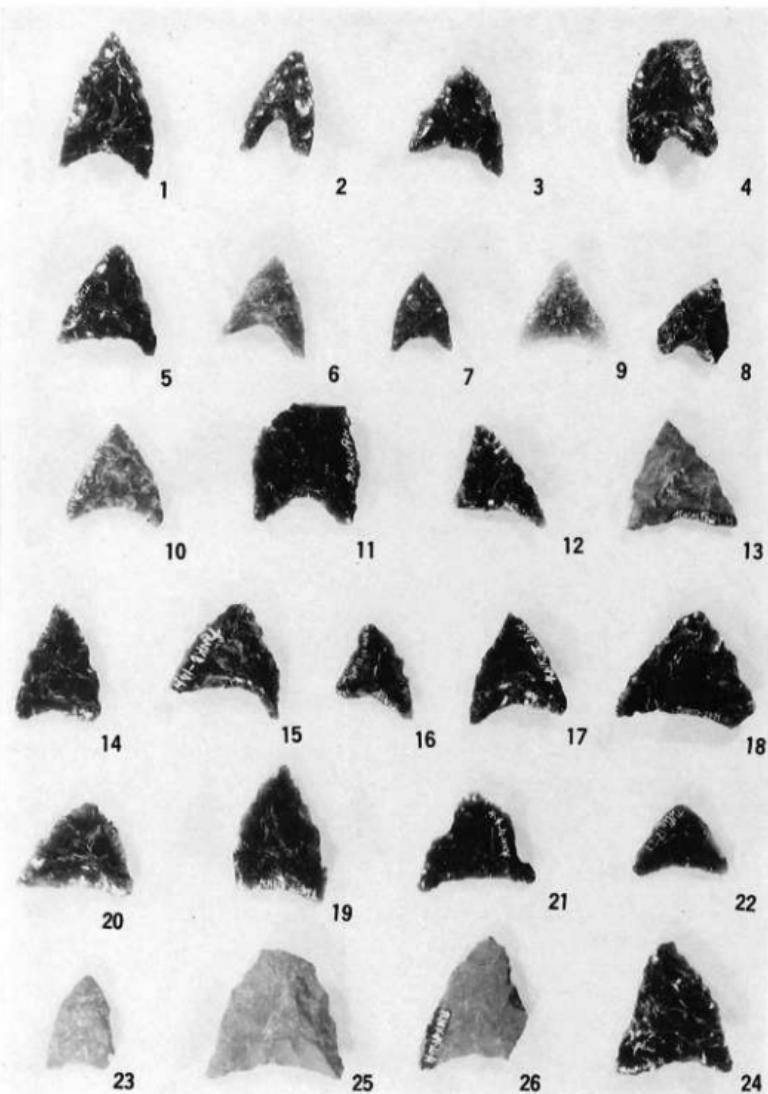


Fig. 39 石鏃

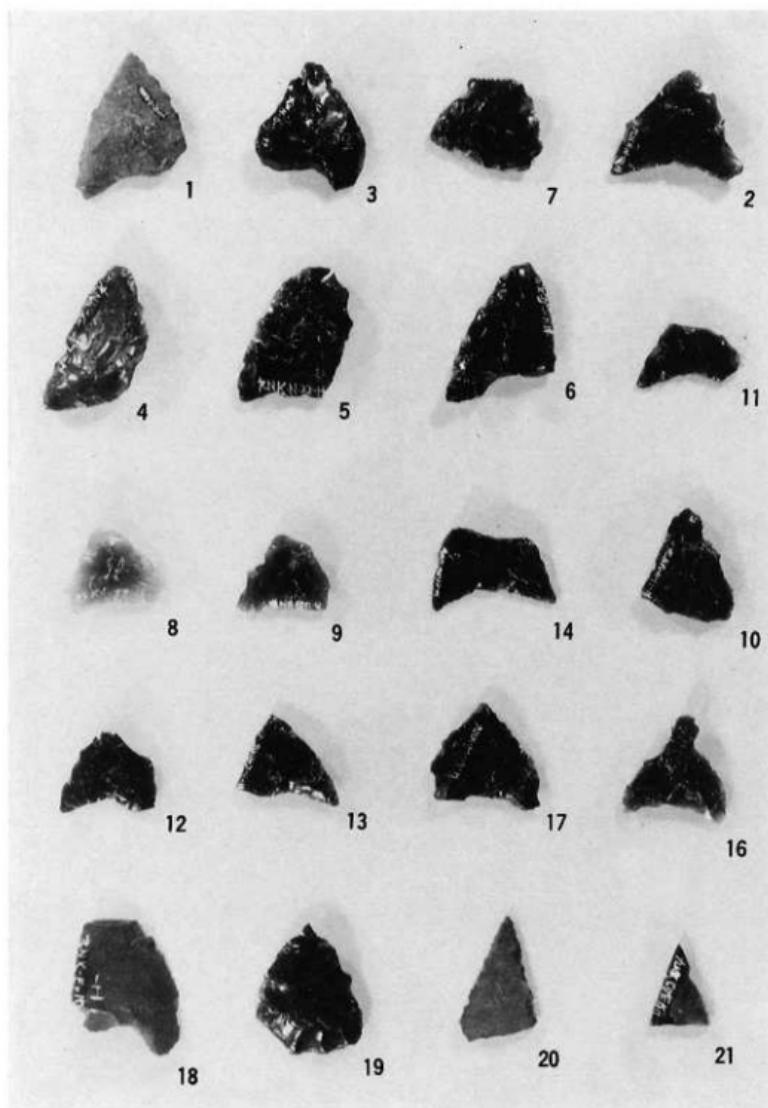


Fig. 40 石鏃

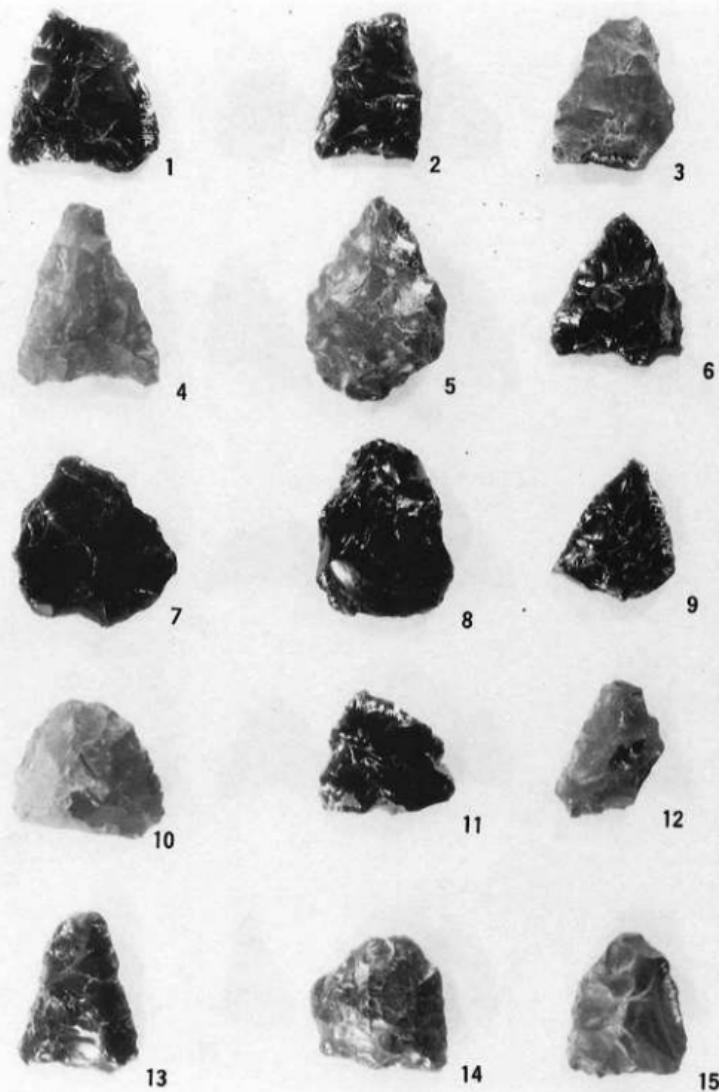


Fig. 41 石器

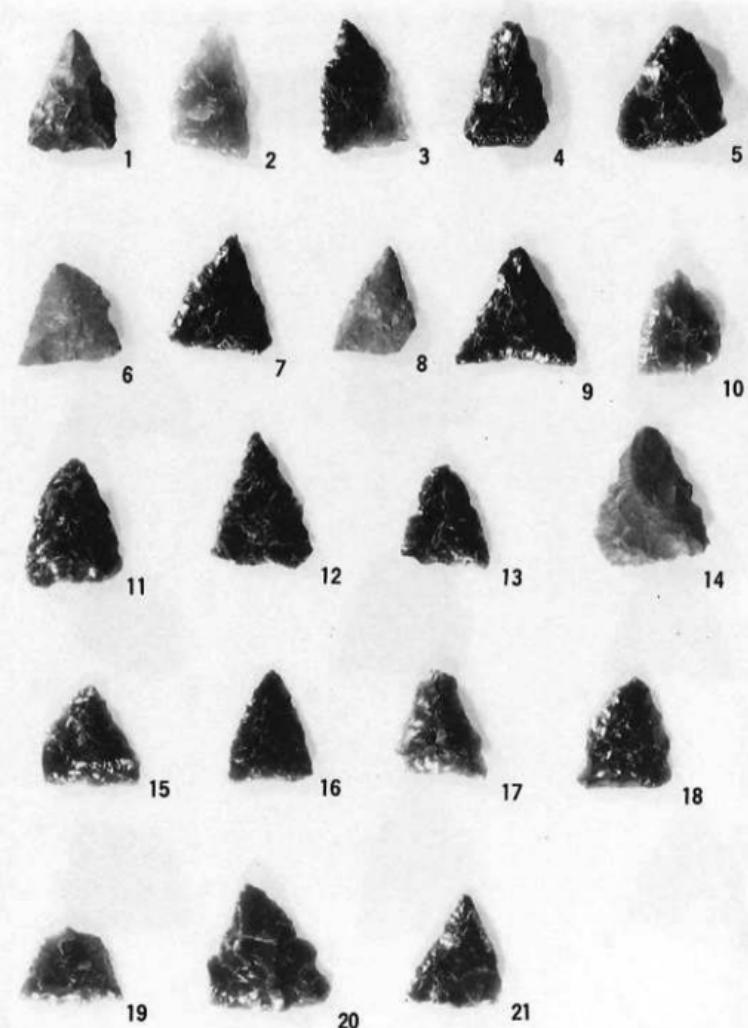


Fig. 42石鏃

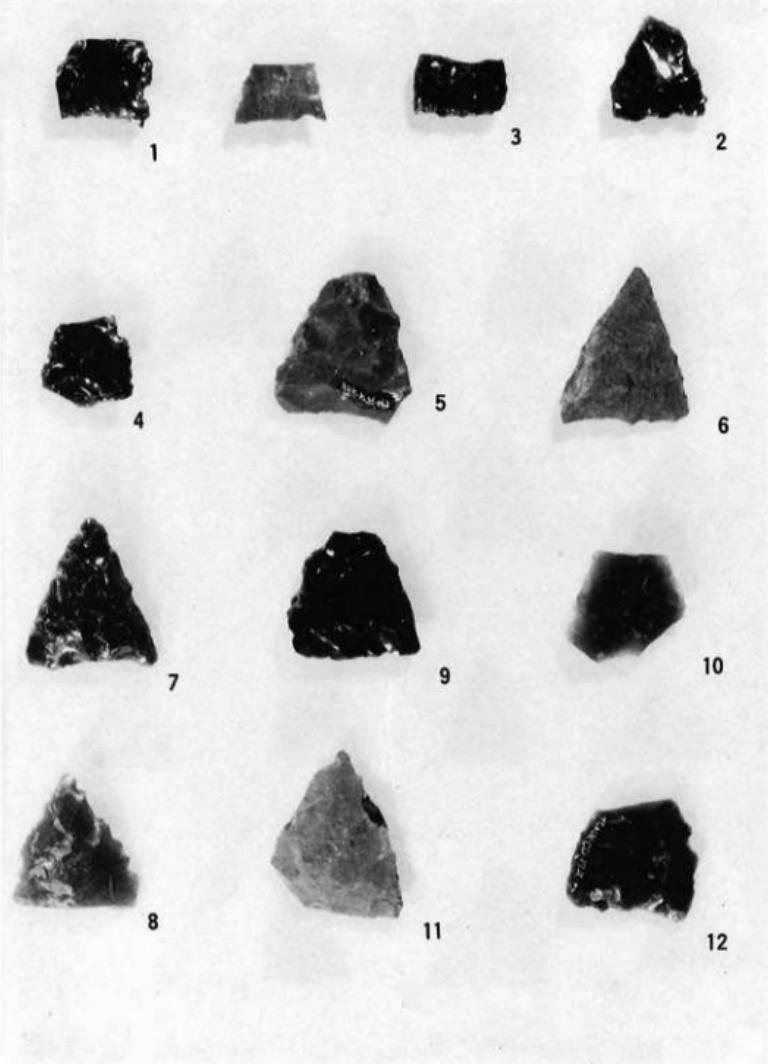


Fig. 43石器

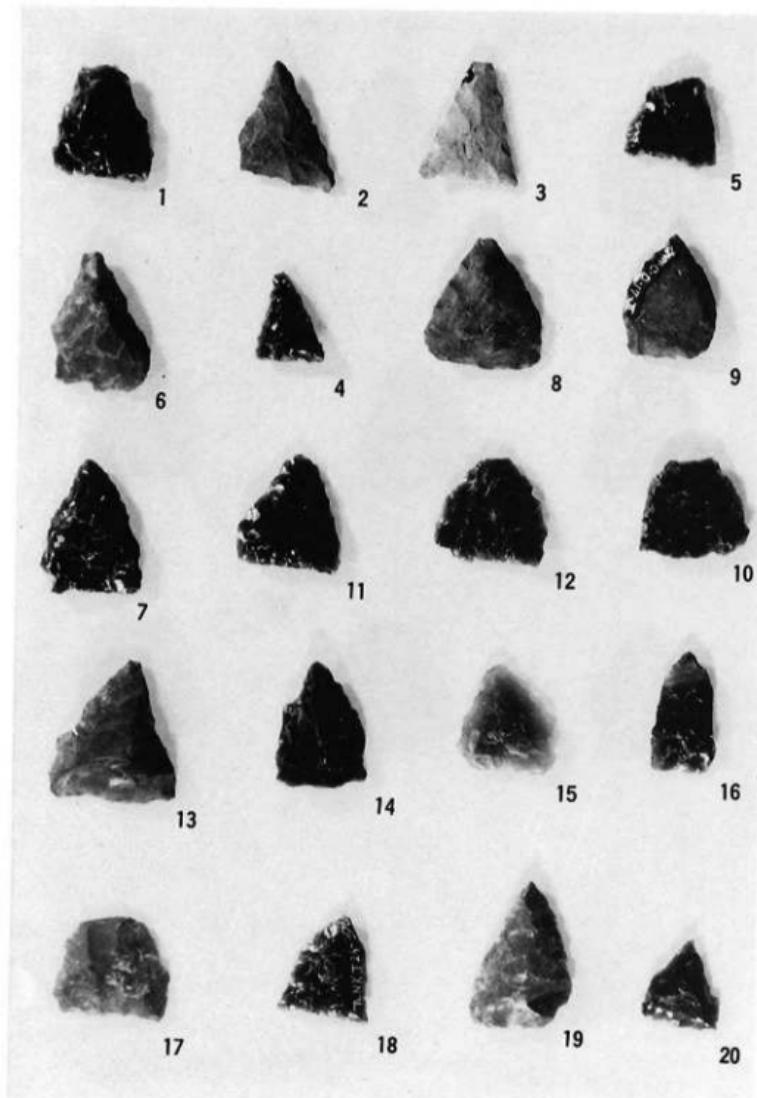


Fig. 44 石鏃

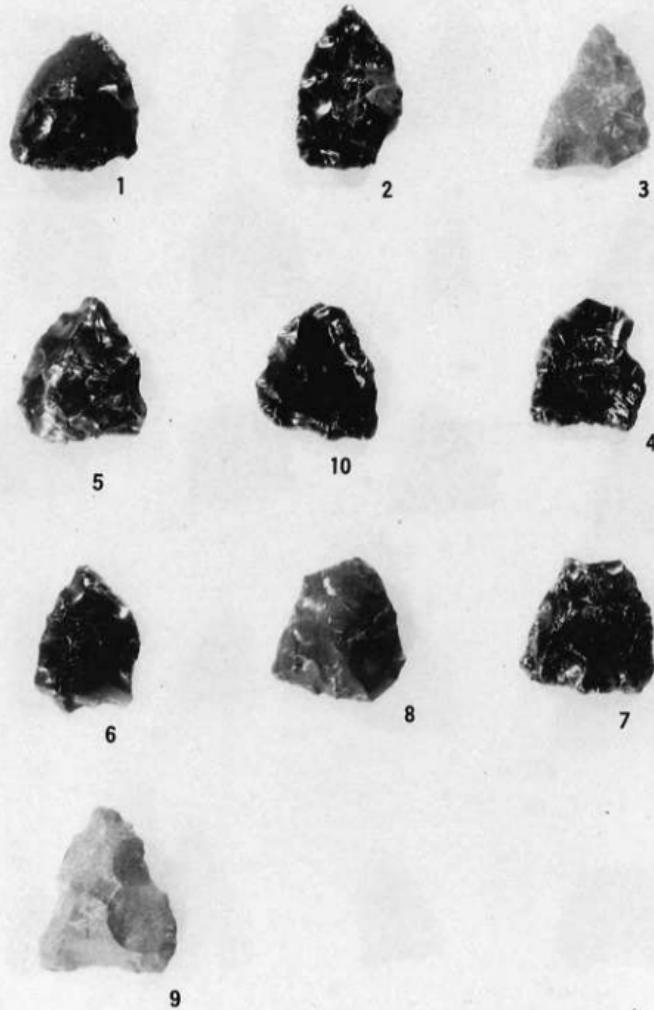


Fig. 45 石鏃

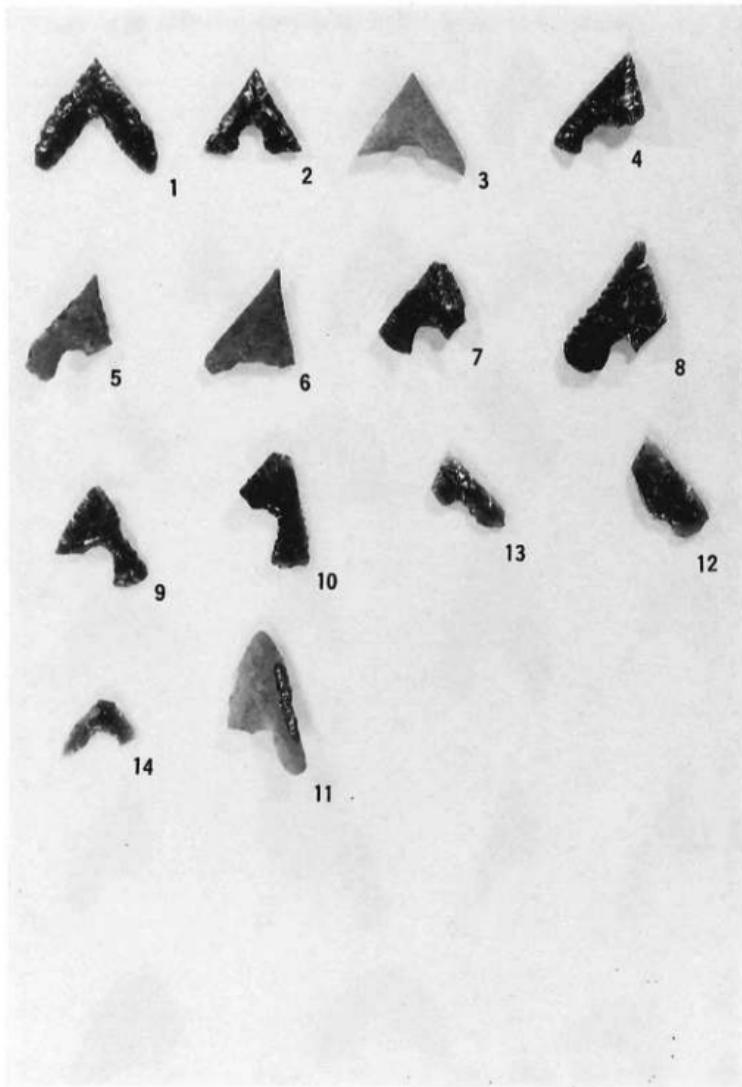


Fig. 46石鏃

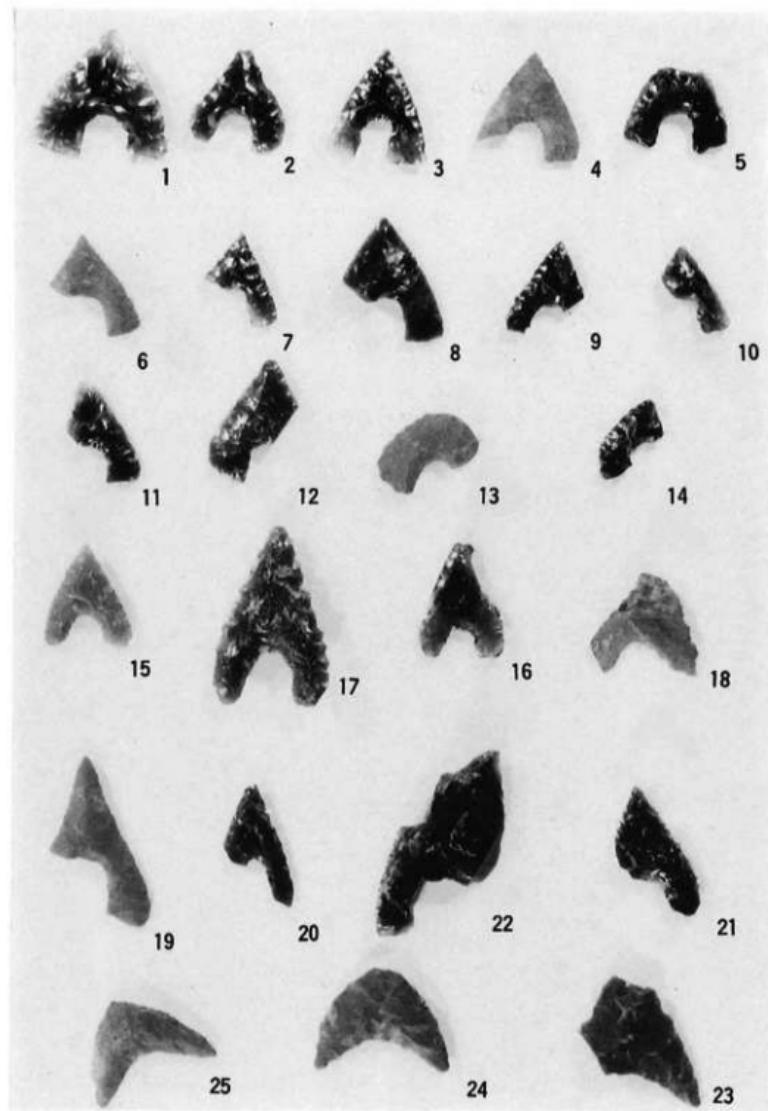


Fig. 47 石簇

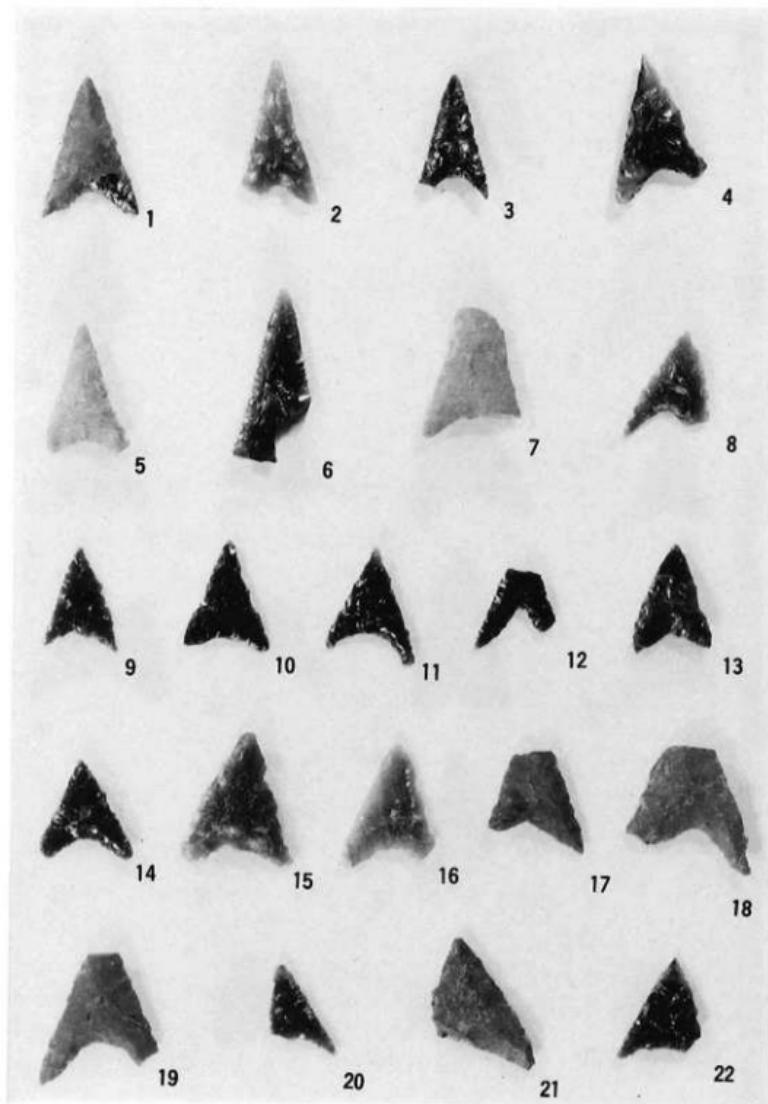


Fig. 48 石鏃

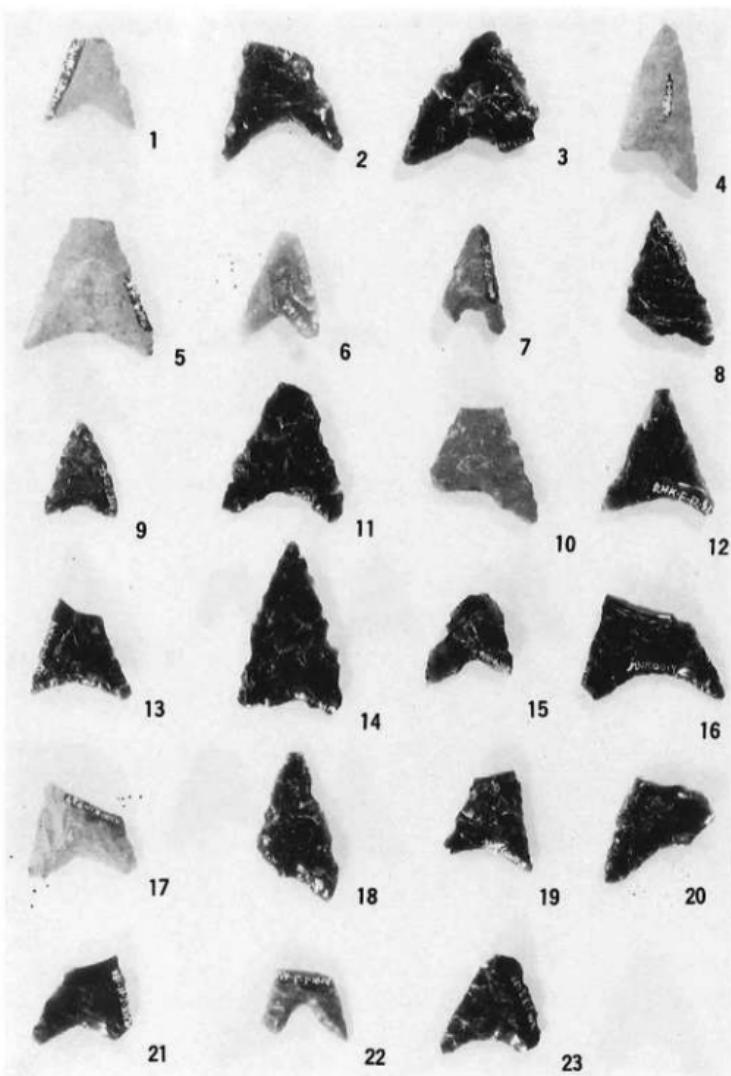


Fig. 49 石鏃

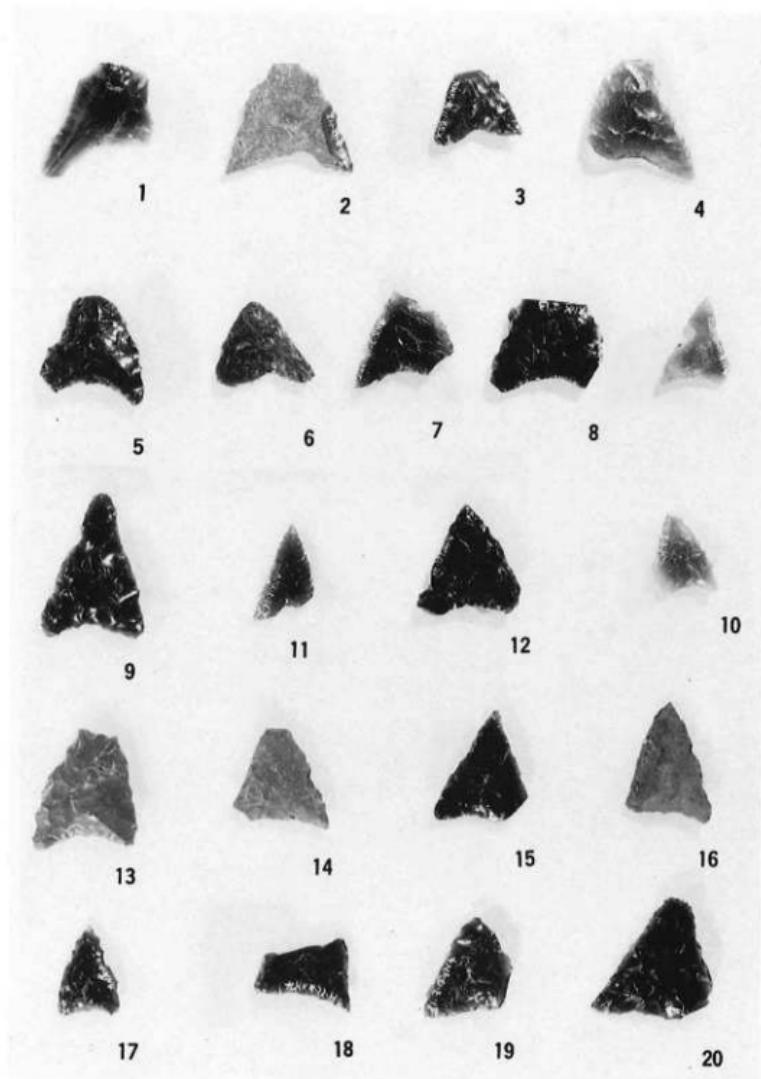


Fig. 50 石器

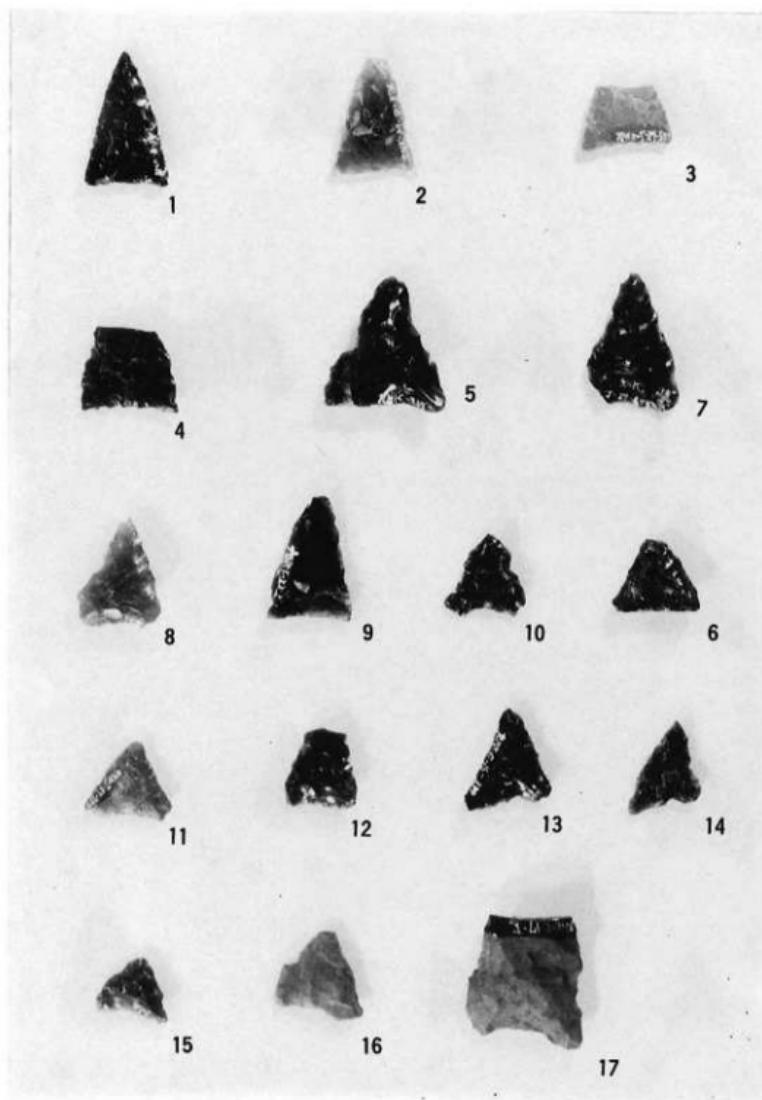


Fig. 51 石鏃

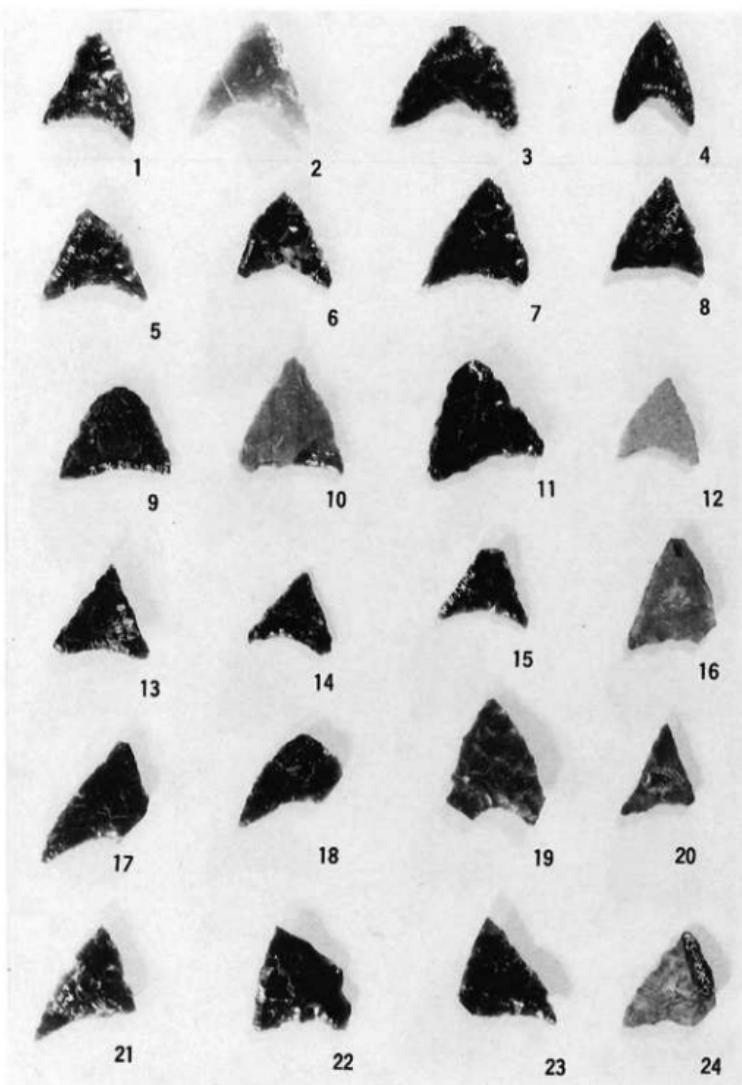


Fig. 52 石器

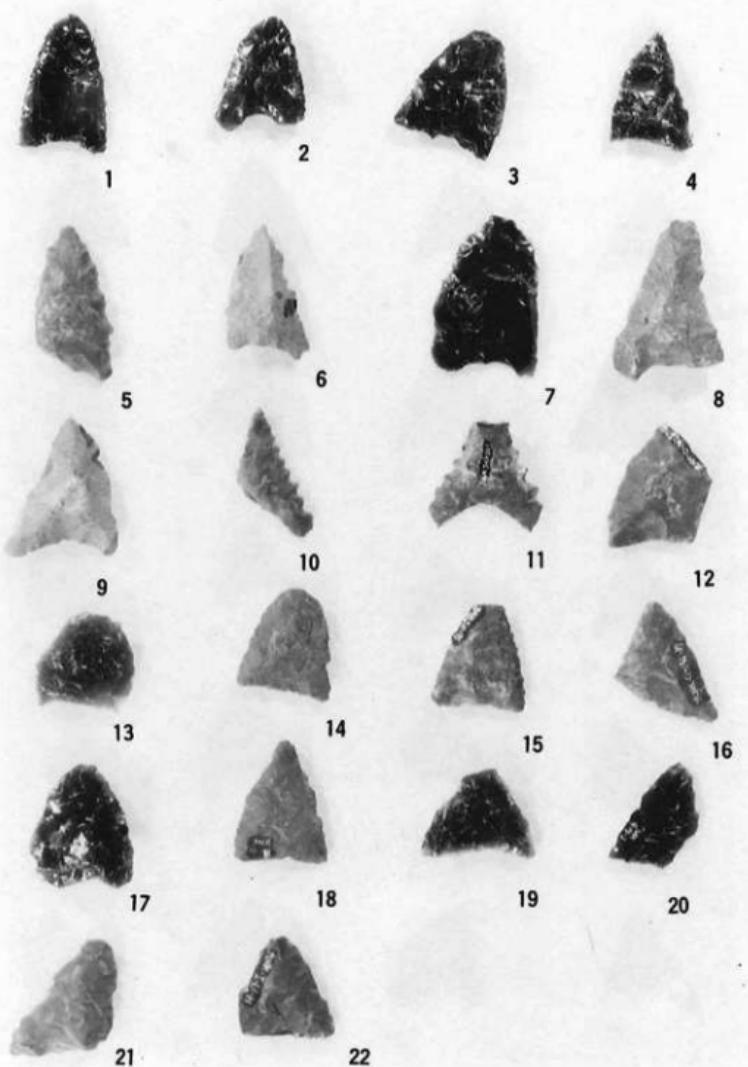


Fig. 53 石器

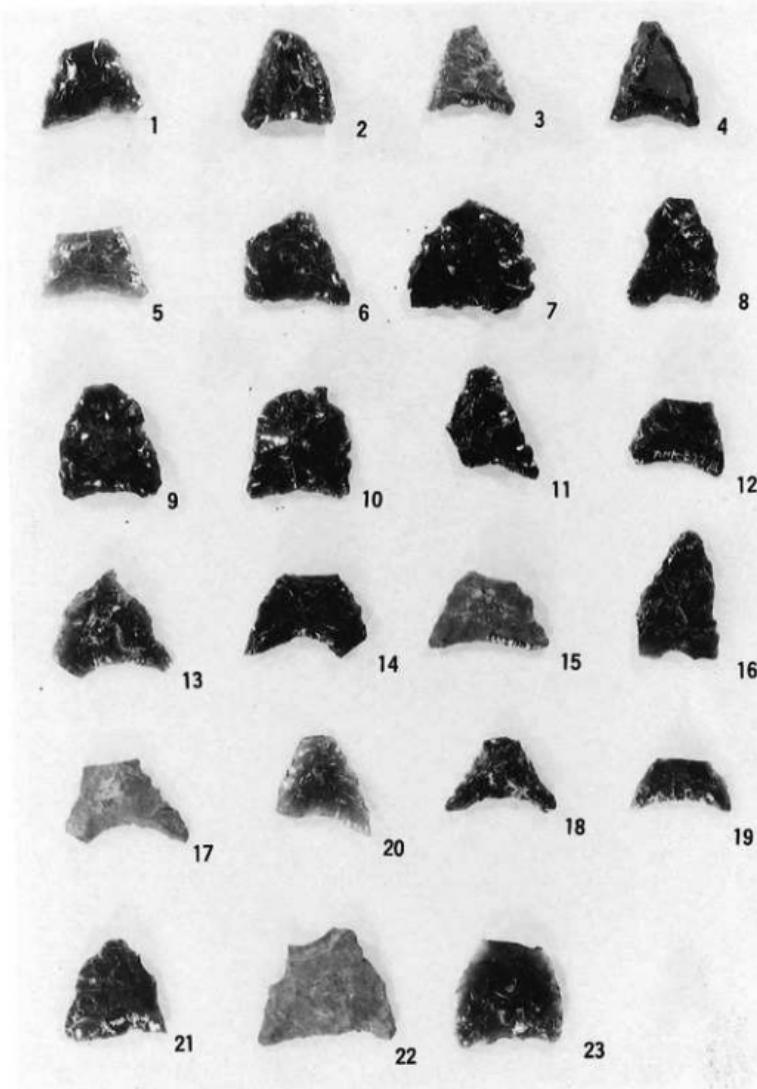


Fig. 54 石器

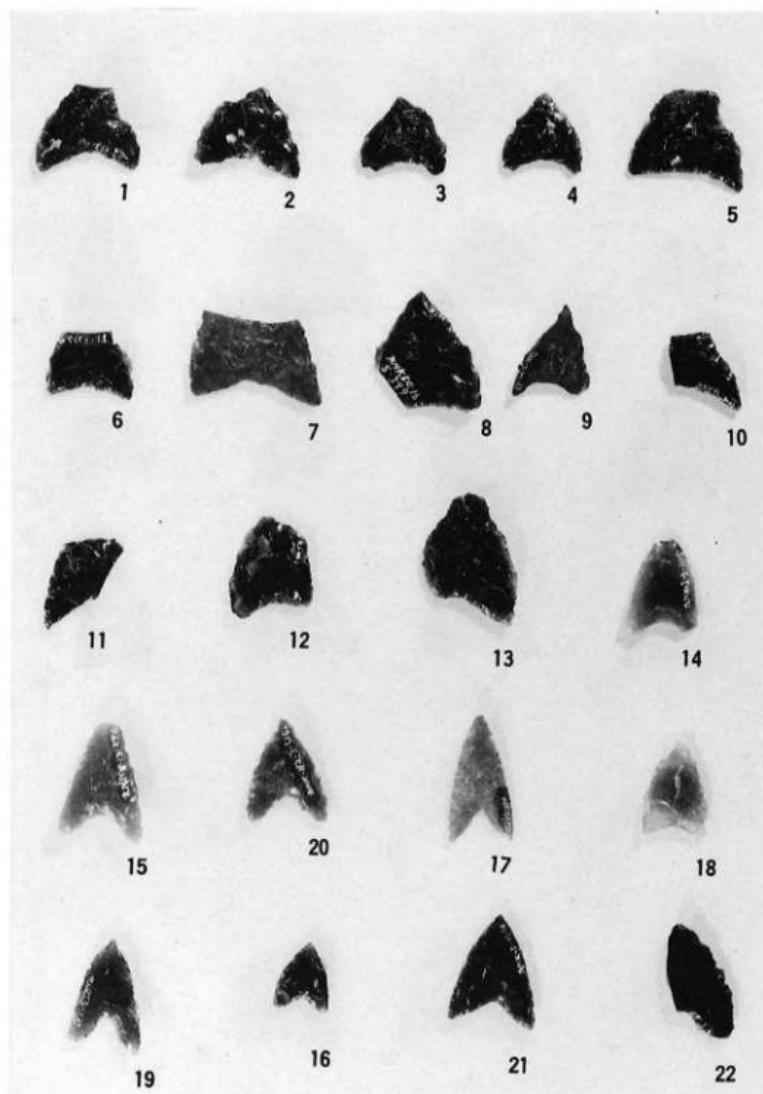


Fig. 55 石器

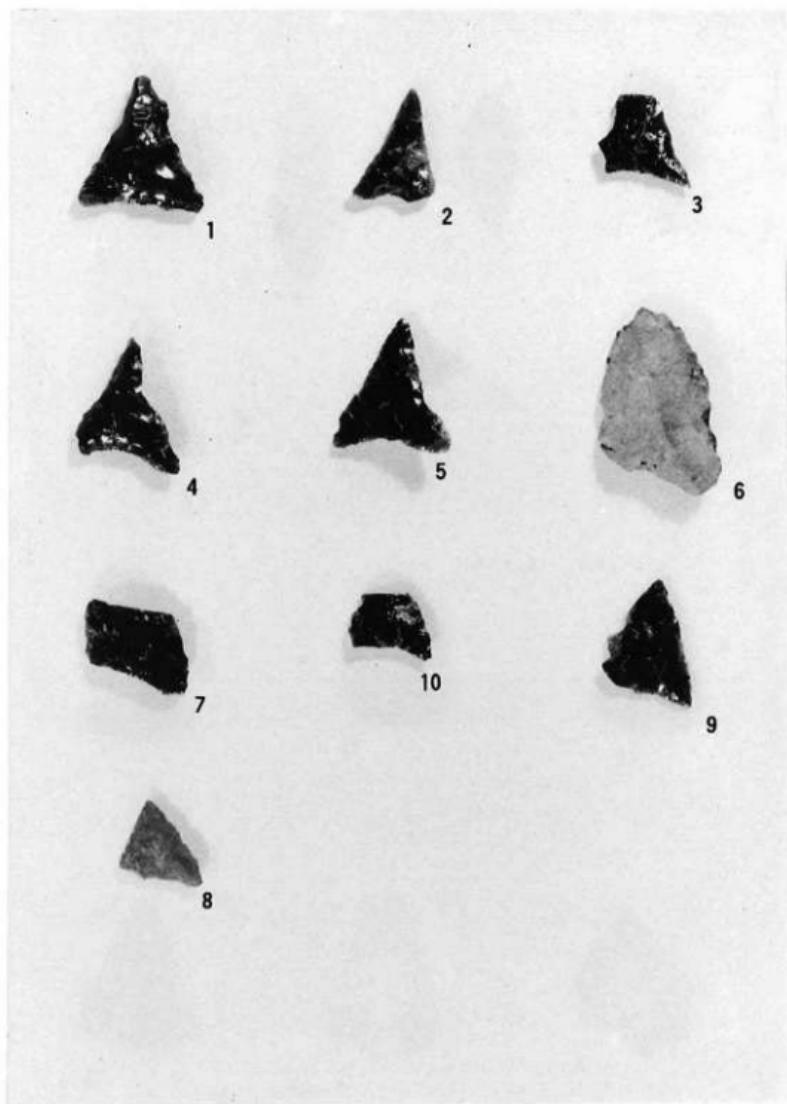


Fig. 56石鏃

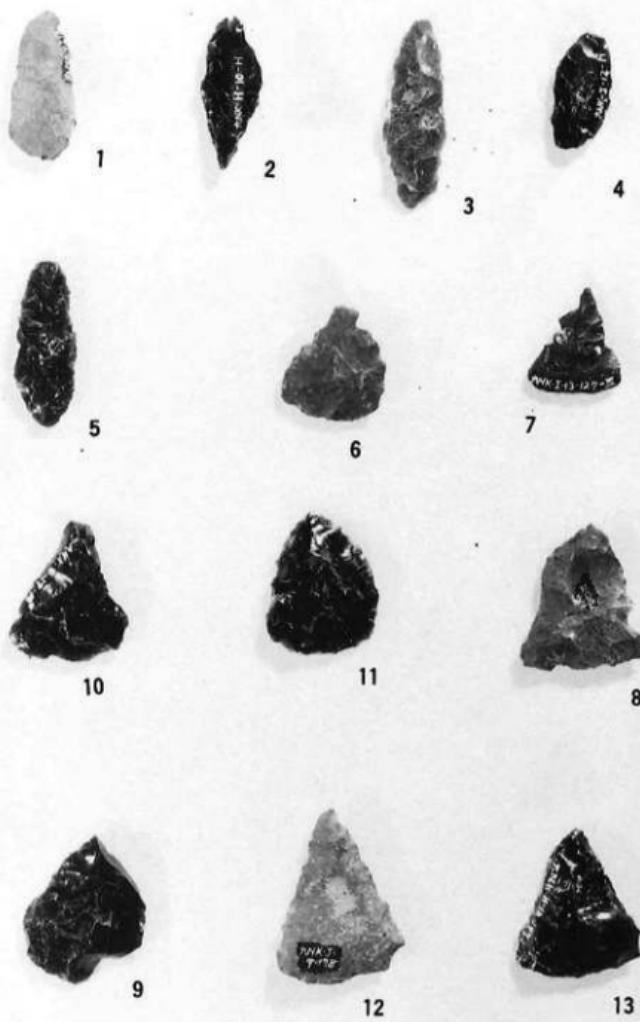


Fig. 57石鏃

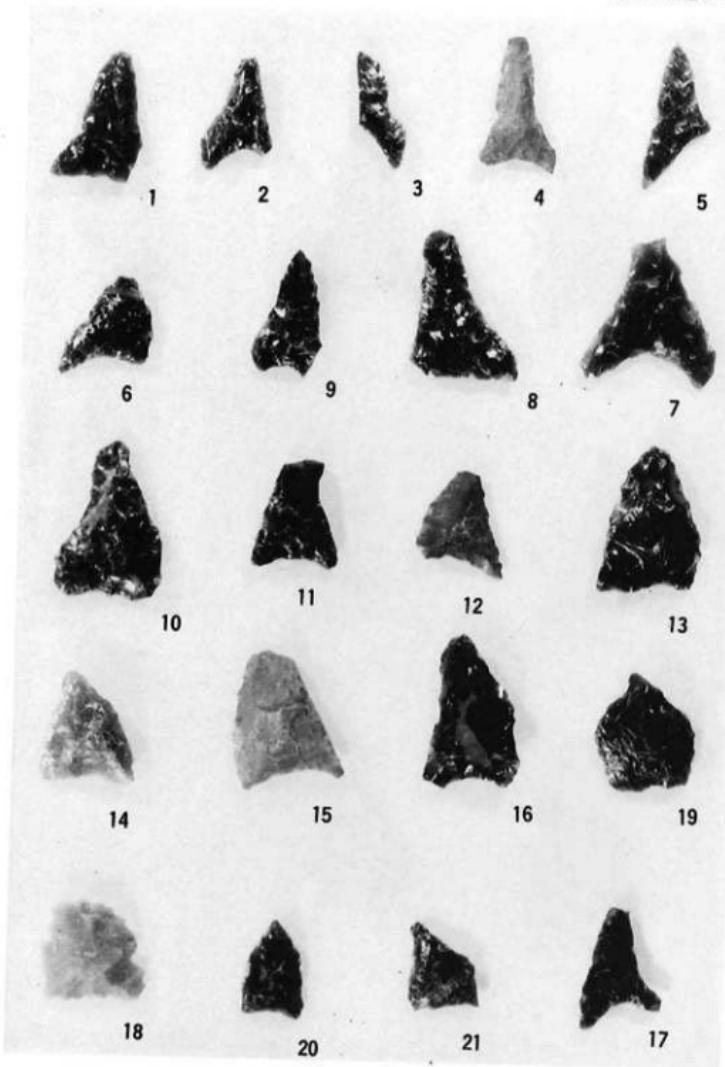


Fig. 58石鏃

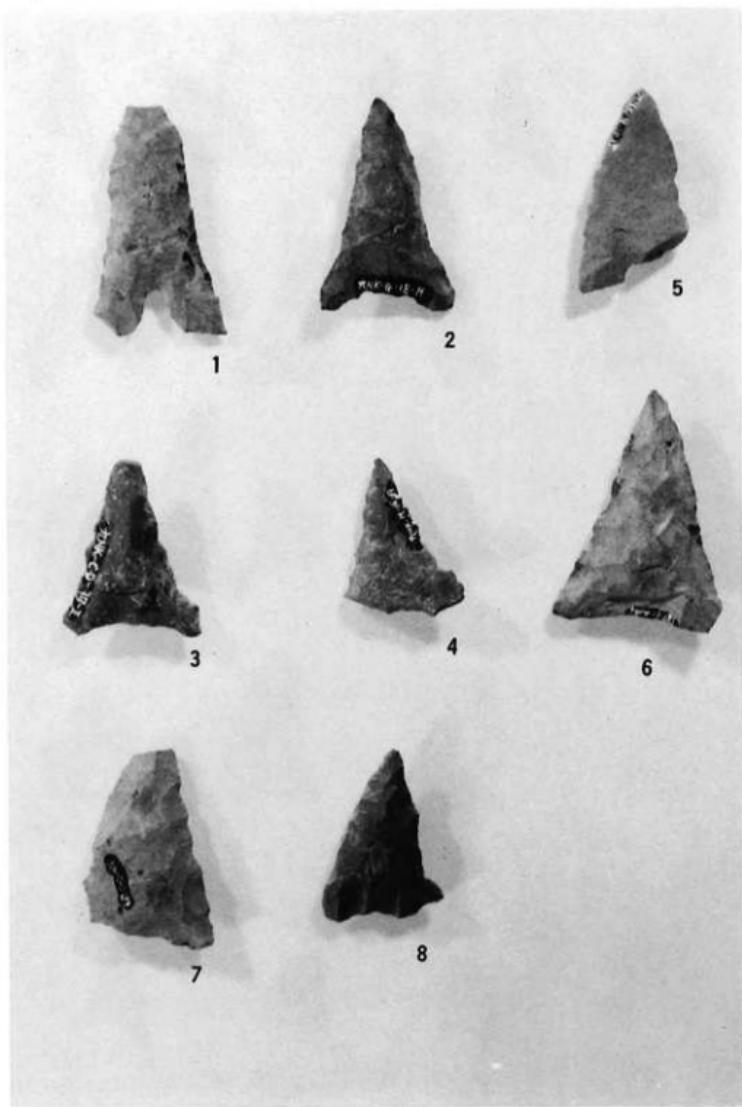


Fig. 59 石鏃

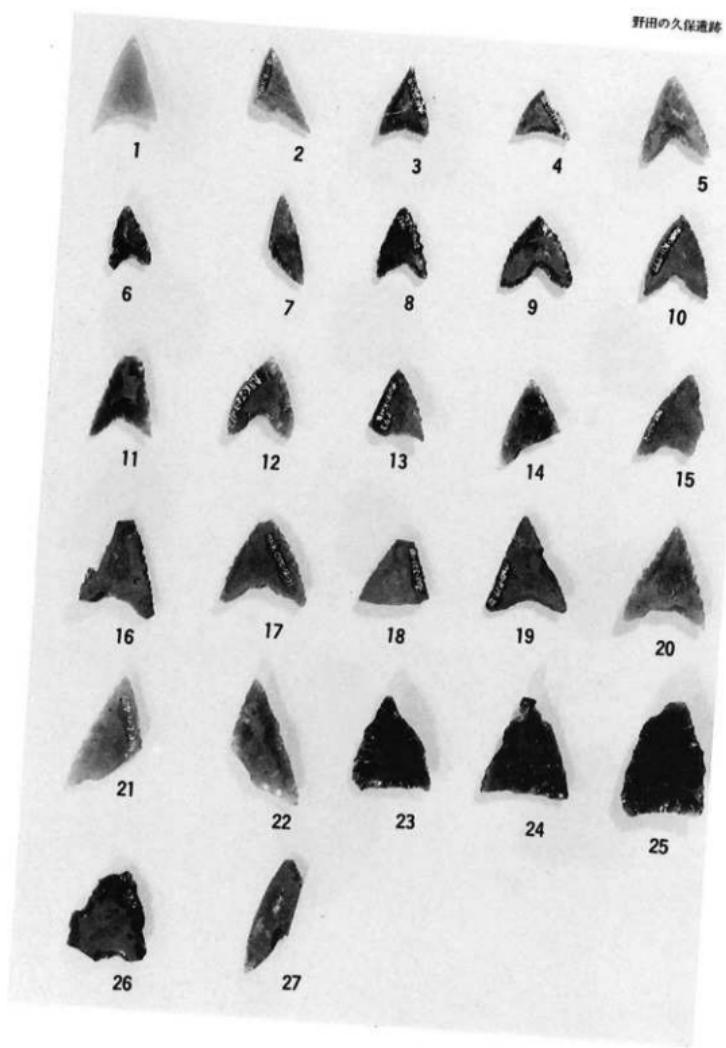


Fig. 60 石器

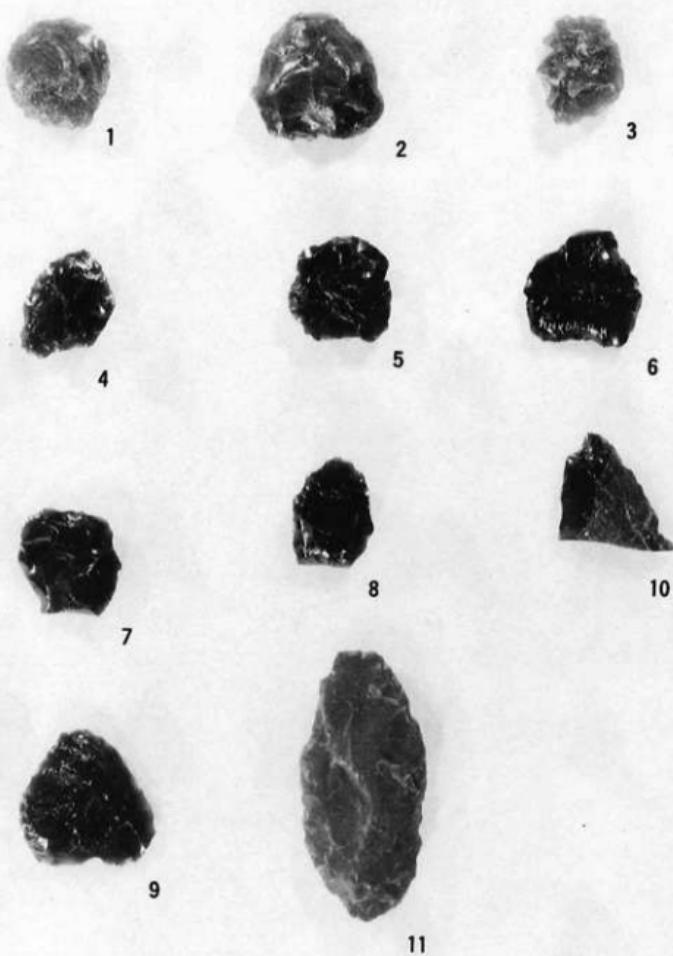


Fig. 61 スクレイパー

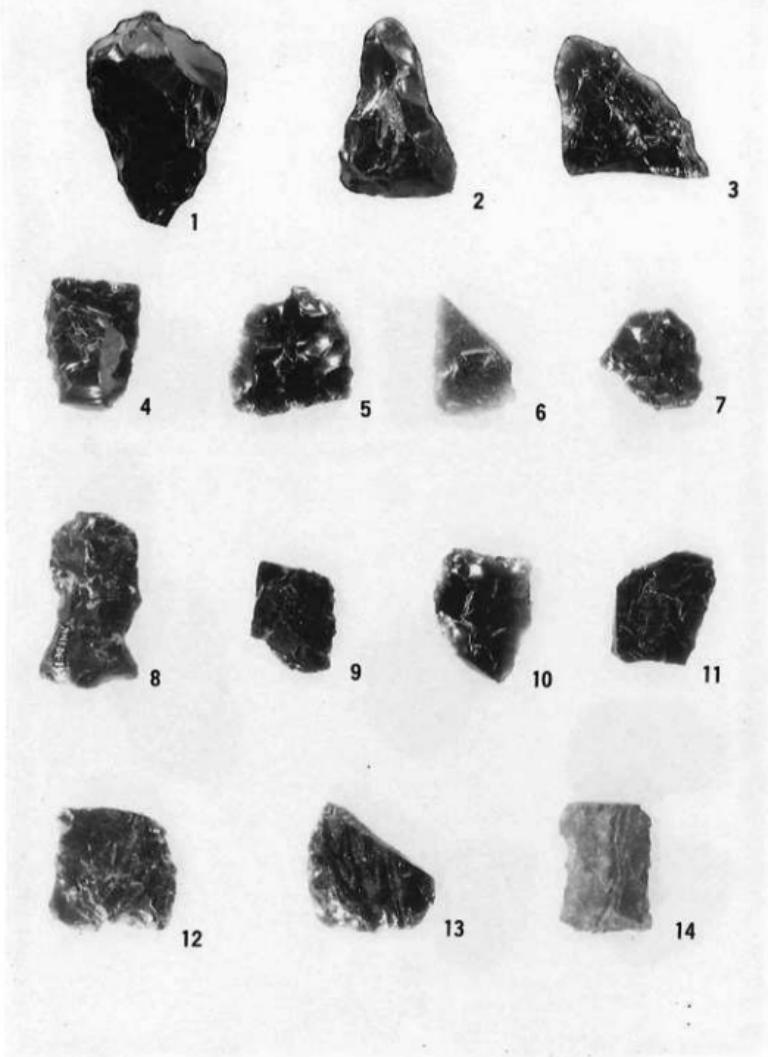


Fig. 62石器

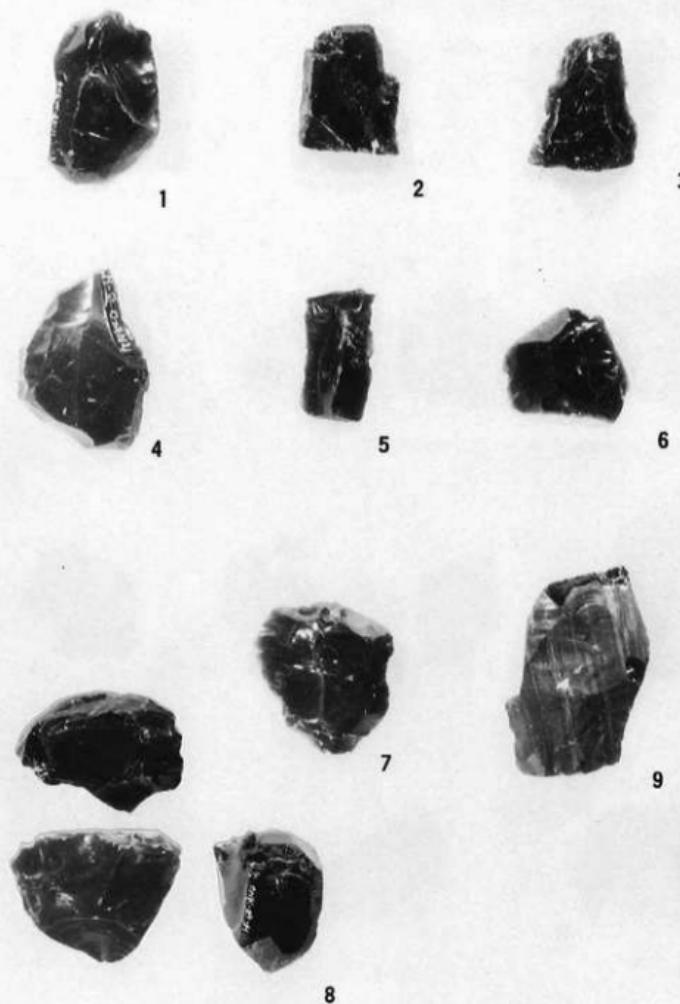


Fig. 63石器

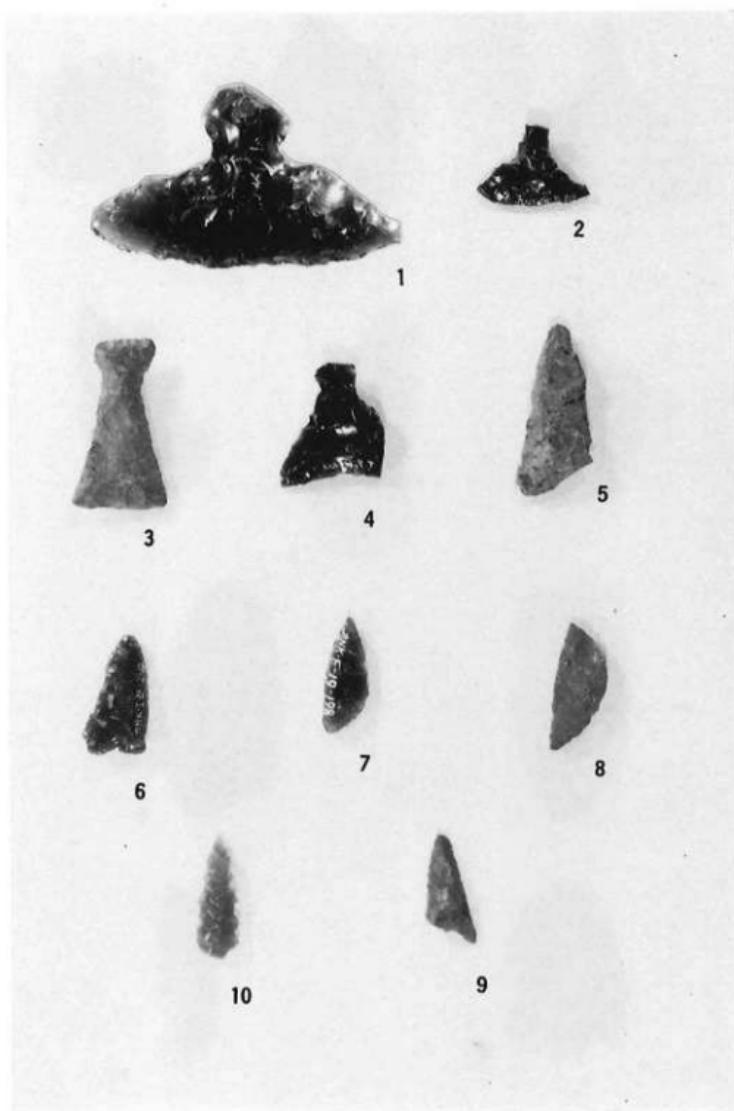


Fig. 64石匙



Fig. 65 石器

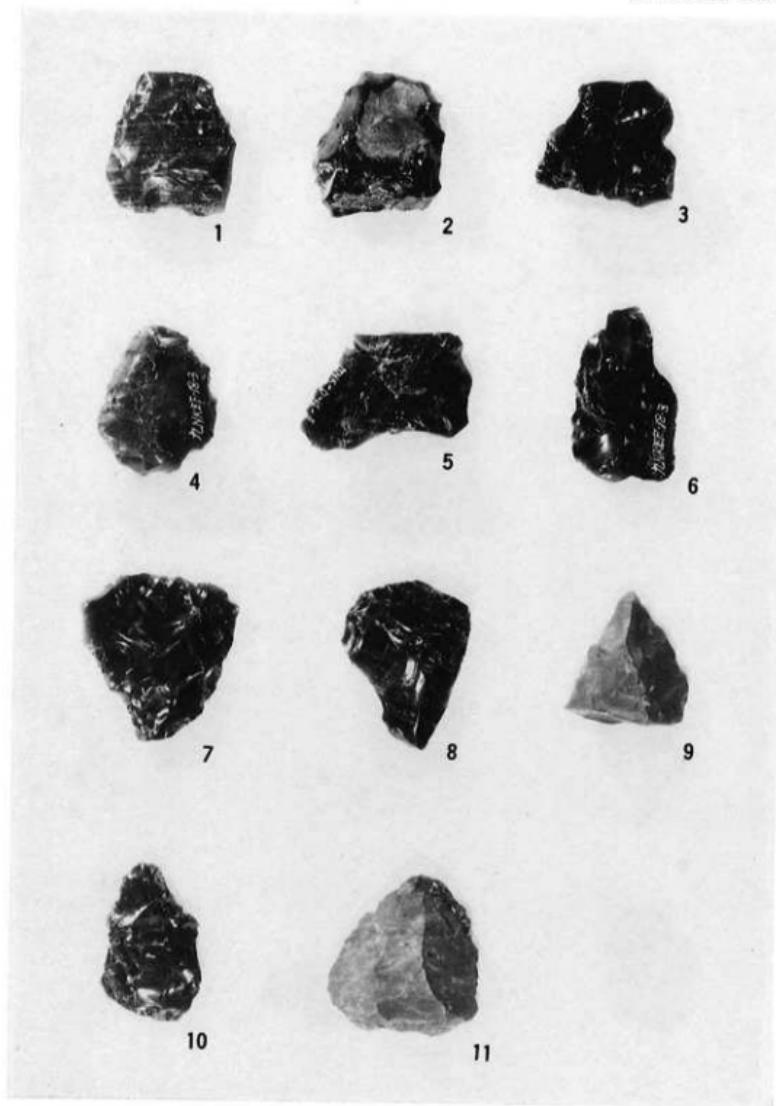


Fig. 66スクレイパー

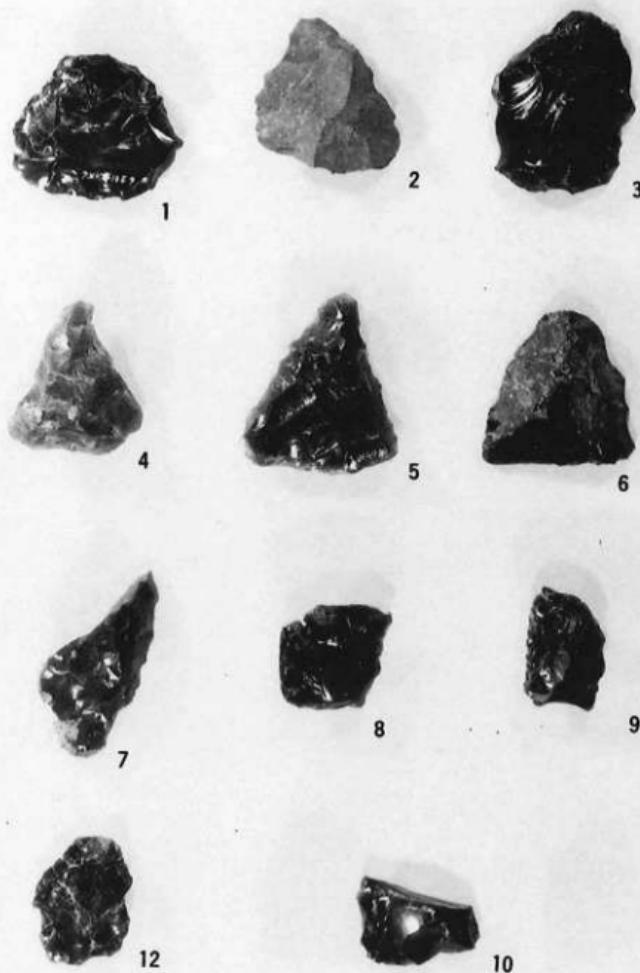


Fig. 67スクレイパー

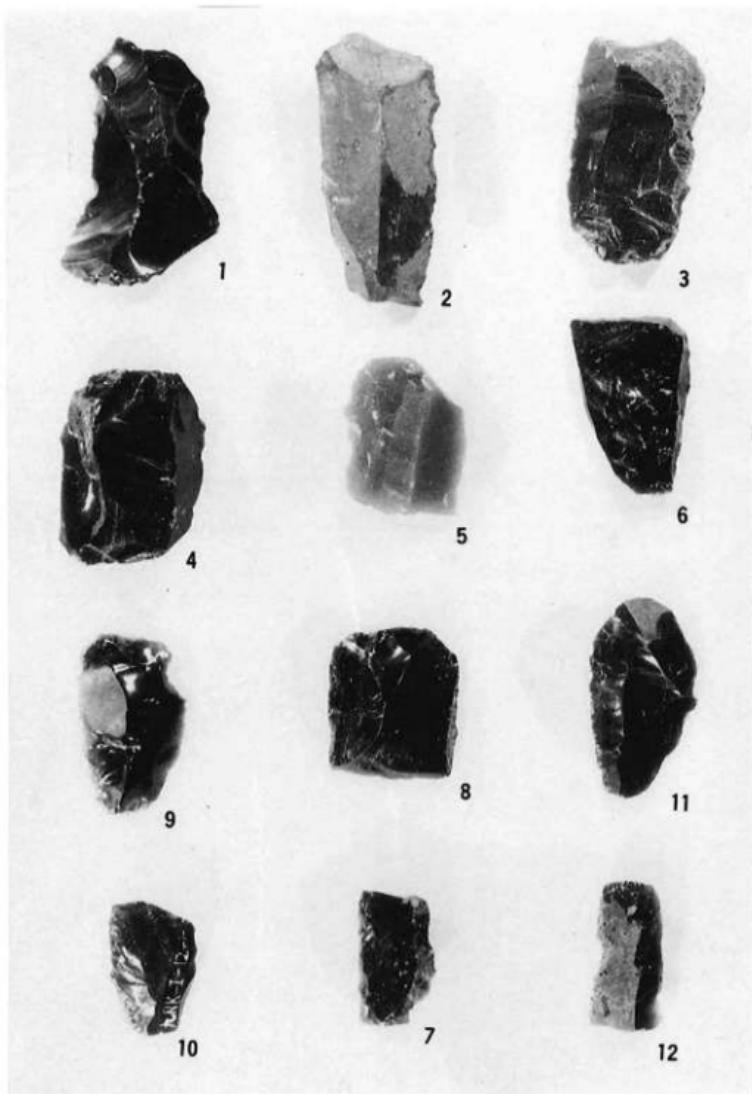


Fig. 68 不定形剝片

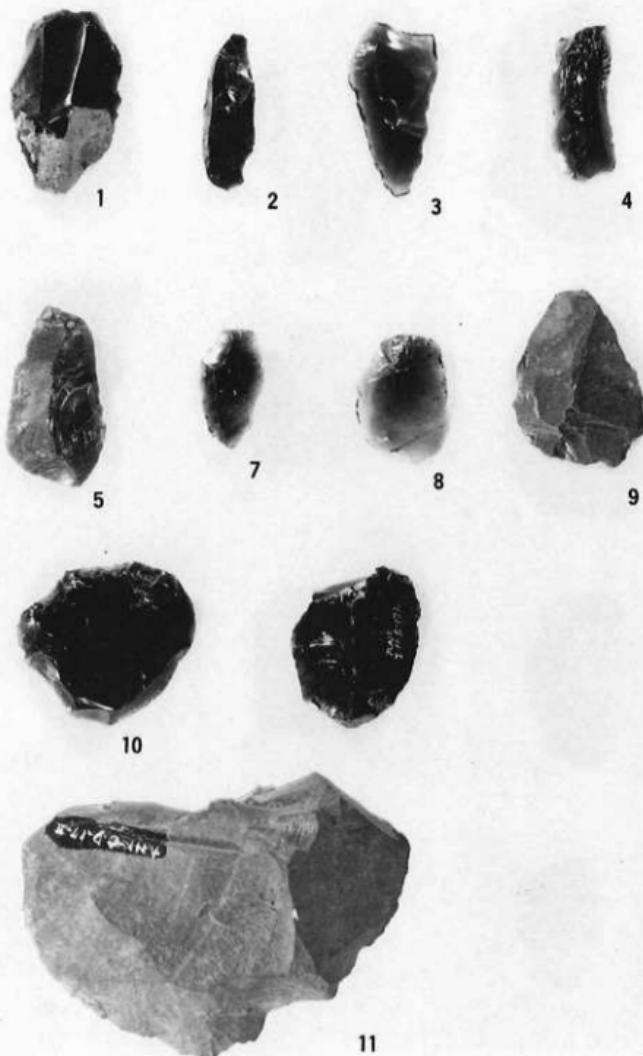


Fig. 69の石器

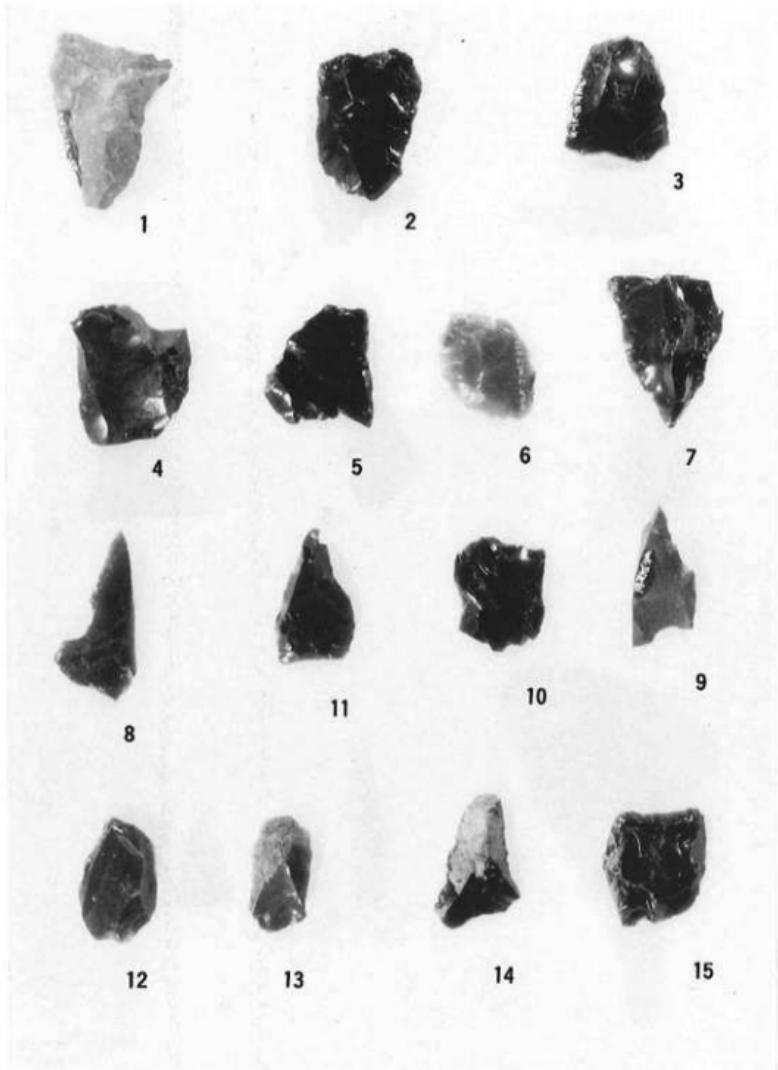


Fig. 70 不定期削片

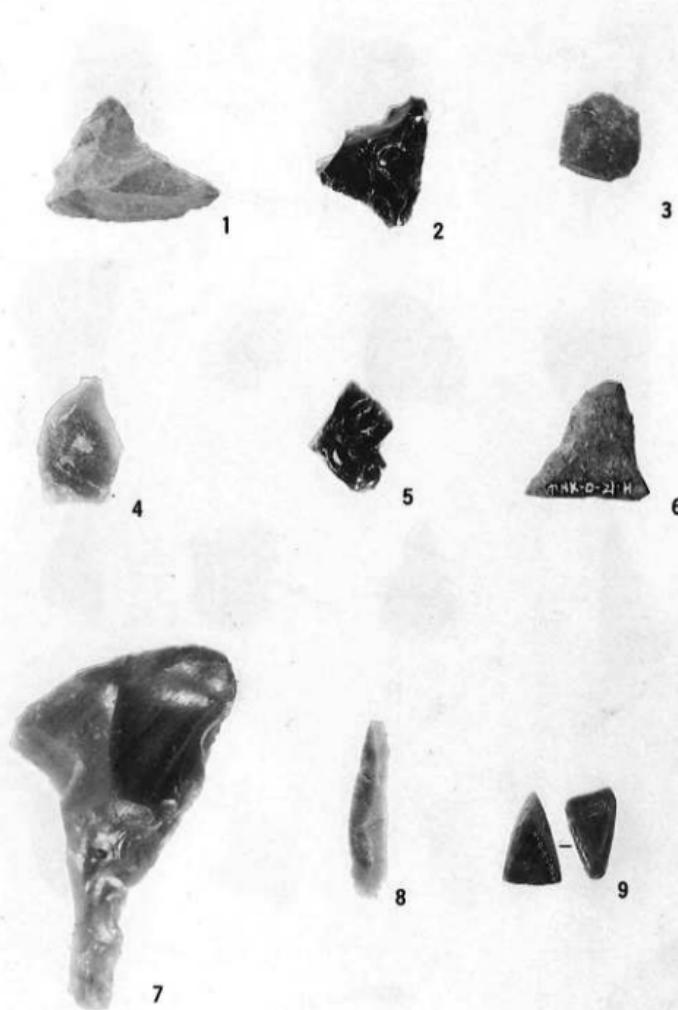


Fig. 71の石器

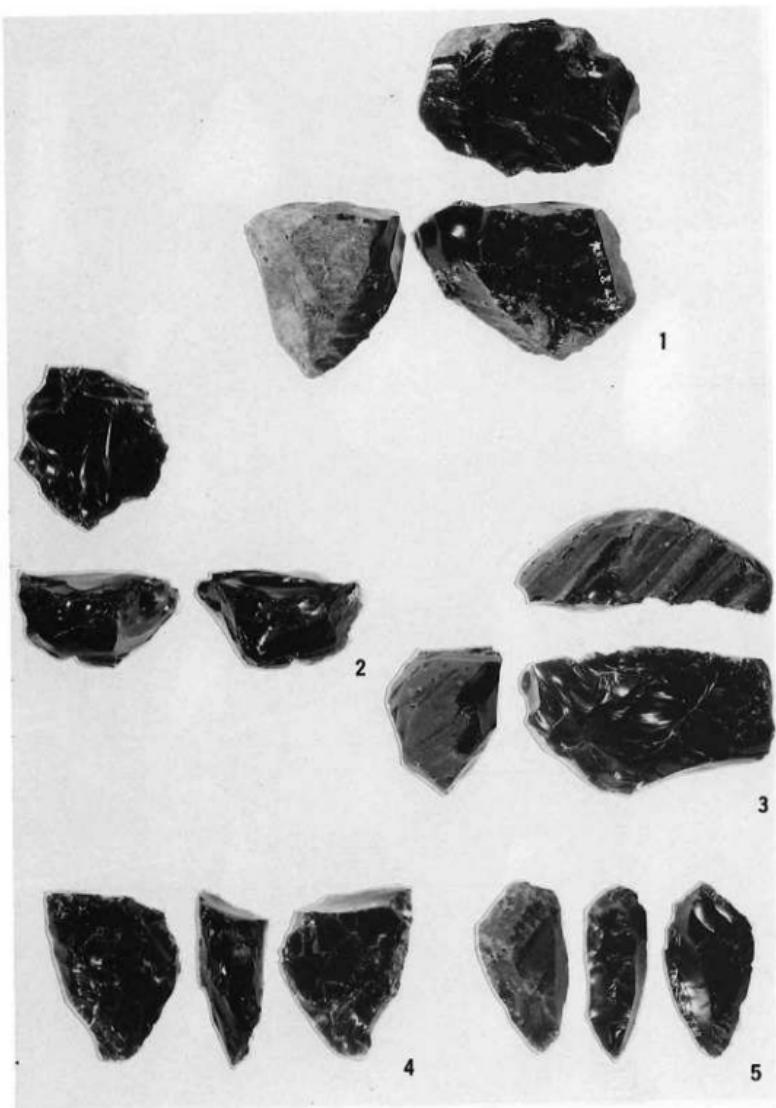


Fig. 72石核



Fig. 73-74の石器



Fig. 75 石器

+

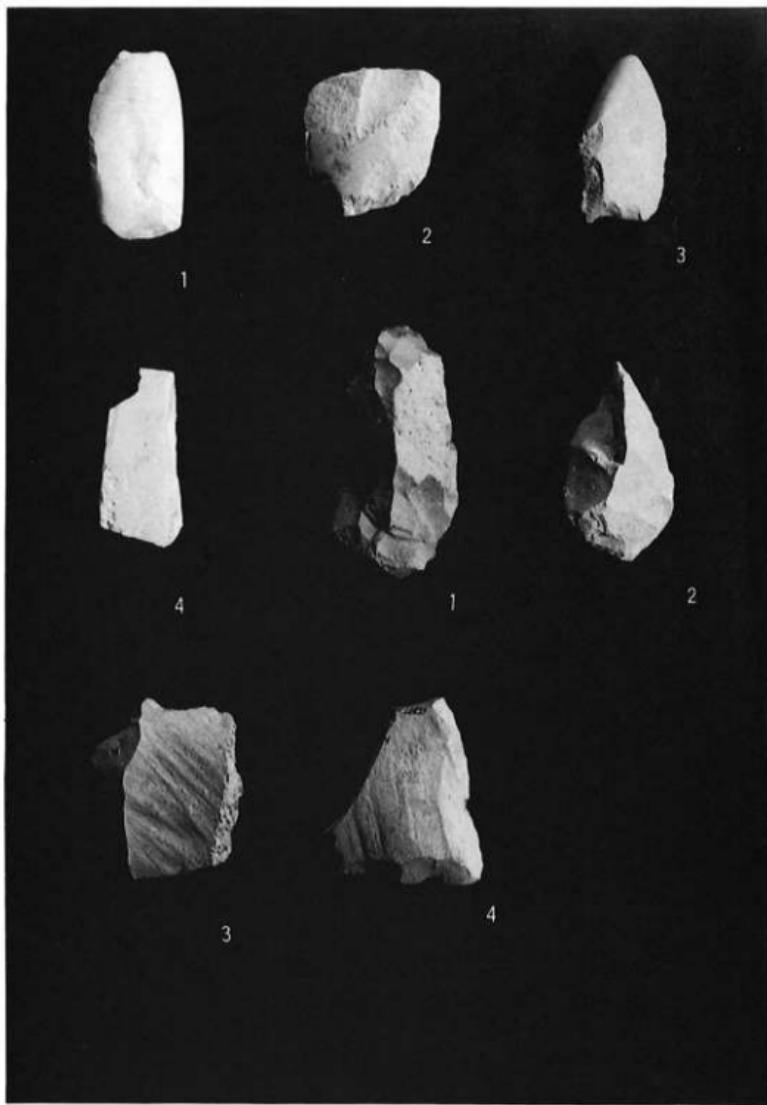


Fig. 76-79の石器

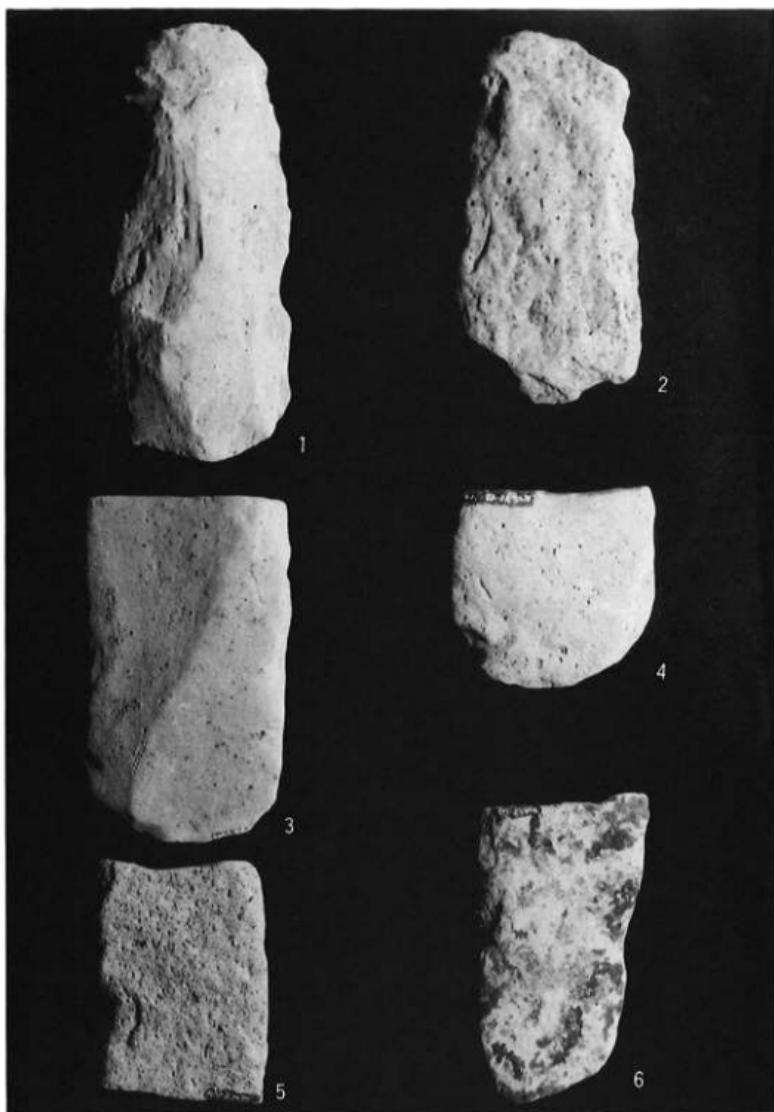


Fig. 77の石器



Fig. 78の石器

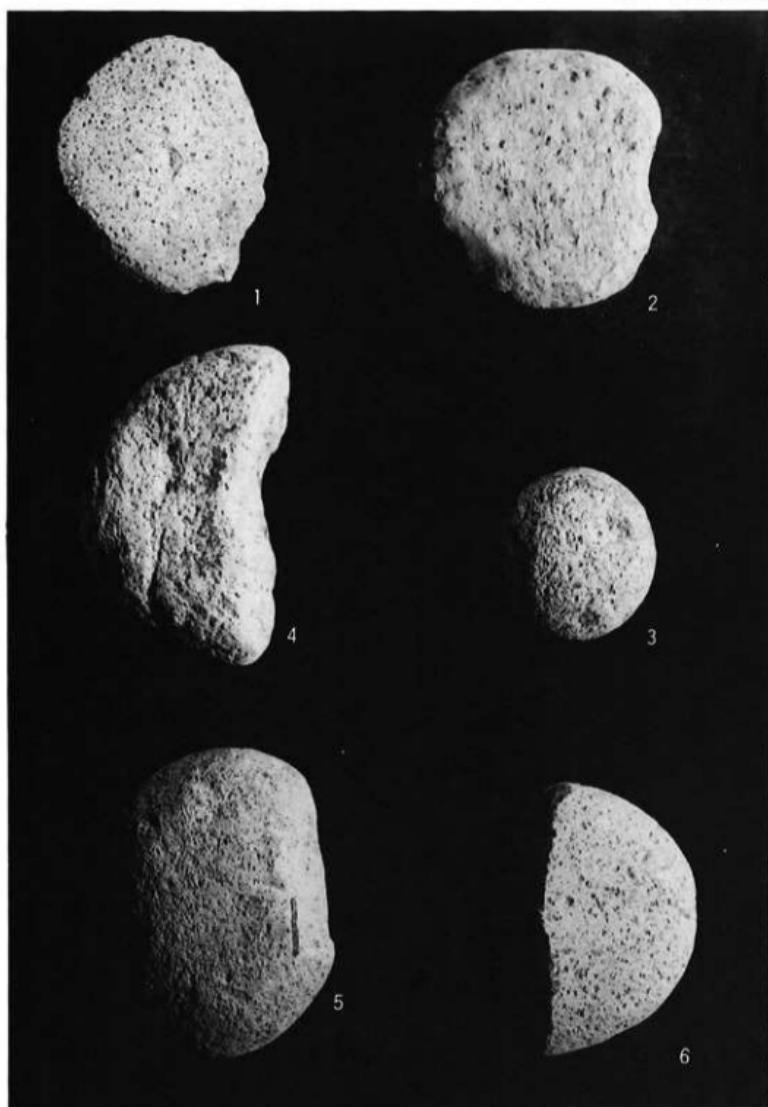
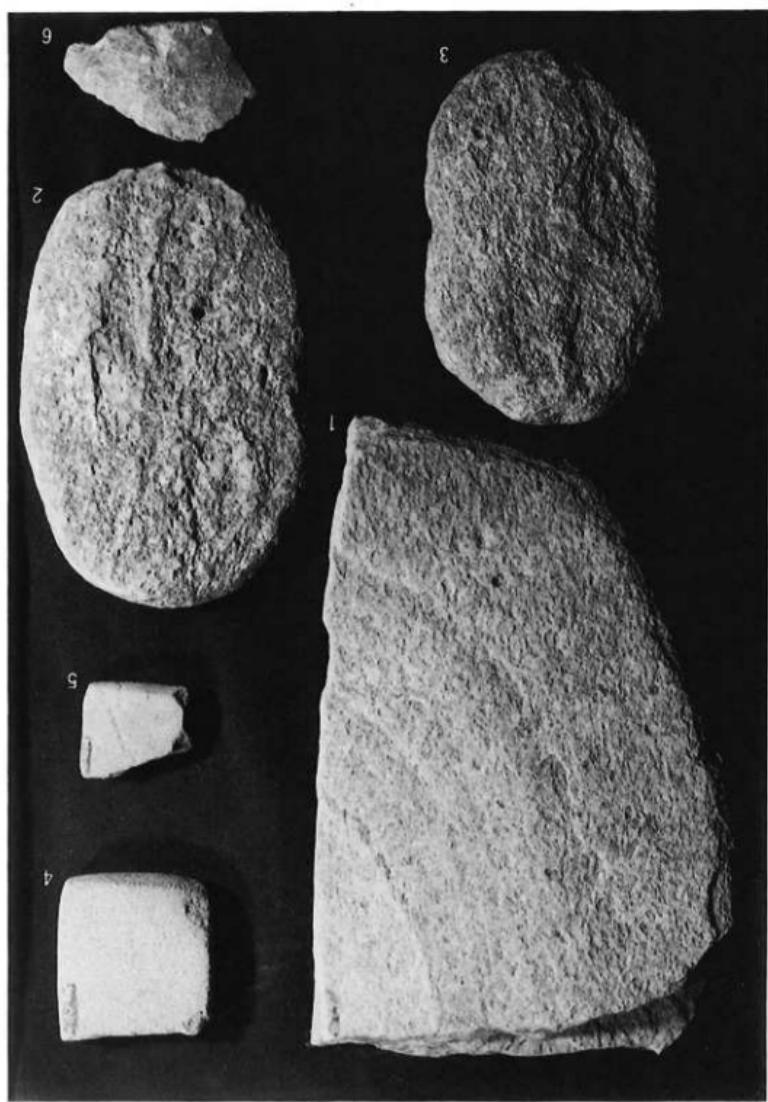


Fig. 80の石器

Fig. 810 石器



長石遺跡



本文目次

| | |
|-----------|-----|
| I 調査 | 503 |
| 1. 地理的位置 | 503 |
| 2. 調査の概要 | 503 |
| 3. 土 層 | 504 |
| II 遺物 | 504 |
| 1. 土 器 | 504 |
| 2. 石 器 | 506 |
| 3. その他の遺物 | 506 |
| IIIまとめ | 507 |

挿図目次

| | |
|---------------------------|-----|
| Fig. 1 調査区周辺地形図 (1/2,000) | 502 |
| Fig. 2 調査区図 (1/1,000) | 503 |
| Fig. 3 土層図 (1/80) | 504 |
| Fig. 4 出土遺物 ① (1/2) | 505 |
| Fig. 5 出土遺物 ② (2/3) | 505 |

図版目次

| | |
|-----------------------------|-----|
| PL. 1 遠跡遠景(南東から), 調査風景(南から) | 511 |
| PL. 2 B 3 区北壁土層, A 2 区南壁土層 | 512 |
| PL. 3 出土遺物 (1/1) | 513 |



Fig. 1 調査区周辺地形図 (1/2,000)

I 調査

1. 地理的位置

本遺跡は、大村市の北端に位置し、大村市松原三丁目に所在する。多良山系の郡岳に派生した丘陵は、武留路山と鉢巻山の間を細長く西にのび、南北両側は谷によって深く開折されている。現地は、標高140mほどの丘陵先端にあり、狭い畠地として利用されている。眼下には階段状の水田が展開し、大村湾を一望することができる。

2. 調査の概要 (Fig. 1・2)

本遺跡は、南北80m×東西150mほどの狭隘な丘陵に黒曜石製石器が散布しており、縄文時代の遺跡として捉えられていた。今回の調査は、遺跡の西側 $\frac{3}{4}$ ほどが道路にかかるために発掘調査を実施したものである。

調査区は、南北方向に並ぶ幅枕を基準として5mメッシュに区切り、南北軸は北から1~5、東西軸は東からA・Bの記号をつけた。調査は、昭和60年11月25日~12月6日の10日間にわたって

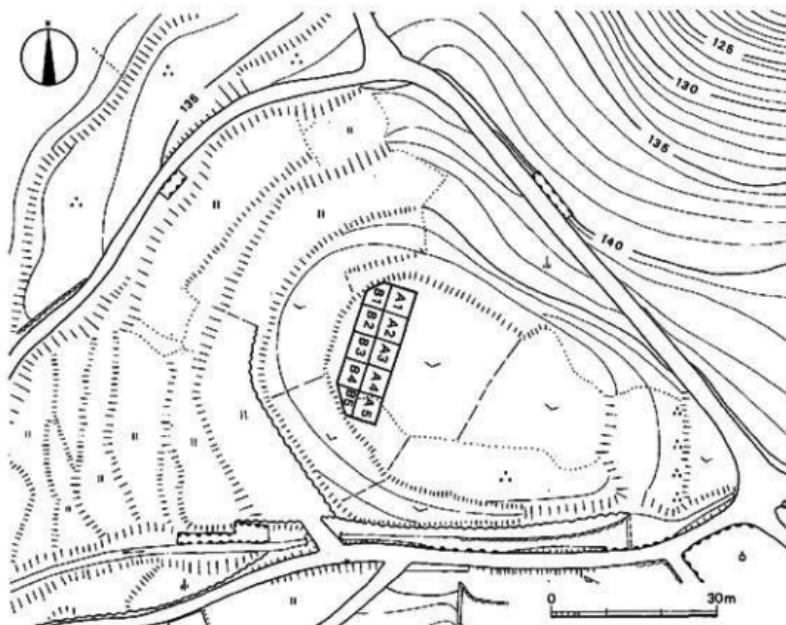


Fig. 2 調査区図 (1/1,000)

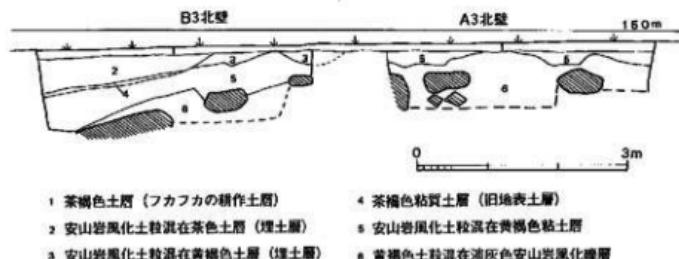


Fig. 3 土層図 (1/80)

て、A 1～5 区、B 1～5 区の 10 グリッド (22 m²) を発掘した。

3. 土層 (Fig. 3)

土層は、1～6 層に分けられるが、大別すると、畑の耕作土層であるⅠ層（1 層）、近世以降の埋土であるⅡ層（2・3 層）、旧地表土であるⅢ層（4 層）、地山上であるⅣ層（5・6 層）に区分できる。Ⅲ層は本来の遺物包含層と考えられるが、畑の開拓に伴う削平によって大半を消滅し、厚さ 1cm～4cm ほどしか残っていなかった。16%ほどの傾斜をもつために、流出してしまったことも考えられる。Ⅲ層からは、B 4 区で土器微片が確認されたにすぎない。他の遺物は、全てⅠ・Ⅱ層から出土したものである。また、遺構も検出されなかった。

II 遺物

今回の調査では、路面外で表面採集されたものも含めて 294 点の遺物が出土している。その内訳は、石器 30 点、須恵器 3 点、中世輪入陶磁器 1 点、近世陶磁器 259 点、土錐 1 点である。

1. 土器 (Fig. 4・PL. 3)

須恵器 3 点と中・近世陶磁器 260 点があるが、そのうち須恵器 2 点を図化した。

須恵器 (1・2)

1・2 ともに有高台杯の底部小片である。1 は、小さな高台で少々ふんばりをもつ。器表は風化を受けやや磨滅している。淡灰色を呈し、微細な白色砂を若干含む。焼成普通。A 1 区 I 層出土。2 は、小さな高台でやや角ばっている。体下半はやや丸みをもつ。灰色を呈し、焼成普通。表採資料。1 は 7 世紀後半、2 は 8 世紀代に位置づけられよう。

輸入陶磁器 (PL. 3-11)

1 点ではあるが、同安窯系青磁皿の小片がみられる。体部と見込の境に段がつき、見込には

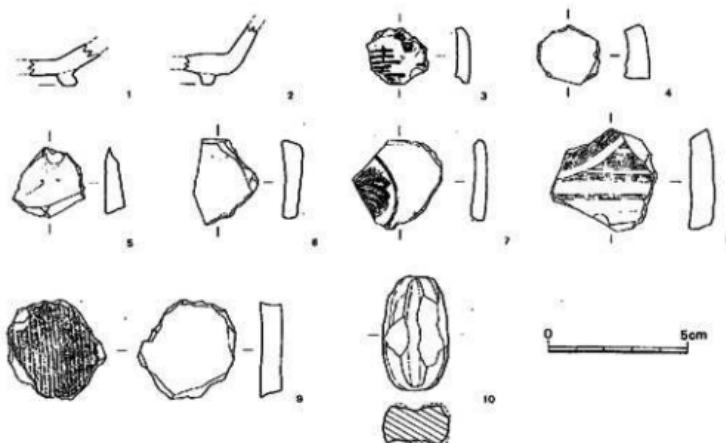


Fig.4 出土遺物① (1/2)

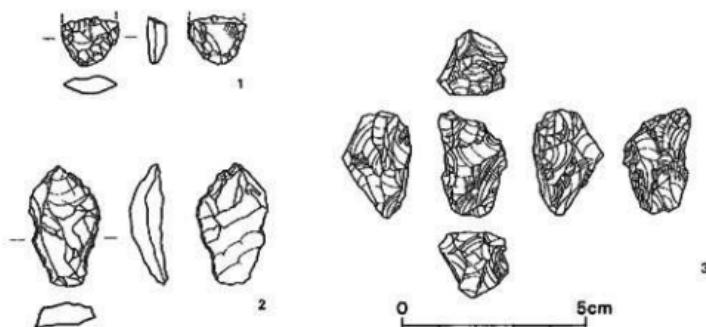


Fig.5 出土遺物② (2/3)

櫛によるジグザグ文様の一部がうかがえる。外面体下半以下には施釉されていない。横田賢次
郎・森田勉氏分類の肌丁一類である。

2. 石器 (Fig. 5)

調査区から7点の黒耀石製剝片と碎片がI層から出土している (A1区2点, A2・A4・B1・B2・B5区各1点) が、ここに固化した石器は表掲資料である。

石鎌 (1)

1は、漆黒色の黒耀石を用いた石鎌あるいはスクレイバーの端部と考えられるもので、周縁には細かい調整加工が施され、丸い形状をなしている。

スクレイバー (2)

灰色のチャット剝片を利用したスクレイバーである。一側辺に細かい調整加工が施されている。

石核 (3)

漆黒色の黒耀石を利用した小形の石核である。多方向から小剝片を剥ぎ取った残核で、縄文時代晚期によくみられるものである。

3. その他の遺物

その他の遺物として、近世陶磁器破片を利用した円盤状陶磁製品が7点、土錘が1点出土している。

円盤状陶磁製品 (3~9)

3~7は磁器、8・9は陶器破片を利用したものである。

3は、「寿」他の文字を描く染付模様部片を利用する。上半部はわりと細かい調整を加えるが、他は粗いつくりである。ウロコ状の剥離が数ヶ所、細かい線状痕が外面にはいる。径2.3×1.9cm、厚さ0.5cm、重さ2.8gを測る。A4区I層出土。

4は、伊万里系白磁模様部片を利用している。全体にわりと細かい調整を加えているが、梢円形状をなしている。外面に数条の線状痕がうかがえる。径2.2×2cm、厚さ0.9cm、重さ5gを測る。B1区I層出土。

5は、伊万里系の白磁瓶?体部片を利用。全体に風化を受け若干磨滅している。径2.4cm、厚さ0.6cm、重さ4.1gを測る。B3区I層出土。

6は、伊万里系の鉢口縁部片を利用しているが、右側縁は折断面のままで、不整形をなし、あまり丁寧なつくりではない。径2.9×2.2cm、厚さ0.7cm、重さ4.9gを測る。B3区I層出土。

7は、所謂くらわんか茶碗の口縁部片を利用したもので、左側縁はわりと細かい調整を加えるが、右側縁は折断面を残している。外面には印盤手の桐文様が施されている。径3.2×3cm、厚さ0.5cm、重さ5.7gを測る。B4区I層出土。

8は、唐津系の斐体部片を利用している。褐色の地に内面上方まで白い刷毛目を施し、表裏とも透明釉が薄くかかる。径3.4×3.2cm、厚さ0.8cm、重さ11.6gを測る。A5区I層出土。

9は、唐津系の擂鉢体部片を利用したもので、表裏ともに褐色の釉がかかる。径3.7×3.1cm、厚さ0.7cm、重さ11.6gを測る。

以上の製品は、全て近世陶磁器を利用している。したがって、近世以降におはじき・穴一・お手玉・石ケリなどの遊具として使用されたものと考えられよう。

土鍤 (10)

土製の有溝土鍤である。小判形をなし、中央に浅い溝が走る。上・下面ともに剝落がみられる。長さ4.1cm、幅2.4cm、現存の重さ12.6gを測る。A1区I層出土。

註1. 横田賀次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』
九州歴史資料館 1978

III まとめ

今回の調査において、石器・須恵器などの若干の遺物が出土したが、後世の削平等によって遺物包含層の残りが悪く、遺構も検出されなかった。

時期が判断できる縄文土器の出土がみられなかつたので、時期をおさえることはできないが本遺跡は狩猟のための一時的な野営地であり、もともと小規模な遺跡であったことが考えられる。その中心は表探資料からも路線外の東側傾斜面にあったことが推測できよう。

P L A T E S

(長石遺跡)



遠路遠景（南東から）



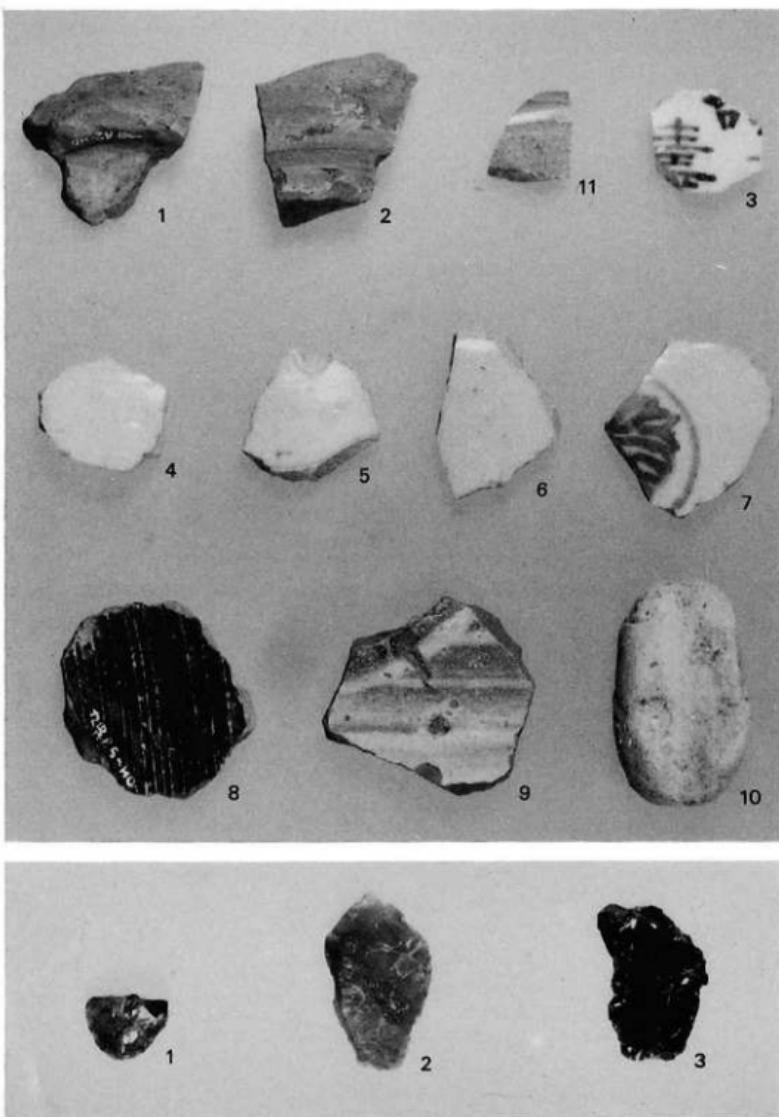
調査風景（南から）



B3区北壁土層



A2区南壁土層



出土遺物 (1/1)

III 東彼杵地区の調査

外園遺跡

東彼杵地区的調査

地形と環境

東彼杵町は、南を大村市に北を川棚町に挟まれ、東側を佐賀県嬉野町で県境を接している。交通面からは、県北部と県南部を結ぶ中継地点としての役割と佐賀県側からの出入口として要所を占めている。

地形的には、海岸線まで多良山系からのびた舌状台地がせまり、低平地が少なく概して山がちの地形でもっとも高い山が遠日山(849m)にあたる。ただ、海岸線は入り込んだ入り江や半島が少なく比較的直線的な、景観をなしている。
(註1)

このような地形での地質は、古第三紀中新世を基盤に安山岩や玄武岩質の火山性岩石で覆われている。町内の背後にせまる台地には、大野原の高位溶岩台地と赤木の中位台地がひろがりこの台地では溜池の多いのが特色であり、また農業関係ではお茶の生産がもっとも盛んで、茶園の占める面積は、県内の51.6%にのぼっている。また、彼杵川を挟んで虚空茂山系が赤木台地と対峙するように北側に広がっている。

河川では、彼杵川が町内での最大の平地を形成し、千綿川は、竜頭泉等の美しい渓谷を作り出し、大村湾へ流れこんでいる。

周辺の遺跡

東彼杵町は近年圃場整備が始まり、遺跡が発見される予測はあったものの、昭和60年から今日までの開発により5箇所が新たに加えられ、現在75箇所が判知されるに至っている。

旧石器時代の遺跡は標高約350mを越える熊郷、中岳郷の溜池群に集中して発見されており、その一つに42・無堤遺跡周辺から、剝片・尖頭器・台形様石器・尖頭器の表面採集(註2)の報告を受けている。また60・綿打池においても、細石核・台形様石器・ナイフ形石器が同様採集されている。このほか、前回の横断道調査報告があった、64・野中・19・松山(註3) A遺跡等においても、ナイフ形石器・細石刃・尖頭器・台

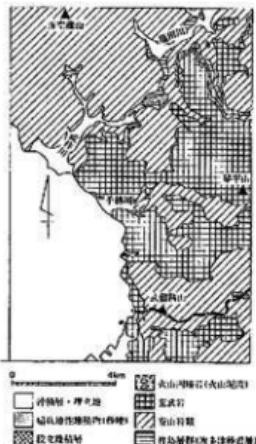


Fig. 1 東彼杵地区地質図



Fig. 2 東彼杵地区地形分類図

形石器が出土している。

縄文時代の遺跡はこれまで、時期や性格等が不明確であったが、30・宮田A遺跡・野中遺跡の発掘調査により、縄文時代晩期の土器（組織痕土器）や石器（扁平打製石斧）が出土している。また、圃場整備事業に伴う調査では、67・白井川遺跡からは縄文時代後期と晩期の土器を出土していて、平野部に位置する遺跡間の関係が今後検討課題となる。

弥生時代の遺跡についての資料は、調査事例が増加しつつあり、宮田A遺跡の中期から後期にかけての土器の出土がある。また、白井川遺跡では標高4~12mの水田部に箱式石棺・石蓋土壙・壺塚墓の計22基を検出しており、実態が解明されつつある。

古墳時代における遺跡分布状況は、

町中心部東側の三根郷に前方後円墳の
18・ひさご塚古墳、11~14・彼杵川古
墳群第1~第4号墳、15~16・上杉古
墳群1~2号墳、17・ワレ権見塚古墳、
33・瀬戸古墳があり、古墳時代後期の
群集墳のありかたを知る上で貴重な古
墳である。

歴史になると、調査資料が不明
で、彼杵郡衛については、いまだに推
察の域を出ていない。中世では、8・
川井川内遺跡・66・岡道跡から遺構、
遺物とともに検出土し、11世紀後半か
ら12世紀前半を中心に14世紀までの生
活跡が調査で明らかになっている。ま
た、この頃になると山城の築城が増え、
町内にも5箇所の城跡が周知されてい
る。その一つ串ノ島城は、南北朝時代
に、東彼杵の領主であった江串三郎入

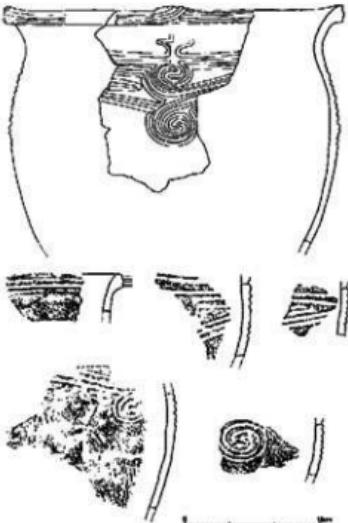


Fig. 3 白井川遺跡出土

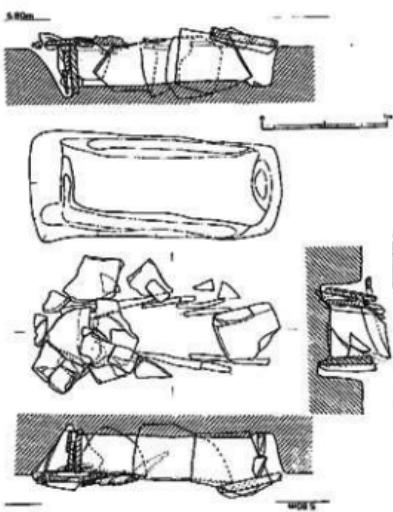


Fig. 4 白井川遺跡検出(弥生時代の石棺)

道の居城であったと言われ、海岸線が突き出た岬の里郷串の島にある。このほか、戦国時代大村純伊が、有馬氏に敗れその後領地の回復のため兵を挙げ攻め落したのが、2・松岳城と伝えられる。その後大村純忠の頃、大村領防備のため、築かれたのが、阪本郷にある7・重の城である。(元和4)この他、32・小園城・35・小峰城が挙げられるが、いずれも由緒不明となっている。また、当地では寺院に関する資料として滑石製五輪塔が各所に散見し、字名についても寺院に関する地名が残っているが、実態は不明である。

次に近世における宗教資料として野中遺跡北側にある34・キリシタン墓碑がある。碑には、「花十字紋、一瀬ジュリアン、元和七年(1621)」銘が記されており、江戸時代のキリスト教禁教政策後も信者が潜伏していたことを物語っている。

さきに、近年の東彼杵町の交通体系に一部触れたが近世においても、長崎街道の要所として平戸・佐賀・長崎の交点として栄え、海産物や農産物の集散地としての役割を担っていた。今日でも鰯肉の問屋があるのは、この当時の名残である。

(町田)

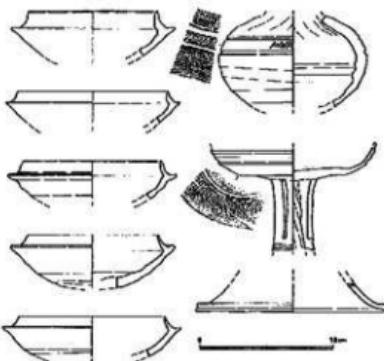


Fig. 5 彼杵川古墳出土

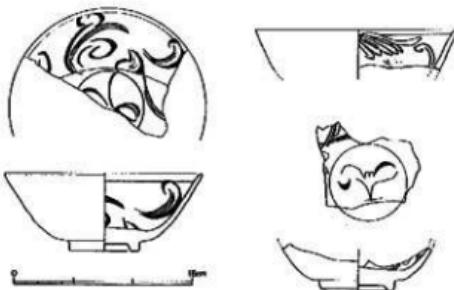


Fig. 6 白井川遺跡出土

Tab. 1 東彼杵町道路地名表

| 番号 | 地名 | 沿革所在地 | 立地 | 古墳・遺物 | 時代 | 文献 |
|----|--------------|--------------|--------------------|--------------------|--------|----|
| 1 | 東彼杵町藏木原田 | 東彼杵町藏木原田 | 平野 標高5m | 巨神石 | 中世 | |
| 2 | 松坂城 | ・ 朝鮮 | 山 標高200m | | * | 1 |
| 3 | 東彼杵町内道跡 | ・ 法吉寺跡(山井田内) | 台地 標高60m | 磨擦石刮削器、青磁 | 桃文、中世 | |
| 4 | 貴池田内道跡 | ・ 芳賀御前若狭 | * * 30m | * | * | |
| 5 | 貴池田内道跡 | * | * * | * | * | |
| 6 | 赤木城 | ・ 赤木村 | 丘陵 * 150m | 磨擦石刮削器 | 先土器・桃文 | |
| 7 | 赤(かじ)の城 | * | 山 標高150m | | 中世 | 1 |
| 8 | 平山遺跡 | ・ 芳賀御前平山 | 平地 標高150m | | 桃文 | |
| 9 | 牛の頭(うしのと) | ・ 赤木牛の頭 | 丘陵 標高100m | 磨擦石片、石斧、石錺 | * | |
| 10 | 赤木城跡 | ・ 三根赤木 | * * 100m--120m | * | * | |
| 11 | 波佐見山城跡第4号塁 | ・ 宇上杉 | 平野 * 15m | | 古墳 | |
| 12 | 須作山古墳群第3号墳 | * | * * | | * | |
| 13 | 須作山古墳群第2号墳 | * | * * | | * | |
| 14 | 波作山古道跡第1号墳 | * | * * | | * | |
| 15 | 上野古墳群1号 | * | * | * | * | |
| 16 | 上野古墳群2号 | * | * | * | * | |
| 17 | ツレ山古墳 | ・ 霧峰古墳谷 | * 10m | | * | |
| 18 | 波作山古道跡 | ・ 古金屋通上 | * | 鉄刀3把、銅鏡(多葉) | * | 2 |
| 19 | 波山A道跡 | ・ 波作山御所山 | 丘陵 標高60m--70m | | 先土器・桃文 | 7 |
| 20 | 波山B道跡 | * | * 60m--90m | | * | |
| 21 | 名坂E道跡 | ・ 名切 | * 90m--100m | 磨擦石刮削器 | 桃文 | |
| 22 | 名坂C道跡 | * | * 80m--90m | | 先土器・桃文 | |
| 23 | 名坂D道跡 | * | * 50m | | * | 7 |
| 24 | 名坂B道跡 | * | 台地先端部附近 標高30m--40m | 石斧、石錺、スライバー、磨擦石刮削器 | * | 3 |
| 25 | 名坂D道跡 | * | 台地 標高70m--80m | 磨擦石刮削器 | * | |
| 26 | 外園跡 | ・ 手給御所 | 丘陵 * | | 桃文 | |
| 27 | 平(アリ)A道跡 | ・ 里立女子農学園 | * 100m | | 先土器・桃文 | |
| 28 | 平(アリ)B道跡 | * | * 120m--140m | | * | |
| 29 | 赤木込道跡 | ・ 二本赤木込 | * 100m | 磨擦石刮削器、桃文鏡類、货币、古鏡 | 桃文 | |
| 30 | 吉田A道跡 | ・ 吉田 | 平野 * 10m | * | * | 7 |
| 31 | 吉田B道跡 | * | * * | | * | |
| 32 | 小瀬城 | ・ 小瀬 | 丘陵 * 30m | | 中世 | 1 |
| 33 | 福岡古墳 | ・ 福岡西原 | 台地 * 30m | | 古墳 | |
| 34 | 東彼杵町のキシタケ山遺跡 | * | 1413 | 丘陵 * 50m | 遺跡 | |
| 35 | 小瀬城 | * | 山 * 80m--70m | | 中世 | 1 |
| 36 | 赤羽内道跡 | ・ 半田町内別平 | 丘陵 * 250m | | 桃文 | |
| 37 | 三井木場道跡 | * | 三井木場 | * | * | |
| 38 | 太ノ瀬内道跡 | ・ 太ノ瀬郷太ノ瀬 | 台地 * 330m | 磨擦石刮削器 | 先土器・桃文 | |
| 39 | 足見道跡 | ・ 五日足見 | * 430m | 磨擦石刮削器、石錺 | * | |
| 40 | かのえら道跡 | ・ 中島村かのえら | 丘陵 * 300m | | * | |

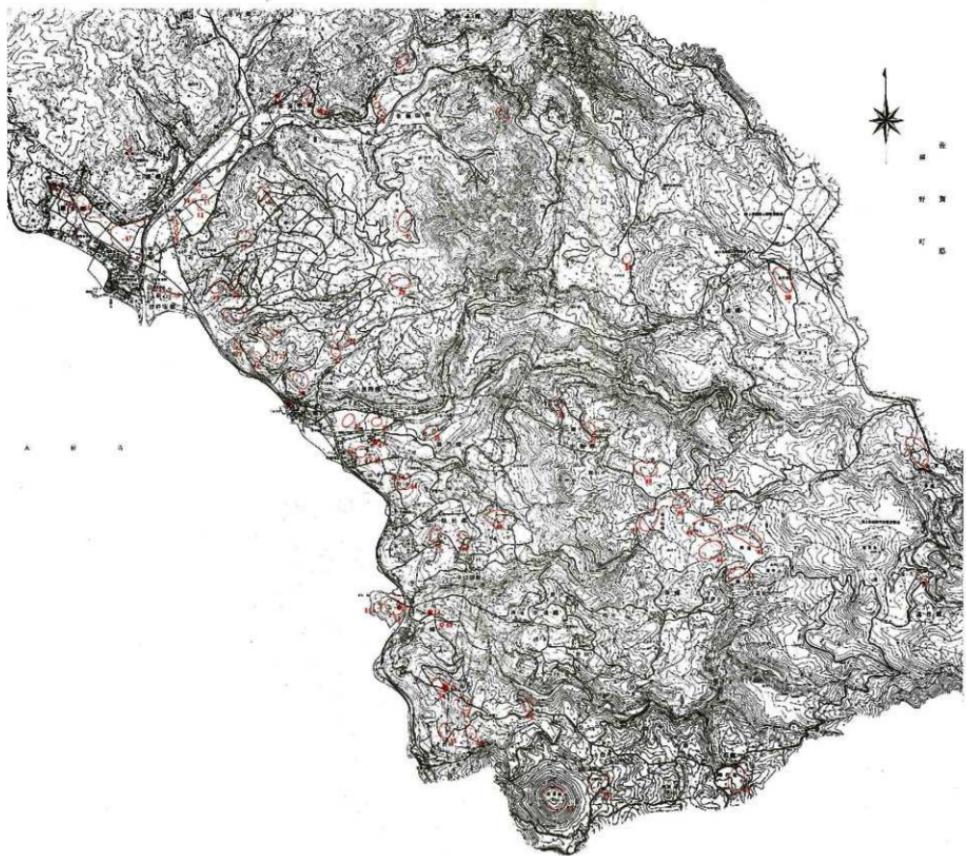


Fig. 7 周辺道路分布図（東彼杵町）

Tab. 2 東彼杵町遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡所在地 | 立地 | 出土遺物 | 時代 | 文献 |
|----|-----------|----------------|----------------------|----------------------|-----------|----|
| 41 | 半上道路 | 東波内町中岳郡半上山 | 台地 標高410m | 黒曜石片 | 縄文 | |
| 42 | 黒堤遺跡 | * 黒堤 | 丘陵 * 370m | 黒曜石片 | 先土器・縄文 | |
| 43 | 黒堤遺跡 | * * | 台地 * 380m | 黒曜石 | * | * |
| 44 | 食谷遺跡 | * * 食谷 | * * 390m | | 縄文 | |
| 45 | 中途遺跡 | * 中岳郡中途 | * * 380m | | 先土器・縄文 | |
| 46 | 四ツ道跡 | * 墓寄大久保、中岳郡四ツ道 | * * 370m | | 縄文 | |
| 47 | 三井木場浜遺跡 | * 中岳郡三井木場 | 丘陵 * 350m | | 先土器・縄文 | |
| 48 | 八幡遺跡 | * 犬地郷岐地 | * * 150m ~ 160m | 黒曜石片 | * | * |
| 49 | 野間遺跡 | * | * | | * | * |
| 50 | 大久保遺跡 | * | * 標高60m | 黒曜石片 | * | * |
| 51 | 串島古墳 | * 串島等の島 | 坪 * 15m | | 内原 | |
| 52 | 串島遺跡 | * * | 台地 * 20m | 黒曜石片 | 先土器・縄文・中期 | 1 |
| 53 | 馬鹿頭石塚 | 全 全 平 | 平野 * 10m | | 平安 | |
| 54 | 鬼流跡 | * | 台地 * 130m | 黒曜石片 | 先土器・縄文 | |
| 55 | 千鍾才賀田古墳群 | * * 才賀田 | 丘陵 * 50m | | 古墳 | |
| 56 | 須ノ久保 | * 一ツ石標跡ノ久保 | * * 90m | 黒曜石片 | 縄文 | |
| 57 | 千足高野 | * * 平原高野 | * * 150m | 黒曜石片 | 先土器・縄文 | |
| 58 | 一つ右台地遺跡 | * * 白地 | 台地 * 150m | | 縄文 | |
| 59 | 太田氏池遺跡 | * * 太田氏池 | 丘陵 * 250m | | 先土器・縄文 | |
| 60 | 猪打浜遺跡 | * * 猪打浜 | * * 250m | マイクロコア | * | * |
| 61 | 久良遺跡 | * 佐賀郡下久良久保 | 山麓 * 50m | 黒曜石片 | 縄文 | |
| 62 | 五百遺跡 | * * 大野原 | 台地 * 510m | | 先土器 | |
| 63 | 武留路山城 | * 武留路郡 | 山腹 * 300m ~ 341m | | 中後 | 4 |
| 64 | 野中遺跡 | * 豊前郡野中 | 丘陵 * 50m ~ 70m | 黒曜石片、黒曜石 | 縄文 | ? |
| 65 | 轟遺跡 | * 岩本郡轟 | * * 5m ~ 10m | 青・白陶、磨山器、穿孔式土器 | 弥生・中世 | |
| 66 | 岡田路 | * * 宇四 | * * * * | 穿孔式土器、磨毛器、土師器、青・白陶、陶 | 中世 | 5 |
| 67 | 白井川遺跡 | * * 宇井町 | 平野 - 流れ地 標高 5m ~ 10m | 縄文式土器、屋平打製石斧、石刀、石鉤、陶 | 縄文・中世 | 6 |
| 68 | 法吉寺五輪塔 | * 法吉寺周辺内 | 丘陵 標高60m | 石塔 | 中世 | |
| 69 | ちょいのどう五輪塔 | * | * * 50m | * | * | |
| 70 | 安永寺五輪塔 | * 安永寺大安 | * * 6m | * | * | |
| 71 | 中ノ原五輪塔 | * 千和新郷西宿 | 高原 * 3m | * | * | |
| 72 | 諦心寺五輪塔 | * 諦心寺 | 平原 * 10m | * | * | |
| 73 | 江の岸五輪塔 | * 里郷等の島 | 坪 * 10m | * | * | |
| 74 | 尼寺五輪塔 | * * 霧場 | 丘陵 * 30m | * | * | |
| 75 | 社會五輪塔 | * * 大道 | * * 110m | * | * | |

- 註 1. 長崎県「土地分類基本調査早岐」 1975
2. 久原春二・川畠敏則両名の表面採集
3. 長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書目」
長崎県文化財調査報告書第93集 1989
4. 長崎県東彼杵町教育委員会「白井川遺跡」東彼杵町文化財調査報告書第3集 1989
5. 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査叢報目」 長崎県文化財調査報告書第50集 1980
6. 長崎県東彼杵町教育委員会「川井川内遺跡」東彼杵町文化財調査報告書第1集 1986
7. 長崎県教育委員会「長崎県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書第87集 1987
8. 註 7 と同じ
9. 註 7 と同じ
10. 「肥前国風土記」・「延喜式」
11. 註 6 と同じ
12. 長崎県東彼杵町教育委員会「岡遺跡」東彼杵町文化財調査報告書第2集 1988
13. 新人物往来社「日本城郭体系17」 1980
14. 現在整理中
15. 大石一久「大村地方における中世期石造美術について(その1)」「大村史談」
16. 註 3 と同じ

表文献

1. 註13と同じ
2. 註 5 と同じ
3. 註 7 と同じ
4. 「大村郷村記」・「深江記」
5. 註12と同じ
6. 註 4 と同じ
7. 註 3 と同じ

外園遺跡



本文目次

| | |
|--------------|-----|
| I 調査 | 533 |
| 1. 地理的位置 | 533 |
| 2. 調査の概要 | 533 |
| 3. 土層 | 536 |
| II 造構 | 541 |
| 1. 無石土壌および土壤 | 541 |
| III 出上遺物 | 556 |
| 1. 土器 | 556 |
| ①縄文式土器 | 556 |
| ②弥生式土器 | 557 |
| ③輸入陶磁器 | 558 |
| ④国产陶磁器 | 562 |
| ⑤土鍤 | 564 |
| 2. 石器 | 567 |
| ①旧石器時代の石器 | 567 |
| ②縄文時代の石器 | 568 |
| IV 総括 | 611 |

挿図目次

| | | |
|---------|------------------------------|-----|
| Fig. 1 | 遺跡周辺地形図 (1/2,000) | 534 |
| Fig. 2 | 調査グリッド配置図 (1/1,000) | 535 |
| Fig. 3 | 土層図 ① (1/60) | 537 |
| Fig. 4 | 土層図 ② (1/60) | 539 |
| Fig. 5 | 1号遺構実測図 (1/20) | 542 |
| Fig. 6 | 2号遺構実測図 ① (1/40) | 543 |
| Fig. 7 | 2号遺構実測図 ② (1/40) | 545 |
| Fig. 8 | 3号遺構実測図 (1/20) | 547 |
| Fig. 9 | 4号遺構実測図 (1/20) | 548 |
| Fig. 10 | 5号遺構実測図 (1/20) | 549 |
| Fig. 11 | 6号遺構実測図 (1/20) | 550 |
| Fig. 12 | 7号遺構実測図 (1/20) | 551 |
| Fig. 13 | 8号遺構実測図 (1/20) | 552 |
| Fig. 14 | 9号遺構実測図 (1/20) | 553 |
| Fig. 15 | 10号遺構実測図 (1/20) | 554 |
| Fig. 16 | 11号遺構実測図 (1/20) | 555 |
| Fig. 17 | 縄文土器実測図 (1/2) | 556 |
| Fig. 18 | 弥生土器実測図 (1/2) | 557 |
| Fig. 19 | 輸入陶磁器実測図 (1/2) | 559 |
| Fig. 20 | 輸入陶磁器および国产の上器実測図 (1/2) | 561 |
| Fig. 21 | 瓦質土器および石鍋実測図 (1/3) | 563 |
| Fig. 22 | 土鍤実測図 (1/2) | 565 |
| Fig. 23 | ナイフ形石器個体別比較図 | 568 |
| Fig. 24 | 石器実測図 ① (2/3) | 569 |
| Fig. 25 | 石器実測図 ② (2/3) | 570 |
| Fig. 26 | 石器実測図 ③ (2/3) | 571 |
| Fig. 27 | 石器実測図 ④ (2/3) | 572 |
| Fig. 28 | 石器実測図 ⑤ (2/3) | 574 |
| Fig. 29 | 石器実測図 ⑥ (2/3) | 575 |
| Fig. 30 | 石器実測図 ⑦ (2/3) | 576 |
| Fig. 31 | 石器実測図 ⑧ (2/3) | 577 |
| Fig. 32 | 石器実測図 ⑨ (2/3) | 578 |

| | |
|-------------------|-----|
| Fig.33 石器実測図⑩ | 580 |
| Fig.34 石器実測図⑪ | 581 |
| Fig.35 石器実測図⑫ | 582 |
| Fig.36 石器実測図⑬ | 583 |
| Fig.37 石器実測図⑭ | 584 |
| Fig.38 石器実測図⑮ | 585 |
| Fig.39 石器実測図⑯ | 586 |
| Fig.40 石器実測図⑰ | 587 |
| Fig.41 石器実測図⑱ | 588 |
| Fig.42 石器個体別重量グラフ | 589 |
| Fig.43 石器個体別最長グラフ | 590 |
| Fig.44 石器個体別最幅グラフ | 591 |
| Fig.45 石器個体別最厚グラフ | 592 |
| Fig.46 石器実測図⑲ | 593 |
| Fig.47 石器実測図⑳ | 595 |
| Fig.48 石器実測図㉑ | 596 |
| Fig.49 石器実測図㉒ | 597 |
| Fig.50 石器実測図㉓ | 598 |
| Fig.51 石器実測図㉔ | 599 |
| Fig.52 石器実測図㉕ | 600 |
| Fig.53 石器実測図㉖ | 601 |
| Fig.54 石器実測図㉗ | 602 |

表 目 次

| | |
|--------------|-----|
| Tab. 1 石器計測表 | 604 |
| Tab. 2 石器計測表 | 605 |
| Tab. 3 石器計測表 | 606 |
| Tab. 4 石器計測表 | 607 |
| Tab. 5 石器計測表 | 608 |
| Tab. 6 石器計測表 | 609 |
| Tab. 7 石器計測表 | 610 |

図版目次

| | | |
|--------|--------------|-----|
| PL. 1 | 遺跡遠景および遺跡近景 | 615 |
| PL. 2 | 遺跡調査風景 | 616 |
| PL. 3 | 遺跡調査風景 | 617 |
| PL. 4 | 土層① | 618 |
| PL. 5 | 土層② | 619 |
| PL. 6 | 土層③ | 620 |
| PL. 7 | 土層④ | 621 |
| PL. 8 | 土層⑤ | 622 |
| PL. 9 | 土層⑥ | 623 |
| PL. 10 | 土層⑦ | 624 |
| PL. 11 | 1・12号遺構 | 625 |
| PL. 12 | 2号遺構① | 626 |
| PL. 13 | 2号遺構② | 627 |
| PL. 14 | 2号遺構③ | 628 |
| PL. 15 | 4・5号遺構 | 629 |
| PL. 16 | 6・7号遺構 | 630 |
| PL. 17 | 9・10号遺構 | 631 |
| PL. 18 | 11号遺構 | 632 |
| PL. 19 | 13号遺構 | 633 |
| PL. 20 | 遺物出土状況 | 634 |
| PL. 21 | 縄文土器(2/3) | 635 |
| PL. 22 | 弥生土器(2/3) | 636 |
| PL. 23 | 輸入陶磁器(2/3) | 637 |
| PL. 24 | 輸入陶磁器(染付) | 638 |
| PL. 25 | 輸入陶磁器および国産土器 | 639 |
| PL. 26 | 瓦質土器 | 640 |
| PL. 27 | 土鍋① | 641 |
| PL. 28 | 土鍋② | 642 |
| PL. 29 | 石器① | 643 |
| PL. 30 | 石器② | 644 |
| PL. 31 | 石器③ | 645 |
| PL. 32 | 石器④ | 646 |

| | | |
|--------|-----|-----|
| PL. 33 | 石器⑤ | 647 |
| PL. 34 | 石器⑥ | 648 |
| PL. 35 | 石器⑦ | 649 |
| PL. 36 | 石器⑧ | 650 |
| PL. 37 | 石器⑨ | 651 |
| PL. 38 | 石器⑩ | 652 |
| PL. 39 | 石器⑪ | 653 |
| PL. 40 | 石器⑫ | 654 |
| PL. 41 | 石器⑬ | 655 |
| PL. 42 | 石器⑭ | 656 |
| PL. 43 | 石器⑮ | 657 |
| PL. 44 | 石器⑯ | 658 |

I 調査

1. 地理的位置

外國遺跡は、大村湾中央の東岸に面した東彼杵郡東彼杵町千錦宿郷に所在する。町内の地形は、全体に山地が多く、平地に乏しい。東側は、佐賀県と境を接し、大野原の高位溶岩台地が形成され、これらを刻む谷に岩屋川内の峡谷や千錦狹谷が見られる。峡谷には、近乍龍頭泉の滝を中心リゾート地としても整備され、賑わいを見せている。

また、ここに源を発する千錦川は、西流し大村湾に注ぎ込み、河口部は三角洲を形成し、若干の平野部が開けている。^(甲1)この水田部には、宮田遺跡が位置し、高速道路敷地内の調査が実施されている。

河口北側には、かつて、長崎街道の千錦宿として賑わいを見せた集落が広がり、その西側を国道34号線とJR大村線が並行している。

遺跡は、千錦狹谷右岸に張り出した国道から分岐した、町道千錦大野原線を發する途中の、標高63~76mの鞍部になった地形に位置する。

北側は標高約80mの山林になり、西側は大村湾に向って急傾斜地となっている。南側はゆるやかな斜面が続き柑橘園と水田に利用され、遺跡の主体部と見られる地域である。

2. 調査の概要

外國遺跡の当初の調査計画面積は、対象面積4170m²。道路に対し、東西に広がると予測されていた。しかし、この予想は山林やミカンが繁茂していた時の状況であったため、地形の把握が十分になされていなかった。全体を伐採してみると、地形の傾斜は北から南に向ってゆるやかになっていることが認められた。

その結果、遺跡はこれまで把握されていた標高の高い部分でなく低い部分を対象とした方が適切であるとの判断を得、グリッドの設定についても、南側まで範囲を広げた。グリッドは道路中央の杭を基準に5m×5mのメッシュに区切り、東から西へA・B・C…、南から北へ1・2・3…と記号を付した。

調査は蜜柑の幼木の補替が行われていなかったこともあり、上部の方から実施した。この区域では縄文時代の遺物と弥生時代の遺物が断片的に出土したことにとどまった。下部の方は水田から始めたが、表土層から近世陶磁器片や中世輸入陶磁器片が出土し、Ⅱ層およびⅢ層からも後者の遺物や集石造構などが検出された。また、これらの遺物に混って石器やナイフ形石器なども出土しており、部分的に縄文時代や先史時代の包含層の存在が確認された。遺構については明確な性格の判断できるものはないが、中世~近世にかけてのものと考えられる。

調査の日程は、昭和61年3月3日~同年3月27日の年度末前半の1,000m²の調査と、新年度の4月7日~6月11日までの後半の2,225m²の調査区について実施した。



Fig. 1 遺跡周辺地形図 (1/2,000)

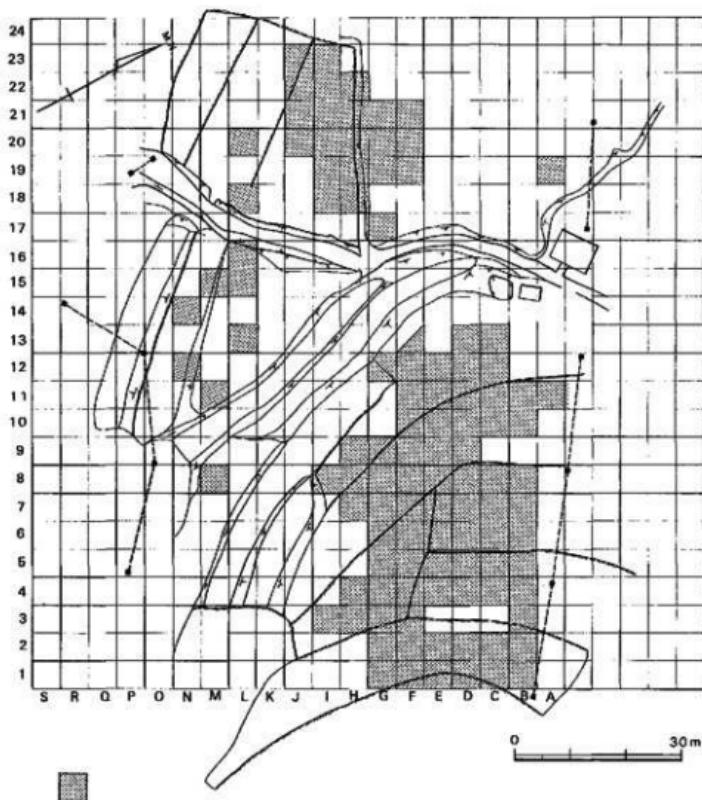


Fig. 2 調査グリッド配置図 (1/1,000)

3. 上層 (Fig. 3, 4)

現状は、雑木林・蜜柑畠・水田からなり標高差約15mある。堆積状況は、それぞれの土地の利用方法によって依存状態に違いがあった。

比較的残りが良かったのが、雑木林のある標高74~80mで旧石器・縄文時代の遺物を2~3層に包蔵していた。

これに比して蜜柑畠の堆積は、蜜柑植付の際の掘り込みが、各所にあり耕作土から40cm程度で地山に達した。しかし、遺構では中・近世の集石を多く検出している。

次に水出部にあたる標高63~64mでは、水田括幅があつており約70cm程が埋土してあった。

以上の状況のため各地区を3地区に分け土層図を図示し、基本層序を4層とした。以下その特徴を記述する。

(町田)

1 層； 水田部における現耕作土

1 層； 水田部の埋土

1 層； 耕作土(雑木林・蜜柑畠地区)

2 層； 暗褐色土(しまりがなくサラッとした土。雑木林のある地区は、旧石器・縄文時代の遺物が主体を占め、蜜柑畠・水田部では中・近世の遺物が多くなる。)

3 層； 明褐色土(粘性が強く、赤味が濃くなる。上部に遺物が出土するが、相対的に点数が少ない。)

4 層； 暗青赤色(安山岩の風化礫が混じり土が変色している。遺物の出土なし。)

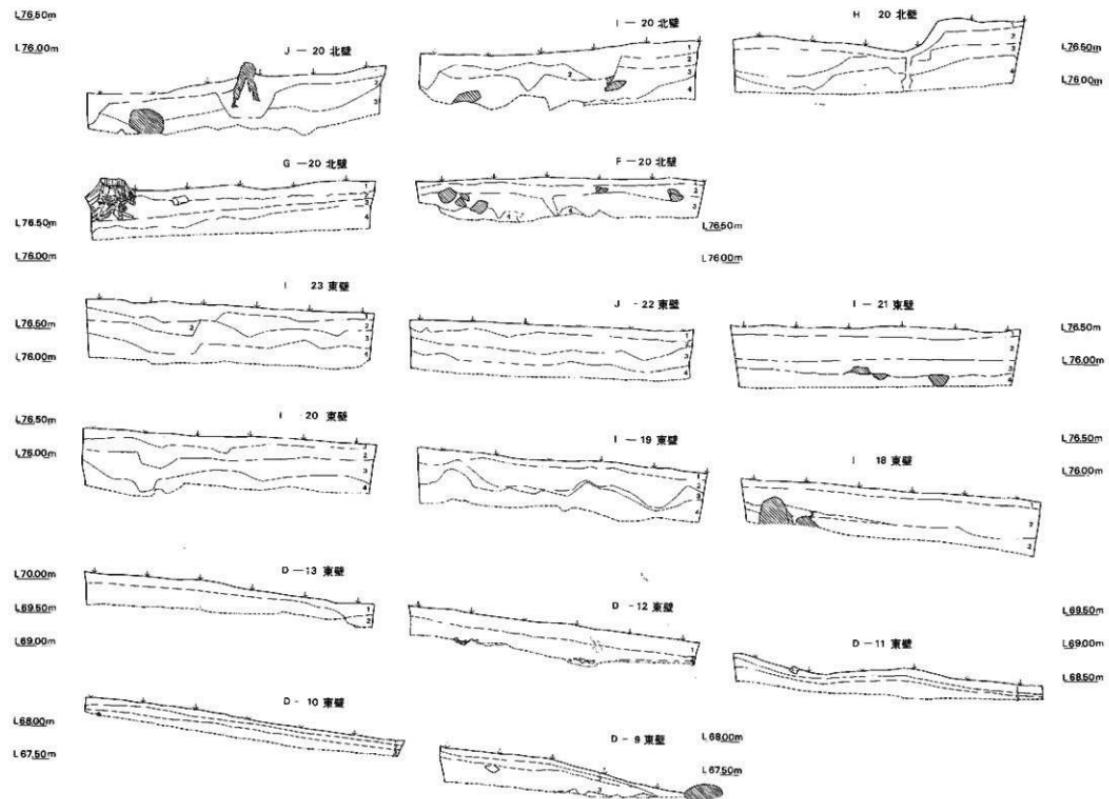


Fig. 3 土層図 (1) (1/60)

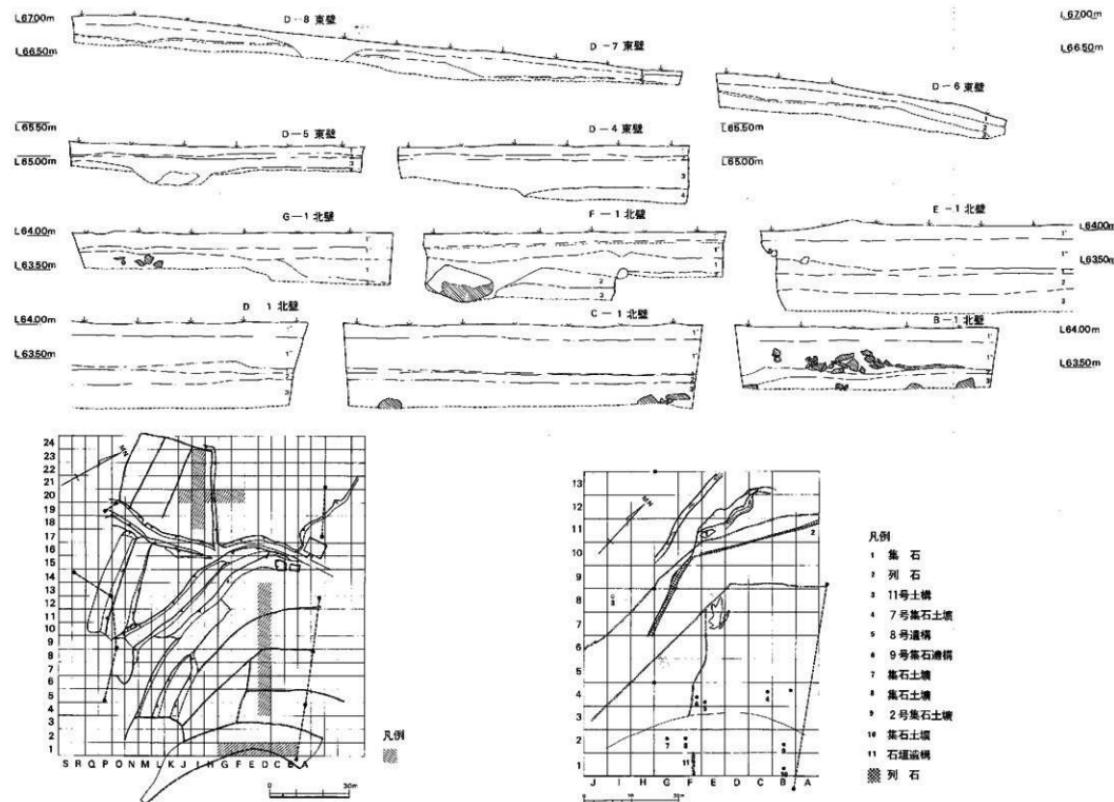


Fig. 4 土層図② (1/60)

II 遺構

遺構は、南側斜面に検出されている。性格不明のものが多いが、その殆どは角礫や円礫を土壌に入れたり、帯状に集めだものである。時期的に古いものはないと考えられ、中世以後に作られたものであろう。圓化しなかったものもあるが、集石6、集石土壌5、帯状集石1、石垣1の計13である。この中で帯状集石は下部の方で柱穴を作ったり、大礫を組みあわせたり、規模が大きいものが目立つ。

1号遺構 (Fig. 5)

主軸N-37°Wをとり足形状のプランを呈する。集石は、土壌プラン 約280×115cmにあわせて礫を集めている。北西側辺に10~15cmの安山岩角礫を敷き、その周囲を5cm内外の小礫で囲む。土壌堀り込み面は、3層から約10cm程度下げ、断面U字形を呈する。覆上には、黒灰色土のしまりのない土が混入する。出土遺物はなかった。この遺構の検出地区は、E-11区にある。

(町田)

2号遺構 (Fig. 6・7)

南斜面の各区6列目から13列目にかけて、断続的に連なっている集石が確認された。その延長は、約50mにも達するもので、ここでは帶状の集石遺構と呼ぶことにする。先ず下方は、H-6区から始まっているが、さらに下方は、状況からして、集石が破壊されているものと思われる。H-7区では75~80cmの幅で平坦に整地され、中央に大礫が1列に並べられている。しかし、この部分も周囲の石が抜かれているもので、たまたま、1列に並べられているように見えるにすぎない。G-8は、中央部に拳大の礫が残るが、F-9、G-9になると、幅は広くなり、拳大から人頭大の礫は一層乱れ、抜かれている石もはっきりしている。この周辺においては、柱穴が21個検出され、1列方向に並ぶものもあるが、全体的にまとまりを欠き、建物遺構として復原できない。F-10区では、帶状の石敷遺構と北東に伸びる遺構の分岐点になっている。上方に伸びる遺構は、1号遺構として取り扱っているが、北東に伸びる遺構の分岐点には、3個の大礫と、裏込め状の礫が残る。この遺構は、調整区域よりも上方に伸びるものと思われるが、約50cm幅で、断面は浅い溝状になる。その上は大礫が抜かれ、拳大から人頭大に近い礫が空間を持ちながら残っている。

この遺構の性格については、殆ど遺物が共伴していないこともあり、不明であるが、分岐点から下方は道路状になる遺構かも知れない。道路状遺構の傾斜は、松浦市樓階田遺跡から中世の時期のものが確認されているが^(註1)、それに近いものと考えられよう。上方のややくぼんだ遺構は、溝としての機能をもっていたかも知れないが、石垣としての性格を有する何らかの区画性をもっていたことも考えられる。

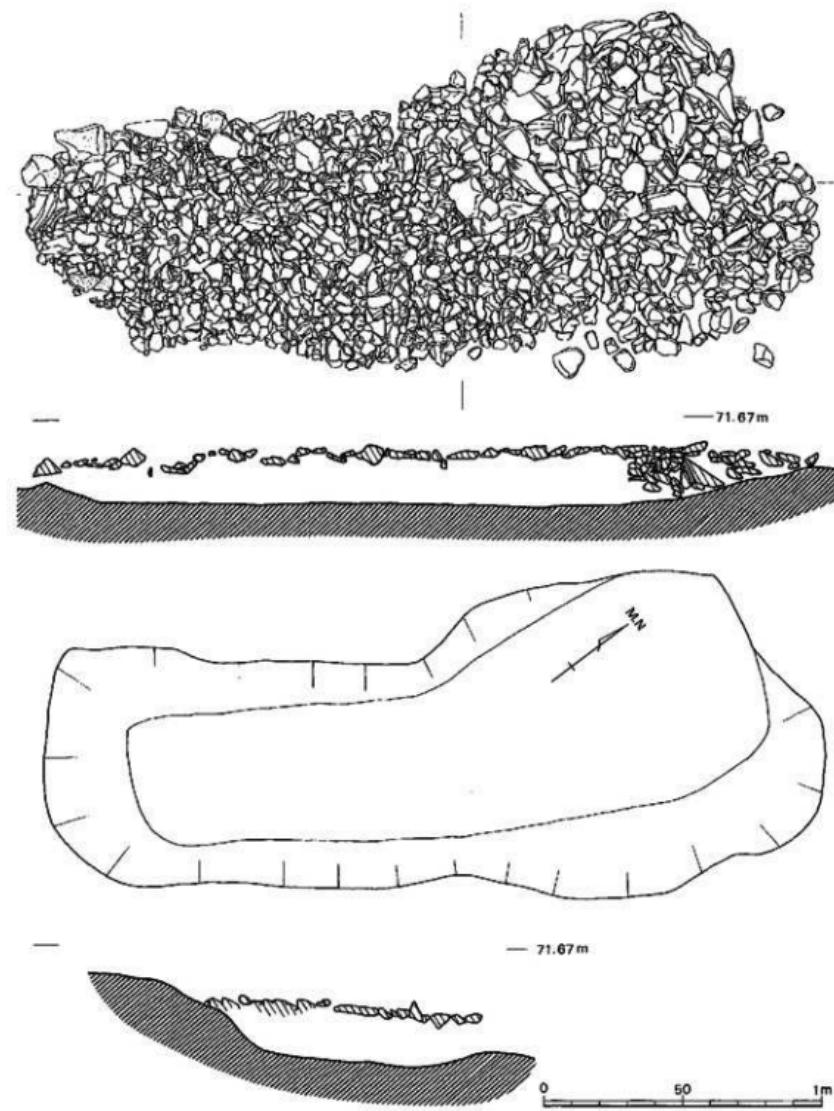


Fig. 5 1号造構実測図 (1/20)

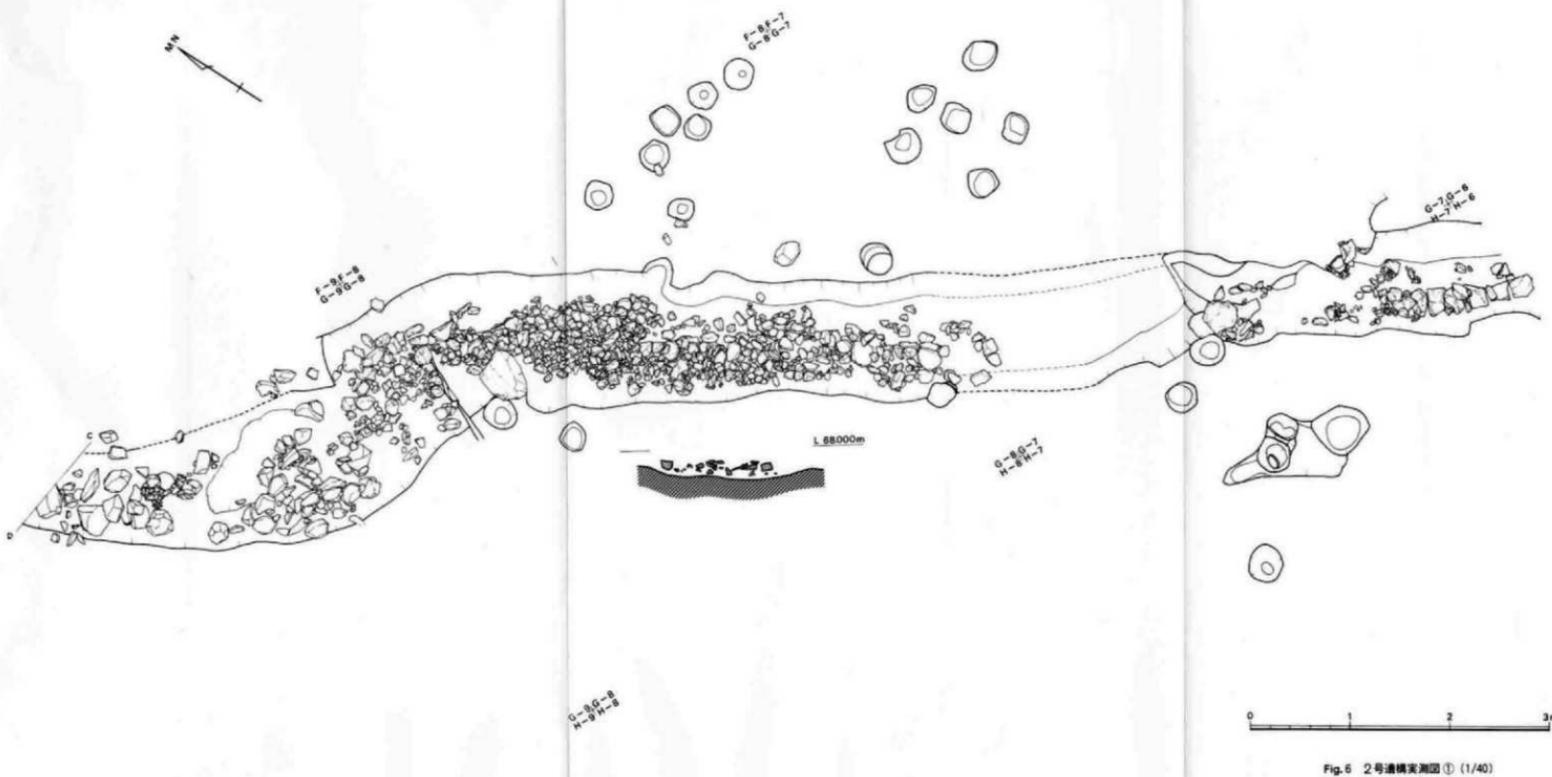


Fig. 6 2号橋構実測図① (1/40)

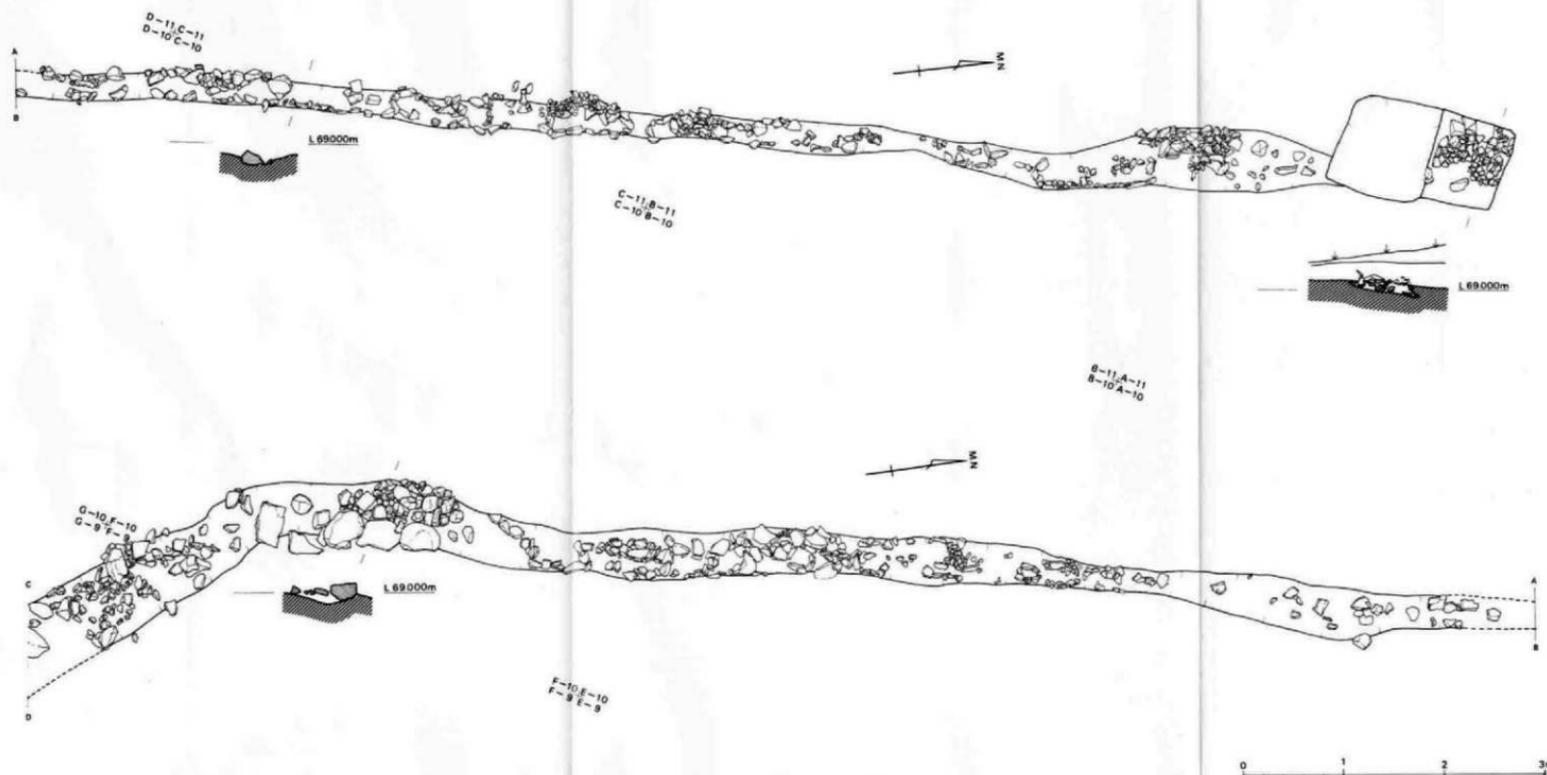


Fig. 7 2号道構造測図② (1/40)

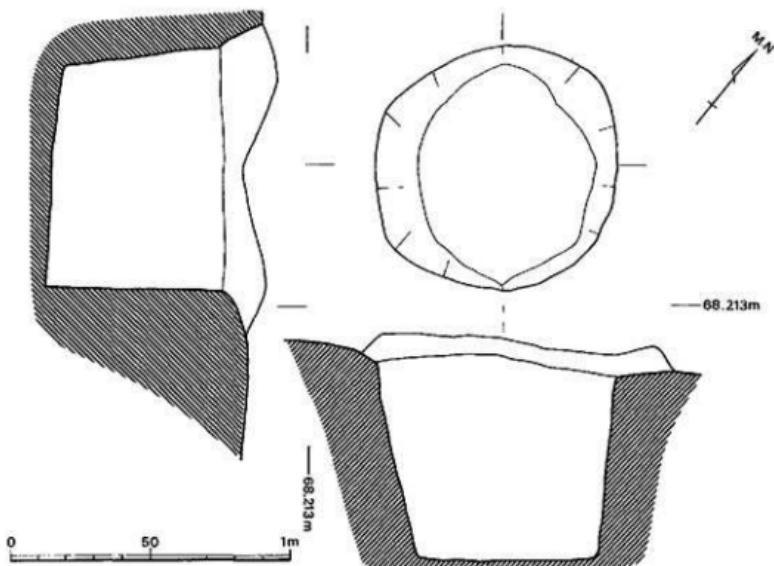


Fig. 8 3号構造実測図 (1/20)

3号構造 (Fig. 8)

I-9区から検出された。上面はほぼ円形で、径87cm、底部65cmで底がすぼまっている。深さ約75cmで、岩盤がくり抜かれている。中には土が充填しているだけで年代の決め手や性格を知る手がかりになるものは何もない。遺物が出土する区域から若干南の方にずれる地点に位置する。後世の貯蔵穴とも考えられる。

4号構造 (Fig. 9)

C-4区に位置し、長さ140cm、幅95cm、深さ約40cmの楕円形を呈する穴に拳大の礫を入れている集石土壙である。現水田面から約80cmの所から掘り込まれている。礫は玄武岩で、一部に割られて入れられた状況も観察できる。礫は土壙下面より上部にあるため、若干の土が流入したあとに入れられたことになる。共伴の遺物は何もみられず、時代の確定はできない。

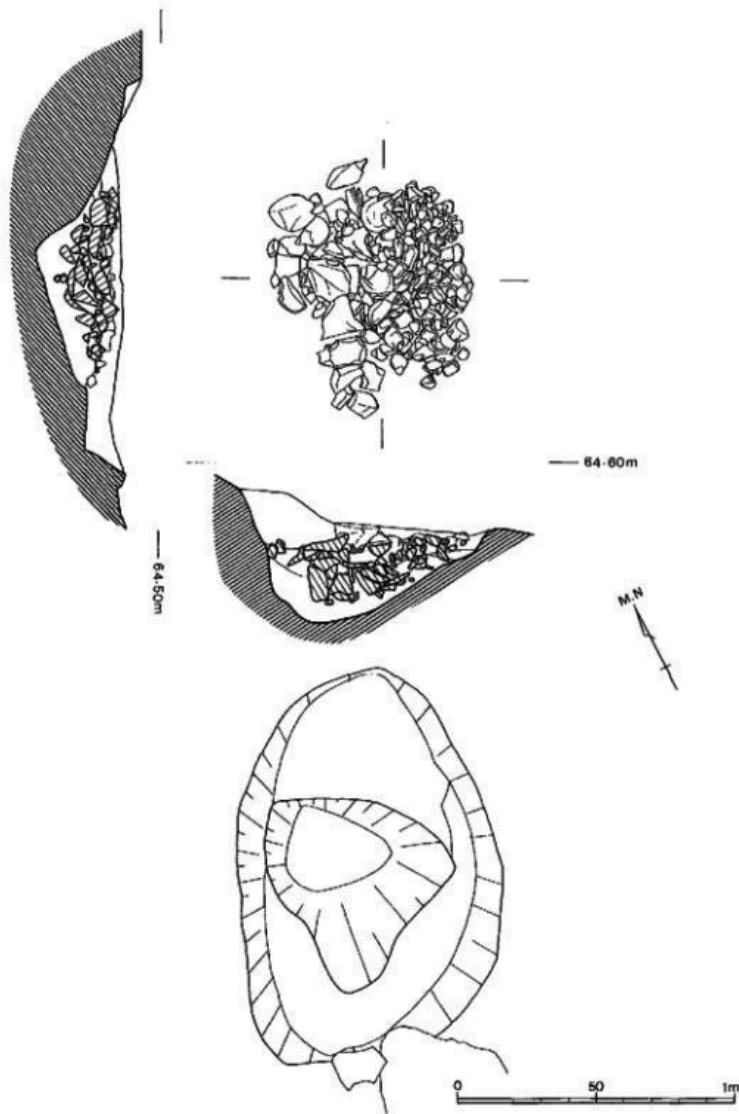


Fig. 9 4号造構実測図 (1/20)

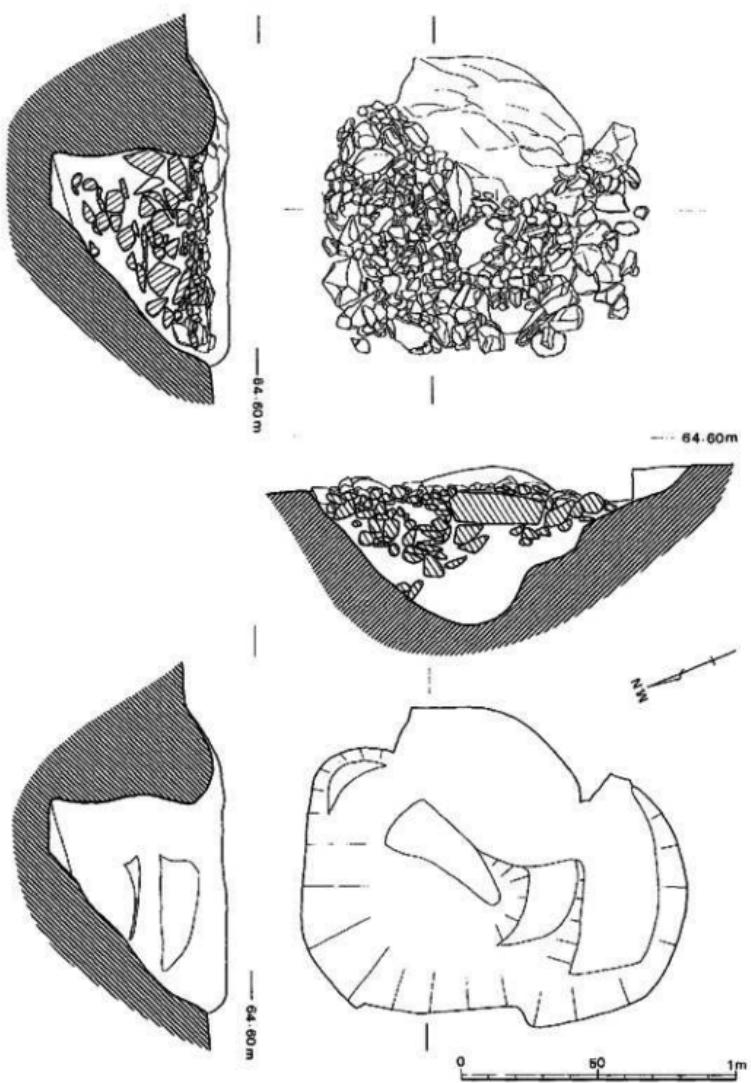


Fig. 10 5号造構案測図 (1/20)

外因遺跡

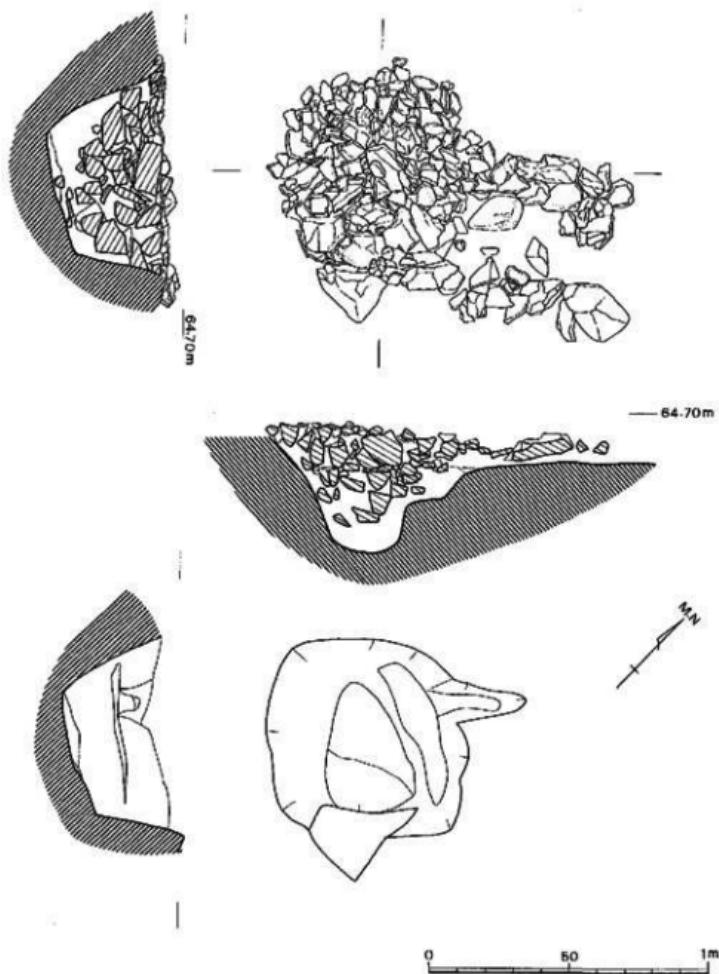


Fig. 11 6号造構実測図 (1/20)

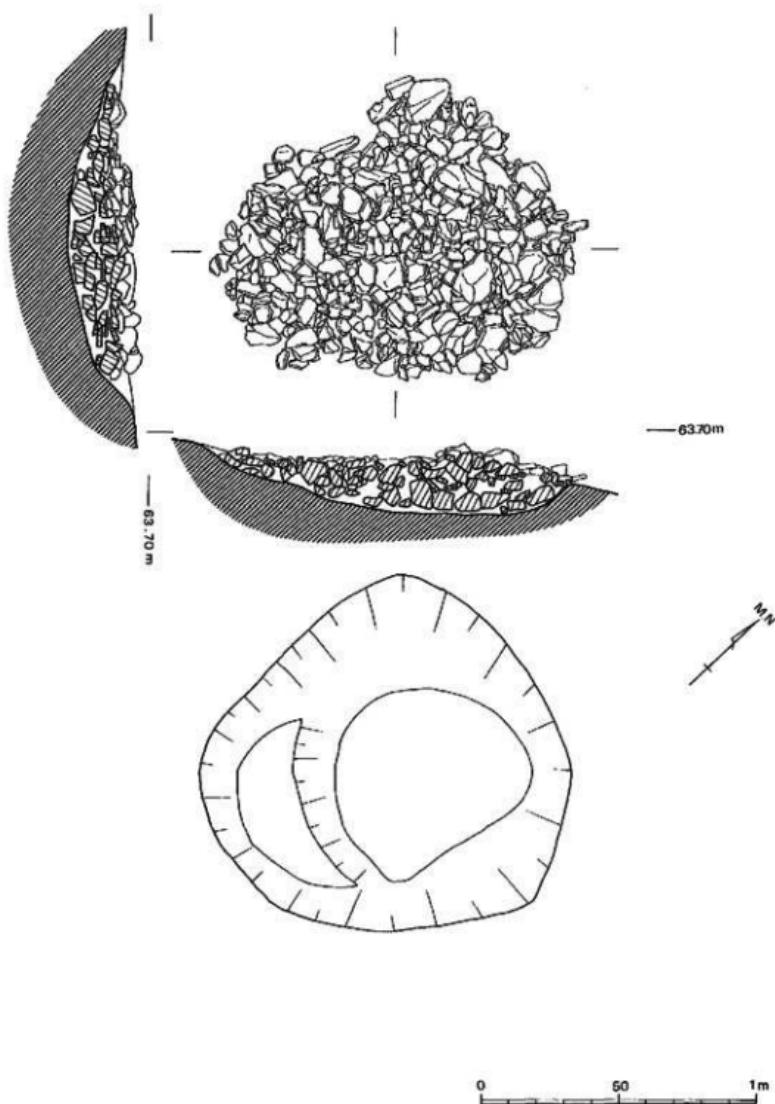


Fig. 12 7号遺構実測図 (1/20)

5号遺構 (Fig. 10)

E-4区に位置し、長さ140cm、幅80cmのやや隅丸方形。西側に大きな玄武岩の自然石が埋没しており、表面は打ち欠かれている。土壇は、底が狭まり深さ65cmに達するが、礫は打ち欠かれたものが多く、礫と礫の間は隙間があり、しまりがない。おそらく表面に出ていた自然石を打ち欠き、穴に投げ込んだものと思われ、近世の所産であろう。 (安楽)

6号遺構 (Fig. 11)

F-4区に検出した。主軸N-64°-Wを示し、ほぼ円形に近い形状を呈する。礫は、20~15cm程度の角礫を用い、隙間を埋めるように5cm前後の角礫や円礫をあてがっている。プランよりはみ出した東南側には、長さ50cm、幅20cm程度の礫を並行に並べた格好をしている。土壇は71×70cmを測り、3層を約40cm掘り下げ、床面径約30cmとなる。覆土には、黒灰色土のしまりがない土が混入していた。遺物には近世陶磁器等の出土があった。 (町田)

7号遺構 (Fig. 12)

調査区一番下のG-2区に位置する。直径130cmの梢円を呈する集石土壇である。深さは25cm

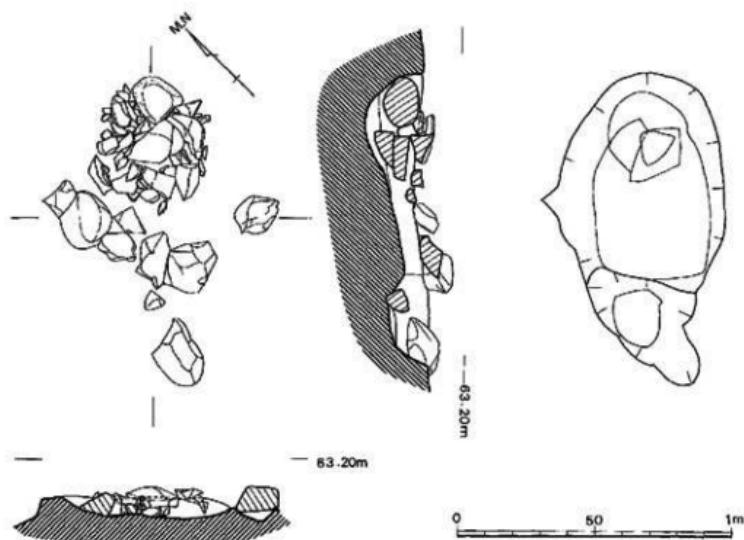


Fig. 13 8号遺構実測図 (1/20)

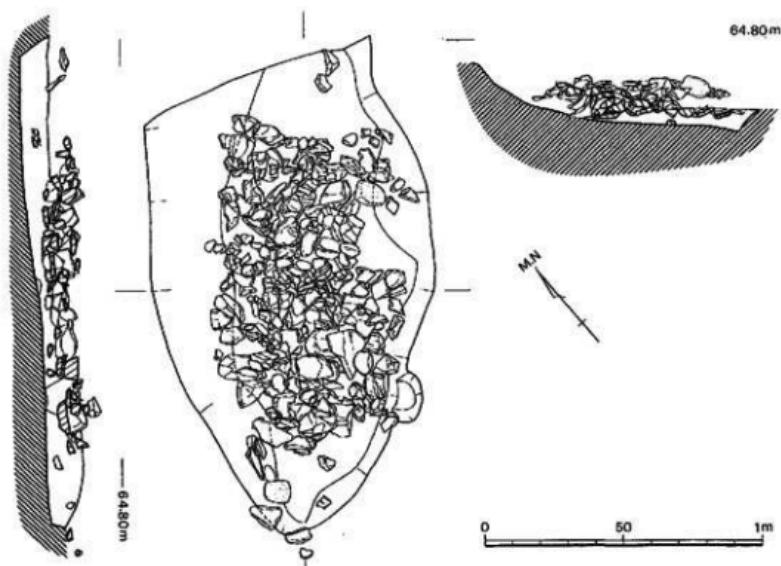


Fig. 14 9号遺構実測図 (1/20)

で、底はゆるい段状に掘られている。礫は拳大のものが殆どで、底までぎっしりとつまっている。遺物は中世の瓦器などが入っていた。

8号遺構 (Fig. 13)

F—2区に位置する。長さ110cm、幅80cmの南側がやや尖った梢円状を呈する。深さは約20cm、南側が1段くぼんでいる。中には、扁平な石が10個ほどまばらに入る。遺物の出土は認められない。

9号遺構 (Fig. 14)

主軸N-44°30'-Eを測り、砲弾形のプランを呈する。10cm内外の角礫及び円礫を配する。土壌は約170×100cmで、3層を約20cm掘り込んでいる。覆土には、しまりのない黒灰色の土が入る。出土遺物には、近世陶磁器がある。検出地区はB—2区になる。
(町山)

10号遺構 (Fig. 15)

B—1区に位置する。タテ110cm、ヨコ80cmのいびつな梢円を呈する。深さ20cmで打ち割ら

III 出土遺物

外國遺跡における出土遺物は、先土器時代、縄文時代、中世、近世の各時代にわたって出土している。しかし、全体的に見れば、遺物の出土量は多くはない。先土器、及び縄文時代の遺物は局所的であり、土器にしても少數である。ただ前二者に伴うと考えられる黒曜石剝片類の多さは注目される。中世の遺物は、遺構とのかかわりの中で考察されるものであるが、破片が小さく割れ、良好な資料とは言えない。近世資料は、主に表土からの出土であり、後世に混入されたものが多いと考えられ、一部現代のものまで見られた。

1. 土 器

① 縄文式土器 (Fig. 17)

國化しているのは15点であるが、小破片を含めると、100点を越える。1~11は、滑石粉を混入した胎土、焼成とも良好な中期土器の1群である。1は大型凹文を有する波状口縁である。指頭を押しつけており、凹文の右側に爪の痕をとどめる。2も1と同じであるが、器壁がやや厚い。3は滑石粉は少なく、白い砂粒が目立つ。やや山形状になる口縁と思われ、直下外側にヘラ状のもので浅くくぼませた文様を有する。4は粗い滑石粉を混入した口縁部で、直下に沈

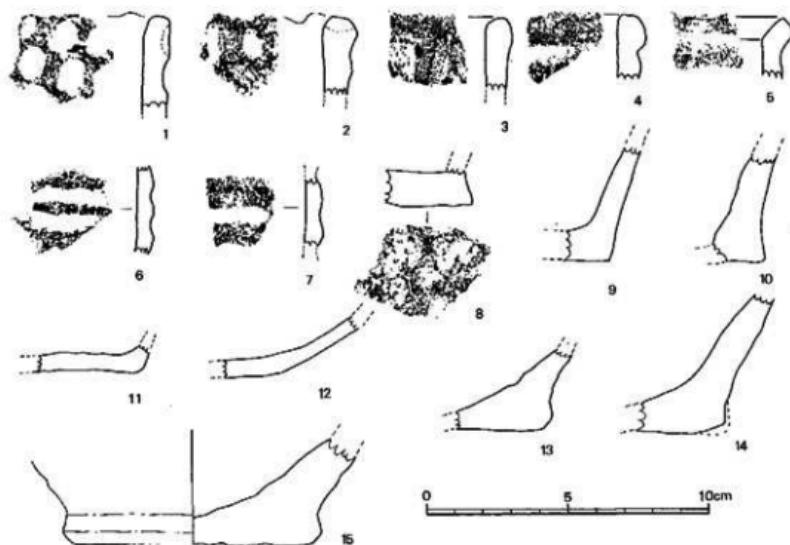


Fig. 17 縄文土器実測図 (1/2)

線がめぐる。色調は黄褐色を呈する。5は外反した口縁で、口唇部は平坦に斜行する。頸部直下には、ヘラ状の施文具で、タテに沈線を付している。胎土には金雲母が混入されている。他の土器と胎土に若干の違いを見せる。6, 7は、大型凹文をめぐらす土器で、6が2条、7が1条確認できる。ともに滑石粉は多量に含む。8～11は滑石粉を含む中期土器の底部。8は平底部に鯨骨と思われる痕跡が認められる。色調は茶褐色で固く焼きてしまっている。12は器壁うすい底部で、内外面とも粗く、磨耗している。胎土には白い砂粒や石英粒が多く認められ、色調は暗黄褐色を呈する。晩期に属すると考えられる。13～15は磨耗著しく胎土も粗い。底部外側は、ややふくらみを持ち立上がる深鉢になるものである。

土器の出土状況は中期土器が南側の斜面に位置したグリッドから、晩期土器は北側頂部のグリッドからブロック状の、いわば断片的に出土していることから長期的な居住性は考えられない。

② 弥生式土器 (Fig. 18)

弥生式土器は、全体で50点にも満たない点数である。その中で7点を図化した。1はラッパ状に外に開く深鉢口縁部で、口唇部は中央部がわずかにくぼみ、斜行している。白い砂粒を多く含み、内外の器壁は磨耗している。2, 3は高環の不部片である。胴のくびれ部分が残っている。外側の表面はヘラ状のもので磨かれているが、内面は磨耗している。4は丸底に近い平底で、橢円鉢状になるものである。胎土、焼成とも良好で褐色を呈している。5は高環の中間部である。胎土、焼成とも良好であるが、若干磨耗している。色調は褐色を呈している。6はラッパ状に外反する台付の底部である。胎土にはやや粗い粒子を多く含み、焼成も甘い。器壁は内外とも若干磨耗している。色調は黄褐色を呈する。7は高環脚部である。かなり磨耗を受

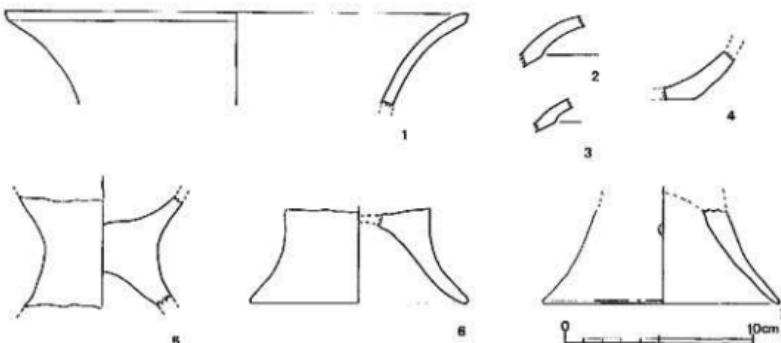


Fig. 18 弥生土器実測図 (1/2)

けているが、穿孔部分もとどめている。胎土には石英粒や金雲母を含んでいる。色調は明褐色を呈している。これら弥生式土器はグリッドの中央部から北側上部にかけて出土している。

③ 輸入陶磁器 (Fig. 19)

輸入陶磁器は、中国産、朝鮮産が含まれるが、全部で207点、そのほとんどが小破片で占められる。ここには図示可能なものを抽出した。

中国產輸入陶磁器 (Fig. 19~22)

中国陶磁は150点を数え、全体の72%を占める。なお、中国產輸入陶磁器の分類については森田氏、横田氏分類によった。^(註3)

白磁 (1~4)

白磁は18点得られ、岡化は玉縁の4点である。他に口縁部2点、胴部7点と、底部片5点の総数18点で全体の9%を占める。

1~4は乳白色を呈する玉縁口縁部である。復原径が出ない程の破片であるが、直徑16cm内外に達すると見られる。1はやや耗耗を受け、玉縁の稜線が下部に位置している。2も1と同様であるが、内外に貫入をもつ。3、4は玉縁の中央に稜線をもち、若干の気泡が入る。体部、及び底部の観察が不可能であるが、玉縁の器形からⅣ類に相当しよう。出土区は南斜面の各区からである。

青磁 (5~15)

11を除いて、全て碗である。5は口縁で、淡いブルーを呈し、外側にわずかに線刻が認められる。貫入が内外に入る。6は灰緑色を呈する口縁で、外側に幅広の鎬連弁文がわずかに認められる。外側に貫入が入る。7は口縁端部が丸くおさめられ、くびれている。色調は灰緑色に近く、内外に大きな貫入がある。8は同安窯系で口縁がやや外反し、頸部がしまるもので、全体にオリーブ色のガラス質釉がかかり、光沢をもっている。9は8と同様の器形であるが、灰緑色を呈し、光沢がない。胎土にはわずかに黒い粒子を含んでいる。10は口縁から体部にかけて緑色の釉が厚くかけられ、口唇部は灰色釉で区分されている。底部にかけては強く内側に屈曲する部分がわずかに残る。11は同安窯系皿底部である。内面にはヘラによる片彫と櫛によるジグザグ文様がわずかに残っている。外面底部は釉がかき取られ、わずかに凹んでいる。12は高台付底部で内底見込みに唐草状のスタンプが付けられている。外面賞付およびその内部は露胎である。色調はやや青味を帯びた緑色である。13~15は同じグレープとして捉えられるものである。13は体外の口縁部に四角に整った雷文帯を配し、体部には幅広の連弁になると思われる線刻が見られる。内面にも線刻された文様帶があるが、雷文になるのかはっきりしない。その下には、草花文と思われる線刻が見られる。内外とも色調は灰緑色を呈する。14は口縁直下に連続した鰐線を線刻し、その谷部および山部の下から縦に線刻を施し、連弁文としている。内面は無文、線刻の部分だけが釉が溜まり緑色で、他は灰緑色。15は口縁で口唇に近い部分から下

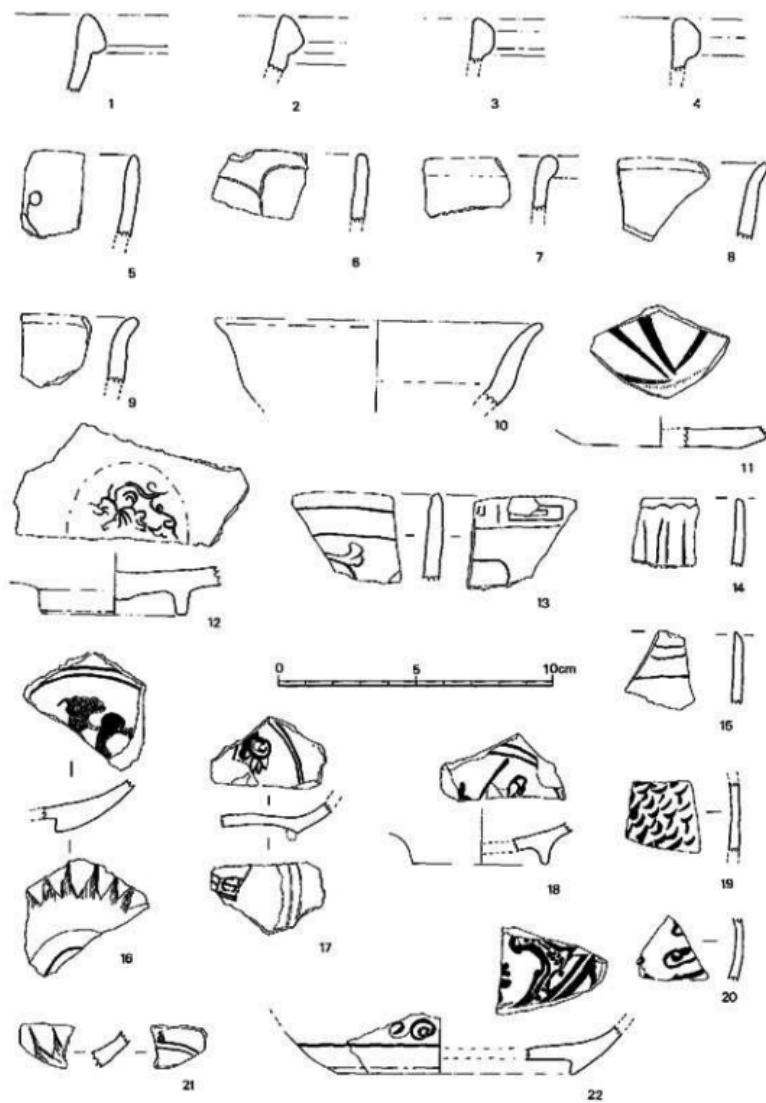


Fig. 19 輸入陶磁器実測図 (1/2)

に4本の細い線刻が見られる。小破片ではっきりしないが、おそらく、苗文帶になると思われる。色調は13に類似している。

染付 (16~22)

染付は、24点出土し、全体の12%を占める。その中で図化したのは7点である。小破片のため器形が不明なものもある。16はいわゆる「葵筋底」の皿で、体部から口縁にかけて内溝するものである。外腹下部に芭蕉葉文が残る。内面見込みには2条の圓線がめぐり、中に花と思われる文様が見られる。小野分類BⅠ~Ⅳに相当する。17は高台部分が打ち欠かれているが、うすく仕上げられた皿である。内面見込みには、2本の圓線と花文が残る。外面には、体部下部に1条の圓線と底に文字らしきものが残るが、判読できない。小野分類BⅢ~Ⅶに包括されよう。18は楕か、皿か不明だが器壁もうすい。内面見込みには、2条の圓線と花文がわずかに残る。高台立ちあがりの部分には釉が厚くかかり、しまりがない。疊付けの部分は釉のりが悪く褐色になっている。19は楕胴部片である。淡いブルーで鳥の群風のタッチで細く描かれ、表面には青灰色の釉がかかっている。20は16と同様の器形、文様を示す。21は16と同様。22は葵筋底の皿で疊付部分の釉がカキ取られている。内面見込み部には唐草文風の文様が見られ、圓線も2条めぐる。外面、下体部には満巻文があり、その下に圓線が一条めぐっている。

朝鮮產輸入陶磁器 (Fig. 20-1~9)

朝鮮產陶磁器は、高麗の象嵌青磁と粉青沙器が15点出土し、輸入陶磁器全体の中で、7%を占める。図化したのはその中で9点である。

象嵌青磁 (1~3)

1はつまみの付く蓋と考えられる。外面には菊花文が白土で象嵌され、灰緑色の釉がかけられている。縁の方は手前が浅く凹み、端部は丸くおさめられている。凹んだ部分には釉が厚くたまり、緑色を呈している。縁にも波状に圓線が白土で象嵌されている。内面は緑色の釉がかけられ、全体に貫入が見られる。2は器形が不明であるが、肩曲した部分で割れている。外面は縦に2本、横に1本の象嵌で区画され、その中に菊花文が象嵌されている。釉は灰緑色で、全体に貫入が見られる。3は外面に3本の白土象嵌による圓線と、内面に斜行する白土と黒土の象嵌が見られ、釉は灰黄色である。

粉青沙器 (4~6)

4は内面に梅鉢状の花文と見られる白土の象嵌が見られ、釉は内外とも灰色の強いうす緑がかかっている。5は瓶の首の部分と思われるが、外面は白土が全体に塗られ、灰色の素地が細い点状に配されている。内面は灰緑色の釉がかかる。6は底部で見込み部分に砂目跡が残り、高台疊付の部分にも砂目跡が残る。釉は灰色で全体にかかる。

季朝陶器 (7~9)

陶器楕底部片である。7は見込みの部分に砂目跡が残り、褐色の不純物が付着している。外面は疊付に砂目跡がわずかに残り、釉はかかりが悪く、虫喰状のあとが見られる。7は内面に明

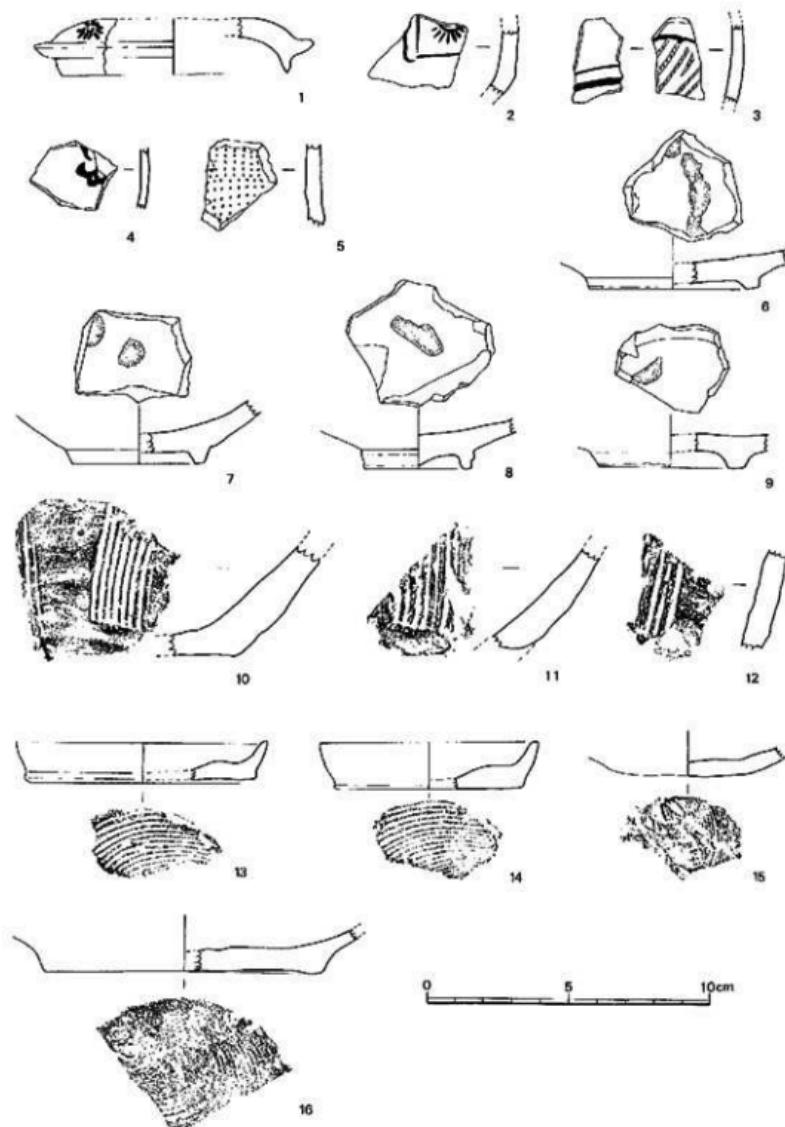


Fig. 20 輸入陶器および国产の土器実測図 (1/2)

灰色の釉がかかり、見込みに砂目跡が残る。外面は下体部から高台にかけては釉はかかっていない。胎土はよくしまり、良好でやや赤味を含む灰色である。9は見込みと高台疊付に砂目跡が残る。釉は全体にかかり、青灰色を呈する。内面に貫入が認められる。

国産陶器 (Fig. 20)

国産陶器は10点に満たないが、不明な点が多い。天口挽や美濃系と思われるものが若干見られるが、小破片で図化していない。10~12は薩摩焼の壺鉢である。10は平底の部分で外面は褐色、内面は須恵質で灰色。7本の粗い沈線が描かれている。断面は外側半分が褐色を呈している。11は沈線が10に較べるとやや浅くて細い。施文の曲線も逆方向に付けられ、内外面とも褐色を呈するが、断面は中央が褐色で、両面が灰色のサンドイッチ状になる。12は沈線が3本で、他の特徴は11とはほぼ同じである。

本遺跡における輸入陶磁器の様相は個別に説明してきたとおり、12世紀頃を主体とする白磁や、13世紀に盛行する龍泉窯系の青磁、および14世紀から15世紀後半の青磁碗や16世紀前半の明代青花などが少量ながら出土しているが、集中して出土する地域ではなく、むしろ表上層から得られたものが多い。これは住居などの生活に直接関係した遺構の検出も行われていないためである。強いて中世の遺構として関連を考えるならば、北東に約150m程離れた水田の一角に石垣が残され、古い屋敷跡があったと言い伝えがあることである。さらに南側の千錦川に面した標高4mの宮田A遺跡の水田からは、11世紀中頃から12世紀前葉を主体とする白磁類、12、13世紀を主体とする青磁類、14、15世紀中頃の明代青磁、15世紀後半から17世紀の青花類が出土しており、本遺跡の傾向と同様の特徴を示している。しかし、ここにも住居関係の遺構は検出されておらず、「陶磁器類は近隣から流入してきたことが考えられる」とされている。その意味においては千錦川南側の大村湾に面して伸びた瀬戸郷の台地に中世の小藪城^(註4)が位置し、今回の九州横断自転車道の発掘調査によって良好な資料が出土しており、ここに何らかの関わりを考える必要があると思われる。

土師質土器 (13~16)

全部で10点余りの土師質土器皿が出土している。図化したのは4点である。13・14は同一個体と思われる程似ているが、13が若干径が大きい。两者とも糸切り底が明瞭に残り、底部からの立ち上がりは低く口縁はわずかに内湾する。3は糸切り底で、底部の立ち上がりは弱く、外に張り出す。磨耗著しい。16は径10cmの糸切りで、わずかにあげ底になる。口縁部は高く立ち上がると思われる。

瓦質土器 (1~8)

ここにあげた瓦質土器は全て火鉢になると考えられる。この他にも無文の瓦器片が8点含まれる。1・3~5は、文様構成から深鉢形火鉢の同一個体と思われる。口縁部を欠くが直下に

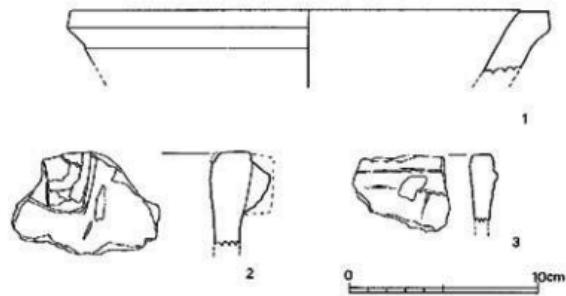
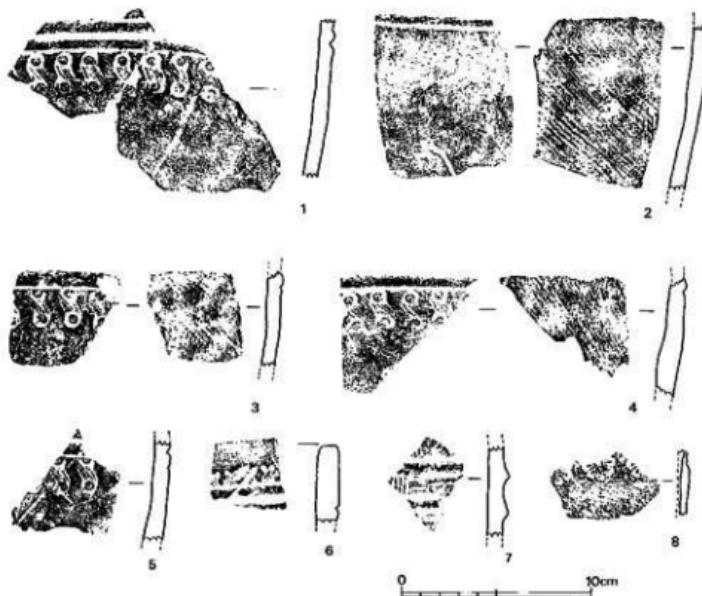


Fig. 21 瓦質土器および石綴実測図 (1/3)

3本の沈線がめぐり、その下に長さ2.3cmのS字状同心円文のスタンプが押捺され内湾しており、下部は無文である。内面には斜行する条痕文が整然と付けられている。2は前者と同様の器形であるが、スタンプ文が施文されず別個体か。6は平坦面をもつ口縁部で、直下にX字文が押捺され、その直下に2本の沈線をめぐらす。7は2条の山形突帯文が貼付けられ、上段にははつきりしないが、スタンプらしきものが付き、突帯の間にはヘラ状のもので付けた縦の沈線が入る。8は内面が剥落し、外面だけ残り、花文のスタンプが押捺されている。

これらの瓦器火鉢は、九州地方では筑前国^(14世紀)の13世紀後半、肥後国では15世紀に生産されているが、北有馬町今福遺跡では14世紀中頃までは、滑石製石鍋が主に使用されていることから、この頃から瓦器釜の転換が考えられており、本遺跡においても他の輸入陶磁器などと一緒にもたらされたものと思われる。

石鍋 (Fig.21 1~3)

わざか10点あまりの中から3点図化できた。1は目の粗い滑石を使用し、平坦な口縁から、直接鉢上の造出しをもつ。口径25.5cm、森田分類C-1、木戸分類^(14世紀)III-dに近い形態である。2は良質の滑石を使用。口縁から輻長状の把手をもつものであるが、2次的な変化を受けている。3は薄手の小形の鍋であるが、良質の滑石を使用している。森田分類A-1に入る。口縁直下に鉢の退化したものがめぐる。

土鍤 (Fig.22 1~39)

南側傾斜面の全城に出土した。全体で75点。図化したのは39点である。県下の中世の遺跡からはほぼ同様に出土している。形態も3種に分類されており、本遺跡も例外ではない。基本的には胴部がふくらむ形態であるが、1・両端がすばむビヤ樽型、あるいは太鼓型、2・長方形に近い隅丸方形型、3・細長い棒状になるものなど管状土鍤と呼ばれるものである。胎土や焼成については、この時期の土師質土器などと殆ど同じである。そのため軟質であり、両端部が磨耗を受けていたり、欠損しているものが多い。用途は網に使用されたものと思われる。

土鍤は近年まで磯たて網、(地方によってはかし網、かせ網とも言う)に使用されている。外海町で、近年まで作られた過程を民俗例として引用しておく。「いわ(管状土鍤のこと)」のことを当地方では「いわだご」と言う。材料は粘ぱり気のある赤土を用いる。粘ぱりのあるのは池島、黒島の赤土で、漁士達は自家製造するために、そこまで土掘りに行く。赤土は、半年位、水にひたして、四斗樽につめておく。その後、取り出して石臼に入れ、餅のように搗く。頃あいを見てコンニャク型にして板の上にのせて乾燥し、半乾きにしたもの「いわ」のサイズに糸で切り、竹の莖に巻いて細長く丸める。次に竹の莖を静かに抜き取って、穴を作る。両端をよくふち取りしてから大日で乾燥し、米の空俵に並べて巻きこむ。その俵を横に何ヶ所も縄で巻く。後に口で水を吹きかけておく。それは俵に火をつけても早急に燃えてしまわないように

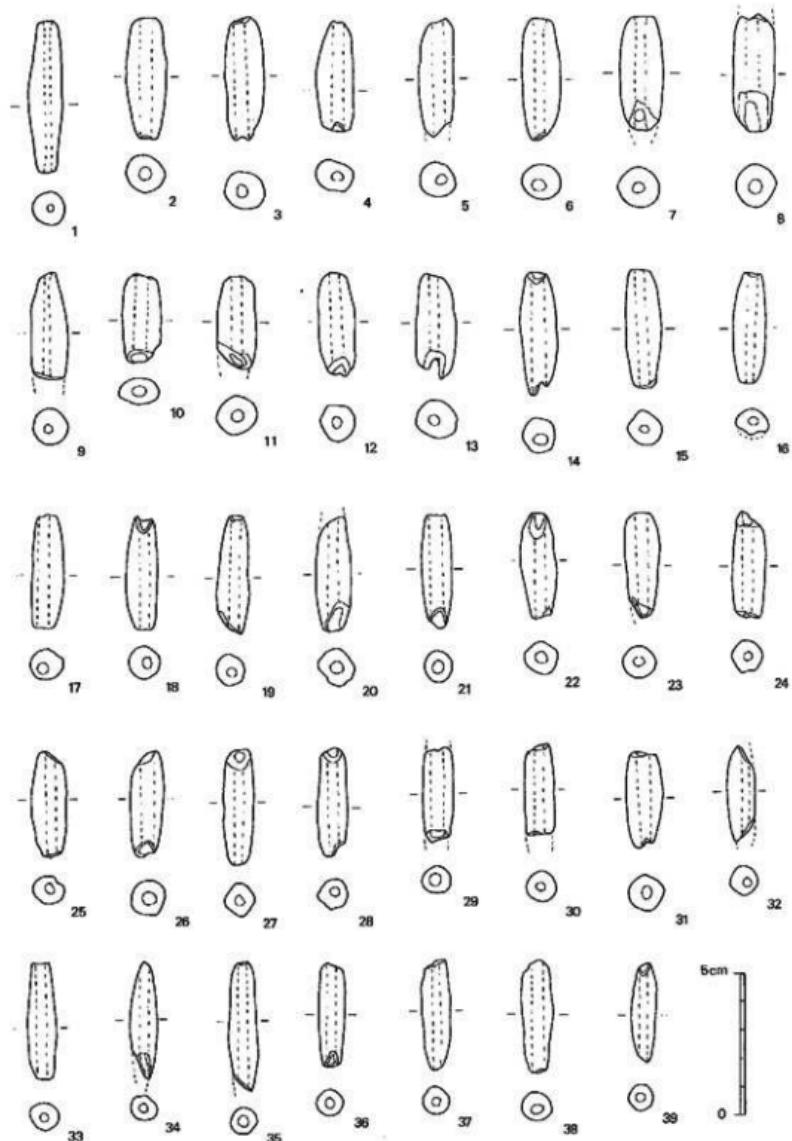


Fig. 22 土鍼実測図 (1/2)

するためである。石壁にその俵をつるし、下から枯柴を燃やすと、俵の燃えた部分から、ボト
リ、ボトリと「いわだご」が出来上って落ちてくる。以上であるが、古代から現代に至るまで
ほぼ、製作工程は変化ないものと考えられる。

(安東)

- 註 1 長崎県教育委員会『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書IV』
「宮田遺跡」長崎県文化財調査報告書 第93集 1989
- 2 長崎県教育委員会・松浦市教育委員会『櫛橋川遺跡』長崎県文化財調査報告書 第76集 1985
- 3 森川勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978
- 4 九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急調査を1986年実施。報告書は来年度刊行予定
- 5 宮崎貴夫『長崎県今福遺跡における中世期の様相』『今福遺跡改訂版』 1987
- 6 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒 No.112』 1982
- 7 外海町郷土誌「かし網のいわつくり」より 1974

2. 石 器

出土石器約7,000点の内382点を図示した。遺跡における石器組成は、旧石器時代のナイフ形・台形・スクレイバー類で占め、縄文時代の石器ではスクレイバー・石鎌類が多く、石斧・凹石の大型石器類が稀薄であった。

① 旧石器時代の石器

遺物の依存状況が良くなく、文化層として時期をおさえるには至っていない。このため、他の資料との比較によって器種を還定し、時代を決定した。

遺物の特色は、ナイフ形石器で日ノ岳遺跡Ⅱ・Ⅲ層出土資料と対比される出土があった。^(註1)

ナイフ形石器 (Fig. 24)

1~4・44・46は、やや肉厚の断面をし剥片の幅が広い。側縁にプランティングをほどこす。日ノ岳Ⅲ層と対比される。

5~22・26は小型のナイフ形石器で側縁と基部にプランティングをほどこし、切出形のナイフの形態をなす。^(註2) 18・26は柿崎遺跡の形態Dの資料に比定できる。

尖頭器 (Fig. 25)

23は、縱長剥片を利用した石器で、正面左側縁に細かいリタッチをほどこす。

台形様・台形石器 (Fig. 25)

24は、基部を両側縁より平坦剝離をおこなった小型の台形様である。日ノ岳Ⅱ層で同様な出土がある。^(註3) 25は百花台型の石器で剥片の両側縁にプランティング加工をほどこす。

スクレイバー (Fig. 25・27)

27は両側縁をプランティングした搔器である。28は上端に47は両側縁を抉る搔器と考えられる。29は基部を主要剝離面からプランティング調整をおこなっている。形態的には台形様石器の範疇にとらえられる。30~42・45は、側縁及び下部に二次調整をほどこす。

マイクロブレイド (Fig. 26)

43で、正面中央に二本の稜が入る。

以上の遺物が出土している。遺跡内の出土資料でナイフ形石器について、まとまった点数が上げられるので若干の整理をしておきたい。

日ノ岳遺跡Ⅱ・Ⅲ層と対比するナイフ形石器があり形態的な共通性が認められ同時に成立していたことが考えられる。

石器の使途に関しては、中山遺跡で、石器のもつ属性の結果から機能としての狩猟具と切裁具とに分類するところみがなされており、ここでは、稿をゆずり形式化したナイフ形石器を規定するものが何處に存在するか検討を行ってみた。

ただし、全ての資料を使用したため、長さ、重量については欠損品が含まれており、あいまいな点があることを考慮にいれていただきたい。

各図は個体別に重量、長さ、幅、厚さについて、ドットをおとした。

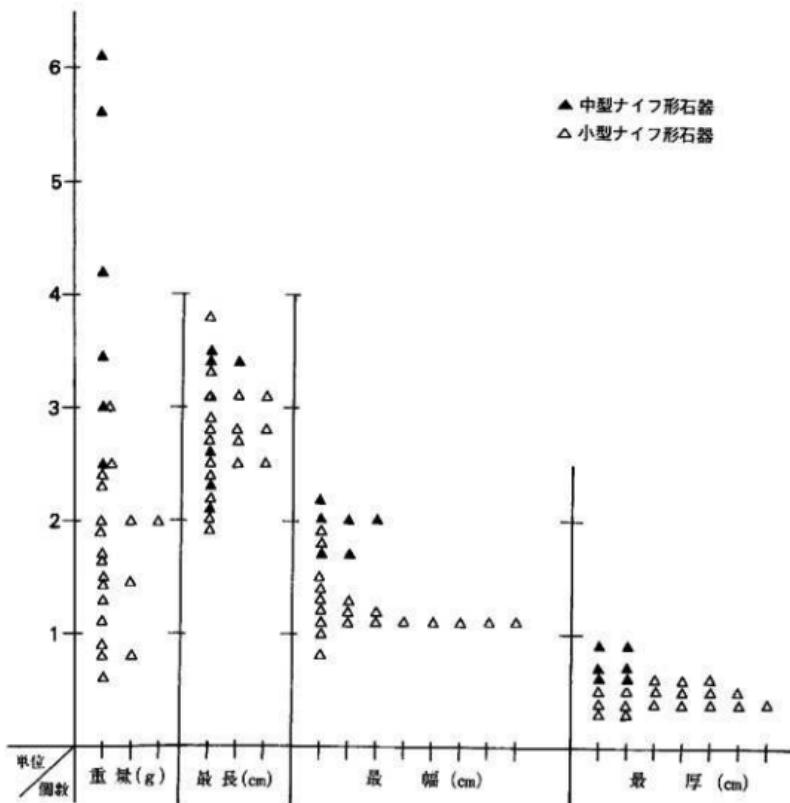


Fig. 23 ナイフ形石器個体別比較図

その結果、幅と厚みに集中する部分があり、これは剥片剥離の段階から規格化が意図され作出されたと推測される。重量、長さについては欠損品があり、この図からは、傾向を知ることができるが、ややばらつきがみられる。これから、石器製作者の意図（技術）が作用していることに帰結すると考えられる。

② 繩文時代の石器

遺物の組成では、スクレイバー・石鏃等の石器で構成しており、石斧・凹石類の第一次生産加工用具が少ない結果となっている。

スクレイバー類 (Fig. 27~32)

大型・小型の各種があり、特色に応じて器種選択を行った。

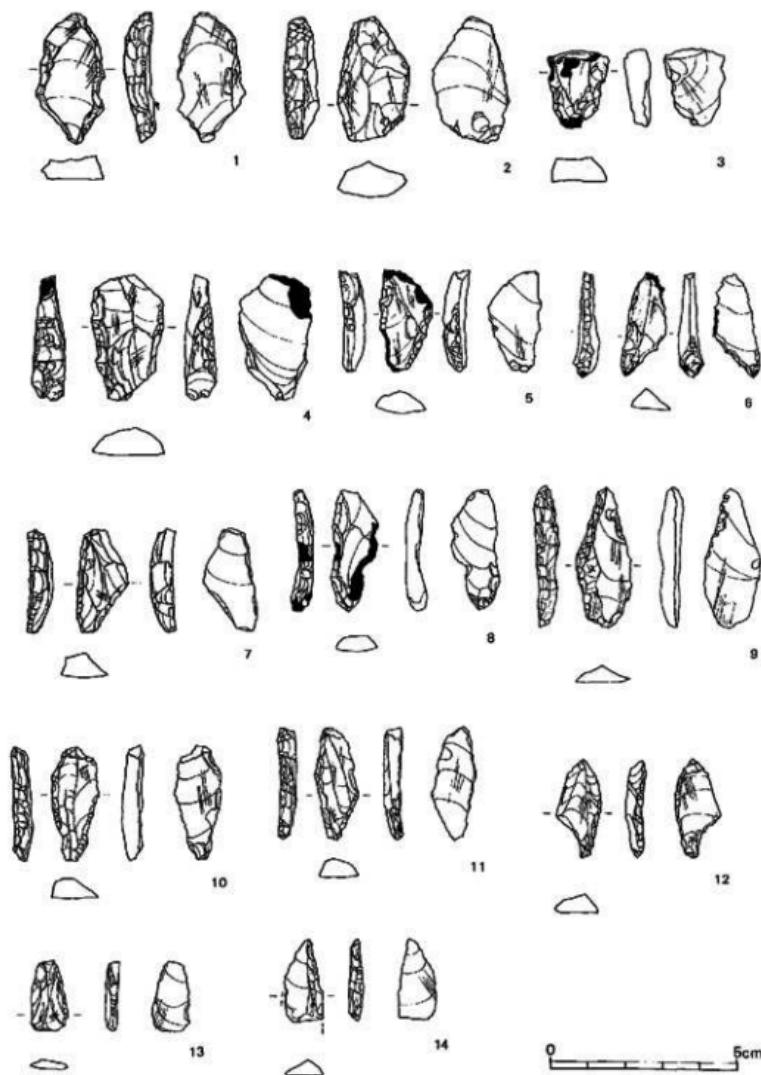


Fig. 24 石器実測図 (1) (2/3)

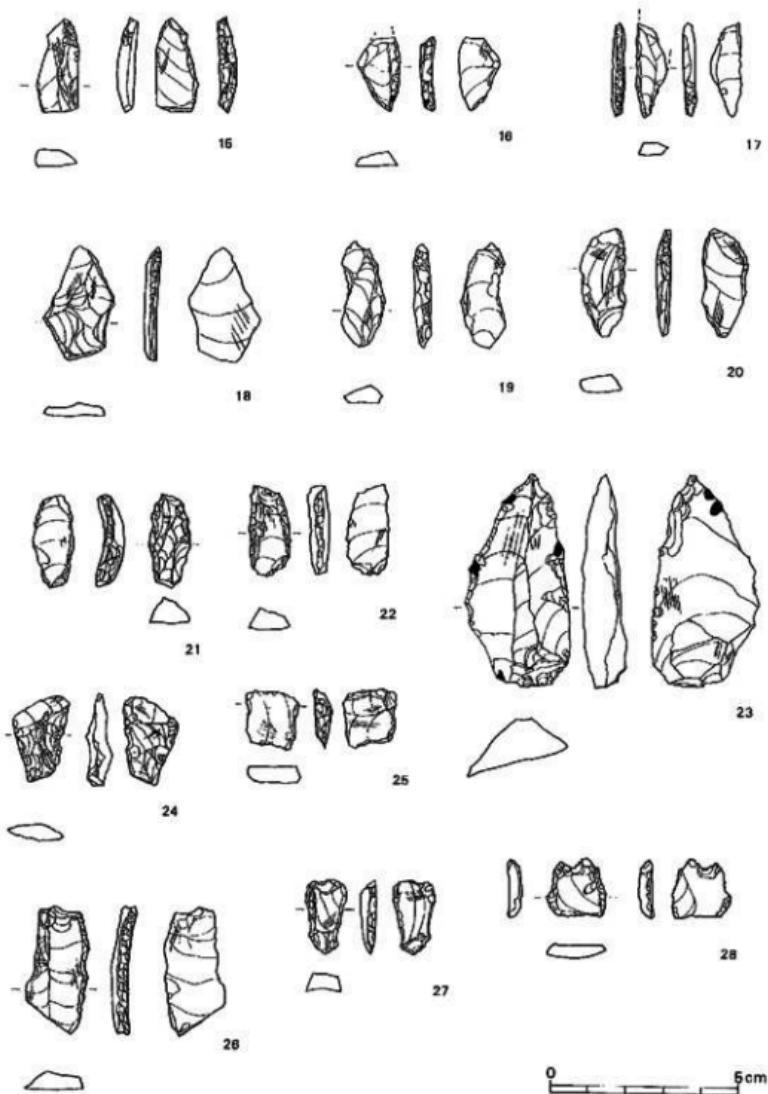


Fig. 25 石器實測圖 ② (2/3)

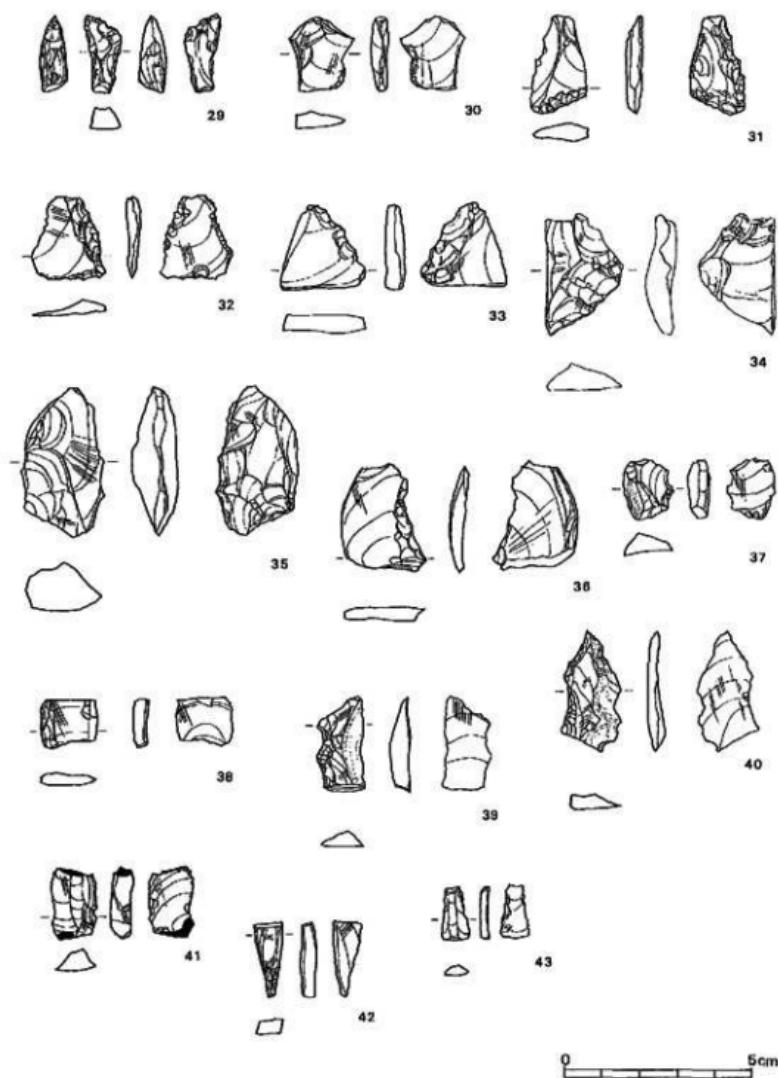


Fig. 26 石器実測図 ③ (2/3)

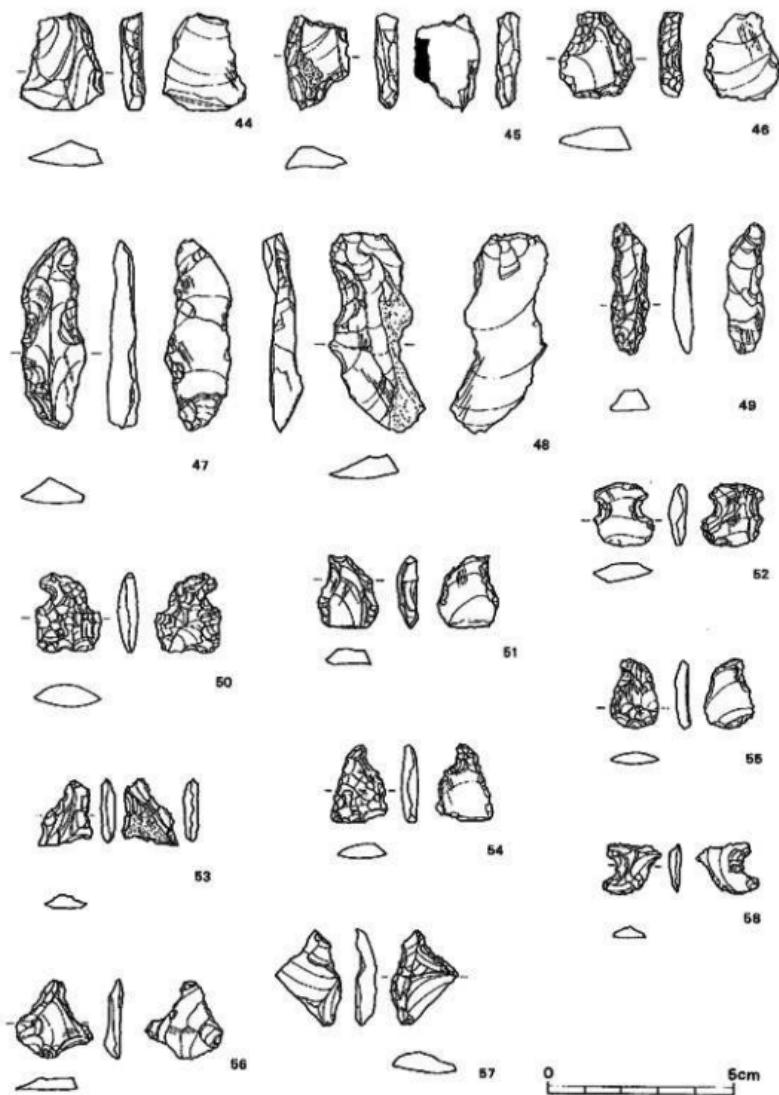


Fig. 27 石器実測図 ④ (2/3)

I類 (抉入石器)

48・50～60にあげた資料で、2cm前後の剝片を利用し、その一端に加工調整をほどこし、鍔状の突起を作出したものである。52はチョウネクタイ形の形状を呈する。

II類 (使用痕及びリタッチのある剝片石器)

49・61～88は、比較的整形加工が単純なもの、あるいは使用による刃こぼれがある。断面が薄く、組み合わせによる用具を想定させる。

III類 (全周に及ぶ調整をおこなった石器)

89～94・119ではほぼ全周にわたり平坦剝離を加えた綫長のスクレイバーである。95～111・116・118・120・122は四角形状の形態をした石器で、整形が比較的に粗い。112～115は円形に近い形狀をなし、ほぼ全周にわたり加工調整をほどこす。

IV類 (先端部が尖りぎみの石器)

117・121・123・125で、上部端から下部へ斜め方向に剝離調整作業を行っている。尖頭器的要素が濃い石器類である。

錐状石器 (Fig. 32)

126～128はいずれも下部端が尖る。加工調整は、側縁よりほどこす。

彫器 (Fig. 32)

129は、上部正面の右側縁より下部へ加工調整痕がある。

石鏃 (Fig. 33～41)

207点を図示した。多種多様の形態をそなえており、形態別にA～K類に分け、その他に欠損品で石鏃と判別できるものをあげた。

A類 (130～138)

小型の部類をこれにあてた。脚を明確に作出する物が多くを占めるが、137のように抉りが幅広のため無脚に近いものもある。

B類 (139～146・336)

局部磨製の石鏃で脚が明確なものとそうでないものとがある。整形は、周縁を二次調整した後、正裏面ともに磨きをかける。

C類 (147～166)

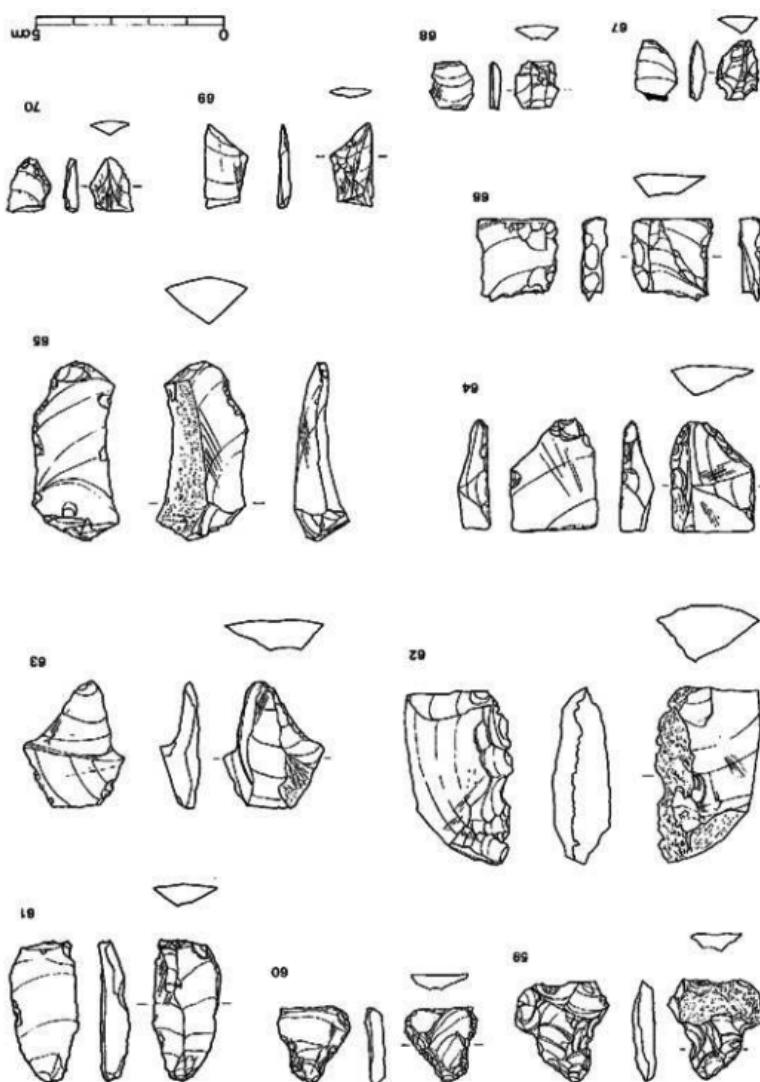
主要剝離面を残し、周縁に調整加工しただけの石器で、剝片鏃といわれるものである。

D類 (167～205)

鉛型鏃にあたる資料で、167～170は抉りが深いため長脚ぎみで頭部がややすずりぎみである。それに比べ171～175は短脚で胴長の形態をとる。176～201は一部欠損する資料であるが、脚が内湾ぎみのものをあてている。202～205は頭部がまるみをもちながら脚が直線ぎみのものである。

E類 (206～220)

FIG. 28 石器実測図 (2/3)



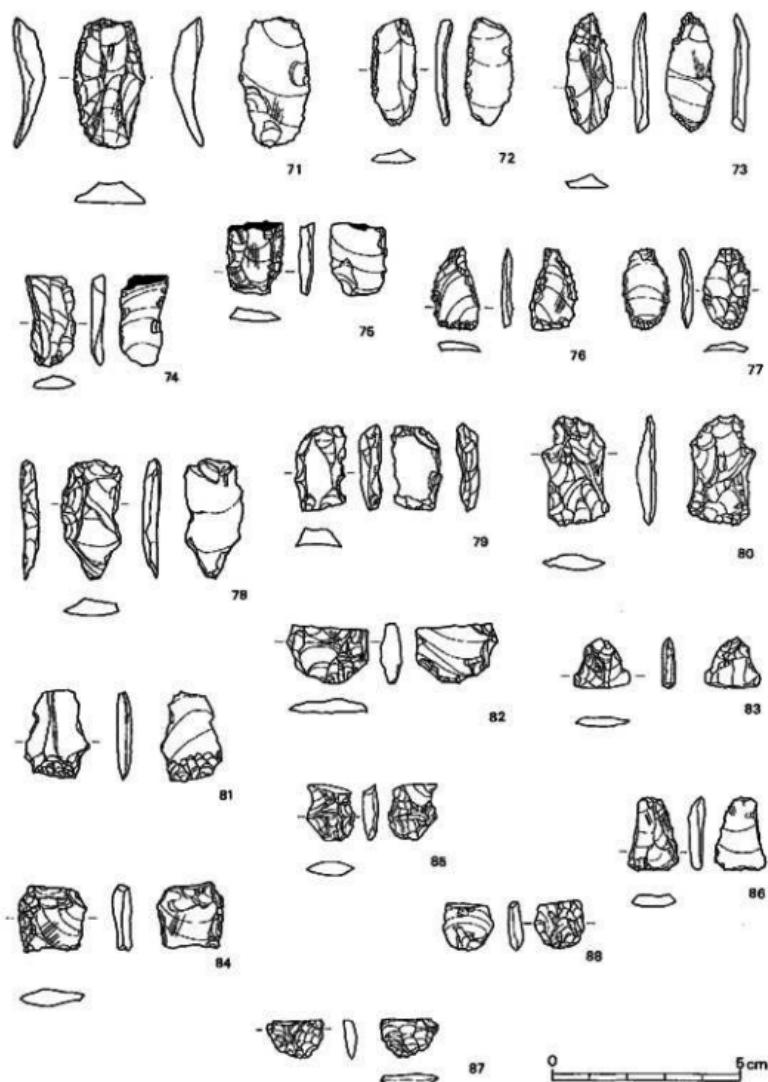


Fig. 29 石器実測図 ⑤ (2/3)

外面模跡

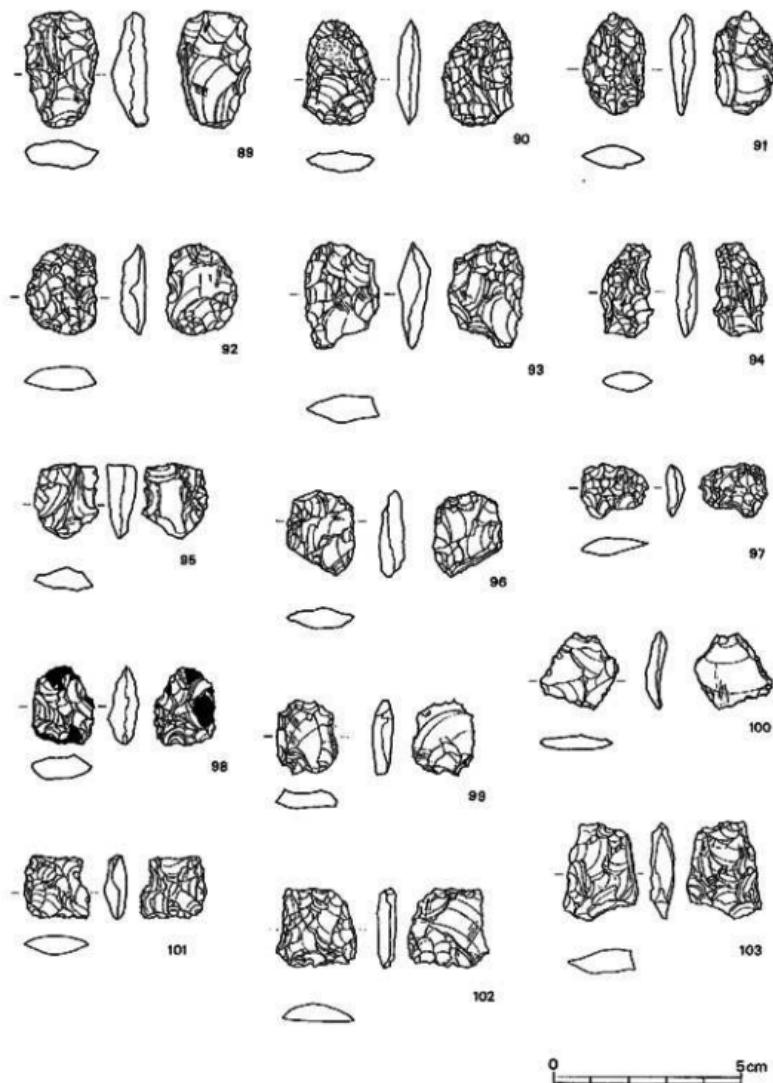
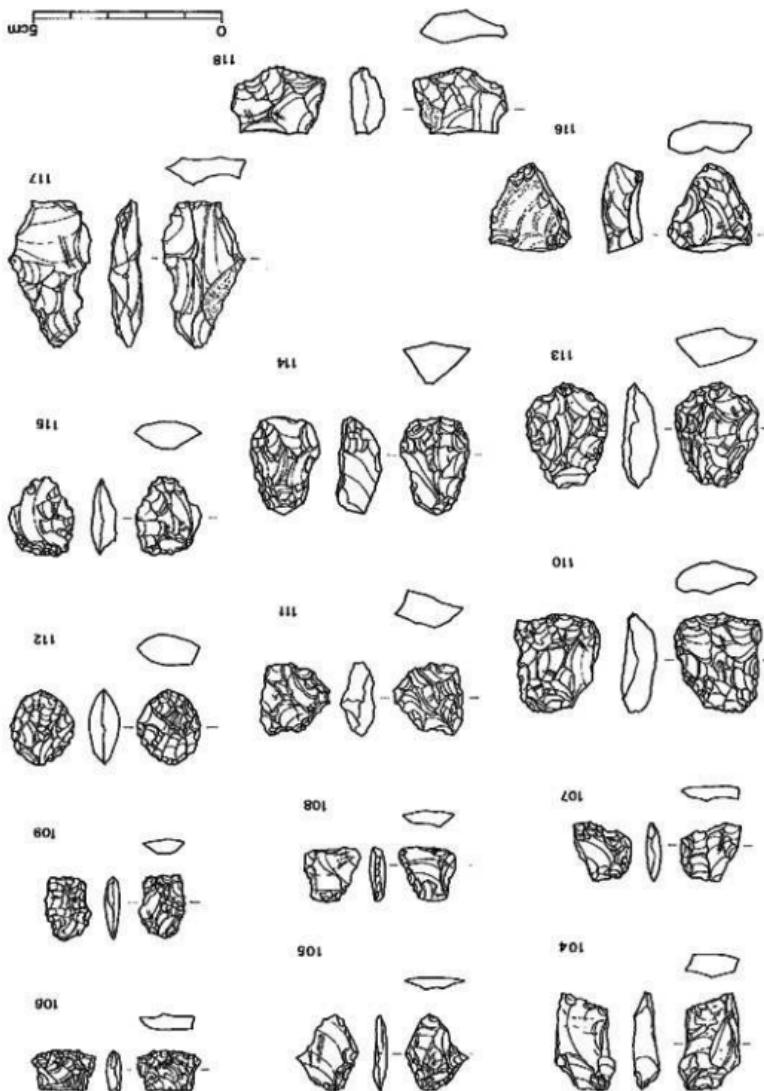


Fig. 30 石器実測図 ⑦ (2/3)

Fig. 31 石器実測図 (2/3)



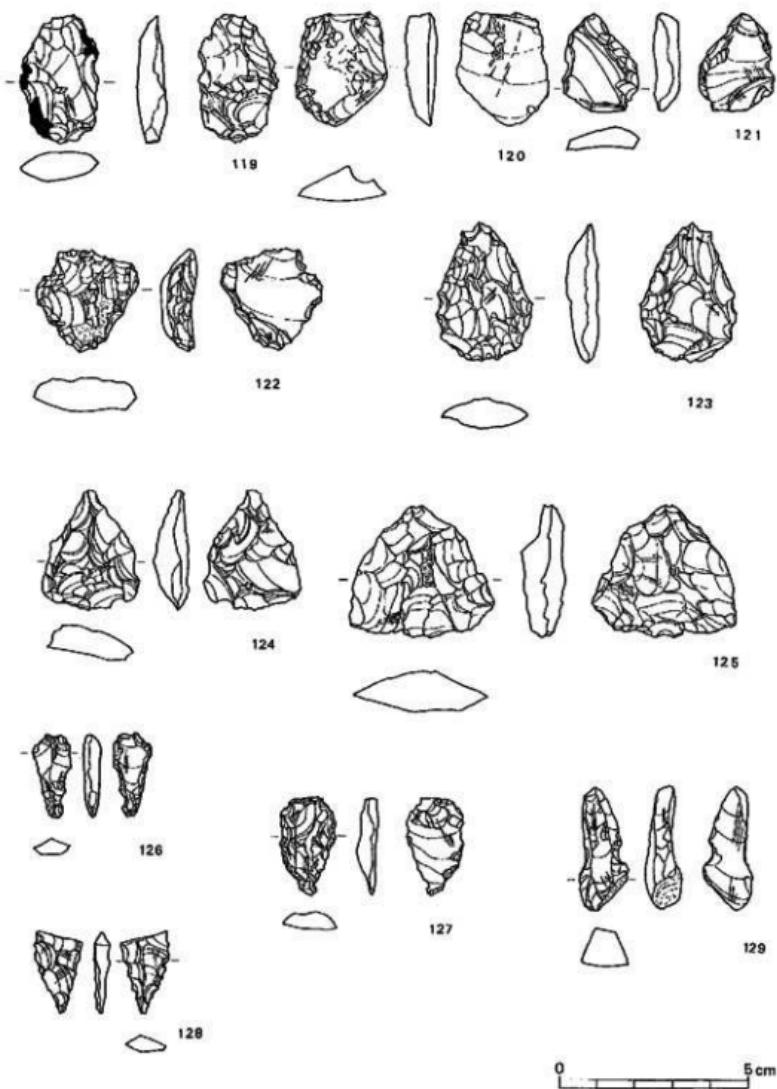


Fig. 32 石器実測図 ⑨ (2/3)

頭部が鋭角で脚も直接的なラインを有する。210は脚にやや幅があるものの鋭角な頭部を作出している。

F類 (221~242)

脚の作出が不明瞭な平基無茎鐵の部類に入る資料である。

G類 (243~258)

F類では基部にやや凹み部が残っていたが、この類では脚を有せず三角形状を呈するものである。

H類 (259~261)

有茎鐵に分けられる資料で本県での出土はまれである。3点の出土があり、いずれも基部中央に小さな突起状の茎を作出している。

I類 (262~263)

基部全体がまるみをもって膨らむ。

J類 (246~276)

前出のF類より基部の抉りが深く、E類ほどの明瞭な脚をなさないものである。

K類 (277~296)

基部抉りの作出が浅く、全体的に胴長になるものをあてた。

その他の石鐵 (297~335・337)

前出の分類に該当する資料であるが、頭部・胴部・脚部を欠損するため、分類を行わず掲載した。

以上の石鐵について、分類した遺物を個体別にドット処理を行い、石器の共有性について検討してみた。(Fig. 42~45)

D・K類の石鐵が重量で、1g以上を中心とするライン上に並び、A~C・E~J類に関しては1g以下0.5gライン前後におさまる。石鐵を射る道具であることを前提にした場合、軽量であれば距離を置いて目的物を捕獲できるように思われるが、D・K類の場合他の石器類と相反する傾向を示している。

つぎに、長軸量長の計測をおこなった。この図では、A類の1.5cmを中心とした物と2cm以上2.5cmに集中箇所が認められる。

幅の計測について、1~1.5cmのA・B類とC~K類の1.5cmを中心に2cmまでにまとまりがある。これは、剥片剥離に規定された結果が推定される。幅は対象物に対し、より致命傷を与えるため、幅広が要求されるところにあると思われる。

厚さについて、0.2~0.3cmにA・B・C類と0.4~0.5cmに集中するD~F・K類に分れる。厚さの違いは、着装方法の違いが考えられる。

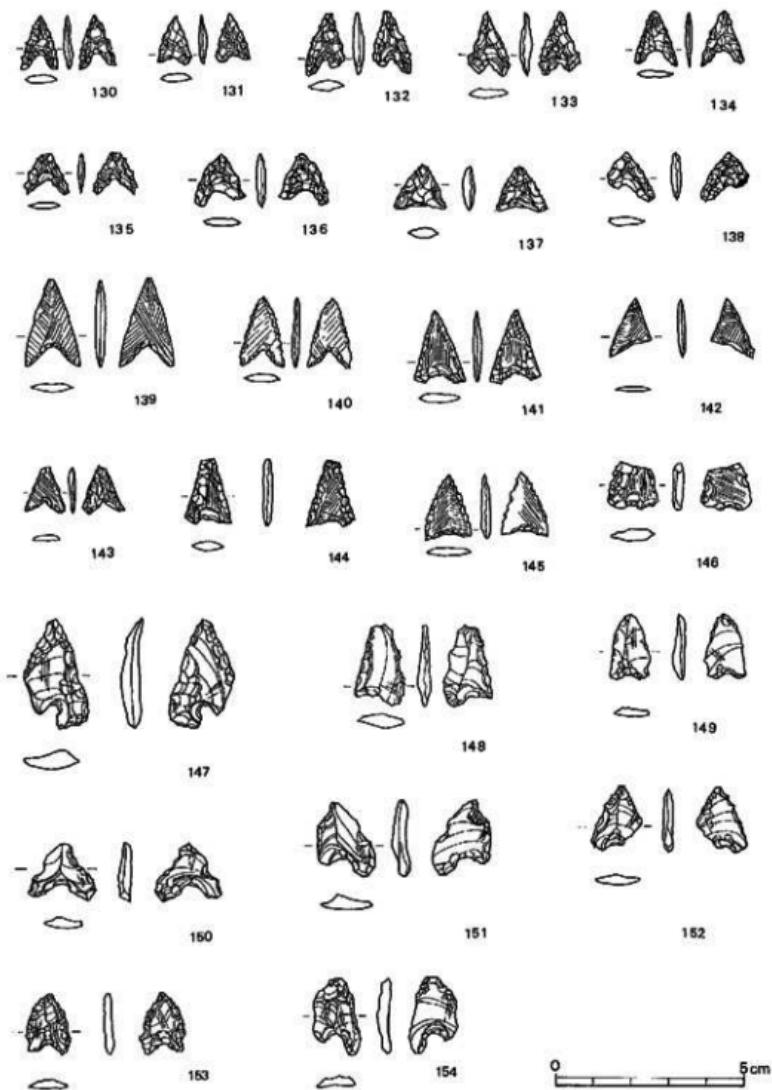


Fig. 33 石器実測図 ⑩

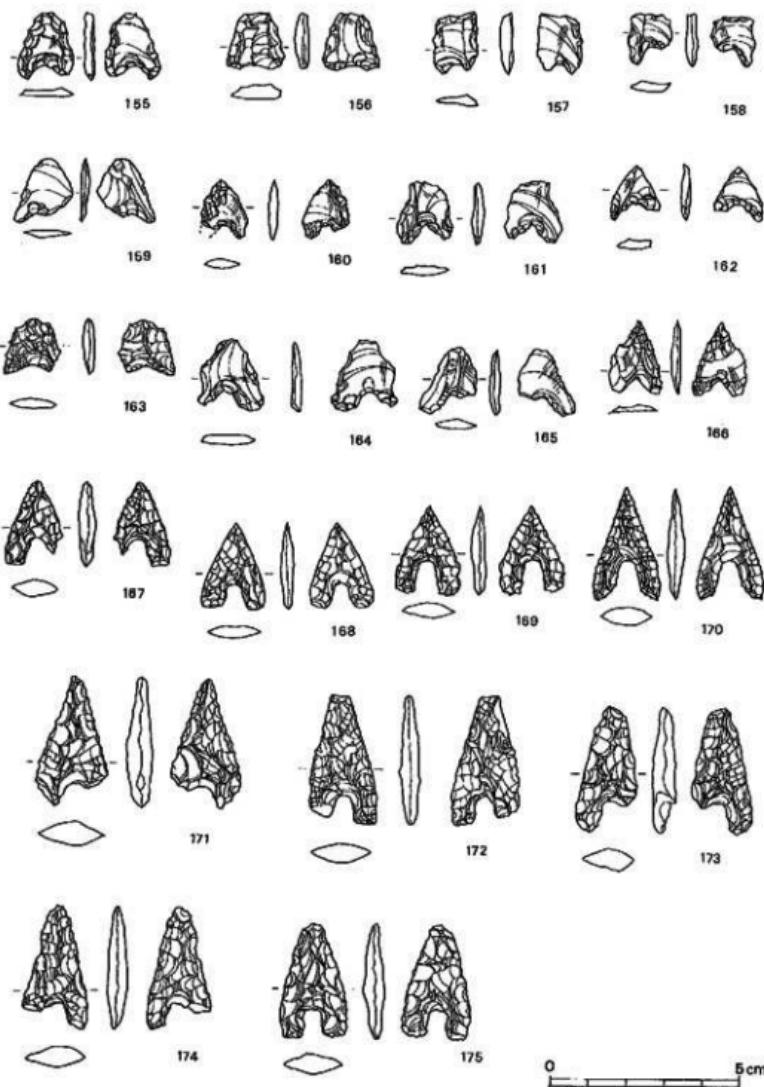


Fig. 34 石器実測図 ①

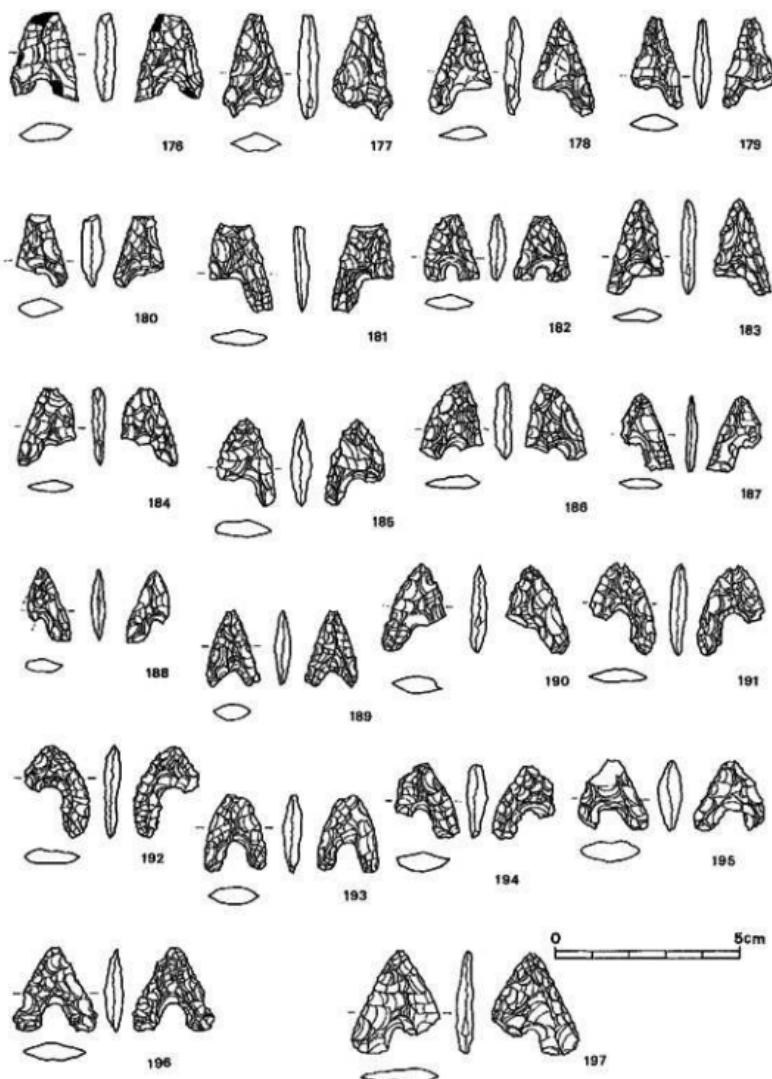
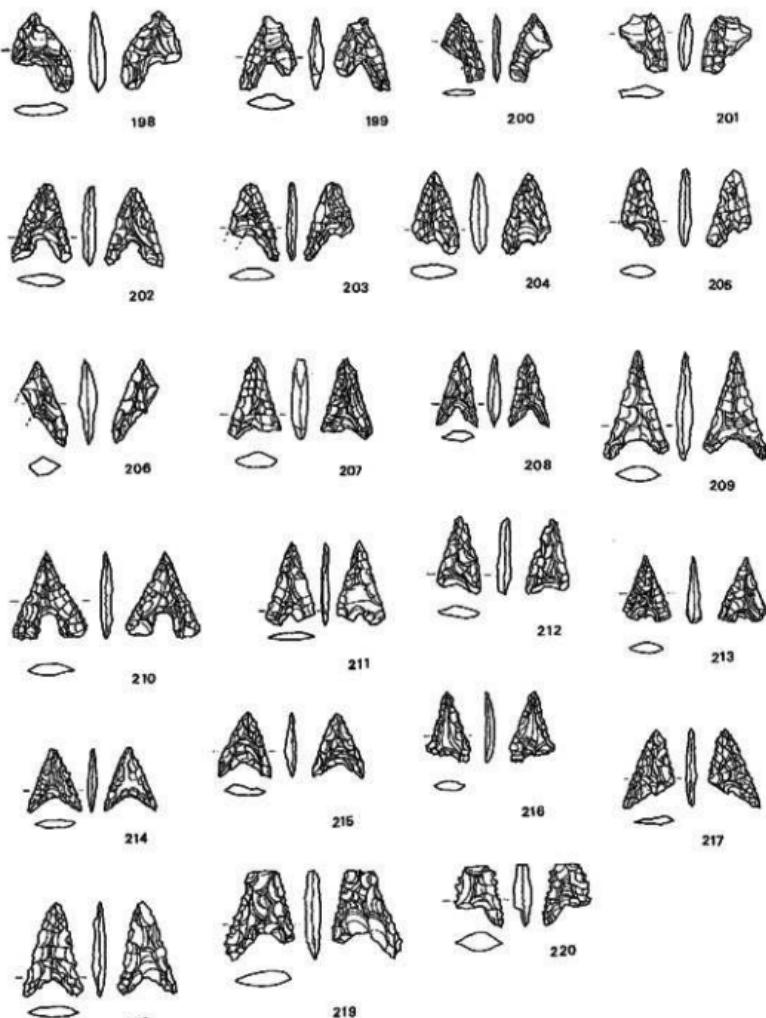


Fig. 35 石器実測図 ⑫



0 5cm

Fig. 36 石器実測図 ①

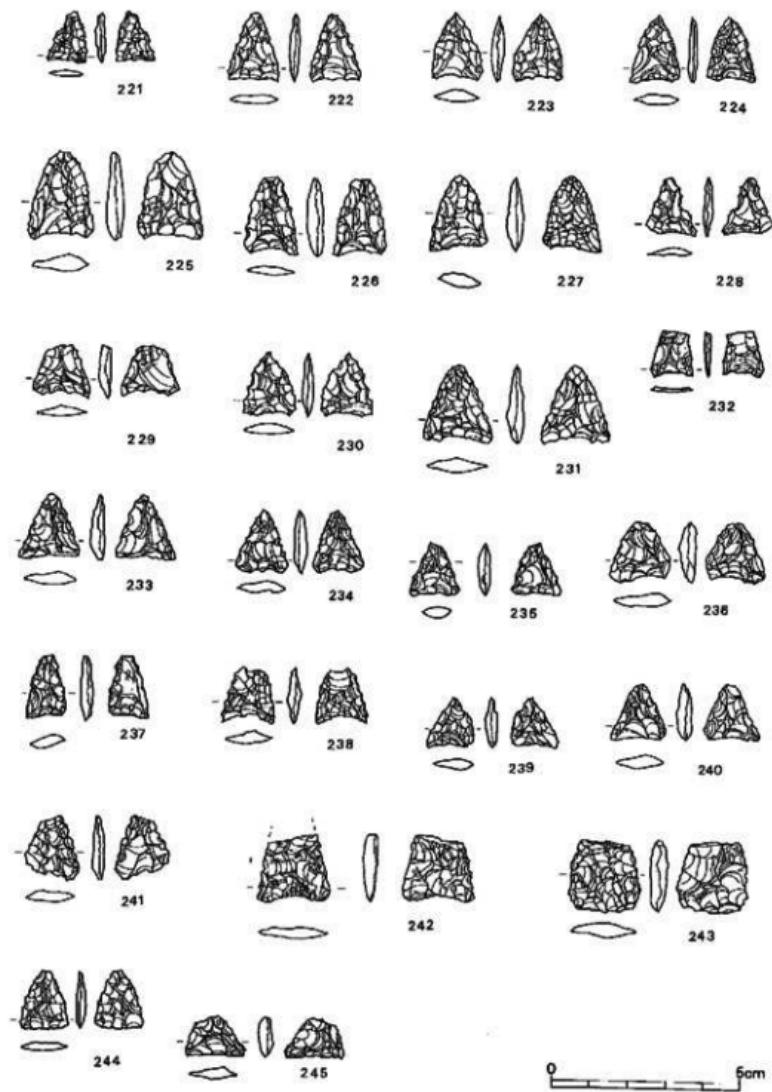


Fig. 37 石器實測圖 ①

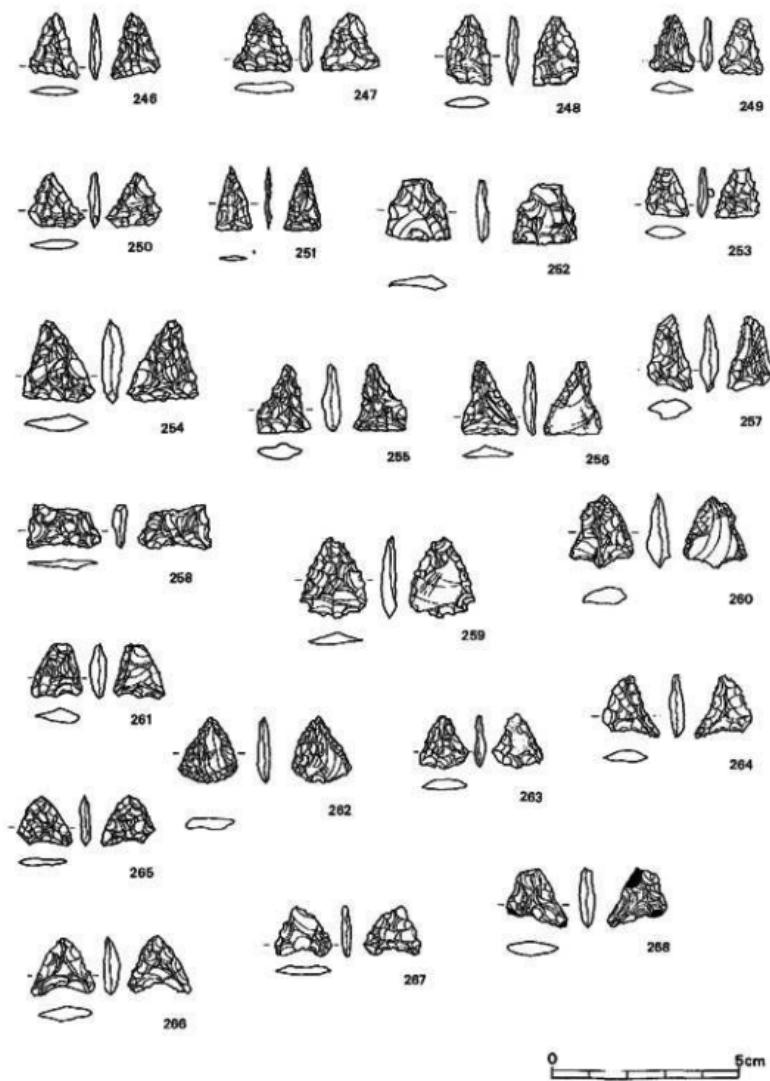


Fig. 38 石器実測図 ④

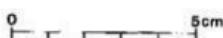
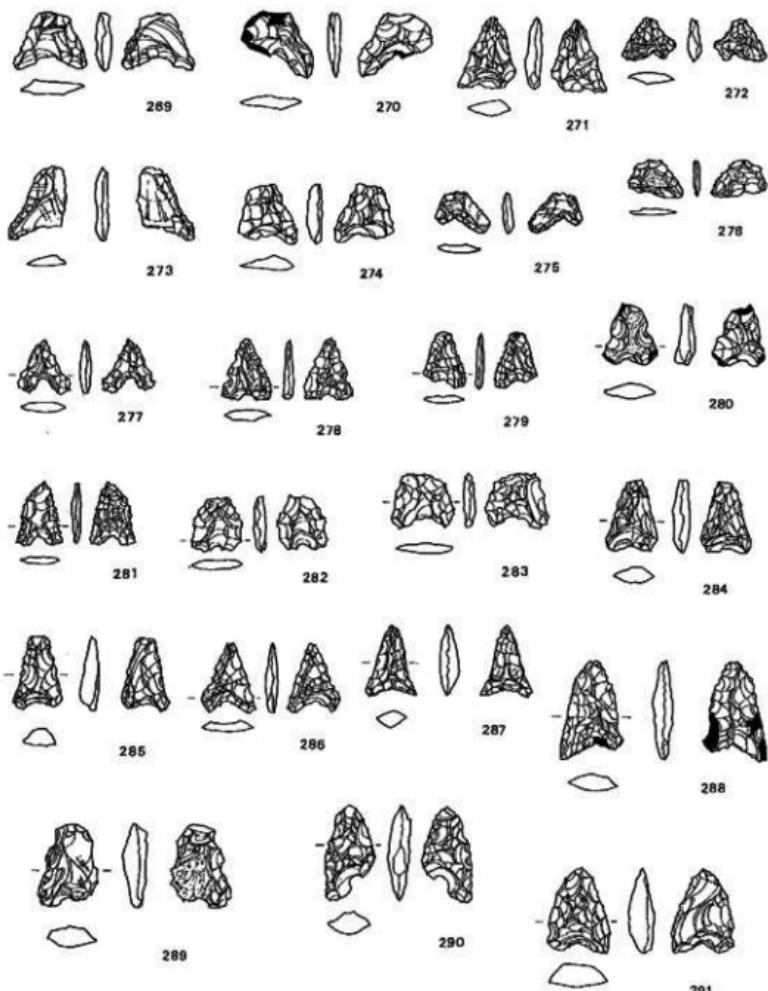


Fig. 39 石器实测图 (6)

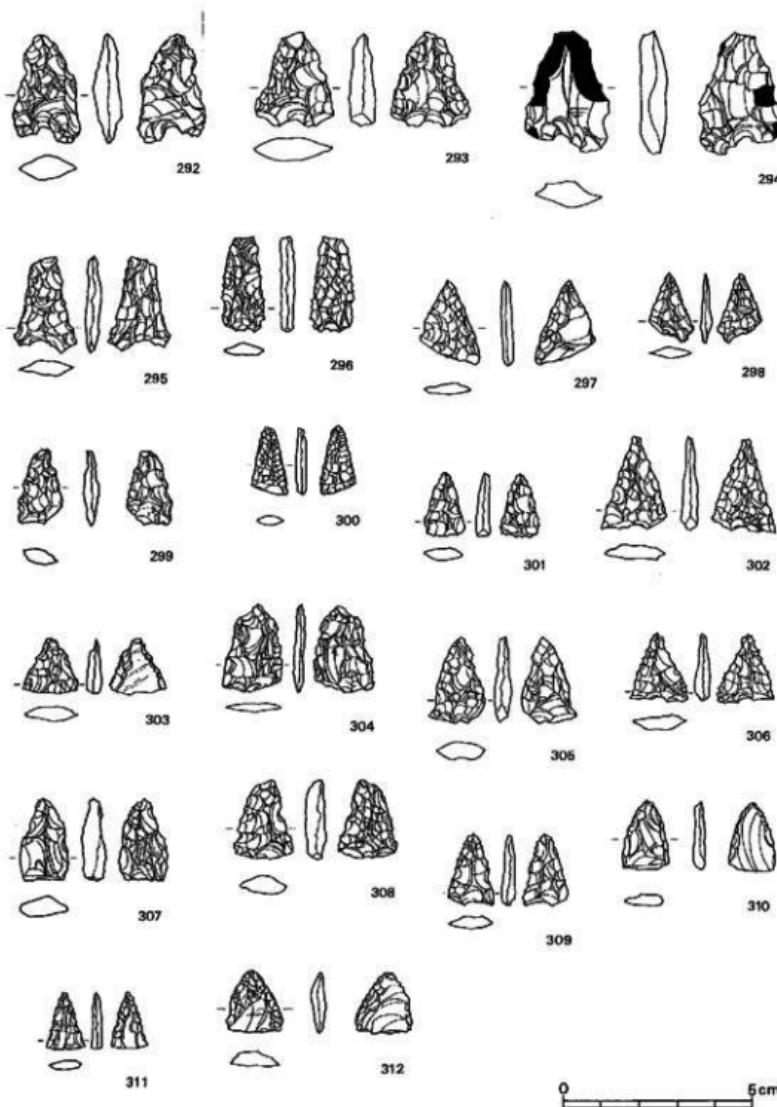


Fig. 40 石器実測図 ②

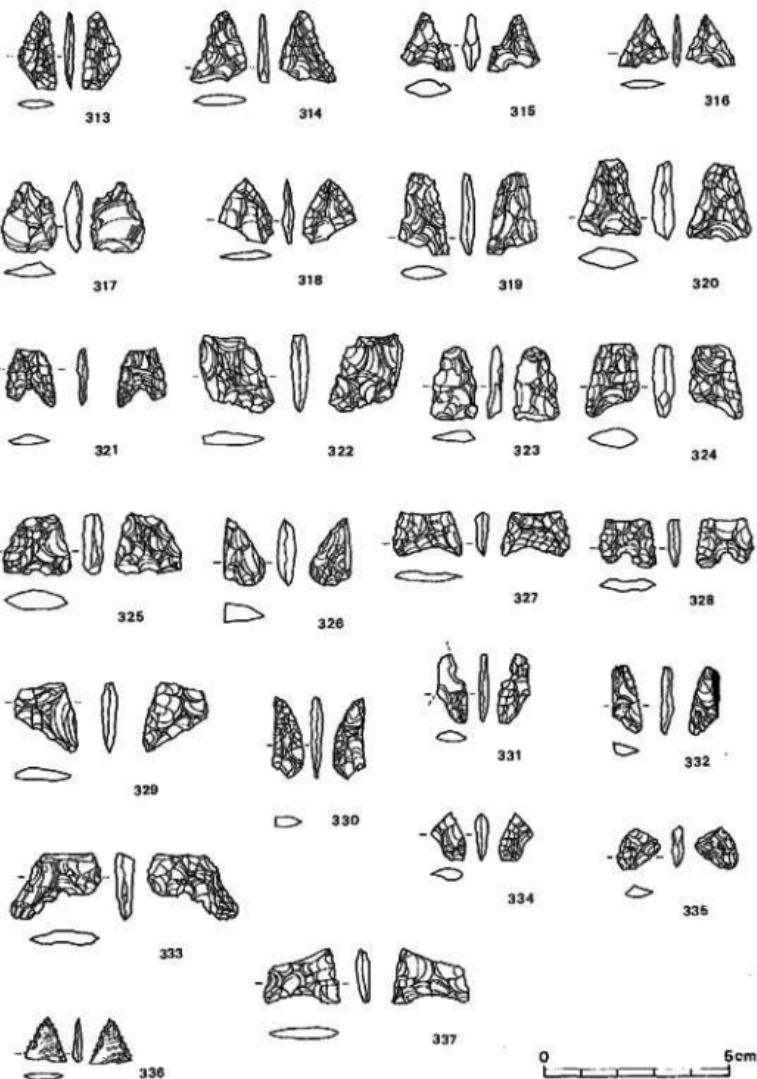


Fig. 41 石器实测图 ⑩

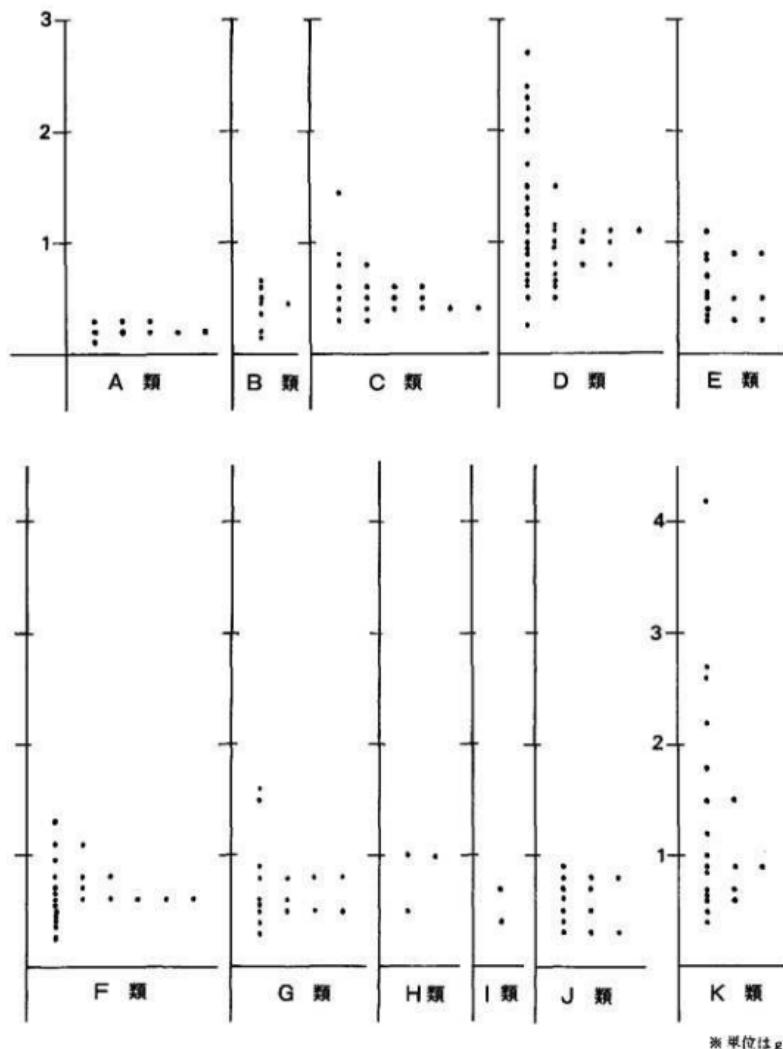
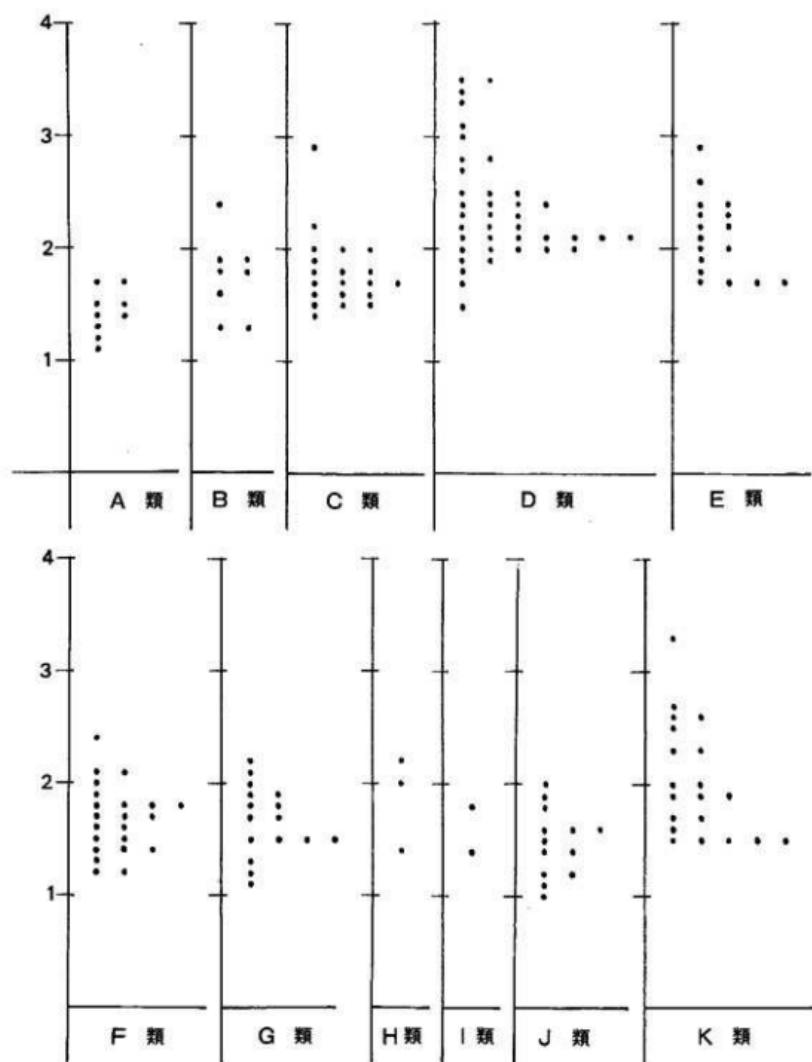


Fig. 42 石鉱個体別重量グラフ

※ 単位は g



※ 単位はcm

Fig. 43 石器個別最長グラフ

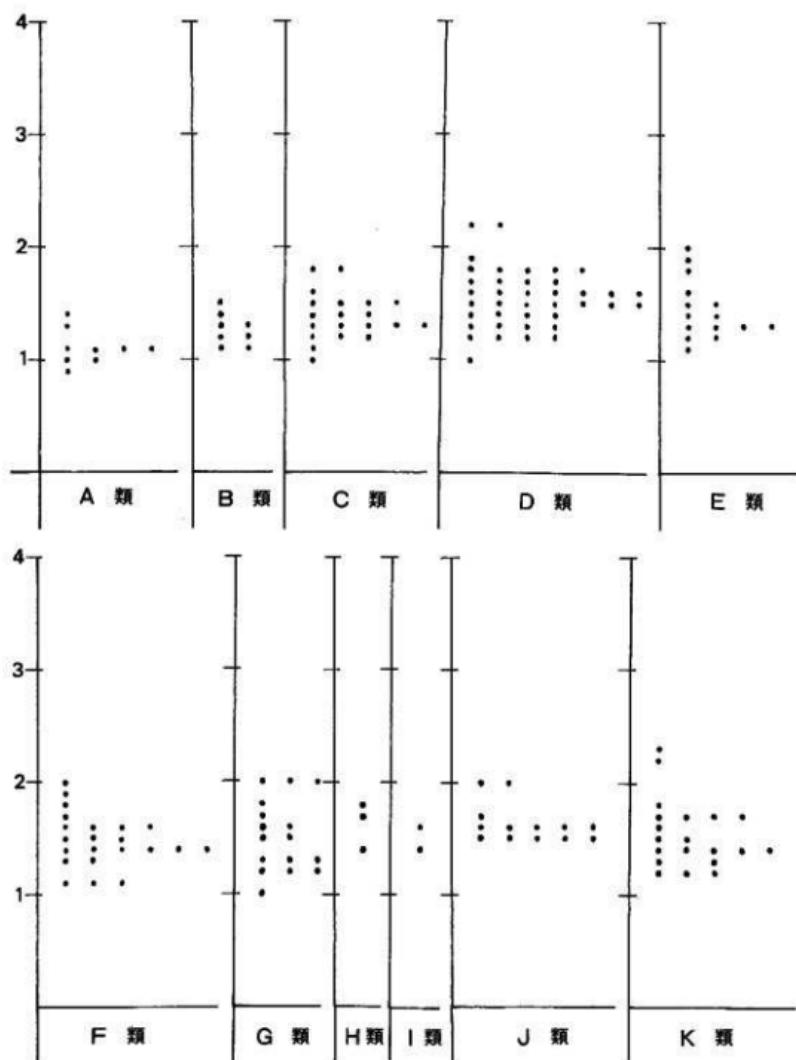


Fig. 44 石器個体別最幅グラフ

※ 単位はcm

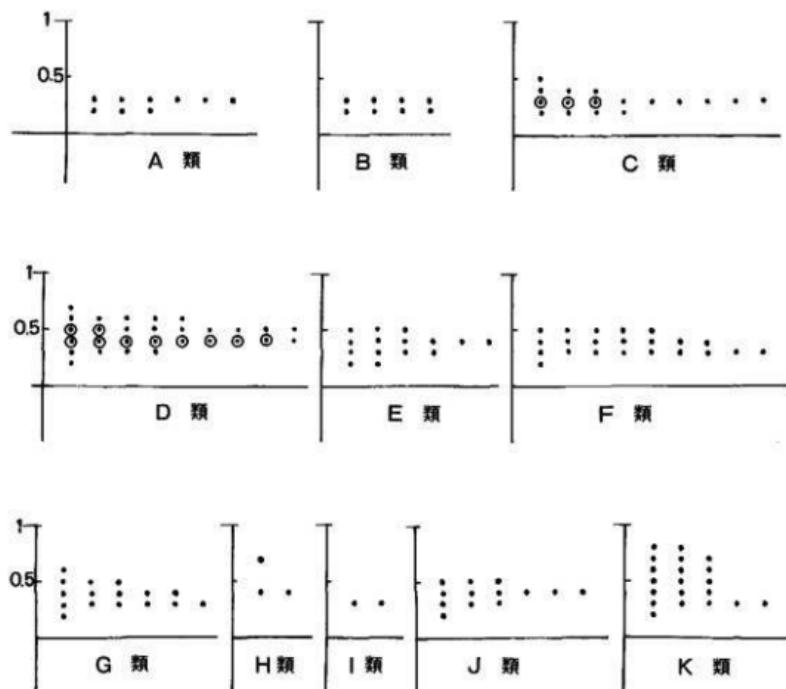


Fig. 45 石器個別最厚グラフ

※ 単位はcm

石匙 (Fig. 46~47)

綫長、横長 (338~344) に刃部をとるものがある。石材はサスカイト・安山岩等を使用する。338は上部中央につまみを作出し、下部を鋭角にし綫長の刃部をとる。つまみ部を正面より調整を加え、両側は細かなりリタッチをほどこす。裏面自然面を残す。339は横長に刃部をとり、つまみを正面右端に作る。刃部は細かなりリタッチをほどこす。正面自然面を残す。340は綫長に刃部を作り上部中央につまみを有する。自然面を正面右側に有する。341前出の資料同様に上部中央につまみをもつ。やや風化し、調整剝離が不明瞭である。342~344はいずれも刃部を横長にもつ。

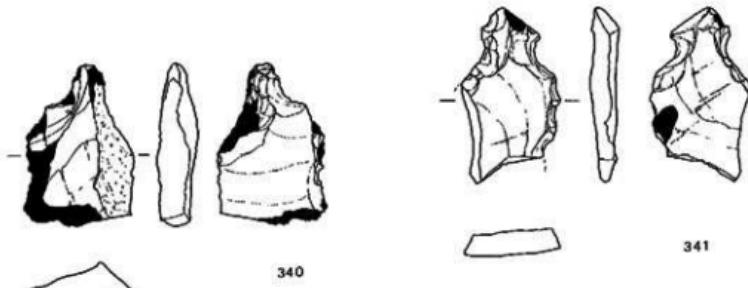
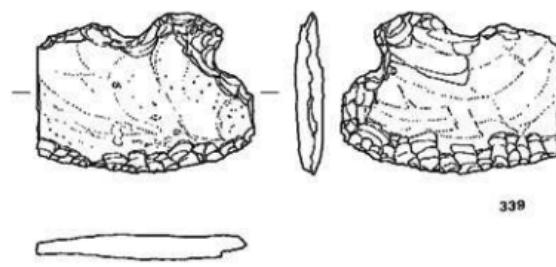
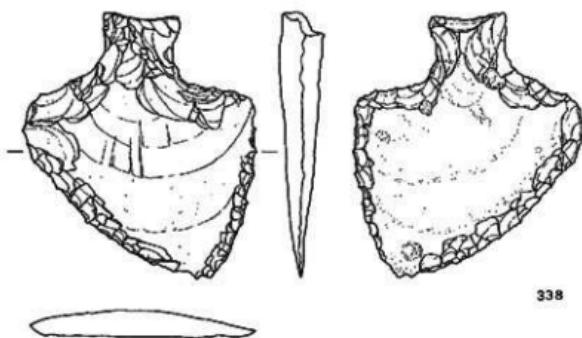


Fig. 46 石器実測図 ①

スクレイバー欠損品 (Fig. 47)

345・346があり、2点とも断面扁平である。

楔形石器 (Fig. 47)

347は端部にクラックを生じ、上下端部に衝撃が加わった状態が残る。

スクレイバー (Fig. 47・49・51)

348・350・355・356・358・364～366がある。348は、下部にフィンジを認め、側縁には二次調整を加えている。350には、正面左側縁に二次調整がある。裏面に衝撃が加わり欠損したと思われる。また、正面右側縁には調整加工をほどこしていない。355はサスカイト製の搔器で、正面全周を剥離調整する。356ハリ質安山岩系の石材を使用し、正面下部に二次調整、右側縁部にリタッチを加える。358全周に調整剝離を行い、上部端を尖らせる。裏面自然面を残す。364は、残核を利用し、正面右側縁に二次調整をほどこす。黒曜石の石材使用。365は白い気泡の入った質の悪い黒曜石石材を使用する。正面右側縁に平坦剝離を行い刃部を作出。366正面下部から縱長の剥離調整を加え、その後刃部のみを作出。自然面を残す。

残核片 (Fig. 47)

349は縱長の剝片剝離を行っている資料である。351不規則な幅広の剝片剝離を行う。ハリ質安山岩系の石材使用。

石斧 (Fig. 48～49)

352は打製の石斧で安山岩の石材を利用する。正裏面に二次調整痕が残る完形品である。側面はやや反りぎみで、基部・刃部とも厚みはほぼ同程度である。357全周にわたり調整剝離をほどこした後、横、斜め方向より研ぎあげる。蛇紋岩製の磨製石斧である。

両面櫛器 (Fig. 48)

353で全周にわたり二次調整をほどこす。

剝片 (Fig. 48)

354大型の剝片。左側縁部に自然面が残る。ハリ質安山岩系である。

凹石・磨石・スリ石 (Fig. 50)

359・363が凹石でいずれも正面中央部が凹む。359は、風化が進み表面ざらつく。輝石安山岩製。363は砂岩系の石材使用。360磨石。輝石安山岩製。361正面中央部打撃の痕が残る叩き石。362スリ石。上下端部に使用の摩耗が残る輝石安山岩製。

不明石器 (Fig. 51)

367・368にあたる遺物で、粘板岩質の石材を使用。側縁及び上面に磨きがかかる。2点とも同一個体と思われる。

石核 (Fig. 51～54)

369～382をあげている。369円錐形状を呈し、縱長の剝片を剥離する。370不定形の石核で自然面を残す。371上部から下部に向って剝片を取りっている。上面平坦なためか、自然面の除去をす

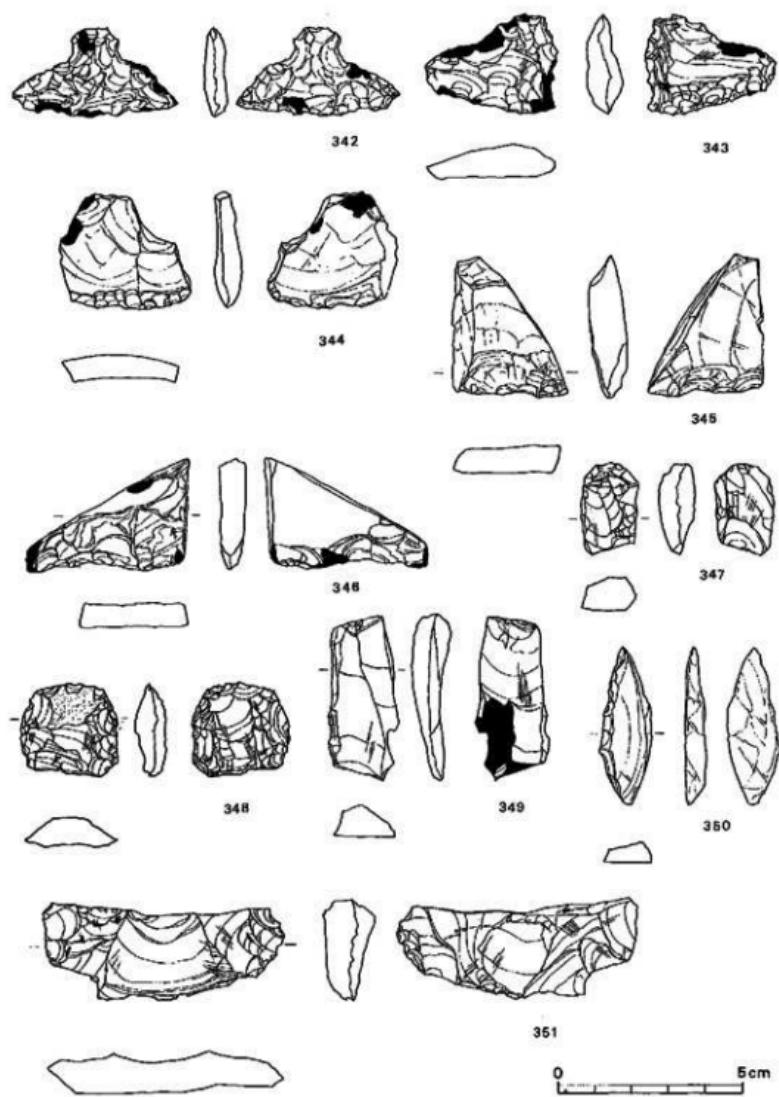


Fig. 47 石器丈量図 ④

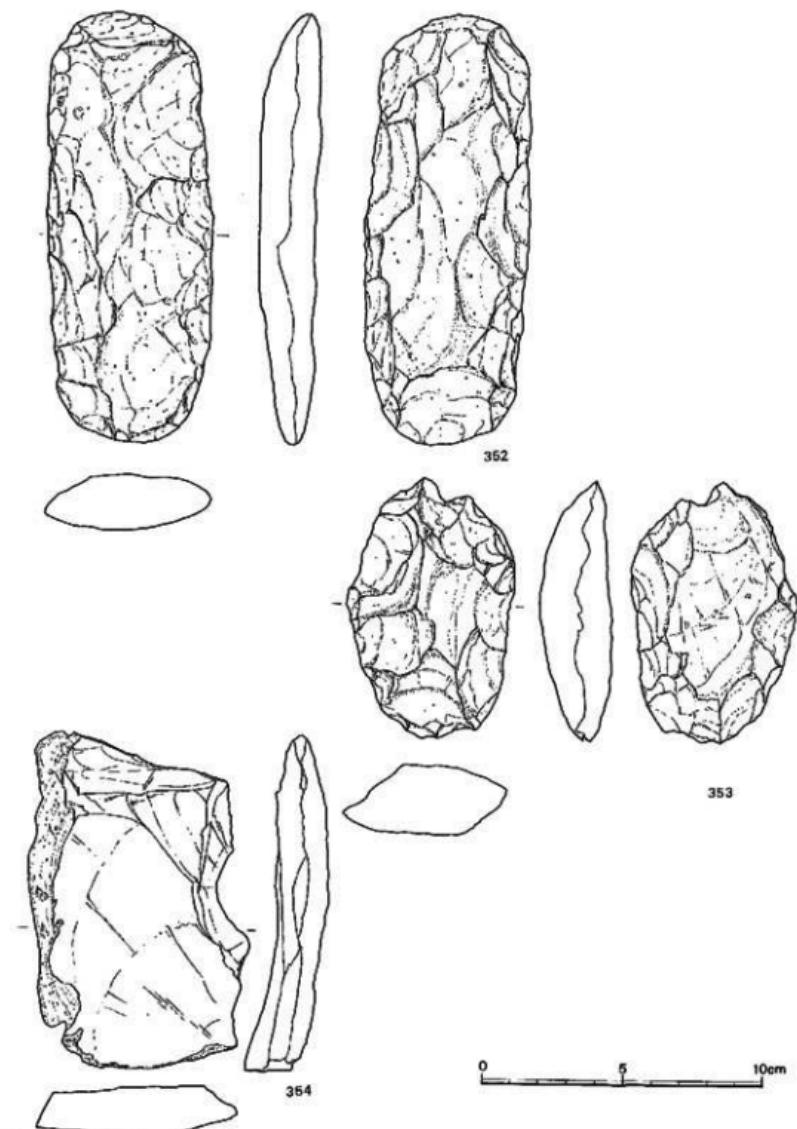


Fig. 48 石器実測図 ②

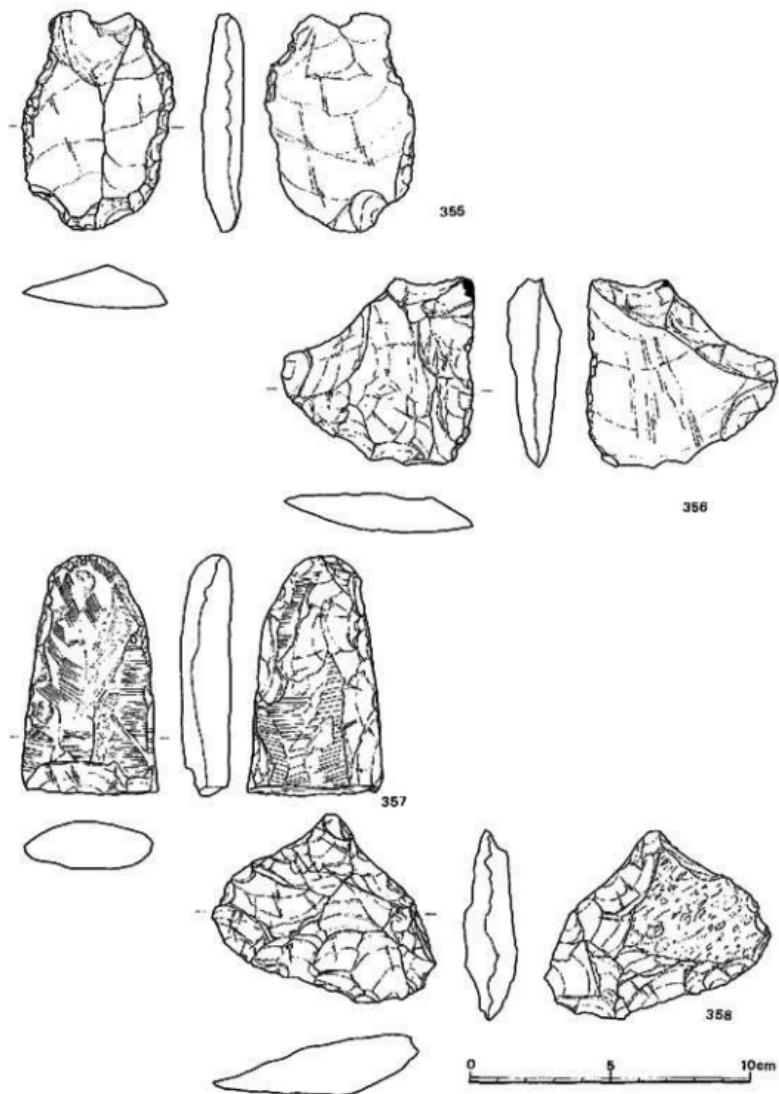


Fig. 49 石器實測圖 ②

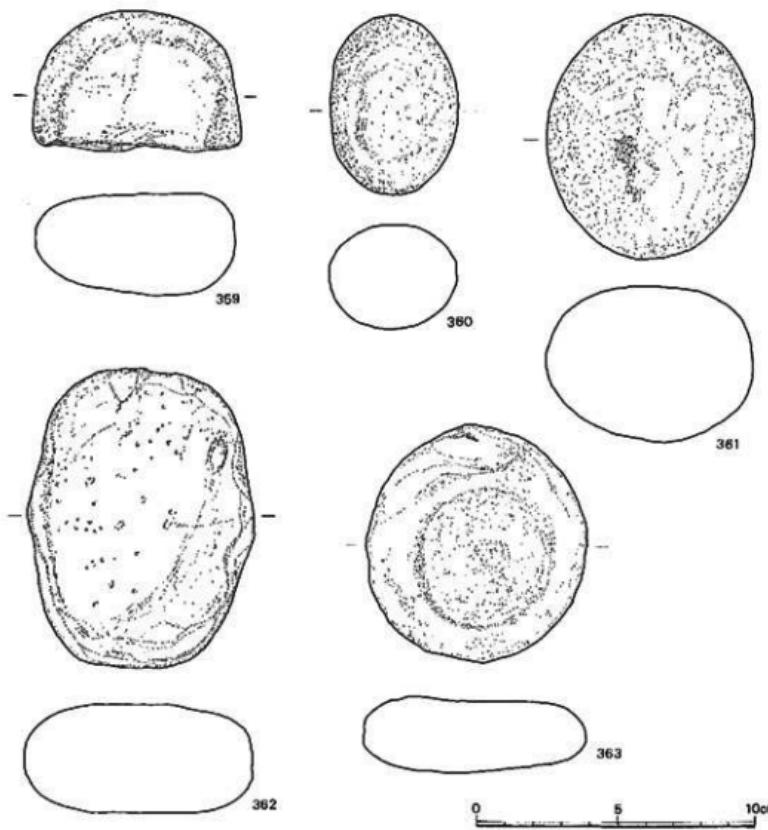


Fig. 50 石器実測図 ②

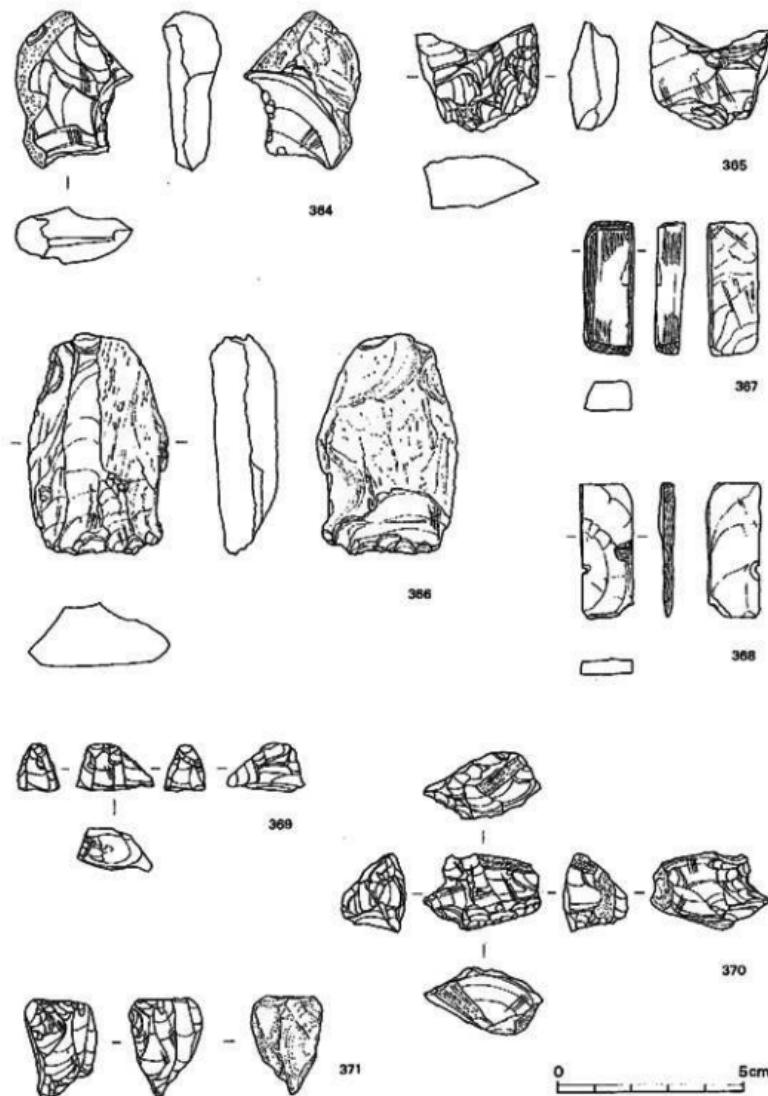


Fig. 51 石器実測図 ②

外圈遗物

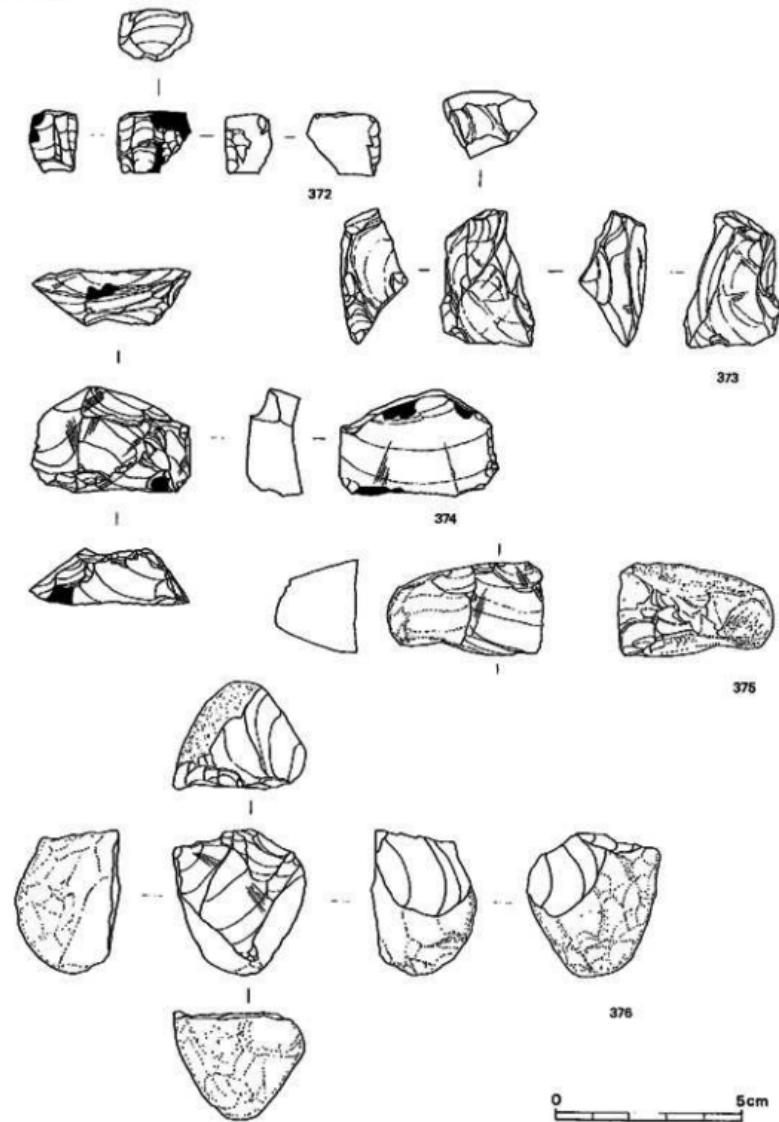


Fig. 52 石器实测图 ②

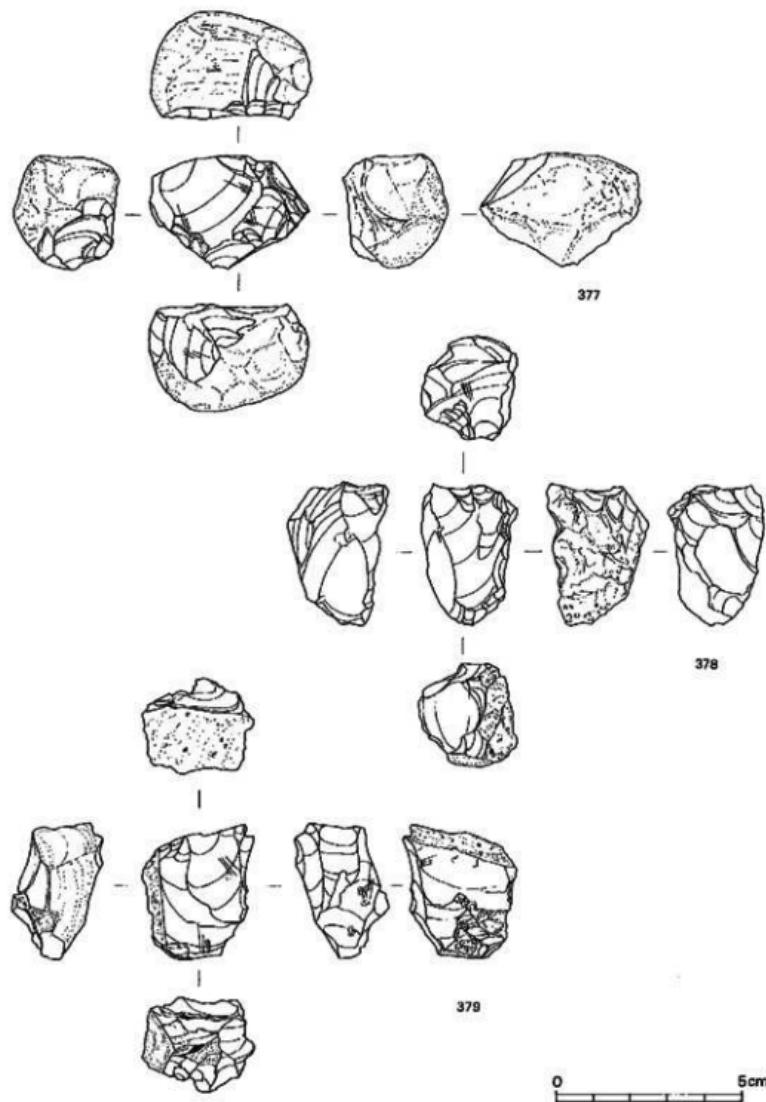


Fig. 53 石器実測図 ⑤

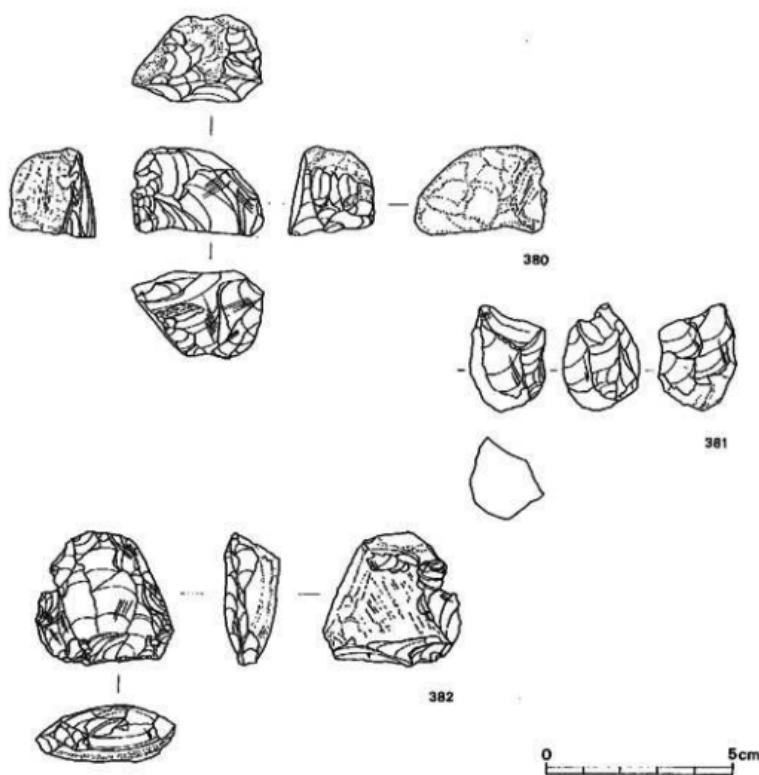


Fig. 54 石器実測図 ②

ることなく、剥離作業を行っている。372上部平坦面を作出し、下部より剥離を行う。373チャート石を石材とし、不定形剥片を剥取する。374幅広の剥片を剥離する。375正面のみ剥離し、他は自然面を残す。376三面の剥片剥離を行った後、放棄する。377正面より剥片剥離を行い、他は自然面を残す。378上面平坦面作出の後、上部より加撃し剥片をとる。379上面平坦な自然面を残し、上部より下部へ向って、剥片剥離作業を行う。380正面より剥片作出の後、下面より剥片剥離する。自然面を残す。381上部より剥片剥離し、1/2程自然面を残す。382正面の自然面除去の後、剥片剥離作業を行い裏面は白面を残す。

以上が外園遺跡における石器内容である。

(町山)

- 註 1. 下川達彌監修「日ノ岳遺跡」長崎県立美術博物館 1981.3
 2. 平野、横山、福田編集「柿崎遺跡」「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ」長崎県文化財調査報告書第54集長崎県教育委員会 1981
 3. 麻生優・白石浩之執筆「百花台遺跡」「日本の旧石器文化3」雄山閣出版株式会社 1976
 4. 萩原博文執筆「ナイフ形石器」「中山遺跡の研究(1)」平戸市教育委員会 1978.3

外側流域

Tab. 1 石器計測表

| 遺物番号 | 出土地区 | 最长(cm) | 最幅(cm) | 最厚(cm) | 重量(g) | 備考 | 遺物番号 | 出土地区 | 最长(cm) | 最幅(cm) | 最厚(cm) | 重量(g) | 備考 |
|------|----------------|--------|--------|--------|-------|----------|------|-----------------|--------|--------|--------|-------|----------|
| 1 | D-E-1 -IV | 3.5 | 1.7 | 0.7 | 4.2 | 中型ナイフ形石器 | 28 | A-10-II -B | 1.6 | 1.6 | 0.4 | 0.95 | スクレイパー |
| 2 | T-22-III | 3.4 | 2.0 | 0.9 | 5.6 | * | 29 | C-A-II | 2.1 | 1.9 | 0.7 | 1.15 | * |
| 3 | B-1-N | 2.1 | 1.7 | 0.7 | 2.5 | * (欠損品) | 30 | C-D-III | 2.0 | 1.8 | 0.5 | 1.3 | * |
| 4 | E-1-III | 3.4 | 2.0 | 0.9 | 6.1 | * | 31 | G-21-II | 2.7 | 1.5 | 0.5 | 1.7 | * |
| 5 | D-E-1 -III | 2.7 | 1.9 | 0.6 | 2.0 | 小型ナイフ形石器 | 32 | C-6-H | 2.2 | 1.9 | 0.4 | 1.35 | * |
| 6 | D-6-III | 2.8 | 1.1 | 0.7 | 1.45 | * | 33 | H-20-II | 2.3 | 2.3 | 0.6 | 2.65 | * |
| 7 | A-11-II | 2.8 | 1.4 | 0.6 | 2.4 | * | 34 | D-E-II | 3.3 | 2.1 | 0.7 | 4.5 | * |
| 8 | B-III | 3.3 | 1.3 | 0.5 | 2.0 | * | 35 | C-1-N | 4.0 | 2.1 | 1.3 | 9.3 | * |
| 9 | B-8-II -III | 3.8 | 1.5 | 0.6 | 3.0 | * | 36 | H-21-II | 2.8 | 2.2 | 0.4 | 2.95 | * |
| 10 | C-1-II | 3.1 | 1.3 | 0.5 | 2.3 | * | 37 | B-13-II -III | 1.6 | 1.3 | 0.6 | 1.05 | * |
| 11 | C-4-II | 3.1 | 1.1 | 0.5 | 1.9 | * | 38 | C-10-V | 1.3 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | * |
| 12 | D-10-H | 2.7 | 1.2 | 0.4 | 1.1 | * | 39 | C-1-N | 2.6 | 1.3 | 0.5 | 1.7 | * |
| 13 | C-6-H | 1.9 | 1.0 | 0.3 | 0.8 | * | 40 | C-10-III | 3.3 | 1.5 | 0.4 | 1.95 | * |
| 14 | B-10-II -B | 2.2 | 1.1 | 0.4 | 0.8 | * | 41 | B-9-II | 1.9 | 1.2 | 0.6 | 1.5 | * |
| 15 | A-9-II | 2.5 | 1.1 | 0.5 | 1.5 | * | 42 | A-10-III | 2.0 | 0.8 | 0.4 | 0.65 | * |
| 16 | C-7-H | 2.0 | 1.2 | 0.4 | 0.9 | * | 43 | C-7-H | 1.4 | 0.7 | 0.2 | 0.2 | マイクロブレード |
| 17 | E-10-H | 2.5 | 0.9 | 0.3 | 0.6 | * | 44 | C-1-N | 2.6 | 2.2 | 0.6 | 3.45 | 中型ナイフ形石器 |
| 18 | B-1 | 3.1 | 1.8 | 0.4 | 1.7 | * | 45 | G-8-H | 2.5 | 1.7 | 0.5 | 2.85 | スクレイパー |
| 19 | C-4-II | 2.8 | 1.1 | 0.4 | 1.45 | * | 46 | C-7-II | 2.3 | 2.0 | 0.6 | 3.0 | 中型ナイフ形石器 |
| 20 | B-4-H | 2.9 | 1.2 | 0.4 | 1.65 | * | 47 | F-21-II | 5.1 | 1.8 | 0.8 | 5.95 | スクレイパー |
| 21 | C-5-H | 2.5 | 1.1 | 0.5 | 2.0 | * | 48 | C-5-III | 5.4 | 2.0 | 0.9 | 7.35 | * I類 |
| 22 | B-III | 2.4 | 1.1 | 0.5 | 1.55 | * | 49 | C-12-H | 3.5 | 1.0 | 0.5 | 1.7 | * II類 |
| 23 | D-10-II | 5.7 | 2.8 | 1.2 | 14.4 | 尖頭器 | 50 | D-12-II | 2.1 | 1.7 | 0.5 | 1.7 | * I類 |
| 24 | B-7-H | 2.4 | 1.9 | 0.6 | 1.5 | 台形様石器 | 51 | C-9-10 -B | 1.9 | 1.6 | 0.6 | 1.4 | * |
| 25 | C-6-H | 1.5 | 1.4 | 0.5 | 0.95 | 台形石器 | 52 | G-21-H | 1.7 | 1.6 | 0.5 | 1.1 | * |
| 26 | B-4-V | 3.4 | 1.1 | 0.4 | 2.65 | 小型ナイフ形石器 | 53 | G-3-II | 1.7 | 1.4 | 0.4 | 0.9 | * |
| 27 | C-8-II | 2.0 | 1.1 | 0.4 | 1.0 | スクレイパー | 54 | G-4-H | 2.1 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | * |

Tab. 2 石器計測表

| 遺物番号 | 出土地区 | 最長(cm) | 最幅(cm) | 最厚(cm) | 重量(g) | 備考 | 遺物番号 | 出土地区 | 最長(cm) | 最幅(cm) | 最厚(cm) | 重量(g) | 備考 |
|------|-----------|--------|--------|--------|-------|----------|------|-----------|--------|--------|--------|-------|----------|
| 55 | G-3-H | 1.8 | 1.3 | 0.3 | 0.65 | スクレイバーⅠ類 | 82 | I-21-II | 1.6 | 2.2 | 0.6 | 2.0 | スクレイバーⅡ類 |
| 56 | C-9-II | 2.1 | 2.1 | 0.4 | 1.25 | * | 83 | C-4-II | 1.4 | 1.5 | 0.3 | 0.7 | * |
| 57 | C-6-H | 2.6 | 1.7 | 0.6 | 1.95 | * | 84 | C-12-13-B | 1.8 | 1.8 | 0.5 | 1.5 | * |
| 58 | C-1-N | 1.3 | 1.4 | 0.3 | 0.45 | * | 85 | F-8-H | 1.5 | 1.3 | 0.4 | 0.65 | * |
| 59 | G-F-8-I | 2.9 | 2.5 | 0.6 | 3.6 | * | 86 | F-9-H | 2.0 | 1.4 | 0.4 | 0.8 | * |
| 60 | B-4-III | 2.0 | 1.9 | 0.4 | 1.5 | * | 87 | C-8-I | 1.1 | 1.6 | 0.3 | 0.45 | * |
| 61 | J-20-II | 3.8 | 1.8 | 0.8 | 3.8 | * | 88 | C-9-H | 1.3 | 1.3 | 0.4 | 0.5 | * |
| 62 | J-21-H | 4.8 | 2.7 | 1.2 | 17.85 | * | 89 | G-20-H | 3.1 | 2.0 | 0.9 | 4.3 | * |
| 63 | H-22-II | 3.4 | 2.7 | 1.0 | 5.15 | * | 90 | — | 2.8 | 1.8 | 0.5 | 2.9 | * |
| 64 | J-23-H | 3.0 | 2.3 | 0.8 | 4.9 | * | 91 | F-9-H | 2.7 | 1.6 | 0.7 | 2.25 | * |
| 65 | II | 4.8 | 2.1 | 1.3 | 9.8 | * | 92 | B-5-II | 2.4 | 1.9 | 0.6 | 2.8 | * |
| 66 | H-21-II | 2.2 | 2.2 | 0.7 | 3.55 | * | 93 | D-12-H | 2.8 | 1.9 | 0.8 | 3.75 | * |
| 67 | C-7-H | 1.6 | 1.1 | 0.4 | 0.75 | * | 94 | A-9 | 2.5 | 1.3 | 0.5 | 1.65 | * |
| 68 | C-6-H | 1.2 | 1.2 | 0.3 | 0.45 | * | 95 | A-10-III | 2.0 | 1.7 | 0.8 | 2.55 | * |
| 69 | F-8-H | 2.3 | 1.2 | 0.3 | 0.6 | * | 96 | D-11-H | 2.3 | 1.8 | 0.7 | 2.3 | * |
| 70 | C-7-III | 1.5 | 1.1 | 0.4 | 0.4 | * | 97 | A-12-II | 1.4 | 1.8 | 0.5 | 1.0 | * |
| 71 | F-1-H | 3.5 | 1.9 | 0.6 | 3.75 | * | 98 | C-4-H | 2.1 | 1.6 | 0.8 | 2.05 | * |
| 72 | D-13-H | 2.9 | 1.2 | 0.3 | 1.0 | * | 99 | F-9-II | 2.0 | 1.6 | 0.5 | 1.65 | * |
| 73 | F-9-II | 3.2 | 1.3 | 0.4 | 1.35 | * | 100 | C-8-II | 2.0 | 1.9 | 0.4 | 1.45 | * |
| 74 | B-4-N | 2.4 | 1.2 | 0.4 | 1.0 | * | 101 | F-10-H | 1.7 | 1.8 | 0.6 | 1.6 | * |
| 75 | G-4-H | 1.9 | 1.5 | 0.4 | 1.45 | * | 102 | D-E-2-H | 2.1 | 2.1 | 0.5 | 2.1 | * |
| 76 | F-8-H | 2.2 | 1.2 | 0.2 | 0.75 | * | 103 | H-20-II | 2.6 | 1.9 | 0.6 | 2.9 | * |
| 77 | H-28-H | 2.2 | 1.2 | 0.3 | 0.8 | * | 104 | B-9-H | 2.6 | 1.6 | 0.7 | 2.75 | * |
| 78 | G-8-H | 3.3 | 1.5 | 0.4 | 2.5 | * | 105 | C-10-H | 2.1 | 1.6 | 0.3 | 0.75 | * |
| 79 | G-4-H | 2.4 | 1.3 | 0.6 | 1.95 | * | 106 | F-2-II | 1.1 | 1.7 | 0.4 | 0.7 | * |
| 80 | F-20-II-N | 2.9 | 1.7 | 0.5 | 2.1 | * | 107 | F-8-H | 1.6 | 1.5 | 0.4 | 0.9 | * |
| 81 | D-12-H | 2.4 | 1.6 | 0.4 | 1.4 | * | 108 | F-8-H | 1.5 | 1.5 | 0.4 | 0.75 | * |

Tab. 3 石器計測表

| 遺物 番号 | 出土地 区 | 最長 (cm) | 最幅 (cm) | 最厚 (cm) | 重 量 (g) | 備 考 | 遺物 番号 | 出土地 区 | 最長 (cm) | 最幅 (cm) | 最厚 (cm) | 重 量 (g) | 備 考 |
|----------|----------------|------------|------------|------------|---------------|----------|----------|-----------------|------------|------------|------------|---------------|--------|
| 109 | B-8-II | 1.7 | 1.2 | 0.4 | 0.7 | スクレイバーⅢ類 | 136 | C-4-H | 1.4 | 1.3 | 0.3 | 0.2 | 石鏃A類 |
| 110 | G-8-H | 2.6 | 2.3 | 0.8 | 5.55 | * | 137 | B-13-II -III | 1.2 | 1.4 | 0.3 | 0.3 | * |
| 111 | B-9-H | 1.9 | 1.8 | 0.9 | 2.85 | * | 138 | C-4-III | 1.3 | 1.1 | 0.3 | 0.2 | * |
| 112 | D-4-N | 2.0 | 1.7 | 0.8 | 2.45 | * | 139 | C-7-H | 2.4 | 1.5 | 0.3 | 0.6 | * B類 |
| 113 | H | 2.8 | 2.2 | 1.0 | 5.25 | * | 140 | D-E-11 -B | 1.9 | 1.2 | 0.2 | 0.35 | * |
| 114 | B-9-H | 2.6 | 1.9 | 1.1 | 4.5 | * | 141 | B-7-H | 1.9 | 1.3 | 0.2 | 0.45 | * |
| 115 | C-10-II | 2.1 | 1.7 | 0.6 | 1.8 | * | 142 | B-7-H | 1.6 | 1.1 | 0.2 | 0.2 | * |
| 116 | B-9-H | 2.4 | 2.2 | 1.0 | 5.1 | * | 143 | D-6-H | 1.3 | 1.1 | 0.2 | 0.15 | * |
| 117 | E-11-II | 3.9 | 2.2 | 0.9 | 6.45 | * | 144 | A-8-III | 1.8 | 1.3 | 0.3 | 0.65 | * |
| 118 | B-13-III | 1.8 | 2.5 | 0.9 | 3.5 | * | 145 | E-10-II | 1.8 | 1.2 | 0.3 | 0.5 | * |
| 119 | F-18-H | 3.4 | 2.2 | 0.8 | 5.35 | * | 146 | A-12-H | 1.3 | 1.4 | 0.3 | 0.45 | * |
| 120 | | 3.0 | 2.4 | 0.8 | 5.55 | * | 147 | I-23-II | 2.9 | 1.6 | 0.5 | 1.45 | * C類 |
| 121 | B-10-II -B | 2.6 | 2.0 | 0.7 | 3.85 | * | 148 | B-6-H | 2.2 | 1.3 | 0.3 | 0.9 | * |
| 122 | C-8-II | 2.8 | 2.8 | 0.9 | 6.45 | * | 149 | A-10-III | 1.8 | 1.0 | 0.3 | 0.4 | * |
| 123 | C-1-V | 3.7 | 2.5 | 0.8 | 7.6 | * | 150 | B-1-III | 1.6 | 1.8 | 0.4 | 0.6 | * |
| 124 | H-20-II -IV | 3.2 | 2.1 | 0.9 | 5.15 | * | 151 | G-4-H | 2.0 | 1.5 | 0.4 | 0.8 | * |
| 125 | I-14-H | 3.5 | 3.8 | 1.1 | 11.5 | * | 152 | B-10-H | 1.7 | 1.2 | 0.3 | 0.4 | * |
| 126 | C-4-III | 2.2 | 1.0 | 0.4 | 0.7 | 堆状石器 | 153 | C-4-H | 1.6 | 1.1 | 0.2 | 0.4 | * |
| 127 | E-6-II | 2.6 | 1.5 | 0.5 | 1.8 | * | 154 | D-9-II | 2.0 | 1.3 | 0.3 | 0.6 | * |
| 128 | A-12-III | 2.2 | 1.3 | 0.4 | 0.8 | * | 155 | B-13-H | 1.8 | 1.5 | 0.3 | 0.5 | * |
| 129 | B-9-II | 3.3 | 1.3 | 1.0 | 3.45 | 彫器 | 156 | F-9-H | 1.5 | 1.5 | 0.4 | 0.8 | * |
| 130 | E-9-II | 1.5 | 1.0 | 0.2 | 0.2 | 石鏃A類 | 157 | B-10-II -B | 1.7 | 1.2 | 0.3 | 0.5 | * |
| 131 | C-6-H | 1.4 | 0.9 | 0.3 | 0.2 | * | 158 | C-6-H | 1.4 | 1.2 | 0.3 | 0.3 | * |
| 132 | C-11-H | 1.7 | 1.0 | 0.3 | 0.3 | * | 159 | E-12-H | 1.7 | 1.3 | 0.2 | 0.5 | * |
| 133 | B-13-H | 1.7 | 1.1 | 0.3 | 0.3 | * | 160 | F-9-H | 1.6 | 1.3 | 0.2 | 0.4 | * |
| 134 | B-12-H | 1.5 | 1.1 | 0.2 | 0.2 | * | 161 | F-1-N | 1.7 | 1.5 | 0.3 | 0.5 | * |
| 135 | D-7-H | 1.1 | 1.1 | 0.2 | 0.1 | * | 162 | D-E-2 -III | 1.6 | 1.3 | 0.3 | 0.3 | * |

Tab. 4 石器計測表

| 遺物番号 | 出土地区 | 最长 (cm) | 最幅 (cm) | 最厚 (cm) | 重量 (g) | 備考 | 遺物番号 | 出土地区 | 最长 (cm) | 最幅 (cm) | 最厚 (cm) | 重量 (g) | 備考 |
|------|----------|---------|---------|---------|--------|------|------|-----------|---------|---------|---------|--------|------|
| 163 | B-12-H | 1.5 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | 右鍛C類 | 190 | A-10-II-B | 2.4 | 1.5 | 0.4 | 1.15 | 右鍛D類 |
| 164 | B-10-H | 1.9 | 1.8 | 0.2 | 0.5 | * | 191 | C-1-H | 2.5 | 1.7 | 0.4 | 0.95 | * |
| 165 | A-10-H | 1.8 | 1.4 | 0.3 | 0.4 | * | 192 | F-9-H | 2.5 | 1.7 | 0.4 | 1.0 | * |
| 166 | A-10-II | 2.0 | 1.4 | 0.3 | 0.4 | * | 193 | B-9-IV | 2.1 | 1.6 | 0.5 | 1.25 | * |
| 167 | C-8-H | 2.2 | 1.4 | 0.5 | 0.8 | + D類 | 194 | A-10-III | 2.0 | 1.6 | 0.6 | 1.15 | * |
| 168 | D-9-II | 2.3 | 1.2 | 0.4 | 0.9 | * | 195 | C-7-H | 1.9 | 1.9 | 0.6 | 1.3 | * |
| 169 | J-23-II | 2.4 | 1.7 | 0.4 | 1.1 | * | 196 | I-8-II | 2.2 | 2.2 | 0.5 | 1.4 | * |
| 170 | J-23-III | 3.0 | 1.8 | 0.5 | 1.5 | * | 197 | C-10-H | 2.8 | 2.2 | 0.5 | 1.7 | * |
| 171 | G-4-II | 3.5 | 1.8 | 0.7 | 2.4 | * | 198 | E-4-II | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.65 | * |
| 172 | C-6-H | 3.5 | 1.8 | 0.5 | 2.7 | * | 199 | C-4-II | 2.0 | 1.5 | 0.4 | 0.7 | * |
| 173 | H-18-II | 3.4 | 1.6 | 0.6 | 2.0 | * | 200 | C-4-II | 1.8 | 1.2 | 0.2 | 0.25 | * |
| 174 | | 3.3 | 1.7 | 0.5 | 2.3 | * | 201 | | 1.5 | 1.3 | 0.4 | 0.65 | * |
| 175 | F-10-H | 3.1 | 1.8 | 0.6 | 2.1 | * | 202 | A-8-II-B | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 0.7 | * |
| 176 | F-10-H | 2.4 | 1.8 | 0.5 | 2.2 | * | 203 | C-4-H | 2.1 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | * |
| 177 | — | 2.8 | 1.5 | 0.5 | 1.5 | * | 204 | G-8-H | 2.2 | 1.3 | 0.5 | 0.8 | * |
| 178 | F-2-II | 2.7 | 1.5 | 0.4 | 1.1 | * | 205 | B-6-H | 2.1 | 1.2 | 0.3 | 0.5 | * |
| 179 | D-E-I-H | 2.4 | 1.3 | 0.4 | 1.1 | * | 206 | D-E-I-IV | 2.3 | 1.3 | 0.5 | 0.55 | + E類 |
| 180 | E-8-II | 1.9 | 1.3 | 0.6 | 1.0 | * | 207 | D-E-II-B | 2.2 | 1.5 | 0.5 | 0.9 | * |
| 181 | J-21-H | 2.3 | 1.6 | 0.4 | 1.0 | * | 208 | F-II-H | 2.0 | 1.1 | 0.4 | 0.4 | * |
| 182 | F-11-H | 1.7 | 1.5 | 0.4 | 0.8 | * | 209 | C-4-IV | 2.9 | 1.8 | 0.4 | 1.1 | * |
| 183 | B-10-II | 2.5 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | * | 210 | D-9-II-B | 2.3 | 2.0 | 0.3 | 0.85 | * |
| 184 | D-12-II | 2.1 | 1.4 | 0.3 | 0.8 | * | 211 | C-12-H | 2.2 | 1.3 | 0.2 | 0.5 | * |
| 185 | E-4-II | 2.3 | 1.5 | 0.5 | 1.1 | * | 212 | A-13-H | 2.0 | 1.2 | 0.4 | 0.5 | * |
| 186 | G-4-H | 2.0 | 1.6 | 0.4 | 1.1 | * | 213 | E-II-H | 1.8 | 1.3 | 0.4 | 0.5 | * |
| 187 | B-8-II | 2.1 | 1.2 | 0.3 | 0.6 | * | 214 | — | 1.7 | 1.5 | 0.2 | 0.3 | * |
| 188 | C-5-II | 2.0 | 1.0 | 0.4 | 0.5 | * | 215 | A-10-III | 1.7 | 1.4 | 0.3 | 0.35 | * |
| 189 | B-8-III | 2.0 | 1.4 | 0.4 | 0.95 | * | 216 | C-9-II | 1.9 | 1.2 | 0.3 | 0.3 | * |

Tab. 5 石器計測表

| 遺物 番号 | 出土地区 | 長 (cm) | 最幅 (cm) | 最厚 (cm) | 重量 (g) | 備 考 | 遺物 番号 | 出土地区 | 長 (cm) | 最幅 (cm) | 最厚 (cm) | 重量 (g) | 備 考 |
|----------|------------|-----------|------------|------------|-----------|--------|----------|-----------|-----------|------------|------------|-----------|--------|
| 217 | C-10-H | 2.1 | 1.4 | 0.3 | 0.3 | 石鏟E類 | 244 | C-4-III | 1.5 | 1.3 | 0.3 | 0.5 | 石鏟C類 |
| 218 | F-11-12-B | 2.6 | 1.6 | 0.4 | 0.9 | * | 245 | C-12-II | 1.1 | 1.7 | 0.4 | 0.55 | * |
| 219 | D-E-1-B | 2.4 | 1.9 | 0.4 | 0.9 | * | 246 | F-12-H | 1.8 | 1.3 | 0.3 | 0.5 | * |
| 220 | D-6-III | 1.7 | 1.3 | 0.5 | 0.7 | * | 247 | B-10-III | 1.5 | 1.6 | 0.3 | 0.6 | * |
| 221 | B-10-III | 1.4 | 1.1 | 0.3 | 0.35 | * F類 | 248 | B-5-H | 1.9 | 1.3 | 0.4 | 0.8 | * |
| 222 | A-12-H | 1.9 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | * | 249 | C-12-13-B | 1.5 | 1.2 | 0.4 | 0.5 | * |
| 223 | J-23-H | 1.8 | 1.4 | 0.3 | 0.7 | * | 250 | B-9-II | 1.5 | 1.5 | 0.3 | 0.5 | * |
| 224 | D-6-III | 1.8 | 1.3 | 0.3 | 0.65 | * | 251 | C-10-III | 1.7 | 1.0 | 0.2 | 0.3 | * |
| 225 | H-20-II | 2.4 | 1.8 | 0.5 | 1.2 | * | 252 | E-11-H | 1.7 | 1.8 | 0.4 | 0.9 | * |
| 226 | F-1-H | 2.1 | 1.5 | 0.5 | 0.8 | * | 253 | D-5-III | 1.3 | 1.2 | 0.3 | 0.4 | * |
| 227 | D-7-H | 2.0 | 1.6 | 0.5 | 1.2 | * | 254 | A-13-H | 2.2 | 2.0 | 0.6 | 1.6 | * |
| 228 | D-9-H | 1.6 | 1.4 | 0.3 | 0.4 | * | 255 | C-12-II | 1.8 | 1.5 | 0.5 | 0.8 | * |
| 229 | G-F-8-I | 1.4 | 1.6 | 0.3 | 0.5 | * | 256 | F-11-12-B | 2.0 | 1.6 | 0.3 | 0.6 | * |
| 230 | C-9-10-B | 1.7 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | * | 257 | A-12-H | 2.1 | 1.2 | 0.5 | 0.8 | * |
| 231 | F-20-III-B | 2.1 | 1.9 | 0.5 | 0.95 | * | 258 | F-9-H | 1.2 | 2.0 | 0.4 | 0.8 | * |
| 232 | D-6-III | 1.2 | 1.1 | 0.2 | 0.25 | * | 259 | C-10-II | 2.2 | 1.8 | 0.4 | 1.0 | * H類 |
| 233 | D-11-II | 1.8 | 1.7 | 0.4 | 0.6 | * | 260 | C-7-H | 2.0 | 1.7 | 0.7 | 1.0 | * |
| 234 | G-3-H | 1.2 | 1.4 | 0.4 | 0.7 | * | 261 | F-10-H | 1.4 | 1.4 | 0.4 | 0.5 | * |
| 235 | A-13-H | 1.4 | 1.4 | 0.3 | 0.6 | * | 262 | C-4-II | 1.8 | 1.6 | 0.3 | 0.7 | * I類 |
| 236 | D-6-H | 1.6 | 1.6 | 0.5 | 0.8 | * | 263 | — — | 1.4 | 1.4 | 0.3 | 0.4 | * |
| 237 | D-7-H | 1.7 | 1.1 | 0.4 | 0.6 | * | 264 | D-7-H | 1.2 | 1.6 | 0.5 | 0.6 | * J類 |
| 238 | I-23-III | 1.5 | 1.5 | 0.4 | 0.6 | * | 265 | B-7-H | 1.4 | 1.5 | 0.3 | 0.4 | * |
| 239 | D-5-III | 1.3 | 1.3 | 0.4 | 0.45 | * | 266 | A-9-H | 1.5 | 1.7 | 0.5 | 0.5 | * |
| 240 | D-11-II | 1.5 | 1.6 | 0.4 | 0.55 | * | 267 | B-10-H | 1.4 | 1.6 | 0.3 | 0.5 | * |
| 241 | C-1-II | 1.7 | 1.5 | 0.3 | 0.8 | * | 268 | F-1-IV | 1.6 | 1.6 | 0.4 | 0.7 | * |
| 242 | D-4-III | 1.8 | 2.0 | 0.4 | 1.3 | * | 269 | D-8-III | 1.6 | 2.0 | 0.4 | 0.7 | * |
| 243 | H-22-H | 1.9 | 2.0 | 0.5 | 1.5 | * G類 | 270 | D-4-III | 1.8 | 2.0 | 0.4 | 0.8 | * |

Tab. 6 石器計測表

| 遺物 番号 | 出土地区 | 長 (cm) | 幅 (cm) | 厚 (cm) | 重量 (g) | 備 考 | 遺物 番号 | 出土地区 | 長 (cm) | 幅 (cm) | 厚 (cm) | 重量 (g) | 備 考 | |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|---|
| 271 | E-10-H | 1.9 | 1.6 | 0.5 | 0.8 | 石錐J類 | 288 | B-4-B | 1.9 | 1.2 | 0.3 | 0.4 | 欠損品 | |
| 272 | D-11-II | 1.2 | 1.5 | 0.4 | 0.3 | + | 299 | F-2-IV | 2.0 | 1.2 | 0.4 | 0.8 | + | |
| 273 | B-III | 2.0 | 1.5 | 0.4 | 0.9 | + | 300 | B-5-H | 1.8 | 1.0 | 0.3 | 0.5 | + | |
| 274 | C-9-III | 1.6 | 1.6 | 0.4 | 0.8 | + | 301 | B-4-V | 1.7 | 1.1 | 0.4 | 0.5 | + | |
| 275 | G-1-IV | 1.1 | 1.5 | 0.3 | 0.3 | + | 302 | G-18-H | 2.5 | 1.8 | 0.5 | 1.2 | + | |
| 276 | D-10-H | 1.0 | 1.5 | 0.2 | 0.3 | + | 303 | E-12-II | 1.5 | 1.5 | 0.4 | 0.7 | + | |
| 277 | B-10-11-B | 1.5 | 1.4 | 0.3 | 0.5 | + | K類 | 304 | G-17-II | 2.4 | 1.6 | 0.3 | 0.8 | + |
| 278 | B-4-H | 1.7 | 1.3 | 0.3 | 0.6 | + | 305 | B-C-4 | 2.3 | 1.5 | 0.5 | 1.4 | + | |
| 279 | B-4-V | 1.5 | 1.2 | 0.2 | 0.4 | + | 306 | G-1-H | 1.8 | 1.5 | 0.4 | 0.8 | + | |
| 280 | F-9-II | 1.6 | 1.5 | 0.5 | 0.85 | + | 307 | E-4-III | 2.2 | 1.4 | 0.6 | 1.3 | + | |
| 281 | A-13-H | 1.7 | 1.2 | 0.3 | 0.6 | + | 308 | K-9-II | 2.1 | 1.6 | 0.6 | 1.4 | + | |
| 282 | F-13-II | 1.5 | 1.4 | 0.4 | 0.7 | + | 309 | C-7-III | 1.9 | 1.2 | 0.3 | 0.7 | + | |
| 283 | F-9-H | 1.5 | 1.7 | 0.3 | 0.65 | + | 310 | A-10-IV | 1.8 | 1.3 | 0.3 | 0.6 | + | |
| 284 | F-9-II | 2.0 | 1.4 | 0.5 | 0.9 | + | 311 | B-7-II | 1.5 | 1.1 | 0.3 | 0.4 | + | |
| 285 | B-4-V | 2.0 | 1.3 | 0.5 | 0.9 | + | 312 | H-8-II | 1.6 | 1.6 | 0.4 | 0.7 | + | |
| 286 | G-2-H | 1.9 | 1.5 | 0.3 | 0.7 | + | 313 | A-12-II | 2.1 | 1.0 | 0.2 | 0.4 | + | |
| 287 | D-11-12-B | 1.9 | 1.4 | 0.5 | 0.9 | + | 314 | C-1-H | 1.9 | 1.5 | 0.3 | 0.7 | + | |
| 288 | B-9-H | 2.7 | 1.7 | 0.6 | 1.5 | + | 315 | D-6-III | 1.5 | 1.4 | 0.4 | 0.6 | + | |
| 289 | G-F-8-I | 2.3 | 1.6 | 0.7 | 1.8 | + | 316 | A-10-III | 1.4 | 1.3 | 0.2 | 0.2 | + | |
| 290 | C-9-H | 2.6 | 1.4 | 0.6 | 1.5 | + | 317 | E-4-II | 1.9 | 1.5 | 0.5 | 0.9 | + | |
| 291 | C-9-10-B | 2.3 | 1.7 | 0.7 | 2.2 | + | 318 | E-12-II | 1.8 | 1.5 | 0.3 | 0.7 | + | |
| 292 | A-13-H | 1.9 | 1.8 | 0.8 | 2.7 | + | 319 | C-4-H | 2.2 | 1.4 | 0.4 | 0.4 | + | |
| 293 | B-4-III | 1.5 | 2.2 | 0.7 | 2.6 | + | 320 | B-1-II | 2.1 | 1.7 | 0.6 | 1.6 | + | |
| 294 | G-10-H | 3.3 | 2.3 | 0.8 | 4.2 | + | 321 | G-9-H | 1.6 | 1.3 | 0.3 | 0.4 | + | |
| 295 | C-D-III | 2.6 | 1.7 | 0.4 | 1.2 | + | 322 | C-9-IV | 2.1 | 2.0 | 0.5 | 1.7 | + | |
| 296 | D-11-II | 2.5 | 1.2 | 0.4 | 1.0 | + | 323 | H-4-H | 2.0 | 1.3 | 0.4 | 1.1 | + | |
| 297 | F-20-II | 2.3 | 1.6 | 0.4 | 0.8 | 欠損品 | 324 | D-4-III | 2.0 | 1.5 | 0.6 | 1.45 | + | |

Tab. 7 石器計測表

| 遺物番号 | 出土地区 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 | 遺物番号 | 出土地区 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 |
|------|----------|--------|-------|--------|-------|------------|------|-----------------|--------|-------|--------|-------|--------|
| 325 | D-7-H | 1.7 | 1.8 | 0.6 | 1.4 | 欠損品 | 354 | I-22-III | 12.0 | 8.0 | 2.9 | 224.0 | 鋸片 |
| 326 | D-13-II | 1.8 | 1.1 | 0.5 | 0.8 | * | 355 | — | 7.8 | 5.4 | 1.5 | 69.0 | スクレイパー |
| 327 | F-9-H | 1.2 | 1.8 | 0.3 | 0.75 | * | 356 | E-F-12 -13-B | 6.8 | 6.9 | 1.9 | 65.0 | * |
| 328 | B-13-II | 1.3 | 1.6 | 0.3 | 0.75 | * | 357 | G-1-II | 8.6 | 4.9 | 1.9 | 100.0 | 石斧 |
| 329 | B-4-V | 1.9 | 1.7 | 0.4 | 1.0 | * | 358 | H-20-II | 6.8 | 8.0 | 1.9 | 78.0 | スクレイパー |
| 330 | B-13-H | 2.2 | 0.9 | 0.3 | 0.65 | * | 359 | G-19-II | 5.0 | 7.1 | 3.7 | 198.0 | 圓石 |
| 331 | A-10-II | 1.8 | 0.9 | 0.3 | 0.4 | * | 360 | I-21-H | 6.4 | 4.5 | 3.7 | 146.0 | 磨石 |
| 332 | E-9-II | 1.8 | 0.8 | 0.4 | 0.35 | * | 361 | G-20-II | 8.7 | 7.4 | 5.6 | 495.0 | 叩き石 |
| 333 | C-5-H | 1.8 | 2.4 | 0.5 | 1.35 | * | 362 | M-15-H | 10.2 | 8.1 | 3.9 | 550.0 | スリガ |
| 334 | N-20-II | 1.3 | 0.9 | 0.3 | 0.30 | * | 363 | H-18-H | 8.5 | 7.9 | 2.7 | 209.0 | 圓石 |
| 335 | F-9-H | 1.2 | 1.2 | 0.3 | 0.30 | * | 364 | K-1-N | 4.3 | 2.2 | 1.6 | 13.8 | スクレイパー |
| 336 | D-5-III | 1.2 | 1.1 | 0.2 | 0.20 | 石鏡B類 | 365 | E-9-II -III | 2.9 | 3.3 | 1.4 | 11.35 | * |
| 337 | F-11-H | 1.5 | 2.0 | 0.4 | 0.75 | 欠損品 | 366 | C-1-V | 5.9 | 3.8 | 1.9 | 42.9 | * |
| 338 | I-14-III | 7.1 | 6.2 | 1.2 | 32.0 | 石凸 | 367 | C-6-H | 3.6 | 1.4 | 0.8 | 6.65 | 不明石器 |
| 339 | F-20-II | 4.4 | 5.9 | 0.8 | 21.0 | * | 368 | B-6-H | 3.6 | 1.5 | 0.5 | 2.7 | * |
| 340 | | 4.4 | 2.9 | 1.0 | 13.0 | * | 369 | H-21-II | 1.3 | 2.1 | 1.1 | 2.4 | 石核 |
| 341 | B-4-V | 4.7 | 2.7 | 0.7 | 9.0 | * | 370 | H-9-H | 2.1 | 3.2 | 1.8 | 9.8 | * |
| 342 | F-8-H | 2.4 | 4.5 | 0.6 | 6.0 | * | 371 | C-4-II | 2.7 | 1.9 | 2.0 | 8.45 | * |
| 343 | B-4-III | 2.7 | 3.5 | 1.0 | 8.0 | * | 372 | B-9-H | 1.7 | 2.0 | 1.3 | 5.5 | * |
| 344 | B-8-III | 3.2 | 3.5 | 0.8 | 8.0 | * | 373 | B-4-N | 3.6 | 2.6 | 1.8 | 14.1 | * |
| 345 | F-11-H | 3.9 | 3.1 | 1.0 | 14.0 | スクレイパー・欠損品 | 374 | C-4-N | 2.9 | 4.3 | 1.5 | 18.9 | * |
| 346 | E-9-II | 3.0 | 4.4 | 0.7 | 11.0 | * | 375 | C-10-III | 2.5 | 4.2 | 2.2 | 23.65 | * |
| 347 | B-9-II | 2.5 | 1.6 | 1.0 | 4.35 | 楔形石器 | 376 | E-9-10 H | 3.9 | 3.6 | 2.8 | 37.0 | * |
| 348 | F-9-H | 2.5 | 2.7 | 0.8 | 6.0 | スクレイパー | 377 | E-11-H | 3.1 | 4.4 | 2.8 | 45.15 | * |
| 349 | F-2-III | 4.5 | 2.0 | 1.0 | 7.8 | 残缺片 | 378 | G-19-III | 3.8 | 2.6 | 2.8 | 26.1 | * |
| 350 | C-9-III | 4.3 | 1.5 | 0.6 | 3.6 | スクレイパー | 379 | H-20-II | 3.6 | 3.0 | 2.5 | 20.9 | * |
| 351 | F-21-II | 2.8 | 6.5 | 1.5 | 21.0 | 残缺片 | 380 | D-12-II | 2.4 | 3.5 | 2.3 | 20.8 | * |
| 352 | G-21-H | 15.3 | 5.8 | 2.2 | 282.0 | 石斧 | 381 | E-4-N | 2.9 | 2.1 | 2.1 | 13.4 | * |
| 353 | N-14-H | 8.3 | 6.0 | 2.6 | 146.0 | 圓面破器 | 382 | F-10-H | 3.6 | 3.7 | 1.5 | 20.6 | * |

IV 総 括

外國遺跡の調査は約3ヶ月間にわたり続けられ、当初予想した古い時代の遺構遺物よりも、新しい時代のものが中心となる結果が得られた。

しかし、先土器時代の遺物もナイフ形石器を中心にして数点出土している。ただ、明確な包含層からよりも、浅い部分からのものが多い。本遺跡の周辺には、かなりの先土器時代の遺物を産する遺跡が所在し、標高も比較的高い所に位置している。同じ路線の北部に所在している松山A遺跡や南側に位置する里遺跡などは関連した遺跡としてあげられる。

縄文土器は標高74~80mの区域から集中する形で出土したが、殆ど風化を受け、保存状態も良くない無文土器である。この上器の中には早期と考えられる若干厚手のものや、晚期と思われるものがある。また、中期の阿高式系の土器がわずかに出土している。縄文土器については、特に早期の土器を産する明確な遺跡は非常に少なく、出土量も無文のものが少量である。中期の土器も少なく、白井川遺跡や大村市葛城遺跡、野田の久保遺跡にわずかに出土している程度である。晚期の上器は大村湾岸にもその所在がかなり知られるようになってきたが、本遺跡のすぐ南側水田に位置する宮田遺跡でも良好な資料が得られており、この遺跡の影響が考えられる。明確な石器は石鏃があげられるが、時期的には各土器と共に伴するものである。縄文時代の遺物の出土量から見るかぎり、この時期に長い間の生活の痕跡が認められない。

中世の時期の資料は量的には多くないが、輸入陶磁器と国产の土器で大方の傾向は窺い知ることができる。12世紀から16世紀までのものが見られるが、遺構と直接結びつくものはない。ただ、遺跡のすぐ北東に「屋敷跡」と伝えられる水田が残り、北西の入りと思われる所に大きな礫による石垣が作られている。これはあきらかに、屋敷に関連した遺構と考えられるが、文献的裏付けや時期的なものは不明である。しかし、千錦川を挟んで1km南に対応する小藪城跡からも同時期から近世にかけての資料が多く出土しており、ここへの影響を受けていることを考えなければならない。出土資料から判断すると、高所であることや、傾斜地という地形から慣常的な集落とは考えられず、付属施設としての立地が強い。

遺構の検出は礫を集めたものを基本としているが、縄文時代的な集石土壤は見られず、集石や土壤内の堆積土についても、しまりがなく、中近世的な要素を持っている。2号遺構である帶状に伸びた集石は各所に大噴の抜かれた跡があり、松浦市櫻階田遺跡に見られた道路状遺構を思わせるものもある。さらに11号遺構の石垣は、現水田石垣と方向を違えて築いてあり、建物遺構に関連するのではないかと思われる。

しかし、結果的には明確な柱穴や性格のはっきりした遺構の検出がなく、隣接する遺跡とのつながりを推察するにとどまった。

(安楽)

P L A T E S

(外園遺跡)



遺跡遠景（南より）



遺跡近景（北より）



遺跡調査風景



遺跡調査風景



I -23東壁



I -22東壁



I -21東壁

土層①



I - 20 東壁



I - 19 東壁



I - 18 東壁

土層②



J - 20北壁



I - 20北壁



H - 20北壁

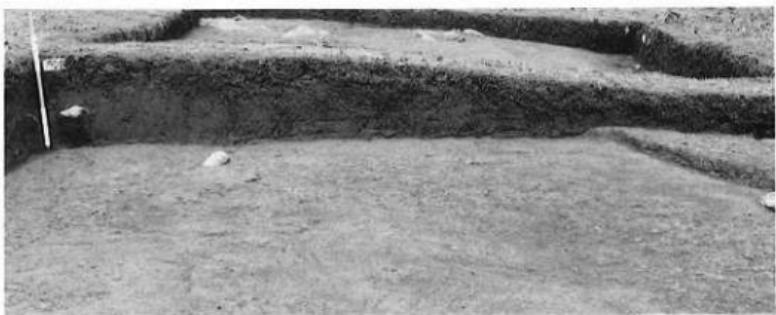
土層 ③



G - 20北壁



F - 20北壁



D - 13東壁

土層④



D-12東壁



D-11東壁



D-5 東壁

土層⑤



D - 4 東壁



G - 1 北壁



F - 1 北壁

土層 ⑥



D-E-1 北壁

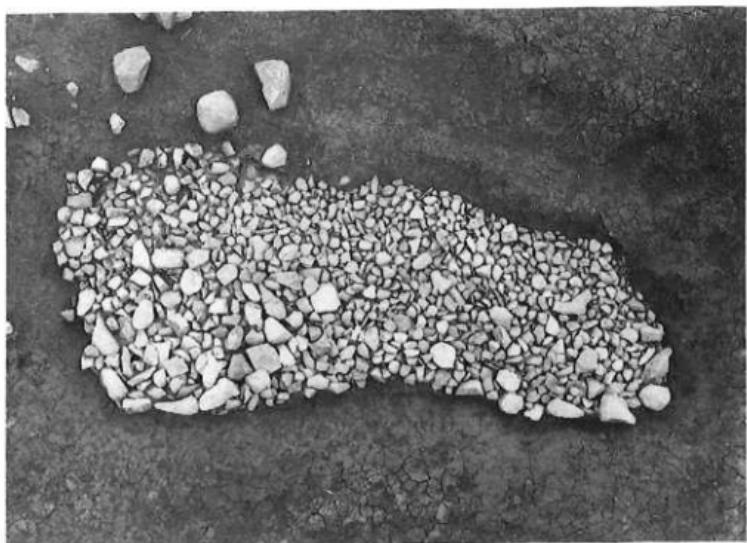


C-1 北壁



B-1 北壁

土層 ⑦



1号遺構



12号遺構



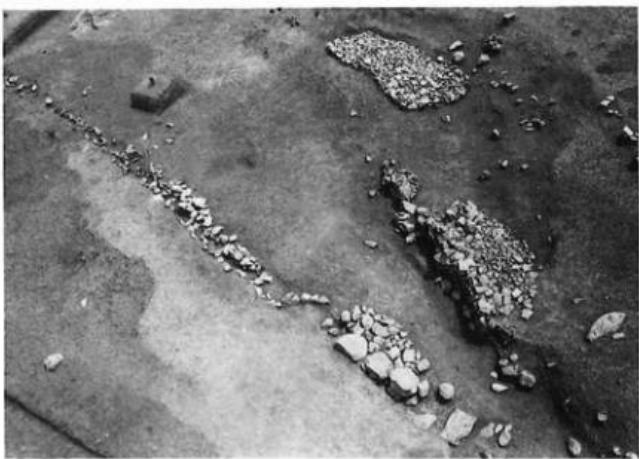
2号遺構①(帶狀集石下部)



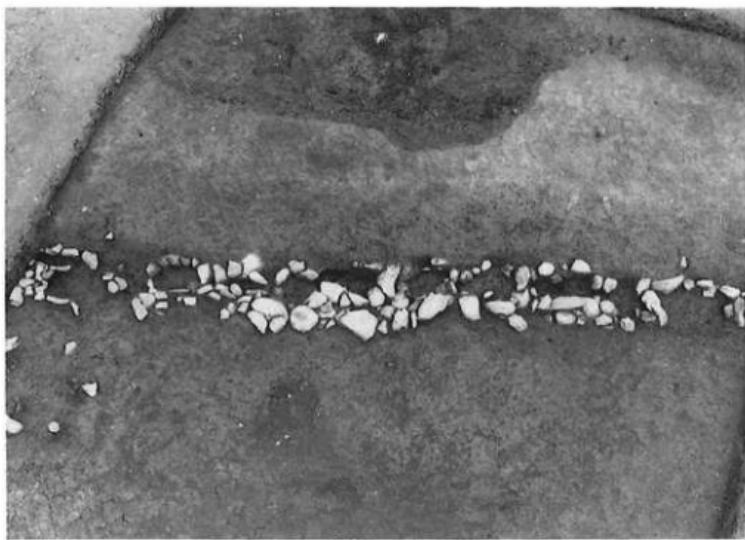
2号遺構①(帶狀集石部分)



2号遺構②(帶狀集石上部)



2号遺構②(帶狀集石部分)



2号遺構③



4号遺構



5号遺構



6号遺構



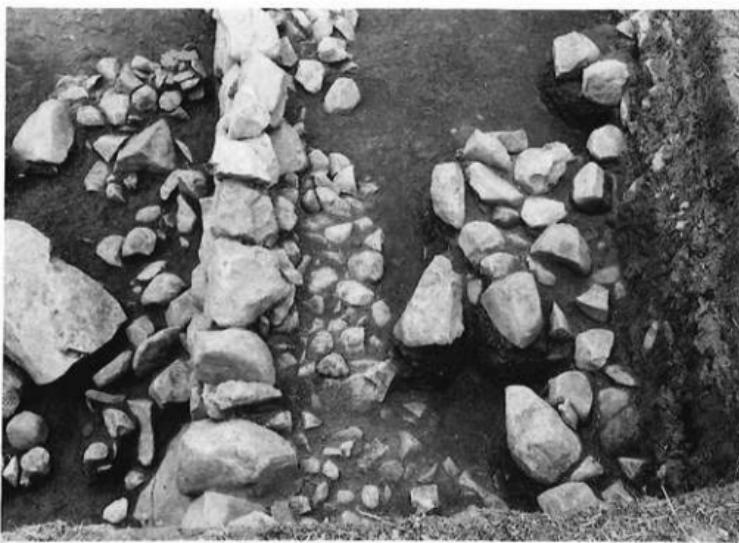
7号遺構



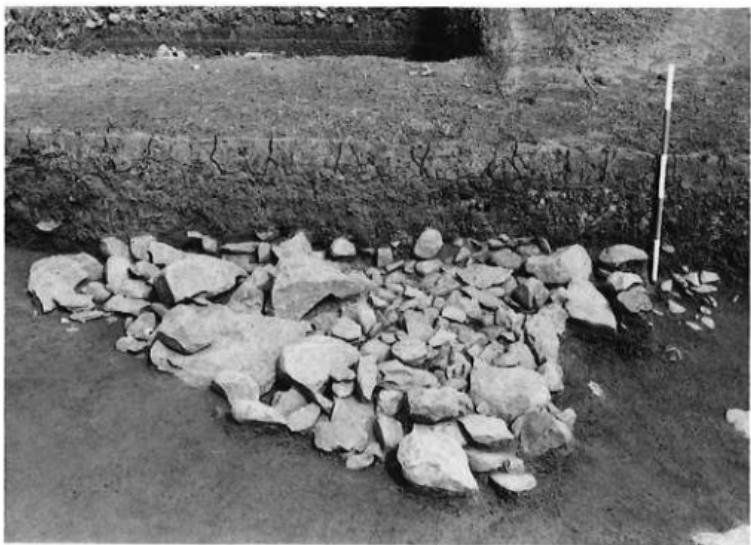
10号遺構



9号遺構



11号造構



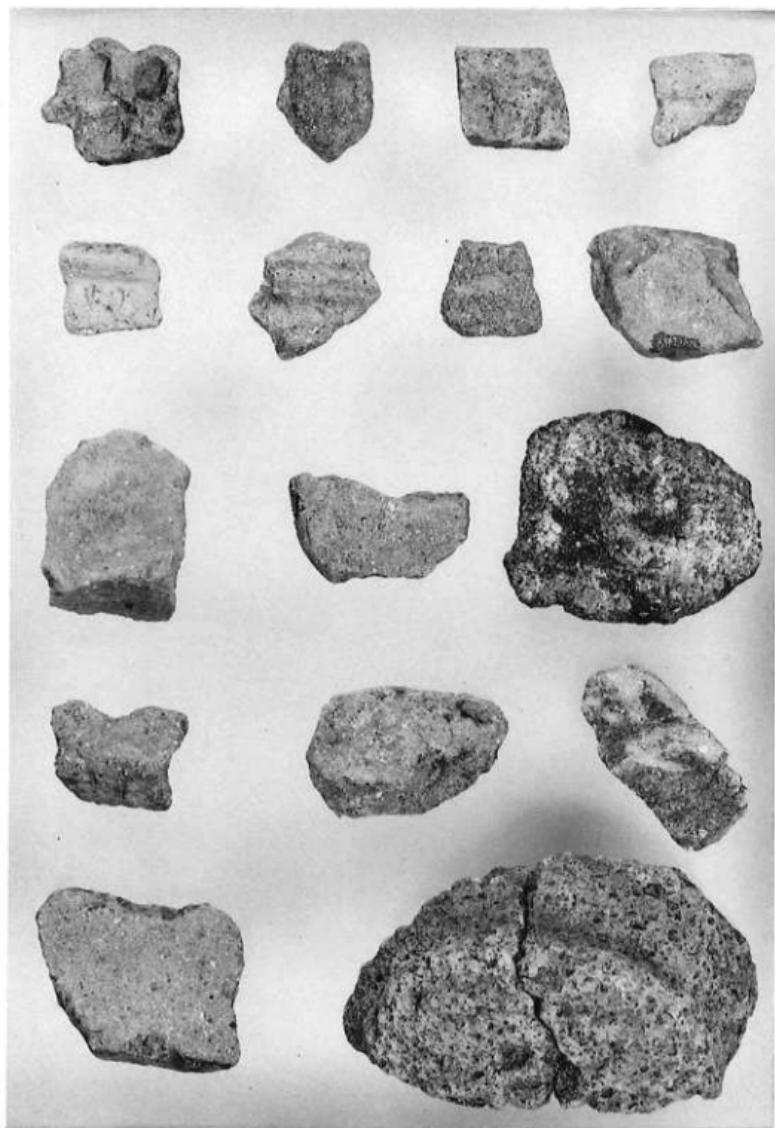
13号造構断面



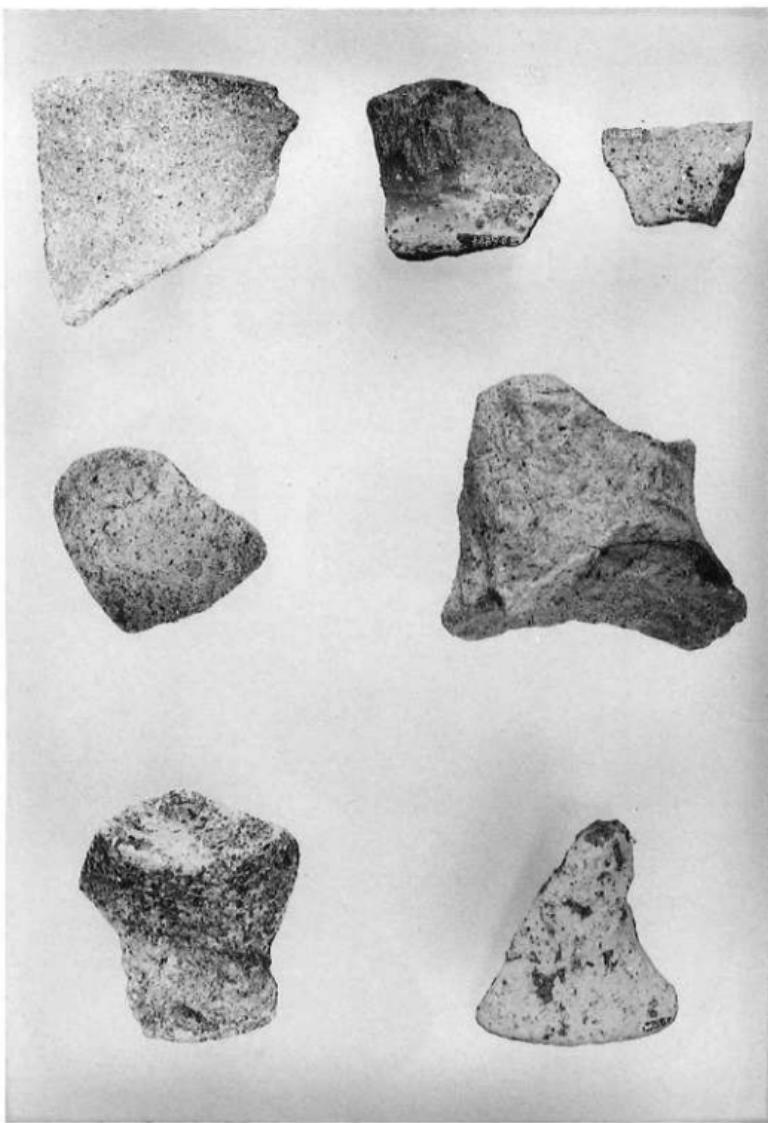
13号造構平面



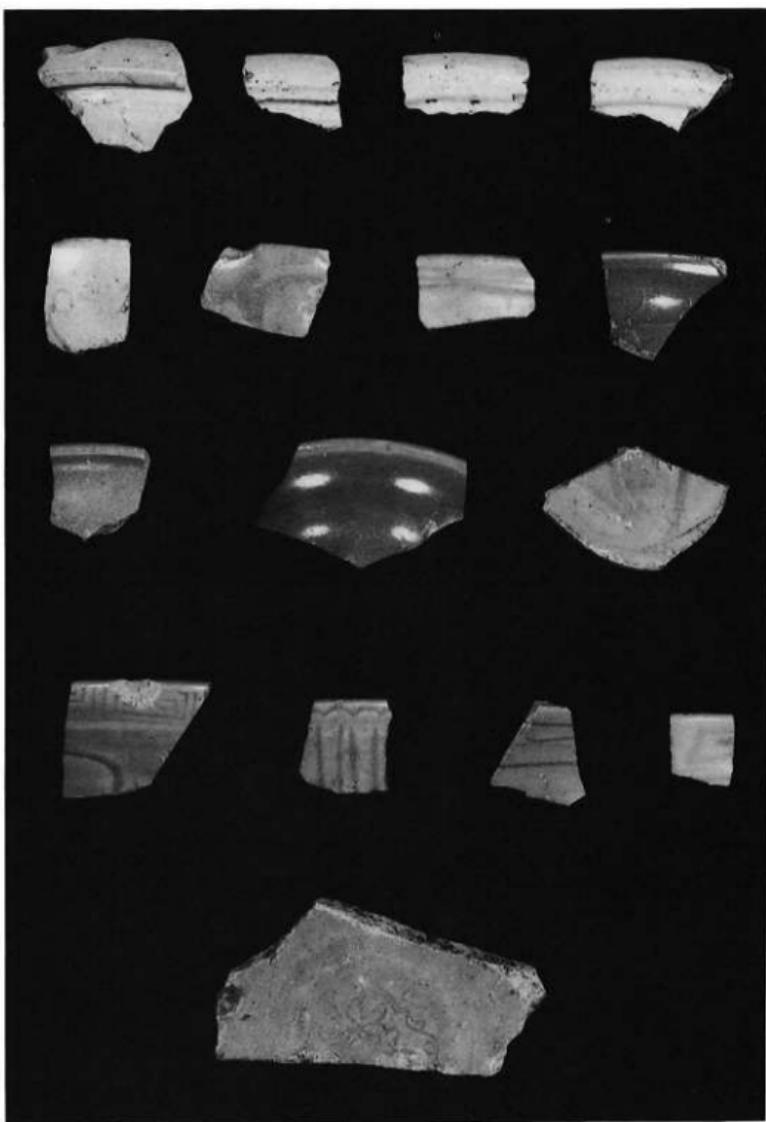
遺物出土狀況



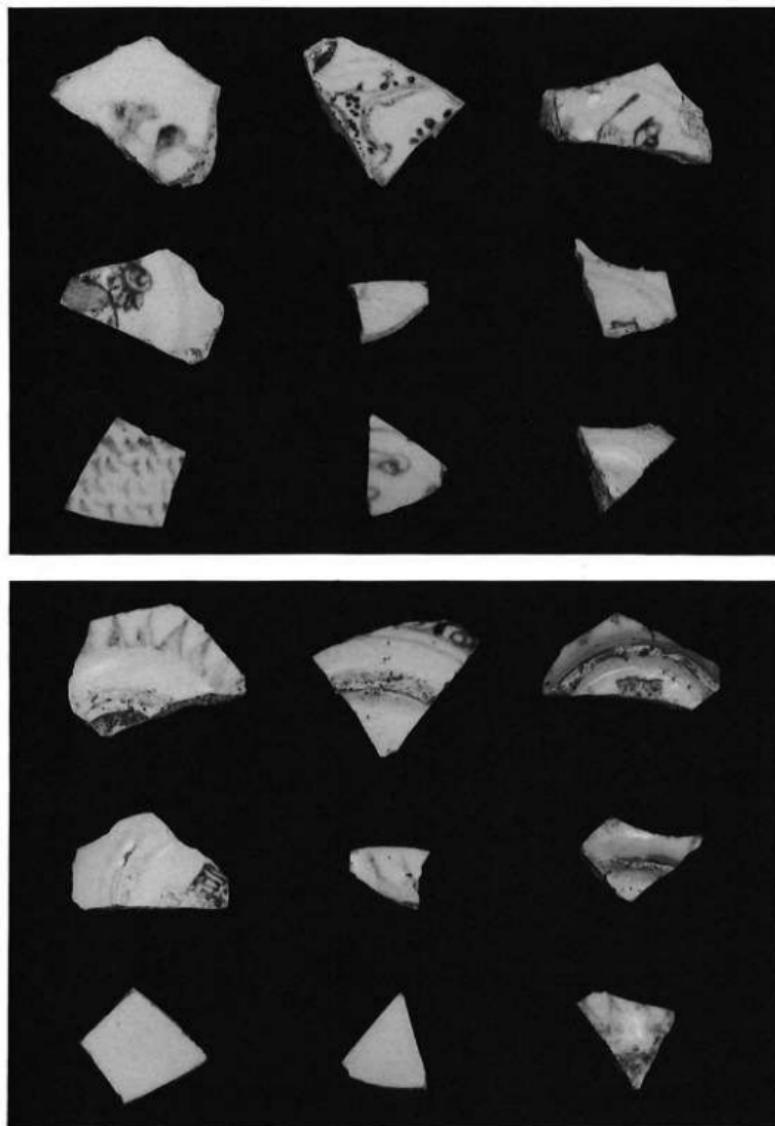
縄文土器 (2/3)



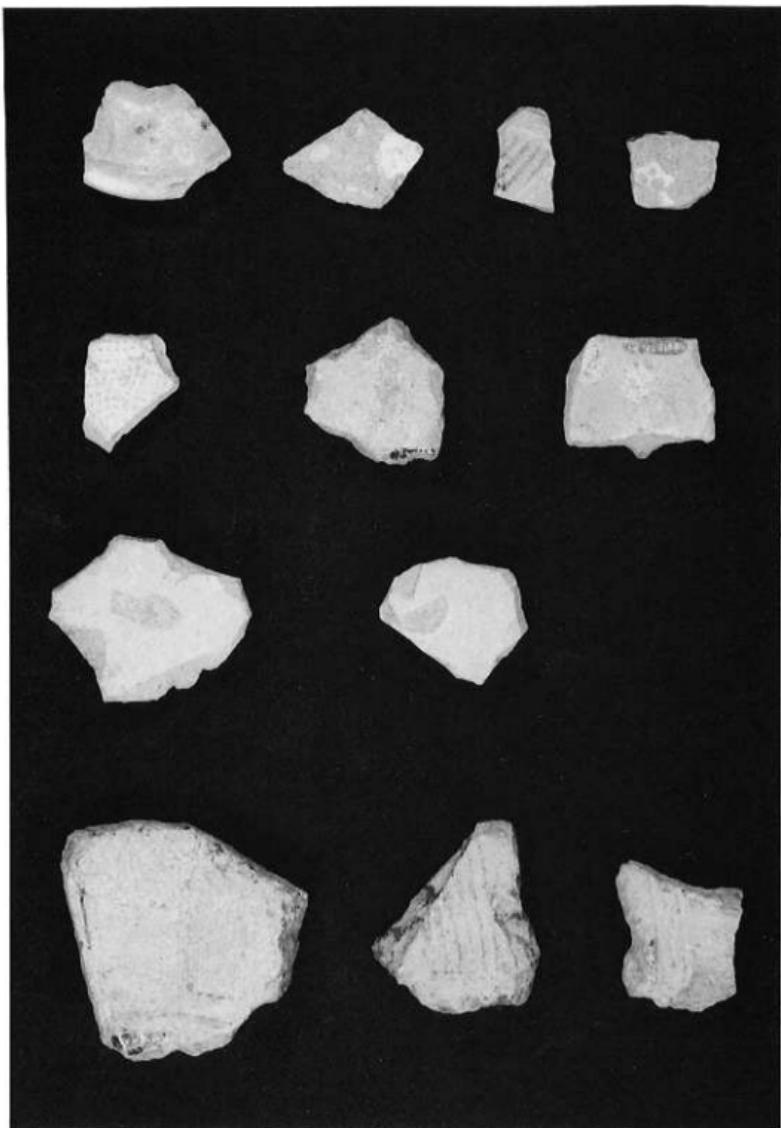
弥生土器 (2/3)



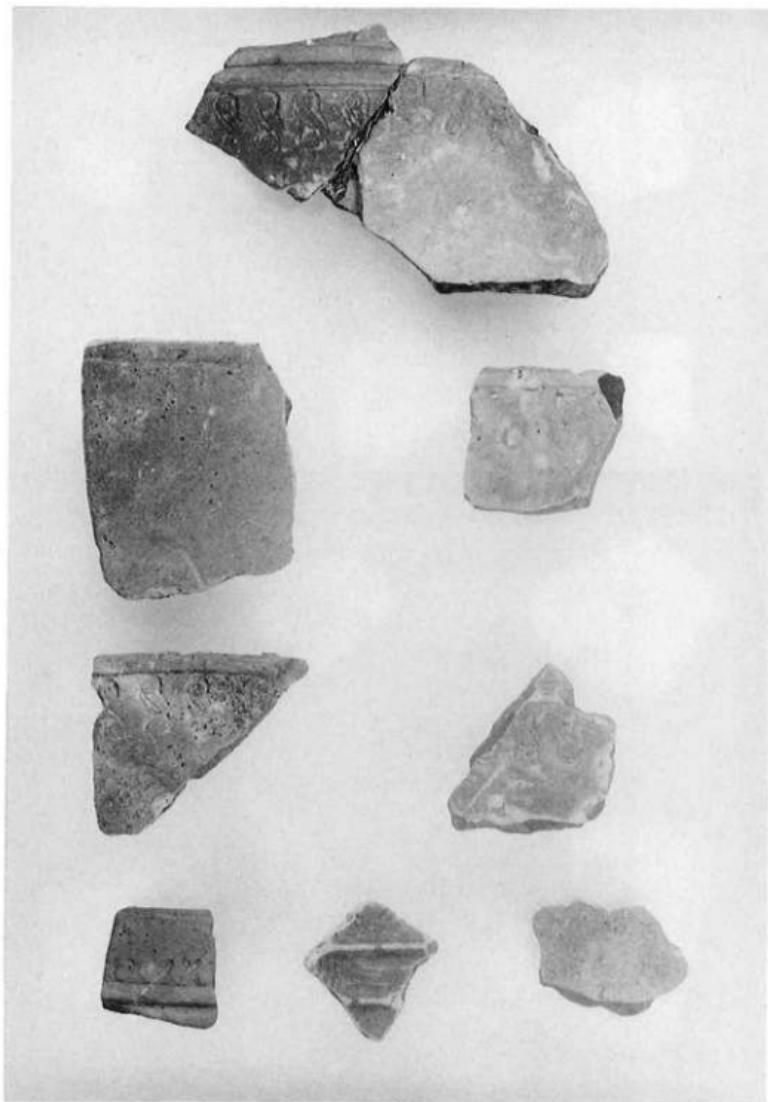
輸入陶磁器 (2/3)



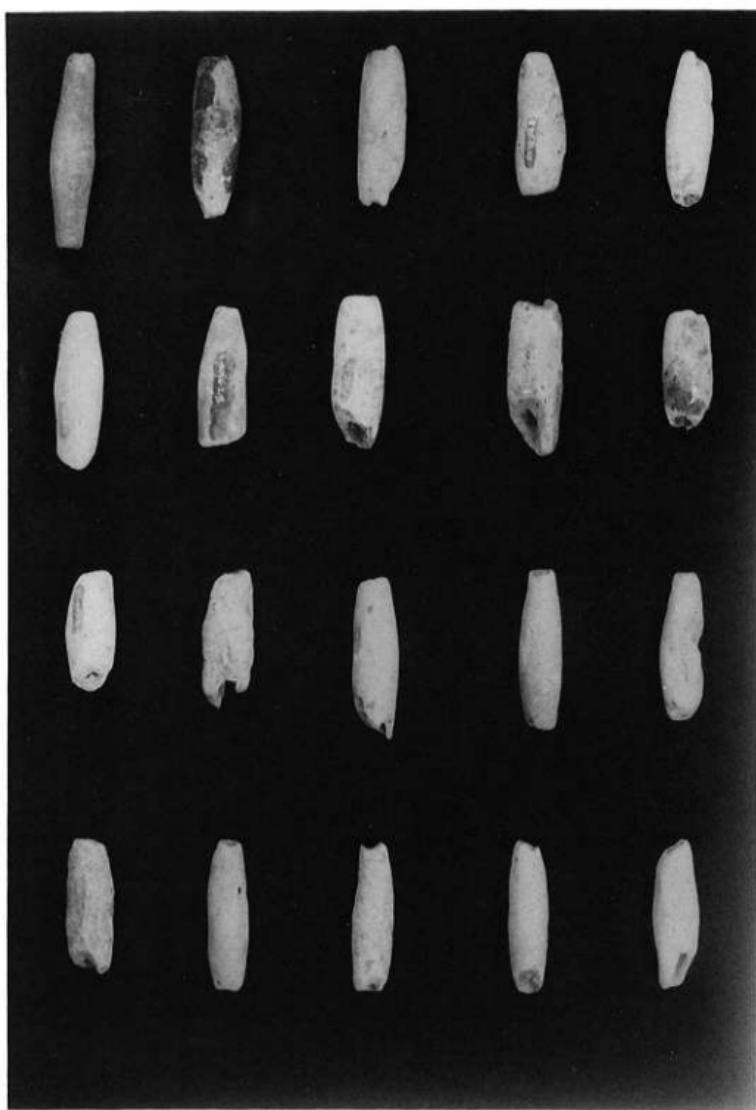
輸入陶磁器（染付）



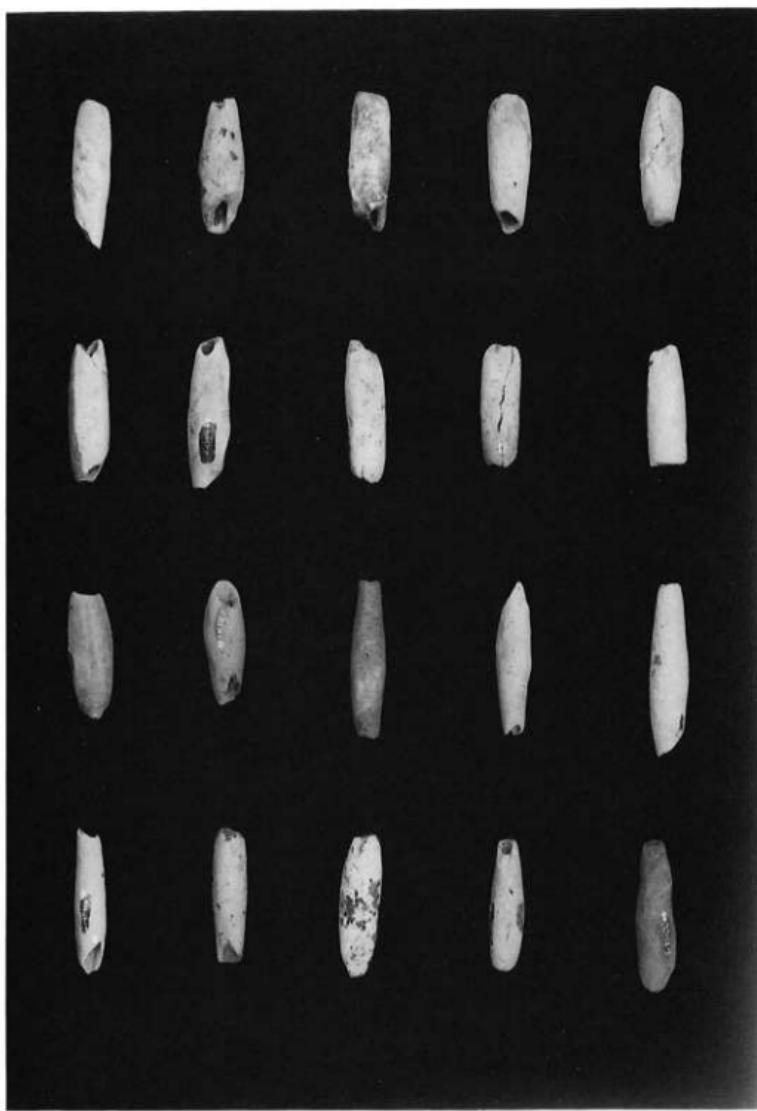
輸入陶磁器および国產土器



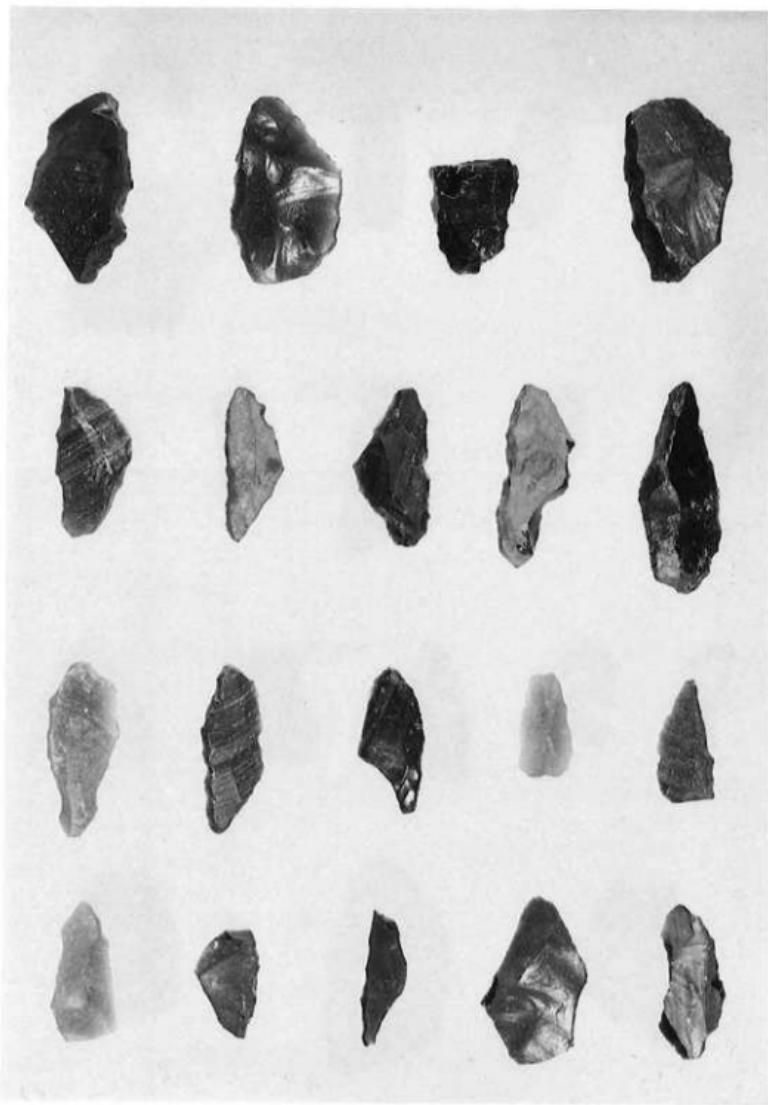
瓦質土器



土錐①



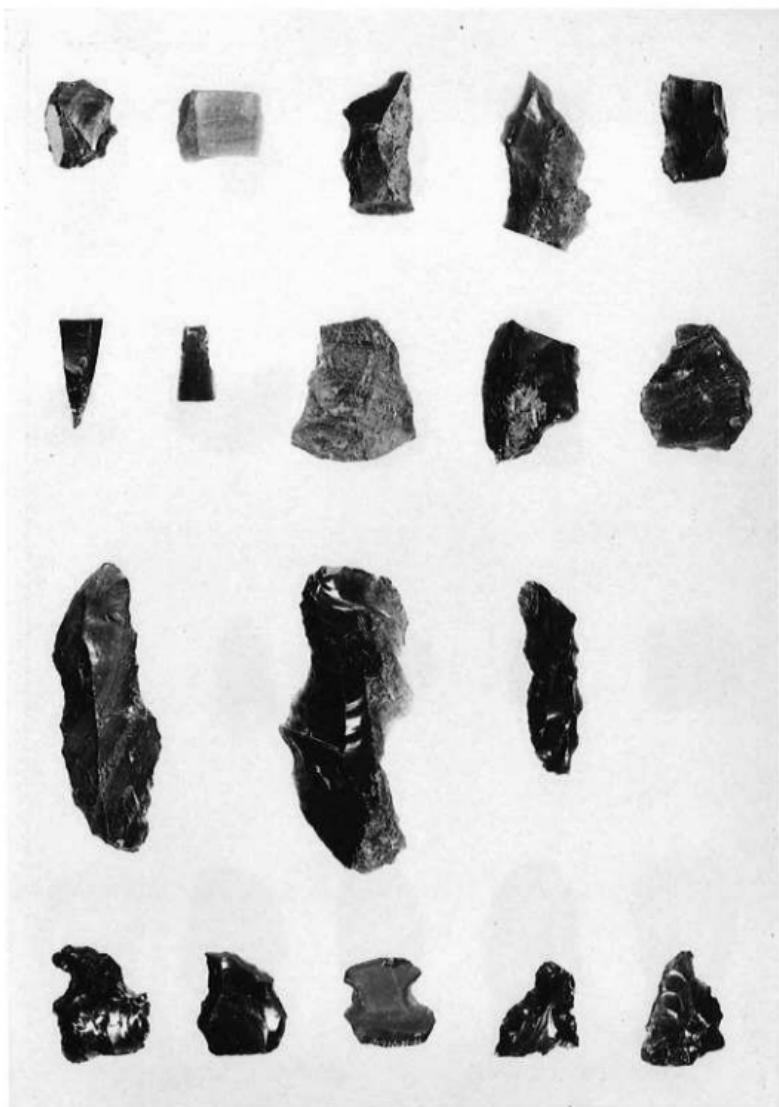
土錘②



石器①



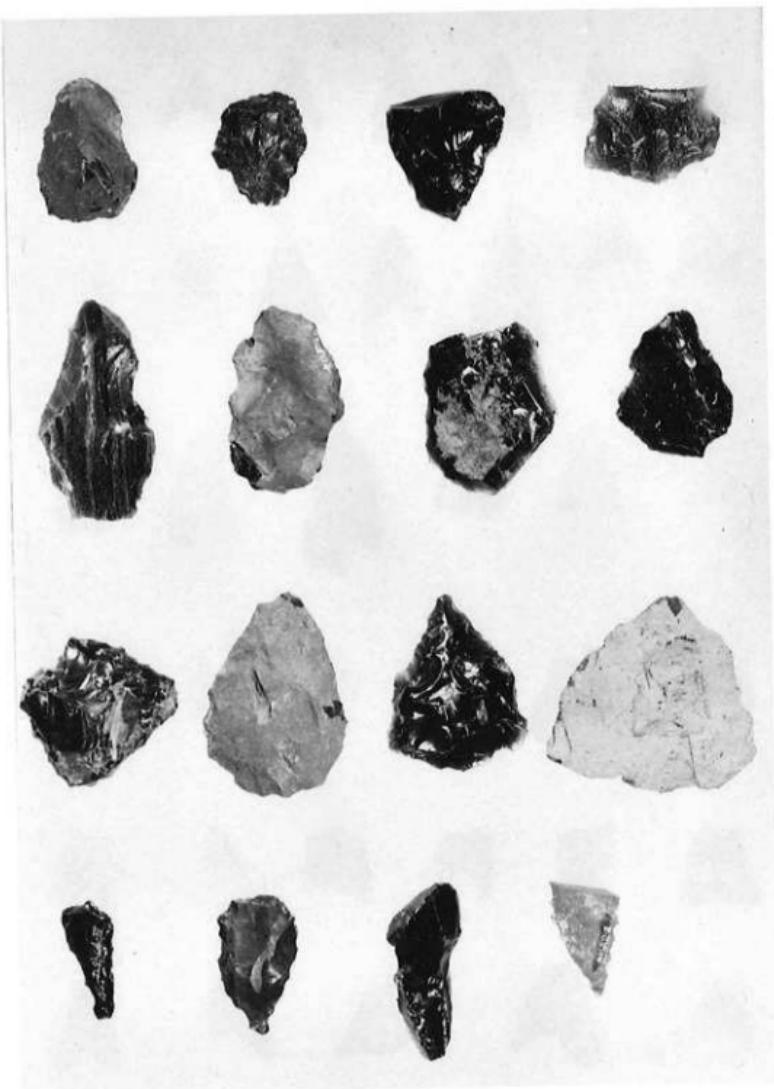
石器②



石器③



石器④



石器 ⑤



石器 ⑥



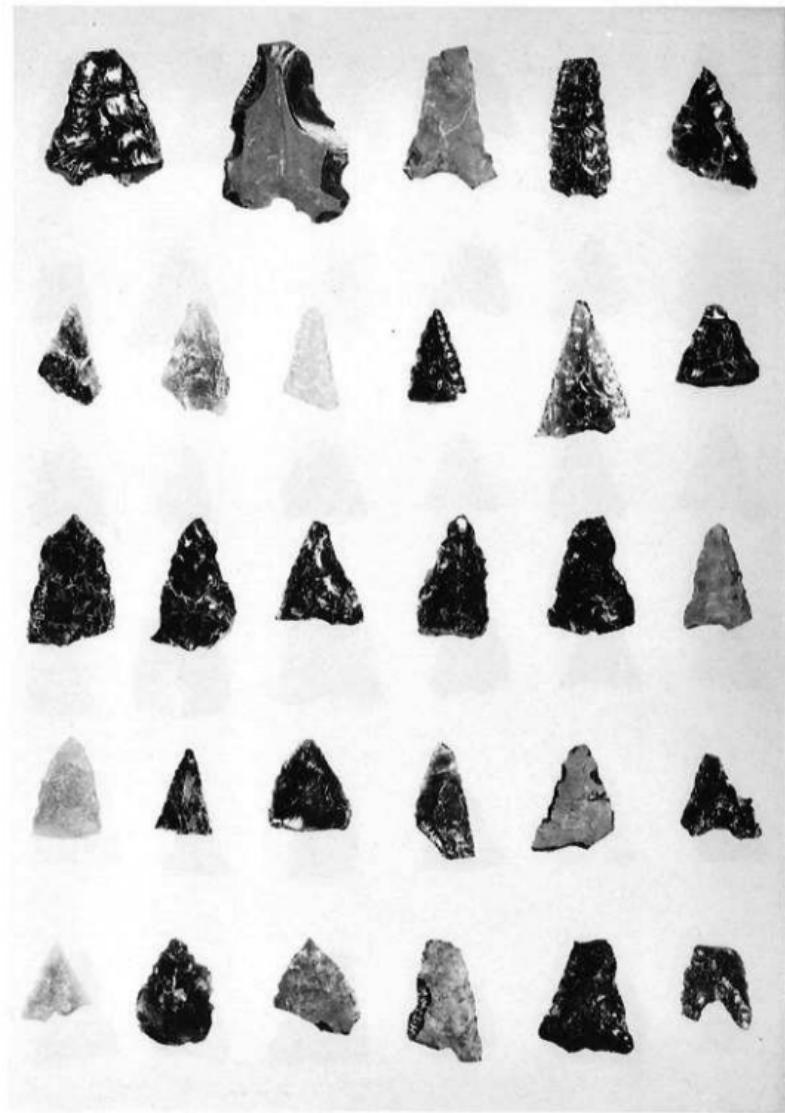
石器⑦



石器 ⑧



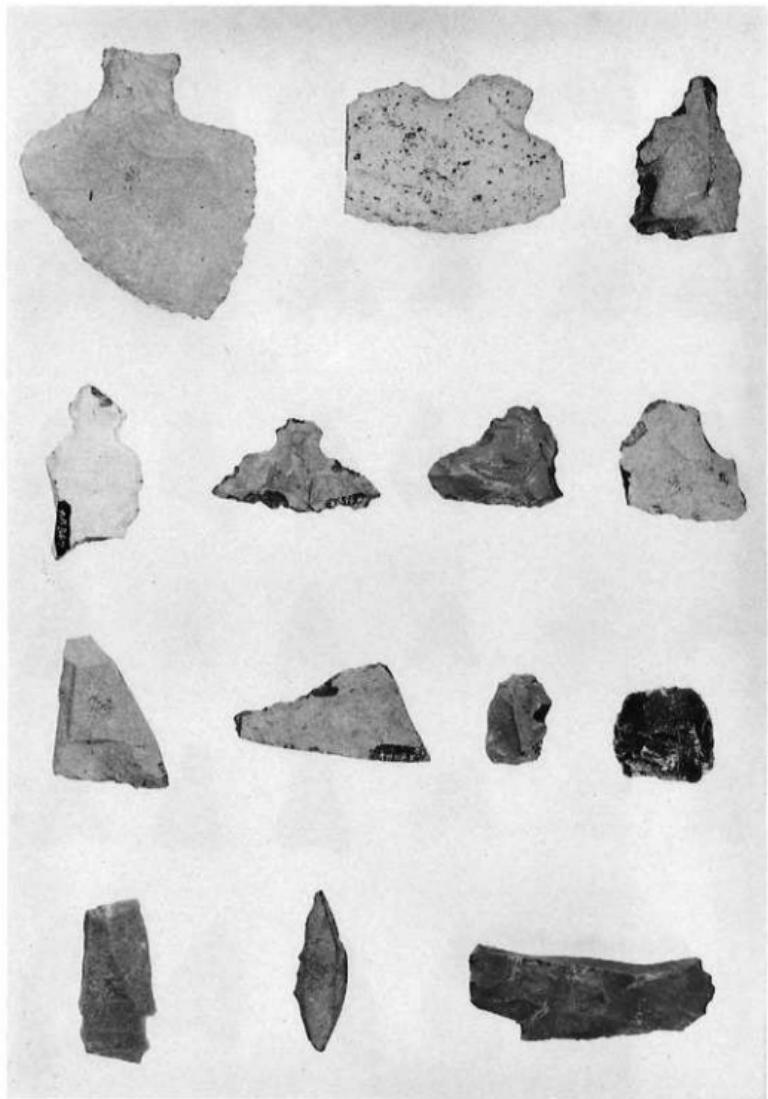
石器 ⑨



石器 ⑩



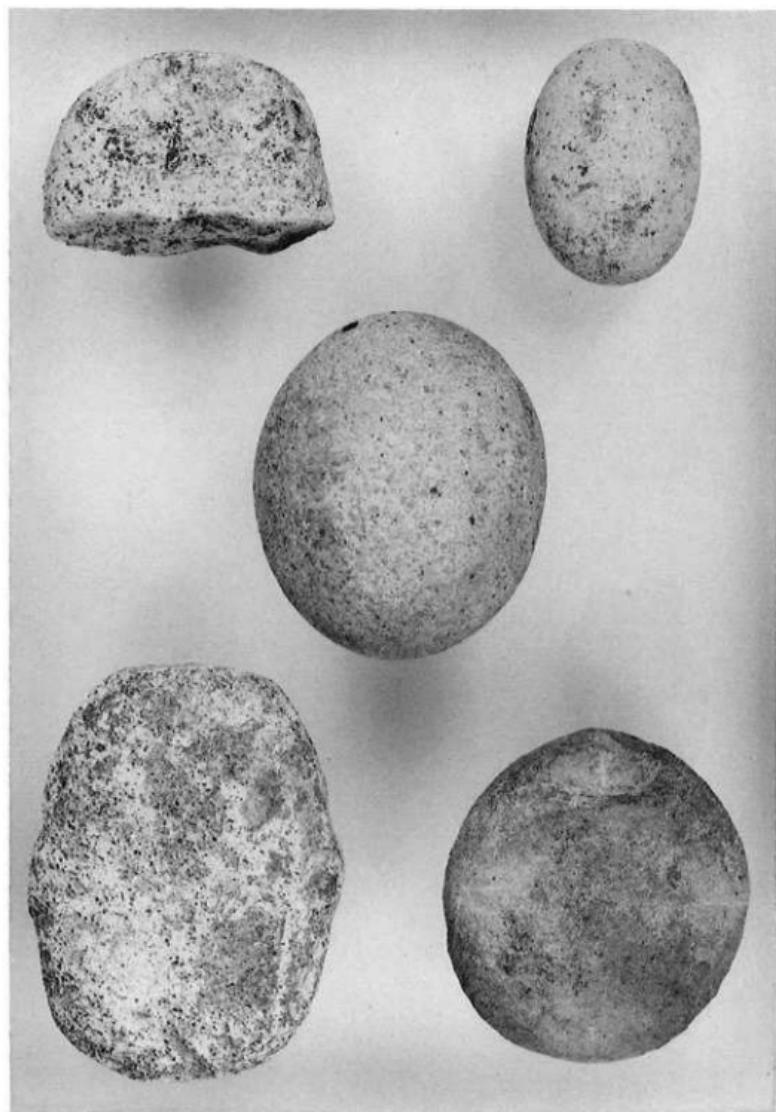
石器 ⑪



石器 ⑩



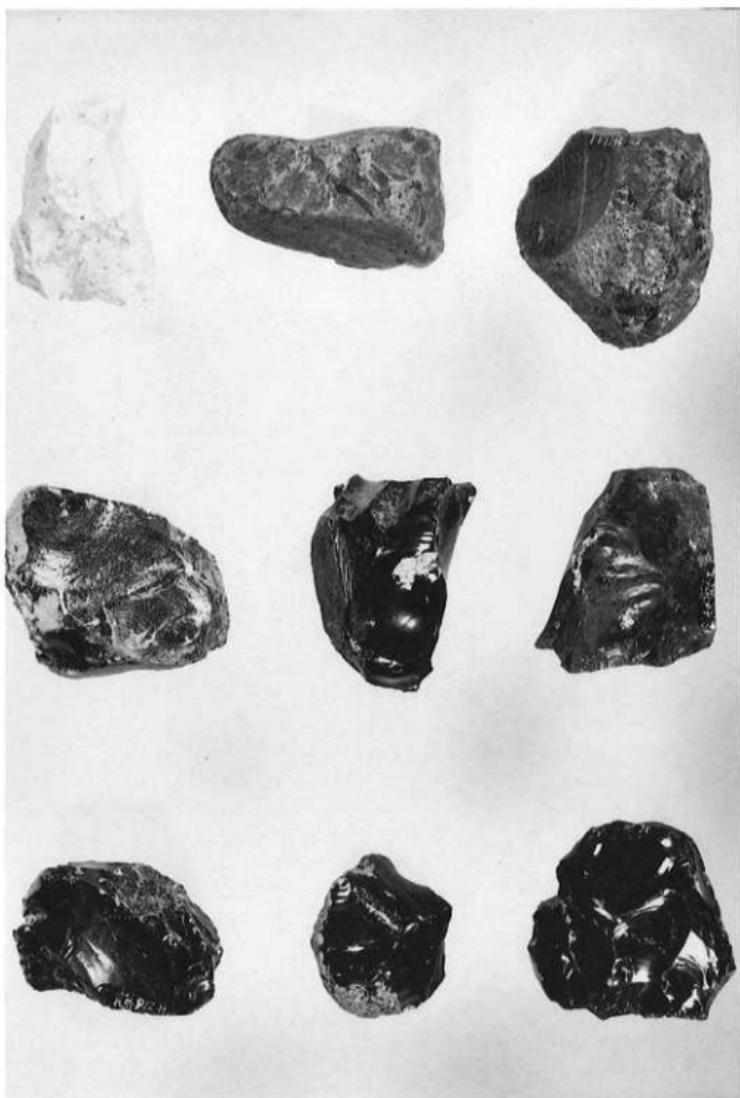
石器 ⑪



石器 ⑪



石器 ⑮



石器 ⑩

長崎県文化財調査報告書第98集

九州横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

VII

1990

発行 長崎県教育委員会 ©
長崎市江戸町 2-13

印刷 有限会社 S K 印刷
佐世保市山祇町19-13